新時代の象徴人

大平　隆平

凡そ此の宇宙間にありとあらゆるものにして一つとして変化をしないものはない。例へば空に漂ふ雲のたゝずまひも地を流るゝ川つ瀬も一刻として同じ所に止まつてゐるものはない。たとひ一見して何等の変化なきが如く見ゆるものも仔細にこれを観察すれば必ずや何等かの変化をなしてゐるのである。これは自然界に於て其うである計りでなく人間界に於ても其うである。

今試みに紀元十億三十七年十二月大晦日の夜の銀座の一角をとつて研究せよ。其処には来る可き正月を待ち焦れてゐる少年少女もあれば来る可き正月を如何にして楽むべきかについて考へつゝある青年男女もある。これ丈けならば大晦日の夜の銀座は至つて平和なものである。けれども社会は而かく単純ではない。更らに其れ以上多くの人が歳末の勘定に苦心しつゝ往来しつゝあるのである。行く人来る人其の中には債鬼もあれば債鬼に苦しめられつゝ逃げ廻る人の子もある。凡て此等の人間が相交錯して大晦日の夜の銀座は希望と失望と歓楽と悲哀との劇場である。

然るに一夜明けた元旦の朝の同じ銀座の一角を見よ。其処には昨日の債鬼も債鬼に追はれた人の子も顔の相好を直して新春の気分に酔ひながら右往左往してゐる。吾人の日常生活の上には常に大晦日と元旦程の大なる変化はなくとも昨日の世界と今日の世界、昨日の人と今日の人との間には眼にこそ見えないが大小の変化が表はれてゐるのである。

人は或は考へるであらう。昨日此処を歩いて居た人、昨日此処で働いて居た人、其れは成程影も形もない。又た昨日の雨と昨日の風と昨日の塵と昨日の埃とは此処にはない。けれども軒を並べて立つてゐる建築物と我が現在立つてゐる敷石のみは昨日の侭ではないかと。これは大いに誤つてゐる。如何にも肉眼をもつて観察すれば凡て此等のものは昨日の侭であらう。けれどもこれを細微な顕微鏡をもつて観察する時は其の間に何等かの変化を生じてゐるに違ゐない。其の証拠には去年の春建てた新築の家屋は今年の春に於て決して同一の新しさを保つてゐないのに見ても明かである。

凡て変化は世界の常態である。其れは自然界にも起れば人間界にも起り、物質界にも起れば精神界にも起り、主観界にも起れば客観界にも起る。釈迦は此の宇宙の変化相を見て有為転変の世の中とも無常迅速の世界とも云つた。

今之れを最も卑近なる物質文明の上に徴するに彼の灯明である。太古に於ては今日の如く灯明もしくは灯火と云ふものはなかつた。日月が即ち灯明であり雪や蛍が即ち灯明であつた。其れが人智の発達するにつれて自然に灯明もしくば灯火を発明する様になり夜の焼火が発明せられた。其れから自然の必要上野外灯では松明が発明せられ、松明が提灯となり、提灯が手提灯となり、手提灯が懐中電灯となつた。又た室内灯にては焼火が暗灯となり、暗灯が蝋燭となり、蝋燭がランプとなり、ランプが瓦斯となり、瓦斯が電気となつた。これは物質文明の上に起つて来た変化の一例に過ぎないが変化は物質界にのみ限られては居ない。更らに其れ以上の大なる変化を精神界に引き起してゐる。今日は即ち其の空前絶後の大変化期に際してゐるのである。

天理教では教祖出現迄の世界を一世の世界と云ひ、教祖出現以後の世界を二世の世界と云ひ、其れ自身を二世の建て換への教と云つてゐる。

一世の世界とは即ち旧世界を意味するのである。二世の世界とは即ち新世界を意味するのである。天理教は即ち旧世界の生んだ凡ゆる文明を破壊して全然新しき新文明を創造するにあるのである。

天理教の第一の特色は陽気な宗教であるといふことである。凡そ一つの物もしくは一つの場所もしくば一人の人より得る所の気分は其の物其の人其の所が真であるとか善であるとか美であるとか云ふものを感ずる前に先づ明るいとか暗いとか陽気だとか陰気だとか云ふ気分を感ずるのである。これは宗教とか哲学とか芸術とかに於ても亦其うである。

吾人が今日迄呼吸して来た旧世界の空気は何となしに陰気な重苦しい空気であつた。と云ふのは人間に水中生活や穴居生活の習慣性が残つてゐたからである。けれども今日は神の所謂「明るいところへ出た」のである。従つて其の思想迄明るく陽気になつて来るのは蓋し自然の要求である。

天理教の第二の特色は積極的であるといふことである。積極的と陽気とは同一特色の様に考へられるけれども陽気と云ふのは気分を指したものであつて積極的と云ふのは力の方向をさしたものである。

天理教の第三の特色は活動的であるといふことである。過去の宗教はやゝもすれば消極的、隠遁的、観照的、冥想的であつたが天理教の特色は既に／＼其れ等の境を超越して真に活動の境に入つたのである。これは啻に天理教の特色である計りでなく、来る可き新時代の特色である。

天理教の第四の特色は向上的であると云ふことである。これは前代の頽廃的気分堕落的分子の反動である。
天理教の第五の特色は進歩的であるといふことである。これは前代の思想が進んで人格の改良社会の進歩を計らうとするよりは寧ろ退いて自分一身の一時の安全を計らうとする退嬰的気分保守的分子に富んで居つた。けれども来る可き時代は其う云ふ亡国的思想に生くべき時代ではない。更らに大いに人生の向上発展を計らなければならない。この進化の思想を引提げて生れて来たのが天理教である。
天理教の第六の特色は創造的であるといふことである。天理教が創造的宗教であるといふのは今日迄の旧世界の文明を破壊して全然新しき第二の世界を創造するにある。これは従来の宗教の何れも多少持つていた特色であるが天理教の如く而かく根本的に第二の新世界を創造せんとする宗教は未だ曾つてなかつたのである。
天理教の第七の特色は建設的であるといふことである。これは天理教の所謂「限なし普請」の理想が最もよく表象してゐる。
「限なし普請」とは不完全なる自己不完全なる社会を破壊しては創造し創造しては破壊して真に完全無欠の神の社（自己、社会）を建設するにあるのである。これを称して「第一義の限なし普請」と云ふ。「第二義の限なし普請」とは地場即ち大和三島天理教本部の神殿の不断の建築である。
天理教の第八の特色は現実的であるといふことである。従来の宗教はやゝもすれば現実を離れて理想に傾く傾向があつた。これは宗教ばかりではない。哲学でも芸術でも倫理でも道徳でも其うであつた。けれども今日は時代が一変した。今日は理想を理想として貴ぶよりも理想の現実化云ひ換へれば理想的の現実を貴ぶ様になつた。この気運の先駆者として生れたのが天理教である。
天理教の第九の特色は実際的であるといふことである。
天啓の声に
「論は一寸も要らん／＼。論は世界の理で行ける。神の道には論は要らん。誠一つなら天の理。実で行くが良い」
従来の宗教は教論に重きを置いて其の実際的方面を閑却していた傾向があつた。云ひ換へれば証拠より論を重んじた傾向があつた。けれども天理教は其の反対に論より証拠を重んずる宗教である。此の論より証拠を重んずる天理教の特色は現代並に未来の特色である。
天理教の第十の特色は実行的といふことである。これは前二者の特色と血縁の関係にあるのであるが天理教が実行教である何よりの証拠は世人が奇異しつゝある御神楽のお手振りである。彼れは人間は凡て心と口と手の三つが揃はなければ完全な人間でないといふ点より心に思い、口に唱ひ、手にて舞ふのである。この実行を重んずる点こそ新時代の思想の一角である。
天理教の第十一の特色は天理教は生産的の宗教であるといふことである。
教祖の言葉に
「働きなさい／＼。人間であつて働かない者は我が教の子ではない」
と云つてあるが無為徒食することは天理教の第一の厭む所のものである。
天理教の第十二の特色は平民的であるといふことである。これは天理教の特色であるばかりでなく実に近代文明の特色である。将来世が進歩すればする程此の平民的思想が勃興して来るのである。
けれども此処に一つ誤解してはならぬことは貴族的といへば直ちに上品を連想し平民的と云へば直ちに下品を連想することである。これは貴族的とか平民的とか云ふことを真に理解しない為めに起る誤解である。平民的と云へば「低い心」と云ふことであつて全人類を一列平等視するところより起つて来る思想なり、態度なりを指して云ふのである。従つて天理教は平民的だと云ふことは過去の宗教の如く階級的でないといふことを意味するのである。更らに平民的と云ふ第二の意味は実質的内容的であるといふことである。即ち貴族的と云ふ言葉の与へる暗示は繁文褥礼、形式儀礼、虚儀虚礼、虚飾虚偽、誇大負誇といふ意味を連想せしめる。平民的と云ふ言葉は其の反対に正直、実直、勤勉、素朴と云ふ様な意味を連想せしむるのである。之れを古い言葉で云へば剛毅朴訥仁（真実、自然）に近しと云ふに相当するのである。又た貴族と云ふ言葉の内容は「巧言令色鮮いかな仁」に相当するのである。従つて天理教が平民的だと云ふことは天理教が実質的だと云ふことを意味するのである。この平民的特長こそ実に近代文明の特長である。
天理教の第十三の特色は普遍的だと云ふことである。凡て平民的と云ふ言葉の中には一般的もしくば普遍的と云ふ意味を含んでゐるのであるが此処では其れと別種の意味で普遍的だと云ふのである。即ち此処に普遍的だと云ふのは世界的とか人類的とか云ふことを意味するのである。其れは勿論全世界を大日本国にすると云ふ天理教の終局の理想より見れ

ば特殊的にも見えるであらう。けれども其れは形式上の論であつて其の内容は全然世界的人類的のものである。
　天理教の第十三の特色は通俗的だと云ふことである。従来の宗教が兎角難解の辞句を並べて人類の求理心を妨害せしに反し天理教は極通俗平易の大和の時代方言をもつて述べられてゐる。これは実に教祖の
「固いものは若い者が食べても老人や子供は食べられぬ。柔かいものは若い者も食べる事もできれば老人子供も食べられる」
といふ言葉に表はされてゐるが如く学不学、識不識を問はず凡てのものに理解せしむるをもつて目的としたのである。然るに時代の進歩するにつれて此の通俗平易と云ふことが益々必要になつて来た。何故なれば時勢の進歩は次第に難解なる辞句の為めに多大の時間と労力とを費す余裕がないからである。天理教の通俗味は実に此の時代の要求に適応したものである。
　天理教の第十四の特色は実質的だと云ふことである。此の実質的だと云ふのは「外の錦よりも内の錦」と云ふ神の言葉に尽されてあるのであるが凡て無用の装飾や無意義な儀式の為めに時間と労力と精力と物質とを費すことは天理教の極力反対するところである。これがやがて近代文明の底を流れてゐる新しい潮流である。
　天理教の第十五の特色は単純だと云ふことである。これは近代芸術の最もよく表してゐる時代相であつて凡て創造期に通ずる特色である。
　天理教の第十六の特色は社会的だと云ふことである。即ち従来の宗教は多く社会と離れて社会生活とは没交渉な隠遁的生活を送るをもつて理想としたが天理教の理想は山の仙人（不生産的人物）より里の仙人（生産的人物）をつくるをもつて理想とするのである。此の一つ既に新時代の羅針盤として充分の価値がある。
　天理教の第十七の特色は家族的であるといふことである。此の家族的と云ふ言葉は天理教が他の宗教よりも特に家庭生活を尊重すると云ふ計りではない。実に世界一列が一家族として結合せんとするところにあるのである。此の特色は基督教以外の過去の宗教の何れにも見ることの出来ない天理教の特色である。
　天理教の第十八の特色は平和的であるといふことである。近代文明の主潮は一二の除外例はあつても大体戦争よりも寧ろ平和を愛する傾向を有するに至つたのは悦ぶべき現象である。天理教は実に此の平和の使徒である。
　けれども東洋人の通弊として一口に平和と云へば無念無想無作為の状態を想像すれども天理教で云ふ所の平和は其ういふ希望もなければ生命もない無活動の状態をさして云ふのではない。人類相互が平和の関係を保ちつゝ各自の天職に向つて勤勉する積極的平和状態をさして云ふのである。
　今日の戦争論者は何んな議論を述べるにした所で人生といふものは結局平和の状態に入らなければならないものである。何故なれば戦争は決して人生の終局の幸福を意味してゐないからである。
　天理教の第十九の特色は楽天的であるといふことである。凡そ宗教の数も数ある中に天理教程楽天的宗教はない。此の楽天的と云ふこともこれを浅く解釈するものには浅薄なる享楽派に堕ちる憂はあるが天理教の楽天主義は人事を尽して天命を楽しむといふ点にあるのである。天理教の楽天主義は人間は悲しむも楽しむも結局成る様にさへならぬと云ふ断念的態度より来たものでもなく又た泣いたところが悲しんだ所が泣く丈け悲しむ丈け損であると云ふ功利的運命観より来たものでもない。神が人類を造つたのは人類の陽気遊山を見て楽しみたいといふ意志に基くこと並に人生一切の事は凡て神意の発現であるが故に人事を尽して天命を待つと云ふ信仰上の主義から来たものである。此の楽天的と云ふことは新思想の一つの特色である。
　天理教の第二十の特色は相互扶助的であるといふことである。これは必ずしも天理教特独の初説の真理ではないかも知らない。けれども人生は今日迄の所謂生存競争と云ふ残忍な動物的世界を脱して真に相互扶助の世界に入らなければならぬものである。従つて相互扶助といふことは新人生の内容であらねばならない。
　天理教の第二十一の特色は日の寄進的であるといふことである。日の寄進といふことは日々の誠を神に寄進するの謂であるがこれを実生活の上より云へば日々結構に通らして戴く神の大恩に対する感謝の一念より生れた利害観念を離れた献身的労働をさして云ふのである。来るべき新人生は正さにかくの如くあらねばならない。
　天理教の第二十二の特色は科学的であるといふことである。科学的だと云ふことはやがて又た実験的、実際的だといふことを意味するのである。即ち今日迄事実を無視した空想の跋扈に対する反動である。
　天理教の第二十三の特色は一元的であるといふことである。これは神と人と人と人との関係が一元的であるといふ計りでなく全人類がこれ迄もつて来た異つた風俗習慣地理歴史

政治を全然手一つの理に統一せんとするのである。これが新時代の必然の要求である。
　天理教の第二十四の特色は地場中心的と云ふことである。これは新人生の空間的焦点である。
　天理教の第二十五の特色は神霊中心的であるといふことである。今日迄の人類生活は或は法律を中心とし、或は芸術を中心とし、或は哲学を中心として生活して来た。云ひ換へれば人間中心的であつた。けれども来る可き新時代は必らずや神の絶対理想に統一せられなければならない。云ひ換へれば信仰中心の時代に到達しなければならない。
　以上は天理教と旧思想との比較研究の上に成立する天理教の大体の特色であるが更らに之れを実質的方面より観察すれば天理教の齎らせる新しき特質と使命とは過去の宗教哲学のなさんとしてなし得ざりし精神的革命を根本的に完成するにある。云ひ換へれば過去の宗教哲学の荒い熊手を逸したる小埃即ちほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、かうまんに満ちたる現在の人類社会を根本的に清掃して塵一点も止めぬ清浄潔白の甘露台世界　　黄金世界　　を此の地上に実現せんとするのである。此の新時代の特色と使命とを負ふて生れた新時代の象徴人こそ人類の原母伊邪那美命の後身と称せられつゝある天理教祖中山ミキ子である。
　釈尊（宇宙の根本現在の神国床立命の化身）在世の予言に
　我が歿後の世界には正法世に住すること一千年像法世に住すること更らに一千年、其の間に月光菩薩が表れて仏法を説くけれども奸悪なる世は之れに向つて耳を傾けるものがない。為めに正は蔽はれて邪ははびかる。けれども其の後に弥勒の世界が来る。弥勒の世界が来たならば正法は復活して世界は根本的に改革せられるであらう。
と。
　思ふに月光菩薩の出現とは基督の降誕をさしたものであらう。而して天理教祖の出現こそ将さに吾人の待ちに待ち倦ぐんだ弥勒菩薩の再来なりと信ずるのである。
　教祖在世の予言に
「此の道を世界中に附け通したならば百姓は蓑笠要らず。雨が欲しければ雨を授けてやる。多ければ預つてもやるで。又た百姓の仕事の邪魔になる様な時には雨は降らさぬ。月六斉に雨降らし、風はそよ／＼と吹かせ、地震もなければ海嘯もなく、噴火もなければ地辷りもなく、大風もなければ洪水もなく、旱魃もなければ飢饉もない。四時の気候が調和せられて厳冬もなければ酷暑もない。外へ行くにも提灯要らず笠要らず小遣銭要らず。尚ほ人間の徳が進んで行つたならば病まず死なずに弱りなき様にしてやる」
と説かれてある。誠にかくの如き黄金世界の到来は人類が長い間望んでゐた所の理想であつた。而かも其れは早晩此の世界に実現せられて来るのである。其の時来らば此の世界には一人の貪婪者もなければ一人の吝嗇者もなく、一人の邪愛者もなければ一人の憎悪者もなく、一人の怨恨者もなければ一人の憤怒者もなく、一人の強欲者もなければ一人の高慢者もなくなる。凡てが同胞兄弟として相親しみ教祖の所謂
「提灯要らず笠要らず鎖さぬ（夜戸を）御代にするが一條」
の世界が宛然に此の地上に実現せられるのである。

教祖の降誕

　教祖の降誕日について今日伝はつてゐる所説に二つある。其の一つは寛政十年四月十八日説であつてこれは今日普通伝はつてゐる所の説である。最う一つは四月四日説であつてこれは古い戸籍簿に依つた誕生日である。今日何うして四月十八日説が一般に用ゐられてゐるかと云へばこれは生前教祖の誕生日に就ては無頓着であつたものが教祖歿後に至つて憶測によつて定めたものらしい。これはよくある例である。殊に戸籍法の不完全なる時代にあつてはかくの如き誤謬は往々免かれないのである。けれども私は此処に戸籍に依つて四月四日説をとるのである。
　凡て釈迦の誕生にせよ基督の誕生にせよ不世出の偉人の誕生には必らずや一種の奇瑞を伴ふものである。教祖の誕生にも亦此の種の奇瑞を伴ふてゐる。
　伝説に依ると教祖の降誕日即ち寛政十年の四月四日の朝旭日の昇天する頃教祖の生家なる大和国山辺郡三昧田の前川家の家根の上には五色の雲が棚引いた。其れと同時に家内には赤児の泣声が聞えた。かくの如くにして此の新時代の救世主は生れて来たのである。

幼少年時代の教祖

　揺籃時代の教祖は泣いて両親を困らせると云ふことはなかつた。夜はよく眠り昼は温和しく母の懐に抱かれて只管成長を待つてゐる様であつた。普通の子供では四つになつても五つになつても汚物の世話を親にさせてゐるが教祖には二つの時から其れがなかつたとい

ふことである。
　三歳にしてよく物事を理解し四五歳の頃には生来の慈悲心が発芽して来た。即ち食物を貰つても其れを自分で食べて了ふといふことなく近所の遊び友達に分配して其の喜ぶのを見て自分も喜んだ。
　七八歳の頃には花だの蝶だの鳥だのといふものゝ形を切つて友達に与へたり又た編物や袋物を拵つて子供に与へて喜んだ。
　近所の母親達の忙しい時なぞには自ら其の子を預り朝から晩まで色々な玩具を取り換へ引き換へて子供の守りをして遊ばせてやつた。将来全世界の母たる所謂親心は既に此の時に芽組んでゐたのである。
　寺小屋に通つたのは七八歳より十一二歳頃迄と伝へられてあるが其の頃のミキ子は他の小供の様に家を離れて遠く遊ぶといふことはなかつた。多く両親の側にあつて其の細かしい用を手伝ひながら家事を見習ふのを唯一の楽みとした。かくの如くにして十二三歳のミキ子は裁縫にせよ料理にせよ糸機にせよ婦人一人前の仕事は充分出来たといふことである。
　凡て一技一能の名人は早くより其の天才を顕すものであるが教祖も亦早くより其の宗教的天才を顕はしてゐる。
　前川家は元来浄土宗の信者であるがミキ子は早くも其の浄土和讃の全文を暗誦して朝夕両親と並んで之れを仏前に唱へることを此の上ない楽みとした。それが年と共に発達して十一二歳の頃には剃髪して尼にならうと云ふ決心を小さな唇より漏らす様になつた。

　教祖の結婚

　十二歳の秋官幣大社石上神社の大祭に父−前川半七正信−に伴はれて隣村庄屋敷村の親戚中山善右衛門方へ行つた。之れを機会に中山家と前川家との間に縁談が開始せられたのである。ミキ子は此の縁談に対しては敢て進んで同意するでもなかつたが又た強ゐて不同意を表はすでもなかつた。唯
「結婚後観経和讃を許されるならば」
といふ世にも珍らしい条件にて両家の間に婚約が結ばれた。
　中山家では始め此の条件は少女の口より出た無邪気の戯談として受取つたのであるがミキ子にとつては決して無邪気な戯談ではなかつた。彼女にとつては真に真面目なる宗教心の要求より出たものであつた。其の証拠に結婚後ミキ子は
「中山家の嫁御は気が狂うたのではあるまいか」
と善悪なき村の賤女の噂に上つてゐるのにも耳を傾けず朝夕の観経和讃を実行したのに徴して明かである。
　ミキ子と善兵衛氏との正式の結婚は或は十三歳とも云ひ或は十五歳とも云はれてゐるが当時両家の縁談を立ち聞きしたミキ子は母に漏らした言葉に
「嫁なら行くし子なら行かぬ」
と云つたと云ふ言葉より推測して見ると両家の間には一二年の間は養女として貰ひ受け改めて一定の年齢に達してから正式に結婚をさせやうと云ふ下相談があつたらしい。其れを聞いてミキ子は此の言葉を母に対して漏らしたものと思はれるが兎に角十三歳の時中山家に行く時は養女として行つたものではなく嫁として五荷の荷物をもつて行つたことは明かなる事実である。
（大和地方では嫁の身分を示すに荷物の荷数によつて定める習慣がある。五荷の荷物と云へば上の部である）

　花嫁時代の教祖

　教祖は元来蒲柳の質であつたが其れにも係らず中山家に嫁してよりは朝は家族に先つて起き夜は家族に遅れて寝ね暫時も身体を遊ばせて置くと云ふことはなかつた。往々内の雇人等が眼を醒して起き出やうとすると
「お前さん達は昼の働きで疲れて居るからもつと休んでお居でなさい」
と云つて休ませて自ら焼火から朝飯の用意をするを常とした。又た夜休む時は一同を寝せてから自分は家人の気附かぬ様に起き出でゝ昼仕残した仕事をした。殊に常人に出来ない事は其の臥床前の三十分乃至一時間は両親の身体を按摩せずに床に就いたことはなかつたといふことである。
　後日教祖が人に語つた言葉に教祖のしなかつた仕事は荒田起しに溝掘り。此の二つを除く外の仕事は何んな仕事でも手にかけない仕事は一つもないと云ふことである。而かも一旦仕事に従事するや天性の器用と生得の熱心とは常に常人の二倍の仕事をしたといふこと

である。
　両親を始め夫善兵衛氏は余りに教祖の過激なる労働をするのを見て屡々其れを止めたが教祖は常に之れに向つて
「身体は使ふ為めに神様がお貸し下されたのを今迄は余り大事にされ過ぎた為めに却つて弱かつたがこれから確つかり使はして戴かうと思いまして」
と答へるのを常とした。
　かくの如く彼女が両親や夫を始め下女下男に対する態度が何処一つとして非点の打ち所のない鮮かな勤め振りであつたから結婚後五年即ちミキ子十七歳の時両親より一家の世帯を任せられた。もつて彼女が尋常一様の婦人でなかつたことを知ることができる。

　主婦としての教祖

　庄屋敷では安達金持ち善右衛門様地持ちと云はれた程の豪農であつたから召使の者も一人や二人ではなかつた。ミキ子が其等の雇人を使ふ方法は世間の所謂使へば使へ得と云ふが如き無法の使用法ではなかつた。使ふ時は充分使つてもいたはることも亦充分にいたはつた。殊に祭日とか休日等には弁当迄持たせて遊びに出したといふことである。
　ミキ子が中山家の主婦となつた二年目即ちミキ子十八歳の時一夜中山家の綿倉に一人の綿盗人が入つた。が幸か不幸か其の盗人が綿を一荷ウンと盗み出さうとした所を内の下男に発見せられた。盗人は其処に荷物を投げ出して心得違ゐを詫びたが中山家の隠居善右衛門氏は将来の為め代官所へ引き出す様にといふことを下男に命じた。其処へミキ子が出て
「此の盗人も貧の盗みで腹からの盗人ではなからうと存じます。此処で此の人を代官所へ出せば罪人となつて一生人中へ出られない人間となります。将来の為め心得違ゐの所は充分申し聞かせますから此の度は私に免じて免るして戴きたい」
と願つた。善右衛門氏もミキ子の殊勝な心掛けに感じて之れを免るした。其処でミキ子は盗人に向つて其の不心得を説き聞かした上更らに一重の綿を添へて
「サアこれをお持ちなすつて下さい。これは何代か以前の内の先祖が貴方に借をして置いたものですから遠慮なく御持ちなさい。又此の綿は之れは利息だと思つて持つて行つて之れを資本にして堅気の商売をして下さい。これが私の頼みで御座います」
と詫びられる人が却つて詫びて傷を附けずに其の盗人を帰した。其れから再び両親の前に出て
「誠に今程は有難う御座いました。就ては誠に御両親に申訳のないことを致しました」
と云つて盗人の盗んだ綿と尚ほ其の上に綿を添へて帰したことを述べ
「其の代り私は木綿物は一生着るだけ内から貰つて来て居りますから其れで通らして戴きますから」と云つて両親に謝した。両親もミキ子の英断を賞讃して
「其れは良い事をなさつた。今後も決して心配に及ばんから内のものを使つて下さい」
と云つて其の場は首尾能く治まつた。其の後二三日経つと前の盗人がボテ振りになつて来て
「私も彼れを資本に此う云ふ商売を始めましたから今の後共に宜敷く御願致します」
と云つて礼に来たといふことである。此の真心をもつて人を愛するこれが彼女の一生を通じて変らない唯一の感化法であつた。
　其の頃孫見たさの両親の寝物語に
「内の嫁は申分のない良い嫁だけれども何分子供がなくて困る」
と語り合ふ声がミキ子の耳に入つた。ミキ子も成程子供がなくては先祖に申訳がない。これは剃髪して尼となつて衆生済度の傍此の家を立てる様にと決心して其の意志を近隣のある懇意なお婆さんにほのめかした。お婆さんはミキ子に向つて
「貴女マア其う短気をお出しになるものではない。十九や二十で子供のあるもないもありませんマア最う暫時お辛抱をなさつたが良う御座いませう」
と云つて止めた。ミキ子も其の言葉に力を得て出家を思ひ止まつたといふことである。
　こう云ふことが動機になつてミキ子は益々仏法に親しむ様になり遂に文化十三年二月勾田様の善福寺で五重相伝を受ける様になつたのではないかと思はれる。
　其れにミキ子をして最う一つ仏法を頼らしむるに至つた他の動機があつた。其れは夫善兵衛と下女かのとの不正の関係である。

　妻として耐へ難き苦痛の経験

　或る書では夫善兵衛とおかのとの関係を中年の恋の様に書いてあるが彼れは誤つてゐる。此の二人の関係は善兵衛氏とミキ子との間に子の無い間而かも両親在世中の出来事である。

ミキ子は此の両人の間の不正の関係を知りつゝも決して世の常の婦人の如く嫉妬に気を狂はして常規を逸した醜態を演ずるといふことはなかつた。否寧ろ其の反対に二人の関係が密なれば密なる程皆なこれ自己の不徳の致す所と足納して静かに両人の迷夢の醒めるのを待つていた。然るに凡婦の浅間敷さにはおかのは教祖が柔しくすればする程増長して教祖殺害の悪心をおこし一夜教祖を刺さんとして果さず、更らに毒殺せんとしてこれも失敗した。

本人の教祖はかのの悪計によつて一旦毒は嚥下したが幸ひ吐瀉して了つたので身体には何の障りもなかつた。其の時周囲の人々はこれをかのの悪計と知り表向きの沙汰にせうとしたが教祖はこれを止めて

「これはかのが悪いのではない。私に何か心得違ゐの所があるから神様が私の腹の中を掃除して下すつたのだ」

と云つて二人に対する態度は聊かも従前と異る所はなかつた。凡婦には出来難いことである。

然るに善兵衛もおかのもこれに依つて自分等の関係が道ならぬ関係であつたことを自覚し遂に教祖の前に今日迄の罪を謝するに至つた。

其の時の教祖は弥陀の精神其の侭両人の心よりの懺悔を納受しおかのには尚ほ半年の間行儀作法等仕込んだ上嫁入の仕度迄して相当の家に嫁せしめた。此の敵も味方も一視同仁の教祖の至誠に感応して今迄仇敵であつたかのは改つて教祖の無二の味方となり終生中山家に出入したといふことである。　此等は教祖ミキ子が青春の色香もさめぬ新妻時代に残した世にも貴き不滅の足跡であるが此処に止まつて暫時考へなければならぬことは教祖ミキ子に依つて示された絶対道徳と世間一般の相対道徳との区別である。

絶対道徳と相対道徳

今日の一般の婦人の道徳は夫夫たらざれば妻妻たらず夫夫たれば妻妻たることである。（男子の場合も同じ）即ち相手の態度の善悪に依つて自己の去就を決するのが今日一般に行はれてゐる婦人道徳である。けれどもミキ子の通つた絶対道徳は

夫夫たらずとも妻妻たり
夫夫たるも妻妻たり

と云ふのである。即ち相手の態度の如何に係らず終始一貫真実をもつて貫く此処に絶対道徳の権威がある。

前者の道徳即ち相対道徳は一見合理的の様に思はれる。けれども其れは真に自己並に社会を治める所以の道ではない。何故なれば他人が我に向つて善をなしたるが故に我も亦他人に向つて善をなし、他人が我に向つて悪をなしたるが故に我も亦他人に向つて悪をなすならば此の世界には悪の亡ぶる時がない。此の欠陥を救ふものが天理教の所謂絶対道徳である。

凡て凡夫凡婦の手にて授けられたる瓦は聖者の手より再び凡夫凡婦の手に帰る時は既に玉と変じてゐるのである。而かも此の真実自然の絶対道徳は一身の利害を中心として進退を決するものにとつては不可解の道徳である、けれども此の不可解の道徳を万人に理解せしむるのがミキ子の使命である。

母としての教祖

文政三年に隠居の善右衛門を失つた中山家は翌年の七月二十四日に長男善右衛門（後秀司と改む）を挙げミキ子は始めて人の子の母となつた。これで結婚後長い間教祖の胸を痛めて居た子供の問題は解決せられたのである。

之れより先き夫善右衛門氏を失つた善兵衛氏の母（姑）は大病で五体の自由を失つたが教祖は妊娠中に係らず之れを負ふて其の好む所へ行つた。

教祖の精神

蓋し教祖の精神を解剖すれば彼女には人を喜ばせる人を楽ませると云ふより外何物もなかつた。従つて人を喜ばせ人を楽ませる為めには自分は如何なる難境に立つも敢て辞する所がなかつた。これが真実の愛である。此の真実の愛は後に我が二人の寿命と我が寿命迄天に捧げて人の子を救ふ大慈大悲の善行功徳とはなつたのである。

教祖が一生の中に経験した最大の愛

教祖は文政四年に長男善右衛門を挙げてから同じく八年に長女政子を挙げ、同じく十年に二女安子を挙げた。教祖は出産の度毎に乳が沢山あつたから隣家の足達源右衛門の息照之丞の乳の不足なるを憐れみ引き取つて養育してゐたが文政十二年の四月に疱瘡にかゝつて十日目には黒疱瘡に変じた。近所の医者と云ふ医者にかけて見たが何れも皆匙を投じて了つた。其れで教祖は最早や人力の如何ともすることの出来ないことを悟り一夜氏神に詣で
「もし照之丞の生命をお助け下さるならば長男を除いて二人の子供の寿命を捧げます。もし其れで足らない様ならば我が寿命迄も捧げます」
と云つて一心篭めて祈願した所忽ち霊感あつてさしも危篤と伝へられた黒疱瘡が薄紙を剥ぐ様に本復した。
此の事あつて以来間もなく二女安子は歿した。其れから天保二年に三女春子を挙げ、四年に四女常子を挙げたがこれも三年目即ち天保六年に歿した。最後に生れて来たのが末女小寒子である。
天保九年に教祖に神憑があつて刻限／＼のお話に
「此の世に何が可愛いと云つても我が子程可愛いものはない。其れを二人迄も天に捧げ尚ほ其の上に我が寿命迄も上げて人の子を助ける精神と云ふは元人間を生んだ伊邪那美命の魂であるから。其れを天より見澄して天降り万人助けの道を授けるのである」
と。又た二女安子の死について
「いかに覚悟の前とは云へ一時に二人の子供を引き取つては気の毒故一旦安子一人を引き取り其れを常子として生れさせてこれも引き取り其れで二人の寿命を天が受け取つた」
といふ天啓があつた。此の常子の魂が生れて来たのが後に「若い神様」と云はれた末女小寒子である。
此処に吾人々類が心を鎮めて学ばなければならぬのは教祖の絶対無限の愛と云ふことである。
世人は往々愛と欲とを混同視して愛即ち欲欲即ち愛と思つてゐるけれども其の間には天地の区別があるのである。欲とは取ることである。愛とは与へることである。教祖の愛には欲はない。唯純粋無垢の愛がある計りである。而かも我が子二人の寿命を与へ尚ほ其の上に我が寿命をも与へると云ふことは愛の極致である。
凡そ大なる価値を得んと欲せば大なる犠牲を払はなければならない。教祖に神憑があつたのも偶然ではない。誠や此の絶対無限の愛なればこそ今日並に今日以後万人の母として尊敬せらるゝのである。
天啓の声に
「サア／＼これを良ふ聞き分け。価と云ふもの与へる心なくばならん。与へのない処へ何も価はあらせん。これだけ心にもつてくれにやならん」
我に与へる心あつて天に与へる心あり、我に施す心あつて天に施す心あり。価は即ち与へである。与へ即ち人に慈悲善根の愛がなくば天の価は決して我に下ることはない。
「我が身捨てゝも構はん。身を捨てゝもと云ふ精神もつて働くなら神が働らく」
のである。
教祖九十年の生涯其の間有形無形の所有物を人に施与した慈悲善根は数へるに遑がない。けれども此の眼目はと云へば我が子二人の寿命を与へ尚ほ其の上に我が寿命迄も与へた偉大なる愛に如くものはない。此の一事は実に教祖伝中の花であり、実であり、核である。

神憑

教祖に神憑があつたのは天保九年十月二十三日教祖四十一歳の時である。此の日麦蒔きに畑に出て居た長男の秀司が小昼過ぎに足が痛いと云つて畑から帰つて来た。中山家では人を長滝村の修験者市兵衛の元へ走らせたが市兵衛は恰度中山家の隣家の乾家に亥の子に招ばれて来て留守であつた。其れで使を再び隣家に走せて市兵衛が来て祈祷の用意に取り掛つた。其れが恰度二十四日の夜明前であつた。
（秀司氏にはこれまで七八回も同じ様のことがあつた。其の度市兵衛に祈祷を頼んで全治した。今度市兵衛を頼んだのも其れが為めである）
然るに其の日は何時も市兵衛の加持台に立つ勾田村のおそよと云ふ巫女が矢張り亥の子に招ばれ出て行方不明であつたので臨時ミキ子を加持台に直して祈祷に取り掛つた。暫時するとミキ子の容貌態度が一変すると見るや一人の神が降つた。
市兵衛下つた神を尋ると
「我は天の将軍である」
市兵衛もこれまで色々の神に接したが天の将軍と云ふのは始めてゞあるから

「天の将軍とは何方様で御座います」
と尋ると
「天の将軍は月日じや」
「根の神実の神である」
「此の屋敷は世界始めの元の地場世界一列助けに天降つた。皆が心得」
　其の音声と云ひ態度と云ひ恰かも三軍を叱咤するの概があつた。其処に居合せたる人々は其の威厳に打たれて思はず平伏して居ると神は其の宣言を水の流るゝが如くに述べて行く。
「よつてミキの身体は神の社と貰ひ受ける。異存はあるまい」
　善兵衛を始め其処に居合はせたる人々は余りに思ひ掛けぬ突然の要求なので返答に困つてゐると
「今云ふたこと異存はあるまい。今云ふたこと不承知あるまい。主人返答は何んとある？」
　其処で善兵衛よりミキを神の社とすると仰せられても彼女は五人の母でありますから差上かねますと云ふことを申上ると
「神の云ふこと聞き入れぬとあらば家は断絶。当屋敷を一矢の中に黒焦にする」
と云ふ強硬な宣告である。
　此の云ふ問答が神と人との間に続くこと二昼夜。其の間ミキ子は水一滴飯一粒口にしない。其の様子を見るに見兼ねて漸く二十六日の朝に至つて承知の旨を申上ると
「満足／＼」
の二語を残して神は退参になつた。これが天理教の立教日である。

　天理教成立の由来

　此処に注意して置かなければならぬことは天理教成立の由来である。
　天理教々典には人間の徳が進歩して所謂、霊淵に一瑣滓なきに至れば神明之れに授くるに救世の大任を以つてすと云ふ様なことを云ふて居るが天理教の成因と云ふものは徳さへ積めば誰でも済世救人の大任を授けられる、其んな単純なものではない。屋敷に人間始め元の地場と云ふ深い因縁あり、教祖に人間最初宿し込んだ元なる親と云ふ切つても切れぬ因縁あり、瞬刻限（時節）と云ふものがあつて始めて天理教と云ふ世界最後の宗教が成立したのである。従つてこれを以つて在来のありふれた宗教と同一視することは出来ないのである。此の点に於て天理教々典の如きは全然天理教の立場を誤解して居る。

　天理教々祖としての中山ミキ子

　世間では今日の天理教は始めより今日の如きものであつたと考へる人があるかも知らない。又た天理教の教祖も始めより晩年の教祖の如く神秘不可思議な天啓人であつた様に思ふものがあるかも知らない。けれども其れは皆誤つてゐる。
　天理教は始めより三百万四百万の信徒を有した天理教でもなければ天理教祖は始めより晩年の教祖の如き精神内容をもつたものでもない。皆小より及ぼして大に至つたのである。
　お言葉に
「道の発達は世界の発達」
と云ふお言葉があるが初期の天理教は其うではない。寧ろ
　道の発達は教祖の発達
と云つて良かつたのである。
　天啓後の教祖は凡そ二期に分つことが出来る。
　第一期は物質的救世主としての教祖である。
　第二期は精神的救世主としての教祖である。
　第一期の物質的救世主としての教祖は四十一歳に天啓があつてから以後夫善兵衛氏の帰幽後迄約二十年の間であつて此の間は専ら物質をもつて社会を救済した。教祖の言葉によると六十になつて始めて神の世帯をもつたと云はれてゐるが真の意味の救世主としての活動は六十歳以後である。其れで天啓以前の教祖を救世主として第一期の準備時代とすれば天啓後六十歳迄は救世主としての第二期の準備時代と見ることが出来るのである。真の意味の救世主としての活動は晩年の三十年である。

　貧のドン底

　天啓後間もなく教祖の受けた天啓は
「世界助けの為め谷底に落ち切れ其処から本道が見えて来る」
と云ふことであつた。
　其れで教祖は先づ自分の手廻りの物から施を始めたのである。其の施をなすにも教祖の施は世の所謂慈善家と異つてゐる。
　彼女は先方より襤褸を纏ふた寒相な人間が来ると先づ其の人の行く先きに廻つて着物を置いて置く。其の人が正直な人なればこれは内のものではないかと云つて届けて来る。其の時教祖は
「これは内のものではありません。其れは貴方へ授かつたのだから遠慮なくお持ちなさい」
と云つて持たせてやる。其の人が
「其れを有難う御座います」
と云つて持つて行けば其の後姿を見送つて手を合せて
「御苦労様」
此う云ふ風に食ふ物がなければ食ふ物を持つて行つてやる。着る物がなければ着る物を持つて行つてやると云ふ風に成らん者不自由なものに施して自分の実家から貰つて来た五荷の荷物は忽ちの間に施して了つた。
　其れから段々中山家の金銭米穀を施してやる。其れも限りあるものであるから何時かは尽きる。今度は田地田畑に手を附ける。其れを拒めば直ちにミキ子の身体は病気になつて了ふ。止むなく夫の善兵衛も黙つて見て居たが段々内の財産が減つて行くにつけて世間では色々の噂さも立つ様になり親類よりも注告されるので神に誓つた誓言も忘れて一夜教祖を先祖の位牌の前に座らせて来し方往く末のことを語り聞かせた上もし狐狸の業ならば此の止め度もなき慈善を止めて呉れ止めぬとあれば先祖への申訳にお前の生命を貰はねばならぬと云つて先祖伝来の刀に手を掛けて迄嘆願したが教祖はこれに対して
「貴方の仰せは尤もでは御座いますが最う暫時の御辛抱を願ひます。神様は一粒万倍にして返して下さるから」
と云つて手をついて夫の前に謝した。夫も人に物を貸しても催促もし得ない様な善人であるから其の場は其れで治まるが其れも永くは座視するに忍びない。其れで度々異見もし反対もした。此の間にあつてミキ子の経験した精神上の苦痛は善兵衛の経験した其れよりもより以上に深刻なものであつた。即ち神の云ふことを通さうとすれば内々の者が反対する。内々のものゝ云ふことを通さうとすれば神の言葉を無にする様になる。遂に煩悶の結果死を決すること前後三度其の度に彼女の耳に聞ゆる神の声
「短気を出すな。今暫時の辛抱」
強ゐて決行せうとすれば五体が縮つて動くことが出来ない。其れで仕方なく思ひ返して自分の不心得を神に謝すると再び身体が動く様になる。
　此う云ふ具合で天啓後の中山家は一家の心が個々別々で統一と云ふものを失つて了つた。従つて傍の見る眼は随分哀れに陰気なものであつた。けれども其れにも係らず神の思はくは着々実行されて天啓後十年には中山家の財産は殆んど施して了つた。けれども神は其れでは満足しない。更らに家を毀つて施せと云ふ神命であつた。
　其の家を毀つ時には人は中山家の零落するのを気の毒がつたが一人教祖のみは大勇みで
「サア／＼皆さん祝つて下さい。これから世界の普請にかゝるのだと云つて神様は大喜びで御座います。何もないけれども祝つて下さい」
と云つて手伝に来た人達に酒肴の御馳走をして其の労をねぎらつた。此処に教祖の偉大なる精神が遺憾なく発揮せられてゐる。
　天啓の声に
「天理王命と称する源由は元無い人間無い世界を拵へた神である。サア神の社になることは小さい百姓家より大きな百姓家へ来た様なものである。」
と云ふ言葉があるが此の時の教祖は最早や何処から観察しても中山家の主婦中山家の母ではない。

　世界の主婦万人の母

である。彼女が自分の家の毀されるのを見て大勇みに勇んだのは彼女にとつては最も自然な行為である。

　夫の死

　中山家が毀たれた屋敷の跡に雑草が生えるのを見て夫の善兵衛は亡くなつた。其れが嘉

永六年教祖天啓後十六年目である。
　其の頃の中山家は貧の谷底に落ち切る真最中であつて一家族が塩と水とで通る様なことも往々あつた。其の間にあつて教祖は道を宣伝する傍賃機を織つたり賃糸をとつたりして衣食の資を得長男の秀司は薪や青物を町に売つて生活を支へて居た。又た末女の小寒子は仕事の傍母を助けて布教に従事した。（此の頃は二人の女は既に他に嫁してゐた）此の二人の兄妹が神命を奉じて始めて大阪に布教に出たのも此の年である。

　最初の産屋助け

　産屋の理を説けば長くなるが婦人が七十五日産屋にあると云ふのは人間の母親伊邪那美命が七十五日かゝつて人間を全部生み下ろした御恩報じの為めである。けれども此の度人間元生み下ろした元の親が表れてだめの教（世界最後の宗教）を始める証拠として七十五日の産屋の不自由を三日に縮め三日目より常の如く働かしてやると云ふのである。其う云ふ理由で初期の天理教では天理王命のことを特に産屋神様／＼と云つて方々から願ひに来たものである。
　凡て産屋助け計りではない。病人の救済で貧人との救済でも教祖が身自ら一度実験しないと云ふことはない。教祖が貧の谷底に陥つたのも人間は難儀不自由をして見なければ難儀不自由な人の苦労がわからぬ。難儀不自由な人の苦労がわからねば同情と云ふものがない。同情がなければ真の助けと云ふことは不可能である。其れで神は教祖を一旦貧の谷底に落して貧苦の味を経験せしめ更らに産屋助け病助けの実験までなさしめたのである。
　第一回の産屋試しは教祖神憑後四年目自分自身に産屋試しの経験を受けられた。其の時は分娩後自分で一切掃除して何時もの如く立ち働かれたのである。第二回の産屋試しは安政二年教祖五十八歳の時三女春子の出産の時産屋許るしをなされて安産させた。これが親戚に産屋試しの始め
　第三回は安政五年六十一歳の時隣家の百姓惣助と云ふ者の妻お雪といふ婦人に産屋許るしを与へられた。これが他人に対する産屋許るしの始まり。
　爾来神を信じてお願ひに来るものにはお助けがあつた。今日大和地方では未信者でも難産の時は天理教へお助けを戴きに来る。其れでも不思議にお助けを戴いて軽るきは生むと直ぐ重きは三日目より常人の如く働くことが出来るのである。これが為めに庄屋敷の産屋神様と云ふ名が一時専ら地方に喧伝せられたのである。

　最初の病助け

　教祖が始めて病助けの霊力を天より授かつたのは天啓後十年目である。
　一日一家は朝来の断食の為めに空腹を忍んでゐると表より杖に縋つた一人の病人が
「庄屋敷のおみき様といふのは此方で御座いますか」
と云つて入つて来た。
「私は人から庄屋敷のおみき様へ行つて願へば病気がよくなると云ふことを聞いて参りましたが私の病気をよくして戴けますまいか」
　其の頃のミキ子は未だ病人助けの経験はなかつたから
「私はミキで御座いますが其れは人違ゐで御座いませう」
と云つて見たものゝ兼ての天啓に
「貧の谷底に落ち切れ。其れから先きは珍らしい助けをさす」
と云ふことを思ひ出して
「マアお上りなさい」
と云つて病人を上げ、胸に手を当てゝ考へて居ると
「あしきを払ひ助け給へ天理王命とこれを三遍づゝ三遍唱へて病人の身体を撫でれば助かる」
と云ふ天啓に接したので其の通りすると不思議にも其の病人は即座に癒され帰る時は杖を捨てゝ帰つた。これが病助けの始めである。

　道の発展と社会の迫害

　此等が原因となつて元治慶応にかけてはボツ／＼信者が出来て来た。其れと同時に神官僧侶の間に反目嫉視するものが出来て一難去れば一難来る、教祖の一身は全く火中に包まれる様の悲境に陥つたのである。殊に明治七八年より明治二十年教祖昇天に至る迄の間は官憲の圧迫甚しく一人の信者でも屋敷の中へ引き入れゝば直ちに罰金もしくば拘留に処せられたのである。其の為めに一時は宿屋兼空風呂の鑑札を受けて信者の便宜を計つて居た

が何処迄も教祖を誤解して居る官憲は其の空風呂の中に薬品を投じて迄罪に陥れんとした、其れ計りでない御簾を飾れば御簾を取つて行く鏡を飾れば鏡を取つて行くこれを今日より論ずれば当時警官が天理教に対して用ゐた法の乱用は随分問題になるのであるが如何にせん当時の天理教は四面楚歌の中にあつたので如何ともすることが出来なかつた。
　巡査が拘引に来ると教祖は
「サア／＼又来たで／＼子供にや何うも仕様ない」
と云つてサツサと仕度をして何処かへ客にでも行くかの様にイソ／＼として出て行くを常とした。
　警察や監獄へ行つても警官や獄吏に対すること子供の如くであつた。最後に櫟本署に十五日間の拘留に処せられた時の如きは巡査の苦労をいたはる為め表を通る菓子屋を呼び入れて買つてやらうとして付添人に注意せられ始めて警察署なることに気附いた様であつた。
　彼女に取つては至る所これ我が家逢ふ人これ我が子であつて人の様に自他の区別はなかつた。唯監獄もしくば警察の飯のみは不浄の飯だと云つて一粒も口にしなかつた。其の間の飲食物と云つては唯水あるのみ。
　当時官憲の彼女に加へた暴行は随分甚しいものであつた。或る時は頭より水をかけたり或る時は親指と親指とを縛つて天井に釣るして拷問したことさへある。而かも如何なる暴行を加へられるも神色自若として毫も動ずると云ふことはなかつた。かくの如くにして彼女が警察もしくば監獄に監禁もしくば拘留せられること前後十八回罰金もしくば科料に処せられたこと数を知らない。

昇天と昇天の理由

　今日の天理教界では彼女の長男秀司氏も末女小寒子も共に一身を捧げて教祖を助けた様に云つて居るけれども実際は其うではなかつた。成る程末女小寒子のみは身装も構はず母を助けて神に仕へたが其れも晩年には教祖の止むるをも聞かず梶本家へ嫁入して死んで了つた。秀司は始めの程は善かれ悪かれ教祖と生活を共にして来たが晩年松枝子を娶つてからは両人共教祖に反対して余程彼女をして苦境に陥らしめた。殊に松枝子（松枝子は明治十五年教祖に先つこと六年前に死んだ）の欲深い歪んだ性質は事毎に教祖の感情を害する事多く為めに五十年の後半生中真に一日と雖も心の休まつたと云ふ日に逢はずに明治二十年正月二十六日百十五歳の定命を二十五年縮めて昇天した。
　これについては色々の不審を抱くものがあるが彼女が定命を縮めて昇天を急いだのは
「何時迄此うして居ては傍も分らん。世界も分らん。助け一条遅れて了ふ」
と云ふにあるのである。宜なるかな彼女の昇天と共に世界の天理教に対する圧迫も止み翌年二十一年には教会を設置して公然布教が出来る様になつた。

天理教祖の理想

　天理教の理想は
「谷底をせり上げ高山を見下し世界を直路に踏み平らすといふことにあつた。之れを詳しく云へば今日の世界は上流下流の区別があるが将来は人類の人格的価値を向上せしむると共に其の生活の程度も向上せしめて人類間に上下の区別を根絶せんとするのである。
　此の理想を具体的に表現したものが地場中心主義である。
　地場中心主義とは御神楽歌の十下り目に示されてゐる
　一ツひのもとしよやしきの　かみのやかのぢばさだめ
　二ツふうふそらうてひのきしん　これがだいゝちものだねや
　三ツみればせかいがだん／＼と　もつこになうてひのきしん
　四ツよくをわすれてひのきしん　これがだいゝちこえとなる
の所謂人間始め世界始めの元の地場大和庄屋敷天理教本部甘露台霊地を中心として不老不死無病息災の道徳的理想の世界を実現せんとするのである。
　この理想の世界を称して甘露台世界と云ふ其の時来れば全世界には一つの歴史一つの地場一つの風俗一つの習慣一つの言語一つの文章一つの宗教一つの政治に統一せられるのである。而してこれを統一するのは実に日本人一神の長子一の先天的特権である。
　日本見よ小さい様に思たれど根が表れば恐れ入るぞや
　だん／＼と何事にても日本には知らん事をばないと云ふ様に
　今迄は唐（外国）や日本と云ふたれどこれから先きは日本計りや

信ずべき人格と信ずべき宗教

世間では天理教と云へば愚夫愚婦を迷はす愚民の宗教の如く信じ天理教祖と云へば愚夫愚婦を迷はす妖婆の如く信じてゐる。けれども其れは其う信ずる人自身に真に宗教に対する批判力人格に対する批判力の欠けたることを証明するものである。
天理は明かに愚民を迷はす愚夫愚婦の宗教ではないのである。もし天理教を利用して愚夫愚婦を迷はすものがあらば其れは天理教其の者が悪いのではなく天理教を利用して邪欲を充さんとする教師が悪いのである。此の二者の区別を明かにしなければならない。
次には教祖の人格である。
古来何時の世にか生命土地財産名誉を捨て更らに其の上に最愛の夫に反き最愛の子供を捨てゝ迄万人の為めを計つた悪人があるか？　もし其れをしも悪人と云ふならば此の世に善人と称すべきがあるであらうか？　吾人は未だ曾つて其う云ふ者のあつた例を聞かない。天理教をもつて愚夫愚婦を迷はす妖婆の如く毒言するものは正に此の種の黒白顛倒論者である。
何故なれば
人は皆日の寄進をなさゞるべからず
人は皆互ひ助け合ひをなさゞるべからず
人は皆朝起きをせざるべからず
人は皆正直ならざるべからず
人は皆働かざるべからず
と教へ且つ自らこれを実行した彼女の思想生活はこれ天理であり、天理に合した生活であつて些の非点を打つべき性質のものではないからである。否な／＼今後の人類は是非共かくの如き思想を有しかくの如き信仰に生きざるべからざるからである。

新時代の象徴人

古来宗教の数は多い。又た偉人の数も多数である。けれども今日は人生の定義が変つた如く人の定義も亦変つた。今日並びに今日以後の人間は家庭を離れ社会と断つた遊離的人物不生産的人物であつてはならない。家庭の一人社会の一員として活動する活動的人物生産的人物でなければならぬ。云ひ換れば今日並に今日以後の人間は所謂「山の仙人」であつてはならない。「里の仙人」とならなければならない。更らに詳しく云へば今日並に今日以後の人物は
第一に朝起者ならざるべからず
第二に正直者ならざるべからず
第三に働き手ならざるべからず
これが天理教祖の画いた新時代の理想の人物である。而して彼女は此の新時代の理想を具体化した新しき象徴人であつた。
けれども此処に一つ注意しなければならないことは天理教祖の教へた朝起きと正直と働きとをもつて利己的の方便として同一視せざらんことである。何故なれば彼女の教へた朝起き、正直、働きは決して一個体の盲目的欲望を満足さする為めではなく其れ自身が人生の真の目的であつたからである。わけて働きの意義については注意しなければならぬことは世人は屡々働らきの意義を誤解して利己的労働と同一視するからである。
けれども教祖の教へた働らきの意義は傍楽即ち周囲の人々を安楽ならしめんが為めの活動を云つたのである。これが即ち彼女の所謂互ひ立て合ひ助け合ひ」である。此の「互ひ立て合ひ助け合ひ」の教理と表裏の関係を有する教理に「日の寄進」がある。これは日々の真実を神に寄進するの謂にして其の本体は正直其の者に外ならない。従つて今日並に今日以後の人間はかくも定義することが出来る。
第一　新時代の人間は相互扶助主義者ならざるべからず
第二　新時代の人間は日の寄進主義者ならざるべからず
之れを縮めて誠の人（真人）と云ふ。
奸悪なる世界と幼稚なる社会とにあつては天理教は愚夫愚婦を迷はす淫祠邪教と誤解せらるゝであらう。又奸悪なる世界と幼稚なる社会とにあつては天理教祖は愚夫愚婦を迷はす妖婦と誤解せらるゝであらう。けれども
人は互ひ助け合ひをせざるべからず
人は日の寄進をせざるべからず
人は朝起きをせざるべからず
人は正直ならざるべからず
人は働かざるべからず
更らに云ひ換へれば

人は誠（真実）ならざるべからず
と教へた天理教祖の言葉を其の言葉を自ら実現した彼女の人格と生活とは真実である
更らに偉大なる真実は人類を生み且つ育てゝ今日の人類に迄発達せしめた計りでなく更らに彼等をして真の幸福に達する道を教へんが為めに一身の利害を忘れ有りと凡ゆる人生の難苦を通つて根の教、本の教、実の教、止めの教を実伝した偉大なる真実である。此の真実こそ今日は知らず将来の人類より永遠に感謝せらるべきものである。
教祖歿後高弟飯降伊蔵を通じて語られた天啓の声に
「雛型の道より道はないで。何程急いだとて／＼行きやせんで。雛型の道より道はないで」
と教祖は実に神が人類の為めに下した新しき典型人であつた。今日迄天理教に反対した人々並に将来天理教に反対する人々も最後の終局には神が人類の為めに示した此の最後の雛型の道を通らなければならん様になる。これは世界の進歩と神の予言とに徴して明かである。

（紀元十億七十七年一月六日）

生れ故郷

前川　静子

「生れ故郷は其の侭置いて置くのや」
と神様が仰せられますから其の侭に致して置きますけれども雨漏りだけでも直さないぢや何うもならんと管長様（前管長）が仰せられますから雨漏りだけ普請させて戴いて居ります。
教祖様も始終生れ故郷／＼と仰つてな暇さへあれば此方へお居でになりました。
此の家はこんな丸天棒で御座います。只今は皆んな立派な家が建ちましたけれども昔は此んな丸天棒で立てたのは中々立派な家で界隈でも此んな家は御座りませなんだ。
神様が
「生れ故郷は其の侭置いて置くのや」
と仰りますから大地震にもあひますしな大風にもあひますしなそれでも此の家は何うもなりません。
私は教祖の姪になりますが矢張り此の家には生れました。九つの時中々の大地震が揺りましてな。其れからチヨイ／＼地震が揺りますけれどもほんの埃見たいのもので御座いますが其の時は中々内へ入つて居られん様で御座りました。其の時向ふの灯篭がこけてかけた侭で建てゝあります。此の間も管長様が御いでになりまして
「彼の灯篭はこけてゐる。危いなあ」
と仰ゃりました。
唯今は方々から本部／＼と云つて皆様が集つて参られますが
「早う此の道についた者程因縁ある者や程に」
と神様が仰ります。未だこれから先き何処迄拡がりますか分りません。
私共三つ位の時からお叔母さん／＼と云つて教祖様の所へ参じましたが年のゆかん頃から
「お前達は何も知らんで居るけれどもな此の神様は何も無い所から人間を拵らへかけた元の神やでこれから先きは何んぼ端々の国でも近うなつて戻つて来るで」
と仰やりました。
私共は未だ其の頃此んなになつて来ることは分かりませんから其の頃江戸　今の東京のことを江戸／＼と申して居りました　へ行くのもならんのに何うして其んなことになるのかしらんと不審に思ふて居りました。
「唐やな唐人やと云ふてな皆んな恐れて居るけれどもな唐や唐人やと云ふたとて皆んな此方へ従つて来るのやで」
と云ふこともお聞かせになりました。
此の屋敷は教祖様のお生れになつた時も私共の生れた時も同じことで御座りますが東が十二畳の米倉で西が十四畳の綿倉其れに納屋や隠居所と倉計りも七戸前も御座りました。倉から納屋迄はヅーと木一本なく裏を通り抜けると又た裏で其処に何か作つてあります。
此の屋敷は「屋敷に因縁ある故に」と仰せられますが此屋敷一軒限りぐるり道になつて居ります。　其れから教祖様のお父様のことも聞いて置くが宜う御座ります。教祖様のお父様と云ふ方は矢張り神様の御魂で御座りました。先き御教祖様の御父様が御生れになりまして其処へ教祖様がお生れになりましたので御座いますから世界並に御生れになつたのと違ゐます。

御兄弟は五人御座りまして一番兄さんが杏助其の次が教祖様。教祖様の次に女の子が二人ありまして一番末に出来たのが半三郎と申して私の父で御座ります。
此の半三郎と申しますのは女の子供が二人ありましてから九年目に出来たので御座いますから同じ兄弟と申しましても教祖様とは九つも違うて居ります教祖様のお出でになりました家は立派な家で御座りました。其れを神様から神の館にするから皆んな毀つて了へ／＼と仰やるけれども杏助と云ふ方が此の家だけでも残さんと先祖に対してすまんからと矢釜しく云つて守屋筑前此の方が神様に詳しい方だから此の方を連れて行つて神様と問答させても終ひには神様に従ふて戻つて参じました。其処で此の兄様も神様がなさることやから人間業では仕様ないと云つて皆んな毀つて了ひました。
本部で一番最初建てましたのは勤めの場所で御座いますがこれは毀つて了ふ　とが出来ませんから教校の所へ建てゝ置きます。彼れを建てました時国床立命から十柱の神様のお面を拵ふ様に此の兄様に仰せつけになり雛型を此の兄様がお造りになりました。
此の兄様が九日の患ひで御崩れになりました時教祖様は御帰りになりましてなチヤント御自分で此の兄様の身仕終ひをなされてな
「此うして置けば明日御葬式をして良いのやさかい」
と云つて御帰りになりました。
此の間管長様御帰りになつて
「此処の叔父様も巧者の人やつたな」
と仰やりました。
教祖様と云ふ方は色の御白い口元と眼元の柔しい白髪な奇麗なお方で御座いました。八十幾つかにおなりになつても腰も屈まずスラツとした御方で御座いました。
お召しは赤衣をお召しになつて居りましたが毎月御換へになりました。其れをお下げになりますと御守り様になります。
教祖様のお引き取りの時は私の四十二歳の時で御座いました。
此の琴も彼地らにかゝつてゐる開き手の鍵も教祖様の遺品で御座います。（了）

別鍋

伊賀名張　細川　なほ子

直子様は教祖の妹お桑様が忍坂の西田様へ嫁して一番末に挙げられた方である。若い時には教祖　より深く愛せられて始終往復をしてゐられたといふから色々と古い事を知つてお居でになると云　ふことを聞いて昨年の秋永尾氏と態々伊賀の名張迄出掛けて行つて御面会を願つた。此処に掲げ　たのは其の時の談話の一節である。

私は今年七十一で御座います。七つの年から二十歳の年迄は度々庄屋敷へ参じました。其の頃は教祖様のことをお母さん／＼と云つて居りましたが教祖様もチヨコ／＼おいでになり（忍坂へ）私も宇陀に縁につく迄はよく参じまして三十日も五十日も止めて戴きました。
中山家と前川家とは代々親戚の間柄です。お叔母さん（教祖様）の姑さんて方は前川から行つた方です。其の前にも前川から庄屋敷へ行つて居ります。ですから中山家と前川家とは二代の親戚関係で御座います。
私の所（忍坂の西田）では勇助が一番上で西田の跡をとりました。其れから藤助は一時庄屋敷の小寒さんの所へ養子に行きましたが三十日程居て帰つて参りました。其の時教祖様から七十より下で死ぬことはないと申されました。
小寒さんと私とは七つか八つ違ひましたが行けば姉妹見たいに心易くして居りました。
善兵衛さんには妹が一人ありましたがこの人は不仕合の人で森本へ行つて五人も子供がありましたのに庄屋敷へ帰つて参りました。
お伯母さんに神憑のありましたのは小寒さんの二つの時でありました。其れ迄は田地も三町余りあつたといふことでしたが皆んな売つて了ひました。母家は私の九つの時までありましたが其れもバラ／＼に売つて了ひました。其れも皆人にやつて了ふので始めより売らんならんで売つたのではありません。
其の頃の本家の前には堀がありました。何んでも家の間数は大分ありましたが玄関はあつても門はありませんでした。倉は西にもあり北にもあり綿倉だの米倉だの何んでも六戸前もあつた相で御座います。
家を毀つた跡に甘露台だと云つて棒を一本立てゝ居りましたが私は未だ子供の時分で御座いますから其れを抜くとお伯母さんは
「棒は幾らもあるから其んなものを抜くのやないで」

と仰せになりました。
　私の前に姉さんが一人ありましたが其の姉さんの死んだ時母は女の子がないと云つて大変悲しんでゐると教祖様が私の母に向つて
「其んなに女の子が欲しくば授けてやる」
と仰りましたが私の母は
「此んな年になつて其んなことはない」
と云つて居りますと二月三月経つと身篭りまして生れたのが私で御座います。
私の生れたのは弘化二年で母の四十四五の時の子で御座います。其の年お伯母さんは四十八になつて居りました。
　末の子で御座いますし身体も小さかつたので何時迄も乳を呑んで居りましたが七つの時お伯母さんがおいでになり
「此うして何時迄も乳を呑んでも仕方がない庄屋敷へ連れて行つて育てゝやるから最う一遍乳を呑ませてお呉れ」
と仰つて呑み納めに乳を最う一遍呑んで庄屋敷へ連れて行つて戴きました。これが庄屋敷へ行く始めで御座います。
　其の頃はお伯母さんの云ふことを誰も信じるものはありません。私が宇陀へ行つた頃よりつく様になりました。其の頃は豊田のサユミさん（仲田）と云ふ方が来てゐました。
　お伯母さんの兄弟は一番兄が杏助で二番目が教祖、三番目が私の母、四番目がお力さんと云つて朝和村の竹内へ行かれました。五番目が半兵衛さんで御座います。
　西田にはチヨコ／＼おゐでになり南半国の出張り場所と仰りました。
　文久の夏私の一番の兄さん（勇助）と小寒さんと秀司さんと又次郎（勇助の弟）と四人が太鼓と鈴とをもつて大阪へ布教に参りました。其れが私の十九の年で御座います。
　其の日の小遣いが当百六枚あれば良いのですが其れ丈けの小遣ひは秀司さんが賭博場へ行つて儲けて参りました。所が七八日経つて欲になつて其の日の小遣は儲けたのに最う一儲けしようと思つて行つた所が今度はスツカリやられて帰る時は腹を空かして帰りました。其れを教祖様は内へお居でになつてチヤンと知つて居られました。
　其の頃は庄屋敷では何もかも売つて了つた後で何も御座いません。私の小供の時分庄屋敷へ参りまして
「此んな家は結構が悪いや」
と申しますと
「又たお金が出来ると大きな家を建てるのやで」
と仰りました。
　私の身体が小さいので何うして此んなに小さいのだからと申しますとお伯母さんは
「身体は小さくても寿命さへ貰つて来れば良いのやで」
と申されました。同じ兄弟の中でも六本木へ行つて居る兄は身体も大きゅう御座いますが私と藤助は小さう御座いました。
　私の十九の時の七月十七日。其の頃は私は宇陀へ嫁附いて居りましたが忍坂から男衆が来て庄屋敷のお伯母さんがお居でになつてお直さんを呼んで来いと仰るから直ぐ来て下さいと云つて迎ひに来ました。行くにしても髪も結はんけりやならんから髪を結つたりなんかしてゐると十七日には行けませんから十八日に立つて忍坂へ来ました。
　其の時私は始めて別鍋と云ふものを炊きましたお伯母さんの仰るのに
「お地場では小寒が炊き此処ではお前が別鍋を炊くのやで」
と申され別鍋と云ふものを炊きました。
　別鍋と申しますと御飯と御汁と御副食物とを朝から三遍昼から三遍夜一遍一週間の間炊くので御座いますが其れを一粒残らず召し上りました。而して三品共内の人とは別にして雪平で炊くので御座います。御米も一遍に洗ふことはなりません。一度一度に洗ふので御座いますから朝から晩まで御飯拵らへにかゝつて居りました。私には何う云ふ訳か分りません唯炊けと云はれるから炊いて居りましたが其の間何もなさりません。七日経つて打ち明けの日風呂へ入つてお帰りになりました。其れが私の十九の年の七月の二十六日の晩で御座いました。
　お帰りになります時夜分だから車引きでも頼もうかと申しましても聞かずに歩いてお帰りになりました。提灯を上げやうかと申しましても
「私の先きには火の玉が行くから提灯は要らない」
と仰つた其の頃は私も未だ若い時分で御座いますから
「火の玉が行くなら恐い」
と申しました。お帰りには小寒さんがお伴をして帰られました。三仏庄から細い道になりますが水溜り等ありましてもドン／＼お歩きになりまして夜の十二時頃お帰りになりました。其れからお粥等暖めてお上りになりました。其の頃から匝線蝶の紋をつけてお居でに

なりました。
　お伯母さんの云はれるには
「夫婦と云ふものは同じ魂寄せるのやぜ」
と云ふことでありますが私のお爺さん（夫）の魂は先代多吉と云ふ人の魂で御座いました。其の連れ合ひはお民と云つてじんらく寺から来ましたが多吉さんが子供を一人残して亡くなつたから其の弟の勇助と夫婦にしました。其れで位牌には勇助と一手にしてありました。其の多吉と云ふ人の生れ変りが此の間亡くなつた内のお爺さん（次郎）で私がお民で御座います。其う云ふ訳で前には忍坂で夫婦でありましたが今度は宇陀へ来て夫婦になりましたからつまり二代の夫婦で御座います。
私の母（お桑様）は一寸も信心は致しませんから
「お伯母（教祖）さんがお前は長生きすると云つても何時死ぬかも知れんから当てにするでないで」
と云つて聞かせましたが未だに此うして長生きして居ります。
　今の西田の主人（伝蔵）は顔面に大きな痣がありますが彼れは生れて来ない中にお伯母さん（教祖）が
「何も悪い事はないけれども祖父に悪いことをしてゐるから面体に印をもつて表れる」
と仰つて置かれましたが彼れは彼の人が私のお父さん（伝蔵）に粗忽をして其の侭納まつてゐるから表はしたのだと仰せになりました。
　庄屋敷へ行つて居た時は時々染め物を致しました。其の時は小寒さんが井戸から水を汲むお伯母さんは側で早く入れろ／＼と云はれるから手早く入れると梅鉢でも何んでもチヤンと表はれました。
　お政さん（教祖の長女）つて方は何時迄も嫁附いても又出て来てブラ／＼してゐましたがお伯母さんは何時迄も其う気侭にさして置いてはならぬと云つて勝手に八木へ行つたのを迎ひにやり秀司さんが迎ひに行くと
「今行かうと思つてゐる」
と云つて来て其れから豊田へ嫁に行きました。
　お政さんの嫁に行く時は何もありません。夜具が三枚ありましたが其の中一通りはお春さんにやり一通りはお政さんが持つて参りました。
　お伯母さん（教祖様）が嫁入りなさつたのは十三の時で御座います。其の時福知堂のお叔父さん（教祖の父の弟）が媒介者で貰ひに来るとお伯母さんは其れを蔭で聞いて
「お母さん私子なら行かん嫁なら行く」
と云つたと云つて私の母は姉さんは可笑な人だ十三やそこらで私子なら行かん嫁なら行くつて云つたと云つて居りました。十三の春庄屋敷へ行き十六の時入籍しました。
　十三の時嫁入する時には空で参りました。十五の年泊りに来る時髷に結つて帰りますとお母さんから
「お前未だ其んな髷になぞ結ふものでない」
と云はれた相で御座います。
　十六の年お母さんから念仏をして貰ひ、十九の年に自分で五重を受けました。
　三昧田と庄屋敷と忍坂とはお互ひに前々から親類で御座いました。即ち教祖のお父さんの一番姉がお久さんと云つて三昧田から西田へ参りました。二番目の女の人が庄屋敷の善右衛門様の所へ行きました。これがお伯母さん（教祖）の姑で御座います。三番目の女の人これは櫟枝に参りました。四番目が教祖さんのお父さんの半七さんで三昧田の跡を継ぎ五番目が福知堂お叔父さんで御座います。其れから教祖のお兄弟は一番目が杏助さん二番目が教祖さん三番目が私の母四番目が竹内へ行つたお伯母五番目が半兵衛で御座います。
　お伯母さんは小供の時分から違つて居つた相で御座います。何んな子供とでも良う遊びなされた。
　内に居てもコツソリして居てチツトとも何んとも云ひなさらぬ。外の小供はお母さん何か欲しいと云つても教祖様はチンとして
「お前も行け」
と云はれて始めておいでになりました相で泣くなぞと云ふことはなかつた相で御座います。
　寺小屋へ参りましたのは九つからで九つ十、十一、十二の四年で御座いました。裁縫は内で習つたので嫁に入つてから教へられたのではありません。縫ひ物は中々達者で針は一針でもかゝりません。私子供の時行つて見るとよく鳩を拵らへてお呉れになりましたが其れを上げると羽がパツと広がり下げると縮まりました。袋等もよくお拵らへになりました。
　お伯母さんは私を可愛がつて始終此処へおいで／＼と仰やるけれども私は何んだかお伯母さんが恐くて側へ行く気になれません。其れで寝る時には小寒さんと並んで寝るので御

座んすが其れでも眼を醒すと何時の間にか教祖様の側へ行つて寝て居りました。
（教祖様は本宅にお休みになり私共は長屋に休みました）
　其の時お伯母さんの仰るには
「お前私と寝るのを厭だと云ふけれども神様はお前を好きだで」
　其れでもお伯母さんを恐い人と思ふ感は年頃になつて嫁に行つてからも変りませんでした。其れで庄屋敷へ行くと帯の紐でも襷の紐でも小寒さんの手と私の手とを縛つて一手になつて寝るのだけれども朝になると何うしても教祖様の側へ行つて居りました。
　何か下さる時にも教祖様が食べてから私共に下さいました。
　教祖様には前申した通り別鍋でお上りになると云ふことはなされたけれども断食なさると云ふことは御座いません。唯気に入らぬ時はヂツと目を塞いで何も上りません。
　御酒は御上りにならず味淋を一杯位御上りになりました。
　神様がお下りになると教祖は
　　紙筆！
と仰やるから直ぐやるとスラ／＼とお書きになるが遅れると抜けて了ふ。其れで側に居るものは何時でも紙と筆の用意をして其らと云つたら即ぐやる様にして置かなければなりませんでした。
　私には十八歳の時神様から棒寄せと云ふことをお授けになりましたが何か分らないことがあると火箸でも何んでも良い棒を一本づゝ両手にもつて分らんことを伺ふと其うだと云ふ時は合ひ、其うでないと云ふ時は離れて合ひません。又た道中をして何処／＼まで何里と云ふことを伺ふ時には何んでも良い其の辺にある棒を二本拾つて天理王命の名を唱へて御伺ひをすると一里なら一つ二里なら二つ打ちます。所が私の母が
「私の所だけ其んなことをしてはいかん」
と云つて返して了ひましたから残念だと思ふて居ると其の晩
「何も心配することは要らん。水で助けるで」
と云つてお水のお授けを頂きました。
　お授けを戴かない先きは御筆先を読んで聞かして貰つて居るうちに良くなりました。
　教祖の亡くなられたのは私の四十三の時で御座います。其の前に忍坂へおいでになつた時鏡と延紙とを戴きました。延紙の方は使つて了ひましたが鏡の方は戸棚へ放り込んで置きましたが此んなことして置かんで蔵つて置いたら良からうと人が云ひますので半分は京都の細川七郎（直子様の女婿）へやりました。未だ外に帯も貰つて居りますがこれは私の母が貰つたのを私が母から貰つたので御座います。（文責在記者）

　人が望めば神も望む

永尾よしゑ子

　私の所で此の道に入り始めはお母さんの産後を助けて戴いたのが原因で御座います。お母さんの産後が何うも良くないのでお父様は前裁の側で産薬を買ひに出た途中で人から庄屋敷の産屋神様に参つては何うかと云ふことを聞いて其の侭西に行くのを東に向いて庄屋敷に来て御願すると
「無い寿命でも心次第で踏ん張つてやるからこれをもつて行つて上げなさい。而して三日たつたら又おいで」
と仰つて御供を三服下された。其れを戴いてお母さんに呑ませると三日目に元の侭と云つても良い様になり四日目に夫婦共御礼参りに庄屋敷へ参りました。其の時教祖様は
「思はくの大工が出て来たと云つて八方の神が手を打つて喜んでゐる」
と云つて喜ばれた。
　其れから何んでも嬉しい／＼一点張りで神様がお喜びなさるからと云つて半期位詰め切つて内へ行かぬことも御座いました。
　其の頃は天理教と云へば人が馬鹿にしてゐる頃でありましたから風呂に行くと櫟本の大工が来るからと云ふので早くから集つて周囲から嬲り物にすると云ふ風でありました。
　然し未だ其の頃は全然庄屋敷へ詰め切ると云ふことができませんから仕事をしながら通つて用をさせて戴いて居りました。
　彼れは明治何年頃だつたか覚へて居りませんが兎に角私共の大きくなつてから二階堂村の前裁の博労の家を畳建具附千三百円で請取つて仕事をした所が唯つた二百円呉れた切りで後はスツカリ倒されて了ひました。貰ひに行くと
「此の牛を売つたら渡さう」
とか云ふが中々渡す所か一文も呉れやしません。其れで私と母と政甚と政枝とが仕事見たいに通つたがとう／＼倒されてしまいました。
　此方では其れを貰ふ筈にしてゐた所がスツカリ当が外れましたから年の暮になつて掛け

取りが来ても払はりやしません。けれども掛け取りに来る人は内の人が正直な人だと云ふことを知つてゐるから其んなら負けてやらうと云ふ。お父つ様は又たお父つ様で几帳面の人だから負けては要らんと云ふ。其れを後から掛け取りに来た人が聞いて居る。
　これは此処の家では払ひが出来ないなと思つて入つて来る。矢つ張り払が出来ないから其の人も負けてやらうと云ふ。お父つ様は負けて要らんと云ふ。其れで勝手道具迄払ふ様なことが出来ました。
　博労は其う云ふ事をして其の家に入りは入りましたが半期程入つた計りで人に取られて粉もない様にされました。其れでも私所の家は何うなり此うなり煙を立てさせて戴きました。
　其の頃の私共は職人が十四五人も居りまして忙しいから私も学校へ行かないで守りをして内にゐました。
　其の内に私の母の鼻に瘡瘍が出来ました。医者に見せると牛を食べろと云ふ。牛を食べなければよくならぬと云ふ。其れで牛を食べると顔中に瘡瘍が一杯に拡がりました。其れから神様の所へ来て願ふと直ぐ御守護を戴いた。
　教祖様の仰せになるには
「お里さん此方が手不足でならんから早く彼地を引き上げて来てお呉れ」
「有難う御座います。何れは寄せて戴く心算で御座いますけれども子供も大勢御座いますから小遣でも少し出来ました上で寄せて戴きます」
「其んな欲なことを云つたつて何うもならん。早く来て呉れ」
「寄せて戴きます」
と云つて帰るが又々二年程誑まして其の侭延び／＼になつて了ふ。
　兎に角千円も偉い目にあつてゐるから小遣儲けに一寸煮売りみたいのことをしました。内が内だから職人が来るが其の中には一寸酒屋の通を貸して呉れ呉服屋の通を貸して呉れと云つて品物を取つて金を寄来さない。其れで其の時もスツカリ損をして店をしまいました。
　神様（教祖様）櫟本にお出でになつて笑はれた。
「皆んな落し紙かせんち紙のやうなことをして喜んでゐる。神には深い／＼思はくある。何んなことも成るか訳らん。其ら放つて了へ。これも放つて了へ」
ふと云つてサン／＼笑はれた。其れで商売を止めて了ふと何うなり此うなり優しになりました。
　商売を止めると教祖様も御機嫌が宜い。其れで今度の正月は寄せて貰ふと云つて又た行かない。又た身上に御異見を戴き父は一夜の中にスツカリ盲目になりました。其れから眼の玉は梅干の様になつて白も黒もない。
「これでは乞食するより外仕方ない」
と云ひながら神様へ来て願ふと
「其んな先きの見えないことを何時迄もしてゝは何うもならん。早く帰つて来な」
と云はれる。
　スツカリ助けを戴いて盆の関丈け済まして寄せて戴きますからと決心しても亦明かない。其うして居る中に又た政恵が一晩の中に風眼で潰れた。人が寄つて来て医者に連れて行けと云はれたが医者へ行かずに神様へ連れて来ると一週間の中にスツカリ助けて貰つた。助けて貰ふと又心が後へ戻る。
「子があるさかい／＼」
と云ふて送り／＼してゐるうちに又たお父様が櫟本の神田といふ内の仕事を受取つて仕事をしてゐると木片が右の親指の肉と爪との間に入つて何うでも抜けぬから又た神様へ参つてお願すると
「ウカ／＼して居ては何うもならん。私に一人何時も任せて置くから何うもならん。」
と仰せになつたが直ぐ抜けた。抜けた跡に傷も何も行かない。勿体ないことだと思ひ
「普請を済ましたら帰らして戴きます」
と云つて帰つたが愈々庄屋敷へ越さして戴かうと云ふので其の事を鍛冶屋のお父つ様に話すと鍛冶屋のお父つ様が
「彼んな庄屋敷の様な所へ行つたつて仕様がないから止めなさい」
と云はれるので其の時も其の侭になつて了つた。
　明治十三年に何んでもない紺屋の藍壷の廂を直す丈けですから樽桶を台にしてやつて居ましたら落ちて腰抜けになり立つ事も出来ないから櫟本から戸板に乗つて来て七八日置いて戴いた。其の時神様は
「何んぼ来い／＼云ふても聞かなければ何時迄も此うして置く」
と云はれ愈々懺悔をして
「今度は寄せて戴きます」

と云つて教祖と物語して助けて貰ひ一週間目に帰つた。
　これから愈々庄屋敷へ引つ越すと云ふので顧客先へ暇乞ひに廻ると顧客先では
「何んだつて庄屋敷見たいの所へ行くのだ。乞食しても庄屋敷見た様な所へ行くな」
　此うなる。其うすると
「此んな細かい子供があるのにな」
と考へる様になる。其処へ来て顧客先では
「内が狭ければ大工の手のものだから建てたが良い」
「金がありません」
「金がなければ何うにでもしてやる」
と来られるから其んなら子供が一人前になる迄待たうかと云ふことになると政甚が五日か六日物を言へない様になる。其れから又た身がすくんで起きない。其処で神様へ行つて
「何時も詐計り云つて済みませんがこれを助けて戴いたら寄せて戴きます」
其れで御守護を戴くと其の侭になる。
　明治十四年に政甚も政恵も目の縁が腫れて牡丹餅見た様になつた。其処で十四年の旧十一月の十七日か十八日頃と思ひますが寒い／＼時に二人連れて庄屋敷に母が来られました。而して政甚と政恵と二人が加減が悪くてお願ひに上つたことを申上げると神様は
「お里さん政次郎のことを知つてゐるかい」
「ハイ知つてゐます」
「知つてゐるのなら良いけれども知らなければ確つかりしいや」
　政次郎と云ふのは五つの時人に迷はされて死んだのであります。
「ハイ有難う御座ります」
「早う来ておくれ」
「寄せて頂かう／＼と思ひますけれども櫟本で惜しがられますによつて」
「人が望めば神も望むで。人の惜がる人間は神も惜しがる。人が望まん様になつたら神も望みやせん」
と云はれる。又た
「寄せて戴きたう御座いますけれども子供が細かう御座いますから最つと大きくなつてから寄せて戴かうと思ひます」
と申上ると
「子があるから神の方も楽しみだ。親丈けなら楽しみあらせん」
　其れで其の侭居て明治十五年の正月の朝に
「一日丈け休ませて貰ひに帰つて来た」
と云つて帰つて来ました。其の時お父つ様の云はれるには
「お里こんな所でも行くな／＼と云ふ人があるから止めにしやう」
　けれどもお母さんは
「私盲目になつても行きます」
と云つて日帰りにした。チヨトーケ月計り居て櫟本へ行き
「神の方で何もかもするからあるものは皆な人にやつて了へ」
と神様が云はれるからと云つてあるものは皆な人にやり二月の八日にお地場に引つ越さして戴きました。彼の時辛いからジツとしてゐたら春が遅れる。
　何も持つて来るなと云つても着物丈け持つて来ないじや直ぐの間に合ひませんから着物と錠前障子四枚と鍋釜夜具蚊帳お膳等一通り持つて来ました。
　明治十五年には私が十七で妹が十政甚が七つか八つで御座んした。私身体は小さいし妹や弟は未だ子供ですから全身の着物は一枚もあらしません。神様は遠慮なしに何んでしたが良いと云はれるが其の頃はしたくても出来やしません。
　其れ迄は中山家で空風呂と宿屋をしてゐられたが四月の一日から宿屋と空風呂とを伊蔵の方へ任せました。
　其の頃私共が櫟本から持つて来た鍋釜は中山家で使ひ中山家の道具は損料で貸す。スツカリ南と北とに分けて了ひました。これを分けたのは松恵さんですが私共が此方へ参ります時神様は一つの所帯一つの家内と云はれたのを松恵さんが今云つた様に南と北とに分けたから神様が
「南と北と分けたのが神の残念。神の云ふ事背いたら何んな事になるやら知れんで」
と云はれました。
　松恵さんは私共が寄せて戴くと間も無く亡くなりました。
　其れから其の年の九月十九日に道の上に大節が出て慈福寺の認可が取り消しになりました。教祖様始めとして監獄へ七人行きました。教祖様が明日か明後日お帰りになると云ふ日に私の所のお父つ様も監獄へ引かれる様になりました。其の頃私の所では宿屋をして居ましたから警察で止宿改めに来るのですが音松と云ふ弟子の寄留届がしてなかつたので引

かれました。其の日お父様は明日か明後日教祖様が監獄からお帰りになると云ふので御召しになる赤衣を丹波市の岩井に誂らへに朝の八時に出て行きましたが十時になつても十二時になつても帰つて来らりやしません。此方も忙しいから見に行けない。止宿人挙げの届けに丹波市の警察へ行つて飯降伊蔵は何うなつたかと尋ねると
「飯降伊蔵見たいのものは監獄へ送つた」
と云ふ。其れを聞いてビツクリしました。然し明日は教祖様監獄から出られるでせう。だから人から教祖様のお召しになる赤衣をとつて貰らひ監獄に居るお父様の所へ差入れもしやうと思つて次の日奈良の監獄へ行つて尋ねると
「飯降伊蔵見たいのもの監獄へ来てない」
と云ふから南の門から出て行くと向から腰縄で来るのがお父つ様です。其の時梅谷四郎兵衛さんが私と一手に行つて呉れなされて
「芳枝さん御父つ様に何か云ふことがあるなら云ひなさい。私頼んでやるから」
願つても
「余計な事は云ふはいらん」
と云ふ。其れでお父つさんは
「私の来る迄に音松を外へ預けて了へ」
と云つた限り引かれて監獄へ入つて了つた。
　御父様前の晩何処へ止められたかと云へば帯解の分署へ一晩止められた。帰つてからお父つ様の云はれるには
「分署には天野さんと云ふ人が居て私が腰縄附きで入つてるのを見て伊蔵さんお前の様な人が何う云ふ事で腰縄で来る様になつたのか聞かして呉れと云つて来た。私は実は弟子の音松と云ふ男の寄留届がしてなかつたから此うなつたと話す天野さんは
　私が丹波市の分署へ居るなら此んなことはしなかつたのに
　御夕飯は食べたか？
　イエ食べません
　其れじや己が持つて来てやるからと云つて其の人が持つて来て呉れて夜の十二時頃御夕飯を食べた其れから其の人が
　食べたら其の侭にして置きなさい。私がとりに来るから
と云つて後から取りに来た。
　父は何処へ行つても受けの良い人であつた。
　其れから私は教祖様が監獄から出ておいでになつたのをお髪をすかして戴いて一手に帰らして戴いた。
　所が一方丹波市の警察の方では何か落度を見附けて父を罪に陥れ様と思つて
「空風呂に薬を入れてないか」
と云つて調べて来た。
「入つて居ません」
と云ふと
「入つて居ないなら良い」
と云つて行つて了ふ。又四つ日目に尋ねに来て釜の中を見
「入つてなければ良い」
と云つて了つた。其れが教祖の帰つておいでになる晩である。
　所が何うかしてお父つ様を罪に陥れやうと思つてゐるから行く時コツソリ薬を釜の中へ投げ込んで行つた。其れを後から芦津の役員で善吉といふ人が見附けて
「何んでもこれは薬を入れたに違ゐない」
と云ふ。其れから大騒ぎになつて竈の火を引けと云ふので火を引かして釜を明けチアンとした所へ巡査と刑事が六人計り入つて来た。もうチアンと空風呂はしまつて了つたから向ふでも当が外れた様の顔をしてキョロ／＼見て
「愈々おみき婆さんも帰るから急がしいだらう」
と云つて出て行つた。彼れを彼の侭にして置けば薬が入つてゐると云つて難題云つて一本やる所であつたが神様の御守護でチアンと了つて了つた後ですから的が外れた様子で帰つて行つた。
　其の後足達様が区長をしてゐたから私の父の身元を尋ねに来た。
「伊蔵さんは何処に非難を入れる所はない。天理さんのお婆さんに続く人だ」
と云つてお爺さんが私に聞かした。
「彼んな好い人あらしません。天理さんのお婆さんか貴女の所のお父つ様かつて云ふ人だ。其やから十日もたつたら帰つて来ますで」
と云つて行きましたが其の通り十日計り経つて帰つて来ました。其の頃は警察が偉いことで何時調べに来るか分りませんので夜もロク／＼休まれませんでした。

　其の中に明治二十年の大節が来て教祖様は身をお隠しになる様な偉いことになりましたが其の前に神様から御神楽勤めをせ／＼と云はれるけれども皆警察へ引かれるのが恐いからしないでゐると神様からは
「勤めしてもかゝる。せいでもかゝる」
のと云はれるので勤めをしても勤めをしないでも警察へ引かれるなら勤めをしろと云ふので（当時の人々は神様の言葉の意味を取り違ゐて居た。これは教祖昇天の時期の迫つたことを指されたのである）勤めにかゝつた。
　其の頃は縞の着物を着て其の侭御勤めをしました。私共は襷掛けで台所に働いて居てお勤めをせいと云はれると襷を外して袢天着て何時でも警察へ引かれる様にして勤めにかゝりました。而して十二下り目の
　大工の人衆も揃ひ来た
と云ふ所まで来ると兵神の会長が教祖様が息をお引き取りになつたと云つて知らせに参りました。其れが恰度昼の十二時頃で御座いました。
　其の前に二十五日に一遍息をお引き取りになりましたのが一旦御吹き返しになりやつと安心した所へ遂ひにお引き取りになりました。彼の頃のことを思ふとまるで夢の様です。
　　附記　永尾よしゑ様は御両親（御本席御夫婦）と共に早くよりお地場に御住み込みになり当時の　　事情に最も良く通じて居られる一人であります。此の度感謝と記憶とを出すについて特にお話　　を願ふ筈であつたが御一門に御産があり取り込んでおゐでになり伺ふ暇がありませんので以前　　からズーと聞かせて戴いて居た談話の一節を抜粋して掲ぐることに致しました。文責は元より　　記者にあります。此の文を此処に掲げるについて一応述者並に読者に対してお断りを致して置　　きます。（編者）

　新真婦人の典型

大平　隆平

　「新しい女」と云へば一時思想界の流行語であつた。けれども当時の新しい女と云ふのは西洋では三四十年前乃至五六十年前にイプセンだのシヨーだのズーダーマンだのと云ふ人達に依つて書かれた所謂机上の新しい女を気取つて見たと云ふ迄で何等深刻なる自覚と云ふものはなかつた。
　イプセンでもシヨーでもズーダーマンでも成る程婦人問題の喧しかつた当時にあつては面白い問題であつたに違ゐない。けれども人類の自覚の進歩した今日から見れば彼等の所謂舞台上の技巧を除いて思想問題として見る時は誠に浅薄皮相なものたるを免かれない。其の浅薄皮相な思想を思想上の教養の乏しい日本婦人が模倣するのだから其の気障さ加減は見られたものではなかつた。勿論これも或る古い時代より或る新しい時代に到達する過渡時代には必らず共に表はれて来る共通の現象であるから昨日の問題は昨日の問題として更らに深奥なる婦人問題に就いて研究の歩を進めたいと思ふ。
　凡そ如何なる問題に係らず真に公平に其の問題を解決せんと欲せば判者は須らく周囲の輿論より超越して公平なる観察と偏らざる判断とに待たなければならない。殊に人生問題の殆んど一半を領して居る婦人問題の如きに於て最も其うである。
　イプセン、シヨー、ズーダーマンに依つて提出されたる婦人問題並に我が国の青踏一派の婦人連中に依つて提出せられたる婦人問題は何れも近世の婦人問題として初期の婦人問題に属す。彼等に真の婦人性とは如何なるものか？　又た真の意味の婦人生活とは如何なるものか？　と云ふ様な最も緊要なる実際問題に対しては何等の自覚もなく唯今日迄造つて来た女性に不利なる風俗習慣に対する反抗の声、破壊の声を挙げたに過ぎなかつた。
　凡て一個の新しい家を建てんとせば古い家を破壊しなければならない。新時代の女性が婦人にとつて不利なる風俗習慣を破壊して真に自由の天地を創造せんとする企ては元より自然の要求である。けれども只管旧道徳旧習慣旧風俗の破壊にのみ熱中して真の婦人性と真の婦人性に従つたる自然の生活の如何なるものなるかを忘れたる所謂「新しい女」達は男女同権を唯一の信条として男が料理屋へ行けば料理屋へ行き、男が酒屋へ行けば酒屋に行き、男が女郎屋へ行けば女郎屋へ行き、男がマントを纏へばマントを纏ふ。其れで自ら新しいと思つてゐた。けれども男の食ふものを食ひ、男の衣る物を着、男の行く所に行つたからとて其れは男性に対して詰らぬ反抗をして見るだけのことで其れが為めに真の婦人性は聊かも進歩せず真の婦人生活は聊かも発達してゐないのである。否却つて此の自覚のない反抗の為めに如何に深く婦人性は傷けられ如何に大きく婦人生活が害せられてゐるか彼れ等は知らない。
　殊に彼等にとつて最も憐れむべきことは世界は二つの同一物を要しないといふことに就いて全然無知なることである。もし彼等の信ずるが如く男女が同一の生活をなし同一の事業をなすべきものならば男女の区別は始めより必要がなかつたのである。其れを神が男女

に造つたのは　　此う云ふことは彼等は信ぜぬかも知らぬが　　男性には男性の天分があり女性には女性の天分があるからである。此の男女両性の天分の区別を没却して全然男子と同一生活を営まんとするが如きは最も憐れむべき幼稚の考である。

　教祖は男女同権主義者

　教祖は
「男も女も寸分違はぬ神の子供である」
と云ひ
「此の木いも雌松雄松の隔てなし如何なる木いも月日思はく」
と云ひ、明かに男女同権論者の最新先駆者であつたが然し彼女は一面に於て又た

　女には女の道がある

と云つて明かに男女両性の天分の差を認めて居る。
「女には女の道がある」
これは女性の生理的組織を見ても明かなることである。婦人は即ち男性と自ら異つた天分と其の天分を生かすべき先天的義務があるのである。即ち妊娠、分娩、哺乳、育児の大任である。これを婦人特独の天分として一切の微細なる仕事は婦人の天職に属するのである。
　今日の所謂「新しい女」は此の婦人の天分を没却して居る。これ彼等の思想が聊かも徹底して居ない所以である。

　先づ愛を解決せよ

　今日の婦人は男女両性間に利害の衝突があると直ぐ彼等の持前の武器である男女同権を振り廻して自己の権利を主張したがる悪癖がある。
　これは彼等が徒らに自分一身の利害観念のみ強く他人即ち夫もしくば子もしくば親に対する利害観念の全然欠乏して居ることを証明するものである。云ひ換へれば利に敏くして愛に疎きことを証明して居るのである。
　けれども此処に注意しなければならぬことは両性間の愛と人間としての愛とを混同視せざらんことである。
　普通夫婦の間に愛があるとか愛がないとか云ふことは恋愛を指すのであるが恋愛は決して夫婦間の第一戯的愛ではない。夫婦間の第一義的愛は先づ人間として互に相愛することである。性的の愛は寧ろ第二義的のものである。
　例へば人形の家のノラである。彼女はイプセンに依つて新しい女の第一の雛型に使はれて居るが彼女は元来其んな気の利いた女ではない。彼女の本来の性質は夫を愛することの出来る女に造られてゐる。けれども彼女の家出が本当の自覚から出たものでない如く彼女の愛も本当の自覚から出た愛ではなかつた。もし彼女が夫と子供に対して相対的の愛でなく真に絶対的の愛をもつてゐたならば彼女は決して夫と子供とを捨て得なかつたであらう。其れを敢て捨てたと云ふのは彼女も亦夫と同一の利己主義者であつたことを証明するものである。

　愛と欲

　世間では自分を愛する者を愛することを愛だと云つて居る。けれども其れは利己的の愛であつて真の愛と云ふものではない。誠の愛と云へば我を愛するものも我を憎む者も同一の愛をもつて愛することを云ふのである。
　更らに最一つの誤は真女なるが故に愛し善女なるが故に愛し美女なるが故に愛すると云ふことである。これも本当の愛ではない。本当の愛と云ふものは偽なれば偽なる程悪なれば悪ある程醜なれば醜なる程愛するものである。これが超人の愛であり、神の愛である。
　例へば此処に不品行の夫がありと仮定する。普通の女ならば直ちに嫉妬の炎を燃やすかもしくば直ちに離縁して他に理想の夫を求むるかゞ普通である。けれども真に絶対の愛を自覚してゐる婦人のみは其うでない。彼女は夫が如何に自分に対して無情であつても其れを聊かも怨とせざるのみならず却つて如何にせば夫をして真に幸福ならしむべきかについて考慮するものである。これが真の愛である。夫が我を愛せざるが故に怒つて去るが如きはこれ全然利害観念より出たる欲の行為であつて真の誠心より出たる愛ではないのである。

嫉妬は利己心があるから

古来嫉妬は婦人の共通の欠点である計りでなく男子にも共通の欠点である。其れは男なるが故に嫉妬心弱く女なるが故に嫉妬心の強いと云ふものではない。利己心が深ければ深い程嫉妬も亦深いものである。
凡て此等の婦人問題に対して真の解決を与へたものが天理教教祖中山ミキ子である。

若かきは若かきの雛型

教祖の言葉に「若きは若きの雛型になれ」と云ふ言葉があるが幼女時代の教祖はこれ幼女の雛型、少女時代の教祖はこれ少女の雛型（模範少女）であつた。「泣かぬ子」「温和しい子」「親の手数をかけぬ子」「真面目の子」「上品な子」「大人げな子」と云ふのが彼女の幼少時代に持つてゐた特徴であつた。殊に「大人げた子」であつたと云ふことは彼女の性格が早くより円熟の境に入つてゐたことを語るものである。

教祖には娘時代がない

彼女の伝記が世界一般の婦人の伝記と異つてゐる第一の点は彼女には所謂娘時代がなかつたといふことである。あつても其れが非常に短かつたといふことである。従つて娘時代（処女時代）の教祖といふものについては殆んど云ふべき点がない。あつても少い。
彼女の少女時代には裁縫とか料理とか糸機の如きは家庭で何時習ふともなく習つた。又た遊芸とては琴を嗜まれた様であるが今日の都会の上中流の家庭の令嬢達が結婚の資格の様に思つてゐる茶の湯だの活花だの長唄だの舞踏だの絵画だのと其んなものはやられなかつた様である。即ち彼女が短かい少女時代に習得した婦人としての智識は今日のハイカラの令嬢の兎角避けたがる実用的の技芸が多かつた。これは新時代の婦人として最も注目すべきことである。
けれども此処に一つ注意しなければならぬことは彼女が習得した技芸が多く実用的のものであつたと云つても彼女の全体の特徴より云へば今日の実科女学校実践女学校等の如く何んで実用的であれば良い何んでも実際的であれば良いと云つて無暗に手先きの修養を尊重して頭の修養を怠ると云ふ側ではなかつた。彼女の一面には実際的の所がありながら他の一方には非常に神秘的宗教的の特徴のあつたことは争ふべからざる事実である。これが今日眼と手先きの技芸のみを重んじて頭と心の修養を閑却してゐる実科女学校式実践女学校式と大いに異る点である。
即ち少女時代の彼女の性格を云へば一面に於て非常に現実的の所があると思へば他の一面に於て非常に理想的の所があつた。趣味と実益、神秘と実際、これをつき交ぜたのが彼女の性格であつた。

妻としての教祖

彼女は非常に若かいうち即ち婦人としては殆んど蕾の時代に人妻となつてから彼女に恋愛があつたか何うかと云ふことは疑問であるが一体に彼女の性格より云へば彼女は今日のハイカラの女の様に星だの菫花だの恋だのと云つて騒ぎ廻る方の性質ではなかつた。何んな夫でも天の与ふる者は凡て満足すると云ふ信仰の深い婦人として作られてゐた様である。其証拠に彼女の長生涯に於て一度も恋愛に関する物語のあつたことを聞かないからである。
昔し或る高徳の女菩薩が或る男子を救済する為めに自分より徳の少ない其の男に嫁いだと云ふことを聞いて居るが教祖は恰度其の女菩薩の様な人である。彼女は今日の若かい婦人の求むる様な所謂理想の夫なるものを外に求めなかつた。彼女は何んな不肖の夫でも天の与へる夫に満足し自分は自分として行くべき道を側目も振らず歩いた道である。これは今日の青年男女がいや理想の夫人だとか理想の夫だとか云つて直接自分に都合の良い好きな男や女を求めて歩くのとは大分違つてゐる。彼女には夫は賢くても愚かでも美男でも醜男でも善人でも悪人でも其んなことは構はなかつた。否寧ろ賢人よりも愚人美男よりも醜夫善人よりも悪人を選んで之れを賢人とし美男にし善人にして行かうと云ふのが彼女の主義であつた。これが今日の青年男女の考へてゐる愛と彼女の考へて居た愛との大いに異る点である。

超人の愛！　神の愛！

今此の二種の愛を比較すれば自分の好きな男もしくば女を理想の男だの理想の女だのと云つて居るのはこれは明かに自分の小なる利害を中心とした愛であつて真の愛と云ふものではない。真の愛と云ふものは美男であらうが醜夫であらうが善人であらうが悪人であらうが賢夫であらうが愚人であらうが凡て其等の差別を超越して唯其の人をして真の満足真の幸福を得せしむるの外何物もないのである。即ち前者の愛は相対的の愛にして後者の愛は絶対的の愛、前者の愛は利己的の愛にして後者の愛は利他的の愛、前者の愛は人間的の愛にして後者の愛は超人の愛、神の愛である。

凡て自己の利害を中心とした愛　　私は其れを商人の愛即ち欲と云ふ　　と云ふものは其れが自分に都合の良い間は一手に生活してゐるけれども其れが自分に都合の悪い時は直ちに離反して去るのである。其れは欲と云ふもので愛と云ふものではない。利と云ふもので誠と云ふものでない。誠の愛と云ふものは相手が敵にならうが味方にならうが其んなことは聊かも自己の問題ではない。自分は唯先方に対して如何にせば先方を幸福ならしめ得べきかに就て考へるより外何物もないのである。

かくの如く此の方の愛は出発点に於て既に其の目的を異にしてゐる。即ち前者は如何にせば自分を満足せしむべきかに就て考へ後者は如何にせば他人を満足させ得べきかに就て考へるからである。今日夫を愛するとか妻を愛するとか云ふのは多く前者の所謂自己の好悪を中心とし利害を中心とした愛云はゞ利欲より出た愛であつて真の誠より出た愛ではない。真の誠より出た愛は自分一身の利害を超越した愛である。

凡て自分一身の利害を中心とした愛（欲）は他の動静に依つて常に変化するものである。即ち自分にとつて有利なる間は先方を愛し、自分にとつて不利なる時は直ちに捨てゝ去る。従つて其の愛には一定不変と云ふ要素が全然欠けて居る。けれども自己の利害を超越した愛は決して変ることはない。何故なれば彼は始めより自分の利害を捨てゝ他人の利害を中心として生活するが故に先方がたとひ自分に辛く当らうが親切に当らうが聊かも此方の愛には関係がないからである。此の時と所と人とに依つて愛を異にしない平等不偏の愛を称して誠の愛と云ふ。教祖は即ち前者の所謂自分一身の利害に依つて自分の精神や態度を豹変する世界並の利己主義者でなく始めより自己を空うして他人の幸福の為めに生活する真の意味の愛である。

夫善兵衛と下女かのとの不正の関係に対する教祖の態度

もし教祖が夫に対して世間一般の相対的愛が持つて居ない婦人であつたら夫善兵衛と下女かのとの不正の関係があつた時必らずや離縁を要求するか何か一悶着起したに相違ない。然るに其うはせず却つて益々二人を大切にした見上げた態度は其うでなくてさへ夫が不品行をしはしなかつたか夫が他の女と不正の関係を結びはしないかと常に嫉妬と疑惑との眼をもつて夫の行為を監視して居る様なさもしい慮見の女の全然解することの出来ない態度である。

此の時の教祖の態度は怨に報ゆるに徳をもつてすと云ふ様な意気づくの様な態度でなく全然愛はあつても怨はなかつたのである。其の証拠には夫がかのを伴れて何処へ行くと云へばこれに自分の晴衣を貸して着せて出し尚ほ其の上自分が毒殺に逢ひながら我が身を怨んで人を怨まなかつたのに徴して明かである。此の見上げた精神見上げた態度を罪もない夫に無実の罪をきせて世間の前に赤恥を掻かせ其の上に出るの引くのと云つて我と我が心に疑心暗鬼を作つて騒ぎ廻つて居る其辺等近所の嫉妬狂に見せたいものである。

凡て嫉妬と云ふものは女性特有の悪徳の様に称せられて来たがこれは独女性にのみ限つた悪徳ではない。男子にも同様に此の厭ふべき悪徳があるのである。といふのは彼等に人を愛すると云ふ精神がなく唯一身の利害をのみ考へるからである。其う云ふ我利／＼亡者には教祖の爪の垢でも煎じて呑ませたいものである。

母としての教祖

凡そ婦人性の中最も発達したものは母性である。婦人は此の円満なる母性の修養によつて完全の域に達するのである。教祖は即ち此の母性の最も発達した婦人であつた。

普通の婦人にあつては母性は子をもつてから余程経つた後でなければ表はれないのであるが教祖の母性は決して子供をもつて後始めて表はれたものではなかつた。随分子供の時から早く表はれたものであつた。即ち他の子供と遊ぶにも彼等を決して自分の遊び友達として遇するのでなく恰度母親が子供を遊ばせる様な精神なり態度なりで彼等に接した。其れであるから近所の母親達が野良仕事で忙しい時などは良く彼女に頼んで仕事に出たものである。彼女は其の預つた子供に玩具を差し換へ引き換へて一日愉快に遊ばさせて母親の

帰るを待つて送り届ける事も珍らしくなかつたといふことである。
　此の母性は年と共に発達して遂に晩年には一男五女の母としてゞなく万人の母として其の先天性を発揮する様になつた。

　愛は教祖の生命

　之れを要するに教祖九十年の生涯は人間として決して短かいものではなかつた。其の長生涯の間彼女は人の娘として、人の妻として、人の母として、婦人の通るべき凡ゆる道を通つた。けれども晩年万人の母として通つた五十年の間の生活貴い意味深い生活はなかつた。
　古来救世主と称し予言者と称せられた人達の説いた愛は皆これ自己の利害を離れた絶対の愛である。けれども実際に於て釈迦の感じた人類に対する愛と基督の感じた人類に対する愛とミキ子の感じた人類に対する愛とは其の感じ方が一様ではなかつた。釈迦の感じた人類に対する愛は人類の父としての愛である。基督の感じた人類に対する愛は人類の兄としての愛である。ミキ子の感じた人類に対する愛は人類の母としての愛であつた。
　更らに之れに対して一言の説明を加ふれば彼女が人類に対して感じた愛は天地が万物を生み且つ育てると同一の至情に充ちた愛であつた。

　愛は此の世の無上の権威

　今日の天理教徒は教祖の精神を忘却して愛をもつて人に臨まずして権威をもつて人に臨まんとする悪風がある。此の悪風は教界内部に於て殊に甚しい。
　けれども真の権威は浅果敢な人間心の造つた傲慢や尊大より生れるものではない。唯愛のみぞ真の権威である。
　見よ打たれても叩かれても母の跡を慕ふて走る人の子を。
　凡て権威をもつて臨む者には我も亦権威をもつて反抗せんとするのが自然の人情である。けれども愛のみは之れに敵する害意を挟む余地がない。其の最も良き実例は猛獣である。彼等に対するに武器をもつて感服せしめんとせば彼等怒つて必らず我を害すべし。けれども何等害意なき真の愛をもつて臨めば彼等は来つて必らず我が足の指を嘗むるであらう。これが愛の権威である。而かも此の世界に於て体力が大である智力が大であると云つても愛の力に如くものはない。かくの如くにして愛は此の地上に於ける無上の権威である。

　愛なき所に貞操なし

　旧道徳の牢獄の中に育てられたる今日の上中流社会の婦人の大部分は貞操とは生理的に二人の男子に接しないことであると云ふ風に解して居る。成る程生理的に二人の男子に接しないと云ふことは愛を二つにしないと云ふことにはなる。けれども其れ丈けで貞操の定義は全うされたものではない。真の貞操には必らず真の愛を伴はなければならないものである。而かも其の愛たるや今日の青年男女の考へて居る恋愛ではない。吾が一生の幸福を挙げて其の人の幸福の為めに捧げるの謂である。この献身的愛なきものは決して真の貞操を有することはできない。何故なれば今日の所謂新人達に依つて唱へられつゝある所の愛即ち異性に対する興味のある中は同棲し其の興味が去れば離別すると云ふ様な生活はこれは動物と何等異る所なき野獣的性欲生活であつて真の意味の愛ではないからである。真の意味の愛とは何処迄も自分一身の幸福を其の人の為めに捧げ且つ其の人より何等の要求をもなさゞにある。これが真の愛であり、真の貞操である。
　けれども今日の人間は皆狡猾で利己的であるから誰も自分にとつて不利なる生活を続けて行かうとはしない。彼の上流社会の婦人が多少の不満を忍んで尚ほ且つ貞操の美名の下に良妻賢母を粧ふて居るのは其の心の底を洗へば卑怯なる自己保存の為めである。
　けれども将来の婦人は其う云ふ形式に囚れたる偽善生活を捨てゝ真の意味の貞操、貞操は即ち愛なりと云ふことを自覚しなければならない。此の自覚に到達しないうちは此の世界に於て決して理想の家庭幸福の家庭を実現することはできない。現に今日上中下流を通ずる一般家庭の不和合は其の家庭の各員に真に他人の為めに我が一心を捧ぐると云ふ真実の愛が欠けてゐる為めである。もし其れと全然反対に夫婦兄弟親子が真に自分を捨てゝ家庭の幸福を計つたならば其の家に決して春の来ない筈はない。これは自明の問題である。此の愛の問題の解決せられざるうちは決して真の意味の婦人問題は解決せらるゝことはできない。

先づ権利を要求する前に義務を尽せ

かく云へばとて私は決して現在の婦人が幸福なる地位にあるとは思はない。けれども婦人参政権運動や婦人解放運動に依つて真に婦人の地位が向上され得べしと信ずるのは余りに早計に失して居る。現代の婦人は其う云ふ形式上に於て婦人の地位を高むる以上更らに実質上に於て婦人の地位を向上せしむることを計らなければならない。之れを云ひ換へれば先づ権利を主張する前に先づ義務を尽さなければならない。何故なれば婦人がたとい一時の運動に依つて法律上男子と同等の権利を獲得しても婦人其の者の品性婦人其の者の生活が改良せられなかつたならば彼等は前にも増して不幸な生活を味はなければならないからである。

婦人の解放は過去の問題である

之れを要するに婦人の解放と云ふことは既に過去の問題である。将来の婦人問題は

婦人性の発揮

にある。
欧羅巴に於ける五六十年前に生れた新しい女今日の日本に生れた新しい女其う云ふ人達によつて行はれもしくは行はれつゝある反性的生活は決して永続すべきものではない。時代の発達はやがて自然の婦人性に帰れと男子側より新たなる要求を呈出せらるゝ時期が到来するであらう。何故なれば今日の所謂「新しい女」と云ふ変態女性に依つて真に円満なる人間生活は行はれないからである。

今日の婦人は余りに利己的なり

凡そ一家でも一国でも利己的の人間が多いければ多い程其の家其の国は衰亡するのである。これは現在の支那に徴して明かである。
今日の婦人は余りに利己的である。彼等の眼中には自分一身の幸福を得れば夫や兄弟や両親や子供の幸福等何うでも良いのである。而して其う云ふ事に一身を捧げて居る婦人を無価値の女の様に思つてゐる。けれども此う云ふ婦人が全世界に跋扈した暁には此の世界は治まり様はない。

新時代の理想の婦人

従つて来るべき新時代の要求する新しい女は今日の所謂古い女でもなければ今日の所謂新しい女でもない。新時代の教育を受けたる愛の婦人これぞ未来の世界の要求する理想の婦人である。

新は深なり真なり

之れを要するに新は深なり真なり。此の最後の二要素を欠いたものは奇であるかも知らないが真の意味の新しさではない。真の意味での新しいと云ふことには必らず古き物もしくば人よりもより以上の深さとより以上の真実さとをもつてゐなければならない。今日の所謂「新しい女」の仕事は唯旧い型を破壊したと云ふ丈けである。其れ以上に何等婦人として積極的の深と真とがないのである。これ吾人が彼等の思想並に生活に対して全然同感し得ざる所以である。

新真婦人の典型

世間では天理教祖は愚夫愚婦を迷はした魔女か妖婆かの様に信じてゐる。更らに之れを今日の所謂「新しい女」に見せたならば全然自覚を欠いた旧式の女と見るであらう。けれども「新しい女」と云ふものは何も妻たることを拒み母たることを拒むことではない。もし其ういふ女が新しい女ならば此の世界には全然新しい女は不必要である。又た「新しい女」と云ふものは何も夫を捨て子を捨て親兄弟を捨てゝ迄自分一身の欲望を満足する女のことではない。もし其う云ふものが新しい女ならば此の世界には全然新しい女は不必要である。真の意味の新しい女は婦人性の真の自覚を有すべきことは云ふ迄もないが更らに其れ以上に公人としては父母兄弟夫子を捨つることをも敢て辞せない真正の勇気と私人とし

ては一身を犠牲にして父母兄弟夫子に仕へる自由の愛と此の二つを具へた独立した人格の婦人でなければならない。此う云ふ意味に於て真の意味に於て婦人の天分を自覚した新真婦人の典型であつた。
　近き将来に於て婦人の自覚が最つと進んで来た暁には創世の始めより神が女の雛型人間の苗代と定めた此の人類の原母伊邪那美命の人格と生活とに真の意味の人間生活真の意味の婦人生活の意義及び価値を発見するであらう。其の時こそ此の世界に真の理想の男女の充満する時である。私は其の時の到来を待つて居る。（紀元十億七十七年一月九日）

私は百姓をしてゐました

宮森与三郎

　宮森氏は元岡田と称して居た。早くより本部に入つて農事を担当する傍布教に従事した。平野楢蔵氏の媒介に依つて宮森家を継ぐ様になつたのであるが其れには氏の夫人が最も進んでゐたらしい。宮森家入籍の事を神様に願ふと
　今三年は外へ出せない
と云ふことであつた。其の事を氏の未来の夫人に通ずると
　本部に勤めてゐる人を貰ふなら三年が四年でも良い
と云ふことであつた。
本部員に引き挙げられる人は何れ何等かの功がなければ引き挙げられないのであるが
　長々御苦労であつた
と神様からお礼を云はれたのは氏一人である。
　氏は性率直にして詐も追従も飾り気もない人である。世間では氏の辞令に巧みでないと云ふ点をつかまへて彼之れ云ふが其れは真人と云ふものを知らない俗人の嫉みである。
　凡て俗人の常として口先きや手先きの動くのを以つて偉いと信じてゐる。けれども神の見る眼は全く違ふ。神の見て以つて偉大なりとなすものは口云ふこと能はず手行ふこと能はざるが如き素朴の人間である。
　此の点に於て現在の本部員中最も多分に宗教的素質をもつた一人である。私は氏の淡々として水の如き性格を愛する。

（Ｒ　Ｏ生）

　私の信仰しかけたのは明治八年頃でありますが本部へ寄せて戴く様になりましたのは十年から此方でした。其の時分には本部の屋敷と云つて六畝か七畝位の所で此の辺は百姓計りで何もありませんでした。
　内の親爺は早くから信仰して居ましたが其の頃は或は狐つきだとか或は狸つきだとか悪口を云はれてゐる頃ではありますし私も子供の事ですから、信心せい参拝せいと云はれても参らないで居りました。
　内の親爺の信心して居ります頃は唯産屋助けて下さる産屋神様だと云ふ風に聞いて居りました。自分の兄弟には姉もありますし妹もありますが大抵此処で産屋許しを願ひ外では助からぬ様に思つて居りました。
　私の兄は只今城法の分教会をやつて居りますが兄貴とか姉とかは私より早かつたのです。私は兄貴から十柱の神の御守護だとか八つ埃だとか云ふお話を聞いて居りましたが世界から色々の話を聞いて居りますから信心する気になりませんでした。
　其うしてゐる中に私は身上になり左の肱が何うしても直らんから彼方の医者にかゝつたり此方の医者にかゝつたりしてもいかんからとう／＼此の神様を信心する気になり道の四五十町さへない所だから参つては直ぐ帰るといふ風に致して居りました。
　其の頃はお地場に空風呂がありましたから空風呂に入れて貰つたり世話をして居ます内に段々心易くなり二三日遊ばせて戴く様になり良くなると内に帰つて仕事をするのですが内へ行くと身体が良くないから此方へ来るといふ具合で自然と此方へ寄せて戴く様になりました。
　其の頃神様から余計心のすんだ神の人衆が欲しいと云ふことを聞かせられました。
　其う云ふ訳で段々此方へ来て空風呂の薪を割つたり、其んな世話をさせて戴いて居りましたが其のうちに空風呂もなくなりました。
　其の頃中山家も段々楽になり十年の年切質に入れて置いた田地が帰つて来たから私は百姓の方を引受けてやらせて戴いて居ました。
　然し其の頃は未だ認可がありませんので上から矢ケ間敷くて教祖様も度々警察や監獄へ御苦労下されたが多分教祖様が奈良監獄へ御いでになつた時分だと思ひますが其の時分から代り番にやらせて戴いて居りました。

其れからスツカリ参詣人は止められて了つたので豊田のサユミさんは来ることが出来なくなりました。　辻さんは昼百姓をして夜分参詣に来ましたが中田さんは其の方一方でありました　私共も矢ケ間敷いもんですから寄留をさして貰つて百姓をして居りましたので楽で御座んした。

教祖様が一番終ひに警察へ行かれたのは櫟本へ行かれたのが一番終ひでした。私共も其処にゐたもの六七人も呼ばれましたが（管長様も御いでになりました）後の者は皆其の晩帰りましたけれども教祖さんと桝井伊三郎さんが残されました。其れが拘留の納でした。

其れから彼れは何年で御座いましたか旱魃の時で御座んしたが村方より雨乞ひに頼みに来ましたが管長様は断つた。村からは苦情があれば後は引き受けるからやつてくれと云ふ。神様は雨乞ひせいとお急き込みになる。管長はいかんと云ふ。其れでも結局村の者の頼み通りに雨乞いすることになり、村の東の方の氏神様（春日神社）で雨乞いをして二回目に辰巳の牛剥ぎ場でやりました。宮様へ来た時は暑くて困つたが其れから牛剥ぎ場に行きました時は東の山に雲がありました。其れが段々大きくなつて郡山の詰所へ近くに行つた時は其れが頭の上一杯に拡がつて来幸田様と云ふ神社の前に来た時は偉い雨で頭の上が痛い様の雨が降つて来ました。其の時外処では雷様が落ちて柱がさけたと云ふことでした。其れから豊田の方へ行き御墓地の下でお勤めをした時は雨が上つて居りました。其れから再び宮様へ帰りました時は前には埃が立つて居たのが此度は水が溜つて居りました。

其の頃は甘露台は外にありましたが其処で御礼勤めをしてゐた時警察で三人計り来まして皆んな引つ張つて行かれました。教祖様も引つ張つて行かれました。

其の時村の者は水掛け行つて側から行つた人丈け残つて居りましたから攫まへられて始めの者が三十銭の罰金二度目のものが五十銭の罰金でしたがな何んでも前に一遍引かれた事のあるものは罪が重かつた様です。其の時は教祖様も罰金ですみました。

其の時差渡し三寸の十二の菊の紋を戴いたものは神の人衆を仰りましたが其れを今の夫人様から貰ひ神の人衆と云ふことになりお勤めに出さして戴く様になりました。私も其の赤い菊の紋を戴いてお勤めに出さして戴いたが中には御紋を戴いても返しに来た人もありました。

其の時の年限は忘れましたが何んでも黒い着物の上に其の紋をつけてお勤めに行きましたら雨に降られシツクリ濡れて了つたから警察へ行つて着換へたら紋まで取られて了ひました。

其の頃お神楽は男の神様は男女の神様は女が勤めることになつてゐましたが男でも女の神様になる時には女の帯を締めて女の形をするのです。私は其の時大食天命になり女の帯を借りて女子の面を冠つて勤めて居ると巡査が来て

「此の奴は男の癖に女の姿をしてやがる。太い奴だ」

と云つて数珠継ぎに継いで引つ張つて行かれお面だの御神楽道具だのを取られて了ひました。其れが櫟本へ行かつしやる前でした。其の時サユミさん忠作さん豆腐屋のおかゆさん、嘉市の権十郎さんも行きました。

私がお道につかして戴きました頃は東の方の今の手水鉢のある辺に門がありました。其れが表門で御座いました。門を入ると西側に窓がありますが彼処の窓際にお居でなされた。今は其の窓は形が変つてゐますが其の頃は突き上げで御座いました。其の窓際に幅三尺丈け七尺位の台の上に上つてお居でになりました。台の高さは私の腰の辺まで御座いました。最初は下の方にお居でになつたが下の方は身体が苦るしくてならんと云ふので台を拵へて其の上にお居でになりました。其の下は十畳の間で一寸床の間がついて居りましたが先生だとか御家内だとかは其処へお居でになりました。

御本席の時分には刻限と云ふて願はんでも御指図になる事もありましたけれども大抵此方から願つてお指図を戴くのですが其の頃は教会も何もありやせんので事情願もありやせんですし又た此方のついて居るものも幼稚なものですから聞かして貰ふ丈けで大抵お尋ねするといふ事はありませんでした。

其の次は「説き流し」と云ふて歌見た様にヅーとお云ひなされます。本席のとコロツと違ゐます。戦争の起ること等も折々説き流しでお云ひなさつたこともあります。

お話は一体夜分に多う御座いました。夏なぞにはサアお話しと云ふと裸体の侭で飛んで出ると云ふ風でした。其の時分に御筆先だとか色々なものをお書きになりましたが御筆先も一遍に彼れ丈けのものが出来たのでありません。何遍も出ました。私共が行くと此んなものを書きましたと出されることもありました。教祖様に筆もて／＼と神様が云はれる。教祖様が筆もつと一人手に書かれて行きます。墨すつて其処へ置くと一人手に書かれて行きます。其れを纏めたものが御筆先です。門の所へお居でになりました時も筆先を仰山にお書きになりました。

私共は百姓の方を引き受けて居りましたから夜分等教祖の所へ遊びに行きますと楽しみな話をお聞かせ下されました。道の働きについても

「人の事と思へば皆んな人の事になる。我が事と思へば皆んな我が事になるのやで」
と度々お聞かせになりました。
　其の頃は百姓の間にお助けにも出さして戴いてゐたが忙しい時などは百姓の方も放つて置けず又た来て呉れと云ふ所に行かん訳にならんから困り教祖様に伺ふと
「百姓の方計りしてゐるのではない来て呉れと云ふ所があつたら行つてやれ」
と云はれる様になり百姓専務と云ふことは出来ず、自然道一筋に働かにやならんと云ふ様になりました。
　其の頃の百姓と云つても勤めもチヨコ／＼あるし其う百姓一方と云ふことは出来ませんでした。其れに教祖様は
「一日朝から晩までノベツに働くのではない。半日働いたら半日陽気遊びをする様になるから」
と仰せられました。
　今日は日の寄進をする人は沢山ありますが其の時分は私と中山重吉さんと二人で百姓一方にやつてゐました。彼の人はお助けに行かれませんでしたが夏の忙しい時になると愚図々々してゐられませんでした。米等も夏の忙しい時は昼間ついてゐられませんから夜の明ける頃二臼もついたこともあります。
　教祖様は
「其う朝から晩迄働くでないから招待のある所へ行つてやれ」
と仰せになるので百姓の方は自然出来なくなりました。
　明治十六年に遠州へ来て呉れと云ふので行きましたが其の日私と高井さんと門屋で米つきをしてゐました（門を入つた所へ席嚢を据へて）が
　遠州へ行つて来うか？
と云ふことになり
　行かう
と云ふことになり早速相談が極つた。其うなると其れをつき終る迄辛抱し切れないで其の侭にしてお磁場を立つて河内の榛原に寄り夜通しで大阪迄行きました。大阪では井筒さんが綿屋をしたり真明組の講元をしたりしてゐるから其処へ寄つて誘つて行く心算であつたが未だ夜が明けませんから川の側で蜆を捕つてる所で夜を明かし其れから本田の井筒さんを叩き起こしました。其の前に井筒さんに十二下りの手をつけて心易くなつて居るから遠州へ行かうと云ふと行くと云ふ。其れから最う一人橘善吉と云つて魚屋をしてる周旋方を誘つて四人連れで莞莚蓑に菅笠で東海道を草津に廻り六七日目に遠州へ行きました。其の頃諸井さんは其の頃広岡村と云ふ所に居られました。袋井より二十町程入つた時宿屋へ泊り井筒様が十二下りの手が皆んなついてないから稽古をしてゐましたら宿のお客様さんが賽銭を上げてくれたことがあります。
　諸井さんの内には一月程居りましたが其の間に講社が九千何戸つて出来ました。帰りに汽車がありませんから伊勢の四日市から伊賀の上野へ出て上野から島ケ原を通つて帰りました。これも六日程かゝつた様に思ひます。
　教祖お崩れの頃は此方へ居りましたが
「勤をせい」
と云ふことを頻りに云はれる。其の頃お勤をせいと言はれると警察が出て来ることが定つて居りました。内の先生方は其んなことをすれば矢ケ間敷いからと云つて止めてあるし、しなければ助からんのでお勤めに出ました。其の時高井さんも居りました。古い人が居りました。お勤めをすれば拘留せられにやならんと云ふので足袋を二足位はいて何時引かれても構はんと云つてお勤めをしてしまふと教祖様の息をお引き取りになるのが一手でした。
　其の前に御伺ひしましたら（其の頃は扇をもつてゐて御伺ひしなされたが始めのうちは扇が渦巻いて居るが終ひにピタリと膝についた時お願するのである）
「扉を開いて世界を直路に踏み平らさうか？　扉を閉ぢて世界を直路に踏み平らさうか？」
と云ふお言葉があつた。其の頃は余り門を閉ぢたりなんぞすることが多いから
「扉を開いて世界を直路に踏み平らせて戴きたい」
と願ひましたが後で考へて見ると教祖のお崩れを願つて居たのでした。其の時御本席のもつてゐた扇がピユーツと開きました。
　其れから医者にかゝつて居ませんし何うも仕様がないから苣原の勝治さんといふ藪医者を頼みに参りました。此の勝治つて医者は薬三服呑んで利かぬ時は天輪さんを頼めと云はれた位信心して居ましたが私が頼みに行きましたら寒い時ですが来て呉れました。其の時は本部の西側の煮売屋迄勝治と云ふ医者を連れて来り其処で一服させつはつて帰りましたが診断書等は彼の人が書いて呉れました。

教祖お崩れより葬式迄は四五日も間がありました。葬式の時は私と山澤さんと倉掛りをして居りましたからよう見送りませんでしたが何んでも偉いことでした。沿道は両側田まで道の様にして了ひました。（其の頃は信徒が大和地方から河内近辺にヅーとありました。）

教祖お崩れになつた時分は皆ガツカリしてゐました。世界でも天理教はお終ひの様に思つて居りましたが彼れからヅーと道が拡まりました。

教祖一年祭の時なぞも中々の人でしたが警察からスツカリ差し止められて参拝人は彼地へ追はれ此地へ追はれたりして参拝することが出来ないで帰りましたが装束を着けてゐたものは帳面につけられました。

教祖御存命中は何うしても教会の御許しがなかつたのです。其れは真柱の年が行かん故かも知れませんが教祖お崩れになつて一年祭がすんでから世界の子供が可哀相だから許るす。許るす限りは往還道で怪我をすな。細道には怪我はないと云つてお許るしになつた。其の頃は此方で願はうと思つても矢ケ間敷いから東京でお願ひして認可を得今の東大教会のある所へ教会を設置してそれから此方へ引いて来ました。

これより先きお地場で空風呂が出来なくなつてから一時金剛山の慈福寺を出張所として願つたことがあります。其の頃は護摩をたいたり天輪如来の掛地をかけたりして内の先生（今の夫人様の親）が上から矢ケ間しいと云ふので参拝しても差支へない様にお願したが神様が出て

「其んな所へ頼みに行つたら神が退く」

と立腹なされたことがあります。其れから開講式に護摩をたくのが護摩札は吉野で書くので先生が頼みに行くのに誰も随いて行く者がない。私は頼みに行くのではないからマサカ神様が退きなさる様なこともあるまいと思つて私お伴をさせて戴きますと云つて吉野へ行きました。先生は足が悪いから道の悪い所は車に乗り好い所は歩かれるのですがサテ越峠を越える時は矢立も何も私が持ちました。芋越から吉野の川上へ出て渡しを渡つて吉野の宿へ行き護摩札を頼み其処で一晩泊り翌くる日金剛山の慈福寺に行つて護摩をたく日を極めて大豆越まで帰りました。先生は足が悪いから其処で泊り私は帰つて来て内で寝ました。其の定めた日には坊主が来て護摩をたいて説教する。其の時は大分賑かでした。其れを暫時やつて居りましたが其の後に警察が来まして神仏混合してはいかんと云つて取り払つて了つた。其の時神様が出なはりまして

「神は願ふのやないと云ふても聞かないから警察怨むやない。神が取り払ひに出したのや」

と云はれた。其の頃掛図はかけて居つたがお願ひする時は二十一遍のお勤めをして居りました。

其の前に大神楽の鑑札を受けたこともありました。教祖様はお願しても御許しがないし、世界からは非難せられるし何んとかして表向きにして参拝させたいと思つて色々のことをしました。

教祖の食事は別になさつてゐました。側にゐて御飯を食べてゐると

「食べなさるか？」

と云つて箸につけて出される

「汚な御座んすか？」

「イエ結構で御座います」

と云つて戴いたこともあります。

年老つても中々達者なもので御座んした。カラサホで麦等かつてゐますとやつて来られて

「私も少し手伝ませうか？」

と云つて手伝なされたこともあります。

力競べをしますと大概負けます。お互ひに手頸と手頸と握つて力の入れ競をしますと教祖様が力を入れて来ると此方の手が離れて了ひます。又たよく小指と人指し指とで手の甲の皮を上げなされた。又た後で合掌に組んでお見せになつたこともあります。

教祖の右の親指が少し歪んでゐましたが其れは奈良の監獄へ行きました時親指二本括つて釣り上げられたクツクと云つて曲つたと云つてゐられたが其んな目に逢はれたこともありました。

教祖は至つて謙遜の方で空風呂に入る時自分がお入りになり人の前を通る時も御免なさい／＼と云つて手を下げてお通りになりました。

子守唄に

庄屋敷小在所西から見れば足達金持ち、善右衛門さん地持ち

と云つてる通り此の村でも田地田畑は一番余計持つて御座つた。其れを神様の御命令で

「埋せ込み場所迄立てゝ入れ」

と云はれた迄落ち切られた。埋せ込みになつたと云ふことを聞いて居りますが実際埋せ込み場所に入られたか何うか訳りませんが兎に角これ以上に落ち切ることは出来ないと云ふ所迄落ち切つた時神様が
「内は立派なもので寄り附き憎い。これで充分だから此屋敷を一夜の中にも元の通りにして返へす」
と云はれたが其れから十年の後に元の通り返へりました。（了）

男で御座んす

深谷　源次郎

私が此の道についたのは明治十四年で御座います。其の頃私は京都の三条下り大極町に居りました。富川久吉と云ふ鋳物師が居ました。其の人が町内に御千度をした。其の時富川の云ふには
「深谷さん今日は私の云ふ事を聞いてくれ」
「何んだ？」
「マアお茶屋に行かう。お茶屋に行かなければ話が出来ないから」
と其処で二人は退けた。
「貴方は信仰家であるから云ふが大和にはおみき様と云ふ神様があるが信心しては何うだ？」
「オウ人間が神様妙だな／＼。お前様其れに誑されてゐるのだぜ。人間が神様と云ふ事はない。」
「マア／＼誑されても何んでも結構な事と思つて信心してるから明誠社へ来て呉れ」
と云ふから其の頃富路小路にあつた明誠社へ行つた。其処の講元と云ふのは京都の西陣の陶器の元祖奥六兵衛といふ人である。此の人が極道して親に勘当せられ此の道を聞いて説教するのだ。其の人の云ふには
「此の神様は元此の世界を造り無い人間を始め下された親神様である。天には月様、世界ではな湿い
のご守護。重足命様は火一切のご守護。此の柱二の神が世界一列をつくり下された神様だ。其うだろうな。日がなかつたら生きて居られまいがな。これも子供可愛さに一日も休まずに働いておゐでなさる。二十人も講社があるが殖さうと思つてやつてゐる。
月日があればこそ此の世界も人間もある。世界では月日様と云ふものは当り前だと云ふてゐるであろう。
世界は元泥海であつた。人間と云ふものはなかつた。其の時月様が子供をよう清めて拵へ様ぢやないか。其ら其うや子供拵らへたらば楽しみでよからうと其処で泥海中をお立ち上りになつたから国床立命と云ふのやぜ。
然し人間を拵らへるに就ては皮継ぎ息吹き分け大便小便のご守護又た種苗代がなくてはならぬ。其処で其れ等の道具を見出す為めに七度浮きつ沈みつなされた。其れで浮き沈みと云ふやろうがな。
其処で人間の親になつたのは伊邪那岐様此の神様は男雛型種とおなりなされ伊邪那美様は女雛形苗代とおなりなされた。其れから国狭土命皮継ぎ其れから骨のご守護月読命様其れから物を食べても肉になると大便小便出分け其の人は雲読命様と云ふ。其れから又息吹き分けのご守護は惶根命様。其れから粉成すものがなくてはならぬ。即ち歯がなくてはならぬ。其れは大食天命様。其れから人間の食物蔬菜一切のご守護其れが大戸辺命様。
大食天命様と云ふのは人間の子供が出来た時肉縁を切つて下さる神様。其れから大戸辺命様は引き出して下さる神様。世界は木の芽から種一切引き出しのご守護の神様。其れから今申した通り伊邪那岐様は男雛型種となりかり伊邪那美様は女雛型苗代となり其処で十柱をもつて天理王命と証し奉つた。
其れから人間の魂と云ふものがある。之は三寸の鰌これを魂として伊邪那岐様に仕込み夫婦となり種を下ろす所から極楽浄土と云ふ。けれども元は土浄だ。此の世に来るから浄土である。死んだら土浄だ。又た人間の心のことを胸三寸の魂と云ふであろう。これは元々三寸の鰌から出てきたから胸三寸と云ふのである。
其れから伊邪那岐伊邪那美命様が夫婦になつて宿しこみ人間五分から成長して五尺の人間と成る迄には九億九万年かゝつた。即ち九十九年づゝかゝつてゐる。其の時は天の親様が息を吹きかけてお育てになつた。其れで今でも親の息がかゝつてゐなかつたら何処で行くか行つて見ろと云ふやろ。
此処まで世界一列何もかも出来る様になつたのは神様が人間に入り込んで此処まで漸々出来たからだ。其れを知らないからほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまんの出て病となる。

八つの埃には裏と表とあつてほしいと思ふのは働いて丹精して求めたら当たり前だ。それが価もなくてあれほしいこれ欲しいと云ふから埃となる。又た金がなくて物を借りるから掛取りに責められる。凡て米蒔けば米麦蒔けば麦が生えるのが天理である。米蒔いて麦が出たら詐や。
一列は兄弟や。其れを他人と云ふてゐるやろ。其れだから人を倒す様になる。然し何んな種でも其の日蒔いて其の日生えない。段々と其の理が廻って子供が悪かつたり我が家が倒れて来る様になる。其れが可哀愁相だと思召して此の数をお説きくだされたのである。
先祖から伝つて来たものや親の拵へて呉れたものを大切に始末するのは良い。けれども物を出し惜しみ骨惜しみするのは天理に叶はん。
凡て吾が心からしたものだから此の世に来て何時迄も苦しみ働いて何時でも銭が足らない。これをよう思案して見い。
可愛と云ふも其の通り人間は身贔負身勝手する。一列可愛いと云ふは良い。極道や馬鹿やと云ふ隔て心するから隔てられる日が来る。彼んな水くさい人と云つて隔てられる日が来る。マア此う云ふものだ。
其れから又た憎いと云ふは罪を憎んで人を憎まぬのは良い。
怨みと云ふたら我が行き届かぬ所を怨んで通れば良いが同じ侍なら同役を怨むから埃である。
又た腹立と云ふのも其の通り道理から腹を立てゝ来たら尤もだ。私もすまなかつたと云つて笑ですむ。これが天理に叶ふ。向ふも得心するやろ。其れを名々聞き分けせずに勝手の事に腹を立てゝ居る。これは埃になる。其うやらうがな。
又た欲と云ふのも其の通り家業を正直に働くのは結構であるが其れを商売しても欲のこと計りしてゐる。其れ貪欲強欲色情これは大埃だ。
高慢は国の為め人の為めになるのなら高慢にはならない。其れを知つたか振りして眼下に見下すから埃となる。
此の八つの埃を良い方に取れば良いが悪い方にとるから病となつて来る。此の八つの埃をよく聞き分け。
其れから館は神の貸物借物である。これを良う聞き分けなされ。
お伊勢様へ参る時には
ヤイトコセ。ヨイヤナ。アレワイセ。コレワイセ。ソリヤナンデモヨ。
と云ふであらう。お伊勢様に参る時は何を置いても参るでせう。彼れは天照大神宮と云つて伊邪那美命様を祀つてゐる。
其れで世界では五本目の指を子指々々と云つてゐるが彼れは子指と云ふのやないで。小親指と云ふのやぜ。右の親指はこれは国床立命、左の親指は重足命、右の人指し指は惶根命、左の人指し指は国狭土命、右中の指は大戸辺命、左の中指は雲読命、右の薬指は月読命、左の薬指は大食天命、右の小親指は伊邪那岐命、左の小親指は伊邪那美命の御守護である。御膳食べるのも親字を書くのも親の御守護があるから出来る。
其処で人間は元魚であつたのが人間に出世したと云ふので魚丈けは上つたと云ふ。外の者は落ちた死んだと云ふ。其処で一人助け親に孝行、主人なら忠義、兄弟仲良ふと其の通りなされたなら何うでも此うでも結構な所に生れて行く道を神様がおつけ下されてある。貴方が人間助けをすれば神様は一粒万倍に受取つて下さる。」
「成る程其うだ其れに違ゐない」
「此の道は医者要らぬ。坊ん様要らぬと云ふが其うではないで。医者も坊ん様も神様の子だぜ。医者が要るから大学迄出来たであらう。坊ん様は仏法を弘めて来た」
其れ丈け聞いて帰つて来て家内に此う云ふ話を聞いて来たが己は信心しやうと思ふと話すと家内は「貴方誑されてゐる」
と云ふ
「イヤ誑されてゐない」
「月何んぼ要りますか？」
「十銭か十五銭あれば良い。」
「貴方は又たシヤバの云ふ事を聞いて誑されて来たのだ」
と家内が云ふ。
「何んでも良いからお前も一遍来て呉れ」
と云つて家内を連れて明誠社に行つた。家内も神様の話を聞いてこれなら私も入れて貰はふと云ふことになつた。其れから信心しかけて昼は働いて夜は講社をひろめた。
其れから大和へ参つて教祖様にお目通りをすると教祖様は
「よう来なさつた。サア心直して勢出しなさい。京は市やで。偉いことになるのやで。気張りなされ」
と云はれるけれども分かりやせん。又信心するに連れて参ると

「サア／＼京にはな教会といふのが出来るのやぜ。冠を着てヒヨンと出るのやで。内裏雛の奥様見たいの着物をきて出るのやで」
　又た
「世界これから汽車懲役が出来るのやで。懲役といふものは赤い袢天を着て腰縄つけて働くのやで。其れから電信が出来て五分間で用が足る様になるで。又た東京へ十八時間で行けるやうになるのやで」
「ヘイ」
「人間は見てから云ふのは世界並。見えぬ先から云ふて置く。これをよく聞き分けてくれ」
　京都へ帰つたが一つの講を結んで今度と云ふと
「これから授けと云ふものを渡す。万人の中に一となるのやぜ」
と云はれる。
　神様がお前の熱心を見てお働き下さるのだぜ。
　今世界では人を笑つたり譏つたりしてゐるけれども笑はれたり譏られたりして置きなされ。向ふがボロクソに云へば云ふ丈け向ふがボロクソになるのださかい。何を云はれても神様が見てゐる」
　其れから御神楽歌を見せて
「人が何事云はうとも神が見て居る気を鎮め」
と云ふ所を読んで聞かしなされ
「人が何事云つても怒つてはならない。何んぼ信心しても心得違ゐはならん。
　サア／＼何んな茨／＼畔／＼サアそれを越したら細い道もある淵もある。其れが心の道やで
　此の結構な道を例へて云へば百間の金の橋がある。其れを渡つて行けば向ふに万石の倉がある。けれども大抵の人は其の橋の中途迄行つて戻つて了ふから万石の倉迄行けないのやで。シツカリ信心しなされ」
　其れを聞いて帰つて一生懸命に信心してゐると町内では私が家持ちだから放り出しには来ないが度々異見に来る。
「貴方は人が善いから天輪さんに馬鹿にされてゐる」
　何んと云はれても私が聞かないから今度は親に異見せい云つて来る。私の親は
「兄が何んなことをしやうが私共は唯兄に末を見て貰へば良いから兄のする通りにさせて置きます」
と云つて断る。
「オヤ／＼親爺さん迄誑されてゐる」
町内で三人寄ると
「貴方彼れは山子ですで。彼んなものを信心して家迄質に置くと云ふのは誑されてゐるのだで」
と云ふて止める。
「此の道は盲目なら手を引いて通る道である。人を助けるには商売は出来やせん。其処で私は商売を捨てゝ此の道を一生懸命に働いてゐるのだ。其れがいけないのか？」
「其れは結好だが同じ信心するなら稲荷さんを信心した方が結構ですぜ」
と。何んと云はれても私が聞かないから親類二十一軒皆私と交際しなくなつたが今は其う云つた人が皆なボロクソになつて了つて私丈けは甲賀、水口、湖東を入れて二十万からの講社が出来た。其れは私が働いたのではない。神が働いてくれたのである。其の間に前生何んなことをして来たのか分らないが中途で妻に分かれ云ふに云はれぬ苦労をしたが其れでも何んな中でも通つて来た。其の後
「お前は此方へ来るのやで」
と云はれて此方へ本部員として勤めさして戴く様になつた。
　教祖様からは
「公事訴訟に先追従これ大嫌ひ。正直が天理やで」
と云ふ様な不思議なことをタント教へられた。
　私が来てゐた時或る時信徒の人が気狂ひを連れて来た。教祖様頚をかたげて
「これは山子やで。其れは気狂いではないぜ。其れは父親が死ぬ時此の千五百両の金は弟にやつて呉れ頼むと云つて死んだ。其の弟が成人したから其の金を呉れと云ふと兄はないものはやれるかいと云ふ。気狂の真似をしたら気狂ひになる位だから本当にないのだと思はせ様と思つて其の金出すのが惜しさに気狂ひの真似をしてゐるのだ。金はないと云はせぬで。神が呼んで神が入れる。三千八百三十円あると云つてやれ」
と仰つた。其れ迄気狂の真似をしてゐた男はビツクリして駕篭から飛んで出て逃げて了つた。

　其れから此処へ三人の盲女が篭つてゐた。二人は良くなつて行つたが後の一人は良くならない。其れで後に残つた一人が云ふ
「私は眼がよくなりません」
「お前さんは未だ懺悔が出来ないからだらう」
「イエ私は充分懺悔をして居ります」
其の事を教祖様に申上ると
「懺悔してると云ふのなら云つてやれ。其んなら明日人の中で恥を掻せてやると云つてやれ」
　其れから其の事を其の女に云ふと
「私は懺悔をしてゐる」
と云ひ張つて聞かない。
　教祖様の仰るには
「其れは忘れてゐる。何年何月の十一日を思ひ出せ」
　すると其の女は暫時考へてゐたが
「あります／＼」
と叫んだ。
「私は商人の家に嫁入りしておかみさんになつたが息と嫁との留守に近所の若い者と一手になつて子が出来た。其れを下ろしました」
「其れやから盲目になるのだ」
「神様よう知つてゐなさるな」
「神がなすのだ」
　其れを見てゐるから何うでも我が精神をつくつて人を誑す様なことはしてはならん。自分の持つてるものは売つても人を助けなければならんと云ふので皆払つて了つた。
　私の通つて来た道すがらを詳しく云へば兎ても一日や二日や三日では話し尽されません。或る時は牢屋の中へも入りました。或る時は盗人にも入られましたし、或る時は人に倒されもしました。
　私が信心し初めて半期程経つた時金を切る時一私は鍛冶屋をしてゐました一金が目に入りました。人は目医者に行かんじやならんと云つて勧めたが私は神様に願ひました。
　「神様私は忠臣蔵の天野屋利兵衛ではないが男で御座んす。私は前生何んなことをしてゐたか存じませんがこれからは親が何んと云はうが弟が何と云はうが此の道の片腕となつて行きますから何うかお助けください。其れでお助け下さることが出来ない様な神様なら信心やめます。」
と云つて一寸囃しをして御願すると痛みがピタリと止まつて一週間目に直りました。其れが私の心の定まりである。其れから今日迄色々な大難に遭ひました。中には私の講社を取らふと云ふものがありましたが皆尚障りを受けて中にはあやまりに来たものもある。
　此の道は神様仰つた。
「人を立てたら我が立つのやで。なんぼ見下ろしても見下ろせば見下ろす程見下ろされるのやで。この理を聞き分け」
「天理は人を崇めたら我が身崇められる。何んぼ信心しても心得違ゐはならんでな」
「教会へ行つて掃除するのも皆我が徳になるのだで。其れを神様教へて下さるのやで」
　教祖様のお言葉は何でも歌見た様にお説きになる。私がお側に居た時アア…と大きな欠伸をなされ
　イン／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼
　サア／＼月日の云ふこと聞いてくれ
　飯喰も仕事するのも皆月日やで
　口先き追従詐高慢これ大嫌ひ
　これ聞いてくれん残念／＼／＼／＼
と仰せられて其の侭こけてお睡りになつた。　（了）

　附記　凡そ人間に癖のない人と云つてないが其の中に於て最も癖のない人を求むれば深谷氏の如　　き蓋し最も癖の少ない人であらう。氏の人の善い素直な精神は何人をも親しまする力がある。分けて氏の大なる特長は教会の差別に依つて親疎を異にしないと云ふことである。この円満な性格がやがて甲賀、湖東、水口、河原町の四大教会の父たり得た所以であらうと思はれる。考ふべき人である。
　私が第一回目に伺つた時はお客があると云ふので二回目に再び伺つたが今度は快く接して色々有益な話を伺ふことの出来たのは風来の書生にとつてこれより大なる感謝はなかつた。私は氏並に氏の有する教会及び其の子教会の繁栄を切に祈る一人である。（ＲＯ生）

おばさん

飯降　政甚

私は六つの年から此地へ寄せて戴きました。自分は良く覚えて居ます。母と共に櫟本から相乗車に乗つて来たことを。其の時分は六つか其処等ですから腕白盛りで訳が訳らずに唯櫟本に居るより此方が広くもありますし、其の時分は道は余程進んで来て居りますし、以前の困難な時と違ひ大変楽になつて居りましたから子供心に唯良い処へ来たと云ふ考でゐましたが色々前の言葉を聞いて見ますと神様より来いと云ふお話があつたが都合があつて延々して居ました。

其の中に母に連れられて小学校に通ふ様になりました。其の時分は恰度中南と云つて元門を入つた処へ教祖の御居間が出来てゐました。私共が入れて戴いてから後に今教祖殿の横に保存建築になつてゐる教祖様の御居間が出来てから私共は中南に入れて戴いた。現に中南も保存建築にさせて戴いて居るのですが彼れは教祖から私が貰つたのであります。彼れは非常に理がある相です。彼処に門屋がありますが彼の門は中央が門になり向つて右が倉左が教祖の居間（十畳）になつてゐました。彼の門を建てる頃は未だ／＼本部は困難でありました。

彼の門屋は私の父が建てたのですが

「此の門屋は政甚にやるのやで」

と仰つたことを聞かせられてゐます。

大抵の倉に窓無しの倉つてありませんが彼処の倉丈けは窓無しの倉であります。彼れは道が進んで行くと勤めの人衆の生姿をおさめる所だといふことであります。

私は非常に有難い因縁で腹の中から名前を戴きました。私の先代が政治郎と申し五つで出直した相で御座います。其れから女計りでしたが神様が貰ひ返してやらうと仰つて名前をマサジンとつけて下さいました。

マサジンと云ふのは

「木では靭より堅いものはないから名を政靭とつけよ」

と仰せになつた相ですがジンと云ふ字は何んな字を書けば良いか分らぬから役場で政甚とつけたのだ相です。

其の頃は理も浅いから非常に疑ふて居りました相ですが生れた子が男の子でありましたから非常に驚き其れから信仰も進んで参りまして如何なことがあつても道の為めにせにゃならんと決心の度を固めたと屡々其の事を話されました。

私共の子供の時分は教祖様とは申しません。私等はおばさんと申しましたことが御座います。何にした処で始終学校から帰りまして行くと色々なものを戴く其れが何より楽しみでした。

勿体ないことですが私は三度も五度も教祖様に負はれたことがあります。

教祖様は私のことを

トンヨ／＼

と申されました。其れは私の先代の政治郎が先代に留治郎と申して教祖様の長女政子様の腹に生れて居つた相であります。其の頃はお政さんもお地場に居られましたからよく戯談に

「お前は私とお里さんの合ひや子（仲間の子）や」

と云つて非常に可愛がられました。

彼の方も教祖の子だから精神は良いけれども酒を呑むと酒癖が悪くて女にはあるまじき振舞があつたのです。後に彼女は教祖から「埃の館」として残して置いたと仰せられました。矢張り教祖様の子でも何んな子もあると世界一列に縮めて見せたのだと思ひます。

お政さんの次がお春さん。お春さんの次が小寒さんであつた。お春さんは前管長様のお母様であります。其の方が早く亡くなつたから後へ小寒様が御いでになりました。其の時教祖様は行つてはならぬからと仰つたが後で出来た子供が可哀相だからと云つて嫁がれた。教祖の御言葉を用ゐずして行つたから早く逝かれたらうと云はれてゐます。

小寒様は道の細道の頃長男の秀司様と色々憂き目を見一家を支へて居りました。後で若かい神様と申上げて居りました。

隠くしたり包んだりすることはよくないことでありますがこれ迄は秀司さんにしろ松枝さん（秀司様の夫人）にしろ善いこと計り書いて悪いことは書いてないが秀司さんにしろ松枝さんにしろ何うも仕様のない方らしかつた。其の為めに教祖様の心を休ませられたといふことはなかつた相です。其の証拠に跛を助けてやりたいと云つて足の跛のお勤めを半月程行り私の姉等もお勤めに出ました相ですが秀司様は

「其んなことしても何に助かるものか」

と云つて息の切れる迄反対で本当に懺悔をして行かれたのではない相であります。

お崩れになつたのは今の門屋の入つた所で御座いますが其の時私の父が
「親さん先生が今息をお引き取りになりました」
と申上げると教祖様は
「アヽ其うかい」
と云つて一段高い処から降りてお出でになり秀司様の枕許に立ち額をゴロ／＼として
「最う剛情は張らせんやろ。張れるかい。張れるなら張つて見いや」
と云ひ、内の父を振返つて
「伊蔵さん。内の態を見ておくれ。金を溜めると此の不始末だで」
と涙一滴こぼさず元の所へお上りになつたといふことであります。
其の時父の感慨は何んともたとへるにも例へることが出来なかつた。親様の御精神は此う云ふ所にあるかと無量の感慨に打たれたといふことを父から承りました。
松枝さんのおかくれの時は子供心によく覚えて居りますが腹が膨れて口からは泡が始終出て居りました。亡くなつた時其の事を教祖様に申上ると御休息から中南一松枝さんは中南で亡くなりました一へお出でになり
「偉い溜めたな／＼。何ンぼ溜めてもあかせんで」
と仰せになりました。其の時は私の未だ子供の時分でありますから
「偉い銭入れてあると云ふことですが彼れ切つたら偉い出るで」
と云つて母から偉い叱られたことを覚えて居ります。八つ位の頃は其んな馬鹿なこと考へてゐたと思ひます。
松枝さんが亡くなつてから一年も経たないうちに教祖様がお湯を使つてお居でになり姉が教祖様の背中を流して居りますとくづ屋葺きの屋根の廂の上に鼬がゐた。教祖は其れを見て
「アヽ松枝帰つてゐるぜ」と云はれたと云ふことを聞いて居ります。
「彼女は再び人間界に出さんが此処より何処へもやらん。屋敷の中に置く」
と仰せられたといふことですが成る程屋敷の中に居ります。私等子供の時は松枝さんを姉さん／＼と云つて居ましたが其の鼬にあふと
「アヽ姉さん／＼姉さん居るで」
と云ふと今の夫人様　　其の頃はいと（お嬢さん）／＼と云つてゐましたが
「甚さん又た彼んなことを云つて私をいぢめる」
と云つて泣かれたことを覚えて居ります。（終）

付記　私は此の文を書く時始めて飯降氏に面会したのであるが氏に接して見ると矢張り御本席の子だけある。頭が大きい。而して最も宗教家らしい気分に富んでゐる。
今は思想の上からか生活の上からか兎に角蔭の道を通つてゐられる様であるが氏の為め道の為め折角の自重を祈る。（ＲＯ生）

眼のお助け

増井　りん子

増井りん子様は一旦失つた眼のお助けを戴きましてより熱心に信心し其の後針の心を許され御息きの御授けを戴いて居る方で本部員中唯一人の婦人であります。
此の度「感謝と記憶」とを書くについて特別にお話を承りたいと思つたが何分多忙で緩然御伺する暇がない為め以前特別私の為めに山名迄お出でを願つた時伺つたお話を掲げることに致しました。

（ＲＯ生）

私が此のお道に入り眼のお助けを戴いたのが明治七年であります。其れから昼夜御詰め合ひいたしました。御承知の通り誠にいろはも知らない不行届の者で御座いますが神様は
阿房が好きやで
と仰せになり馬鹿なものでも今日迄御使ひ下され何んとも恐れ入る次第で御座います。
御教祖様のお生れになつたのは寛政十年四月。御生なされて僅か三歳の頃で御座いますが人々は何も結構なお方様と存じませぬからあゝ不思議なお方であると感心致して居りました。
御年が優り六歳におなりになりますと母親の側にて裁縫を見習ひ遊ばし糠袋巾着等をお拵らへになり出来上つたものを御友達に上げて其の友達が喜ぶのを見てお楽しみなされました。
其の頃折々外へ遊びに出ますれば近所の人達が自分の子供が無理を云ひまして難儀をい

たして居るのを御覧になつて御気の毒なものと思ひ御自分も六歳頃では玩具や宝石が欲しい御年頃でありますのに其れを無理云ふ子供にやり其の子供の心を慰め其の親の喜ぶのを見てお喜びなされました。
　九歳の年より三ケ年の間御手習遊ばされ余る時間で裁縫を遊ばされ十一歳にて一人前すぐれにお成り遊ばした文化七年の九月当所お祭りに前川家と中山家とは御親類の間故お立ち寄りになりましたが其れから縁談が調ひ十三歳の時五荷の荷物を整へて中山家へおいでになりました。
　中山家は庄屋敷の紋附様と申しまして下女下男も沢山居りましたが教祖様は何をせんと仰やられず何んでも引き受けておやりになり通常人の二倍の仕事をなされたと申すことで教祖様のなさらぬ仕事は荒田起しと溝掘り丈けだと云ふ事で御座います。
　余りお働きになるので御両親から
「其の様に働いては疲れてはならんから」
と申されまするとと教祖様は
「これが結構で御座います」
　其の頃は殿方も一般御頭をお結びになりましたが教祖様は自ら砥石剃刀をお扱ひになつて父親様の御頭をお剃り遊ばされました。
　御自分の身粧装は荒唐の風をし物見遊山に半日も御出でになつたことは御座いません。其れ丈け僕に与へて喜ばれました。殊にお祭等には其弁当をお拵へになり其れを持たせて遊びに出されました。
　下女に致しましても御暇を戴く丈けでも結構で御座いますのに其の上御自分の物を貸し御自分の手を下ろして髪を結ひて御やりなされました。
　十六歳になりますと庄屋敷の紋附様と云はれる大世帯を御請け遊ばしました。
　或る本には倉に盗人が入つて米を盗み出したと書いてありますが其うでは御座いません壁を毀ちて「サシ」を入れて出してゐる所を捕へたので御座います。
　其の時盗人は教祖様の御説諭に感謝して帰り本心に立ち帰つたといふことであります。
　二十四歳の時御妊娠中母上様御病気になりましたことなれば何処へ行きたいと仰せられます。自分は御身重でありながら何処へでも背に負ふてお出でなされたと申す程御孝心の方で御座います。
　二十八歳の時政子様、三十歳の時安子様、三十四歳の時春子様、三十六歳の時常子様、四十歳の時小寒嬢様を御出産遊ばされましたがお出産の度毎に乳が沢山御座りますから誰彼の区別なく乳をお与へ御助けなされました。二女安子様を御出産遊ばした時他人の子を御預りになり自分の子を他人に預けられました。折悪しく隣村に疱瘡が流行いたし其の預り子もこれに伝染し遂に黒疱瘡に変り医者も手放す様になりました。教祖様は何うぞして此の預り子の生命を助けんと思召し
「自分の子供一人丈け残し後二人を差し上げます。さる代り此の子一人の寿命をお助け下さいまし」
と申し上げますとさしもに思き黒疱瘡が見る／＼間にお助けを戴きました。其の後間もなく安子様が四歳にてお引き取りになり次に常子様が三歳で御亡くなりになりました。此の常子様と申す方は安子様といふ方の生れ変りで一度に二人迎ひ取つては気の毒だと云ふので魂を入れかへて御迎ひとりになりました。
　教祖様の真心は日々人を助けたい人を救ひたいと云ふ助け一條の御心にてお通り下されました。
　或る時女乞食が門に立ちました。教祖様は其の乞食を御招き遊ばし粥を与へ沢山食べさせられた。暫時しますと子供が泣き出す。其れが乳呑み子故自ら其の子を御下ろし遊ばし御乳をお与へになつた。其れから御自分の着物を御出しになり
「此の着物を持ち歩いて人に疑はれてはならん。纏ふて御いでなさい」
と云つておやりになります。
「一杯の粥も戴けぬ身の上なるに結構な物迄戴いて誠に有難う御座いました」
と乳を戴く間に着物を纏ひ、其の間に子供は乳を放すと御自分の子につくつた御布団を其の子に与へました。
　人に依ると人に乳を呑ませて其の真実なるに依り神憑があつたと云ひますが其うではありません。
　御屋敷の因縁と教祖様に依つて御憑りがあつたので御座います。
「人間を始め出したる屋敷なり其の因縁で天降りたで」
　此の屋敷は四方正面鏡屋敷と云ひ又た教祖様は「手本」とも「雛型」とも申されて居ります。内も外も隔てないのが此の道で御座います。
　神憑がありましてから
「神の社にする程に通れる限りは貧乏の道を通れ」

と云ふので五荷の荷物を始め中山家のものも皆施して終ひには唯つた一枚の着物が残つた。其れを人の通る所に出して置くと
「アヽ結構な着物が落ちて居ります」
と持つて来る。すると教祖様は通り合せたものなら貴方にお授けになつたのでありませう」
と云ふと其の人は御礼を云つて行つた。
「アヽ喜ばしいことをした」
と御喜びになる。其れから周囲の立ち屋を払ひ終ひに本家を取り払らひ田地は質に入れたり売つたりして人にお施しになつた。誰か金が要る人が通ると其の人の通る所にお金を置く。其の人が拾つてこんなものが落ちて居りますと告げると
「其れは貴方に授かつてゐるのでせう」
　昼は御助け致し夜分は糸を紡ぎ針仕事を致し、仕事のなき時は木綿を織つて其れを人に与へて楽まれた。其うかと思へば日々の間に無心を云ふてくる者もある。
「アヽ世の中の子供は何も分らんで人に難儀をかけるが人を難儀さすならば自分も難儀する事が出来て来る。理が廻る。可哀相や」
と仰ります。
　其れ計りではない度々警察や監獄へ御苦労下され明治八年がかゝりで其れから十八回も御苦労下されました。
　十日間の拘留の時なぞは御枕はなし、湯文字を解いて其れを枕に遊ばしました。左様の所へ入るのは悪人故火の気はありません。御老体には布団一枚あるでなし御咎人ではないが咎人同様の着物を御召し遊し日々其の中にて御住ひ下さるのは微塵も御厭ひなく夏向きには暑いけれど暑さを凌ぐものもなく蚊に食はれても厭ひなく御苦労下されました。其の御恩は海に例へる時は幾百尺の海で御座ります。
　又た秀司様に小寒様は茄子をつくり芋をつくり薪を荷ふてお売りなされ誰も買ひ手がない時は頼んで貰つて貰つても良いからと仰やる。其うすると教祖様は
「アヽ頼んで貰つて貰つて呉れたか」
と御喜びなされたことが御座ります。
　小寒様は髪は結ひたいけれども結ふ金はなし、其処を足納してお通りになつたのはお若い方には中々出来ぬことで御座ります。
　又た教祖様は
「成人して縁についてから裁縫が出来ぬと云つてはならぬ」
と云つて近所の子供を集めてお教へになつた。
　さて此の御道に於て何が頼りかと申しまするとお道すがらの理が頼りで御座います。
「苦しみが楽しみ」
　足納と云ふ理を治めまして其の理を定規と致しますれば大儀大相も御座りません。
「足納と云ふことは第一やで。足納が足らぬと案じが出る。案じが出ると埃が出る」
と御聞かせ下されて居ります。
　私は四十年余り前に眼を助けて戴き本部へ帰らして戴き日帰りする日もあり一夜とめて貰うこともあります。
「雨が降ります故最う一晩御泊めなされて戴きたい」
と申上ると
「足止め／＼」
と笑つて仰せになられます。
　三島へ帰りますと途中で御腹が痛む。
流れの水を呑んで神様の方に向つて願ふと良くなる又た良く又た痛む。其う云ふことが二度三度御座います。帰つて来ますると
「おりんさん又た帰つて来たぜ」
其れから
「此処は何ふですぜ」
と仰ります。柔しき言葉で仰つてさ下ります。
「此処は生れ故郷やぜ。彼所は行くのやぜ」
と御聞かせになりました。（終）

國六分の人を寄せる

諸井　国三郎

　諸井国三郎氏は遠州広岡村の人。明治十六年に此の道に入つてから今年まで三十有四

年。一旦道の上に一大事のある時は十里の道を跨にかけて走せ参じた此の道の柱石の一人である。
　其の為めに神様よりは
　国六分の人を寄せる
と云ふ有難いお言葉を賜はり令嬢には生れて一ケ月目にお水のお授けがあつた。今日教会の数も数ある中に神様よりお面道具の御許しになつたのは氏が創立した山名大教会あるのみである。
　氏は今年七十七歳の高齢に達し現在本部員中の最高齢者であるが而かも其の元気の溌剌たる恰かも壮者を凌ぐの慨がある。道の為め氏の静養を祈る。（ＲＯ生）

　私が始めてお地場へ登参したのは明治十六年三月である。其の頃御内と云つては教祖様に管長様と夫人様丈け。未だ御結婚前で夫人様より管長様をお呼びになるには兄様／＼と申して居られました。先生としては仲田儀左衛門（サユミと云ふ名を教祖より賜つた）此の人の御取次で教祖様に御拝顔を願つた。
　其の時教祖様の仰るには
「諸井さん手を出して御覧」
と云つて畳の上に掌をつけてお見せになる。其の通りにして出すと私の手の甲の皮を右の人指し指と小指とで押へて釣り上げ
「此うして御覧」
と云つて今度は御自分の手の甲をお出しになる。けれども私には何うしても其れが出来ない。其れで
「恐れ入りました」
と申上ると今度は
「私の手をお持ちなさい」
と仰つて私に御自分の手頸を握らせになる。而して御自分は又た私の手頸をお握りになり
「サア確つかり力を入れなさい。然し私が痛いと云つたら離して呉れるのやで」
と仰る。
　其れで此方で一生懸命に力を入れて教祖の手頸を握ると力を出せば出す程此方の手頸が痛くなつて来る。
「もつと力を入れなさい」
　出せば出す程此方が痛くなりますから
「恐れ入りました」
と申上ると
「其れ限りしかないのかい。神の方には倍の力や」
と云つてお離しになる。
　今度は背向きになつて両手を背中で合掌に組み
「諸井さんこれ出来ますか？」
と仰る。自分も背向になつて一生懸命にやつて見るが何うしても出来ない。其れで又た
「恐れ入りました」
と申し上げるとお笑ひになつて
「誰にでも出来るのやがな」
　誰にでも出来ても此方は其れ丈けの徳を積んでゐないのだから仕方がない。
　其の時はお地場に一日滞在した限り帰つた。
　第二回目の登参は十六年の九月である。此の年は偉い干魃で田地は皆亀裂を生じ百姓は皆困つてゐた。
　其の頃大工をしてゐた飯降御本席は建築中の教祖御休息所の仕事をすまして豆腐屋の前の腰掛けに涼んでゐられると急に大変なお障りが来た。其の事を奥様から教祖様に申上ると教祖様は
「其んなビツクリ周章てずとも良いで」
と仰せになり詰所にゐた仲田さんを召んで
「早く扇を伊蔵さんに持たせなさい。其れから遠州の講元さんも連れておいで」
と仰せになつた。其れで仲田さんが直に二階に登つて来て
「遠州の講元さん。今伊蔵さんが大変の御障りで神様に伺ふと扇を持たせろと仰せになり其れから遠州の講元さんも連れて行けと仰るから一手に行つて下さい」
と云ふから私も急いで二階の飯降様の所へ駆けつけて見ると蚊屋の中で手を握つての苦しみである。然し不思議なことには仲田さんが扇を持たせるとウンと云つて顔も確つかりし身体もチヤンとして神様がお降りになつた。而して
「サア／＼珍らしい事や／＼国へ帰つて勤めをすれば国六分の人を寄せる。なれど心次第

や」
と仰せになつてお上りになつた。其れと同時に飯降様の御苦しみも直つた。
　私共（私と木村林蔵）がお地場へ着いて四日計り経つと伊勢へ廻つた清水重作外五名の者が到着した。丹波市迄来ると清水が云ふには
「聞けばお地場では此の頃矢ケ間敷くて警察が参拝人を止めてゐるといふ話だが何う云ふ具合だか一つ様子を探つて見てのことにしやう」
と云ふと其の五人の中の守屋国蔵といふ男が
「其うか己等其んな所だとは知らないで随いて来た。其んな警察で参拝人を止める様な所なら己等参拝しないでも良いから直ぐ帰らう」
と云つて怒り出した。其れを漸くなだめて豆腐屋迄連れて来たが
「己は帰る」
と云つて中々聴かない。帰るにしては国蔵一人返へす訳に行かないから誰か随いて行くかと云ふことを相談したが次の日になると国蔵が急に胸がつかへて飯が喰へなくなつた。明くる日も食へない。又た明くる日も喰へない。食つても皆吐いて了ふ。到達三日間と云ふもの寝通し。十一日の夕方に御地場より遠州の参詣者に皆な来いと云つて使が来た。早速行くと神様（教祖様）より
「御苦労であつた」
といふ御言葉があり、続いて月日のお模様のついた陶器の三つ組の御盃で御自身御召し上りになり後で其の御盃をお上げになつた。夫から守屋も飯が喰へる様になつた。それで守屋も恐れ入つて申訳がなかつたと云つて懺悔をした。
　其の前に清水外五名の者が丹波市へ着いた夜お地場では神様がお下りになつて
「サア／＼遠い所から遥々参詣に来て見れば野原の様な河原の様なさもない所と思ふ者があるで」
とお聞かせになつた。後で守屋国蔵の精神を予め神が仰せになつたのだと云つて皆な恐れ入つた。
　第三回目の登参は明治十七年の一月である。途中伊勢参宮をする心算で二十一日に内を出立し途中豊橋の町を通ると提灯屋がある。其れから私は思いついて
「これは一つフラフを拵つて立てゝ行かう」
　早速大幅四尺の天竺木綿を買つて真中へ日の丸を書かせ其の中に天輪王講社と書き其の下に遠江真明組と大きく書かせて其れを立てゝやつて来た。お地場に来ると表門通りの四辻に巡査が一名待ち受けてゐた。其の前を通らうとすると巡査が
「コラ待て」
と云つて立てゝ来た旗を抜きとつて
「此の旗は何か天輪王へ来たか？」
「これは講社の目印。天輪王へ参りました」
「降りろ」
「今其処まで行けば降ります。車豆腐屋迄やれ」
　車夫が引き出すと巡査は旗持ちになつて随いて来た。
「天輪王へ来るには何か持つて来たであらう。此処は参り所ではない。婆々が赤い着物を着て愚民を迷はして金平糖を喰へば腹痛が直るとか水を呑めば腹下りが止るとか云つて居るから大阪府で厳重に止めて居る。何故来たか直ぐ帰れ」
「拙者は何も持つては参らぬ。昨夜扇屋へ一泊すると女中が此の旗を見て天輪さんへお参りですかと尋るから天輪さんが何処にあるかと聴くと三島にあります。お婆様で御座いますと云ふから其んなら明日人力を雇つて案内をさして呉れと申し附けました。只今参りますと貴方が天輪王へ来たかと申されたから是幸ひと思ひ参りましたと答へましたが実は始めて聞いて喜んで参りました次第であります」
巡査
「貴様何処か？」
「旗にある通り静岡県遠江国天輪講社の講元を父の代から致して居るが拙者父に死に別れて未だ天輪王が何処にあるか知らなかつたが図らず此処に天輪王のあるといふことを聴き尋問致したいと思つて参りました。」
「静岡県何ちゆう？」
「静岡県は山名郡広岡村……」
「名前何ちゆう？」
「未だ番地が御座りません。無番地。諸井国三郎」
「む番地ちゆうが有るかい。六番地か？」
「イエ無番地」
「無番地ちゆうが有るかい。不都合なこと云ふな」

「む番地とは無番地と書きます。拙者も役場へも勤めて居る人間で詐は申しません。拙者此の度新宅を設けたから戸番の改正迄無番地として置きました。疑ひなさるなら静岡県庁へ照会なさい」
「参詣はならぬ。帰れ」
「拙者は素より参詣には参りません。当所の婆々でも爺々でも良いから天輪王の由来を尋問したいと思つて参つたのだから得心の出来る迄尋問する心算ですから帰りません。其の代り拙者の滞在中は此の旗を此処の表へ出して置きますから御用の節は何時でもお招きに預りたい。お招き次第警察へ上つて何んなことでもお答へ致しますから。又た此の旗の無い時は立つたものと心得て戴きたい」
　巡査も大変弱つて手帳に住所と姓名とを書いて帰つたが其の翌日（旧正月の元日）来るかと思つたが来なかつた。其の日の朝丹波市の西尾と云ふ酒屋が来て云ふには
「今日は警察は参りません」
「何故か」
と聞くと
「昨夜警部と部長と巡査と三人で色々話をして居ましたが明日は止めに行かんけりやいかんでと一人が云ふと一人は放つて置いたら五ケ国も七ケ国も集まるだらうから止めに行くが良からうと云ふ。其うすると巡査が幾ら五ケ国が七ケ国の者が集まつても今日の様に頭を抑へれば尻に抜ける。尻を抑へれば頭に抜ける。ヌベコベ／＼問答しても終ひに立ち場がない様な事に成つても困るから考い物で御座いますと云ふと警部が其んなら明日は放つて置かうか？　其れがよからうと云ふことでありましたから今日屹度来ません」
と云つて行つたが其の前の晩即ち巡査と問答した晩神様がお出でになつて今酒屋の話して行つた様な警察の三人の問答をお聞かせになつた。
　私が巡査と問答をして居る時には豆腐屋の前は人で一杯であつた。が余り其の場の様子が険悪であつたので御本席様も大変御心配なされ、御家内様は豆腐屋の裏へ廻つて立ち聞きなされたといふことである。これが為めに
「遠州の講元は偉い！」
と云ふ評判が村中に広まつた。此の時実地を見聞した人々の中で今生きてゐるのは村田幸助（豆腐屋の弟）足達秀次郎北村平四郎（時計屋の老人）等の人達であるが今でも此の人達に逢ふと昔話の一つになつてゐる。
　其の前に私共がお地場に到着する前に予め私共の来ることを神様御承知であつて
「アヽ／＼だるい／＼此うだるくては叶はない。遠方から子供が来るで。アヽ見える／＼フラフを立てゝ来るで」
と仰せられたといふことである。
　これから私がお地場に参ると必らず刻限があつた。其れで
「又た遠州の講元さんが来たから神様がお出でになるで」
と云つて他処から来た参詣者も足を止めて一日滞在すると云ふ風であつた。
　此の時お地場に滞在したのが二十七、二十八、二十九、三十、三十日に大阪の真明講の講元井筒梅次郎氏から教祖に向つて（其の時高井猶吉氏も同席した）
「神様へ恐れ入ります御願ひで御座りますが遠州では郡長も懇意で御座りまして咄し致して置きまして十二下り立ち勤め出来ます故御神楽御道具を御許しを願ひたう御座ります」
と御願申上ると教祖様は暫時ジツとして御居でになりましたが
「サア／＼許す／＼私が許すでない。神が許すのやで」
と仰せになつて御許しになつた。此う云ふ事は殆んど前後に例のない破格の恩典であるから一同非常に喜んで早速大阪へ参り梅谷四郎兵衛氏に御神楽道具の調製を頼んで遠州に帰つた。
　此う云ふ具合に神様から色々破格の御引立を蒙つたが明治十九年四女の秀子が亡くなつた時お地場に来て
「何か違ひがありますかお聞かせ下されたい」
と云つてお願すると
「小児の処事情があるから尋る。三才も一生地場一つに心を寄せよ。地場一つに寄せれば一方折れても三方に根が張る。二方折れても二方根が張る」
と云ふお指図を戴いたが其のお指図を戴いて帰つて十月目に家内が妊娠して出来たのがおろくである。
　おろくの出来る前にお地場へ上つて安産の御願をすると教祖様御自身に御供を包んで下さらうとしたが其れを側にゐた高井さんが
「私に包ませて戴きます」
と云つて紙を曲げて御供を包んだ。其れを教祖様は良いとも悪いとも仰らず黙つて見て御居でになつたが高井さんが包み終へると別に紙をお出しになり

「鋏を貸してお呉れ」
と云つて鋏をかりて紙をチアンと切り四半斤計りの金平糖を御包みになりて私にお手づから下され
「これが産屋許しだで。これで高枕もせず腹帯もしないで良いで
　今は姉の時だでな柿を食べても大事ないで。
　余つたものは人にやつても良いで」
　凡て教祖のなさる事やする事にこれはいかんと仰つたことはない。
　赤衣様をお下げになるにも御休みになつてゐる一畳の台の下から御出しになり
「これは私が着せて貰ふたのであるが赤衣には中に月日が篭つてゐるから明るい処が見えるのやで」
と仰つてお下げになる。お下げになるにも盆に載せるとか下に置くといふことはない。必らず手渡しにお渡しになる。
　私が戴いた時は南の門屋にお居でなされたが其れを祭れとも拝せとも仰らない。唯此の中に神が篭つてゐるでと柔しく仰る丈けである。
　其れから直接聞かして戴いたことでは物参りになつても乞食にくれ／＼と云はれた時一文をやらうと思つて財布を開けて四文銭さへなかつた時には決してやるでないで。今日は小さいものがないから今度やるでと言葉に文を残して帰つておいで
　乞食は四文貰へば喜ぶが神がお受け取りがないから」
と云つてお聞かせになつた。
　又門屋にお居でになつた頃門前に乞食が沢山居るのを御覧になつて
「アヽ門前に沢山乞食が来てゐる。けれども彼等を見てうたていと云ふでないで。彼れは前生彼んなものは食べられない。こんなものは食べられんと云つて食物を放つたから理が廻つて来て此の世で人の捨てたものを拾つて食べなければならない様になつたのだで。可哀相なものだと可愛がつてやつてくれ」
とお聞かせになつた。可哀相なものだと云ふのは精神が可哀相だと云ふのである。
　其の頃はよく警察で来て拘留に処したり罰金に処したりしたが教祖様は
「皆んな警察や巡査と云ふと怖がつてゐるがな何も怖がつて居ることはないで。彼れは何も知らない四つか五つの子供見た様なものだで。此処に止めに来るのもな皆んな役で来るのやで。真に心から止めに来たら息が止まるで」
と仰せになつた。
　何時伺つても
「良ふ来なされた。内には皆な変りはないかい」
と仰る御言葉に何んとなく慈愛が篭つてゐる。
「有難う御座ります。神様の御蔭で結好に通らして戴いて居ります」
「其りや結好やな」
　既にお話と云つて下されないでも仰せになるお言葉が一々深い意味をもつてゐる。
「何んでもな人を助ける心なら何を云はないでも自分に帰つて来るで」
と精神を直せとも何んとも仰やらないけれども味つて見れば其処に無限の意味がある。
　殊に数多いお言葉の中に一生忘れないのは
「道について来ても足場になるなよ／＼。足場と云ふものは普請が出来ると取り払つて了ふ何んでも国の柱となれ」
と仰せ聞かせ下された。これ等は忘れやうと思つても忘れることの出来ないお言葉であるが此の他にさもない御言葉を御聞かせ下されてもあゝ有難いなと自然に浮ぶ様になる。其れだから御教祖様に直接接した方は普断に有難いお言葉を戴いてゐるから教理治め方が違ふと思ふ。
　当時のお話と云つては重に泥海時代の御事で御本席時代の様な詳しい事はお聞かせがなかつた。
「世界には元々を聞かしたことがないから仕方がないが此の侭居ては親が子を殺し子が親を殺しいぢらしくて見てゐられぬ。其れで元を聞かさにやならん」
と仰つて月日二柱の神が道具雛型を見出して人間をお拵らへになる道すがらをズーとお説きになり
「此う云ふ訳だから何んな者でも仲良くしなければならんで」
と云ふことをお説き聞かせになつた。
　教祖お崩れになる前年即ち十九年の秋には天理教会設置の運動の為め鴻田、清水、増野の三氏と築地五丁目に宿をとり古記／＼と云つた古い記録を集めて神様のお言葉と人間の想像とを区別して一冊を神道本局に差出し一冊を清水氏が持つて帰つた。これが十九年の十二月である。
　其の中に増野氏はお地場に用が出来て帰る。其の他の同行者も夫々長く東京へ止つてゐ

ることができなくなり清水氏は船で神戸へ行く。私と鴻田氏は江の島鎌倉を経て遠州に行き途中名古屋に匂掛けをしたのが愛知分教会の元である。
　此うしてお地場に帰つて見ると教祖はお休みになつてゐる。弟子達は毎晩門をしめて水をあびてお勤めをした。其れが旧十二月の十一日になつて急に御様子が変つて来たので御本席を以つて伺ふと
「サア／＼もう充分につみ切つた。是迄何にようの事も説き聞かしてあるが解らぬ。何程云ふても解るものはない。これが残念。よく思案せよ。さあ神が云ふ事嘘なら五十年以前より今迄此の道続きはせまい。今迄云ふた事見えてある。これで思案せよ。さあもう此の侭引いて終うか納つて終うか」
とお指図があり其れと同時に教祖様の御身体は冷めたくなつた。其れに驚いて十二日には御詫び勤めをした。然しお勤めをすると云つても門を閉めて夜分内々にすることであるから神様の思召に叶はないと見えて何も召し上らない。其れで十三日の夜一同が揃つて相談の末世界並二分お道八分で心を入れてお勤めさして戴くといふことに決めると翌日は大変御気分も宜敷く御飯もお上りになつた。其の為め皆心を緩めて相談もしないでゐると神様がお降りになつて
「サア／＼年経つて弱つたか病で六ケ敷いと思ふか。病でもない弱つたでもないで。だん／＼説き尽してあるで。良く思案せよ」
と云ふお指図があつた。而して十七日には大変御気分が悪くなつた。其れで又た一同が驚いて御本席様に御伺すると
「サア／＼これ迄何によふな事も皆な説いてあるで。最う何うせ此うせは云はんで。四十九年前よりの道の事如何なる道も通りたであろふ。訳りたるものもあろふ。助かりたるもあろふ。一時思案。思案するものがない。遠いも近いも皆引き寄せある。事情訳らん。最う何うせ此うせの指図はしない。銘々心次第。云ふてあかん。サア銘々心次第。最う何も指図はしないで」
といふお指図があつた。其れが十七日の午後の三時頃である。伺つた間は六畳で梶本様に前川様に管長様の三人である。私共は次の間で伺つて後で二階で書いたものである。
　其の時其の場に列した人達は前川菊太郎、梶本松次郎、桝井伊三郎、鴻田忠三郎、高井直吉、辻忠作、梅谷四郎兵衛、清水与之助、増野正兵衛の諸氏と私とで十人である。
　此の御指図に驚いて一同が管長様に心定めを御願すると
　マア考へて
といふ仰せであるが何時迄経つて返事がない。其れで夜の九時頃から再び相談を始めて徹夜して管長様の御返事を待つたが御返事がない。遂に夜の明ける迄其うしてゐた。其の時相談の仲間に入つたのが鴻田、桝井、梅谷、増野、清水の諸氏と私であつた。
　其れから十八日になつて一同が前川様と梶本様の手を経て管長にお伺ひすると
「今日は真之助（管長）さんは酒を召し上つてお休みになつてゐるからいかん」
と云ふ。其れで十九日には御返事があるだらうと思つても夜になつても御返事がない。此うして三晩寝ずに相談した。漸く二十日の明け方の三時頃に前川様と梶本様との二人が管長様に附き添ふて神様に御伺すると云ふ事で私共は次の四畳半で襖の外で聞いていた。
「如何なる処、尋る処。解りなくば知らそふ。確つかり／＼聞き分け。コレ／＼良ふ聞き分け。最うならん／＼。前以て伝へてある。六ケ敷い事を云ひかける。一つ事にとつて思案せよ。一時の所何ういふ事情聞き分け」
といふ御指図があつた。其れから中山様から
「前以つて伝へてあると仰せになるは勤めの事で御座りますか？　勤め致すには六ケ敷事情が御座ります」
と申上ると
　神「今一時に運んで六ツケ敷いであろふ。六ツケ敷と云ふは真に治まる。長ふ／＼四十九年以前から何も分らん。六ツケ敷と云ふ事あるものか」
　中「法律がある故勤め致すも六ケ敷う御座ります」
　神「サア／＼答へる処それ答へる処の事情。四十九年以前より誠と云ふ思案があろ実と云ふ処があろ。事情分かりあるのかないのか」
　中「天子様と云ふも神様の御守護で此の世を司り下さるで御座りませふ。神様の仰を守れば天子様の道理に背きます。依て両方の立つ様に御指図を願ひます」
　神「訳らんではあるまい。元々よりの段々の道すがらサア／＼一時応へる処何うでも此うでも押し切る事情いかん。唯一時ならん／＼。今と云ふ今先の道を運ぶと一時」
　中「明日迄の所御猶予を願ひます」
　神「サア／＼一度の話を聞てチアンと定め置かねばならん又々の道がある。一つの道も如何なる処と聞き分けて唯止めるはいかん。順序の道／＼」
　中「講習所を立て一時の所勤めの稽古をさして貰ひたう御座ります」

神「安心が出来んとあるならば先づ今の所夫々今の所談事／＼と云ふ処サア今と云ふ今と云ふたらサア抜きさしならんで承知か」
中「勤め／＼と御急き込み下さいますが唯今親様の御障りは人数定めで御座いましやふか何うでも勤め致さねばならんで御座いませやか」
神「サア／＼夫々の処心定めの人数定め事情なければ心定まらん。胸次第。心次第。心の得心の出来るまでは尋るがよかろふ。降りたと云ふたら引かんで」
中「教会本部を置き其上は神様の仰は如何なる事も致します。夫迄の御猶予を願ひます」
神「サア／＼事情なくして一時定め出来難い。サア／＼一時は夫々是三名の処で屹度定め置かねばならんで。何れ願ふ処其処は任せ置く。必らず忘れぬよふ」
中「有難う御座います」
神「サア一時今から今と云ふ心三名の心確いかりと心合せ返答せよ」
中「第一此の屋敷の道具元の魂生れ出てあるとの仰此の屋敷をさして此の世界始まりの地場故天降り無い人間無い世界を拵へたとの仰一天万乗の君様をして神の御魂と心得居ります所我々同様魚介の魂との仰右三ケ条一統の者より御上様へ申上ましたら我々何んと答へて宜敷御座りましやうか差支ます。人間は法律に逆ふ事は叶ひませぬ」
神「月日あつて此の世界あり。世界あつて夫々あり。夫々あつて身の内あり。身の内あつて律あり。律あつても心定めが第一」
中「右仰せられますれば我々身の上は承知仕りましたが親様のお身の上を心配仕ります。さあと云ふ時は如何様とも御利益を下されましやふか」
神「サア／＼実があれば実があるで実と云ふは知ふまい。実と云ふは火水風。サア実を買ふのやで。価をもつて実を買ふのやで」
これに恐れ入つて一同が退つた。
其の後お気分も漸次快方に向つて旧正月の元日には床から起き上つてお髪をお上げになつた。而して一同に向つて
「サア／＼充分にねつた／＼。此の屋敷始まつてから充分ねつた。充分受け取つてあるで」
といふ有難い御言葉を戴いた。此のお言葉を戴いた人は鴻田、桝井、梅谷、清水の諸氏と私との五人である。
此う云ふ具合で御容態が大分良いので新の二月七日迄お地場にゐて一旦国へ帰り、講社廻りをして福田村の宮本勇次郎（講元）方へ泊つてゐると其の晩お地場から急用があるから来いと云ふ手紙が来た夢を見た。其の手紙は誰が書いたのか分らん。唯大至急用があるから帰れと云ふことが書いてあつた。其れで急いで御地場へ帰ると恰度教祖の御葬儀がすんで後始末をする所であつた。
教祖御昇天の前に
「何時迄此うして居てもはたも分らん。世界も分らん。之れが残念。此の侭おさめてしまおふか。扉を開いて世界を直路に踏みならそふか」
と云ふお言葉があつたが私が国へ帰ると間もなく旧正月十五日頃から御容態が変つて遂に御昇天になつたのである。
此のやうにして御相談のある場合には始終置いて戴いたのが独り御昇天の際に省かれたのは返へす／＼も残念である。これについては私に余程の深い因縁がある。其の因縁と云ふのは六人の親をもつて一人も親の死に目に逢はないことである。即ち父の死ぬ時は私は学問の為め他へ預けられてゐて逢はなかつた。母の死ぬ時は東京にゐて死に目に逢はなかつた。先妻の両親の死に目にも今の家内の両親の死に目にも遂に逢ふことが出来なかつた。御教祖の場合も角目々々の御相談には何時も加へて戴いたが御臨終にも御葬儀にも逢ふことが出来なかつたといふのは余程深い不孝な因縁である。（終）

教祖の降誕日と昇天日とに就て

大平　隆平

教祖の誕生日に就いては今日の所二説ある。其の一つは四月十八日説にして他の一つは四月四日説である。
四月十八日説は天理教祖を始め天理教祖真実伝天理教祖観の如き今日一般に伝つてゐる誕生日であつて四月四日説は一部の篤志研究家の外知らない説である。
前説の出所に関しては今日正確のことを知ることが出来ない。けれども後説の出所には明かに戸籍が残つてゐるのである。
其れで今此の二説の中何れが正確なものであるかと云へば私は四月四日説をもつて正確な誕生日であると信ずる。

然らば何故四月十八日説の如き根拠のない空説が生れたかと云へば私の想像する所に依ればこれは教祖の昇天日二月十八日（一説二月十九日）の十八日と混同視したものと思はれる。これより外に四月十八日説を確める何等の根拠がないのである。

刊行はされてゐないが長らく本部にゐて研究せられた故諸井政一氏（諸井国三郎氏の長男）の著教祖「みちすがら」には明かに四月四日としてある。これは戸籍を調べても其うである。明治十一年以後ならば或は新暦と旧暦とに依つて多少の相違を生ずるかも知らないけれども其れにしても唯つた十四日の差と云ふことはない。此等の点を総合して見ると四月十八日説は全然虚説にして四月四日説が最も信ずべきものであることが訳る。

其れから昇天日であるがこれも二月十八日説と二月十九日説とある。中山家の菩提寺善福寺の過去帳（愚かなる前管長は先祖の位牌と共に過去帳も焼いて了つたから中山家には何等信ずべき記録はない。）に依れば二月十九日と書いてあるが天理教祖の年表は二月十八日とある。けれどもこれは旧暦より繰つて行けば明治二十年の旧正月二十六日は新暦の何日に相当するか古い暦を調べれば直ちに判明することであるからこれは後日の問題として残して置く（今手元に暦がないから調べることは出来ない。）

次に教祖の年齢であるがこれは伝説に依つても天啓に依つても戸籍に依つても九十歳になるのであるが善福寺の過去帳には八十歳十一ケ月と書いてある。これに就いて善福寺の主張する所は当時戸籍法の完全でなかつたことを唯一の論拠としてゐるがこれは役場の通知書に落ちたか善福寺で落したか分らぬが兎に角八十九歳十一ケ月の九を脱落したものであることは明かである。これは善福寺で如何に主張しても此方には其れ以上の有力なる証拠があるから深い議論を要しない。

兎に角教祖昇天後二十年や三十年に此の様な異説が生ずる様では百年千年の後には教祖だの伝記だの歴史だのについて何んな異説が生ずるかも知らない。これ今日の天理教研究者の最も注意して精確な調査をして置かなければならぬ所以である。

之れは序だから云つて置くが仏教でも基督教でも其の他の宗教でも教祖の降誕を盛大に紀念するが天理教では立教日と昇天日とを紀念する計りで降誕日といふものを全然記念しない。これは決して謝恩の真義に叶はぬ。宜しく降誕祭を規定して教祖の降誕日を祝福しなければならない。これを特に此の祭に於て云つて置く。（紀元十億七十七年一月十四日）

卯の助参れ／＼

忍坂　　西田　伝蔵

私の祖母さんが教祖様の妹のお桑さんと云つた人ですが随分長生きしてゐました。其の人に出来たのが藤助に勇助に幸助に名張のお叔母さんで御座います。

藤助さんが三島の小寒さんの所へ行きましたが暫時居て戻つて来て外へかたづきました。此処を継いだのは勇助さんですが其れが私です。わたい等も子供の時分良く御父つ様と庄屋敷へ行きましたが善右衛門さんつて人（秀司）は足が悪くてヒヨコ／＼歩いて居ました。何んでも布留の辺で医者にならうと思つて学問し一週間位山へ入つて学問したと云ふことを聞いて居ます。

教祖様は良う知つてゐます。私の子供の時分（私は今年六十三歳になりますが私の十位の頃）此の座敷へおゐでになり三十日も御いでになり私の御父様と御母様に扇のお授けを下されました。御幣を切つて床の間に飾つて長い事おいでになつたことを良う覚へて居ます。お帰りになります時は此方から提灯もつてと云つても私はよく見えるからと云つて帰られました。

私が彼地へ連れて行かれました時南瓜の御飯を炊いて貰つて食べたことを覚へて居ります。其れは小寒さんの居た頃でした。其の頃は米の粉を御供にして居りました。

今でも親類の中で彼の神様を重んじる方は此の座敷へ入らして貰つて／＼と云ふ人があります。普通なら此んな古い所を喜ぶ人はありませんけれども。

元来私の御父つ様も御母様も一心に神様を拝んで天理王命と紙に書いて貰つて信心してゐましたが其の頃教祖様もよく御いでになり盛大になりかけた内のお母さんの兄さんの安倍の北村五郎兵衛と云ふ人が大嫌ひで百姓も放つといて其んなことをして居てはいかんと大分非道く反対したので内のお父つ様もお母様も止めて了ひました。其んなことで私共も信心を止めて百姓をする事になりましたが其の中に父も母も死んで了ひました。

教祖様おいでになると

卯の助参れ／＼

と仰つ可愛がつて下さいました。

今も神様は有難いと思つて居りますけれども彼の道には何うも良うつかぬ様に思ひます。（終）

怒られるから行かぬ

忍坂　　増田喜三次

増田喜三次氏は一時小寒様の女婿になつた藤助氏の息である。今は忍坂で小さく百姓をしながら此の道を信心してゐる。

私共が尋ねた時氏は稲をこいてゐたがお父つ様のことを尋ねに来たと云ふことを聞いて仕事の手を止めて汚ない上り縁に汚ない座布団を延べて招じて呉れた。話してゐる間は十分か十五分であつたが其の人の善さ相の顔と飾気のない態度とは云ふに云はれない快感を与へた。

其処を暇乞ひして去つた後にも貧苦の中に満足しつゝ生活しつゝある其の家の家族の幸福が長く私の胸に刻まれた。

私のお父さん（藤助）の亡くなつたのは七十六で今年で十一年目になります。若い時庄屋敷の小寒さんの所へ行きましたけれども子供が死んで了ふし帰つて来たと云はれてゐました。

帰つて来ましてから暫時ブラ／＼して居ましたが内のお母さん（お歌）と一手になつて四十三の時私が出来ました。

本家は南半国の打ち分け場所と仰つて教祖様が時々御いでになりました。私共も子供の時分彼処で十二下りの手をつけて貰ひました。自分は要らないと云つたけれどもせいと云はれて六本のお叔父等と一手に手をつけて貰ひました。

親爺の居る頃は本部にもチヨイ／＼行き行けば大事にされるのですが段々お側附きが出来て此んな粧装をして行くと怒られますから自然遠のく様になりました。（豊田の仲田さん等がよく怒りました）教祖様は来い／＼云はれ色々お話も聞かして戴きましたけれども今は其う云ふ訳で本部へ参らして戴いても内の方に面会すると云ふことはありません。（了）

人類教育家としての中山ミキ子

大平　隆平

現代並に将来の経世家の最も注意しなければならぬことは政治や法律や倫理や哲学に依つて此世界を得べしと考へる根本的誤解である。成程現代の社会には政治や法律が必要である。もしこれがなかつたら此の社会に生活しつゝある人間は一層不幸な地位に堕落しなければならない。けれども一部の政治万能論者や法律万能論者の考へるが如く政治や法律さへ完備すれば此の世界をして理想の世界たらしめ得べしと考へるのは大なる誤解である。何故なれば人間其れ自身が自らを統治する信仰と勇気とを欠いて居たならば当局者が如何に活動しても到底統治するに由なかるべし此の法律上の欠陥を埋める為めに生れたのが倫理である。

今日の政治家今日の教育家は法律の欠陥を埋めるのに此の方法をとつてゐる。けれども倫理の世界も法律の世界に比ぶれば一層高い世界には相違はないが尚ほ形式儀礼の上に立つて精神界を統一する権能がない。此の実践倫理の欠陥を補ふものが哲学である。

哲学と云ふ言葉を一層訳り良く云へば人生観である。人生観と云ふものは個人に依つて各々相異してゐるから一定の標準哲学なるものを挙げることは出来ないが真に偉大なる哲学者の占める世界は偉大なる道徳家乃至偉大なる法律家の占むる世界よりも一層根本的のものである。

けれども政治と云ひ法律と云ひ、倫理と云ひ、哲学と云ひこれは皆人間力の創造になつたものであつて自然の理法とは其の間に大なる区別があるのである。

例へば此処に偉大なる哲学者がある。彼の考へる所は確かに自然の一角に触れてゐる。けれども彼は偉大なるが故に果して疾病不幸に遭遇せぬであらうか？　世界の哲学史を繙く所其う云ふ哲学者は一人もなかつたのである。

天理教教理より云へば凡て天理に叶つた精神生活を行ふ者には疾病不幸がない筈である。何故なれば彼れには肉体の疾病不幸を引き起す精神病がないからである。けれども今日世間の哲学者の伝記を繙くに無病息災で一生を幸福の中に生活したものは少ない。これは彼の持つて居た精神上の法則が自然の法則と一致しなかつた証拠と見なければならない。これは世の所謂偉大なる法律家乃至偉大なる道徳家と称せらるゝ人間の伝記に於ても同様の事実を発見することが出来るのである。

これは直接政治や法律や倫理や哲学の不完全なる証拠とならないかも知れない。けれども法律上の罪を犯さないが為めにもしくは犯しても法律上の罪人として取り扱はれない為めに其の人は神の前に無罪の人として取り扱はれるであらうか？　又た此処に哲学者があ

る。彼の哲学の論理は一糸整然として乱れない。けれども論理の正しいことは必ずしも道理の正いことではない。彼は自己の哲学上の論理の正しいが為めに神の前に正義の人として承認せらるゝことを要求する権利があるであらうか？　もしあると思つてゐたら彼は大なる錯誤家である。
　けれども多くの場合人間は監獄もしくは警察に監禁もしくは拘留せられたことがないことをもつて一人前の人間だと思つてゐる。又た多くの場合人間は自己の論理が誤つてゐない為めに自己の道理迄正しいものと信じてゐる。これは悲しむべき人間の誤解である。
　吾人は至る所の病院に種々の生理的故障並に心理的故障をもつてゐる天の罪人を発見する。けれども彼等は聊かも自ら天の罪人とは思つてはゐない。
　浅果敢なる人間は人の眼を暗ます事さへ出来れば窃盗をしても良いものだと思つてゐる。けれども女（男）を見て色情を起したものは中心既に姦通してゐるのである。況して其れを現実に実行せるものをや。
　愚かや人の物を取れば我が物もとられ人の眼を暗ませば我が眼も亦暗まさるべき天の理法を知らない論理の上で勝つことは必ずしも道理の上で勝つことではない。もし我が精神我が生活が天理に合して居なかつたならば人は善人と認めても神は善人とは認めないのである。
　今日の政治家や今日の道徳家は法律（人間の作つた）や道徳（人間の作つた）が完備すれば其れで此の世界を理想の世界となすことが出来ると思つてゐる。けれども其れは笑ふべき浅薄な考である。此の世界は人間の作つた法律や人間の作つた倫理に依つては決して完成せられない。此の世界を完成するものは天理である。人道である。自然の法則である。神の意志である。この自然の法則神の意志を称して宗教と云ふ。此自然の法則神の意志を自ら実行もし且つ他人に伝へるものを宗教家と云ふ。これぞ宇宙の最高法律でありこれぞ世界の最大政治家である。
　天啓の声に曰く
「さあ／＼明ければ五年と云ふ。万事一つの事情を定めかけ。定めるには人間の心は更々要らん。弱い心は更らに持たず気兼遠慮は要らん。さあ思案してくれ。これから先は神一条の道国会では治まらん。神一条の道で治める」
　誠や来るべき時代は法律の時代でもなければ哲学の時代でもない。宗教の時代である。神の時代である。此の宗教の時代、神の時代の先駆者として生れて来たのが天理教祖中山ミキ子である。
　古来人類教育家として最も偉大なる天分をもつてゐた者に釈迦あり、基督あり、孔子あり、マホメツトがある。けれども我が天理教祖中山ミキ子の人物養成の目的並びに手段は其れ等の何れの人とも違つてゐた。

　天理教祖の画いた理想の人物

　彼女は釈迦の如く単に頭の人を造るが目的ではなかつた。彼女は基督の如く単に心の人を造るが目的ではなかつた。彼女は孔子の如く単に手の人を造るが目的ではなかつた。彼等の目的は智情意共に円満なる理想の人物を造くるにあつた。此の目的を具体的に表現せるものが御神楽歌である。御神楽歌の主要の目的は彼を単に知る丈けではない。彼を更らに口に移し手に表はすにある。即ち意と口と手と三つを一致せしむるにある。之れを人物養成の上に就いて云へば意と口と手の揃つた人物即ち智情意の円満に調和した完全の人物を養成するにある。
　これは客観的に見たる天理教の理想の人物であるが之れを主観的に見れば天理教の目的は「山の仙人」よりも「里の仙人」を養成するにある。云ひ換へれば不生産的人物よりも生産的人物を養成するにある。非家庭的人物よりも家庭的人物を養成するにある。非国家的人物よりも国家的人物を養成するにある。非社会的人物よりも社会的人物を養成するにある。非活動的人物より活動的人物を養成するにある。非実際的よりも実際的人物を養成するにある。非現実的人物よりも現実的人物を養成するにある。貴族的人物より平民的人物を養成するにある。保守的人物より進歩的人物を養成するにある。自己中心的人物より神霊中心的人物を養成するにある。わけて天理教の主要の目的は平民的、活動的、実際的理想人物を養成するにある。凡て此等の要素を総合したものが天理教祖の所謂「里の仙人」である。
　凡そ此の世界に於て何が困難だと云つて人類の教育より困難なるはない。彼の庭園の草木を養成するにさへ朝夕之れに水かひ土かひ賛枝を切り害虫を除くに幾年の苦心を要するか知らない。更らに其れよりも貴い神の用木を養成することは更らに幾層倍の慈悲と注意と忍耐とがなければならない。これは子をもつたものゝ何人も経験する所である。

彼女の教育法

彼女が人間生活に対する態度は常に論より証拠を重んじたと云ふことである。此の論より証拠を重んじたといふことは必ずしも事実を重んじて理論を排斥したと云ふ意味ではない。先づ口に云ふより行に示すことをもつて第一義としたといふことである。

事実守屋筑前や小泉の不動院や法林寺、光蓮寺の住職や其の他彼女を屈服せしめんとする敵意をもつて来た人達に対しては彼等の心服する迄諄々として其の教理を説いたのである。而かも彼女の説く所の教理と其の態度なり生活なりが一分一厘の隙なく一致して居るが為めに反対者は之れに向つて強弁することが出来ないで退却したのである。

唯彼女の特色は世の所謂議論の為めの議論家にあらずして人生の為めの議論家であつたといふことである。

（一）実物的教育法

彼女の教育法の特色を挙ぐれば第一に実物教育法を用ゐたといふことである。即ち火を見れば火火鉢を見れば火鉢湯沸を見れば湯沸鉄瓶を見れば鉄瓶について説明を与へた。乞食が来れば直ちに乞食について説明を与へる

「彼れはな前世に贅沢計り云ふて彼んな物は食へん此んな物は食へん。彼んな物は着れん。此んな物は着れん。彼んな所には住めん。此んな所には住めんと贅沢計り云つて物を粗末にした理が廻つて今生には人の捨てたものを拾つて食ひボロを纏つて人の軒下に住まはんならん様になる。けれどもな彼れも皆な神の子供であるから目をかけてやつてくれ。神が喜ぶから」

と此う云ふ論法である。

彼の秀司氏の死骸に臨んで

「伊蔵さん内の態を見ておくれ。金計り溜めて」

と云つて涙一滴こぼさなかつたといふのは一面に於て彼女の偉大なる精神を語ると共に他の一面に於て自己の愛子を実例に挙げて天地の理法を説明した血あり涙ある人類教育家の真面目を表はしたものと見ることが出来る。

わけて彼女が偉大なる実物教育家であつたと云ふ最も著るしい例は彼女自身が新時代の典型人として自ら人類に向つて新しき雛型を示した点にある。

これより大なる実物教育法はないのである。

彼の神を説明するに月が神であるとか火水風の外に神はないとか云つて眼に見える偉大なる物象に依つて眼に見えない偉大なる存在物を推測さした如きも確かに彼女の実物教育法の一例であらうと思はれる。

（二）実際的教育法

彼女は客観的に教理を説かないことはないが其れが彼女の唯一の目的ではなかつた。更らに其れを実地に就て経験し且つ応用することが彼女の最後の目的であつた。其の為めに彼女は機会がある毎に其の事件を捕へて其れに向つて生きた説明を与へることを怠らなかつた。これ物体に接する毎に其れに向つて生きた説明を与へたと。蓋し同一の教育法に依るのであつた。

一例を挙げて云へば彼女の弟子達が貸物借物の理を聞き倦きて新しき話を求めた時に彼女は黙つて奥から一刀を携へて出て来て今願い出た弟子の真向見かけて切り下げやうとした。弟子が驚いて後退りした時彼女が微笑の中に発した言葉は確かに千金の価値がある。

「貸物借物の理が訳つたと云ふから珍しい話を聞かさうと思へば逃げる。其れでは本当に未だ訳つたのではない。貸物借物の理が訳らいでは人の師匠となることは出来ない。もつと勉強せんならんで」

これは彼女の実際的教育法を説明する充分の例にはならんかも知らぬ。けれども其の一般は之れに従つて推測することが出来る。

（三）実験的実感的教育法

彼女は人を助けるには先づ自ら助かつたのである。彼の産屋助けの如き病気助けの如きは皆自ら第一に之れを実験した後に行つたのである。

彼女が信徒を教育するにも決して理論を授けて其れで満足しない。必らず先づ教理を実行して実地の経験を味はせるのである。

即ち

「雛型通らにや雛型要らん」
の如き彼女の実験的教育法の精粋を語つてゐるのである。
　即ち教祖の通つた「道すがら」を一度実地に通らなければ生きた教理を味感することは出来ない。生きた教理を味感することが出来なければ宗教生活は全然無意味である。彼女が実験的教育法に意を用ゐたのは此処にある。

（四）啓発的教育法

　教育法に二つある。注入的教育法と啓発的教育法である。今日旧式の学校にて多く用ゐて居るのは注入的教育法である。けれども此の注入教育の弊害として注入せられたる智識に対しては確実なる記憶を有するも其れ以外の新しき事物に対してはやゝもすれば応用の才を欠くことである。
　教祖の用ゐた教育法は前者よりも寧ろ後者に属してゐた。即ち相手の力量を計らずして無暗に注入することを避けて専ら既得の智識を総合して未得の智識を獲得せしむることに努力した。
　例へば彼の懶惰者の下男を改心せしめた如き其の一例である。
　彼女は始めより其の男に向つて働けとも稼げとも云はない。彼が懶ければ懶ける程優待し遂に其の男を本心より改善して勤勉な男としたのである。
　此の道は悟りの道であると云ふのも此処である。

（五）暗示的教育法

　前に述べたる如く彼女が人に物を教ゆるに決して一から十まで全示すると云ふことはない。大抵其の人間の力で解釈の出来る程度に止めて置く。これが彼女の教育法であつた。

（六）比喩的教育法

　釈迦でも基督でも随分巧妙な比喩家であつたがミキ子も亦其れに劣らぬ巧妙な比喩家であつた。
　彼女が「貸物借物の理」を説くに神を富豪に譬ひ人間の中借物を粗末にする人間と大切にする人間と感謝を知らぬ人間と感謝を知つてゐる人間との二種の型と老人と最う一人の百姓にたとひ借物を、重箱と袱紗にて表はして一篇の寓話を造り上げた手段の如きは中々凡手ではない。わけて私の感心するのはやゝもすれば卑俗に流れ易い女性の月経を説明するに茄子や南瓜に譬ひて説明した手腕の如きは教育家として誠に上乗のものであると思ふ。
　此の他信仰の径路を説明するにも山坂や茨や畦や崖道や剣の中火の中、淵中、細道、大道と云ふ風に様々の艱難辛苦の道を比喩を以つて表はせる如き又純金の長橋や宝の山の比喩に依つて信仰の帰途を示した如きは最も著しき比喩的教育法の一例である。

（七）漸進的教育法

　けれども彼女が教理を説くにも始めより難解の教理を説いたものではない。始めは泥海時代の如き基礎教理より順次貸物借物の理の如き八つ埃の如き互ひ助け合ひの如き日の寄進の如きを説いたのである。即ち信徒を教育するにも易より難に入り簡より繁に入つて信徒を教育したのである。

（八）個人的教育法

　其れから天理教祖の用ゐた教育法の中最も研究に価するものは個人的教育法である。
　凡て教育上の真の効果を納めんとせば多くの人間を一堂に始めで説明すると云ふことよりも直接個人個人に接して所謂人を見て法を説くに如くはないのである。此の方法は今日最も進歩した理想的の教育法である。

（九）自然的教育法

　彼女の教育法を見るに人工的教育法に依つて不自然な人物を造らうとはしなかつた。凡て天真爛漫に人間の本性を発揮せしむるのが彼女の目的であつた。この自然的教育法も亦実に彼女の教育法の一つの特色である。

（十）平民的教育法

彼女の教育法の多くの特色の中に平民的教育法と云ふことは一つの大なる特色である。これは新時代の教育法中最も出色の一つである。

（十一）通俗的教育法

凡て人類教育の目的は相手をして真に真理を理解せしむるにある。其れには難解の説明を用ゐるといふことは大なる禁物である。
「六ケ敷いことを云ふては訳る人もあれば訳らん人もある。其れは道とは云へん」
「柔りこいもの／＼柔りこい物は若い者も食べれば老人も食べる」
此の自覚の下に彼女は最も通俗平易の方法をもつて人類を教育せんとした。偉大なる卓見と云はなければならぬ。

（十二）人格的教育法

宗教の目的が安心立命にあるか人格修養にあるかは宗教哲学上の大なる問題である。もし宗教の目的が前者にありとすれば浄土宗の如きは理想的の宗教と云はなければならない。けれども精神的に醒めて来た近代人に取つては人間生活について自覚なき他力信仰に安心立命することは出来ない。この欠陥を補ふ為めに天理教の如き自力主義的他力主義の宗教が生れたのである。
天理教の第一の目的は決して礼拝や祈祷ではない。人格の改造社会の改造が其の第一義的目的である。此の目的の下に生れたものが教祖の人格的教育法である。凡ての天理教祖の教育法は此の人格教育に結合せられるのである。
以上は天理教祖の人類教育法の一般であるが彼女の教育法は教育法としても最も最新式の教育法に属するのである。殊に彼女が最も力を入れた実際的教育法、通俗的教育法、個人的教育法の如きは最も教育の真義に徹底したものである。
今日の社会は天理教祖と云へば主義も理想もない無学の一巫女の如く解して居る者が多い。わけて悲しむべきことは国民教育の当局に当る所の人々が此の偉大なる人類教育家の人格、思想、生活に就て全然無知なることである。これは今日の教育家の思想が如何に低級であるかを語つてゐるのである。
私は断言するのである。此の社会を根本的に統治するには法律の力丈けでは駄目であると。私は又た断言するのである。新時代の国民を養成するには倫理や修身の力では駄目であると。見よ今日の女学生の中一人でも礼法の真義を解して居る者があるか？　又た真に其の必要を根本的に解して居る者があるか？　私は悲しいかな其の一人をも発見することが出来ないのである。此の仏作つて魂を入れざる現代の教育現代の政治を救ふものは何うしても宗教の力に待たなければならない。
私をして将来全世界の教育を左右するの権能を与へられたりとせば私は先づ全世界の修身科を廃して天理教科を置くのである。これは今日並に将来の世界を救ふには今日の倫理や今日の哲学や過去の宗教ではならない。何うしても神の最後の理想を表象した天理教でなければならぬと信ずるからである。
けれどもこれは天理教の教義及び理想をしらない者には容易に信ずることの出来ないことである。私は其等の人々の為めに簡単に教祖の思想を紹介せう。
天理教祖に従へば此の世界の元始りは泥の海の中で月（国床立命）日（重足命）両神居るばかり。其処でお月様よりお日様に相談するには
「吾々両神居る計りでは誠に淋しい故人間と云ふ者を拵らへ其の陽気遊山を見て楽まう」
と議此処に一決して鰌をもつて人間の魂とし人魚と巳とを人間の父母とし其れに当時の最高動物の凡ゆる特徴をとつてつくつたのが原人である。けれども当時の人間と云つても決して今日の人間の姿を有したものではなかつた。其れが段々介鳥魚獣の時代を経て今日の人間に発達した。其の間実に九億九万九千九百九十九年。其の中九億九万年は水中生活。六千年は智識の仕込み。三千九百九十九年は学問の仕込み。其れに依つて十のものなら九つ迄仕込んだが後の一つが仕込むに仕込まれなかつたから天保九年に元なる地場（大和国庄屋敷）に元なる神が表はれ人間の原母伊邪那美の命（巳）の後身なる天理教祖を立てゝ万委細の元を聞かすのである。
其れで今迄何の様な教へもあつたけれども皆な人間の成人に応じて教へて来たものである。今度の教へは教へ始めの教へ終ひこれ一つ仕込んだなら後に何も教へることはないぞよと云ふのが天理教の序論である。依つてこれを根の教、元の教、だめの教、止めの教と

云ふ。
　今其の教理の一斑を挙ぐれば人間の肉体及び肉体の生活に必要なる凡ての物質は神が人間をして日の寄進的生活相互扶助的共同生活をなさしめんが為めに神が貸し与へたものである。其れを勝手に我が身の思案我が身の欲に使ふから之れを小にしては疾病不幸の如き個人的不幸之れを大にしては天変地異と云ふ人類的不幸に遭遇するのである。従つて人類全体が無病息災不老不死の理想の世界に安住せんと欲せば先づ利己的精神を捨てゝ人を助ける精神にならなければならないと云ふのである。
　此の教理を具体的に説明したものが朝起き、正直、働き、互ひ助け合ひ、日の寄進である。
　其れで天理教祖の画いた理想の人物は朝起者、正直者、働き手、相互扶助主義者、日の寄進者である。これが即ち彼女の所謂「里の仙人」である。天理教祖の目的は即ち全人類を里の仙人化せしむるにある。而して其の模範を彼女自身に示したのである。
　凡て時代は変遷するものである。人間の定義も亦其うである。吾人は最早や昨日の太陽や一昨日の太陽に依つて今日の光を求めてはならない。今日の熱と光と力とは今日の太陽に求めなければならない。此の不完全なる論文は即ち其の生成化育の力を見んとする努力に外ならない。

（紀元十億七十七年一月十四日）

中山家過去帳

中山家過去帳

文政三年六月十一日六十二歳ニテ逝ク　善兵衛父
　戒名　専　誉　称　念　禅　定　門

文政十一年四月八日　善兵衛母
　戒名　唯　誉　妙　念　禅　定　尼

天保七年四月廿四日　二女常子
　戒名　智　玉　慧　弁　童　女

嘉永六年二月二十二日（玄米三斗）　善兵衛
　生　遊　軒　宝　誉　長　岸　栄　寿　居　士

明治三年三月十五日　秀司長女秀子　行年十八歳
　戒名　摂　取　軒　光　誉　明　照　禅　定　尼
元トハ光岸明照信女贈五重ノ約定ニテ布留街道迄神葬トス。ソレヨリ善福寺二十七世達誉上人取扱ヒ片鉢伴二人

明治八年九月廿七日　小寒子
　戒名　光　唯　軒　明　誉　顕　赫　信　女

明治十一年四月六日　櫟本梶本宗治郎ヨリ小寒へ贈五重ス　桂現善福寺住職
　戒名　光　唯　軒　明　誉　顕　赫　禅　定　尼

明治十一年四月六日入行（旧三月四日）　長女政子
善福寺ニテ五重相伝ス　桂現善福寺住職
　戒名　実　誉　貞　信　禅　定　尼

明治十二年七月十四日　秀司子
　智　生　童　子

明治十四年四月九日（教祖年譜四月十日）　秀　司
　徳　樹　軒　門　誉　霊　山　秀　司　禅　定　門

明治十五年十一月十一日　松　枝

神葬ニテ送リ善福寺ヘ葬ル。墓所ニ見立テナシ焼香引導ト五重約定ニテ
宝　参　妙　樹　禅　定　尼

明治十年一月

堺県大和国第一大区三小区戸籍之五十一

山　辺　郡
三　島　村

・　大和国第一大区三小区山辺郡庄屋敷村
・　第五番屋敷住平民農
・　実父善兵衛亡長男
氏神同郡同村　・　中　山　秀　治
春　日　社　・　五十五歳七月
・　文政四年辛巳年七月廿四日出生
・　明治十四年巳年四月九日病死
・
・　寛政戊午十年四月四日出生　母　み　き
当国同郡勾田村　・　七十八歳十月
浄土宗　・　実父当国同郡三昧田村平民農前川半七長女
善　福　寺　・　文政元戊寅年二月五日入嫁
・
・　嘉永四年辛亥年三月三日出生　妻　ま　つ　ゑ
・　二十五歳十一月
・　実父当国平群郡平等寺村平民農小東政吉亡二女
・　明治三庚午年八月二十六日入嫁
・
・　安政戊午五年一月二十三日出生　長男　音　治　郎
・　十九歳一月
・
・　文政八乙酉年四月八日出生　妹　ま　さ
・　五十一歳十月
・　明治十一年戊寅二月十六日分家相続
・
・　明治十一年丁丑二月十五日出生　長女　ま　ち
・
・　以　上
・
・

．

．

．

編集室より

Ｒ　Ｏ　生

教祖三十年祭も待つて居る中に来た。兼て予告の通り教祖の音容に一度なりとも接した方より感謝と記憶とを募つたが其の中に一人として自分から進んで投稿して下さる方はなかつた。

目前の利害には随分悧巧だが此んな永久的の仕事に対しては全然注意を払はれないのが天理教徒の特色である。

本誌の主義として雑誌の紙数が多くなつても少くなつても一定の定価以外には一文も多く戴かず又た少く戴かない事に定めてゐるのであるから本号の如き実費が定価以上に上つても決して外の雑誌の様に定価を変更する様なことはしない。

実は最つと載せたいのであるが其う無制限に紙数を増すと云ふことは道の友の様な七千も八千も読者を有する雑誌なら兎に角僅かに五百や七百の読者しかない本誌にとつては到底不可能の事である。其れで材料は未だあつても遺憾ながら割愛することにした。

けれども本誌が兼て予告した感謝と記憶の蒐集は之れで終つたのではない。本誌は更らに永久的の仕事としてより以上の材料を蒐集し最後に単行本として発行する心算である。

私は此の頃つく／＼考へた。天理教の人達に何を頼んでも駄目だと云ふことを。彼等は自分や自分一身の事になると夢中だが少しく範囲が広まつて来て教界全体とか国家とか社会とかの事になると全然無頓着だ。其れは／＼冷淡なものだ。此んなことで世界最後の宗教で御座る等とは片腹痛い。最つと大きな自覚を望んで置く。

改名の理由

旧　大平　良平
新　大平　隆平

凡そ名前を換へると云ふことは瓶詰のペーパーを張り換へる様なものである。ペーパーを張り換へた所で正宗が月桂冠にはなりはしない。けれども人間丈けは特別である。彼は張り換へたペーパーの暗示を受けて清酒とも名酒ともなるのである。

私が大平良平を大平隆平に換へたのは必ずしも姓名哲学上の理論に囚れた為めではない。隆平の二字が良平の二字よりも一層適切に神の理想即自己の理想を表現してゐると信ずるからである。

私の解釈に依れば大平は大平原即ち世界を意味し隆平は高原即高天原（甘露台と云つても良い）を意味するのである。大平隆平は即ち此の世界に高天原（最高理想の世界）を実現することを意味するのである。

之れを天啓の言葉に徴するに

谷底をせり上げ高山を見下ろし世界を直路に踏み平らす

と云ふ神の理想は同時に私の理想である。

此の世界直路の理想は大平良平にも表はれてゐるが「世界を良くならす即ち理想の世界にする」谷底をせり上げ高山を見下ろして現在よりも一層高い理想の世界を実せんとする神の理想は良平よりも隆平により多く表れてゐる様である。これが改名の第一の理由。

改名の第二の理由は良は女性的であり且つ活動性に乏しい。然るに三十年祭以後の私の理想は一層大なる活動を熱望して居る。これ良を捨てゝ男性的活動的の隆を選んだ第二の理由。

改名の第三の理由は大平隆平は縦と横との八方へ拡がる意味を有す。これは空間と空間とに亘つて永久無限に自己拡張を行はんとする私の理想に一層叶つてゐる様に思はれる。これが改名の第三の理由である。

此の他二種の姓名について何れも長所と欠点とをもつてゐるが大体に於て大平良平よりも大平隆平の方が世界直路の神の理想に一致して居ると信ずるから前者を捨てゝ後者をとつた。

是を定めるに就ては三度神籤を頂いた結果三度共隆平の御指図を戴いた故後者に決めたのである。

元来世間では改名について必らず欲があるのであるが私には欲がない。唯世界直路の理想を姓名計りではない。凡ての方面に亘つて実現せんとするより何等の欲望はないのである。且つこれは私の先天的使命だと信じてゐる。私の姓名は其の理想なり使命なりを実現したものである。元より人にとつては児戯に過ぎないかも知らないが私にとつては真面目な仕事である。

わけて今年は私の思想も生活も立て換への時期に迫つてゐる。私は思想の上に於て旧思想を捨てゝ新思想をとり、生活に於て先祖の財産を断つて神の世帯をもつのである。独姓名に於て変化せざる理由はない。私の新しき姓名は私の新しき性格に向つて下されものとして有難く甘受するのである。

.

教主政従の時代

大平　隆平

凡そ人間社会の治め方に二途ある。其の一つは自治（もしくば内治）にして他の一つは他治（もしくば外治）である。

自治とは他の干渉圧迫を待たずして自分自身を統治して行くことである。他治とは他人の干渉圧迫を待つて始めて自分自身を統治して行くことである。更らに詳しく云えば自治とは人の見て居ると見て居ないとを問わず、人の聞いていると聞いていないとを問わず、他人の干渉、圧迫、恐喝迫害するとせざるとを問わず自ら善と信じた事は時と処と人とを問わず断行して憚らざるを云ふのである。他治とは此うすれば監獄の罪人になるとか他人の感情を傷くるとか人に擯斥せられるとか云ふ利害打算の上より自己の欲望に反して風俗、習慣、流行、輿論、法律、道徳に従ふことを云ふのである。

今日の社会の殆んど大部分は皆後者の打算心より善人を粧ふ偽善者にして一旦法律の力の及ぼす社会の眼の届かぬ所にあつては直ちに野獣の本性を顕して非倫非道の行為をなして恥じざる人間である。

世間の無政府主義者は云ふ。

「法律と政府とは吾人の自由を束縛する有害無用の妨害物のみ」

と。けれどもこれは一を知つて二を知らざる空想のみ。今日の社会にもし法律を廃し政治を排したならば吾人は一日と雖も安全の生活を営むことは出来ない。けれども吾人は同時に又た彼の法律万能論者の云ふが如く法律さえ完備すれば良い、制度さえ完全すれば此の世界は理想の世界となると云ふ議論に組することは出来ない。何故なれば法律が如何に完備し、行政が如何に発達してももし人間にして罪悪を犯さんとする意志を有したならば其の者は必らず法律の眼を隠れて罪悪を行ふ余裕を発見するであらうからである。

其の証拠は監獄の罪人である。彼等は監獄にある間は手足を拘禁せられつゝあるが故に悪事をなすの力なしと雖も一旦監獄を解放せらるゝや彼は再び以前に増したる犯罪を行ふものが少くないのに見て明かである。

之れを同じく社会の制裁を恐れて表面善人を粧ふ偽悪者もしくば悪人を粧ふ偽悪者も亦社会の眼の届かぬ範囲内には自由に自己の本性を顕わして跋扈するのである。世の所謂交際家なるものは殆んど此の偽善偽悪の大なるものである。

凡て此等の人間は利己心、打算心には人一倍敏なれども利害を超越して常に真実自然を愛すると云ふ真実性に欠けている。従つて其の行為は朝三暮四にて一定の真実なるものがないのである。

けれどもかくの如き人間の跋扈する其の家、其の村、其の郡、其の県、其の国、其の社会の暗黒なるは彼の利己主義者の集合体なる支那に徴して明かである。其処には論理はあつても真理はなく、利害はあつても真実はない。其の結果其の家、其の村、其の郡、其の県、其の国、其の社会は乱れて遂に滅亡の悲惨に陥るのである。此の信仰なき国家の憐れむべき末路については経世家の等しく注目しなければならぬ点である。

今日の施政者の方針を静観するに法律の完備行政の発達以外に国家統治の最上策はないかの如く考えている様である。往々学校に修身科を置き国民道徳の函養を標榜すれども其はただ小中学の児童を欺く方便にして国家当局者より平然其れを破壊して顧みないのである。かくの如くにして国民道徳の発達の如き如何にして望むべきか？　吾人は寒心を禁ずることが出来ないのである。

且つ修身（もしくば道徳）なるものは法律よりは一歩精神的のふかさを有すれども其の目的が元来行為にあるが故に単に其れをもつて複雑なる人心統一することは望むべからざることである。

此等の点を見ても今日の国家当局者が治世の上に抱ける意見が如何に浅薄なるものであるかを想像するに難くはない。けれどもこれは一人国家当局者の罪ではない。国民殊に宗教家、道徳家、哲学家、芸術家、教育家の罪である。何故なれば彼等にもつと深い人間性の自覚があつたならば彼の子供の様な幼稚な当局者に人類の大事を一任して平気で居る筈はないからである。此の点に於て我が上代の政治家は今日の政治家よりもより大なる見識と理想とをもつていた。

彼等は理論的に自覚していたか居ないか知らないが兎に角此の世界は神の意志によつて統治せらるべきものであることを知つていた。又た此の世界を治めるには神を祭る即ち神の意志を実現するにあることを知つていた。政治を祭事と云ふのは其の時より起つて来た。当時にあつては即ち神を祭ることが同時に国を治めることであつち。祭政一致の理想は上代に於て其の侭に実現せられつゝあつたのである。此の慣習は余程長く続いて来た。然るに近世武家の跋扈するに至つて政治は全く堕落して祭事即ち宗教と全く手を断つに至つたのである。これが国民堕落の第一歩である。

けれども国民は今日の法律の力のみをもつては到底此の国家此の社会を根本的に統治することの出来ないことを自覚しなければならぬ時が来た。又た国民は今日の所謂道徳をもつて到底真に幸福なる生活を楽しむことが出来ないことを自覚しなければならぬ時が来た。云い換えれば宗教即ち信仰の力を借りなければ何うしても人間を精神の奥底より根本敵に改造し統御することができないことを自覚しなければならぬ時が来た。

けれども今日迄の経験に徴するに仏教も基督教も儒教ももはや此の上の新しき統治力のないことを証明した。此の間に於て最も多大の未来をもつて生れたのが天理教である。

凡て宗教の強味は情実因襲の如き一切の外的条件を脱して心中より真実生活、自然生活を建設しつゝ行く点にある。かくの如き人のかくの如き生活には他人の干渉は無用である。彼は自分自身のことは自分自身で処理して郁子とを知つている。従つて法律の如きはかくの如き人に向つて全く贅物である。何故なれば彼は法律以上の広い高い深い世界を自分自身の中にもつているからである。

天理教祖臨終の間際に高弟飯降伊蔵を通じて下つた天啓に

「サア／＼月日（神）あつて此の世界（地球）、世界あつてそれ／＼（万物）あり、それ／＼あつて身の内（人間）あり、身の内あつて律（法律）がある、律があつても心の定め（信仰）これが第一」

と云ふ言葉があるが畢竟法律（人為律）は時と処と人とに依つて変更せらるべきものであるが自然律即ち神の意志は永久に変更すべからざるものである。且つ法律の力は僅かに外界に表われたる形式を支配するに止まれども自然律は内界即ち人間の精神並に肉体を支配する魔力を有す。従つて法律は時と所に依つて犯すことが出来ても自然律は犯すことが出来ない。強いてこれを犯せばただ死あるのみである。

明治廿四年二月七日夜二時即ち日本に始めて国会の召集せられた翌年の天啓に

「さあ思案してくれ。これから先は神一条の道国会では治まらん。神一条の道で治める」

と云ふ天啓がある。これは法律の力をもつてしては此の世界を到底真に統治することは出来ない。何うしても神の道即ち宗教の力によらざれば新の根本的統治の出来ないことを預言せられたのである。

越えて明治廿五年五月十六日午前九時の天啓に

「今の道は二つある。一つは道の表の道。一つの道は心の道や。表の道一寸も道や。心の道は違はして何んならん。訳らんから皆見免してある事を何んな事であつたやらなあ見免してあるから遅れて何んとならん。胸の道あればこそ是迄通つて来た。これをよふ聞いて置かねばならん。世界道と云ふものはとんと頼りにならん。確つかりした様でフワ／＼してある。世界の道に力を入れると胸の道は薄くなる」

とあるが此の世界の終局は必らず政教一致の時代が来る。即ち政治とは宗教の別名なる時が来る。其の時が来なければ詐である。

今日の如く国家当局者が人為的の法律をもつて此の世界を統治せんとし宗教家又た彼等の忌諱に触れざらんことをのみ恐れている時代では新の治世は期して望むことが出来ない。宗教家自ら政治家の上に立つて天上の権威を振ふ時が来なければ駄目である。

そもそも将来の宗教家の自覚しなければならぬ点は政治家は一国一代を治むる権威を賦与せられたるのみなるに反し宗教家は万代万国を統治すべき大なる権威を賦与せられたるものなることを自覚するにある。然るに今日の宗教家は自己の偉大なる天賦を忘れて其の従僕なる政治家の前に平身低頭して其の忌諱に触れざらんことをのみ恐れている。仏教家然り、基督教家然り、神道家然り、かくの如くにして宗教家の権威何処にあるや。実に神の権威、天上の権威、宗教の権威は此等堕落せる無定見の宗教家のために地下に堕落したのである。

けれども昔は其うではなかつた。釈迦は全天竺の王となるよりも霊界の王者たるをもつて無上の光栄として金銀宝石をもつて飾れる王衣王冠を捨てゝ乞食僧の姿を選んだ。基督又た悪魔の甘言を拒絶して精神的ユダヤ国の王たることをもつて自ら任じた。彼等の弟子も亦世俗的栄華を超越して政治家の上に立つて自己の天分と天職とを発揮した。今日の宗教の権威の失墜と共に宗教家の権威も亦失墜したとは云えなおローマ法王なるものありて各国の元首の上に立てるは有名無実とは云えなお宗教のために多少の気焔を吐ける点に於ていささか快心の微笑を禁ずることが出来ない。

然るに翻つて我が国の宗教家の現状は如何？　仏教家も基督教家も神道家も政治家の前に立つ時は全く其の奴隷たるの観がある。かくの如くにして何時の世にか宗教の権威の発揮せらるべき時かある。

凡そ一国の文明の真相を知り其の国の治乱興亡の程度を知るには其の国民が如何に大なる信仰を有するや否やに依つて定まるのである。云い換えれば其の国民が如何に宗教心に富めるか否かに依つて定まるのである。もし其の国民にして真に大なる宗教心を有せざる国民であつたならばたとい一時物質的乃至武力的文明をもつて世界に覇を称することがあ

つても必らずや憐れむべき悲惨の最後を演出しなければならない。
　今日の日本も此の点即ち宗教をもつて国家統治の根本義となさない内は決して真に国家万代の策を得たるものではない。何故なれば法律の力は真に一時的であり表面的にして真の国家の統治は国民道徳の発達と宗教心の発揮とに待たなければならぬからである。
　然るに今日の政治家、今日の教育家、今日の宗教家を見るに殆んど此の点に於て真の自覚を有するものがない。わけて未来の世界教世界最後の宗教たる天理教当局者にしていささかもこれに対する自覚の見えざるは私の最も悲しみつゝある所のものである。
　けれども近き将来に於て世の経世家が等しく法律や哲学や倫理や道徳のみをもつて此の世界を統治することの出来ないことを自覚する時が来る。其の時第一に叩き起されるものは今日の天理教徒である。其れ迄は彼等自身の力をもつては到底醒むることはないであらう。
　従つて私は彼等暗愚なる天理教徒の自覚を殊更に望まない。先ず世界有識家が一日も早く宗教の力に非らざれば到底此の世界を根本的に統治することの出来ないことを自覚せられんことを望む。其の時こそ此の世界が真の文明に入る第一歩である。敢て世の経世家の反省と自覚とを望む。

　病を恐るゝ勿れ

大平　隆平

　天理教信者の多くが随分不条理なる教会の制度及び儀式を忍んで教会通いを続けているのは信心を止めれば又元の身上（疾病）なり事情（不幸）なりが復活するを恐れる臆病心からである。
　彼等は金を出すことは厭だ。けれども金を出さなければ病気になるを恐れるのである。彼等は教会のために働くことは好まぬ。けれども種々の不幸が彼等の身を襲わんことを恐れるからである。勿論中には此う云ふ怯懦の信心より超越して真に真理を愛し真生活を愛するものもないではないが其れ等の人々は余程信仰の進んだ人である。大部分の人は以上述べたる疾病不幸の再来を恐れる恐怖心より心ならずも緩慢な信仰を続けているのである。
　けれども此の世界に於て吾人の恐るべきものは肉体の病ではない。心の病心の癖である。云い換えれば性癖性情である。此の性癖此の性情あるがために人は受くべき自然の幸福より離れて小さな世界に呻吟しなければならないのである。
　けれども性癖と云つても一概に悪い性癖計りではない。中には随分美しい性癖もしくば性情はある。けれども吾人が実際生活上の不幸を醸すのは其う云ふ良い性癖性情のためではなくて多く片寄つた不具の性情のためである。随つて吾人にとつて最も焦眉の信仰問題は先ず自己の悪癖を打破することである。肉体の疾病は此の精神病の全治に伴つて全治するのである。
　けれども此処に一つの問題は以上の性癖即ち精神病を全治することが信仰の奥義ではないと云ふことである。云い換えればほしい、をしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、こうまんの性癖を打破するだけにて信仰の要義は尽きていないのである。真の信仰の奥義は真我の実現即ち朝起き、正直、働き其の者となることである。
　然るに多くの天理教徒の信仰の標準は未だ此処迄達していない。彼等はただ肉体の病を助けられたるが故に信心せぬと云ふが如きものではない。病は助からうが助かるまいが不幸は除去せられやうが除去せられまいが真理なるが故に信ずるでなければ本当の信神とは云えない。本当の信神とは病が助かつても助からぬでも真理なるが故に信じて正しき生活を継続して行くことにある。
　蓋し因縁と云ふものは今生積んだ因縁もあれば前生積んだ因縁もある。小さな因縁もあれば大きな因縁もある。軽症もあれば重症もある。大難もあれば小難もある。小さな因縁なれば一時の心機転換に依つて直ちに精神的健康状態に復帰することが出来るけれども大なる因縁になれば長い間の習慣性のために一時の復活が出来ない場合出来ない人間がある。従つて自己の因縁の大小自己の信仰の大小を計らずしてただ助かる助からぬと云ふ眼前の利益を標準として信仰しもしくば信仰せざるは未だこれ真の信仰心を有せるものと云ふことは出来ない。たとい現在に於て助かつても助からいでも自己の欠点、悪癖、悪習慣を自覚して正しき性情の発展に向つて努力するこそ真の信仰を求むる意識ある人とこそ云ふべけれ。もし其の長い努力の期間に於て自己の悪癖が真に矯正せられたる時あらば其の時こそ真に吾人は健全なる精神をもつて健全なる幸福を享楽する資格ある人となるのである。
　畢竟神の立腹即ち身上事情を恐れて自己の所信を断行し得ざるの徒はただこれ臆病者のみ。もし自己の正しと信ずることを断行して神の御異見を戴いたならば戴いた時こそお詫

をすれば良いのである。何んぞ始めより地頭の一喝を恐れて自己の正義を断行し得ざる如き臆病に堕する必要あらんや。従つて私は云ふ。

　病を恐るゝなかれ

と。吾人の恐るべきは理である。理に反せる自己の非行である。誤つた精神である。苟も自己の精神に於て何等疚しき点を有せざれば神を憚る必要はない。況んや人をや。私の希望するは実に此の種の人である。徒らに神戸人との顔色を読むことに巧みにして自己の所信を披瀝し得ず断行し得ざる烏合の信徒にあらざるなり。従つて私は云ふ。

　病を恐るゝ勿れ

と。真の信仰者の信条はただ理（神）を愛するの一事にある。其れに依つて生ずる結果の善悪は私の問ふ所でない。これ我が信条である。　（紀元九億十万七十七年二月十一日）

独立信仰の宣言

大平　隆平

　天理教の教師信徒諸君！

　余は今回天理教信者五百万の前に立つて余の信仰の変化について一言の説明を許されんことを乞う。

　余が此の道の信仰に入つたそもそもの動機は身上事情のためではない。又た人に匂い掛けせられたためでもない。最初より全く他人の教導を待たない独立独歩の自由研究の結果此の道の信仰に入れることは余がかつて余の入信の動機に就いて告白した通りである。けれども余は神魂を祭る必要上一昨年の七月山名部下の一信徒として教会の制度、儀式、習慣に親しむに従い今日の天理教は余がかつて考えていた教祖の道とは甚だ異る多くの点を発見したのである。而して其の一部分は昨年の六月以後の新宗教誌上に於て天理教界革命の声として公表した点に於て余の立脚点は多少理解せられた筈である。けれども教祖の天理教と今日の天理教との距離は彼れにて尽きているのではない。余は更らに多くの矛盾撞着を此の二者の間に発見するのである。

　一例を挙げて云えば今日教界を風靡しつゝある専制的封建的傾向である。これは天理教本来の理想なる自治的、立憲的思想と全く容れない所の傾向と云わなければならない。

　然らば何が故に自治独立を標榜せる天理教の如き立憲的新宗教、文明的新宗教にかくの如き弊風が生じたか？　其の主なる原因は順序の理を余りに狭く曲解したがためである。云い換えれば中山家と信徒及び先輩と後輩との間に余りに大なる階段をつけたがためである。其の結果は絶対服従主義と云ふが如き非天理教的教理を生み人権を全く没却するに至つたのである。

　蓋し今日の天理教にあつては中山家はあたかも昔の将軍家である。大小の教会はこれ昔の譜代外様の大小名である。彼等が本部に登参するのはあたかも諸大名が江戸城に参勤交代すると同一である。将軍家たる中山家は天理教界の至上権を握り其の云ふ所一つとして行われざるはなく往々之れに反くものあれば其の教会は直ちに滅亡せざるを得ないのである。此う云ふ専制的弊風はひとり中山家と各教会との関係計りでなく各教会と其の部下教会との関係に於ても同一である。

　更らに会長と信徒との間は如何と云えば元来兄弟姉妹の道でありながら宛然これ主従の関係である。これを天理教々理より云えば一列は皆な兄弟である。道順序の上より云つて兄弟姉妹はあつても主従はない筈である。従つて兄は弟を立て弟は兄を立て姉は妹を助け妹は姉を助けてもこれに命令する権利はないのである。これが教祖の説いた互い立て合い助け合いの理である。

　然るに今日の教会の会長対信徒の関係は如何？　宛然一主人が雇人に対する態度である。下は上を立つても上は下を立つる精神がない。ただ奴隷の如く下婢の如く駆使すれば足るのである。これは或る一部の教会に限られているかも知らないが上級教会と部下教会、会長と信徒との階級が余りに甚しく其間に於て真の親みのないことは天理教界全体にわたれる争ふべからざる事実である。

　以上述べたる先輩もしくば上級者の専制横暴と極端なる階級制度とは道の精神に相反している計りでなく最も時勢後れの陋習と云わなければならない。

　事実政治界に於ても思想界に於ても封建制度、専制制度、階級制度は五十年乃至百年以前の過去の夢と化しているではないか！　しかも封建制度の打破、専制制度の打破、階級制度の打破、自由の讃美者、平民主義の宣伝者たる天理教其れ自身が未だ此の古き昔の夢を繰り返しつゝあるとは余りに大なる矛盾ではないか？　しかも天理教界全体の人が此の点に思い及ばず、及んでも此の弊風を打破し得ざると云ふのは余りに自己の宗教の価値及び使命と時勢の進歩とを知らざるものと云わなければならない。

以上は天理教界に於て直ちに打破せざるべからざる弊風の一つであるが更らに天理教界の一つの弊風は各教会が各々党派を立てゝ一人でも多くの信徒をつくりもつて自己の教会を盛大ならしめんとして信徒の掠奪を公然行いつゝある有様は宛然戦国時代の諸英雄の勢力争いといささかも異らない。其の間には道の発展と云ふが如き全体的観念はない。ただ自己の教会を盛大ならしめんとする一心あるのみ。

此等は道の精神より云つて最も悲しむべき弊風の一つである。

余が今回教会を去る主なる理由は天理教界全体がかくの如き専制的利己的階級的傾向を追ふ限りは到底自由と独立と平民的特色とを愛する余が天理教信仰の最初の動機と一致すべからざることを悟つたからである。

次に余が教会を去る第二の理由は今日の如く各教会が教理を度外視し教祖の道を度外視してただ自己の勢力範囲の拡張にのみ熱中し道のためも世界のためも思わない状態にあつては私の真正の活動の範囲は自ら局限せられて根本的よりも寧ろ枝葉的一般的よりも部分的になる恐れがあるからである。

事実余が山名の一信徒である限りは余の活動の範囲は全然山名の一部分に限らるゝことはないにしても其れがために道全体のための働きを局限せられることは争ふべからざる事実である。これは道全体のため世界全体のために善良にして公平なる生活をなすことをもつて理想とせる余にとつては到底耐ゆべからざる苦痛である。

凡て九尺二間の道場にて五間十間の大身の槍は使えぬと同じく小さな仕事場で大きな仕事は出来ないのは何より明かな事実である。五万十万の信徒をもつて唯一の宗教とし三百五百の教会をもつて唯一の自分の家となすことは私の理想ではない。自分の家族は人類である。自分の家は全世界である。自分の仕事は人類的事業である。かくの如き信念と理想を賦与せられた私には特殊の世界に於て枝葉の仕事をなすことは牢獄に入れられたると同様の苦痛である。これ本部を始め何れの教会にも属せず神直属の信徒に帰つて自由の信仰生活を営まんとする所以である。

かく云わば世の大部分の天理教信者諸君は余をもつて異端なり外道なり半狂的高慢者なりと云ふかも知れない。けれども余は元来或る一部の所謂謙遜なる人々の如く私は詰らないもので御座います。私は何も出来ないもので御座いますと云つて引つ込んでいるのを美徳だとは信じない一人である。出来ても出来なくても無限大の理想をもつて其れに向つて全力を傾倒しなければ満足の出来ない人間であると同時に自分の感じたことを感じたが侭に発表することなしに満足することの出来ない人間である。

私は聞く教祖が大豆越の山中忠七氏に向つて有てるものゝ凡てを売つて神に捧げよ。然らば神は一粒万倍として返すであらうと勧めた時忠七氏は財を惜んでこれを拒んだ。其時教祖は忠七氏に向つて

五反や十反の田地を弄つている様では駄目だ

と云つて其の志の小なることを笑われたそうであるが余は始めより向上の志を絶つて凡夫凡婦の生活に甘んずるよりも寧ろ己が力量を知らざる誇大妄想狂たらんことを欲するのである。もし願ふべくは宇宙を呑むの大度と塵埃を余さぬ細心とを欲するものである。

実に余は何よりも大なる田地を要する。何よりも大なる庭園を要する。何よりも大なる屋敷を要する。何よりも大なる家屋を要する。何よりも大なる仕事場を要する。何故なれば小さな田地、小さな庭園、小さな屋敷、小さな家屋、小さな仕事場では大きな活動は出来ないからである。

更らに余は自由を愛す。余は平等を愛す。余は正義を愛す。余は公平を愛す。けれども今日の天理教界には自由平等を与えず、正義公平を許さない。宛然これ三百年以前の封建政治である。其処には人権の擁護なく自由意志の尊重がない。かくの如くにして今日の天理教界には貸物借物の理に説かれてある自由意志の尊重は蔭だも認めることが出来なくなつてしまつた。

余は痛切に感ずる。自分一身のためよりも寧ろ全天理教徒のために此の専制政治の牢獄より一日も早く彼等を救い出さなければならぬことを。

余は先ず今日末派の信徒より天理教界の法王たる中山家に架けられたる踏み越え難き梯子を破壊せん。而して未来の人類のために平坦なる道を開かん。

誠にこれ世界一列は神の愛児である。其の間に兄弟姉妹の順序はあつても兄は主たれ弟は僕たれ、姉は婦たれ妹は婢たれとの制度は定めなかつた。これは

谷底をせり上げ、高山を見下ろし世界を直路に踏み平らす

と云ふ神の理想に徴して明かである。これ近代的宗教家の始祖たる親鸞と共に余には弟子なしただ同行者あるのみと呼ばしむる所以である。

かく云えばとて余は天然自然の順序の道を破壊せよと云ふのではない。ただ今日の制度の下に順序の道を極端に追求する時は種々の恐るべき弊害の生ずることを云つたのである。

一例を挙げて云えば授訓者である。もし授訓者の親教会がロンドンにあり、其の又た親教会がニューヨークにあり、其の又た親教会がパリにあり、其の又た親教会がロシアにあり、其の又た親教会がインドにあり、其の又た親教会が支那にあり、其の又た親教会が東京にありと仮定せんか。これを今日の制度より云えば授訓者は授訓を授く前に各親教会の捺印を求むるたろに世界を一周し、更らに授訓の御礼としてもう一度世界を一周しなければならない。其の本部以下各教会への御礼の包金さえ容易ならざるに其れに世界を一周する往復の旅費を加えたならば余程大なる財産家でも其の家族全体の御授訓を戴く迄には財産は蕩尽せざるを得ないのである。

けれどもこれは未だ親教会の少ない方である。もし将来道の発展の結果親教会を百も二百も有するものは御授訓を運ぶに半年以上の時日と何千の金を費さなければならない。尤も学者金持ち後回しと云ふ天啓に依り後より道につくものは多く富豪なるが故に構わないと云ふかも知らない。けれども不便は一人信徒のみではない。部下教会に於ても全く同様である。

例えば此処に二百の親教会を有する宣教所が移転届を申請するとせよ。其の教会は二百の親教会の捺印を得て漸く本部に来り官庁式の繁雑なる手続を経た後本部より許可さるゝや授訓者の二倍の礼を各教会になさゞるべからずと云ふ。

更らに余の解し難き不合理の一つは教会を新に新築し新設した場合には新設許可の御礼並に新築許可の御礼として各教会に御礼をなしたる上更らに百円新築費として本部へ納めると云ふことである。此等は本部より新築費として下付すべきに却つて新築した教会より徴収すると云ふが如き無謀は天理教ならで聞かざる所のものである。

けれども教会の負担は其れのみにて尽きない。教会新設許可の前には親教会より視察に来、其の又た親教会が視察に来、其の又た親教会が視察に来る。其の来るや必らず部下教会長が案内として来るのである。かくの如くにして百も二百も親教会を有するものは建築のために多大の費用を費した計りでなく彼等教会長の接待旅費等に多大の入費を消耗しなければならない。其の上授訓者の数倍の御礼と百円の新築費を本部に寄付しなければならぬとは末派の教会の到底耐ゆべからざることである。しかも今日の教会制度を其の侭徹底して行けば当然此う云ふ結果に到達しなければならないのである。

この救済方法に就いて余はただ二つの方法を知つている。其の一つは自己の直属教会より直ちに本部に来て御授訓なり事情願なり戴くのである。（其のための出張所があるではないか。）他の一つは部下の教会が独立の力を備ふるに至らば同格教会として独立せしめかくて支庁の直属に委することである。此う云ふ方法をとれば今日の如き極端なる封建的弊風を一掃する計りでなく末派の教会信徒を救ふことができる。けれども之れに対しては多くの反対者がある。其の反対者の多く大教会分教会支教会の如き多くの部下教会を有する既設教会である。何故なれば此の方法に依れば現在の大教会分教会支教会は在来の資格を失ふ計りでなく其の維持に困難を生ずるからである。其の時彼等の口実として利用せられるのは順序の理である。

順序の理より云えば教務支庁直属論は勿論余の山名大教会脱会の行為が現に順序を無視せるものと云ふかも知らない。けれども封建政治が廃れて郡県政治が布かれた否な布かれなければならなかつた世界の大勢から云つても斯道発展の必然の結果より云つても勢い到達しなければならぬ結論を云つた侭である。後者に関しては余は答えて何等順序の理を狂することはない。却つてこれを徹底せるのみと云わん。何故なれば余は山名よりお助けをして貰つたのでもなければ又た山名より匂い掛けせられたのでもない。全く神自身の直接の匂い掛けに依つて此の道に入つたものであるからである。更らに余が天理教信仰の道程にて就て詳しく云えば余が始めて天理教の天啓に接したのは東京の麹町大橋図書館に於てゞある。余は読書の欝を晴らすために廊下に出た時不図私の眼に止まつたのは道の友である。余は一語又た一語遂に全誌にわたつて天啓の声を拾い集めて読んだが其の中より余はこれぞ我が研究すべき大道であるとの霊覚を与えられた。依つて閲覧室に帰つて研究のために借り出した一切の書籍を返し館内にある天理教に関する一切の書籍を片つ端より読破した。而して館外に出た時は余は天理教に関する一角の識者であつた。私は其の足で直ちに神田錦町の日本橋大教会に往き庭掃きをせる青年より一冊の御神楽歌を求め帰つて之れを通読し、かくも簡単なる言葉の中にかくも偉大なる真理を含有せるを驚嘆した。爾来一年有二ヶ月独力天理教の研究に耽り（其の間一度も教会へ行つたことなく一人も教師に逢つたことはない）これぞ吾が永年求めていた宗教であるとの確信を抱き忘れもせぬ大正三年の七月二十六日に東京教務支庁を訪れた。余の考では本部直属の信徒として信仰するにあつたけれども本部に早速登参せられぬ事情がありさては教務支庁を訪れたのであつた。其の日は青年会の当日で事務所には山名大教会東都支教会の鈴木五郎氏がいられた。余は氏を事務員と思い神を祭ることゝ信徒加入の手続を尋ねた。其の時氏の云ふには

貴方はこれ迄何処の教会にも入つたことがありませんか？

ありません。
其んなら教務支庁は信徒を扱いませんから私が祀らして戴きましょう
余は教務支庁で信徒を扱わぬと聞いて失望しつゝも神様さえ祀れば良いと思つて氏に依頼した。氏は翌日約束の如く余を訪問し祭祀の日を定めて帰つた。而して中二日を置いて七月三十日に神を祀り山名大教会東都支教会の信徒となつたのである。
爾来余は東都支教会に於ても山名大教会に於ても破格の優遇を受けて今日に至つたのであるが天理教教理並に教会制度研究の結果余は教祖の天理教と今日の天理教との間に益々大なる距離を感じ遂に此の大恩ある養いの親、育ての親を捨てゝ生みの親、手引の親神の許に帰らなければならない様になつた。
之れを教理の上より云えば生みの親と育ての親とある場合には育ての親につくのが自然の道である。けれども余が天理教信仰の動機は全く神自身の教導に依るをもつて余は当然神直属の信徒たるべきものである。従つて余は今回山名大教会を退会するのは順序の理を無視するにあらずして却つてこれを徹底するのである。
けれども余は一般天理教徒に向つては余の今回の行動をもつて諸君の範となさゞらんことを告げるのである。何故なれば余の山名大教会を退会して神の直属の信徒に帰つたのは順序の道を踏んだものであつて諸君が自分の教会を退会するのは或は順序の道を破壊する恐れがあるからである。
余が特にこれを諸君のために断るのは余は神の律法を破壊するために来らず却つてこれを完成するために来たからである。
けれども余は諸君のために注意するのである。誤れる教師の言葉と虚偽なる儀式と虚偽の制度に従う勿れと。これに従ふものは神と教祖の敵である。
ただ
朝起きせよ
正直なれ
働け
これ三つは諸君の必らずや守らざるべからざるものである。もし諸君の中此の三つを守らざれば諸君が如何に教会の制度儀式に忠実なるとも決して救わることなかるべし。
助け一条の道は草が茂つた。今日の天理教々師の往来している道はただ助かり一条の道のみ。人泣かせの道のみ。彼等の求むる所は黄金ただ黄金である。けれども天国に於て最も小さきものは金なることを記憶せよ。虚偽の儀式と虚偽の制度とは諸君を姓名の道より引き戻す腰縄のみ。
余はこれだけ諸君に語つて我が生れ故郷なる朝起き、正直、働きの世界に帰つて行くのである。而して其処で何者にも束縛せられることなき自由の信仰を楽しむのである。
底には教理はあれども教権はない。本部の誤れる教権は遂に余を縛る力はない。教会の制度も亦然り。かくて余は一切の教界の虚偽より脱して独立の信仰に入るべきことを宣言す。
最後に一言余と山名大教会との関係について弁明して置かねばならぬことがある。余が昨年の六月新宗教第三号に始めて天理教界革命の声を発表するや事情を知らざる天理教界の人々は或は広池博士の暗中飛躍と云い諸井前会長の使嗾と云つた。けれども当時の余と博士並に前会長との関係は各々ただ一回の会見を遂げしのみにて元より教界の内情を語つたことはない。其れも余が本部にあつて毎日諸井氏もしくば広池氏に接しているものならば兎に角東西居を異にしてしかも未だ全く理解し合わざる人間が手紙を以つて六七月両号にわたる彼れだけの内容を書かせられる筈はない。元来余と雖も信仰を生命とせる人間である。人の使嗾や指導に依つて論説を発表する様な薄弱な人格は持たない。然るに昨年七月余が登本以来世人は専ら諸井氏が物質的にも精神的にも余の雑誌と関係あるかの如く信ずる者が益々多くなつた。けれども前述の如く雑誌を出すについて余は諸井氏より一言の使嗾を受けたことなく一文の補助を受けたことはない。これは神の明かに知つていることである。然るに今なお本部の中にも余と諸井氏との関係を疑いあたかも一味与党であるかの如く信じているのは余の主義信仰と諸井氏の主義信仰とが或る点に於て一致する点があつたためだと思われる。けれども主義信仰の一致は必ずしも事業の提携とはならない。現に余と諸井氏との関係が其うである。従つて余は山名大教会を去るに臨み一言二者の関係を明かにして余のために累を諸井氏に迄及ぼさゞらんことを望んで置く。
付記　此の宣言書には教会の制度及び儀式と余の信仰との距離について徹底した説明を欠いている。けれども其の一部分は昨年の新宗教に於て之れを発表したから改めて発表しない。其の他のことに関しては漸次新宗教誌末に発表する心算であるから此処に省略した。従つて余はただ独立信仰の結論に就て一言しただけに止めて置く。
紀元十億十万七十七年二月十二日

第二天理教界革命の声（一）

大平　隆平

第一章　階級制度を打破せよ

高山に育つる木いも谷底に
　　育つる木いも皆同じこと

余は紀元九億十万七十六年（大正四年）の六月より同年の十一月にわたつて天理教界革命の声を書いた。其れによつて多少天理教界を覚醒し得たことは読者の声に依つて明かである。けれども教界の革命は彼れにて尽きたのではない。更らに　　大なる革命を将来に要するのである。

分けて第一に打破せざるべからざるは階級制度である。これは天理教のみならず仏教に於ても基督教に於ても等しく主張する所のものである。

けれども余が此処に階級の打破を叫ぶのは人為的階級の打破であつて信仰の強弱知識の大小に依つて生ずる自然の階級を打破するの謂ではないのである。

一例を挙げて云えば男女の階級である。此の道では雌松雄松の隔なし即ち男女は其生得の権利に於て同等なりと明示されているにも係らず、やゝもすれば今日迄の世俗の習慣に従つて女子の存在、女子の権利の男子と同等に認められざるは世界ならば兎に角道の内部としては最も遺憾のことである。

次に私の最も遺憾に思ふのは本部と部下教会、会長と信徒、先輩と後輩との距離の余りに甚しきことである。ために社会に於ては相当の地位を占めているものも此の道の信徒としては下女下男同様に取り扱われ殆んど人間としての権利を認められない感がある。

就中地方の淳朴の信徒のが本部へ来て先ず驚くのは其の扱いの余りに粗暴なることであらうと思われる。これを入信当時に見るに此の道に引き入れる迄は猫撫で声で百方機嫌をとり一旦道に引き入るれば虎の如き権威をもつて望むのである。而して余程特別の引立でもない限りは自己の所属せる大教会乃至分教会の会長にさえ相対して面会することは出来ないのである。まして本部員もしくば管長をや。これは他宗は知らず温和謙遜慈悲をもつて何人にも隔てなく接見せられた教祖の開いた道としては余りに権威一世界の道一に堕しているではないか？

余は敢て親教会と子教会、兄徒と弟徒との順序を没却せよとは云わない。けれども其の間の関係を旧幕時代の主従の如くせよとは尚更云わないのである。

今日やゝ進歩せる家庭一天理教以外の一に於ては主婦は女中と共に台所に働き其の食事の如きも家族といささかも異ることなき同一の食事を給しつゝあるのである。然るに元来は主人も主婦も子供も同時に同じ食卓に座つて一つの物も分け合ふて通るべき此の道に会長もしくば役員の一家族は別仕立てにして信徒は他人か雇人の如く一家族の仲間に入られず別種の待遇を受けねばならぬと云ふことは世界一列一つの家族と説く天理教の先達者としては余りに言行の矛盾せるにあらざるか？

元よりこれには一部の反対論者がある。会長と役員もしくば信徒は徳が違ふ。核が違えば其の生活の程度の異るに何等不思議はないではないかと。如何にも世界の理から云えば其れに違いない。けれども私の云ふのは教祖の所謂同じ一苗一苗代と云ふ世界一家族の理想から云ふのである。苟も一家族ならば家族らしく一つのものも分け合ふて通るのが真にお道らしくはないかと云ふのである。

現にお道の中には余の言葉通りに実行して居る会長がある。否な余の言葉以上の事を実行している会長がある。其の人は信徒と同じものを食い、信徒と同じものを着、信徒と同じ所に寝て満足しつゝある。否な自分は食わぬでも信徒に食わせ、自分は着ぬでも信徒に着せ、自分は野天に寝ても信徒を内に寝せている人もある。これが真の親心である。而してかくの如き会長の下に教養されつゝある信徒も亦信徒である。彼等は又た自分は如何なる不自由を忍んでも会長の満足を計らんことをのみ心掛けている。かくの如く互いに喜んで衷心より立て合い助け合ふのが真の互い立て合い助け対の道である。

然るに今日一般普通の会長もしくば役員は如何？　信徒の食も奪つて食い、信徒の夜具も奪つて衣、信徒の場所も奪つて寝た。

此の三十年祭には此の二種の会長もしくば役員の雛型を見た。しかも前者は後者の千分の一である。そもそも此の中に於て何れがより多く道の要領を得た人であるであらうか？

余の考ふる所に依れば其れは云ふ迄もなく前者である。前者こそ真に道の精神を得た会長並に信徒である。

余は望むのである。天理教全体の人が此の精神をもたれんことを。今日の如く会長は大名の如く役員は家臣の如く信徒は藩民の如くにては到底真に相互の幸福を感ずることは出

来得ないからである。
　其の最も良き実例は世界である。世界は日一日と階級制度を打破しもしくば其の間の距離を縮めつゝあるに反しひとり天理教のみ旧式の陋風を何時迄も維持しつゝある。これは天理教本来の理想より云つても道の発達世界の進歩より云つても最も悲しむべき現象であると云わねばならない。従つて私は云ふのである。
　順序の道は立つべし。然し階級制度は廃すべし。
と。これ世現直路の神の理想より云つて当然達せなければならぬ結論である。
　之れは私自身に就て云えば余は昨年の七月より十月迄の四ヶ月間山名に於て事務員と同一に別膳で賄われた。これが余にとつて何よりの苦痛であつた。余が教会を出でゝ自炊を始めた一部の理由は教会では甘いものを食べられないためではなく他の日の寄進者や学生等と異つた特殊な待遇を与えらるゝに耐えないからである。
　正直の所余は人並以下に待遇せられることも苦痛なれば人並以上に待遇せられることも苦痛である。常に人と同等にありたい。これが余の本心の希望である。此の余自身の希望は人類的の希望であると信ずるのである。由来人間は其の徳によつて上下の区別はあつても其の生権即ち人間としての権利は同等である。これは法律の認むる所である計りでなく天理教々理の認むる所のものである。
　然るに此の生得の権利を無視して会長は神の如く信徒は獣の如く見ねばならぬと云ふ理由は何処にかある？　かくの如き不条理は教理其の者の罪にあらずして教理の誤解の罪である。
　道順序の理は決して其う云ふ極端な階級を会長と信徒、先輩と後輩、親教会と子教会の間につくべきものではない。これ余が人為的階級の打破を絶叫する所以である。

第二章　専制制度を打破せよ

　極端なる階級制度に伴ふ大なる弊害は極端なる専制制度である。
　此の道は御神楽歌にも明示されてある通り「皆世界が寄り合ふてでけたち来る」道であつて会長や役員の独断でやり通す道ではない。これは天理教の教理が然かく命ずるのである。
　然るに今日の教会の事業を見るに会長以下信徒が心を揃えて事をなすと云ふ事は少く多く会長もしくば役員が独断で極めたことを信徒に強制する傾がある。これは人間の自由意志を尊重する道としては誠に大なる矛盾と云わなければならない。
　けれども天啓の声に
　来ぬ者に来いとは云はん。往ぬ者に来いとは云はん
と云い御神楽歌には
　無理に出やうと云ふでない。心定めのつく迄は
とある如く何処迄も人間の自由意志を尊重し其の得心づく納得づくの上協同事をなすのが自然の人道である。其れを一人もしくば数人の了見で事を決するのは明かに共同生活の意義を破壊するものである。
　かくの如くにして人道の教師等は先ず自分自身より人道を破壊していささかも顧みないのである。
　此の原因は主として今日の天理教当局者に天理教の如何なる宗教であり世界の現状は如何なる状態にあるかを知らざるためである。何故なれば天理教は明かに教訓とか命令とか専制とか強制とかを脱して個人の自由意志を尊重する立憲的宗教文明的宗教であるからである。
　然るに此の社会の灯明となるべき天理教より始めて社会が現に捨てたる旧式の遺風を頑守するといふのは余りに道の発達世界の進歩を知らざるものと云わなければならない。
　由来此の世界に於て神ならで一人も人間に向つて命令を発する権利あるものはない。其の神すらも何うせ此うせの指図はしない。頼む／＼と柔しい言葉をもつて人類に接せられつゝあるにあらずや。其れを何んぞや人間の分際をもつてあたかも同じ同胞を召使の如く駆使するとは礼を知らざるも亦甚しと云わなければならない。
　蓋し此の道に働く人間は上を働き中を働き下を働き又た荒い事をなし、細い事をなし、中位のことをなすものがあつても等しくこれ道の道具である。お互いに立てつ立てられつ、助けつ助けられつ、頼みつ頼まれつ、謝しつ謝されつして睦じく共同生活を継続しつゝ行くべきものである。
　其れを何んぞや。自己の意に従ふものは近づけ逆ふものは遠ざけ甚しきは激怒を発するが如きはそもそも人道と云ふものゝ如何なるものなるかを知らないからである。
　蓋し教会は会長一人のために造られず、信徒一人のために造られない。又た此の世界は帝王一人のために造られず、国民一人のために造られない。全人類のために造られたので

ある。此の自覚なくして人道を人に教ゆると云ふが如きはそもそも片腹痛き事である。
　専制制度の打破！　此処に於てか決して無用の空論ではないのである。

第三章　封建制度を打破せよ

　階級制度並に専制制度に次いで打破せざるべからざるは封建制度である。
　つらつら今日の現状を見るに或は郡山と云い、或は兵神と云い、或は山名と云い、或は河原町と云い各々分立して自己の封土の拡張を争ふ様は宛然これ昔の大小名割拠時代に異らないのである。
　元より其の中には党派心を超越して純粋に世界一列の志を有する者もあるべしと雖も其の大部分は道全体の発達と云ふよりも自己の教会の発達、道全体の利益と云ふよりも自己の教会の利益を中心とせざるものはない。
　殊に残念に思ふのは世界一列の理想より云えば何れの教会の信徒をも同一視せざるべからざるに実際は中々其うではない。自己の教会の信徒には便宜を与えても他の教会の信徒は殆んど異端視するの風がある。
　更らに以上の残ねんは道の理想より云えば他の教会を助けても信徒を結成してやるべきに却つて信徒の掠奪を行つていささかも恥じない。此等は道の精神より云つても最も悲しまざるべからざる現象である。
　之れを世界の上より云つても封建制度は五十年百年前の昔の夢にして今日は皆郡県制度によつて昔日の党派心を一掃している。天理教の終局も亦かくの如くならざるべからず。即ち各教会は其の封土を本部に返上して新に支庁の管轄下にあつて新しき教政を布くべきである。
　けれどもこれには多くの反対があるであらう。けれども道全体の発達を計るには其れより外に取るべき最良の方法はない。今日の如く各教会が各々党派を立て其の党派心を中心として布教をなしつゝある中は決して真の天理教の発達は期して見るべからざるものである。従つて党派心の打破と云ふことは今日の教会の何れも協力一致してなさゞるべからざる所のものである。
　此の党派心を打破し世界一列の精神に復帰したならば何も支庁の管轄下に移すの必要はない。けれども其れは今日の如き封建制度の下には到底望むべからざるものである。従つて道の発達は必らずや新たなる制度を生むであらう。其の時こそ必らずや今日の封建制度の打破せざるべからざる時であらう。私はこれを賢明なる教界の士君子の問題として提出して置くのである。

第四章　中央集権を打破せよ

　今日の天理教は教祖の精神に相反せる矛盾と欠陥との多くをもつて居るが其の中でも此の中央集権の如きも矛盾の一つであると思われる。
　一例を挙げて云えば財力の吸収である。実際今日の部下教会の状況を見るに其の枯形せる有様は見るに耐えない。しかも本部はなお教権を利用して部下教会の熱血を絞り其の金をもつて全く無用の用に浪費しつゝある。これは明かに教祖の意志ではない。教祖の意志より云えば親は食わないでも衣ないでも住む所がなくても子に甘い物を食わせ美い衣物を着せ奇麗な所に住ませたいのが教祖の理想であつた。然るに今日の本部のなす所は如何？
　部下は痩せてもこけても本部へ金銭を吸収しさいすれば良いのである。しかも其の吸収したる尊き部下の膏血は何のために費さるゝや？　曰く軍資金曰く選挙運動曰く建築曰く何々と其の中の一文として道の発達とか社会の利益とかのために費さるゝことなし。
　見よ本部の邸内には大きな犬を飼つて其のために人一人を付き添わせ、加之これに与ふるに部下の会長もしくば信徒の口にするにとも出来ない上肉を与えている。かくの如くにして部下の膏血を絞つて集めた金は銀行へあずけられて漸次かくの如き無意義の費用に向つて空費せられつゝあるのである。天理教が社会より毒虫の如く嫌われつゝあるはこの吸収を知つて発散を知らざるに依るのである。
　吾人は必ずしも信徒の膏血を絞る勿れとは云わない。ただ其の金を有益の事業に向つて費せと云ふのである。彼の救世軍が国家よりも社会よりも尊重せられつゝあるは其の教理が天理教より優つて居るためではない。其の事業が公利公益に資する所があるためである。ただ病助ける計りが助けではない。心直す計りが助けではない。苟も人類を幸福にするものならば凡てこれ助け一条である。天理教も此の点に向つて金銭を費すならば吾人はいささかも尽せ果せと云ふことについて反対の声を挙げないのである。けれども今日の如く此の貴重な信徒の膏血を湯水の如く無用の事に向つて浪費するに於ては大なる異議を提出せざるを得ない。

蓋し家屋や家具や庭園は金さえあれば何時でも出来ることである。けれども道の発展は容易に出来ない。今日は宏壮なる建物を立てゝ信徒に向つて城壁を築く時ではあるまい。否な道の発展のために物質も精神も投げ出すべき時である。教祖もし御在世ならば今日の本部の所業を如何に見給ふべき？　吾人は教祖の精神を思ふ毎に涙滂沱として止めることが出来ない。

けれども今日の本部に向つて何を云つても駄目である。何等の良心はドン底より腐つてしまつた。彼等には公利公益もなければ道に対する永遠の計もない。ただ眼前に宝の山を築いて其れを眺めていれば良いのである。部下が起きやうが倒れやうが其れはいささかも彼れ等の問ふ所ではない。道が発達しやうがしまいが其れはいささかも問ふ所ではない。ただ今日を無事に通れば良いのである。気概もなければ抱負もない。計画もなければ事業もない。ただ浪費あるのみ。ただ物質と金銭と労力と時間との浪費あるのみ。かくの如くにして教祖の助け一条の精神は全く没却せられおわんぬ。

けれども時代の要求は何時迄も本部に此の惰眠を貪らしめて居ることを許さない。従つて吾人は先ず此処に重要なる問題を本部に向つて提出するのである。其の問題は本部が今日の如く無用の金を銀行の金庫に遊ばせて置くならば先ず部下の疲弊を救い引いては公共事業、慈善事業に教庫を提出すべし。然らざれば部下の熱血を絞ることは断然中止すべしと。これ至当の言である。

見よ部下教会の辛苦艱難を。彼等の中には食ふに食なく、衣るに衣なく、住むに所なきものが往々ある。いじらしくて見ていられぬ。これをしも彼等の因縁として看過すべきか？　吾人は其の然るべからざるを思ふものである。

凡て一本の樹木にたとえて云つても枝葉が繁茂してこそ根幹も栄えるのである。今日の如く部下は見る影もなく衰えて殆んど生色なきに至つては本部のみ一人栄えたりとて何の希望かあるべき？　何の光栄かあるべき？

要するに今日の本部は余りに其の権力を振るい過ぎる。けれども親の権力の余りに大なる家には子は自然に其だることは出来ない。主権者の勢力の余りに大なる国家は国民が育たない。天理教も亦其うである。今日の如く本部がひたすら中央集権もしくば中央集金に腐心している間は決して部下教会の発達は期して望まれない。これ瀕々として教会の倒るゝ所以である。従つて此の政策は道永遠の計より云つて決して策を得たものではない。道永遠の計より云えばもつと部下に向つて精神上並に物質上の自由を与えねばならない。然らざれば決して斯道の発達は望むことが出来ない。

つらつら今日の本部の所業を見るに本来は疲弊せる教会は之れを助けても維持発達して行かなければならぬのに却つて其の根も葉もなき迄血液を絞り上げんとしつゝある。これが本部か？　これが本部の事業か？　凡そ世に最も不幸なる子供は理解と同情となき親をもてる子供である。彼等は生涯親権の暴戻の下に泣かざるべからざる運命を有しているのである。しかも其の横着なる親を制して不幸の子供を救ふのが吾が使命である。

凡て親は如何なる横道もなして可なりと云ふ規則は此の世界には設けられていないのである。親も子も凡て皆生権に於ては同等である。其れと同様に本部の勢力の余りに大にして部下の勢力の余りに小なるは神の喜ばざる所である。これを一つの家庭に見よ。親の権力の余りに大なる家庭には必らず子に不孝の子が多いのである。親と子夫と妻の勢力の均等せらるゝかもしくば其れに近づくに従つて其の家庭は漸次理想の家庭に近づくのである。

私は本部と部下教会、会長と信教との距離を昔の親子主従の如く大ならしむるを好まない。これ私が極力中央集権を打破せよと絶叫する所以である。

第五章　教理を乱用する勿れ

凡そ何れの宗教に於ても多少教理の乱用せられざる宗教はないが天理教には殊に其の弊害の甚だしきを思ふ。

「一例を挙げて云えば順序の理である。元来順序の理は教会の系統をのみ指して云つたものではない。人と人との間、物と物との間、事と事との間に横わる一切の順序を指して云つたのである。

例えば汽車や電車に乗るにも先着順に切符を買い先着順に乗降すべきが順序である。けれども今日の天理教々師並に信徒を見るに彼等は教会の順序については驚くべき訓練を経て居るが社会に出でゝ長者を立て、幼者を立て、婦人を立て、老人を立て、先輩者を立て、先着者を立てると云ふ社交上の順序と云ふものについては少しも訓練せられていない。これじゃ何のために順序の理を教えているのかわからない。

そもそも順序の理は教会のための順序の理ではない。人間の活動律である。従つて工場に於て働くにも書斎に於て仕事をするにも台所に於て働くも皆順序を重んずるのが順序の

理である。
　然るに今日の天理教々会はこれを教会の順序にのみ利用していささかも人間と人間との間の礼儀を説かない。これは明かに教会が自営上教理を乱用したものに外ならない。
　例えば御授訓の御礼の如き事情願の御礼の如き部下教会の献金の割当の如き徒らに順序の理を乱用して私腹を肥やす方便に外ならないのである。
　けれども教理の乱用はひとり順序の理のみではない。凡ての教理は売品として各地の天理教会に展覧せられつゝある。本部を始め部下教会は助け一条の精神を忘れてただ営利に向つて汲々たるのみ。
　かくの如くにして此の尊き博愛事業は全く営利的事業と化してしまつた。そもそもこれに向つて喜ぶべきか悲しむべきか吾人は其の云ふべき言葉を知らないのである。

第六章　此の道は名聞を求むる道ではない

　凡そ宗教生活と凡俗生活との相異は一は真実に生き一は名利に生くる点にある。然るに今日の天理教界を見るに全く凡俗以上である。
　彼等天理教々師の中には勿論真の布教者の精神を備えているものもあれども其の大部分は一人でも多くの信徒をつくりもつて教界に巾を利かせんとする憐れむべき小なる志をもつて布教している者が大部分である。
　彼等の唯一の光栄とする所は美衣美食に飽き大なる教会に住んで出入に送り迎えをつけ上は長者の覚え芽出度く下は信仰の渇仰の厚からんことのみである。従つて往々集談所が宣教所となり、宣教所が支教会となり、支教会が分教会となり、分教会が教会となり、教会が大教会となり、権訓導が訓導となり、訓導が権少講義となり、権少講義が少講義になり、少講義が権中講義となり、権中講義が中講義となり、中講義が権大講義となり権大講義が大講義となり、大講義が権少教正となり、権少教正が少教正となり、少教正が権中教正となり、権中教正が中教正となり、中教正が権大教正となり、権大教正が大教正となることあらんか。彼等は之れをもつて無上の光栄としている。其の名誉心の強きこと全く俗人以上である。
　殊に婦人になると虚栄心は更らに一掃甚しく祭礼に於ける楽器演奏の順序もしくは婦人会に於ける講演者の順序等血眼になつてこれを争い、一旦他人に依つて順番を先取せらるゝや後日の宿怨長く消えないと云ふ有様である。
　これも今日の天理教徒の前身が天理も人道も分らない無学文盲の成り上り者の多きがためであるが苟くも天理人道を人に教ゆる本部員夫妻を始めかくの如き状態にては余りに興醒めたる有様にて唖然として云ふべき言葉を知らないのである。
　しかも彼等は云ふ。本部員は道の功労者である。宜しく彼等をもつて儀表とすべしと。無知の信徒はただ名を聞いて既に涙をこぼしている。けれども少しく眼の醒めたる人間には彼等の人格や生活を見て尊敬せんとしても尊敬することが出来ないのである。
　そもそも此の道は陰徳をつむとも表面には黙して語らざるをもつて道の精神となす道である。然るに今日の本部員を始め部下教会の教師に至る迄一言一行の功名より一円二円の慈善を迄人に向つて誇示せんとす。吾人は彼等の多くが殆んど何のために此の道を信仰しているかを知らない。
　由来人間と云ふものは此の道を信ずると信ぜざるとを問わず其の功を包んで罪を衆人の前に懺悔すめ所に其の人格のゆかしみはあるのである。然るに一言の美一行の善迄発表して却つて裏に一言の醜一行の悪を包まんとするが如きは其の人格に向つて何等敬慕すべき香味あることなし。しかもかくの如き偽善者が斯教の大部分ならんとは。余は寧ろ自己の欠点に対する雄弁者にして自己の長所に対する唖者たらんことを欲するのである。これ我が理想である。
　私は天理教々師信徒諸君に告ぐ。此の道は名聞を求むる道ではないと云ふことを。もし諸君にして名聞を求めんか。宜しく斯教を去つて政治界に下り人位人爵を争ふべきである。其の方が一層諸君にとつての捷径である。もし又た斯道を信じて真に人生の意義に徹底した絶対価値生活を求むるならばただ真実なれ。諸君の選むべき生活は此の二つしかないのである。敢て天理教信者の選択を促がす。

第七章　此の道は営利を求むる道ではない

　凡そ此の世界にありと凡ゆる罪悪は名利の観念より生れないものはない。誠に此の二つは一切の罪悪の父母である。天理教は此の名利の観念を打破して真実の生活を人に教ゆる道でありながら今日の天理教にては本部を始め一般教師に至る迄如何にせば金を儲け得べきかと云ふ様のこと計り考えている。元より中には真に真面目なる教師ありと雖も其は真

に暁天の星のみ。其の大部分は信徒の懐を当てにして布教して居る者が多い。これは道の順逆を全然顛倒せるものと云わなければならない。
　けれどもこれはひとり教師の罪ではない。本部より始めて其の模範を示しているから止むを得ない。今日の本部の主義を見るに金は出来得る限り部下より絞れ。けれども一文も有益なことには支出する勿れと云ふ主義を奉じているらしい。
　聞く所に依れば今年の教祖三十年祭には六万五千余の金を儲けたといふことである。其の中支出した金が五千余円とのことなれば純益六万円は本部の金庫に納つた筈である。しかもなお献金の少なかつたことをこぼして来る四月の御本席十年祭にはかなり多数の信徒を引き寄せて金儲けの準備におさ　　怠りないと云ふことである。
　私は之れを聞いて悲しんだといふよりも寧ろ呆れたのである。これが道かと。寺の門前には鬼が住むとは私も聞いていた所であるが今日の天理教は御地場の中に鬼が住んでいるのである。之れに向つて金を投ずるはあたかも施餓鬼を行ふのである。
　元よりこれは人間を中心とした観察であつて之れに依つて熱心なる真実の信仰家の寄進を妨害するものではないが本部がかくの如き精神であり各教会がかくの如き精神である以上は宝財を投ぜよと云つても皆躊躇するのが自然の人情である。今日一般に信者が控えているのは之れがためである。
　けれども信者が財布の口を括れば括る程本部や教会は種々なる口実を設けて信徒の財をせびらんとしている。かくの如くにして此の貴き新宗教も全く拝金宗と化してしまつたのである。
　聞けば中山家の蓄財は少く見積つて五十万円多くて百万円近くの金を貯蓄しているそうである。しかも一文も公共事業慈善事業に使われたことを聞かない。往々投資すれば軍資金とか代議士選挙運動費とか云ふ如き反宗教的失費に向つて一万二万の出資を惜しまない。之れが果して見識ある宗教家のすることであらうか何うであらうか。
　苟くも宗教家たるものが赤十字や傷病兵慰問に一万二万の金を投ずるならば結構なれど其れを軍資金に投じて戦争を資けるとは何う云ふ理由か？　殊に代議士選挙運動に向つて二万三万の金を惜まず投資するが如きは殆んど何の意味なるか吾人は其の理由を了解するに苦しむのである。
　昨年の道の友に故管長の逸話として故管長自身軍夫となつて従軍せんとしたことを甚だ美しき行いの如く書いていたけれども吾人はいささかもかゝる行いを賞讃しない。苟くも一派の管長たるものが軍夫を志願して迄戦争を助ける理由が何処にある、仮りにも宗教家たるものは社会の動乱の外に立つて公平なる処置を取るべきものである。其れを感情に任せて自ら出征せんとする如きは決して賞讃することが出来ない。もし軍夫を募集して戦争を助くるならば何故赤十字と同じく傷病兵の看護の如き宗教的行為に向つて努力せざる。管長始めこう云ふ無自覚な状態にあるが故に其のする事なす事一として見るべき事業はなかつたのである。
　かくの如く奸者の甘言に誘われ無意味な所に大金を投じて一時の虚栄心を満足する裏面に於て何れだけ美しい宗教的事業をなしつゝあるかと云ふに全く零である。内は教会が如何に危地に陥るもこれを救ふなく外は社会が如何に苦しみつゝあるもこれを助けることはない。而してもし出資の必要ある場合には教会に献金せしめて決して自腹を切らうとはしない。これが故管長以来本部の取つて来た出し惜しみ主義である。
　謹んで教祖の精神を按ずるにあればあるだけ世界助け万人助けのために投じて一文も余さゞるが彼女の主義であつた。其れと之れとを比較したら余りに其の精神の距離の偉大なるに驚かざるを得ない。
　之れを詳しく云えば教祖の精神は純宗教的精神である。今日の本部の精神は純俗人的根性である。既に現在の所これだけの距離がある。将来は必らずや益々大なる距離を生じて行くであらう。其の時こそ天理教は事実に於て滅亡した時である。
　凡そ宗教の目的は金儲けにない。又た貯財にない。世界一列の救済にある。人格の修養と真生活の建設にある。今日の天理教徒は全然これを助かり一条の道とした。云い換えれば乞食非人の道とした。これ吾人をしてこれに向つて大なる非義を鳴さゞるを得ざる原因である。敢て一般天理教徒の覚醒を促がす所以である。

第八章　堕落せる天理教

　凡そ天理教の堕落せる今日より甚しきはない。情実因襲の道にあらずと称して情実因襲に流れ、形式儀礼の道にあらずと証紙期儀式儀礼に流れ、追従軽薄の道にあらずと称して追従軽薄に流れ、貪婪吝嗇の道にあらずと称して貪婪吝嗇に流れ、邪愛憎悪の道にあらずと称して邪愛憎悪に流れ、怨恨忿怒の道にあらずと称して怨恨忿怒に流れ、強欲高慢の道にあらずと称して強欲高慢に流れつゝある有様は世界並以上である。かくの如くにして一

二の教会を除くの外は本部を始め一般の教会の会長役員信徒はことごとく教祖の精神を没却しておわんぬ。
　十五年前二十年前には世界並と云えば一種俗人に対する嘲弄語であつた。然るに今日の天理教は何？全く世界並以下である。勿論中には一二の高き道徳生活を行いつゝあるものはある。けれども其の大部分は彼等の軽蔑しつゝある世界並以下の低級な道徳しか持つていないのである。今日天理教が社会より蔑視せられ其の教師信徒が社会より一人前の交際をもせられないのは畢竟する所今日の天理教々師信徒の人格の劣等なるがためであると称せられてもいささか弁明の辞がないのである。
　実際或る一部分の人は別として一般の天理教々師並に信徒を社会の人間と比較するにいささかも彼等より優れた道徳を有すと思ふ者はないのである。依然として無知劣等の人間である。
　殊に心細いのは彼の本部員である。彼等は天理教界に於ては自分達より偉い者はないかの様な顔付きをして威張つているけれどもこれを世界の宗教家の中に列して果してこれが世界第一の宗教家だと云い得るものがあるであらうか？　私は日本の中流社会に於て果して一個の人格ある人間として認められるゝや否やを危ぶむのである。
　今日の一般社会の信仰は平凡普通の天理教々師信徒の信仰の如くしかく幼稚なものではない。又た今日の一般社会の状態は天理教に比していささかも遜色あるものではない。却つて天理教こそ一般社会よりも低級な世界を形成しているのである。これは今日の本部を見ても分かることである。
　其処には世界に於ても見るべからざる情実因襲が纏綿している。其処には世界に於ても見るべからざる形式儀礼が行われつゝある。其処には世界に於ても見るべからざる追従軽薄が行われつゝある。殊に貪婪、吝嗇、邪愛、憎悪、怨恨、忿怒、強欲、高慢の程度の甚しきこと世界並といささかも変らない。否な全く世界並以上である。殊に近来一般の傾向が益々物質的に流れて来て以来宗教的情調の如く見たくも見ることが出来ないのである。
　しかも社会に対する態度は如何と云ふに全く利己的、孤立的で一つとして具体的に社会を利益せしことなく、又たせんとする観念に全然欠けている。其の癖官憲と云えばあたかも主人か何かに対する様にペコ　　してただ其の意を迎えんことにのみ腐心しいささかも鷹揚なる宗教家の襟度がないのである。
　かくの如く内に何等の誠意なく外に何等の真実なくただ信徒より金銭を巻き上げることをのみ考えるがために社会より益々敬遠せらるに至つたのである。
　近来識者の間には天理教の価値を認むるもの漸く多きを加え来たが其のために今日の天理教其の者はいささかも是認せられないのである。否却つて識者の嘆きを重ねるのみである。これは中山家を始め一般天理教々師信徒の当然負ふべき責任である。

第九章　神の栄光は地に堕ちた

　基督曰く
「汝等は地の塩なり。塩もし其の味を失わば何を以つてか元の味に復さん。後は用なし。外に棄てられて人に践するのみ。汝等は世の光なり。山の上に建てられたる城は隠るゝことを得ず。灯を燃して斗の下に置く者なし。燭台に置いて家に在る凡ての物を照さん。此の如く人々の前に汝等の光を輝かせ。然れば人々汝等の善行を見て天に在す汝等の父を崇むべし」
　エホバの栄光を顕す者はエホバの信徒である。天理王命の栄光を顕す者は天理教徒である。エホバの栄光を汚す者はエホバの信徒である。天理王命の栄光を汚す者は天理教徒である。
　然るに今日天理教と云えば名を聞いただけにても逃げ去るのは今日迄の教師信徒の多くが社会をして斯道の価値を認めしむる程卓越せる人格と行為とをもたなかつたためである。けれども何時迄も何時迄もかくの如き状態にあつては天理教の発展を妨害するのである。従つて吾人は先ず神の名誉を復活せよと叫ばざるを得ない。

第十章　神の名誉を復活せよ

　けれども神の名誉を汚すものが一人二人の教師信徒ではないと同様に神の名誉を復活する者も一人や二人ではならない。天理教徒の凡てが協同してこれに当らなければならない。
　其の第一要件は人格の向上である。此の人格の向上を度外視して天理王命の神格を説くも何の効果もないのである。
　凡て一人の患は全世界の患である如く一人の不心得者のために天理教全体の名誉を失ふ

のである。しかも彼等は此処に想到せず自分一身の満足のために天理教全体の名誉に関することをあたかも顧みない。今日迄天理教が淫祠邪教視せられ天理王命が邪神視せられて来たのはかくの如き人格劣等の教師信徒の多かつたがためである。
けれども時代は常に進歩するものである。従つて社会は何時迄も劣等なる教師の言に耳を傾けない。彼等は自然淘汰の結果遂に社会の劣敗者たらざるべからざる運命を自ら作りつゝあるのである。
これは道の発達より云つても同様である。
殊に此の道は晩かれ早かれ世界を一貫しなければならぬ道である。其れには此の道の宣伝者たる布教師より善良なる模範を示さなければならない。然らざれば天理教の真価は永遠に社会に認めらるゝ折がないであらう。
分けて最も重大なるは天理王命である。斯の道の中心生命たる天理王命よりして邪神の如く信ぜられつゝある間は決して信を社会に繋ぐことは出来ない。
けれども神は無形の霊である。自ら人間の前に姿を表して其の無限の栄光を顕すことはない。従つて神の栄光を顕わすも汚すも信徒の人格と生活とに待つ所が多い。これ一般天理教徒に向つて人格の向上を要求する所以である。（紀元九億十万七十七年二月十六日）

無形教界より（二）

大平　隆平

此の道は助け一条の道なりとは我が夙に聴ける所なり。然るに今日の天理教徒はこれを助かり一条の道と化せり。神の残念いかばかりぞや。我が残念如何ばかりぞや。
畢竟教界は道をつける一時の方便のみ。世に監獄の取り払われる時は教界も亦取り払わるべし。
我は我が同行者に告ぐ。我に依つて此の道に入れるものは世の終迄有形の教界を建設すること勿れと。
其の時来らば今日の教界は取り払われてただ眼に見えざる心の宮のみぞ栄える。其の時己が心中に無形の教界を有たざるものは禍なるかな。
されば火に燃え、水に流され、風に倒さるゝ有形の教界を建つるために己が心を労する勿れ。ただ諸君の心中に無形の大教会無形の神の宮を建つることにのみ心を労すべし。
凡そ信仰の要義は肉体の疾病の存するがためなり。精神の疾病の存するは人生の意義を自覚せざるに起る。
宗教の奥義は人生の意義を自覚して最も価値ある生活を営ましむるにあり。此の本義を教えざる宗教は異端なり。外道なり。元より宗教として何等の価値あることなし。
今日の天理教々師のなす所を見るに病を助けることゝ金をとることゝの二つより何物も知らず。又た信徒の求むる所を見るに病の助からんことと其の代償として金品を教会に捧ぐることより外何物も知らない。これ異端なり。外道なり。外道の信仰なり。
我は我が同行者に告ぐ
朝起きせよ
正直なれ
働けよ
此の三位の修業こそ誠一体の生活なれ。これより外に我何物も神より教えられず。これより外に我何事も教祖より教えられず。又た教えらるゝの要なし。
何故なれば此の中にこそ天理教々理の一切は含めばなり。互い助け合いの理も此の中にあり。日の寄進の理も此の中にあり。足納の理も此の中にあり。発散の理も此の中にあり。一切の教理は只此の三条の教憲生活を完成するためにのみ説かれたり。これ人生の意義なるなり。これ人生の価値なるなり。
されば人々よ。偽善なる教師と無知の天理教徒のなす所を見て教会の制度及び儀式を頑守することをもつて信仰の要義は尽きたりと思ふなかれ。凡そ教会生活は必ずしも宗教生活にあらざるなり。しかも我等を真の幸福に導くものは教会生活にあらずして宗教生活なることを。
我は今日の天理教徒が無上の宝典として尊む天理教々典について何等の価値をも認めず。
我は今日の天理教会にて朝夕読み上ぐる古典的文字の羅列（祝詞）に何等の価値をも認めず。
凡そ神と人との交情は死して既に生命なき古語に依つて行わるゝものではない。現に生命を有する現代語に依つて行わるゝものである。
凡て神と人との交情は繁雑なる儀式に依つて行わるゝものではない。只誠と誠との感応

に依つてのみ行わるゝものである。
　我は諸君に告ぐ。人生の意義と何等根本的の交渉を有せざる虚儀虚礼を捨てよと。
　これ信なり力なり生命なればなり。
　凡て人格の発展と人生の発達を教えざる宗教は真の宗教にあらず。
　然るに今日の天理教を見るに人格発展人生の発達の如きは毛筋程も目的とせられてはいない。
而してただ金を本部に吸収することゝ部下を泣かせることゝの外何等有益なる事業なるものあることなし。
　道はかくの如く廃れり。道はかくの如く壊れたり。されど智者は目を塞ぎ賢者は口を塞いで誰も云ふものなし。何故なれば彼等は自己の名利の失われんことを恐るればなり。
　されど我は此の道の人に告ぐ。凡そ神のため人のため理のため道のために我と我父母、兄弟、妻子、眷族、朋友、生命、財産、地位、名誉、権勢を捨てざるものは救わるゝことなしと。
　古来人生の真人は皆神と人とのために我と我が付属物を一切捨てたり。教祖を見よ。彼女は自己は勿論自己に所属せる有形無形の一切のものを捨てゝ助け一条の道に殉じたり。
　凡そ何事をなすにも此の殉教者的精神、殉道者的精神、犠牲的精神を有せざるものは路傍の石をも動かすこと能わざるべし。
　我は諸君に告ぐ。此の婦人を見よ。此の男子を見よと。けれども其の婦人は我が妻をさして云ふものにあらざるなり。又た其の男子とは我自身を指して云ふものにあらざるなり。我は創世の始め生れたるものゝ中最も愚かなる男子である。又た我が妻は神域に接して其の内に入ることの出来ない迷蒙の一婦人のみ。我が此の婦人を見よ。此の男子を見よと叫びしは教祖と本席とを指したのである。此の二人は現在天理教の日月である。否な世界の光である。我等はただ此の二人の光を仰ぎ見るべし。
　実に此の二人は此の愚かなる我に向つて人生の意義とは何んぞやと云ふ我が半生の疑問に回答したただ二人の人であつた。
　愛する人々よ。我は諸君のために道を説かず。何故なれば我は未だ自ら其の資格あるものとは思わざればなり。
　我はただ汝自身のために灯火を掲げよと云ふ神直接の教訓を守らん。而してたゞ一直線に我に明かされたる神の道　　朝起き、正直、働きに進まんのみ。諸君の随ふと随わざるとは我が問ふ所にあらざるなり。
　けれども我は世に一大事因縁の時は迫れども其の時を知らず。徒らに因縁を積み重ねて得々たるものあり。我は其れ等の人々に向つて一言の忠告は惜まず。
　されど我には其の者を信徒として教会を建築せんと云ふ野心は毫も有ることなし。何故なれば信徒は皆な神の信徒理の信徒にして我の信徒にあらざればなり。
　又た教会に関しても我が其の日、其の時、其の人に面せる所は即ち我が教会なり。
　我は天を摩する宏壮美麗の教会を建つるために神の信徒を苦しむるために来らず。何故なれば彼の火に焼け、水に流れ、風に倒るゝ有形の教会を建つるよりも火に焼けず、水に流れず、風に倒れざる無形の教会を彼等自身の心中に建設するにあり。これ我が使命なり。我が理想なり。我が事業なればなり。
　されば我は此の道の信者未信者に向つて告ぐ。
　凡そ此の世界に於ける報恩の価値の最も小なるものは金なりと。
　慈善は黄金にあらず物品にあらず又た真理にあらず。我が誠なり。我が真実なり。苟くも人を助け人を楽しまする真実なくば百万の黄金もただ土塊のみ。四十八庫の物品も又た塵埃のみ。千載の真理もただ風の音のみ。
　与えよ。而らば与えられん。されど与えは価なり。真の与のなき所に真の価あることなし。
　我は貧なり。されど我は如何なる苦境に陥るも人に物を乞わんとは思わじ。何故なれば其はただ乞食と同一の因縁を重ぬるのみなればなり。
　与えよ。与えられんことを求むる勿れ
　助けよ。助けられんことを求むる勿れ
　愛せよ。愛せられんことを求むる勿れ
　許せよ。許されんことを求むる勿れ
　尽せよ。尽されんことを求むる勿れ
　これ我が信条なり。
　凡て与えられんことを求むるものは与えられず。凡て助けられんことを求むるものは助けられず。凡て愛せられんことを求むるものは愛せられず。凡て許されんことを求むるものは許されず。凡て尽されんことを求むるものは尽さるゝことなし。ただ其の反対の者にのみ天の価はあり。

　此の道は劣者、弱者、不具者、不幸者、不善者を造る道にあらず。優者、強者、健全者、幸福者、善人を作るの道、就中独立自由の人格を作るの道なり。これ天理なり。人道なるなり。
　凡て此の道を歩む者は生き此の道を歩まざるものは亡ぶ。これ自然の約束なり。
　我は生れてより以来未だ大悪は罰せらるれども小悪は罰せられずと云ふ科法を聴かず。
　我は生れてより以来未だ大善は賞せらるれども小善は賞せられずと云ふ律法を聴かず。
　されど凡そ賞罰を目的として善悪を取捨するは未だ真の道を得たるものにあらず。ただ病を恐れて悪をなさゞるもの亦然り。ただ毀誉褒貶、利害得失を超越せる人生の意義の自覚者の生活のみ価値あり。
　人は云ふ。我は二十歳なり。我は五十歳なりと。されど人寿を享けて以来九億十万七十七年。元より老若あることなし。
　凡て人間は同等の年齢と同等の権利と同等の自由とを天より享く。往々人間に貴賤貧弱の差あるは畢竟其の精神の創作のみ。
　されば心の広き人は幸なり。其の人は広き世界を有ち得べければなり。
　されば心の深き人は幸なり。其の人は深き世界を有ち得べければなり。
　されば心の高き人は幸なり。其の人は高き世界を有ち得べければなり。
　人格の崇高偉大！　我はこれ以外に我に求めず。高尚美麗の世界！　我はこれ以外に世界に求めない。これ我が要求なるなり。

　天理教初代管長未亡人　中山玉恵子に与ふる書

大平　隆平

　未亡人様
　忘れもしない昨年の暮私は私の発行している雑誌新宗教の教祖三十年祭記念号として出す感謝と記憶の中に教祖に関する御話を願いたいと思つて一日の中二度貴女をお訪ね致しました。然し二度とも玄関払いを喰つて帰りました。
　最初の一度は午前十一時頃伺つたのですが未だお休みだからと云ふので引つ返しました。二度目は午後の二時頃であつたが用事があるから面会が出来ぬと云ふことでした。私は玄関番の顔を見て其れが私を断るための詐であることを直ちに観破致しました。而して貴女に私見た様な者でも引見して教祖のお話を一言でも聞かして下さる誠意のないことを悟つて直ちに引き返しました。恐らく貴女には貴女の祖母様の様に尋ねて来るものには何んなものでも満足を与えて帰そうと云ふ愛は勿論の事貴女が今其うして贅沢な生活をしているのも貴女の徳とは云え祖母様の御蔭に何れだけ預つているかをお忘れのことゝ存じます。もし其うでなかつたら外の新聞記者や雑誌記者にはドン／＼御面会なさるのに私一人に限つて面会が出来ないと云ふことはない筈です。
　此う云つたならば貴女を神様か何んぞの様に思つている天理教の人々は何を一信徒の分際に生意気云ふと申すかも知れません。けれども天理教では成る程下級な信者かも知れませんが社会では結句一人前の人間で通れる人間です。其れも外の事なら兎に角教祖の事蹟を永遠に伝えたいと思つてワザ／＼御訪ねした私を詐をつかつて断わらないでも良いではありませんか。
　未亡人様
　私は教祖様のお話でも聞くのでなければ何も戸迷つて貴女なぞ御訪ね致しはしません。教祖御親の人格を慕えばこそせめて貴女に逢つて一言教祖様のことをお聞き申したいと思つてお訪ねしたのです。けれども御安心下さい。貴女の生きておいでの間は貴女に逢いたいと思つて二度とお訪ねする様なことはありませんから。たとい貴女の方で会いたいと仰つても会いは致しませんから。
　けれども私はつく／＼考えました。天理教の人達は何うしてこうも訳の分らぬ人間計り揃つているだらうかと。実際其うです。彼等は五十年百年先きになつたら教祖の事蹟は湮滅してしまうから今の中に材料を蒐集して置かなければならん等と云ふ真面目な考をもつているものは一人もありません。ただ其の日／＼を訳もなく暮して行けば其れで良いのです。
　実は貴女に御願するズット前に人をもつて山沢お久さんに教祖のお話を承りたいと申し入れたのです。其の時の返事が何うです。
　大平さんには恐れ入ると。何うです。人を馬鹿にしているじゃありませんか。貴女にしろお久さんにしろ私の仕事を何んと心得てるでしょう。私は何も自分の欲や得で貧苦に甘んじて研究をやつてるのではありません。皆な天下国家を益するがためです。其れを何か私が自分一身の）つてん欲望を満足させるために勝手に調べ物でもしているかの様に思つているのです。けれども

御覧なさい。今の中に天理教に真面目な学者が出て教義なり歴史なり教祖伝なりを調べて置かなかつたら百年の後には天理教と云ふものは全く正体のわからぬものになつてしまいます。けれども其んなことは貴女方には何うでも良い問題でしょうから私も真面目になつて話は致しません。
　ただ一言他の新聞記者に向つて「松村様は教祖の足跡を踏んで監獄へ行つて御苦労していて下さる」と云ふ様な飛んでもない馬鹿話をなさる暇があつたら私は其んなことよりはもつと　　大事な教祖の記憶の一言でも話して下すつたらと思ふのです。又た其んな馬鹿らしい話をさも名言を吐いたかの様に思つて新聞を切り抜いて置かれる位なら教祖に関する記憶でも御残しになつた方が余程優しいかと思います。
　けれども之れについては何もいいますまい。云つた所で貴女を始め本部の人達は私と云ふものを道の破壊者か何かの様に思つて毛嫌いしての上の仕事であるから。其んなものに向つて何を云つたつて駄目な事だと云ふ事は私も良く知つているから。其れで私は此処に問題を換えて貴女に一言お尋ねしたいことがあるのです。其れは外でもありませんが教祖様の御教訓に朝起き、正直、働きをもつて真の信仰と御教えになつた此の天理教の管長夫人ともあらうものが天の親様一お日様一がお出でになつてから四五時間経つても寝床の中で愚図／＼していると云ふのは一体何う云ふ訳ですか？　其れでいて用事があるから面会が出来ないも片腹痛いことです。其れだけで既に教祖の三大信仰の二つを破つているのです。更らに働きは如何？　私は貴女と一手に生活をしないから知らぬけれども聞けば夜の二時三時迄下らぬ小説を読ませたり雑談をしたりして貴重な時間を浪費しているといふことですが其れが助け一条の仕事と何か関係でもあるのですか？
　これは貴女計りではない。故管長も夜の二時三時頃迄起きて朝はお勤めだけ出てお勤めがすむと又た床の中にむぐり込んだと云ふことである。貴女の方はお勤めに出ないだけ管長より悪い。其んなことで朝起き、正直、働きを勧める一派の管長夫人と云えるか何うか考えて御覧になつたが良い。其れでも感心なことには例祭にだけはお神楽の間に合ふ様に起きて出られるが神様赤い舌を出して笑つておいでなさる事を御存じないのですか。
　此の頃は事情願に本部へ来る人に逢ふ毎に時間の不定について不平をこぼさないものはありません。聞けば十一時十二時頃出寝床にかじり付いている貴女が事情を許すと聞いてさこそと思いました。
　然し未亡人よ。私は御身に問ふことがある。御身は一体何の権限をもつて事情願を許可するのか？　何時神は御身に事情願の取扱を許したか？　これ私の第一に聞かんとする所である。
　聞けば御身は摂行職の印まで握つて山沢はただ虚位に座するのみなることを聞いた。然らば何故に御身自ら進んで摂行職とならざる。否な何故に自ら進んで女管長とはならざる。暴も亦此処に至つて極れりと云ふべし。
　つらつら今日の本部を見るに宛然これ太閤歿後の大阪城である。本部員ありと雖も其の大部分は大野渡辺の徒である。然らざれば天気を見て何れにも付く首鼠両端の徒のみ。往々木村後藤真田の徒ありと雖も彼等は常に御身の座右より排斥せられつゝあり。もしかくの如き状態が五年十年の後に続いたならば天理教の歿落又た決して遠くはないのである。否な其れよりも御身の寿命こそ最も危険な状態に瀕しつゝあるのである。
　未亡人よ
　凡そ牝鶏の夜鳴する家の繁昌する家はなしと聞く。こは恐らく婦人の専権を戒めたる言葉であるであらう。一体御身は何の必要あつて表面の教務に口を出すのですか？　寧ろ退いて婦人会の盛大を計るべきではありませんか？　其れだけでさえ御身の力に余る重大の仕事である。然るに其の本職を離れて要らざる教務に口を出すがために教界は益々紊乱に紊乱を重ぬる計りである。しかも婦人会は如何にと云ふに昨今は婦人会はただ婦人会と云ふ名目を存するのみにて何等見るべきの事業はないのである。かくの如くにして果して全世界の婦人界を廓清し且つ一面に於て人類生活を益することが出来るか何うか之れに対しては如何なる愚人と雖も然りと云ふものは一人もないであらう。
悲は啻にこれのみではない。管長歿して未だ一年も経だざるに大規模の普請を始めて此の頃漸く其の落成を告げた。しかも近頃迄は神殿の障子は破れ不細工の切り張りをして通つて来た。順序の道とは教会の順序計りが順序ではないで。一体神を何んと心得理を何んと心得ている。管長の邸宅を建つる前に建つるべきものは幾らもある。第一にお授け所である。貴いお授けを渡す場所が牛肉を食つた座敷をもつて充てられるとは何う云ふ訳です？
　御身は先ず御身の邸宅を急ぐ前に先ず此方こそ急がなければならぬ筈でした。何に依らず凡てについて此う云ふ仕事をしているからする事なす事に破綻を生じて来るのみである。
　未亡人よ
　御身は知つているか知らないか知らないが今日の状態は明治十四年御身の父秀司の亡く

なつた当時と宛然同一の因縁を繰り返しているのである。彼の頃御身は未だ五つか六つの子供であつた。御身の母の松枝は夫の亡くなつて一年も経たざるに普請を始めた。其の時の後見役は今日の摂行職の山沢為蔵の父良助であつた。又た世話役は今の松村吉太郎の父栄次郎であつた。しかも当時世間では色々の噂があつた。今日は其の親の代を子が繰り返しているのである。

御身は知つているか知つていないか知らないが世間では色々の噂がある。しかも色々な方面に色々な噂がある。私は其う云ふ噂は信じたくない。けれども御身の日常の生活は遂に此等の疑問を氷解するだけの鮮明を欠いている。

未亡人よ

御身の周囲を取り巻くものは追従軽薄のみである。其の間にあつて御身が良い気になつてしたいことをしたならば部下こそ良い迷惑である。

凡て人の頭に立つものには同情の心がなければならないしかも御身には全然之れが掛けている。

其の証拠は夜ふかしである。毎夜二時三時迄起きていたならば下々の者の迷惑は何んなであらう。御身には一寸も其の察しがない。これで果して宗教家か。もし徹夜をする必要があらば召使を休めて自分のみ仕事をしたが良い。下らぬ雑誌や小説に時を費して下々の迷惑を思わぬと云ふはこれ乱行にあらずして何んぞや？

未亡人よ

私は御身に対して云わんと欲する所の事が多い。けれども事未亡人の人格に係る事であるから此の上多くを云わない。ただ最後に一言行つて置きたいことは理を貴み理を恐れよと云ふことである。

苟も天理教と云ふ一派独立の宗教の管長夫人ならば其の実生活が直ちに教理と一致していなければならない。然らざれば決して天下幾百万の信徒の儀表たることは出来ないのである。これ御身の第一に反省せざるべからざる点である。

次に云つて置かなければならぬことはもつと平民的になれと云ふことである。今日の未亡人の生活を見るに其の理想とする所は王侯貴族の贅沢にある様である。けれどもこれは信徒の熱血によつて成れる宝財をもつては如何あるべき？

更らにもう一つ云つて置かなければならぬことはもつと立憲的になれと云ふことである。今日の天理教は全然これ野蕃専制政治である。長上の命と云えば如何なる非常識も如何なる非条理も平然として行われつゝある。これ上に立つ所のものの最も注意しなければならぬ点である。

凡て人間には因縁の善悪はある。けれども教祖のお言葉の如く

「因縁はつけるが後は心次第」

のものである。己は因縁が善いから如何なる不条理もなして可なりと云ふ筈はない。見よ御見の母は大食天命の魂であると。しかも其の非道の精神は鼬となつて本部の地内を彷徨している。御見も亦自己の因縁を頼んで天理を遵奉せざれば御見の母と類似の運命に陥るであらう。これ真理なるなり。

蓋し此の世界の人間は上は王侯貴族より下庶民に至る迄一人として理を守らぬで良いと云ふものはない。御見がたとい雲読命であつても其れは過去の功労に対して神の下した表賞のみ。現在に置いて其の徳を失えば人間もしくば人間以下に堕落すること云ふを待たない。神は因縁の魂なるが故に決して道を二つにはしないのである。乞う道のため且つは御見のために省察熟慮せよ。暴言多謝。

（紀元九億十万七十七年二月七日夜）

天理教管長中山正善摂行職　山沢為蔵氏に与ふる書

大平　隆平

山沢氏足下

天理教の礼式に従えば足下のことを天理教管長中山正善摂行職大教正山沢の為蔵公閣下とでも云わなければなるまいが野人元来其の礼に慣わず山沢氏をもつて呼ぶを許せ。

私が足下の名前を知つたのは昨年足下が始めて摂行職となつた時であるが私は足下の人と成りを聞き直ちに此の人では天理教と云ふ大世帯を負つて立つ事は六ヶ敷からうと感じました。果して其の後足下の手腕を見るにする事なす事に何等の信仰も何等の見識もない低能者であつたことが明かになりた。

天理教では何んでも云いたいことも云わず仕たいこともせず小さくなつて他人の云ふ通りにしている人間を心の善く出来た人間だとか云ふそうですが足下も或は其の一人ではないかと思います。

近頃君の親戚に当る一人の青年が来て

山沢様は良く出来た人だ。彼れ位出来た人は珍らしいと思います。
と大層足下のことを賞讃して行きましたが私は此の青年の人物鑑識眼の幼稚なるよりも其の青年を取り巻く周囲の人々の人物鑑識眼の幼稚なることを悲しみました。何故なれば此の青年の言葉は決して此の青年自身が心から感じて吐いた言葉ではなく実に其の周囲の人々の批評をとつて直ちに自己の独創であるかの如く語つたものであることが私には直ちに観破されたからであります。
成る程無主義無定見無信仰の人をもつて良く出来た人だと云ふ天理教特独の理想の人物より云えば足下は良く出来た人かも知れません。けれども確固たる信仰と崇高の人格とをもつて理想とする宗教家より云えば今日の天理教の人達の云ふ良く出来たといふ人程出来損いはありません。何故なれば彼等には信仰がありません。従つて人格がありません。主義とか定見とか云ふものは勿論のことです。此う云ふ人達は器械の様に使われる人間としては誠に理想の人物かも知れませんが之れを独立した人間として見る時は全く零です。
私の考に依れば天理教が此う云ふ頭の空疎な人間をもつて理想の人間とするに至つた様々の原因は彼の馬鹿々々しい非天理教的教理なる絶対服従主義の所産だと思います。彼の教理より云えば誠に此う云ふ人物は理想の人物に相違ありません。けれども人間を其の人格的価値より論ずれば此う云ふ人間はただ人格もなく生命もないただの人形に過ぎないのです。私は足下が直ちに生ける人形だとは磐ないがマア其れに近い人間ではないかと思つています。
一例を挙げて云えば摂行職の判ですが彼の大事な摂行職の判を無責任にも一婦人の手に委して其れから引き起る何んな重大な事件も自分が責任を負おうと云ふのは余程間抜けの人間か余程偉い人間でなければ出来ないことです。其れを足下が平気でやつているといふのは余程好人物と云わねばなりません。
人の話を聞くに足下に逢ふ人も／＼足下程要領を得ない人はないと云つています。私は足下が私の新宗教に対して取りつゝある態度に徴して其の詐ならざることを証明するのであります。
私は足下に尋問するが、一体新宗教の何れの点がいけないと云ふのですか。足下が山名の大教会長に語られた所に依ると本部を攻撃するからいかんと云ふ様に云われたことを聞いたが私は何も本部を攻撃はしません。攻撃するなんて思ふのが足下を始め本部の人々の誤解です。私は現在の天理教に欠けたるものを補ふ迄です。これは私の雑誌を熟読なされば直ぐ判ることです。足下は云ふべきことがあれば本部に来て云えと云われたそうですが現在の本部に一信徒の言を採用して改革を実行する誠意がありますか。あるなら行つてお話しますが私が半年以上誌上で発表したことは今なお一つでも採用されていないではありませんか？　人を欺すにも程があると思います。
且つ常識から考えて見ても本部員の一人や二人が私の意見を承知したとても其れが一般信徒に徹底しますか？　其んなことは到底望むべからざることです。
足下の言葉に依れば大平が何うしても聞かぬならば処分をすると云ふのだそうですが足下の言ふ処分とは直轄教会に伝達して其の購読を禁止することにあつたのですか？　其れとも私を除名処分でもなさらうと云ふのですか？　前者は既に足下等の実行している所のものであれば此の上の取るべき手段は後者ですが後者なら安心しなさい。私は既に天理教会は脱会したから。此の上の処分は足下等の手を待たないのです。
山沢氏足下
私も世界の宗教家の行動には多少の注意を払つては居ますが凡そ天理教の人達程非宗教的行動を行つて平然たる宗教家は見たことがありません。もし私の信仰に教祖の宗教と相反せる危険分子があつたならば公然機関誌の上に其の誤謬を指摘して之れを誘導することに力むべきではないか？　然るにさはせずして宗教家らしくもなく新宗教の購読を妨害して其れ自身に自滅せしむるが如き方法を取るのは余りに卑怯ではないか？　余りに宗教家らしくないではないか？
足下は云ふ
大平はお道の破壊者だから大平の雑誌は読むな
と。教祖直伝の宗教を宣伝するものと其れを曲信するものと何れが多く道の破壊者たるか考えて見たが良い。
天啓にも
教祖といふ内から潰している
と。足下等の日々行つている事こそ却つて教祖の道を破壊しつゝあるにあらずや？　然るに本末始終を顛倒し是非曲直を曲解して教祖直伝の宗教の宣伝者に迫害を加えるとは何たる不忠ぞや何たる不孝ぞや？
けれども私は何も新宗教の購読を部下に禁止したことを悲しむものではありません。其の慮見の小さいのを悲しむのです。否な本部に一定の標準教理なく本部員に確固不抜の信

仰のないのを悲しむのです。
　足下は私の雑誌を潰し、私の声を止めたならば其れで天理教界の腐敗は一掃されると思ふのですか？　本部の非行が許されると思ふのですか？　もし其う云ふ考をもつて私の著書や雑誌に妨害を加えていられるとしたならば足下の姑息を真に憐れまずにはいられません。
　そもそも事実と云ふものはたとい人が攻撃しやうが賞讃しやうが善は善にして悪は悪です。其れを変更する力は誰にもありません。其れを人の口を止めさえすれば良い。人の眼さえ誤魔化せば良い。人の耳さえ塞げば善い事をしても悪い事をしても構わないと云ふのは宗教家の仮にも云ふべきことなすべきことではありません。寧ろ自ら進んで自己の前非を悔い後行を慎むこそ真の宗教家といふものです。
　然るに足下等の行動を観察するに宛然これ何もわからぬ婦女子の態度です。俗人の態度です。彼等は賞めらるれば直ちに百年の知己を得た様に喜び譏らるれば全然千戴の仇敵にでも逢つた様に思つて之れに対して悪口憎言迫害攻撃をします。これは君子の最も恥づる所のものであります。
　私は未だ其の域に達しないとは云え誠意をもつて自己の欠点を忠告して呉れる人に対しては其の忠言を容れるに決して陋ではないのです。寧ろ喜んで常に蔭口でも聞かんことを欲するのです。これ真に徳を進める所以であるからであります。
　然るに本部では己に諂ふ者は是が非でも近づけ己に反対するものは是が非でも潰そう遠けやうとするのは甚だ要領を得ません。其れが人心救済の使命を帯びた宗教家のなすべきことでしょうか？　これを足下に伺いたいのです。
　其れから一番悲しむべきことは本部に一定の標準教理のないことです。其れがために往々教祖所説の天理教を宣伝すれば本部から潰しにかゝる様の矛盾をする様になるのです。此う云ふ具合じゃとても天理教は発展しませんね。第一困るのは我々布教師です。教理の標準を教祖の所説に求めて布教すれば本部で力を尽して反対攻撃圧迫妨害する様では手の付け様はありません。これは私一人ではなく多くの布教師が迷惑を感じている事だらうと思います。
　大体私が道の破壊者だなんて言葉は何処から出るのですか？　私は朝も晩も寝ても起きても何うか此の道を発展させたいと其れ許り思つているのです。其れだから色々欠けたる点誤つた点を指摘して教界に注意を促すのも皆な円満な道を世界に伝えたいからです。其れを少しも思わず私を弥次馬か乱暴者の様に思つて倒そう　　とかゝつているのは道のために甚だ悲しい事です。
　けれども本部で如何に迫害しても私の信仰が間違つていないと信ずる限りはたとい五百万の信者を敵に回しても主張は撤回しません。
　其れよりも私は足下を始め本部の人達に希望するのです。何うか真の天理教と云ふものを知つて貰いたいと云ふことを。何故なれば此の宗教の首脳者たる足下等を始め今の様にわからぬこと計り云つている様では此の教を世界は愚か日本国中だつて広めることは容易ではありませんから。
　之れは私が今日迄繰り返し云つたことですけれども幾ら云つても悟りがないのです。而して何時迄も馬鹿を社会に曝露しています。
　山沢氏足下
　足下もし道の性根があらば此の点を自覚せよ。然らば即ち私の著書雑誌並に私一身に対する迫害攻撃の如き問ふ所にあらず。私は益々其の力の強からんことを希望するのである。

（紀元九億十万七十七年二月十三日）

　新宗教一月号の余の談話に就いて

飯降　政甚

　新宗教一月号の余の談話に就いては大分矢ヶ間敷い問題となり其のために本部員の集会迄開いて彼の談話の趣旨を自分に対して尋問せられることになつた。
　問題となつたのは秀司さんが亡くなつた時教祖は上段の間からお下りになつて秀司様の枕許に立ち額をゴロ　　として
「もう剛情は張らせんやろ。張れるかい。張れるなら張つて見いや」
と仰つて涙一滴こぼさず元の所へお帰りになつたと云ふ所の話と松枝さんが鼈になつたといふことの二つであるが。自分が彼の談話をしたのは教祖には我が子人の子の隔てはない公平無私の偉大な人格偉大な精神を備えられていたことゝ理と云ふものはたとい教祖の親族であらうが因縁の魂であらうが善をすれば善をした様悪をすれば悪をした様に公平に回つて来るといふこと即ち天理といふものは公平無私のものであり因果応報の理は争ふべか

らざるものであるといふことを語つたのです。
　之れに対して山沢摂行職の実験談なるものを聞くに私の聞いている所と全く正反対の話である。即ち秀司さんの亡くなつた時教祖は上段の間から下りておいでになつて秀司様の枕許に立ち額を三度撫で
「早う帰つて来るだで／＼」
と云つて涙をポロリと滾して元の所へお帰りになつたがお帰りになると後は平素とチットモ変らない御様子であつたといふことである。
　又た鼬云々の事も全く事実無根であるといふのが山沢氏を始め一般本部員の説であるが之れに関して自分は其の当時の目撃者でないから事実無根であるか何うか知らない。けれども当時現場の目撃者であつた所の自分の父（本席）や姉（永尾芳枝）の云ふ所を聞くと摂行職の談話とは全然正反対なのです。
　従つて之れは天理教将来のために何れが真で何れが偽であるか大いに正して置く必要があると思ふ。
　摂行職の談に依ると教祖がもし自分の話した様なことをし本席が又た自分の話した様なことを云われたとすれば教祖も詰らない人であるし又た御本席と云ふ人も詰らない人であると云われたがこれは聞き捨てならん言葉だと思ふ。何故なれば自分の子供の亡くなつた時涙を流す云々と云ふことは普通の人情より押した時の話で教祖の如き我が子も人の子も分け隔てのない公平無私の大人格を持つておいでの方には当てはまらない嵌まらない問題である。摂行職は教祖がもし自分の子供の亡くなつたのを見て彼う云ふことを云われたり、せられたりしたとすれば教祖は誠に詰らない人であると云われたが自分の考えでは詰らない所ではない。却つて彼れによつて教祖が神に近い人格をもつていられた方であつたと云ふ荘厳無比の感に打たれるのです。
　又た御本席が其んな話をしたとすれば御本席と云ふ人も詰らない人であると云われたが自分は教祖の公平無私の偉大なる大精神を汲んで無量の感慨に打たれた本席其の人を偉いと思ふ。これは自分の父であるからいふのではない。人間として兎に角偉いと思ふ。
　其れから秀司さんであるが一月号では自分の所謂秀司観なるものが徹底して表われていないが自分の考では彼の人の信仰が正しくあつたか又た誤つていたかを問わず最後迄反対を続けたといふ彼の人の意志の強固な点は偉いと思ふ。これが普通人であつたならば中途有耶無耶になるのであるが其所を何処迄も教祖に反対し切つたといふ点は中々尋常人ではない。其の反対の中を切り抜けた教祖も偉ければ其の反対を死ぬ迄続けた秀司其の人も偉い。一月号では此の点が充分表われていないが兎に角一面に於ては秀司其の人を感心している。
　又た鼬云々の事もこれは私の姉が目撃して知つている事で決して事実無根ではない。無根でないと云ふ証拠には私の姉が風呂場で教祖の肩を流していると教祖は廂を見て
　おう松枝もう帰つているで
と云われた。見上げると廂の所に小さな鼬が日和ぼこりをしていたと云ふことである。
　松枝と云ふ人は何か神様に上ると教祖に隠してドン　　平等寺村の実家に運んで教祖に対しては随分つらく当つた人であるが其れに対して教祖の仰せられるには「鼬と云ふものは良く物を運ぶ者である。其れであるから犬や猫には何かやるけれども鼬には何もやる者がない。松枝は大食天命の魂で世界ではなくてならぬ道具の一つであるけれども生前の心掛けが良くなかつたから再び人間界には出さぬ。生涯鼬として屋敷の内に置く」と云われたそうであるがこれは私の姉が何よりの証人であります。
　以上の問題に対して板倉氏は
「自分も教会をもち又た支庁ももつているがこれでは信徒に説明の仕様がないから信徒を満足させる様な説明の方法を教えて呉れ」
と云ふ最も皮肉な態度に出られたが自分の考では何も説明の方法がないことはないと思ふ。
　元来天理教では今日迄悪い事は何んでも隠そう　　の隠蔽主義一点張りで通つて来たが自分の考では其れでは反つて世間の疑惑を作る元だと思ふ。其れだから事実は何処迄も事実として社会に発表して善悪是非の判断は社会に任せたが良いと思ふ。
　自分が以上の事実を発表したのは教祖は公平であり天理も亦何処迄も公平なものであると云ふ教祖の人格と天裁の峻厳とを知らせるためである。
　しかも板倉氏はなおこれでは説明の仕様がないと云われるが説明はこれでチャンとついている。即ち天は人に依つて裁かず理に依つて裁くと云ふ天の裁判の公平なること、教祖は我が子人の子の区別のなかつたこと、其れで説明はつく。其れでも説明がつかんと云ふのは事実を打ち消せと云ふことになる。けれども事実といふものは人間の力で曲げることも出来なければ打ち消すことも出来ないものである。其れを曲げたり隠したり打ち消したりすることは宗教家として甚だ要領を得ない態度だと自分は思つている。従つて之れで分

らないとならば天下の輿論に訴えるより仕方がない。
　板倉氏は又た然らば何時の何日の何時に其う云ふことがあつたと云ふ書物でもあるかと云ふ質問を呈出せられたが苟くも当時の状況を知れるものには問題にならない非常識な質問である。一体道の創業時代の当時に於て其んなことをしている余裕があつたかなかつたか多少なりとも其の時代の状態を知つている板倉氏としては殆んど誠意よりの質問ではないと思われる。よつて自分も亦一笑に付してしまつた。
　此の他影では彼れこれと云ふ人もあつたが誰も正面より衝き込んで来るものもなく集会は不得要領の中に終つたが自分の考では彼れに依つて天裁の公平なること教祖の偉大なること見様に依つては秀司氏も亦偉大な人物であつたことを事実の侭に語つた迄である。従つて自分の談話が事実と相違していると云ふ確かな証拠の挙がらない限り自分としていささかも謝罪する必要はない。ただ本部を始め一般信徒に誤解のなき様に自分が右の談話を発表した精神について一言の説明を加えて置くのである。

痔のお助け

山中　彦七

　私が始めて教祖にお目にかゝつたのは元治元年の二月十五日でありました。
　私の所で信仰に入りかけた元はと云えば母の痔が元で御座いました。母は毎年冬になると痔で苦しみましたが元治元年の前の年文久三年の盆がしまうと痔が起つて彼地此地の医者にかゝり彼地此地の稲荷様や金平様に祈祷をしても御利益なく其の上他の病気も付き添えて床に就かれ誠に危篤になり心配して居りました。
　処がある人が丹波市の向ふの庄屋敷に天理王命が天降られた。此の神は結構な神様で此の神様に御願すれば何んな病気も助けられぬといふことはない。私も病気で助けて貰つた。貴方も助けてお貰いなさいと云つて教えて呉れました。其処で父は直に参られました。其れが元治元年正月のことでありました。
　其の時教祖は
「アヽよう出て来た。お前は神の深い因縁あるものであるから引き寄せたのであるで。病気は速か助けてやらう。其の代り神の御用を聞かんじゃならんで」
と仰つたそうで御座います。其処で
「神の御用となれば何んな御用もさせて戴きましょう」
と云つてお誓いをなされ日々神様に参られ母の大層な病気が十日間に助けて戴きました。其れから私の御父様は内は人に任せて御勤めになりました。
　私が始めて参つたのは二月の十五日涅槃の日母が充分力づいた御礼参りの御伴をしたのが始めてゞ御座いました。其れが教祖の六十八歳の時でありました。
　其の時分教祖は何んな所へ御住いになつたかと云えば六畳に八畳の長屋で一寸庭がついていました。屋根と云えば藁葺き屋根の腐つた屋根で御座いました。神様は何の様に祭つておいでになつたかと云えば押入見たいの所に八ッ足を二足並べて其処に神様を祭つておいでになりました。其れは／＼誠にお粗末なもので御座いました。
　教祖伝の中に一つ申上て置きたいことは善兵衛様がおかのといふ下女に手をかけたと云ふ様であります。彼れは大阪朝日新聞の記者渡辺霞亭さんが何処でお聞きになつたか知りませんが教祖三十一歳の時足達の息子照之丞を助けにゃならんと云ふ一心から神仏を信心し、其の徳に依つて助かりなさつた。其の病気全快祝いに善兵衛様と教祖様と二人ともお招ばれになつたが善兵衛様は一人退けてお帰りになつた。其の後で教祖がお帰りになつて見ると善兵衛様とおかのとの怪しい姿が障子に映つたといふ様に書いてありますが彼れは時代が違ふ。年も十年も前のことであります。
　御承知の如く親様は十三歳の時御嫁入りなされまして暫らく子がなかつた。二十四になられた時始めて長男の善右衛門様が御生れなされた。今の話は其れ迄の十一年目の間の出来事であります。
其れを何うして調べられたか親様が子供の三人もありましたのに善兵衛様がおかのを大事にしたといふことになつては善兵衛様に恥を掻かせなければならない様になる。其れでは親様もお喜びになるまいと思います。
　其れは何うして聞いたかと云えば慶応二年か三年頃私の母と一手にお参をした時大工の伊蔵さんのおかみさんのお里さんと西田お琴さんと云ふ人が参拝して居りました。而して親様の側で御話を聞いていられます。私も其の側に付いて居りました。其処へ丹波市の人で容貌の美い婦人が小娘を連れて参拝せられました。其の時お里さんが
「彼の容貌の美い人は何処何処の人の囲われ者になつている。其処で其処のおかみさんが嫉妬の念を起し火の様になつてる。彼んな容貌を下げて人の妾になつて居るのは埃じゃなあ」

と云つて居ました。
　其の時親様が仰せられるには
「男といふものは若い時は何うもならん。私も長い間子がなかつたが内にかのと云ふ者を置いて云々のことがあつた」
とお仰せになつた。これに依つて見ると十年も年限が違ふから其う云ふ間違が生じて居ります。
　親様は御婦人としては高い方で御座いました。十人並に優れた奇麗なお方でスッカリして居られました。
　私は教祖に可愛がられ参拝すると神様に先き御礼をする即ぐと教祖様のお話を聞かして戴くといふ具合でありました。
　秀司様が御隠れになりましたのは明治十四年で御座いますが其の後参りますと
「マア彦七さん。良く帰つて来て下すつた。お前さんが帰つて来て下すつたら善右衛門が帰つて来た様の気がする。私は年取つたけれども此の様に力があるで」
とお側で食事なぞ戴いて可愛がつて戴きました。
　明治になつてから教祖様につかえた人にお春さんと云ふ人があります。此の人は故人になられました。其の次に古いのは松村さんのお父さん。これも故人になられました。
　高井さん。喜多さん。宮森さん。此処等は明治十年迄についた人です。後の人は明治十七年頃について本部員になつていられます。
　私共の参拝する頃は小寒様に神様がおいでになりそれ　　の御悟しがありました。教祖の側へ行つて直ぐにお話を戴くのはホンの僅かの間しかありません。
　内へ始めて教祖様がおいで下すつたのは慶応三年八月十九日でありますが
「神が遊びに行く」
と云つて御越し下されました。私が迎に行つて教祖様御越し下されましたが夜分に神様がおいでになり創世紀の泥海中のことを聞かせて戴いたことが御座います。
　親様へ行く人は幾らもありません。大抵小寒様、善右衛門様から聞かして戴きますので直接教祖に逢ふてお話を聞かして戴くのはマア／＼少う御座いました。

　付記　これは山中氏の宅で直接伺つた話で教祖三十年祭記念号の感謝と記憶の中に載せる心算でありましたが紙数の都合で割愛したから本号に掲載することにした。此の他教祖に関する逸話は号を追ふに漸次掲載することにする。

教祖昇天日に就て

　教祖の昇天日に二説あることは教祖三十年祭記念号に書いて置いた。其の二説とは明治二十年二月十八日説と二月十九日説とであるが生憎手元に当年の暦がなかつたので後日の問題として置いたが其の後大阪市東区南久太郎町の駒井福蔵氏よりワザ　　明治二十年の略本暦を送つて下すつたので二説の真偽を確かめる便宜を得ました。
　教祖の昇天日は旧暦より云えば明治二十年正月の二十六日これは何人も知つている所であるがこれを暦に依つて繰ると二月十八日に当ります。依つて今日迄伝えて来た二月十九日説は誤であつたことを証明して置きます。なお後日の誤解を招かぬ様御昇天前後の新旧の両暦を対照して置きます。

　明治二十年二月平二十八日　（神武紀元二千五百四十七年）

新			旧		月	出	月入
十五日	火	下弦前十時五十一分	廿三	かのとゐ	午前〇時一八分	午前十一時一八分	
十六日	水		廿四	みづのえね	仝　一時二〇分	午後　〇時〇二分	
十七日	木	神宮祈年祭	廿五	みづのとうし	仝　二時一九分	仝　〇時四八分	
十八日	金		廿六	きのえとら	仝　三時一四分	仝　一時三七分	
十九日	土	旧正月中■ たねまきはじめ	廿七	きのとう	仝　四時〇五分	仝　二時二九分	

・・・

・・・・・雨水前七時五十四分　日出六時四十五分　日入五時四十四分　昼間十時五十九分　夜間十三時〇一分・・・・・

ない人間が他人の思想を左右し得やう筈はない。従つて私は先ず自分自身の問題の解決を急いでいる。
　終りに三月号の発行日は十五日に延ばしたことゝ四月号より一日発行にすることを断つて置く。

.

自由信仰の時代

大平　隆平

フランスに於ては十八世紀の末にルッソー、ヴォルテール等の徒が出て自由信仰の門を開いた。而して其れは今や世界の新しき気運となつた。

日本に於て自由位相の勃興しかけて来たのは今より約六十年依然であるが今や此の風潮は新日本全体の風潮となつて来た。殊に此の風潮を強く孕んでいるのは今日の青年男女である。彼等はもはや何等の理由なくして旧道徳や旧宗教に盲従することが出来なくなつた。けれども其れをもつて直ちに今日の青年には信仰がない。今日の青年には道徳がないと云ふことはできない。成る程今日の青年には未だ徹底した道徳がない。徹底した信仰がない。けれどもこれは古き信仰より新しき信仰に、古き道徳より新しき道徳に移つて行く過渡時代の人間としては当然免かるべからざる必然の現象である。

古い頭の人間は其の価値を窮めずして今迄して来たこと通つて来たことは何んでも良い物だときめている。其のために青年が其う云ふ物の無価値を論ずれば一も二もなく生意気だと云ふ、何も知らないと云ふ。けれども其う云ふ老人よりも青年の方が余つ程頭が進んで来ている。其れで老人達が此の上ないものと尊重しているものが青年達には何等の価値もない詰らぬものに見えるのである。従つて精神の目醒めて居る青年は何処までも価値ある物を追求しやうとする。老人達には其れが分らぬから一概に青年の要求するものは悪いものだと思つて妨害したり抑圧したりする。

けれども凡て良き物は自由の下より生まる。圧迫の下より生れない。彼の天を摩する亭々たる杉樹も毎日右に曲げ左に曲げて居つたならば決して自然の生長を遂げ得るものではない。人間も亦動揺である。始終情実因襲の紲に繋られている人間には真の生長と云ふものはない。あつても庭木や床木と同じことで小さなイヂけたものになつてしまふ。此の意味に於て旧道徳や旧習慣の中に人と成つた上流社会の人間よりは自由に自分の天地を選むことの出来る様な地位に置かれてある中流社会の方が余程幸福である。しかも事実真の英雄豪傑偉人傑士は上流に生れず下流に生れず多く中流に生まるゝに徴しても自由が如何に人間の成長に必要なるかを知ることが出来る。

然るに古い頭の老人になると青年の心に萌して来る新しい芽を出れば切り出れば切つてしまふ。而して其の自由の発達を阻害する。成る程老人は其れで満足かも知らないがこれを人生の進歩の上より見れば正さに人道上の賊である。

けれどもかくの如く専制と其の専制に対する盲従を美徳とするの習慣は未だ日本人には脱し切らない。ために多少新しい何物かをもつている青年も世間から変り物だと云われることを恐れて結句旧式な老人連中の仲間入りをして在来の有り触れた無意義な生活を続けることになる。人生の悲劇である。

けれども古い頭の圧迫位で居住んでしまふ様な青年は居住んでも何も惜しいことはない。其う云ふ青年は圧迫がなくても碌なものにはなれない。ただ其の中に雪中の筍の如く雪を破つて其の溌剌たる萌芽を出して来る青年に依つてのみ人生は向上されて来る。其うなると結局自由と云ふものは外のものでなくて内のものになつて来る。形でなくて力になつて来る。力の大なるもの程大なる自由を有することになる。

けれども私が此処に自由信仰の時代と云ふのは力ある者には何時でも開き得る自由の天地をさして云つたものではない。人間の何れも先天的にもつている自由意志をもつて自己の生活を決定すべき時期の到来したことをさして云つたものである。

今日の時代はもはや父母や兄弟や朋友や師匠の意見に従つて物事を決定する時ではない。真に自分の力で凡ての物の価値を決定しなければならない時が来たのである。

一例を挙げて云えば配偶者の選択である。昔の人間は配偶者　　一生生活と運命を共にしなければならぬ配偶者　　の選択を自分ですることは非常に罪悪の様に思つていた。而して大事な配偶者の選択を親や媒介者の手に任せて済ましていた。これは一人配偶者の選択計りでない。信仰や道徳に対しても同一であつた。即ち先師が立てゝ法としたことは百世の後と雖も動かすべからざる真理であるとして盲信し敢て其れが真に意義及び価値あるものであるか何うかと云ふ様なことを疑ふものはなかつた。否な疑ふことを非常に罪悪に思つて来た。これは信仰や道徳計りでなく芸術や哲学や士農興商の如き実業迄其うであつた。今日から見れば最も笑ふべき陋見と云わなければならぬ。

けれども悲しいことには今日先師の立法を永久不変の真理の如く考えている頑固な老宗教家がある計りでなく其れを其の侭に受けていささかも怪まない青年宗教家である。天理教の如き新興宗教に於ても依然として此の陋習が抜けない。宗教の進歩せざる故あるかなである。

此の点に於て今日普通の青年は教界の青年よりは比較にならぬ程自由思想を抱いている。ために人生の意義及び価値を人に教ゆる宗教家が却つて社会の人間より教えられつゝ

ある奇異なる現象を呈しつゝあるのである。此の矛盾は何処の教界にも存する頑固なる保守的精神の結果である。
　私は仏教や基督教に対して何等の信仰も有せず、従つて其の間に何んな野蕃な弊風が横わらうが今更悲しむものではないが最も生命に富んで居る天理教界に見るに耐えない野蕃専制の陋習の存するを見て悲哀を超越して絶望の境に我を誘ふたのである。
　彼等の中には自由と云ふものがない。無知な先輩の通つた足跡が唯一の範である。圧制又た圧制！　かくの如くにして青年の自由討究の精神は根本より根絶せられてしまつた。往々其の中に於て虫の息の様な声を立てるものがあれば周囲より寄つて簇つて其の息の根を止めるのである。
　けれども信仰の自由は憲法の定むる所である計りでなく先天的に人間に賦与せられてある。敢て何人と雖も其れを抑圧する権利はない。よし抑圧する権利があると仮定しても信ずると信ぜざるとは全く吾人の自由である。
　私は今日迄一年有半の教会生活に依つて達した所の結論は天理教は信ずるけれども教会の制度及び儀式に服従することができないと云ふことである。云い換えれば天理教的生活には満足すれども教会生活には満足することができないと云ふことである。これは主として今日の天理教々会の多くが徒らに人工的の制度儀式の末に囚れて肝心の信仰の意義を失つているがためである。由来教会は布教伝道の方便のために設けられたるものにして其れ自身何等の目的を有するものではない。制度及び儀式も亦其うである。然るに今日の天理教は此の本末始終の関係を忘れて本来は信仰本位に依つて立たなければならないものが教会本位形式本位に堕してしまつた。これ私をして教会の作つた一切の人工的の制度及び儀式を離れて教祖の人格と生活の中に生活の真義と真価とを発見せんとする所以である。
　私は元より教会無用論者ではない。又た制度全廃論者儀式全廃論者ではない。ただ私の悲しむのは方便の末に囚れて肝心の目的を忘れていることである。私が今回教会との関係を断つて教祖の教えた人生の真義即ち朝起き、正直、働きに帰つたのはこれがためである。
　けれども教会の制度及び儀式より囚れざることのみをもつて信仰の自由は保証せられてはいない。吾人は更らに社会の風俗習慣情実因襲と云ふ敵をもつている。しかも此等のものこそ吾人の信仰の強敵である。何故なれば吾人は吾人の自由をもつて教会に出入することを止めることはできる。けれども社会に出入することはこれを絶対に禁止することは全然不可能の事実に属するからである。
　今日天理教界の人々には此の二重の強敵に苦しんでいる。しかも其の何れにも打ち克つものがない。かくの如くにして教祖の教えた人生の真義は全く無意義なものになつてしまつた。
　私が教界の人々に向つて云わんとすることは今日はもはや教会の制度儀式に囚われ社会の情実因襲に縛られて人生の真義を忘却して居る時ではないと云ふことである。
　今日は道も世界も一斉に一切の束縛より解脱して自由信仰に復帰すべき時が来たのである。詰らぬ形式の末に囚わるゝことを止めて早く人生の根本義を自覚せよ。これ我が諸君に対する衷心の希望である。（紀元九億十万七十七年二月二十三日）

地場より（四）

ＲＯ生

　公義に対して私情をもつて来るのは小人の常である。忠臣孝子の災禍は多く此の矛盾より起る。
　けれども義を見て為さゞるは勇なきなり。不義を見て黙するは信なきなり。余は先ず身を殺して自分の力の及ぶ限りの仁を為さん。

　天才は狂気なりと聖人は愚物なりとこれ世人のしばしば云ふ所である。けれども天才は狂気にあらず聖人は愚物にあらずして其う云ふ世人が狂気なり愚物なるのである。
　かくの如くにして天上に於ける白金の尺度は地上に於ては竹の物差よりも劣つたものとなつている。

　私は近頃格所に於てキ印だとか馬鹿だとか云ふ言葉を聴く。これがもし昔の自分であつたならば必らずや青筋立てゝ怒つたに違いない。けれども今日の自分は此う云ふ言葉を聞く毎に云ふに云われぬ快感を感ずる。
　私は告白するが私の半生の修業は実に此のキ印になることであつたと。馬鹿になることであつたと。

過去の因縁に誇つて現在の義務を怠つている者程阿房はない。私は其う云ふ者を真の阿房と云ふ。

教祖の偉大は一身の利害得失と一時の毀誉褒貶に依つて其の行動を二つにしなかつたことである。今■の本部員に教祖の半分の精神でもあつたならば私は彼をもつて偉大なりと云ふに躊躇せぬ。

真理と云ふものは人から聞いたものであつてはならぬ。神の胸より直接流れて来たものでなければならぬ。

神を祀れば信者であり、教会に通えば信徒であり、お授けを戴けば助けの人衆であると思つているのは皆間違つている。理を信ぜぬ者は此の道の信者ではない。理の通わぬ者は此の道の信徒ではない。人を助ける精神なき者は助け一条の人衆ではない。

世間で云ふ悧巧な人程私の眼より見て浅薄なものはない。彼等の悟りは早い。けれども何等の深さも広さもない。

人間の心と云ふものはちょうど袋の様なものである。小さな心（小人格）程早く満足し大きな心（大人格）程満足することが遅い。

世間で最も重宝がる人間は何地にも融通の利く悧巧者である。成る程彼等は一寸の用には便利である。けれども彼等は到底道の大なる器ではない。

私は反対するならば何処迄も反対し通すだけの強い人格の妻をもちたい。又た賛成するならば何処迄も賛成するだけの強い人格の妻をもちたい。此の点に於て一生夫に反対し通したトルストイ夫人も亦一個の偉人であつた。

人は嫉妬に女の通弊だと云ふが彼れは女の通弊ではない。人間の通弊だ。其れが極度に昂進したものが嫉妬狂である。
私も結婚の当時は極烈なる嫉妬心に襲われたが今は頼まれたつて妬く気になれない。これだけ妻に対する愛が人類的に進んで来たのである。

凡そ人間に於て最も耐え難き苦痛は無実の罪に■して猜疑の眼をもつて眺められるより大なる苦痛はない。しかも私は長い間此の苦痛に耐えて来た。けれども今こそ私は懺悔するのである。私の盲目なる嫉妬心が如何に妻の純白なる精神を苦しめしことの大なりしかを。

凡て人間は経験に依らざれば大なる同情は購い得ざるものである。此の意味に於て躓ける路傍の石にも私は大なる感謝を捧ぐるのである。

私は信ずる。凡そ大なる敵を有せざるものは大なる味方をも有すること能わざることを
けれども敵を作り味方を作らんとする観念は真人の脳中には発酵しない。彼はただ自己の信仰に向つて突進することより外何者も考えているものではない。

人間を道徳的方面より分類すると四種の人間がある。
其の第一種の人間は懺悔すべき何等の罪をももたない人である。
其の第二種の人間は罪悪を犯してもこれを寸毫も私せざる人である。
其の第三種の人間は胸に大小の罪悪を記憶しながら社会を憚つて自己の長所をのみ見せんとする虚栄家である。
其の第四種の人間は罪悪を犯しても罪悪なることを自覚せざるの徒である。
教祖は即ち第一種に属するの人である。古来の聖賢は第二種に属する人である。世の所謂紳士、淑女、英雄、豪傑、偉人、傑士は第三種に属する人である。其の他の者は云ふに及ばず皆なこれ泥中にあつて泥の臭味を知らざる人間である。
私は幸い人間に生れさせて戴いたせめての望みに第一種の人間たらんことを欲すれどもこは私の如き凡夫には先天的に不可能のことに属す。しかも第三第四の人となつて無意義の生活を続けることは私の最も耐え難き苦痛とする所である。私は寧ろ第二種の人となつて青天白日の生活を楽まんのみ。

私は常に本部員（他の宗教は知らない）の行動に就て苦々しく思つている一人であるが彼等は何故事実を事実として社会に発表することを恐れるのであらう。善を示して悪をかくすは俗人のなす所である。常に正直に生きざるべからざる宗教家が俗人と同一の感情を抱き俗人と同一の生活を行ふならば宗教家の面目は何処にある。これ私をして彼等の中ただ一人だに宗教家はあらざるなりと叫ばしむる所以である。

蓋し人間なる以上何人にも過失なしと断ずることは出来ない。又た罪悪なしと断ずることは出来ない。けれども過失は過失として蔽ふ勿れ。罪悪は罪悪として隠すなかれ。其の天真にして飾らざる所に真人の面目はあるのである。

譬い其れによつて社会の誤解を招き世人の軽侮を買つた所で構わないではないか。何故なれば自己の真価は其れだけのものであるからである。

其れを白く塗られたる墓の如く醜悪を包まんとするが故に却つて不自然を生ずるのである。

偽善者よ先ず自己の名誉を根本的に破壊せよ。守銭奴よ自己の財産を先ず一文残らず散財せよ。然る後始めて汝の浄名を築き汝の浄財を積むべし。

世界には多くの梯子がある。教祖と御本席とは神と人との間に架せられた梯子であつた。私の希望は更らに教祖に登る人類のための梯子とならんことである。

私は山名には実に大なる御恩になつた。けれども其れは一つとして自分のためになつたのではない。皆道のためである。従つて私は直接山名に向つて報恩することは出来なくても道の上で報恩する心算である。山名にして道といふ大きな眼より眺めたならば充分私の精神を諒せられること↘信ずる。

私は一人一党主義たりとはしばしば私の口外する所のことである。主義相合すれば合し主義相離るれば離る。情実に依つて他人と行動を一にせざるのが私の主義である。

凡そ人間の心の穢さ奇麗さを曝露するのは品物を売買する時である。大抵の人間大抵の商人は皆値切るか掛け値をする。けれども私は古本屋を漁る時の外未だかつて品物に就て値切つたことがない。家族はしばしば私を気が弱い／＼と云つて非難するけれども私には何うしても強いて値切る気にはなれない。

本来より云えば買ふ者は成るべく高く買い売る者は成るべく安く売るのが互い助け合いの道である。然るに今日の商人は成るべく傷物を高く売らんとし、客は成るべく良い品を選んで安く買わんとしている。

かくの如くにして今日の商人と顧客との間にはただ利害あるのみにして寸毫の真実を見出すことは出来ない。

けれども私は信ずる。最も商い上手は掛け値をせざる商人であると。又私は信ずる。最も買い物上手は値切らない顧客であると。

今日の如く正札をつけながら人を見て正札以下に売り、又た以上に売り、又た正札如何に売らせもしくば売らせんとするのは互いに商業道徳を知らざる徒である。日本の商人が世界の市場に於て信用なきは全く此の目先きの掛け引きの甚しい点にある。

世間の人間は人の死んだ所へ行つて悲しくなくとも悲しそうな顔をし、人の生れた所へ行つて嬉しくなくとも嬉しそうな顔をしなければ義理知らずだとか人情無しだとか云われやしないかと非常に恐れている。而して皆人間の仲間に入れて貰ふために其の力量相応の芝居をしている。

けれども私は疑ふのである。人が死んだら何故悲しまなければならないのか？　又た人が生れたら何故喜ばなければならないのか？　私は未だ何時其う云ふ律法の定められたかを知らない。

私は考える。人並といふこと、世間並といふこと、世界並といふこと程自分にとつて無意義な生活はないと。其れで私は至る所に於て調子外れのことをする。其れは私が好んで其うする訳ではないが私の考える人生の意義に従ふと自然其うなつて来るから仕方がない。

人は云ふ、結婚は人生の重大事である。従つて良配を選ばざるべからずと。或は其うかも知らない。けれども今日になつて考えて見れば妻は馬鹿でも賢くても貞実でも不貞でも

美人でも醜婦でも何つ地でも良い。殊に馬鹿な女程不貞の女程醜婦程選んで娶つてやるべきだと思ふ。これ真の愛である。
　妻が馬鹿だから妻が不貞だから妻が醜婦だからと云つて選り好みをしている中は未だ真の愛を持たない人間である。苟くも真に人類的の愛を他人に対してもつている人間は賢愚美醜は問ふ所ではない。何故なれば彼等も亦神の血を受けたる我が姉妹なればなり。

　私は覚悟している。此の手、此の足、此の眼、此の頭の動く間は此の自己、此の家庭、此の国家、此の世界をして真に理想の世界たらしむることを止めざるべしと。

　人は疾病を恐れて自己の信仰に直進することを躊躇すれども我は疾病を恐れない。人は不幸を恐れて自己の所信を断行することを恐るれども我は不幸を恐れない。何故なれば真の信仰は其を実行することに依つて疾病不幸に陥る理由がないからである。もし不幸にして神の異見立腹に接せんか其の時こそ真に心より懺悔すべきのみ。

　道を信じて未だ因縁に打ち克ち得ざるは真に道を信じたのではない。

　道でも世間でも青年が理屈を云ふと生意気だと云ふ。けれども私は信ずる。始めより理屈も云えない様な青年は将来なすなき無■の青年のみと。
　青年は大いに理屈を云ふべし。而して究理に究理を重ねて大悟徹底の境に達した結果始めて沈黙の生活に入るべきである。
　始めより訳もわからず先輩の言に盲従して真に人生の意義を自覚することなく徒らに酔生夢死の一生を送ることは吾人の組する所ではない。

　手の人となるよりも先ず頭の人となれ、口の人となるよりも先ず心の人となれ。
　此の世は理でせめたる世界なら何か万づを歌の理で責め
　人間は先ず理想家たるべし。何故なれば実行の価値は真に理論に徹底した結果にあるからである。ただ何事にでも実行すれば可なりと云ふ所謂実際家は人生の真義に未だ参与しない徒である。

　天理教の人間程分けの分らぬことを何時迄と云ふことなく愚図　　云つている人間はない。而して表立つて云つて来るかと思つていれば一人でも表立つて云つて来るものはない。蔭へ回つて壁一重の外で何時迄と云ふこともなく愚図　　云つている。
　私の所へ来た或る人は天理教徒を宗教界の支那人だと評したが全く適評だと思つている。
　利己的で猜疑心が深く蔭でワイ　　云つていながらサアつて云ふ時は足も腰も立たず始終金々と云つて金を金科玉条の様にしている所は全然支那人其の侭である。天理教の振わざるも亦故あるかな。

　今日の本部員中真に宗教家らしい人間と一手はマア一人もないと云つて良い。其の中で最も性質の良いのは宮森であるが惜しいことには天性の美玉を磨かないのと器宇の狭量とで大なる道の器とはなれない、其の他の本部員に板つては何れもこれも金や名誉が欲しい手合で話にならない。

　何んと云つても道の本流は城法にあるらしい。私は自分の徳未だ其処に至らずして会長と面会する機会を天より与えられてはいないが天理教々師も幾万とあるが其人の前に出て真に我と我が精神を恥づるのは彼の人だけらしい。私は彼の人に比べたら偽物だ。未だ真物になつていない。
　其れで或る人は私を彼の人の所へ案内しやうと云ふて呉れる人がある。又た私自身一二度お訪ねしたこともある。けれども今は私自身の精神の修養が忙がしい。もう少し精神が出来ない中は彼の人に逢わない心算だ。

　中々此の度一列に確つかり思案をせにゃならん
　天理教徒は此のお言葉を何んと思つているであらう。世の人間は此のお言葉を何んと思つているであらう。見渡す所一人として真に此のお言葉の意味の分つたものがない様である。

　私は故人としては人の感情を害す様なただ一言の強い言葉も云えぬ人間である、けれども公人として云ふ場合にはもしくば其の人其の家其の国の永遠の利益のために云ふ場合に

は如何なる猛語も辞せない人間である。

　法律では人の肉体を冊がいする者を殺人罪に問ふけれども人の精神を冊がいする者を殺人罪に問わない。
　彼れは間違つている。人の肉体を殺す位は殺人罪として最も軽いものである。凡そ此の世に於ける最も重き殺人罪は人の精神を殺すことである。しかも其の人を永遠に生かすためには其の人の誤れる精神を殺さなければならぬ時がある。けれども其れは凡夫の能くする所でない。

　今日の人間は人を憚かることを知れども天を憚かることを知らない。一切の偽善偽悪の罪はこれより起つて来る。
　本部の人達の問には私に書く材料の尽きるのを待つて居る人が少ないそうである。けれども不幸にして彼等の希望は一生や二生や三生や四生や五生で達せられそうもない。
　私は其等の人達に云ふ。人の井戸の水の絶えることを待ちあぐんでいるよりも先ず自分自身の井戸を掘れと。
　掘抜き井戸は諸君の考えている様に一日や二日の旱魃で干くものではない。

　本部の人達は私が御筆先を出したに就いて人の秘密をあばいて金儲けをしていると云つて居るそうである。一から十迄秘密と金より外何物もない本部の奴等にはこれ位にさえ見えないであらう。
　凡て書物を読むにも真理を解するにも己が力量通りにさえ読み且つ解すことの出来ないものである。私の正しい仕事に対して発した彼等の言葉は往々彼等の人格彼等の精神がこれ位のものでしかないと云ふことを語る反語であつた。

　人が自分を軽蔑したと云つて怒つたり当て擦つたり皮肉な行動に出たりする程精神の底が見すいて憐れなものはない。其んな根性魂の小さい人間が何をなし得るものか？　私はただ其の者の浅果敢な精神を憐れむ計りである。

　私は此の地場に名誉を求むるために来たのではない。財産を求むるたろに来たのではない。ただ真理を求むるために来たのである。
　然るに何んぞや真理を人に伝えて其の精神を救済すべき本部員が此の一介の書生を恐れて協同して真理の口を鎖ざすとは、かくて私は尽きぬ怨恨（道と世界のための怨恨）を呑んで本部の地を去るのである。否な自己の不徳と断念めて本部を去るのである。
　けれども我が去れるがために敵はスッカリ退治せられたりと思ふ勿れ。神は二陣三陣の兵を送つて必らず我に命ぜられたる最初の意志を貫くべきぞ。其の結果汝等の有てるものは真理にあらずただ真理の姿を粧える魔法なることを看破せられる時が来る。
　時は迫れり。天理教会の廓清せらるべき時は迫れり。
　我が先陣の功必らず空しからずして神の軍兵の凱歌を後陣にあつて聞くべし。
　正法正義の戦は宣せられたり。我と思わん此の道の勇士は立つて此の道の滅亡を擁護せよ。

　第二天理教会革命の声（二）

大平　隆平

　第一章　因縁を見て理を説け

　今日の天理教々師は人さえ見れば尽せ果せと云ふ。これ教祖の説いた所である。けれども教祖の尽せ果せと云われたのは今日の天理教々師の云ふ金のことではないのである。誠を尽せ悪因縁を果せと云ふことである。其れには金に依つて悪因縁を積めるものは其の積みし金を社会のために尽し、女に依つて悪因縁を積めるものは吾がために其の女の失いしもの（貞操、名誉、幸福）を償い、更らに生得の性癖となつて表われたる因縁は力めてたんのうして之れを除去することに勤め、酒に依つて悪因縁を積めるものは禁酒して将来を謹しみ、貪婪によつて因縁をつめるものは慈善によつてこれを果し、吝嗇によつて因縁を積めるものは布施によつてこれを果し、邪愛に依つて因縁を積めるものは親切に依つて之れを果し、憎悪に依つて因縁を積めるものは同情に依つて之れを果し、怨恨に依つて因縁を積めるものは感謝に依つて之れを果し、立腹に依つて因縁を積めるものは慰籍に依つて之れを果し、強欲に依つて因縁を積めるものは利他に依つて之れを果し、高慢に依つて因縁を積めるものは謙遜に依つて之れを果す計りでなく更らに根本的に欲しい（貪婪）惜し

い（吝嗇）の性情、愛し易く憎み易き性質、怨み易く腹立ち易き性癖、欲、高慢の性分を矯正する努力を指して尽すとも果すとも云われたのである。
　然るに今日の天理教々師は上は本部員より下は宣教所集談所の所長に格迄因縁を切るものは金よりない様に説いている。妄も亦甚しと云ふべし。
　凡て懺悔と蓋しは各自の積んだ因縁に依つて異るのである。もし金に依つて姦通の罪を許さばこれ女の賄賂に依つて罪を許すのである、かくの如き不条理あることなし。従つて各人は先ず性癖（前世の因縁）を矯正すると共に罪悪（今生の因縁）を懺悔すべし。決して欲深き教師の言に迷つてはならない。又た迷わしてはならない。
　凡て布教の目的は信者より金を取るためではない。信者をして永遠に不幸を生ましむる根本的原因即ち精神病を教理に依つて癒し、彼等に人の行くべき道を教ゆるにあるのである。
　従つて信徒未信徒は先ず自己の因縁に依つて懺悔の法を異にすべきである。決して尽せ果せ（金、財産）の教師の言に迷つてはならない。迷わしてはならない。先ず因縁に依つて理を説き、先ず因縁に依つて理を聞き分けよ。これ余が真実の忠言である。金を出すと出さぬとはただ其の因縁に依るのみ。

第二章　世襲制度を廃せよ

　先きに板垣伯は一代華族論を唱え乃木大将は非養子説を唱えたが世襲制度の弊害は華族にのみ限られてはいない。人物本位人材本位で行かなければならぬ凡ゆる世界に共通の弊害である。
　一例を挙げて云えば内閣である。彼れが昔の封建時代の様に家老の子は代々家老となり、重役の子は代々重役となるが如く其の子の賢愚肖不肖を問わず総理大臣の子は必らず総理大臣となり、司法大臣の子は必らず司法大臣となり、文部大臣の子は必らず文部大臣となるとしたならば其の間に起る所の弊害は何れだけ大なるかを知らない。これは職業の世襲問題に於ても同一である。
　昔は親が百姓ならば子も百姓にならなければならないものと決めていた。其れがために色々な悲喜劇が此の方面にも起つたのである。
　然るに何うした分けか最も進歩した文明的の宗教だと思われる天理教に於て世界では既に既決問題である此の世襲制度が依然として行われている。これは天理教発達のために大いに研究しなければならぬ問題である。
　何故なれば管長の後に代々名管長が出で、本部員の後に代々名本部員が出で、会長の後に代々名会長が出で、役員の後に代々名役員が出るのならば兎に角其の後に全然管長たり本部員たり会長たり役員たるに足る人格と才能とを備えない庸劣なる管長、本部員、会長、役員が出た場合には何うするか？　其の部下は必らずこれに依つて不平不満の素地を作るに違いないからである。
　此の弊害を救ふ方法が二つある。其の一つは天啓に依つて会長及び役員を指名することである。其の二は選挙に依つて適任者を選ぶことである。
　第一の方法は至極確実にして安全なる方法なれども今日の如く天啓の中止している場合には勢い第二の方法に依らざれば真に安んじて信頼するに足る本部員もしくば会長もしくば役員を得ることは困難であらうと思われる。
　忌諱なく云えば日本の皇室波に皇族と云ふものは特別として華族とか士族とか平民とか云ふ階級は人権の発達して来た今日当然廃止せらるべきものである。何故なれば人物の価値は其う云ふ階級に依るにあらずして其の人自身にあるからである。これが最も自然の階級制度である。徒らに人工に依つて一平民としての人格的かちわも有せぬ人間を貴族だとか華族だとか云ふ特殊な階級に祀り上げる必要はないのである。但しこれには祖先の功労と云ふが如き付帯条件が伴ふのであらうが祖先と子孫とは別人格なる以上当然別種の取扱をして可なるべきものである。
　其れと同じく天理教に於ても管長これは特殊のものとして取り扱ふて可である。其の他の者は本部員であらうが会長であらうが役員であらうが毫も世襲せしむる必要がないのである。これ一人限り一代限りの信仰たる所以である。
　けれども此の世襲制度の打破に就ては直接の利害を有する本部員始め会長役員の如き此の道の上級者の反対があるであらう。けれども家老や重役の反対位で昔の世襲制度が継続され得なかつた如く会長や役員の反対位で教界の世襲制度は継続すべき性質のものではない。と云ふのはお言葉に
　神の道には親族はない
とある如き法統と血統とは厳然たる区別をしなければならぬものである。
　之れが世間普通の家督相続と云ふが如きものならば肉身が其の家督を相続するに何等の

不思議はない。けれども神の家督は真理である。これを相続するには血肉は何等の問題とならない。其法統を継ぐべき人の人格と信仰とに依るのである。此の一方は肉に依つて継ぎ一方は霊に依つて継ぐ所に世界と道との大なる相違があるのである。
　此の二者の関係は親鸞以前の仏教徒には厳格に区別せられていた。然るに彼が肉食妻帯の法を立てゝより依頼此の二者は曖昧の中に混同せられてしまつた。
　けれども天理教は今や眼前に此の問題を解決すべき時期に迫つている。何故なれば今日は未だ始めて此の道についた親が会長なり役員なりをしているから良いが今五十年なり百年なりの後には必らずこれに対して一種の制度を定めざるべからざるからである。否な現に定まりつゝあるのである。世襲制度即ちこれである。
　けれども法統の相続はちょうど碁なり将棋なり琴なり三味線なり茶の湯なり生花なりの家元を相続するものは其の子にあらずして却つて血を異にせる技術の名人をもつてするが如きものである。たとい親子であつて血統は受けていても必らずしも法統を受けているといふことはできない。此処に主要な問題がある。と云ふのは此の道は元来法即ち真理に依つて立つ道にして肉に依つて継続せらるゝ道ではないからである。如何に立派な血統を受けて居ても教祖の法統を受けていない者は此の道の他人であるからである。其の他人をもつて道を立てんとしても道の立つべき真理がない。これ私が世襲制度の廃止を絶叫する所以である。

第三章　事実の真相を蔽ふ勿れ

　天理教界を観察するに苦々しきことの多々ある中に欠点や悪事を隠して長所や善事のみを語つて行こうとすることである。云い換えれば自分等の都合の悪いことは隠して都合の良い様に　　と拵つて行くことである。
　一例を挙げて云えば中山家の真相である。厳密に調査をして行くと彼の聖者を出した中山家には醜怪見るに耐えない奇怪事が多々あるのである。就中教祖の長男秀司波に其の妻松枝の所行の如き遠く人倫の域を脱している。しかも本部に於てはこれを非常の善人の如く飾り秀司夫婦が教祖を如何に苦しめ貫いたかと云ふ様のことを一言も云わない。
　けれども真相の隠蔽はこれのみではない。教義であれ御指図であれ御筆先であれ多少事面倒と思ふものは凡て厳封して教界内部の人にすら見ることを禁じている。
　往々当時の真相だと思ふ事を捉えて先輩に正すかもしくばこれを社会に発表すれば彼等は事実の有無を問わずして先ず何よりも先き慌てゝ其れをもみ消そうと運動し始める。此の陰険姑息の弊風は今や教界の隅々隙々迄行き渡つて居る。従つて風来の門外漢が天理教の真理を正さんとして教会を訪問しても彼等は狐疑して決して真相を明かすことはない。かくの如くにして今日の天理教はスッカリ此の世ならぬ完全無欠のものに造り上げられたのである。
　彼等は云ふ。此う云ふ事は信徒に聞かしてはならんから隠して置け。此う云ふ事は信徒に見せてはならんから隠して置け。此う云ふことは社会の誤解を招くから隠して置け。此う云ふことは政府の誤解を招くから隠して置けと。此くの如くにして吾等より見れば何んでもない詰らぬことでも臭い物に蓋をする様に大事に隠している。これが朝起き、正直、働きを教えて居る今日の天理教の真相である。これ果して教理に叶つた所行であらうか？
　私は大いに之れに対して奇怪の感を懐かずにいられないのである。
　けれども事実と云ふものは人間の弁巧や才知に依つて隠蔽しても善は飽く迄も善にして悪は飽く迄悪であつて未来永劫変ることなく又た変ゆべからざるものである。此処に事実の絶対権威がある。
　然るに元来正直を旨として一点の非を隠蔽せず一点の是を誇張せざるべき宗教家ともあらうものが人間力で事実を曲げたり真相を蔽ふたりして其れで万代の万人を欺き得ると思ふであらうか？　否な神を欺き得ると思つているであらうか？
　成る程知巧方便は一代一人を欺くことは出来るであらう。けれども万代の万人は決して欺き得ざるものである。否な万代の万人は欺き得るであらう。けれども三世十方を観通せる神は欺き得ない。否な三世十方を観通せる神は欺き得るかも知らない。けれども我が見し事、我が聞きし事、我が嗅ぎしこと、我が味いし事、我が語りし事、我が行いし事、我が触れし事、我が考えし事実を変更し得ざるを如何せん。云い換えれば此の自己を欺き得ざるを如何せん。
　もしそれ浅果敢なる人間の知巧方便をもつて永遠に神戸人を欺き得たると思惟するならば其れは宗教家の風上にも置けぬ偽善偽悪の徒である。
　けれども此の偽善的生活に慣れたる教界の人々は敢て此の弊風を打破するでもなく依然として此う云ふことは信徒に聞かしては悪いから、此う云ふことは信徒に見せては悪いからを唯一の条件としている。

成る程事実の権威を認めない人間は此の功利主義者の言を尤もと思ふであらう。けれども其う云ふ功利主義は俗人の云ふことであつて宗教家の云ふことではない。否な人間として云ふべきことではない。

もし自分に欠点や罪悪があつたなら欠点や罪悪を包まず懺悔し告白すれば良いではないか？　其れが真の宗教家の態度である。否な真人の態度である。

昔一代の聖人と云われた人の中には殺人罪を犯し強姦罪を犯した道徳上並に法律上の罪人がある。しかも彼等は自己の罪悪を懺悔後悔していささかも包む所なく又た罪を再び犯すことはなかつた。これが真の宗教家である。

凡そ此の世界の人間の中始めより一つも罪を犯さない人間は一人もないのである。然り一人もない。けれども罪があつても構わぬ。しかも天地納れざる大逆罪を犯した重罪者でも構わない。一旦此の教を聞いて真の改心がついたならばもはや前非を問ふ必要はないのである。もし其れをしも何時迄も追及して其の尊き懺悔者の後半生を苦しめる者があるならば其れは宗教の何物たるを知らざる愚人である計りでなく自己の何物であるかを知らざる痴人である。

私が此の世界に於て最も悪む所のものは法律上もしくば道徳上の罪人ではない。其の罪悪を隠蔽して我は劫初依頼一度も罪を犯せしことなしと云ふ態度をする偽善者である。

彼等は考えている。

我は悪い事をしたけれども人さえ知らなければ何うでも良い

と。かくの如くにして彼等は事実の真相が曝露する迄凡ゆる方便をもつて自己の罪悪を蔽わんとする。否な事実の真相は曝露し其の証拠の現われたる場合に於ても尚黒を白と云い白めんとしている。これが今日の天理教界の状態である。

私は現在の本部員中入信後尚依然として法律上並に道徳上の大罪を犯している人間を知つている。もし彼等にして強いて自己の地位を保たんがために神と人とを欺くならば私は其を公衆の前に発表して其の改心を促すことを辞せない。けれども其う云ふ人為的方法に依つて其の人を改心せしむることは私の本来の趣旨ではない。従つて私は気長く其の人の中心より懺悔せんことを希望しているのである。

そもそも宗教家の宗教家たる所以は其の道徳的両親が普通人より鋭敏なることである。彼等は普通人が美徳として誇るものをさえ罪悪と感ずるだけの鋭敏性がなければならぬ。然るに今日の天理教々師並に信徒を見るに社会の道徳的標準を抜いて高き生活をもつている者は万人に一人もあるか無しかである。其の他の者は今日の道徳的標準を下ること遥かに遠きものが大部分を占めている。天理教徒が社会より軽蔑せらるゝも故あるかなである。

私は本部に向つて云ふのである。貴部は何の権威をもつて又た何の道徳をもつて事実の真相を蔽ふて虚偽をもつて社会を瞞着せんとはすると。もし今日にして反省する所なくば神聖なる教理を曲げ神人を欺いた涜神の大罪を公衆の面前に曝露するであらう。これ私の制裁にあらずして天の制裁である。敢て偽善生活に耽溺せる教界全体の深刻なる反省を望む。

第四章　甘露台上の屋根を改築せよ

天啓に依れば無形の甘露台の建設せられた暁には此の地場に於ても有形の甘露台が建設せられ、其の台の上の平鉢には天より甘露を下す。これ不老不死の霊薬であると。

然るに今日の甘露台上の屋根の構造を見るに甘露の下るべき場所がないのである。これは仮神殿であるから此うしたものであるかも知らないが理は何処迄も理である。彼は当然旧神殿の如く屋根を九天の上に衝き抜くべきものである。

これは或は雨を恐れたがためかも知らないが神もしこれを守つているならば雨を下して甘露台地に洪水を起すことはない筈である。其れとも天理教は黄金の雨は降つても甘露の下る必要はないのであるか？　今日の天理教のやり方より観察すれば恐らく後者であらうと思われる。

何故なればもし今日の天理教にして熱心に甘露の降下を期待して居るならばたとえ仮神殿にもせよ其の様の構造をする筈である。其れを現在の如く甘露台を屋根で蔽ふと云ふのはそもそも甘露を期待せざる証拠にあらずして何ぞや？

かくの如くすることなすこと一つとして理に叶わず理を重んぜぬ故に段々成らん様になる。其れを注意しても上は故管長夫人を始め下は部下一信徒に格迄聞かない。却つて其う云ふ人々を敵視して来るのである。これでは話にならない。心あるものは心を鎮めて道の将来を思ふべき時である。

第五章　成功を急ぐ勿れ

　早いが早いに立たん。遅いが遅いに立たん。ジックリしばらくジッと静めているを理と云ふ　　天啓の声
　諺に曰く
　急がば回れ
と。これは世界的事業の上に真理なる計りでなく宗教的仕事の上にも真理である。分けて布教伝道の上の箴言である。
　今日の天理教布教師は一日も早く病人を信徒としやうとして色々の策を講ずる。其れは未だ良い。信徒を作るのは良い。けれども彼等は其れをもつて金儲けの道具としやうとするからいけない。
　元来此の道の目的は人心の改良にあつて金儲けではない。然るに此の道の布教師は病人が一人引つかゝるとあたかも魚が網にかゝつた様に寄つて簇つて其れを喰い物にしやうとする。其のために最初誰か一人匂掛すると二三日経つときつと会長か役員が行つて尽せ果せの相談をもちかける。さらでだに天理教々師と云えば詐欺師か盗人の様に思つている病人は即ぐ離れてしまふ。其の後に何んな良い教師が行つて何んな貴い教理を聞かせやうと思つて行つてももう先きの事にこりて聞こうともしない。かくの如くして日本全国の隅から隅迄天理教々師の荒さぬ所は殆んどないと云つて良いのである。
　私は今日の布教師の布教上の主義、目的、方法には絶対に賛成し能わぬ一人であるが彼等がかくも早く信徒より金銭を巻き上げんとする裏には云ふに忍びない奇怪な精神が潜んでいるのである。其の奇怪の精神とは青年布教師ならば一日も早く名称を出願するだけの信徒をつくつて上級者に賞讃せられんとする虚栄心が主であり、老年の教師にあつては一人も多く信徒を作つて教界の経済を豊富にせんと云ふ下心が手伝つているのである。其のために彼等は一人の病人が引つかゝると一回二回は辛抱するが三回四回になると必らず金の問題を持ち出すのである。
　けれども道本来の精神より云えば投げ所へ投げたら落ち所を見るなと云ふにある。教理は飽く迄も聞かせねばならん。けれども其れを利用して信徒より金を巻き上げんとするは間違つている。否な間違つている所ではない。正さに天理教の敵である。彼等布教師が成功を急ぐは此誤れる観念のためである。私の求むる所は真の布教云い換えれば一切の利害観念を離れてただ人心の救済を目的とする布教即ちこれである。布教伝道をもつて営利的事業と同一視し其の成功を急ぐが如きは吾人の絶対に組し得ざる所である。

第六章　政府の監督より独立せよ

　今日の天理教徒は天理教の独立認可を無上の光栄の如く信じているけれども神は元来
　願い出るなら出て見よ。息が止まるから
と迄仰せになつて政府づらに許可せらるゝことを非常にお嫌いになつたのである。
　元来此の道は天然自然の神の道であつて人間が許可するの許可せぬと云ふべき性質のものではない。又政府が監督するの監督せられるのと云ふべき道ではない。其れ自身先天的に万代の万国を支配すべき無上の権威を有する道である。
　然るに卑屈にも無見識にも政府の許可を受けたるがために神名をも改称せられ詐八百の経典を作り却つて御指図や御筆先をかくす様な矛盾に陥つているのである。かくの如くにして今日の細道は神が作つたのでもなく政府が作つたのでもなく転記教徒自身が作つたのである。
　本来宗教なるものは治外法権の下に立つべきものである。勿論中には殆んど世道人心を益することなく却つて之れを蔽ふが如き有害無益の宗教のなきにしもあらざれども一般に宗教其の者が法律以上の権威をもつている様の時代が来なければ宗教の真の働きは出来ない。宗教の真の働きが出来なければ法律が如何に完備しても真に国家社会を平和に治めて行く事は出来ないのである。
　こう云つたならば今日の宗教家も政治家も其んな時代があつてたまるものかと云ふであらう。けれども見よ。其の時は日一日と近づきつゝあることを。其の時来らば宗教は此の世の無上の権威を執り法律は其を補ふに過ぎざる様になるのであらう。
　けれども今日の天理教徒の大部分は折角これ迄になつたものを元の細道に帰る必要はないと云ふであらう。けれども天理教の権威を保ち真に自由の布教をなさんと欲せば教祖時代の無許可の時代に帰らなければならない。否な黙つていても其う云ふ時代は早晩必らずや来るのである。
　又た教会の如きも今日は地方庁の監督の許にあるけれどもこれも本来より云えば教祖こそ却つて地方庁を取り締るべきものである。彼等の監督の下に立つべき性質のものではないのである。もし信徒にして解散するの覚悟ならば信教自由の憲法の規定に照しても政府

はこれに向つて決して干渉するの権利を有しないのである。
　けれども信徒を結成して教会を設立することは神の理想であつたから私は之れに向つて解散を命ずるのではないが然し教会を設立したがために信教の自由を侵害せらるゝに於ては吾人又た一言なきを得ざるものである。殊に残念に思ふのは天理教もこれだけに大きくなつていながら純教理を誰憚らず述べ得ざる不甲斐なさである。
　かく云つたならのば信徒の中には又た私に喰つてかゝつて来る者があるかも知らないが今日の如く天理教をして窮屈なイジけたものとしたのは皆な故管長の罪である。
　神はしばしばこれだけのものになつたのだからやり通せと云われたが臆病なる管長は其れをやり通すだけの勇気なく遂いに其の祭神をすら変更するの愚を演じたのである。天理教をして今日の如くならしめたのは故管長の力与つて大なるものがあるのである。
　私は天理教当局者に建言す。神と神の教とを復活せよと。もし神と神の教を復活することを政府が拒否したならば潔く政府の認可を取り消して其の監督より離れよ。これ世界最後の宗教として当然取るべき態度である。
　よく考えて見よ。神は親である。人は子である。神の道は根である。世界の道は枝である。凡そ此の世界に於て親が子供の監督を受けなければ立つことを許さないと云ふ規定が何処にあるか。又た根は枝の養育を受けなければ育つて行けぬと云ふ規定は何処にあるか？　今日の天理教と政府並に地方庁との関係は余りに本末始終を顛倒している。これ私をして政府の監督より独立せよと叫ばしむる所以である。

第七章　部下を苦しむること勿れ

　私が常に今日の天理教のやり方について悲しんでいることは部下に対する苛税の余りに重きことである。其のために今日部下一般の披露は測り知るべからざるものがある。翻つて本部は如何にと云えば中山家の財産は少く見積つても三百万円以上の財産があると云ふではないか？　其の生活は正さに王侯貴族の上に位している。其れも此の道が全世界につけ通した将来ならばいざ知らず現在なお発達の大過程にある天理教としてはかくの如き大金を遊ばせて置く必要は何処にあるか？　もし中山家に其れだけの財産があるならば進んで部下の困難なるものを救済して行くのが当然ではある。然るにさはせずして困窮に困窮を重ね疲弊に疲弊を重ねつゝある部下の膏血を絞られるだけ絞つて行こうとするのはこれが互い立て合い助け合いの道か？　これが親子兄弟の道か？　良く考えて見たが良い。
　普通親の心として子供を裸体にして自身は美衣美食に驕つて楽があるかないか。もしあるならば其れは真の親ではない。継親である。苟も真の親ならば自分は食わないでも子供に食わせ、自分は着ないでも子供に着せ、自分は汚い処に住んでも子供には立派な家に住ませたいのが真の親心である。
　然るに今日中山家が部下に対する態度を見るに真の親心と云ふのは毛筋程もないのである。これでは部下が助からぬ計りでなく中山家も亦助からんのである。事実中山家の生長はこれにて止まつた。もし今日に於て教祖の精神に立ち帰り部下を憐れむの心を起さなかつたならば今後は次第／＼に失意の境に陥るであらう。これは火を見るより明かである。
　埃はただに其れのみではない。神が一つの家内一つの世帯と迄云い故管長又た其れを誓つた飯降一族に対しての待遇の如きも自家の今日の贅沢に比ぶれば余りに大なる相違ではないか？　否な殆んど言語道断の処置をとつている。これには飯降一族にも欠点はあるであらうがたとい如何なる欠点があるにもせよ神を欺いた偽証の罪は断じて許すことの出来ないものである。
　其の他上田奈良糸子様に対する態度の如きも殆んど礼を得ていないのである。此の道の重位を占むる二家に対する態度既に然り況んや本部員を始め部下に対する態度をや。其は今更説明する迄もなく何人も知悉する所である。
　更らに翻つて中山家並に其の一門を見るに此の道に殆んど何等の功績のない者迄も引き寄せて其れに重き地位を与え豊かな生活をなさしめている。これが果して道か？　もしこれが果して道と云ふものならば吾人はもはや天理教を信ずる必要はない。寧ろ退いて他の道に走せ参ずべきである。
　けれども吾人真の天理教を一度信仰した者には何うしても此の道を離るゝことはできない。出来ざるがために此処に今日の天理教のやり方の誤謬を指摘して中山家を始め一般天理教界の反省を促すのである。
　そもそも如何に根幹のみ大なりとも其の枝葉が永遠に冬枯木の如く緑葉を欠くならば決して繁茂せりと云ふことはできない。しかも今日の天理教は全く此の冬枯木である。其の枝上に殆んど生々とした緑葉を見ることが出来ない。これでは道が盛大だとは決して云われまい。
　神と教祖の楽しみは先々の繁るのが唯一の楽しみであつた。然るに今日中山家を始め上

級教会は此の神と教祖の楽しみをスッカリ奪つてしまつた。これでは神と教祖の思召が立たん計りでなく天理教其れ自身も決して立たないのである。
　中山家にして此の点を悟り本部にして此の点を悟つたならば中山一家を肥さんがために部下の膏血を絞り切る事を止むべきである。否な単に其れを止むべきのみならず進んで困難なるものを救ふこそ教祖の精神を継げる者と云わなければならぬ。敢て中山家を始め上級教会の反省を促がす次第である。

第八章　教祖の降誕日を記念せよ

　凡て仏教でも基督教でも釈迦もしくば基督の降誕日には降誕祭なるものを催ふして各々其の大恩教主の誕生を祝福している。ひとり天理教にあつては教祖の昇天日を記念するために大祭の催ありと雖も其の降誕日に対しては全然何等の催がないのである。これ果して大恩教主を記念する所以であらうか？　吾人は天理教徒の誠心の余りに欠乏せるを怪しまずにいられないのである。
　日本人の習慣に寄れば故人の死亡の日は記念すれども其の誕生日を記念しない。けれどもこれは真に当を得たものではない。
　凡て終あるものは始なかるべからず、凡て死あるものは生なかるべからず。徒らに其の末を讃えて其の源を忘れるのは真に風光を讃える所以ではあるまい。
　之れを教祖の上に見るに教祖に降誕の事実あつて始めて万人渇仰の大事業が出来たのである。此う云ふ点より云つても教祖の降誕日は教祖の昇天日よりも吾人人類にとつてより大なる意味を有するのである。
　そもそも正月廿六日の春季大祭は此の世界より霊界の太陽の没した悲しむべき日である。吾人は一方に於て此の悲を埋めるだけの大なる喜をもたなければならない。其れは霊界の新しき太陽の昇つた日即ち教祖の誕生日を祝福するより大なる喜はないのである。
　勿論天理教には十月二十六日に秋季大祭なるものあつて立教日を記念するの喜をもつていると雖も吾人は其れだけにて決して充分に教祖を記念し得たと云ふ感が生じない。教祖御親の降誕を記念することに依つて始めて充分に教祖を記念することが出来るのである。
　苟も教祖の大恩を多少なりとも感ずるものは四月四日（四月十八日は誤）をもつて春秋二季の大祭と同様に記念せよ。天理教の三大節は紀元節にあらず天長節にあらず元始祭にあらずして実に教祖の降誕祭と天理教立教日と教祖昇天日の三つである。就中最も重大なる意義を有するものは教祖降誕日である、何故なれば教祖の降誕がなかつたならば天理教の立教も亦ないからである。
　今日の天理教のやり方は間違つている。しかも根本的に間違つている。彼等は教祖を記念する方法を知らない計りでなく根の恩元の恩を忘れている、これ一般天理教徒に向つて
　教祖の降誕日を記念せよ
と勧むる所以である。

第九章　信仰と知識に対する誤解を一掃せよ

　今日古い頭の天理教の人達は
　お道には学問は要らない
と一概に学問を排斥してしまふ。中にも頑固なる人達は
　学問のある人間は駄目だ
と無造作に結論してしまふ。
　けれどもこれは其う云ふ人達が自分が自分の無学を標準として立てたる議論であつて何等根拠のある説ではないのである。
　もし此の世に学問の必要がなかつたならば神は何も苦しんで人間に学問の仕込み知識の仕込みをなさらなかつた筈である。しかも知識の仕込みに六千年をさき学問の仕込みに四千年をさかれたのはよくよく其れが人間にとつて必要なものであるからである。其れを一口に学問も要らぬ知識も要らぬと排斥し去るのは余りに無知の暴言と云わなければならぬ。
　故管長が中学へやつて貰いたいと教祖に願つた時教祖は
　学問は要らぬ。今に世界から何んな偉い学者もついて来る。お前は徳を研け
と云われたのは学問や知識を無用視せられたのではなく人格の修養の更らに必要なることを高唱せられたのである。
　其れを一概に誤解して学問は要らぬ者知識は要らぬものと極めてしまふのは余りに一を知つて二を知らざる無知の語である。
　成る程学問や知識は悟を遅くさせる。中には其のために妨げられて生涯真の悟道に入り

得ないものもある。けれども無知無学の人は悟ること（天国をとること）も早いけれども其の悟り（天国）は小さい。学問のあるものは其の悟り（天国をとること）は遅いけれども大きい。これが学問の効能である。
　凡て信仰と知識とは鳥の両翼の如く、車の両輪の如く暫時も相離るべからざるものである。其の信仰が大なれば大なる程其の知識も大に、其の知識が大なれば大なる程其の信仰も大なるものである。其れを強いて片輪の人間にしやうとするから精神的の不具者が続出するのである。
　凡て学問と云い、知識と云い其れは信仰を延べる道具であつて縮める道具ではない。人格を高くする道具であつて低くする道具ではない。此の間の消息を会得せざる中は天理教には大人格大知識の生まるゝことは永遠にないのである、又た此の間の自覚が徹底しない中は天理教には大智者大学者の育つことは永遠にないのである。
　現に天理教を目指して寄り集つた学者一学者と云つても碌な学者はないが一が一人として其の最後を全うしないのは其の人格に欠点のあるためとは云え一方に於て智者学者を納るゝ雅量のないことを照明するものである。
　此の偏狭なる知識観学問観は引いて人材養成の方面に累を及ぼし折角有為の才を抱きながら中途に於て挫折させらるゝものが少くないのである。今日の天理教々師の中中流以上の知識階級に向つて匂い掛けし得る者のないのは其のためである。
　けれども今日は時代が一変した。何時迄も古い天保銭の云ふことを聞いて学問の排斥知識の侵入を防禦して行つたならば啻に時勢を指導するの任に堪えない計りでなく却つて社会より指導を受けなければならぬ様になる。其れでは社会の木鐸となることは出来ない。
　凡て道の発達は世界の発達である。其の時　　の時勢に応ずる勤めをして行くのが天理教徒の任務である。其れには今日迄の天理教徒の頑守して来た固陋の考を一掃しなければならぬ。然らざれば道の発達も世界の発達も共に期して望むことは出来ないのである。
　けれども此処に何処迄も区別を立てゝ行かなければならぬことは、信仰は第一義にして知識は第二義、人格は第一義にして学問は第二義なることである。此の区別さえ忘れずば補助として学問知識を吸収することが何の妨害ぞ。吾人は天理教の古い人達の余りに訳の分らぬ頑固を悲しむものである。

第十章　標準教理を一定せよ

　凡て仏教でも基督教でも儒教でも其の中心人物を失ふや其れと共に教理の統一を失ふのはこれ迄の例に徴して明かである。
　天理教も亦教祖を失い次いで御本席を失ふに至り、本部を始め教理の統一を失い、殆んど教祖より流れ出た元の精神元の形式を止めなくなつた。
　其の証拠は新宗教に対する本部の圧迫となつて日に月に教祖直伝の教理を潰そうとしているのであるが今回道の友記者奥谷文智氏の解職の如きも亦本部に何等一定の標準教理のなきことを曝露せるものである。
　公平の眼をもつて見れば問題となつた奥谷文智氏の世界最後の天啓教に於ける甘露台の解釈一甘露台実現の暁には医者も薬も要らなくなり、裁判所も軍隊も警察署も監獄もなくなるといふ説一の如きは奥棚氏の所説でも誰の所説でもない、実に教祖其の人の所説である。奥谷氏は其の教祖の所説を布衍した迄である。其の間に何の不都合がある。
　然るに本部はこれを今日に於て唱えるはなお早いと云ふ例の尚早説をもち出して頒布を禁じた。奥谷氏が禁を犯したのが悪いと云えば悪いが其れは本部本位の論であつて公平の眼から見れば不条理なる命令に服従せざるのは当然のことである。
　かく云えばとて何も奥谷氏を弁護するものではないが正当なる教理の解釈を書いたのが解職の原因になつたといふ点は道のために見逃がすべからざる重大事件である。（何んでもこれには余程感情が混合している様である）何故なれば奥谷氏の書いた甘露台実現の暁には医者薬は要らなくなり監獄や警察のなくなる位のことは普通教師の云つていることであつて何等不都合のことではないではないか？　社会の誤解も何もあつたものではない。医者薬の要らなくなるのを喜ばず監獄や裁判所のなくなるのを喜ばないのは医者や薬屋や獄吏や裁判官位のものではないか？　世人は大いに此等のものゝ廃滅を希望しているのである。
　決して犬のために人間もよく食ふことの出来ない上肉を与えている中山家のために金を上げる必要はない。もしこれに対して出すべき余金あらば行つて貧者に施せ。然らば即ち天にて大なる報酬があるであらう。
　諸君は決して自己の邸宅を神殿よりも厳飾せる中山家のために金を出す必要はない。ただ神と神の事業のためにのみ出すべし。
　諸君を救ふものは金ではない。ただ人格の修養のみ。されば先ずこれに向つて努力せ

よ。決して健全なる高等乞食を養ふために貴重なる諸君の時間と労力と金銭と物質とを浪費してはならない。

旧式信仰と新式信仰

大平　隆平

天理教の信仰を大別すると二種に区別することが出来る。曰く旧式信仰と曰く新式信仰と即ちこれである。

旧式信仰とは拝み祈祷を主とせる純他力的信仰にして信徒の十中八九はこの徒である。

新式信仰とは天理教に依つて人生の真義を自覚し生活の真価を創造して行く所の純自力的信仰である。此の種類に属する信者は信者の約一割である。他は悉く拝み祈祷を主とせる旧式信仰の徒に過ぎない。

之れを仏教の上に見るに純他力的信仰の欠点は浄土真宗に遺憾なく表れている。又た純自力的信仰の欠点は禅宗に微見えている様である。

即ち純他力教の欠点は道徳的観念を欠き且つ人格の創造とか精神の修養とかを全然無視している点にある。彼等他力教徒は何んでも神仏に祈願せば何んなことをなすも皆許されると信じている。従つて彼等にとつて唯一の方法はただ拝み祈祷にある。何等精神の修養あることなし。

之れに就て近頃法廷上の一奇話がある。或る浄土真宗の信者が罪を犯して法廷に立つた。彼れは法廷に入るや先ず念仏を唱え出した。而して裁判官が何んと云つても聞かない。其の理由を尋ねると阿弥陀様は何んな悪い事をした者も念仏さえ唱えれば助けて下さると云ふのですから念仏を唱えるのですと。この非常識な破廉恥な返答には裁判官を始め警吏はあきれざるを得なかつた。

けれども此の非常識な浄土真宗の信者を見て今日の天理教徒はいささかも笑ふ資格がない。彼等は南無阿弥陀仏のかわりに南無天理王命と唱える迄であつて其の信仰の内容はいささかも変つて居ない。彼等は病気になれば南無天理王命！　不幸に逢えば南無天理王命！　で懺悔は付け足りである。其れだから病気が癒り不仕合が消えるともう精神の修養等はコロリと忘れてしまふ。彼等の尽し運びと云つても教会へ臍繰り金を上げるとか教会の御用をさして貰ふとか位の程度で何等精神上の向上努力を意味しない。これが今日の天理教徒の大部分である。

けれども此の道は拝み祈祷の道ではない。又た病直しの道でもない。人格修養の道生活価値創造の道である。しかも其れは表の看板にして其う云ふ教師より初めて人格の修養とか生活の創造とかは第二の問題として何んでも拝み祈祷の近道によつて一身の幸福を求めやうとする。教師にして既に然り天理教五百万の信徒の信仰は推して知るべしである。

けれどもこれは誤つている。何故なれば天理教の教ゆる所は天理人道の自覚と其の自覚に基いた真の人間生活の創造にあつて拝み祈祷と云ふが如き純他力的信仰ではないからである。

けれども天理教は又た禅宗の如く非系統的非組織的の自覚を人に勧めない。明かに人生の意義及び価値を通俗的に説明して人道生活の自覚を促しているのである。彼の誠一つは云ふ迄もなく朝起き、正直、働きの如き、互い助け合い、日の寄進の如き、皆これ人生の真義を教えざるものはない。しかも其れは禅宗の如く非連続的でなく又た部分的でなく人生全般にわたつて真に合理的の自覚促している点に於て禅宗と異つている。

更らに禅宗と異る点は禅宗は浄土真宗と反対に法を認めて仏を認めざることである。天理教は即ち此の二つを兼ねている。其れを最も適切に表わしたのが、

理は神やで、神は理やで

と云ふ教祖の神理観である。

之れを要するに天理教は純他力的宗教でもなければ純自力的宗教でもない。自他力合一の新宗教である。従つて天理教の信仰は南無天理王命と云ふこと計り結好覚えて肝心の心の道を忘れていては何うもならんと共に冷かなる哲理にのみ囚れて親を忘れる様でも何うむならん。神が教祖を通じて教えた人生の新義に基いた人道生活に生くるのは勿論のことであるが更らに其の根源に遡つて無い人間無い世界を作つた元々の神の元の恩と其の日々の御守護とを忘れてはならない。然らざれば天理教は浄土真宗の如く無意義な他力教になつてしまふか禅宗の如く無味枯淡な死教となつてしまふであらう。

けれども右に掲げた二種の信仰の中何れが天理教の信仰の中心であるかと云えば天理教々理を咀嚼することに依つて人生の真義を自覚し、其の真義に基いて真の人間生活を創造して行く努力、これが天理教信仰の第一義である。此処に天理教の自力的方面が表われている。更らは天理教の他力的方面の表われは人力の極を尽して其れに依つて生ずる結果は一切神に一任する所にある。始めより人事を尽さずして天命を待つの仕方即ち俗に云ふ

棚から牡丹餅の仕方は天理教信仰の方式ではない。且つ其の中に何等信仰の真義を見出すことは出来ないのである。
　之れを要するに拝み祈祷と云ふ信仰の方式はちょうど三歳の童児が池に陥つて親の救を求むる様なものである。やゝ精神が発達して来れば自ら池中に落ちた所以と其の径路とを考え自分の力にて上つて来るのである。今日の人類は正さに其の年齢に達して来た。彼はただ泣いて親の救を求めやうとはしない。自分は何故池の中へ落つたか？　又た落ちなければならなかつたか？　更らに此処より上るには何うしたら良いか上つた後の方法如何と云ふことを考える様になつた。従つて人生の意義及び価値に対する何等の自覚もなく何等の信仰もなく何等の努力もない否な人生とは殆んど没交渉な拝み祈祷に依つて安心立命を得ると云ふことは近代人にとつて全く意味をなさない迷信である。
　けれども実際は此の種の旧式信仰に依つて安心立命を求めている者が十中の八九であつて自覚から信仰に入つたと云ふ人間は甚だ少ないのである。しかも此の道の中堅とも目すべき本部員からして拝み祈祷の徒が多いのである。もつて今日の天理教が如何なる程度にあるかを推測するに難くはない。
　けれども其う云ふ旧式の信仰は新しき頭脳をもつた青年信徒の増加に依つて自然に廃滅に帰するであらう。彼の痴人の祈祷！　其れに向つて今更何と云つても仕方がない。彼等は彼等の目醒めざる信仰のために人生の真義を自覚することなく又た人生の価値を創造することなしに死んで行く。其れを自分一人の手で何うすることもできない。ただ私の望むのは今日の青年が腐朽した古船に乗つて無意義な溺死をせざらんことを祈つて置く。
　神よ我が同胞を救わせ給え。　（紀元九億十万七十七年二月廿七日）

一人一党主義

大平　隆平

　私は今日の政党が多数を恃んで非立憲的行動を恣にするを苦々しきことに思ふのであるが私は更らに同一の現象を信仰に見るのである。
　他宗は知らず今日の天理教界には群衆といふ一団の力があつて常に真理を圧迫しつゝある。けれども政治の本領信仰の権威と云ふものは政治的良心もしくば宗教的良心を欠ける団体の力によつて決せらるべきものではない。何処迄も自己の政治観もしくば信仰観に依つて決定すべきものである。これ一名一人限りの信仰の名の依つて生ずる所以である。
　然るに今日の天理教界には上級教会乃至上級教師の言葉は神の言葉と思つて絶対服従せよと云ふ様な矛盾した教条を設けて信仰の自由を束縛している。其れがために信仰の何物たるを知らざる無知の信徒は誤られたる教理のために一生心の花を開くことなしに凋んでしまふ。又た確立した信仰を有しない一知半解の徒は一生群衆心理に支配せられて本当の自己の生活と云ふものを創造することなしに死んでしまふ。弱者の悲劇である。
　凡て弱い人間程他人に対する同化力をもつている。例えば支那人である。語学力にかけては日本人は到底彼等の敵ではない。これ一面に於て彼等の弱者であることを照明するものである。
　人は強い人間を横着だとか頑固だとか高慢だとか云ふ。けれども其う云われる反面には其の人が周囲を征服して行く強い人格の所有者であることを語つている。
　人間は常に人間に同化せられ易き弱い人間を要求している。けれども自然は常に自然に同化せられ易き強き人格を要求する。自然は強い。自然より強いものはない。又自然児より強いものはない。其の証拠には古来英雄豪傑聖人君子と云ふ者は凡て自然の児であるに徴して明かである。
　彼等は自己の感情を欺き自己の意志を曲ぐることを知らない。これ彼等の動作の天真爛漫勇往直進なる所以である。
　創世より依頼人間は自分の一身は自分の力をもつて処理すべく定められている。云い換えれば人間は創世より依頼自由意志を以つて生活すべく定められている。然るに今日の天理教はこれを不自由なもの片輪なものにした。絶対服従主義即ちこれである。
　けれども自分だけは頑固かも知らないが他人の意志に依つて生きると云ふことは出来ない人間である。これは今日迄私の通つて来た道が其うである計りでなく現在私が通りつゝある所が其うである。
　私は人が何んと云おうが自分が是なりと信ずるのでなければ他人の意見に同意をしない。勿論自分の信仰を曲げて他人の信仰と妥協させやうなどと云ふ考は尚更ない。従つて私は信仰上に於ても処世上に於ても常に一人一党主義である。
　此う云つたならば自分は余程偉い者の様に聞えるかも知れないが偉からうが偉くなからうが其んなことは私の問題ではない。自己と云ふものを何処迄も忠実に守つて行つたなら

ば勢い此処に来なければならないのである。
　私には一時の利害や一身の利害のために自由意志を曲げて迄他人の意志に屈服するだけの悧巧さがない。其の代り私は常に金や名誉で買ふことの出来ない自由をもつて居るのである。これが私の唯一の財産である。
　私は信ずる。本当に価値ある自己の生活を創造して行くには何うしても一人一党主義をとるより仕方がないといふことを。私は過去に於て此の主義の下に生活して来たと共に将来に於ても此の主義をもつて処世の方針とする心算である。　（紀元九億十万七十七年二月二十八日）

　教会と監獄

大平　隆平

　此の世界には形を異にしてしかも目的を一にしているものが沢山ある。教会と監獄とは即ち其の一例である。
　此の二つは一見反対な性質のものゝ様に思われる。けれども其の実は二つ共此の世界に美しき平和の世界を実現せんために立つて居るのである。
　教会の天職は一面に於て道徳上の罪人を教化すると共に他の一面に於て罪人を作らざる予防を行つて居るのである。之れに反して監獄は既に法律上の罪悪を犯した人間を収容して之れに懲罰を与え其の苦痛に依つて罪人を教化せんとするのである。従つて前者は積極的にして後者は消極的である。
　けれども此の世界より罪悪の根を断ち真に安全且つ平和の世界を実現せんとする目的に於ては同一である。其れで教会と監獄！　此の二つは一方は天国の如く一方は地獄の観あれども私はこれを人類教化所の表裏と見るのである。
　けれども此の二つは何も永久的の建築物ではない。此の道が全世界に普及して人類の精神が根本的に改造せられた暁には監獄の必要がなくなると共に又た教会の必要がなくなるのである。何故なれば世界に罪悪を犯す人間がなければ監獄の必要がないからである。又た世界が皆天理人道を自覚したならば教会を設くる必要がないからである。鹿だつて理想の世界の実現した暁には監獄が此の世界より取り払われるのである。
　これにいて一つの疑問がある。其の疑問とは所詮此の世界より取り払われるものならば何も苦しんで教会を建てる必要がないではないかと。自分も実は物質的の教会を建築することに余り重きを置いて居ない。けれども強いて其れを軽しめやうとはしない。ただ人類の最後の目的は目に見える有形教会よりも目に見えざる無形教会の建築こそ第一義であると信ずるが故に常に此の方面に向つて主力を注いで居るといふだけであつて決して最初よりの教会無用論者ではないのである。勿論今日の教会の建築には一種の無理と不自由とを伴ふことが多いから其の点に於ては常に遺憾を感ずるのであるが理想の世界の実現する迄の過渡時代の方便として厭く迄存在の必要を認めるのである。ただ私の恐れるのは目に見える教会を建つることをもつて信仰の第一義となすことである。此の誤解さえなかつたならば教会は誠に結構なものに相違ない。又た必要のものに相違ない。私が前号に於いて我に依つて此の道に入れる者は世の終迄有形の教会を建築する勿れと云つたのは此の誤解を一掃せんがためである。元より教会無用論を唱えたものではない。否な私は益々教会の増設の必要を認めている。而して一日も早く此の世界をして理想の世界ならしめんことを希望している。
　今日の所教会と監獄とは其の維持保存の方法を異にしている。即ち監獄は国家的事業であるけれども教会は民間の経営になつている。けれども昔は其うではなかつた。仏教隆盛の時代の大伽藍は殆んど皆な政府の力になつたものである。将来世界が真に宗教の力を認めた暁には天理教にも其う云ふ時代が来る。其の時こそ天理教が日本の国教たる計りでなく世界教となつた時である。
　けれども私は何も教会が民間の経営より移つて政府の経営になることを喜ばない。ただ此の道の其れだけ全世界に普及するのを喜ぶのである。而したら監獄も自然廃物になり引いて教会自身も廃物になるであらう。而して専門の宗教家はなくなり大工も左官も百姓も商人も皆な宗教を論じ道徳を語る様になるであらう。其れが人生の理想である。
　　（紀元九億十万七十七年二月二十八日）

　助けぬ神は信ぜぬ助からぬ理は信ぜぬ

大平　隆平

　私は信仰の上に何も六ヶ敷い理屈は云わないがただ一つ助けぬ神は信ぜぬ助からぬ理は信ぜぬと云ふことを私の信仰の標準としている。

何故助けぬ神を信ぜぬかと云えば凡そ神にして正しい神であつたならば正を助け邪を退けない筈はないからである。苟も正義を助けず却つて之れを永久の苦しみの中に投ずるやうな神ならば其れは魔神か邪神かに相違ない。

凡て信仰の幼稚な時代には狐だとか蛇だとか云ふものを祀つて家内安全家運長久金儲けの出来る様にと願つたものであるがこれは本当の神でもなければ本当の信神でもない。本当の神といふものは何処迄も邪を退け正を助ける神であらねばならぬ。又た本当の信神は何処迄も理の信仰であらねばならぬ。

此の神に関して天理教祖は永久不変の定義を与えて居る。曰く

神は理やで。理は神やで

と。これは永久に変更すべからざる神の定義である。

此の永久不変の定義よりして従来の神と云ふものを判断するに其の多くは家内安全家運長久福寿無量と云ふ様な欲の深い凡俗の崇拝の対照である。

けれども人間の曲がつた欲望を満足せしめ、其の非礼を受くるのは真の神ではない。真の神は何処迄も理と理の実現者の保護者でなければならぬ。

神の鎮座所だと云ふ神社寺院もしくば教会へ行つて一銭二銭の賽銭を捧げて願えば何んな無理も納受するとあつては信神といふものは全く詰らないものである。

けれども本当の信神と云ふものは其んなものではない。一生の中教会へ一度も参らないでも賽銭一文上げないでも誠一つの心で通つたならそれで立派に幸福な生活を送ることが出来る。其れが理の守護と云ふものである。

吾人は一口も自己の行為に対しても弁護は要らない。弁護したつて曲つた事実が正しくはならない。従つて黙々として天理人道に従つて歩めば良いのである。而したら神に向つて手一つ合せずとも理を守つたと云ふ事実によつて助かるのである。教祖が

理（神）を立てゝ身が立つ

と仰せになつたのは此処である。従つて拝み祈祷は信神の要義ではない。否な迷信である。真の信神は理の信仰でなければならぬ。云い換えれば朝起き、正直、働きでなければならぬ。これを置いて神殿にお百度を踏み祈祷の百万遍を並べても何等の効はないのである。何故なれば神は理であり、理は神であるからである。

祈祷は凡て無用である。観経は凡て無用である。彼の牧師や僧侶が声を張り上げて器械的に祈祷や観経をしたりとも何の効能利益かあるべき？　私は寧ろ其の間に於て一束の草鞋を聖徒のために組まんと欲するのである。

之れを要するに私が助けぬ神は信ぜぬ。助からぬ神は信ぜぬと云つたのは助からぬ理即ちほしい、をしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまんの理は信じて助からざる計りでなく実に身を亡ぼすものであるからである。又助けぬ神は信ぜぬと云ふのは善悪是非を没却して何人も助けると云ふのではなく正義を助けぬ神は信ぜぬと云ふことである。何故なれば正義を助けぬ神を信じ助からぬ理を信ずることは自分自身の永遠の滅亡であるからである。

（紀元九億十万七十七年三月一日）

三条の教憲と我が信条

大平　隆平

今日天理教で三条の教憲とは何んぞや？　と問わば直ちに

（一）敬神愛国の旨を体すべき事

（二）天理人道を明にすべき事

（三）皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

と云ふ神道家の規約を挙げて来る。今日の天理教は其れ程世間化しつゝあるのである。

けれども今日の天理教徒の三条の教憲は明治五年四月神道家の連合会議の上で作つた人工的の教憲であつて天理教其れ自身の三条の教憲ではないのである。

天理教の三条の教憲と云えば

朝起きである

正直である

働きである

之れが即ち教祖が天下後世の人類のために定めた三条の教憲である。

此の三条の教憲の中には天理教々理の一切が含まれてある計りでなく実に人生の根本義が尽くされてある。

例えば天理教の二大教理である互い助け合いの理である。これは働く（傍楽）即ち自己の周囲の人々に楽をさせることに尽くされてある。又た天理教の他の重要なる教理の一つ

である日の寄進である。これは即ち朝起きして正直に働くこれ以外に日の寄進はないのである。其の他足納の理も発散の理も詮じ詰むれば此の三条の教憲を支える蔭柱に過ぎないのである。

此の三位の教憲は誠の一乗一体を説く方便である。何故方便として三条の教憲を説かれたかと云えば誠と云ふては其の意味広大無辺にしてわかるものもあればわからぬものもある。さればこそ如何なる無知無学のものにもわかる様に二乗（互い助け合いの理、日の寄進の理）と説き三乗と説いたのである。

此の三条の教憲は人生の根本義を平易に砕かれるだけ砕いた真理の細末である。後世幾多の偉人が表われて神の福音を宣伝するものがあつても之れより以上に砕き得るものがない。又た砕くべからざるものである。何故なれば此の三条の教憲を砕けば天理教の実体はもはや砕かれたるものなればなり。

然るに今日の天理教々師信徒は此の貴き自教の三条の教憲を有しながら更らに一層意味の漠然たる更らに一層人生の根本義と遠ざかつた神道家の三条の教憲をもつて唯一の教憲と信じて要る。愚も亦憐れむに耐えている。

そもそも今日天理教で云ふ所の三条の教憲なるものは基督が父と子と聖霊とを以つて三位一体として其の礼拝を勧め釈迦が仏法僧の三つを三宝と定めて信徒の帰依を買つたよりも一層人生の根本義を離れている。何故なれば宗教の根本義は忠君愛国と云ふ狭い範囲に限られるものではなくもつと／＼広い深い人生の根本義を教えるものであるからである。忠君愛国と云ふが如きは其の達する結論に過ぎないのである。

然に今日の天理教徒は此の枝葉的の教憲を表に立てゝ更らに其れよりも一層根本的なる更らに其れよりも一層精神的なる人生の根本義即ち朝起き、正直、働きを忘れている。かくの如き第二義的布教をやつているから少しく眼の開いた知識階級に向つて殆んど切り込む力がないのである。

今日天理教会で読む所の三条の教憲の如きは宗教の狭い浅い概念を与えるだけで真に人生の核心を掴む力を与えないのである。これ位のことは少しく常識のある人間の何人も心得ていることである。けれども天理教は其んな門前の宗教を教ゆる宗教ではない。神殿に登つて神の膝元に座することを教ゆる宗教である。これ信仰の本末始終を顛倒するの最も甚しきものである。

けれども世人の誤解なきために一言弁じて置くが私は何も敬神愛国の旨を体するなと云ふのではない。天理人道を明かにするなと云ふのではない。皇上を奉戴し朝旨を遵守するなと云ふのではない。此等の抽象的教理は天理教の朝起き、正直、働きの三つに於て一切具体的に含まれて要ると云ふのである。これ即ち敬神なり、これ即ち愛国なり、これ即ち天理なり、これ即ち人道なり、これ即ち忠君なり、これ即ち朝旨なるのである。これ私をして三条の教憲（朝起き、正直、働き）以外に三条の教憲なく、三条の教憲以外に道一天理人道一はなく、三条の教憲以外に我が信条はないと絶叫せしむる所以である。

（紀元九億十万七十七年三月一日）

本場の思想

大平　隆平

今日の所謂排他主義の人に向つて本場の思想と云わば直ちにドイツかフランスの思想界を想像するであらう。しかも今日の新進思想家と自称し社会も亦しか認めつゝある者の大部分は其の徒である。今日の新聞を見ても雑誌を見ても皆な排他主義の表れでないものはない。又た其れでなければ社会は歓迎しないのである。呪ふべき排他主義の時代よ！

かくて彼等は真に本家本元本場の思想が何処にあり且つ其は如何なるものであるかも知らないのである。ただ一人も知らないのである。しかも自ら称して新進思想家と云ふ。吾人は彼等不徹底の新人の一群を見るに常に憐愍の情を禁ずることが出来ないのである。

私が此処に本場の思想と云ふのは今日世界の思想家が一顧にも付せない天理教のことを云ふのである。

天理教が何故本場の思想であるかと云えば

第一宇宙の根本実在の神の天啓である第一手の思想である。

と云ふことである。

古来宗教の数も数多くあるが宇宙の根本実在の神が天降つて宇宙の根本真理を説いた宗教は一つもない。其れは神の天啓に依つて成れる天理教の聖典御神楽歌

よろづよのせかいいちれつみはらせど　むねのわかりたものはない
そのはづやといてきかしたことはない　しらぬがむりではないわいな
このたびはかみがおもてへあらはれて　なにかいさいをときゝかす
このところやまとのぢばのかみがたと　いふてゐれどもゝとしらぬ

　このもとをくはしくきいたことならば　いかなものでもこひしなる
　きゝたくばたづねくるならいうてきかす　よろづいさいのもとなるを
とある通りである。
　殊に注意すべきは天理教の天啓は基督教の天啓の如く断片的のもの応答的のものでなく能動的継続的のものであつたといふことである。其れからもう一つ基督教の思想は一分の神と九分の基督に依つて成つたものであるが天理教は九分の神と一分の教祖に依つて成つたものであることである。従つて其の内容は教祖自身の思想といふものは殆んどなく殆んど凡てが純粋の天啓をもつて内容としているのである。
　第二天理教は他の宗教に見るべからざる三つの要件を具えている。三つの要件とは
　　一　地場である
　　二　教祖である
　　三　刻限である
　此の三大要件は天理教以外の他の宗教にては全然見るべからざるものであつて一見本場の思想なることを立証する何よりの典拠である。
　一地場とは人間始め元の地場即ち大和国山辺郡庄屋敷村現今の丹波市字三島である。此処に於て今日の人類は九億十万七十七年の過去に於て伊邪那岐尊（魚）伊邪那美尊（巳）を父母として造られたのである。此の人類の最初の故郷を中心地として創造せられたといふ点に於て従来の宗教の何れにも見るべからざる大なる特徴がある。
　二教祖。天啓に依れば天理教祖中山ミキ子は人類の原母伊邪那美尊の後身であるといふのである。此の度人間生み下ろした元の因縁に依つて元なる地場に元なる親が表われて今迄説かなかつた万委細の元（人類世界の成立した根本的事実）を説き聞かすと云ふのである。
　三瞬刻限。これは時節もしくば時機のことを云ふのである。即ち今迄も色々宗教があつたけれども其れは皆人類の精神の発育の程度に応じて神が方便をもつて教えて来たものである。けれども今日は人類が漸く一人前になつて来たから一人前の宗教を教える。これ一つ充分に仕込んだなら後に何も教えることはないと云ふのである。其れで天理教のことを一名根の教とも元の教とも実の教ともだめ（最後）の教とも止めの教とも云つている。瞬刻限は即ち此の世界最後の宗教を宣伝する時機をさして云つたのである。
　これが天理教成立の三大要素であるがこれを従来の宗教と比較すると甚しく其の成立の原因を異にしている。即ち従来の宗教は何れも随時随所随人の因縁に依つて成立したものであるが天理教は人間始め元の地場に人類の原母を表して今日迄説かなかつた人類の歴史世界の歴史並に人間生活の先天的約束及び人生の帰趣を明々白々に説いたと云ふ点に於て他の宗教とは全然異つた特種の権威をもつている。
　今其の内容をかいつまんで云えば此の世界が未だ泥海であつた時代に月日二柱の神（神名を国床立尊、重足尊と云ふ）が人間創造世界創造を思い立ち人魚と巳とを人間の親とし鰌の魂を人間の魂として更らに当時の最高動物であつた鯱とか亀とか黒蛇とか鰻とか鰈とか鰒とか云ふものゝ特徴をとつて人間に仕込み生れたのが原人である。当時の人間は基督教の創世記に説く様な完全なる人間の形を備えたものではなく水中動物の共通の特徴を備えた魚類に近い生物であつた。然るに其れが世界の発達に伴ふて漸次其の時代の状態に応じた形をとる様になり魚は昆虫となり昆虫は鳥となり鳥は獣となつて最後に猿になつた。猿より初めて今日の人類に発達したのである。其の間に最初泥海であつた世界が水陸の区別がつく様になりもつて今日の世界に発達したのである。
　此の点は全然進化論であるがただ進化論と異るのは進化論は人間も世界も自然に発生して自然に発達して来たものであると説くけれども天理教は神の意志に依つて創造し神の力に依つて化育して来たと説く。此処に科学と天理教の根本的説明の相違がある。けれども此の驚くべき事実が進化論の唱えらるゝ約三十年以前に於て当時西洋とは何等の関係もない庄屋敷の片田舎に於て唱え出されたと云ふことは奇蹟である。
　却説世界文明史を通覧するに随分色々な宗教や哲学や倫理や道徳が起つて人生問題を解決しやうと努力したが其の出発点を此処に置いたものはない。往々基督教の如きものありと雖も其の出発点である創世記は殆んど空想をもつて作り上げたる非科学的のものである。其れがために科学対基督教の衝突が起り、何時も基督教の敗北に終つている。此の点に於て天理教は科学を征服して居る。
　更らに思想問題にわたつて従来の宗教も神と人とは親子であり人と人とは兄弟であるとは説いて来たけれども其の理由を説かなかつた。
　之れを天理教に見るに今より九億十万七十七年の過去に於て大和国山辺郡庄屋敷を中心として九億九万九千九百九十九人の人間が伊邪那美尊（巳である。人間始め世界始めの功に世つて伊邪那美尊と云ふ神名を賜つたのである）を母として生れたと云ふことは神と人との結合人と人との結合を密接ならしむる点に於て従来の宗教の企て及ばざる長所を持つ

ている。と云ふのは従来の宗教にては四海同胞主義神人親子主義と云ふは一種の抽象的真理に過ぎなかつたが天理教に依れば其れが明かなる事実であるのである。従つて其れは従来の宗教の如く知的結合ではなくて情的結合となるのである。天理教の強味は此処にある。

更らに従来の宗教に依つては説かれず天理教に依つて初めて明かにされたる人生の根本的定義は貸物借物の理である。

貸物借物の理とは人間の肉体並に肉体の生活に必要なる一切の付属物（生命、財産、地位、名誉、父母、兄弟、妻子、眷族）は神が人間をして互い助け合いの生活日の寄進の生活をなさしむるために貸し与えたものである。人間の所有と云つてはただ精神あるのみと云ふのが貸物借物の理である。

此の教理に従えば人間は先天的に生命も財産も肉体も私するの権利はないのである。従つて一切の利己的精神は罪悪となるのである。

天理教祖は此の利己的精神を八種に大別し八埃と命名けた。八埃とは

ほしい、をしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまん

の八つであるが人間に疾病不幸のあるのは此の八種の精神の表れであるといふのである。

病は気からと云ふことは昔から云わないことではないが其れが人生の根本的定義と離反した不合理な精神にあることを説明したのは天理教をもつて嚆矢とするのである。これは医薬万能主義の今日の人間にとつて大なる痛棒であり且つ福音である。

詮ずる所天理教の目的は神と人とは親子であり、人類は皆な兄弟姉妹であると云ふ根本的事実に即して神を親として敬い人間は兄弟として互いに相和し相睦びもつて世界一家の円満なる一大家族を実現するのにあるが其の中心地が即ち大和の庄屋敷即ち現今の大和三島の天理教本部甘露台の霊地である。即ち此の世界に無形の甘露台（理想の世界）が実現すれば此の地場に於ても有形の甘露台が建設せられ、其の台に向つて天から下す甘露の霊液を飲めば不老不死の境に達すると云ふのである。

其れ迄の天理教の事業は先ず人類をして一つの歴史一つの地理一つの宗教一つの道徳一つの風俗一つの習慣一つの言語一つの政治に統一させることである。これが天理教の大日本主義云い換えれば地場中心主義である。

即ち天理教の理想は日本は人類の故郷であり日本民族は人類の兄姉であると云ふ根本的事実に即して全世界を大日本に統一せんとするのである。

此う云ふ種類の理想は基督やマホメットやシェーザーやナポレオンやに依つて画かれた空想であるが彼等の理想が理想にあらずして一種の空想に過ぎなかつたと云ふことは彼等には何も自分の国家が世界の中心地であり自分の国民が人類の兄姉であると云ふ自然の根拠がなかつたからである。

以上は天理教の教義及び理想の大体の説明に過ぎないが今日国と国と人と人と個々バラバラになつて統一を失つた人類を一つの国民一つの家族に統一し争闘なく不和なき平和の理想の世界を実現するにはもはや今日迄の宗教や今日迄の哲学や今日迄の倫理や今日迄の道徳では不可能である。元より武力や金力に依つて世界を統一せんとするが如きも既に旧式の空想に属す。将来人類をして真に兄弟姉妹の相睦び相和した理想の世界を実現するには何うしても此の本家本元本場の思想に依るより外ないのである。私が未信者特に学者思想家に向つて此の道の研究を勧むる所以は此処にあるのである。

（紀元九億十万七十七年三月三日）

心外無法

大平　隆平

世間の人間は我が心を置いて外に道がある様に思ふて居るが其れは誤りである。我が日々の心を置いて法はない。我が時々の心を置いて理はない。我が刻々の心を置いて道はない。あつても其れは死んだ法、死んだ理、死んだ道に過ぎない。

実に日々時々刻々に移つて行く我が心はたとい其れが正法であれ、邪法であれ、正理であれ、無理であれ、正道であれ、邪道であれ皆これ其の日其の時其の刻の吾が心の法であり理であり道であるのである。これを置いて法もなく理もなく道もないのである。

例えば我今欲しいの心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今惜しいの心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今可愛いの心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今憎いの心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今怨みの心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今腹立の心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今欲の心を使つて

いると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今高慢の心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。又た我今誠の心を使つていると仮定せんか。其れが即ち現在の我を支配している心の理である。

此の日々時々刻々に異つた心の理が積つて種々の因縁事情性格運命を生むのである。

天理教信者の中には神鏡を祀ることに依つて神を祀つたと思つているものが多い。けれども其れは神鏡を祀つたのであつて神を祀つたのではないのである。神を祀るとは神の心をもつて我が心とし、神の法をもつて我が法とし、神の理をもつて我が理とし、神の道をもつて我が道とするにある。

其れは単に智者学者の如く単に知つていると云ふだけではならない。神其の者の心、神其の者の法、神其の者の理、神其の者の道とならなければならぬ。云い換えれば活きた神、生きた法、生きた理、生きた道とならなければならない。これが人間の窮極である。

けれども心の未だ此処迄達せざる人間は其の間の種々な不純な心のために不純な因縁を積み重ねつゝあるのである。しかも彼等は自分は神の道を信じているから神様きつと大難を小難に小難を無難にして下さるだらうと思つている。

けれども大抵の信者の考えている神の道なるものは人間の道なることが多い。又た大抵の信者の行つていることは人間の道なることが多い。従つて彼等は善因縁を積めりと自信しつゝ悪因縁を積んでいるのである。

神は其の時々の人の心を受け取ると仰せられているが畢竟其の時／＼の心より外法はないのである。其の時／＼の心より外理はないのである。其の時／＼の心より外道はないのである。

勿論其れは正しい法の心使いであることも誤つた法の心使いであることもあらう。又た正しい理の心使いであることも誤つた理の心使いであることもあらう。又た正しい道の心使いであることも誤つた道の心使いであることもあらう。けれども其の人の理は其の人の心より外にないのである。

されば心の深い人は理が深いと云ふであらう。又た心の広い人は理が広いと云ふであらう。又た心の大きい人は理が大きいと云ふであらう。心より外に生きた理はない。心より外に生きた法はない。心より外に生きた道はない。さればこそ達磨大師は心外無法と喝破した。

其の証拠には儒者の云つている如く心此処にあらざれば見れども見えず、聞けども聞えず、喰えども其の味を知らないので明かである。

凡て広い世界を狭むるも我が心なれば狭い世界を広むるも我が心である。又た極楽を地獄とするも我が心なれば地獄を極楽とするも我が心である。畢竟楽しむ理も苦しむ理も我が心の理一つである。昔から磐若の顔もおかめに見えると云つているのは見様によつて醜も美と見え、美も醜と見える主観の心理を指して云つたのである。

凡て善き心使いには善き心使いの様、悪しき心使いには悪しき心使いの様、真の心使いには真の心使いの様、偽の心使いには偽の心使いの様、美しき心使いには美しき心使いの様、醜き心使いには醜き心使いの様に表われるのが心の理である。彼の病気するも災難に逢ふも病む理苦しむ理を自分の心で作つているからである。又た人に憎まるゝも愛せらるゝも自分の心の作つた理である。されば我が心を置いて法はない。我が心を置いて理はない。我が心を置いて道はない。其の日其の時の心が即ち我を支配する唯一の理法であるのである。

古来精神界の王侯貴族は何れも此の心外無法の根本原理を自覚した人達であつた。彼等は此の原理を知れるが故に我と我れ自身を小法不理邪道をもつて縛らなかつた。云い換えれば小心や悪心に依つて縛らなかつた。此処に正覚者の生活がある。

更らに古今の哲学者の思想を解剖するに何も彼等の云つていること書いていることが万古不易の真理ではない。ただ彼等が其の時々刻々其の人の主観の表れに過ぎないのである。往々其の中に偉大なる哲学と称せらるゝものは比較的客観的要素を多分に含んでいるからである。

其れで吾人にとつて最も焦眉の急は自己の主観を大きくすることである。其れ客観大に大きくすることである。云い換えれば神の精神内容と同一の深さ広さ高さを有することである。其れには絶えず自己を卑小ならしめんとする欲しい、惜しい、可愛い、憎い、怨み、腹立、欲、高慢の心を去つて誠の心にならなければならない。何故なれば誠のみ真に吾人を救い我を楽しましむるただ一つの心の理法であるからである。

（紀元九億十万七十七年三月六日）

宮森教正に与ふる書

大平　隆平

宮森教正足下
其の節は御多忙中推参致し結構なるお話を聞かして戴いて有難う御座いました。
然るに其の後道の友の二月号に誤らるゝこと勿れと題して左記の文章を掲載せられたるに対し私は何んとも云えぬ意外な感に打たれました。

誤　ら　る　ゝ　こ　と　勿　れ

宮　森　與　三　郎
増　井　り　ん　子

新宗教一月号に小生等の名を掲げ談話等を記載致し居り候へ共、別に該雑誌に関して
は小生等元より賛成致し居る者に非ざれば信徒諸子に於ても此等に誤らるゝ事なきや
う御注意願上候

右の文章を増井氏が出す分には自衛上即ち身贔負上多少の理由がないでもない。何故なれば新宗教一月号に載せた増井氏の談話は余が新宗教発行以前の特別講話（私のため）であるからである。従つて増井氏が該雑誌に関して賛成しないと云ふのなら其れは分らんことはない。けれども貴方が何んです。こんな不得要領な文章を掲載して読者に疑惑を生ぜしめる位なら始めより話して呉れない方が良いじゃありませんか？　私は何も貴方を欺きも何うもしません。始めより教祖記念号に出したいから話して九ださいと頼んで貴方も其れを諒としてお話し下すつたではありませんか？　其れを今になつて
「新宗教一月号に小生等の名を掲げ談話等を記載致し居り候へ共、別に該雑誌に関しては小生等元より賛成致し居る者に非ざれば信徒諸子に於ても此等に誤らるゝ事なきやう御注意願上候」とは何の必要あつて御掲載になつたのですか？　始めより賛成しなかつたらお断りになつたら良いでしょう。私だつて厭なものを無理にとは願いません。私も其んな乱暴者じゃありません。
ね。宮森さん。貴方も本部員でしょう。否な教祖から助けの人衆と迄仰せられた方でしょう。貴方の役目は一体何んだと心得て居なさる。国々先々の子供に親の理を取次いで聞かせるが役目でしょう。其れより外何も役目はありません。其の役目をもつた貴方がお前達には聞かせるがお前達には聞かせないと云ふ分け隔てをつけて良いものですか？　新宗教の読者もお道の信者です。しかも熱心なるお道の信者です。其れ等の人々に教祖のお話を聞かせるのは貴方の功徳にこそなれ貴方の埃にはならないじゃありませんか？　貴方の朝三暮四の態度は遂に折角の功徳を虚無に帰してしまいました。
ね。宮森さん。凡て世に身贔負、身勝手と云ふものより厭なものはありませんね。これあるがために折角な功徳を皆滾してしまふのです。貴方にせよ増井さんにせよ我が身が可愛いからこそ此んな文章を出して俗論に媚びねばならなくなるのです。
けれどもね宮森さん。此の道は身贔負身勝手の道ではありませんよ。我が身可愛いの道ではありませんよ。其れは毎日貴方方が別席で話している所でしょう。しかも口では鸚鵡覚えに覚えても心から其れがわかつていないのです。其んなことじゃ本部員の役は勤まりませんね。
宜敷う御座んす。私が将来「感謝と記憶」と題して教祖に対する諸家の感想を集めるにしても貴方と増井さんとのお話は永遠に其の中から抜き去りますから。彼れ程神と教祖の大恩を受けながら新の信者に向つて教祖のお話が出来ない様な人の談話は掲載する必要はありません。掲載するのは却つて私の事業の権威を失墜するのです。
然し宮森さん。腐れ切つた本部員の中で貴方だけは良い所があると思いましたがこれでスッカリ愛想が尽きました。貴方も亦他の本部員と同様に我が身可愛い一人であつたのです。もうこれ一つで他の事は云ふ必要はありません。
けれどもね宮森さん。宗教家と云ふ者は善人だから近づけ、悪人だから退け、自分のためになる人間だから近づけ、ためにならぬ人間だから遠けると云ふものではありません。大海の広きが如く一視同仁の眼をもつて如何なる人にも接するのが真の宗教家と云ふものです。
序だから云つて置きますが本部からして大体此の御都合主義で人間を取捨するからいけないのです。けれども昔はたとい人を切つた罪人でも寺の門を潜つたら最後官憲の手にさえ渡さなかつただけの慈悲と権威があつたのです。其れを何んです。彼はお道の反対者だ、中山家の反対者だ、本部の反対者だと云つて此方から分け隔てをするからいけないのです。私も本部へ来て睨んで居るが大体本部には商売気はあつても宗教的気分は微塵もありませんね。
大臣大将が来たと云えばヘイコラ　と云つて山海の珍味を運び普通の信徒が来たと云

つては味噌粉灰では道とは云えない。本来何んな者が来ても一食一汁一菜で賄つて帰すのが宗教家らしい遣り方です。（これは宗教家と云ふものは一視同仁であるべき譬えですよ。食事の指図ではありません）其れを大臣が来た大将が来た知事が来た郡長が来たと云えば神様でもお出ましになつた様に騒ぎ立てる。否な神様以上に騒ぎ立てる。阿房らしくて見て居られん。

宮森さん。貴方も神の御信任の厚かつた方です。もし今なお多少道の性根が残つていたならば周囲の俗論に迷わされなさんなよ。人間は始めより終が大事ですよ。ね。其れで私は貴方に云ふのですが道の友の二月号に載つている誤らるゝ事勿れと云ふ記事は彼れは貴方や増井さん自身への警告です。読者への警告じゃありません。確つかりしなさい。

（紀元九億十万七十七年三月五日）

山名大教会前会長　諸井国三郎氏に与ふる書

大平　隆平

前会長様

誠に長々の間御引立を蒙りまして有難く御礼申上ます。此の度の退会については余り突然の事で意外にお感じのことゝ思いますが私の平素の天理教観からは早晩此処に到達しなければならなかつたのです。其れに就て色々申上たいことも沢山ありますが今は申上るに少し早いと思いますから先きを見ていて下さい。而して今の所は不孝の孫とも薄情の信徒とも御自由に御解釈下さることを願います。

前会長様

事件は少し古いが問題は最も新しい問題であるから申上ますが実は三十年祭に於ける山名の新築詰所の売店問題です。其の節私は激烈なる売店反対書を送つて直刻の撤回を要求したが貴方は其れにも構わずズン／＼おやりになつた。而して其の後逢つた時には評判が良かつたと云つて喜んでいられた。私は貴方の信仰なるものが那辺にあるかを知るに苦しみました。

其の節貴方が私に下すつた返事に

「山名の信徒は何商売も有襟印を山名と付ある者が見世に居るは不思議はない信徒で有役員も立回りて何分世話致したりとて不都合は無」

と仰いましたが私は何も山名に色々な商売がない等とは申しません。其れは山名の信徒には色々の商売があるでしょう。然し幾ら色々の商売があつた所で詰所で商売の展覧会をやらないでも良いでしょう。

前会長様

貴方は一体詰所を何んと心得てお居でになりますか？　これは国々先々から帰つて来た子供に安らかな休息を与えるために設立したものであつて其処で諸国の名産を商ふために設立したものではありません。もし詰所が勧工場かなんぞの様に商品を陳列して商する所ならば本部の規程で三十何軒の詰所を潰して勧工場にしたが良い。而したら貴方の屁理屈も立つでしょう。其れでない限り詰所を売店にして可なりと云ふ論理が何処に立ちますか？

且つ今度の新築詰所は三十年祭に帰つて来る国々先々の信徒を入れるために夜を日に継いで急造したものです。中にも北海道から来た団体の如きはお授けを戴くために十日頃から来て居るのに日の寄進をしなければ添書を書いてやらんと迄脅迫して強いて日の寄進をさせた。其う云ふ無法のことをして何うか此うえ造り上げた新築信徒詰所の表通りをただの一遍も信徒を入れずに商店を出させるとは何う云ふ訳です。其れも詰所が明いて居るのなら兎に角五軒も六軒も外に家を借りなお足らないで大工小屋に天幕張り迄して信徒を詰め込みながら或る特殊の二三の信徒には自由に商品を並べさせて商をさせると云ふのは天理に叶つていましょうか？

其れもお道の必要品で無くて叶わぬ品物を信徒のために廉価で取次いでやると云ふのならば未だしも道とは全然関係のない贅沢品や装飾品―水晶、寄せ木細工、玩具―を彼の大混雑の際に売らせて居るとは一体何う云ふ慮見でなさつたのですか？

貴方は

「普通貸屋で無く信徒の商人の出張店としておき何時にても止められる様にして有利益を以て教会の得とすると誰が云つたか」

と云つておいでになるが貴方は成る程三島にはこれと云つて良い土産がないから国産売り弘めのためにやつたと弁護もなされやうが詰所の一部を二三の商人に貸して其の純益を教会のものにするのだとは人が云つていました。

然し其れは何地にした所で私に関係はありません。けれども私は貴方に尋問したい。

詰所は元来国産を紹介するために建てられたりや？　又た二三の商人に便宜を与え国産

を売り弘めると遥々遠い国々先々から帰つて来た子供に不自由なしの満足を与えて返すのが何れが最も功徳の大なるものであるか？
と。
　前会長様
　貴方は此の三十年祭に大なる徳を失いました。貴方は倉の隅つこに鼠の様に引つ込んでお居でになつたから信徒の心はおわかりになりますまいが私には良く分つています。
　私の知つている一人の信徒は
「前会長様も未だ商売気がお止みになりませんね」
と云い、道を亨他の詰所の人々は
「山名さんは三十年祭に信徒を入れるために詰所をお建てになると云ふことでしたがお商売をお始めになつたね」
と囁きつゝ通るのでした。
　けれどもこれは一二の例です。国々から集つて来た多くの信徒の中で全くの低能者でない限りは何れもこれも多少の不平を懐かずに帰つた人はありません。否な信徒計りではありません。部下の教会長や大教会の役員の中にも少なからず不平家を見受けました。
　前会長様
　兎に角貴方は偉いです。数ある大教会の役員数ある担任の会長役員達が首を並べていながらただ一人として貴方の一喝を恐れて異議を申し立てるものがなかつたのです。蔭では会議も開かれたが貴方の耳には達しなかつたのです。何んと云ふ悲惨の状態でしょう。
　前会長様
　一列兄弟の道に会長は神の如く、たとい会長が間違つたことを云い、間違つたことをしたにせ之れに対して一言の異議も唱え得ない様な因循姑息の役員信徒を誰がつくつたでしょう？　これは貴方がつくつたのでない自然に出来て来たものとすれば貴方の余りに強く部下の余りに弱きを嘆ぜずにはいられません。
　貴方を始め部下の人達は一体何う考えているか知りませんが凡そ此の世界に於て恐るべきものは神と理の二つより外ありません。理が間違つていればたとい会長であらうが役員であらうがいささかも従ふ必要はありません。況んや恐怖をや？　理の徹底せざるも極れりと云わなければならない。
　前会長様
　貴方は私が詰所で商売をさせる様な人はもはや道の師とするに足らないと云つたことを大分怒つておいでの様に思われますが正直な所私にとつては理が親であり理が師であつて無理や不自然を云つたりなしたりする人は私の親でも師でもありません。
　前会長様
　私は昨今此の道に入つた未熟の信徒であります。かゝる傍若無人の言を先輩に向つて吐くのは失礼でもあるかも知りませんがこれも山名を思い天理教を思ふて云つたことであります。
　貴方は
　「斯道のはじに成様の事はしない。見て居給え」
と仰つていますが貴方はエルサレムの神殿に於て鳩の豆売の台を足で蹴散した基督の心中を知つていますか？　又た当時のユダヤ教が如何に物質的に流れていたかを知つていますか？　今日の天理教は当さに基督出世のユダヤ教の状態を宛然繰り返しているのです。
　私も実は詰所の商品を途に放り出して信徒の蹂躙に任せて自分は却つて監獄の罪人たる方が優だと思いました。然し柔和は教祖の教であることゝ私の一身は未だ此処で犬死すべきでないといふことを反省し平和の手段をもつて此の不条理を解決すべく私の意見を書き送つたのです。然し貴方は其れを用いませんでした。
　前会長様
　貴方の御返事には
「一今回の建築は信徒を入るゝ家屋に相違無いが常には明家に致置は家屋のために宜敷ない留守居を徒喰さして置訳にはいかない処で見世（表を）九尺丈六畳と二畳を留守番に商売をさすのだ」
とありますが此の先き未だ彼処にて商売をさせるお心算ですか？　又た其うして人に貸さなければ維持が出来ないのですか？　もし其うしなければ平常の維持が出来ない様なら此の詰所は始めより全く無用の建築でした。何故なれば今日の所一番信徒の集来する春秋二季の大祭すら此の詰所がなければならぬ程多数の信徒は来ないのです。況んや其の他の例祭をや。
　然らば即ち此等常用の詰所と云ふべきものは現在の詰所にて充分なのです。其れを今日部下疲弊の折柄殆んど十年に一遍か二十年に一度さえ使わない不用の詰所を建つて置くが如きは不経済極まることゝ思います。

けれどもこれは下田甲府の二分教会が主として支出せられることであらうから大局に於て一般教会に大なる関係はあるまいけれども現在の所殆んど発達の芽を止めた老木山名が三十年祭を期として発展すべき方面は他になかつたであらうか？　これ貴老の一考を煩したい点であります。
前会長様
聞けば貴方は幾多本部員中の錚々の士であると云ふことである。けれども貴方のために惜しむことは貴方は余りに権略に富んで誠意を欠くことであります。これは貴方の長所であると同時に又た欠点であると思います。
其れから一体が貴方のやり方は天理教式ではありません。
然らば如何なる点が天理教式でないかと反問せられるであらう。
私はこれに答えて曰ふ。貴方のやり方は余りに貴族的専制的であると。これは家庭内で其うである計りでなく教界に於ても其うである。これは道の人として私のとらない所であります。
前会長様
古語にも云ふてるではありませんか
英雄首を回らせば即ち神仏
と。貴方も何うか小さな慈善や小さな策略や小さな強情やを捨てゝ下さい。而して大きな我と云ふものを握んで下さい。
と云ふのは権略や強情や忿怒は一時人心を収攬することが出来るかも知らないが真に永遠に心の底より人を繋ぐには何うしても徳がなければ駄目だからであります。
此う云つたならば私には徳がないのかと反問せられるかも知らないが其れは徳はあります（と同時に埃もあります）しかも大なる徳があります（と同時に大埃があります）けれども大体から云ふと貴方は権略智謀勇気の人手徳の人ではありません。従つて人を感服せしめても真に感服させる力はないのです。これは賢明なる貴方の多少心付いていられることゝ思います。従つて私は此の上多くを云いません。ただ一言云つて置きたいのは
先ず髯を剃れ
と云ふことである。凡ての問題はこれより解決せられるであらう。乞う道のため将た自分自身のために円満自重して其の終を全うせられよ。　（紀元九億十万七十七年三月三日）

読者の声に就て

大平　隆平

私が新宗教二月号に独立信仰の宣言書を発表するや青森の一読者は神の直轄大平様と宛名して左の文を寄せられた。
「（前略）或は囚れて居るといふ友人達の言葉は当つて居るかも知れませんが小生は新宗教より外に正しき師は無いものと信じ申候
山名より御退会の由予期の事とて驚きも不申候之れにていよいよ新天地も開拓致さるべくと期待罷在候さりながら真の孝者としての最初の犠牲者に成らるゝのか思えば悲しくも相成申候一層の御自愛の程遥かに奉祈上候」
と云い、東京の一読者は又た
「雑誌二月号ただ今入手大体にわたりて一読しました筆端熱火迸るの慨ある君が論旨多大の感興と衷心の共鳴とを制する事を得ませぬ
今回は感ずる処有之りし趣にて形式上の教縁を断たれし由小生として一面の遺憾なきを得ませぬが兄が本来の立場より推考して此度の決断は兄のため小生は寧ろ大なる慶祝を捧げずには居られませぬたとえ形式にもせよ従来に於ては多少の羈絆を脱する能わざりしなれ共今後に於ける君の舞台は全く世界の広きを以て任ずるを得るがためであります」
と云い、更らに
「（中略）小生は君に百年の知己を求むべく冀望しました小生の義務として君の是れ迄物せられた言論は漏れなく之れを編綴して一面に於て之れを自己座右の銘たらしむると共に他面に於て教界変遷史上の材料とせん事を期して居ります冀くば層一層の大努力を以て道と真理のために奮闘せられん事を豈ルーテルの故事に倣えと云ふ訳ではありません真理のため世の偽善醜悪と戦ふは良心の自由を与えられたる人類の神に対する絶対的の義務であります」
と云ふことを述べて寄来した。
私は大抵毎日の種の感想を日に一通もしくば二通受取るのであるが就中左に掲ぐる神田の未信者よりの手紙の如きは現代に於て多少物のわかつた人達は如何なる種類の信仰を求めつゝあるかを知るに最も便宜なるものと思われるから此処に其の一部を掲げ且つ之れに

対して多少の卑見を述べて見たいと思ふ。
「（前略）御手紙再三繰返し拝見仕り候処山名を御退会の由承り漸く御理想の道途に近づき被遊候を衷心敬慕仕り候小生は未だ天理教の儀式其他一切を知らず茲（ここ）に口を出すは早計に候え共天理教の悪口の第一は金々で一度天理教を信ずれば資産家も蕩尽して仕舞わねば止まぬ教祖が既に其れだと云ふのを貴殿が教え三ヶ条を提げて金を以つて信教の第一とするを下の下なりと叫ばるゝは日蓮が法華経一巻を高唱して我れ日本の柱とならんと獅子吼せしにも比して痛快とも何とも局外の我等よしや天理教の何物たるを知らぬ者も殆んど天理教に対して悪声の余地否な詭弁も窮することゝ存候小生は三ヶ条の第一朝起きは未だに候え共正直、仕事勉強だけは顧みて疚しきことを覚えず候が（一）商人と云ふ者は虚言を平気でやれねば儲からぬと言われて居るには小生も浅間しと思えど虚言に対しては又た虚言で報いねばならぬ場合あるは慚愧の至りながらそれで暮して行く商人は方便として許さるゝに候哉小生の不審とする点を伺上候一々の御返事は恐縮故新宗教が未信者へも開眼の御目的故こんな質問があつたから蒙を啓発するとでも書いて頂きたく実はこれも十二月号の妻に与ふと云ふ題で其れとなく未信者に示されたる流暢にして理路整然たるを敬慕の余り御願致すに候。
（二）サテ一月号を拝見するに天理教の教祖の高弟とも云わるゝ諸氏の談に申合せた様に病が直つたから信仰した信仰を怠つたら又悪くなつたから悪くなつては困る故信仰しているると云ふ様になつているがこれで信仰を繋いで居るのでは貴殿の様に創世記を信じ教祖其人を信ずるとは根柢に差ある様で末輩の愚夫愚婦を導くにはこんな奇蹟でもせねばと基督も聾が歩いた盲が開いた唖が話したと言わるゝ通り教祖も施されたる様ですが多少の疑問に候
　兎に角山名を御退会にては従来多少とも山名教会の旨により革命の声を書かれたと言う訛言を取消すに有力と存候が精神的でなく物質的に本部其他の圧迫も加わるかと杞憂仕り候が本部の信徒にあらず神の信徒教祖の信徒としては這般の支障も御痛痒なきかと存候さわれ口は調法で貴殿を以て飛んだ信徒が入つたものだ（三）本部の松村教正なぞの入監も天理教を拡めん方便から即ち道に忠実なるためと言うかも知れぬが教祖や神がかゝる如何わしき方法による拡教わ喜ばれるかは童子も知ることゝ存候此事につきなお数百言を申上たけれど徒にお目障りで読んで頂くにも御迷惑と存じ差控え候が小生も貴殿の如き御主義より是非求道致したき余りに候（中略）
　親鸞上人が一見識を以て信徒を同行者とし肉食妻帯といふ仏教で破天荒をやられたのです。私は貴殿が信徒を同行者とし其の階級を破られると云ふことだけでも旱天の雲霓です。天理教其者でなく仏教其者でなく末世の輩がした業に天理教末なり仏教衰えたりと叫ばれるは教祖も釈迦も心外に思召さるゝことゝ存候これを思ふと一度大和へ行つて天理教の儀式階級を拝見したくなります。併し高弟とも言われる人々がローマ法王然として居られてはと考えられます。（四）私は中耳炎で耳が疾み学も中途で止め活版を営み天理教で云ふ八埃の一を受け前生罪業深き者ながら未だ悲観もなく今日まで無宗教でただ運命論を信じ何でも運命とは申されませぬ。願わくば理を以て神を信じ創世説を信じたる上で此道に入りたいのです。貴殿の道に入られたのも大橋図書館で偶然動機となつた様に承りますが私も其様に致したいのです。それでなくては商人に品物を買ふ様で医者に掛つて直して貰ふ様です。ライ病が治つた、眼病が快くなつたと云われても私には大して意も動きません。究極するに御利益があつてこそ信仰だ。目前に御利益がなければ信仰なぞ無駄だと云ふに決しますからそれでよろしいのですかと伺ふのです。多忙のため意散乱して取留めなくなり候が先ず此点を願上候（下略）」
　確かに今日の平々凡々の天理教徒の信仰に対する一箴言である。
　之れに対して私は便宜上一二の番号を打つて私見をのべることにする。
答（一）社会に此う云ふ悪風があればこそ天理教が必要なのであります。天理教否な天理人道より云えば買ふ人は成るべく悪しき品を高く買わんとし売る者はなるべく良き品を安く売らんとし互いに立て合い助け合いするのが本来の理想です。然るに今日の所は顧客はなるべく良き品を安く買わんとし商人はなるべく悪しき品を高く売らんとしている、其処に掛け値と云ふ値切るといふ厭なことが行われて居ります。これが本職の商売人同士になると一層非道いのです。お互いに掛け引き計りして何うかして自分の方に得をとらうとする。従つて詐の吐き合いとなる。其れも方便として許すと云えば天理教は成立しないことになる。又た不必要なものになつてしまふ。
　これは元来今日の人間が互いに目的を誤つているから此う云ふ事になるのである。即ち何んな商売でも人を助ける人の便宜を計るために必要であり従つて其う云ふ精神にならなければならないのであるが今日の所は商人計りでなく世間一般が全体に自分の欲一方であるから何うもならん。然し何うもならんと云つて放つて置いては何時迄経つても社会の人心を改めると云ふことが出来ないから神が此の度天理教を啓示されたのである。

従つて先方が詐で来るから此方も詐で行けと云ふことは一般道徳から云つても又た商業道徳から云つても許されないことであるが其うかと云つて商業をもつて活計を立てゝ行く人間が見す／＼をして行くと云ふことは出来ないから最小の利益を得ることに満足して先方に譲つてやるのが真の天理教式の商人だと思います。

人の中にはよく商人に向つて原価で売つて呉れ等と云つている人があるがこれ程欲の深い話はない。商人は商売に依つて社会の便宜を計つて居るのであるからこれに幾分の利益を与えなければならない。其れでなければ商人の生きて行き様がない。これは不当の利益を貪る商人と共に許すべからざる人道上の賊である。かゝる輩は社会の制裁で自然に信用がなくなるしよし社会の制裁がなくとも天の制裁は下らずに居ない。従つて正直と云ふことは何よりも必要なことゝ思います。

答（二）病気が直つたからと云つて信仰をし出したり止したりするのは未だ本当の信仰ではありません。本当の信仰と云ふものは即ち理の信仰であつて病気であらうが健康であらうが不幸であらうが幸福であらうが終始一貫した態度をもつて人道生活を継続して行くのが其れであります。

けれども今日の天理教徒の大部分は皆病気から入つた人達であつて始めより理を聞き分けて入つたものを異端の様に思つている。これは主客を顛倒している。即ち理を聞き分けて信仰に入つたのが本当の信者であつて病気から入つて来るのは逆の信者である。何故なればもし始めより理を聞き分ける力があつたならば病気にかゝる必要がなかつたからである。病気によつて始めて道に入ると云ふのは理の聞き分けが出来ないためである。今日の天理教徒は多数を頼んで此う云ふ我田引水の説を平気で唱えている。これは信仰とは拝み祈祷のことなりといふ謬見を脱せざるためである。

真の信仰は厭く迄理の信仰でなければならぬ。云い換えれば天理人道を信じて之れに適ふた生活を行ふにあるのである。此の点に於て貴方の信仰観は勿論今日の天理教徒の信仰よりも正しいのであります。

答（三）松村教生の事件は未だ予審中であるから明言の限りでないが彼をもつて教祖の足跡を踏んでいるのであると云ふ僻説には断じて組することは出来ません。

答（四）貴方の仰る通り利益が見えたから信仰し利益が見えないから信仰しないと云ふのは余りに功利的な信仰であります。本当の信仰は何処迄も天理人道の信仰であります。人道と云ふものは病気が助かる助からんに係らず一日と雖も廃すべからざるものであります。

其れに元来病気不幸と云ふものは必ずしも今生一代に依つて発するに限らない。中には重き因縁は七代の因縁と云つて七代先きからの因縁もある。其れを十日や二十日神様に願つて直らんからと云つて理を捨て神様を振り返りもしないと云ふのは話にならぬ得手勝手の考である。

元来病気や不仕合と云ふものは自分の悪心から拵つた業である。其れを一度や二度神様へ手を合せて神様助けて呉れぬと云つて怒る理由はない。

助ける助けないは神の自由であつて何も神様に人を助けなければならぬ義務や責任がある訳ではない。皆なこれ大慈大悲の発動である。其れを凡夫の浅間敷さに自分が我侭勝手な真似をして来て神様が病気にした様に思つて罪もない神様を怨んでいる。人間と云ふものは何処迄我侭勝手なものかわからない。

貴方の病気も一代の病気ではない前世からの因縁（性癖となつて表わる）と思います。耳は理の聞き分け器官故聞き分けの上について埃はないか云い換えれば自分に一尅な性質短気な性質強情の性質癇癪の性質はないか？　他人の云ふことには耳をかさず我が意見をのみ通さんとするが如き性質はないか？　此等の点を省みてもし其う云ふ性質があつたなら力めて矯正することが大事であると思います。身上即ち肉体は心の鏡と云ふお言葉があるから心に病がなくなつたら自ら肉体の疾病も去る訳であります。其れにはお互いに自己の性癖に対する反省と性癖矯正の努力が必要であると思います。

なお申上たいことは沢山ありますが信仰は決して急いではなりません。未だ自己心中に真に天理人道に対する敬虔なる信仰の念が起らないうちに信徒名簿に調印しもつて神と教祖に連る枝真の天理教徒なりと考えて居る今日の天理教徒の信仰は誤つて居ります。形式は一日の中に完成することが出来ます。ただ心の土台を遅々として確実に踏み占められんことを希望して止みません。

終りに臨んで私は貴方の如き正路を踏んで正しき信仰を求めんとする熱心なる求道者の表われたることを喜んで居ります。乞う我と我が生命のために堅忍自重せよ。

（紀元九億十万七十七年三月八日）

編集室より

Ｒ　Ｏ　生

新宗教一月号の飯降政甚氏の談話は大分本部に於て矢ヶ間敷い問題になつている。
けれども何れも事実を知つていながら中山家に媚びてもみ消そう／＼の連中計りだから仕方がない。
其れで目下三名の交渉委員（山中彦七、諸井国三郎、宮森与三郎）が挙げられて飯降氏に交渉し、もし飯降氏にして謝罪せずば本部員免職だと云ふ。奇体な世の中になつたものだ。
けれどもたとい国王の権威をもつてしても有る事実を無いとすることは出来ないのに本部の威光と云ふものはすばらしいものだ。否な殆んど言語に絶している。
之れに対して飯降氏はこの上何う云ふ態度を取られるか知らないが私なら本部員の三つや四つ投げ出した所で厭く迄事実を事実として主張する。
其れにしても心の分らぬのは諸井老人だ。山中見た様な狸爺と一緒に良く飯降氏説き伏せの仲間に入つたものである。何うやら氏の此の頃の行動を観察するに氏は権謀家にして誠意の士ではない様である。
私は飯降氏に勧めるが事実を事実の侭に語つたがために本部員を免職すると云ふのなら潔く本部員を投げ出してしまいなさい。本部員位彼れは何んでもない。何故なれば今日の本部員は本部員と云えば此の上ない栄職の様に思つているが彼は神様の拵つたものでない。人間が勝手に拵つたものである。助けの人衆は又た別だ。伏せ込みの理は一層重い。
マア本部で免職させるなら免職させて見たが良い。然し辞職してはいけません。何故なれば此方に辞職すべき何等の理由がないからである。
教祖在世中に
此の道に七人の人柱（秀司、松枝、小寒、和泉の良助、若江の市兵衛、大豆越の忠七、豊田の左衛門）を生けてある。末の世になつたら此のミキ一人の力が強いか七人の人柱の力が強いか善と悪とを別けて席（別席）の題（話題）とさす
と仰つた。
其の中二人が今火蓋が切られた。後五人の人柱の人物と現在の本部員の内幕より部下先々の行状はこれからである。
洗い出したら飯降家だらうが中山家だらうが故人だらうが今人だらうが本部員だらうが部下だらうが内だらうが外だらうが我だらうが人だらうが遠慮会釈はない。これが天の判官を命ぜられたる我が使命である。
現在の本部員達は何も知らないで腐つた柿が枝に喰付いている様に喰付いているが何時何時本部員総代りになるやら分らぬ。これは私の想像ではない。神のお言葉である。
其の時来らば此の道は一旦潰す。而して誠の人間のみ集めて此の道を再興するであらう。
其れ迄は教祖が正しいか七人の人柱が正しいか？　又た教祖が正しいか今日の本部員が正しいか？力競べをしたが良い。
私も仕出したからには教界の廓清を仕遂げずには置かない。其れには先ずザット二十年である。二十年で足らなければ三十年である。三十年で足らなければ五十年である。事態に依つては東京に帰らず此の侭居座りになるかも知らない。何れにせよ此の道の黒白見定めない内は退却はしない。これが私の決心である。
其れで本部に希望して置くことは苟も一派の独立宗教の本部なら今日迄の様に陰険姑息の手段に依らず堂々と教論上の決戦をやらうじゃありませんか？　蔭に回つて卑劣な手段で瀰縫策を講ずるなんか余り意気地がないではありませんか？
本部じゃ知つているか知つていないか知らないが教理と云ふものは神聖なものである。生きた教理は何より神聖なものである。其れを教理即ち教祖の言葉を湮滅し、生きた教理即ち教祖の歴史を湮滅する様では教理の神聖を知つているとは云われない。此点に於て何処迄も本部に質問する心算である。
兎に角一派独立の宗教の本部なら本部だけの理がなければならない。又た一派独立の宗教の本部員なら本部員だけの理がなければならない。其の理がなくて本部で御座るの本部員で御座るのと云つた所で誠に通用しない話だ。
私は人の欠点を責める代りに自分の欠点も責める。人の長所を挙げる代りに自分の長所も挙げる。親疎に依つて理を二つにしないと云ふのが私の主義である。
其れで私の筆端は何処へ飛んで行くかわからぬ。飛んで行つた所で腹が立つたら私の欠点なり過失なり挙げて復讐したが良い。兎に角大掃除の掃除人夫に選ばれたからは教界教外の隅から隅迄洗い切るからお互いに其の覚悟でいて貰いたい。
けれども今の所は本部を一寸皮切りした計りだ。これからは中山家でも飯降家でも元の元から洗い切る。其れが済んだら本部員本部の青年直轄教会に及んで行く。誰彼の遠慮はない。これを予め断つて置く。

三月号より地場印象記、御神楽歌の新研究、痴人の足跡等を載せる心算であつたが記事輻輳につき次号に譲る。

.

天理教祖降誕の世界的意義

大平　隆平

「おみき婆さん」の名は天保以来今日に至る迄彼の大塩平八郎に依つて退治せられた豊田貢と同じ様に愚夫愚婦を迷して金を巻き上げる妖婆か何んぞの様に思われている。近来一部の知識階級にはミキ子研究の声が起り多少其の人格と宗教との偉大なる価値を認識する様になつたが世の大部分は今なお頑固なる排ミキ子的感情をもつている。其れが殆んど全国にわたつて其うである。ミキ子の魔力又大なりと云わなければならない。

けれども此の排ミキ子の一団云い換えれば排天理教の一団は殆んど新宗教に対する要求は愚か宗教其の者さえ考えたこともない幼稚な頭脳の人々であるから此等の人達を相手にして話して見た所で元より始まらない話である。然らば社会の知識階級に向つてと云つてもこれも排外主義に耽溺している今日の知識階級に向つては心細い次第である。

凡て宗教に限らず芸術でも哲学でも科学でも政治でも其れが新しいものであればある程社会より反対攻撃を受くるものである。彼の釈迦でも基督でも孔子でも立つて新宗教新道徳を叫んだ当時にあつては皆これ四面楚歌の声であつた。我が天理教祖中山ミキ子の如きも亦其れである。

彼女が天保九年十月二十三日宇宙の根本神霊の神憑があつてから明治二十年正月二十六日此の土此の肉を捨てゝ霊界に帰る迄五十有余年の間はこれ全然連続せる迫害の歴史であつた。

けれども凡そ生前に於て敵を有せざるものは死後に於て味方を有することが出来ないものである。彼女の死後三十年其の間に於て五百万の信徒より「親様々々」と云つて敬慕せられつゝある点より見れば其れだけでも彼女の人格に於て人を魅する非凡の力があつたことを想像することが出来る。

従つて今日思想界の人達はミキ子に対して如何なる感じやうを有するにもせよ其の先入的感情を一掃して公平の眼をもつて彼女の人格と宗教とを研究する必要があると思ふ。

天理教祖中山ミキ子の生れたのは紀元九億九万九千九百五十九年寛政十年四月四日である。十一二歳の時剃髪して尼とならんとし十三歳の時隣村の中山家に嫁する時結婚後朝夕の観経和讃を許さるゝことゝ云ふ条件を付して嫁入し、喝其れを約束通り実行した点より見れば其の宗教心の大小深浅高下の問題は別として早くより一種の宗教的天才をもつていたことを知ることが出来る。

其の後一男五女の母となつて模範的の婦人生活を続けて来たが紀元九億九万九千九百九十九年即ち天保九年十月二十三日彼女に神憑があつてから選ばれて世界最後の救世主となりもつて万人の典型となるに至つた。

其の後彼女に下つた天啓に依ると国床立尊（月）と重足尊（日）とは泥海中より表われて無い人間無い世界を始めた元の神である。又た伊邪那岐尊伊邪那美尊は人間の種苗代として使つた肉親の父親母親である。又た月読尊、国狭土尊、大戸辺尊、雲読尊、惶根尊、大食天尊は人間を拵ふ道具の雛型として使つたものである。中にもミキ子の心は天理に叶ふた故元なる地場（大和国庄屋敷、現今の三島此処で人類が初めて創造せられたのである）に元なる親を表して根の教、元の教、だめ（大和方言最後）の教、止めの教を始めさすのであると云ふのである。

中には三十年間もしくば十年間ミキ子の心を見澄すに天理に叶ふた故立てゝ教の親としたと云ふ説もあるがこれは其う云ふ一時の思い付きになつたものでなく誕生以前に深い約束即ち神の思わくがあつたのである。伝説に依ればミキ子の誕生する朝前川家の屋根の上に五色の彩雲が棚引いたと云ふのであるが奇蹟と云ふものを凡て排斥せんとする近代人は此の事実を信じないとしてもこれだけの宗教が生れたり亡びたりするには決して偶然の出来事ではないのである。必らずや其処に必然の要求があるのである。其の最も良き実例は今日迄表われた各種の宗教の興亡盛衰の歴史である。其の裏には必らず甲の宗教が倒れて乙の宗教の起るべき又起らなければならぬ必然の理由があるのである。

例えば仏教である。当時四民の階級を極端に尊重し淫蕩卑猥の風俗が極度に紊乱していなかつたならば仏教の如き四民平等の禁欲的宗教は起らなかつたであらう。又た国民を挙げてただ形式儀礼の徒となり本能満足の徒とならなかつたならば基督教の如き純潔と愛とを尊重する霊的宗教は起らなかつたであらう。凡て宗教は其れが国民教であると世界教であるとに係らず必然の要求がなければ起るものではない。よし起つたとしても其れは決して栄えるものではない。これは今日迄偽の予言者が雲の如く表われ雲の如く散じたのに徴して明かである。

かくの如く天理教の起つたのも亦起るべき必然の原因があるのである。其の原因は一にして尽きないが其の根本原因は

「今迄何の様な教もしたけれども元の元を説いて聞かしたことがないから親は子を殺し子

は親を殺してイジらしくて見ていられぬ。其れで此の度は元の元より教え始めて世界一列の心の入れ換えをするのである」
と。蓋し宗教といふものは其れが野蕃教でない限りは助け一条即わち合いを教えない宗教はない。何故なれば合いは即ち共同生活の本義であるからである。けれども従来の宗教は人間は互いに相愛せざるべからずと教えて其の何が故に？と云ふ質問に答えなかつた。否な答えないではない。答えた。けれども其の根元原因に就ては何等の説明がなかつた。其れで此の度人間始めの世界始め原始的事実より説き起して真に人類は互いに相愛せざるべからざる所以の理を会得せしむるにあるのである。
　此の事に関しては天理教の新創世説の開設並に批判及び其の他に書いたから此処に改めて詳説はしないが其の要点は今を去ること九億十万七十七年の昔国床立尊と重足尊との男女両神が現在の大和三島天理教本部甘露台霊地に於て人魚と巳（人間始め世界始めの功に依り後伊邪那岐伊邪那美尊の神名を授けらる）を人間の父親母親とし九億九万九千九百九十九の鰌の魂を人間の魂とし其れに当時の最高等動物（鯱、亀、黒蛇、鰻、鰈、鰒）の特徴をとつて造つたのが今日の人類の元であるといふのである。
　勿論当時の人間は人間と云つても現在の人間の形を有したものではなく鰌の進化した様なものであつた。其れが神の守護に依つて世界が発達するに従つて発達し魚が昆虫となり鳥獣となり最後に猿になつた。猿から進化して今日の人間になつたと云ふのである。其の外形より見れば全然進化論である。しかも此の進化論がダーウィンの進化論の出づる三十年以前に於て日本の片田舎に於て説かれたとは不思議ではないか？
　かくの如く人間は元を探れば同じ一苗一苗代から出たものであるから云わば一列兄弟である。兄弟は互いに立て合い助け合いをして行かんければならん。其れでなければ人の身が立たん計りでなく我が身が立たん。人を助けて始めて吾が身が立つのであると云ふ所謂互い立て合い助け合いの理である。
　これともう一つ重要なること身上は神の貸物心一つが我が物と云ふ所謂貸物借物の理である。これも人間が造られる時の原始的約束であつて今更変更することの出来ないものである。
　例えば目、胴、水気、湿いは国床立尊の御守護であると云ふが如き又た温味は重足尊の御守護と云ふが如き又た此の二神は世界では水と火との守護神であると云ふが如く人間の肉体も肉体の生活に必要なる一切の物質は神の貸物である。我が物と云つては心一つである。
　此の所有権の分権より此う云ふ結論が生ずる。
　人間の肉体と肉体の生活に必要なる一切の物質は神の自由に属して我が自由に属しない。
と云ふことである。これを云い換えれば
　人間の肉体及び肉体の生活に必要なる物質はただ神のためにのみ使用すべし
と云ふことになる。
　之れを他の一面より説明すると凡て此の世界の約束として人の物を無賃で借りて置くと云ふ法はない。従つて其れだけの謝礼をしなければならない。然るに人間は葉がんらい精神より以外無一物無財産であるから精神をもつてこれに報えなければならない。此処に日の寄進の理が起つて来る。
　日の寄進の理とは日々刻々の誠の心を神に寄進するの謂である。
　以上述べたる互い助け合いの理と日の寄進の理は天理教の二大教理であるがこの二大教理は不思議に一致点をもつている。其の一致点とは神の事業とは元来人を助けることにある。従つて神の意を戴して人を助ければ其れが互い助け合いでもあり同時に日の寄進でもあるのである。其れが即ち誠である。
　其れで此処に最も世人の注意を喚起して置かなければならないことは疾病や不幸と云ふものは医者や占者の云ふ様な浅薄な原因にあるのではなく以上の天理にもとつた誤つた精神にあると云ふのである。此の説の正誤は事実如何なる疾病も如何なる不幸も其の精神の改良せられると共に除去せられるのを見て明かである。従つて此の信仰の普及した暁には病理観や運命観の上に大なる変化を来す計りでなく家庭組織国家組織を一変しもつて不和なく争闘なく疾病なく不幸なき理想の世界が実現せられるのである。其の理想の世界を天理教では甘露台世界と云つている。天理教がそれ自身を二世の立て換えの教と云つているのは一世即ち天理教祖出現以前の旧世界を破壊して二世即ち天理教祖出現後の新世界を建設するの謂である。教祖は即ち此の新世界の創造者として生れたのである。
　彼女の人格の中心生命は愛であつた。一口に愛と云えば釈迦の人格も基督の人格も愛であつたということが出来るけれども其の愛の表われ方は一様ではない。釈迦は愛のために王宮を捨てた。基督は愛のために家庭を捨てた。けれども彼等は他人の子供を助けるために我と我が二人の子供の生命を捧げはしなかつた。又彼等は一切衆生を救ふために我がも

てる凡ての財産を貧人に施しはしなかつた。此処に我が天理教祖の人格に現実的深味のある所以であると思ふ。
　天理教祖が大なる愛の人格者であつたこと云い換えれば無限の包有力を有していたと云ふことしかも其の愛が抽象的愛にあらずして具体的愛であつたと云ふことは彼女の愛の特質であるが更らに彼女の愛の特質を説明すれば万物を生み且つ育てゝ行く大地の愛であつたと云ふことである。彼女は国々先々から寄つて来る信徒は勿論の事鳥畜類に至る迄母の愛をもつて愛した。此処に新世界建設の偉大なる地盤があると思われる。
　天理教祖の理想は旧世界の弊風わけてほしい、をしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまんと云ふが如き利己心を打破して監獄も警察も裁判所も軍隊も病院も要らざる道徳的平和の世界を実現するにあるのであるが更らにもう一つの理想は国と国、家と家、人と人と互いに築き合つている心の障壁を取り除いて全世界全人類を一つの国民一つの家族一つの言語一つの風俗一つの歴史一つの地理一つの政治一つの宗教に統一せしむるにあるのである。而して人類の精神に一点の汚塵を止めなくなつた暁には此の世界より疾病不幸天災地変の値を絶つことは勿論更らに一段高き不老不死の世界たらしむるといふのである。
　これは一見すれば一種の空想の様に考えられるけれども理論と実際とより推論すれば勢い此の結論に達せざるを得ないのである。例えば病院である。人間が皆ほしい、をしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまんの精神を脱すれば疾病は起らない。従つて病院は廃せられる様になる。又た人間が皆ほしい、をしい、かわゆい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまんより脱したならば罪人といふものはなくなる。従つて警察署、裁判所、監獄は不用に帰す。又た世界一列が真の兄弟だと云ふことを自覚し真の兄弟の心になれば国と国と戦ふことはなくなる。其うなれば自然に軍隊の必要も感じなくなるのである。更らに天災地変の如きも神が人類に対する残念立腹の表れであると云ふのであるから人類の精神が理想的状態に達すれば勿論此等の天災地変も起らなくなるであらう。其れから
　罪の価は死なり
とは基督教の箴言であるが人類の精神が根元的に浄化せられた暁には不老不死の境に達するのである。
　之れが天理教祖の宣伝した福音である。而して其の福音は一歩々々形をとつて表われつゝあるのである。
　蓋し彼女の使命は天啓の声に依つて証明せらるゝが如く旧世界　　暗黒と罪悪とに満ちた　　を破壊して光明と喜悦に満ちた新世界を創造すべく遣わされた新世界の創造者であり、新時代の典型人であり、神が新たに開拓せる新しき天国の道であつた。
　彼女の考えたこと行つたこと教えたことは決して一国一代に止まるべきものではなく全世界にわたつて永遠無限に普及すべき性質のものである。これは天啓が何より明かな証言であるが吾人は更らにもう一つの重大なる天啓即ち
「今迄も何の様な教もあつたけれども皆神が人間の発達の程度に応じて教えて来たものである。今度は人間一人に例えて云えば十五歳に達した。人間十五歳と云えば一人前である。其れで一人前の教えを教えるのである。これ一つ充分に仕込んだなら後に何も教えることはないぞよ」
を信ぜざる訳に行かない。誠や此の教は今日教師並に信徒の誤れる信仰のために淫祠邪教の如く信ぜられつゝありと雖も其の実質に於てはこれ以上に完全なる宗教の出現を望むことは出来ない。又たこれ以上に完全なる大人格者の出現を望むことは出来ない。これぞ真に世界最後の宗教であり、これぞ真に世界最後の救世主である。これは時の証明を待つ迄もなく天理教祖の人格と宗教とを真に研究したものゝ必らず同意する所であらう。
　紀元九億九万九千九百五十九年四月四日！　此の日は此の世界に於ける最も幸福な日であつた。何故なれば日と云ふ日はあれど世界最後の救世主を生んだ日はただ此の日だけであるからである。吾人はもはや彼女を目するに妖婆魔女を以つて目してはならない。寧ろ沈黙して彼女の誕生が世界にもたらした重大なる意義に就いて深く考えねばならない時である。これを天理教祖中山ミキ子百二十回誕生祝賀のために大方の諸氏に向つて云つて置くのである。　　（紀元九億十万七十七年三月十一日）

弥勒菩薩の出現

大平　隆平

　余が新宗教創刊号（紀元九億十万七十六年四月発行）に於て天理教祖は弥勒菩薩の化身なりと説いたのは全然根拠なき想像ではない。
　けれどもそれを確かめる前に一応釈迦其の人の如何なる人であつたかを語らなければな

らない。釈迦は天理教祖の言に依れば国床立尊である。世界の子供が可愛いために二千有余年の昔人間の姿となつてインドに表われ大恩教主として八十余年の間活動せられたのである。
　今日は其の姿を隠して天啓に依つて其の意志を伝えられるのであるが其の元を訊せば天理教で一の神と崇むる国床立尊の化身に外ならないのである。従つて其の予言は天理教の天啓と同一の天啓少なくも同一の神の天啓であるのである。これ天理教を信ずるものは又た釈尊の予言をも信ぜざるべからざる所以である。
　其れで釈尊の予言に従ふと我が歿後は仏法乱れて行われない時が来る。其の時月光菩薩が表われて一時此の世界を照らす。けれども月光菩薩の時代には人心定ならず善は隠れて悪が栄え聖賢は山林に身を隠して顕われない。けれども其の後に弥勒菩薩が出現する。弥勒菩薩の時代に至つて始めて此の世界に仏法が行われるのである。
と。
　弥勒菩薩の出現に関する予言に二説ある。其の一説は釈尊の歿後六万億歳の後に弥勒菩薩が出現するといふのである。又た他の一説は釈尊の歿後正法世に住すること一千年像法世に住すること更らに一千年其の後に来るものは末世末法の世の中である。其の仏法滅落の時に於て始めて弥勒菩薩が出現すると云ふのである。
　天理教祖の生れた年は丁度釈尊滅後二千三百十九年に相当する。即ち末世末法の世の始まりである。この時に於て世界最後の救世主として中山ミキ子の生れて来たのは決して偶然の出来事ではないのである。
　実に今より四百四十年前は日本に於ても仏法の衰徴期に入つているのである。其の間に於て時の政府より寺院建立の企はあつたけれども一般人民の信仰は自然に仏法より離反しつゝあつたのである。此の末世末法の表われて所謂根の教、元の教、だめの教、止めの教を説くものは弥勒菩薩にあらずして誰ぞや？
　もし釈尊の予言にしてことごとく虚偽ならば天理教の天啓も亦ことごとく虚偽ならん。もし天理教の天啓にしてことごとく真実ならば釈尊の予言も亦ことごとく真実ならん。何故なれば天理教の天啓は国床立尊（並に重足尊）即ち釈尊の天啓であるからである。
　けれども仏教徒も天理教徒も誰も吾人が長い　　間待ちかねた弥勒の世の到来したことを知らないのである。而して年老の信心深いお爺さんお婆さんは云ふ
　弥勒の世は何時来るであらう
と。弥勒の世は既に来たのである。吾人はもはや何時迄も的なき空想を続けて居るべき時ではない。互いに極楽は近づけり、甘露台は近づけりと云ふ自覚をもつて喜び勇んで一日も早く所謂弥勒の世即ち理想の世界を実現することに努力しなければならぬ。　　（紀元九億十万七十七年三月十一日）

教祖降誕祭の制定と信徒の心得

大平　隆平

　私はこれ迄幾回も教祖の降誕日を記念せよと云ふことを云つた。けれどもこれに向つて気付くものは余りない様である。何んでも天理教徒は支那人と同じく何度も何度も云わなければ中々応えない一団である。其れで私も今後根気良く此の問題について叫ぶ心算であるが読者の中にも成る程と思つたら此の世界最後の救世主の誕生を何等かの方法をもつて記念されんことを乞うのである。
　元来一月二十六日の大祭は霊界の太陽が此の世界を去つた云わば人類にとつて悲しむべき日であるから此の日は室内になつて静かに冥想し四月四日の降誕祭に於て始めて陽気に祝ふべきである。而して十月の二十六日の降神祭（立教記念祭）には更らに／＼大歓喜をもつて祝ふべきである。之れを或る人に話したら其れは結構なことは結構なことに違いないが春秋二季の大祭と云ふことを神様が御定めになつたのだからと云ふのである。私は天理教徒の云いそうなことであると思つて其うですかと云つて何事も云わなかつた。私は何時も天理教徒の非常識非人情にして取るにも足らない小さな理屈に囚われ人情と云ふものを無視して平気でいるのを悲しんでいる一人であるがこれも亦其の典型的の答であつた。
　けれども教祖の降誕を祝福し感謝すると云ふ様なことは何も神様が指図をしないからしない、したからすると云ふ様なものではあるまい。其れは教祖の大恩を感謝し其の降誕を祝福すると云ふのであるからいくら神様でもいかんと仰せになる筈はない。
　其れを大祭と云えば春秋二季の大祭に限つている様に思つているのは余りに至情に乏しき仕方と云わなければならない。
　私は信じている。独立記念祭の如きものを迄行ふ位ならば当然天理教生きた天理教を生んだ元なる親の誕生日を記念すべしであると。
　けれども神経の麻痺し切つた天理教の本部ではとてもそれを行ふ勇気と誠実とはあるま

い。其れで私は新宗教の読者にだけでも相談するのである。
　勿論無理にと云ふことは勧めないが諸君は地方の熱心なる信徒を語つて毎年四月四日には何等かの方法をもつて教祖を記念せられんことを。
　其の方法はこれを具体的に云ふことは出来ないが有志だけ教会に集つて説教をするも良いでしょう。又た快談するも良いでしょう。其れは諸君の思い／＼であるが本来を云えば本部を始め一般教会に於て大祭として式を挙げなければならぬものであるが今は一般に其処迄考えていないから諸君は各々自己の思い付いた範囲に於て祝意を表して戴きたい。
　其れが段々拡張して行つたら一般信徒も自然に教祖の誕生日を知る様になり終いには大師講だの夷講だのと云ふものを止めても教祖の誕生日を記念する様になるから。
　此う云ふ事は私が今日になつて云ふべき性質のものではない。先輩が其れを心付かねばならぬことである。其れを今日迄放つて置くから五百万の信徒の大部分は自分の親の誕生日も知らないと云ふ有様である。これを仏教徒や基督教徒からお前様達の親の誕生日は何日ですかと問われた場合何んと答えるでしょう。恐らく信者の大部分は知りませんと答えるより外あるまいと思ふ。
　教祖は常に元を忘れるな／＼と云ふことを繰り返し／＼教えられた。天理教にとつて元の元と云えば教祖の誕生より元はない。其の元を忘れて末に走ると云ふことは余り賞めた仕方ではあるまいと思われる。
　此の日は前号にも云つた通り天理教の天長節に相当すべき日である。従つて信徒として是非共大に祝福しなければならない日である。
　けれども私はこれを無理に形式的に勧めたくない。今の場合心ある者のみ寄り集まり充分宗教的気分の中に教祖の誕生を記念したいと思つている。
　其れに四月四日と云えば東京辺では満都の花が満開すると云ふ時節である。これは支那や西洋とても同じことである。将来此の教が全世界に広まつた暁には仏陀の降誕祭の如く陰欝な儀式によつて行わるゝことなく爛漫と開いた桜樹の下で教祖の誕生を記念する様になるであらう。これを今よりの楽しみとして置くのである。
（紀元九億十万七十七年三月十一日）

飯降御本席十年祭記念号

本年一月教祖三十年祭記念号として出した感謝と記憶にはただ多くの人より多くの材料を蒐集せんと努力したが其れは空なる失敗に終つた様である。依つて今回の御本席記念号には量よりも質を選ぶことにした。依つて次の三篇を掲載することにした。

回想の御本席（一）

永尾　芳枝子　述

はしがき

本篇は某氏の筆記に係るものであるが本誌の一月号に掲載した「人が望めば神が望む」の一篇と多少重複の点がないでもないが彼に漏れた点もあるので其侭此処に掲載させて戴くことにした。但し標題は記者の勝手に付けたものであることをお断りして置きます。
（ＲＯ生）

本日は御遠方の処わざわざお越し下さいまして我父の履歴を話せとの仰せでございますが別に履歴と申す程のことも御座いません。しかし先ず我飯降家の御道に引入れて頂きました当時より父の出直しになる迄の経歴を大略お噺致しましょう。
　先ず斯ういふ道筋であります。
　元治元年の頃私の母は流産致しました其の後は気分も進まず次第に身の自由も叶わず誠に困つて居りました処が付近の小田中村といふ処に家伝の産薬を売る家がありますから或日父は之を求めに行く途中計らずもかねて知合の大工さんと道づれになりました処その大工さんは「飯降さん今日はどちらへお越しになりますか」と尋ねますから父は答えて「実は妻が流産して近頃は少し煩つて居りますから小田中村へ産薬を買いに行く所です」と云いましたが此の時右の大工さんは
「さうですかそれはさぞかし御心配でございましょう。しかし産薬を買ふより庄屋敷に天理さんといふおびや神様がある。それへ参詣なされては如何でありますか」
と云われました故父は大いに喜んで早速其足で庄屋敷へ参詣しました。これがそも／＼我飯降家のお屋敷に帰らして頂きました始めで御座います。此日父は直ちに神様に参詣して御教祖にお目見え致しました。御教祖は言葉やさしく

「よう帰つて呉れたな」
と仰せられます。此時父は
「実は私の妻は流産の後煩いのため非常に困つて居りますのでどうかして一日も早く助けて頂きたいと思ふてお願いに参りました」
と申上げました。すると御教祖は極めて口調爽かに
「何も案ずる事いらん。すぐに全快するで、さあ其御供（リキモツの御供）をいたゞきなされ。これは三服あるで。これを三日いいたゞくのやで。ない寿命でも心次第でふんばつてやるで」
と仰せになりました。父は喜び勇んで御教祖のお言葉のまゝに帰つて此事を母に諭されました。母は大いに安心して「さて有がたい事である。心次第で無い寿命もふんばつて下さる事なら如何なる精神も定める」といつて喜びました。そして先ず頂いた三服の御供は其の場で一服頂残る二服は二日間に頂きました。すると有がたい異には久し振りに床も離れて身の自由も出来るやうになりました故その日の午後から父も母も共に急ぎお屋敷へ御礼参りいたしました。此時も御教祖は
「よう帰つたおもわくの大工が出て来たと八方の神が手を拍つてお喜びになつたで」
と仰せられたのであります。それからは間があればたえずお屋敷へ帰らせて頂かれました処が其の時分には神様と云つては旧式の中山家の床に御幣一本立てゝあるばかりでありました。そこで父は
「斯かる結構な神様を其までゝは余り粗末で勿体ない様に心得ますから別に神様をお祭りする所をこしらえては如何で御座いましょう。幸い私は大工の職で普請は手のものでありますから如何様にも致します」
と申上ましたら御教祖は
「出来る事ならこしらえて下され」
と仰せになりました。
　其れで元治元年にいよ／＼普請に掛り始めました。此時御教祖様は
「これは上段の間の普請とも云えば勤め場所の普請とも云ふで、このふしんは三十年目にしかえるのやで」
と仰せになりました故我父は必らず三十年目にはきつと建て替えさして頂きますと答えていよ　　普請に取りかゝつたのであります。その時の材木は滝本の大新といふ材木屋から又瓦は守目堂の瓦屋から買い求めたのでありますが勿論代金は借りてありましたがその年即ち元治元年の暮になつても払えません処から詮方なくお断りに行きますと神様の御用なら結好でございますと云つて両方共心よく承知して下されました。終に棟上げの日となりましたが当時はまだ余り熱心なお方もありません。随つて棟上当日も僅か一升の酒も買い兼ねて母はたつた金六銭を持つて布留の「みあか」といふ豆腐屋を本業とし傍ら油などを売つている家へ酒を買いに行つて十五六人の手伝衆に呑んで頂きました処がほんの涙程の酒ですから一寸のどをしめす位で中には行き渡らないお方もあります。母は急いで再び布留の「みあか」へ買いに行きましたが其時は少しの金もございませんので
「只今余り急ぎましたからあとより直ぐに代金持参いたします」
と云えば先方は
「代金後なら売りません」
と行つて元の酒壷へあけてしまいました。母も一時躊躇いたしましたが止むなく自分の腰の帯をとつて之れを酒代持参する迄は抵当として置いて酒を持つて帰られたのであります。
　当時の教祖様の御艱難御苦労は並や大抵ではなかつた事は今更申すまでもございませんが又皆さんの中にも山中忠七さんなどは普請中毎日／＼白米二升なり三升なりを持参して下されそれが普請中は一日として欠けた事がなかつたのであります。処がその普請が落成せぬ中に計らずも大和神社の神官のために道に節が入つて信徒はいづみ道はあたかも火の消えたやうなものでために誰一人も寄りくるものもなかい云つてもよい位でありました。父はそれでも只一人でもふんばらして頂くと云つて満九ヶ年間櫟本村と御屋敷と双方掛け持ちで働かして頂いたのです。又母は絶えずお屋敷でつとめさして頂きました処が明治五六年頃よりはあちこちと力を入れて呉れる人もおい／＼出来て来ましてだん／＼と結構になつて参りました。
　明治六年私の八歳の頃には御教祖様のお言葉に基づき窓無しの倉と教祖様の御居間とをお拵えになりました。其時教祖様は
「凡そ倉といふものは何処の土地でも皆窓があるなれども此の倉は窓無しにしておけ。末では七十五人の人衆の生姿を蔵める所やで」
と仰せになりました。此倉は今尚存在して只今の炊事場の南に移転してあります。
　これより引つゞ上段の間の御普請と二階建が一棟出来たのであります。又秀司先生の依

頼によつて空風呂も拵らえ尚続いて内倉一棟を建てる事になりました。
　一寸申上げておきますがかくて数度の普請を致しますにも今とは違つて多くの大工を召集するやうな事は出来ません。只父とその弟子達の僅かの人数でこしらえたのであります。この普請中にも教祖様は我父にしばしば温きお言葉で
「一日も早く此屋敷へもどつて来い。わしが独りで困るから早く帰つて呉れ」
と云つて此結好なおやしきへ引入れてやると云ふ御慈悲の御言葉がありました。
　処が櫟本には沢山の得意先がございますから彼処からも普請此処からも来て呉れといふ矢の如き催促であります故おやしきへ引移る折もなくつい／＼心ならずも馳せる月日に任せてその日／＼を送つておりました。そうこうしている中遂に明治七年には長男政治郎が迎え取りになりました。それがため一時は父母も非常に落胆して其揚句凡そ年余といふものは両親共に身上勝れずぶら／＼暮して居りました処が或日おやしきへ帰りましたら教祖様には
「何も政治郎がなくなつたからとて心配する事はいらんで。今度は二月の木の芽のふく如くにかやすで。さき名前つけとくで。木ではじんほどかたいものはないで政靭とつけておくで」
と仰せられましたが果せる哉ぶら／＼煩つて居る間に与えて頂いたものと見えまして目出度翌年二月に男子が生れました。直ぐに御礼参りせられましたら教祖様は
「男やらうがなさきに名前をつけてあるで」
と有がたいお言葉を頂戴したのでございます。
　それからもまだ一日送りに櫟本に居りましたが計らずも父の眼の障りとなり一夜の中に両眼の玉は丁度梅干の様に真赤になりましたで直ちにおやしきへ帰つて教祖様にお伺しますと
「何も案じる事はいらん。すぐなおるで。一日も早くこのやしきへ帰る心にさえなれば何も云ふ事いらん」
と仰せられました。父も母も一度ならず二度三度も大決心して家族諸共おやしきへ引うつる精神は定めて見まするが扨人情は又格別なものであります。得意先の人々からはいろ／＼親切に云ふて止めて呉れますので今であれば神様のおさしづであると云つても人が信用して呉れましょうが其時分にはなか／＼そんな事位では承知して呉れませんから止むを得ず一時逃れに
「何分家族が多いので家が狭くて困るし又金銭にも不自由であるから行く」
と申しますと人々からは
「永年住みなれた櫟本をたつて庄屋敷あたりへ行く事いらん。あんな庄屋敷みたいなつまらぬ所へ何しに行くのや。あんな所へだまされて行く事いらん。金が入用なら金も出してやる。家が狭ければ材木もいくらも出してやる。必ず庄屋敷へなど行くな」
といろ／＼と親切に云ふて呉れます。そこでせん方なく遂に神様の御指図であるからと申しますと
「どうでも行くなら乞食する覚悟でゆかねばならぬ」
と尚もいろ／＼と止めて呉れます。
これが義理と人情のしがらみで一旦精神定めたものゝ又その侭に櫟本に住むことになりました。或日の事に櫟本に神田武三郎さんの普請している時どうしたのか父がいつものやうに手斧で木を削つて居りました其木屑が飛んで来て右の足の親指の肉と爪との間へ立つて五分程も這入りました。それで直ちにお屋敷に参り教祖様に御願いすると
「案じる事はいらんで。すぐなおるで。一日も早く家族諸共戻つて呉れ。わし一人に任せてどうするか。早く帰つて呉れ」
と仰せられて足の木屑を引出して下さいますとその侭少しの痛もなく又疵もつかずに助けて戴きました。此時も父母も大決心しておやしきへ帰らして頂く積りでありましたが色々の事情のためつい又々一日延しになつていました処が又或日の事に櫟本の高科といふ処の藍屋の普請の時に父が不思議にも足場を踏みはずして地上にころげ落ちました。尚不思議な事には僅かの普請に木積りが間違つて失敗いたしましたので御座います。思ふて見れば僅かの普請に失敗するも亦足場から落ちて腰が抜けて自由叶わぬやうになるのも正しく神様の御手引でございましたのでしょう。そこで父を戸板にのせて直ちにお地場に帰りましたら教祖様は
「何も案じる事はいらん。早くこの屋敷へ帰りさえすればよいのやで。わし一人に任せて捨てゝおいて呉れては困るで。こんどは是非皆つれて帰つて呉れ」
と申されました折から妹政枝は風眼といふ眼の病いのお障りを受け弟政甚も七日程もの云ふ事の出来ないあたかも唖のやうなお障りを受けました。それは間もなく二人共助けて頂きましたが其後もこの二人の弟妹にいろ／＼とお手入を頂きました。或日母は二人の子供をつれてお屋敷へ帰らして頂きますと教祖様は

「お里さん（母の名）政治郎の事を知つているか」
と申されました。母は
「はい承知して居ります」
と答えましたら教祖様は
「政治郎の事を知つて居ればよい。けれども此後もしつかりしいや」
と仰せられました。母は
「一日も早くお屋敷へかえらして頂きたいのは山々でございますが何分櫟本の人達は余り惜しがつて呉れますからその親切を振り離す袖が御座いませず止むなくお道の事をおもいつゝも日を過して居る様な次第で御座います」
と申上ましたら教祖様は
「人がすくから神もすくのや。人に惜しがられる間は神も惜しがる。人からあれは手寄りやよけいものやと云われるやうになれば神にものぞみはない。人の好む間は神も楽しみ」
と仰せられました。母は重ねて
「何分子供がありますから子供の成長するまでおまち下され」
と申せば教祖様は
「子のあるのが楽しみやで。親許りでは楽しみがない。早く引上げて帰つて呉れ」
と仰せ下されました。然しながら其時分は世の中の反対にかてゝ加えて時の政府の干渉も烈しいので止むなく秀司先生は人間業とは知りながら大和国金剛山に慈福寺といふ寺がある。此寺の住職日暮宥貞を社長として秀司先生は副社長と成て一の仏式教会を設けられ明治十三年旧八月廿六日に社開きとして門内ではごま焚きを行い屋内では御神楽をしたのであります。一時はこれがために少しは反対も穏かになりましたが又いろ／＼の節から反対圧制をせられます故今度は宿屋営業を始められました。素より教祖様の本意ではありませんがしかしながら何事にも其の災難が教祖様御一人の御身を救い出そうとせられた結果であります。ここに於て両親も大に決心いたしまして父が母に向つて云われますには
「とても櫟本に居つては教祖様の御身を保護する事が覚束ないからせめてはお前だけなりともおやしきに常詰さして頂け」
との事に遂に母も大決心を以て明治十四年の十一月に妹政枝と弟政甚とを連れてお屋敷に帰る事となり父と私とは当分櫟本に居りましたのでございます。なれども父は我一家のためばかりに働いて居たのではありません。すこしのひまでもあれば父もやはりお屋敷につとめさして頂いたのであります。斯くして父は心ならずも櫟本に居つてお屋敷を保護して居りましたがいよ／＼明治十五年二月八日にすつかり櫟本を引き払ふてみな／＼お屋敷に移らして頂いたのでございます。其の夜教祖様は
「お里さんへ伊蔵さんへもうこれからは一つの世帯一つの家内人やで。何に又誰にも遠慮一つもいらんで」
と仰せ下されました。其の後松枝さんの采配で世帯を北と南とに分けましたが其れについて教祖様の仰せられるには
「一つの家内一つの世帯といふて連れてもどりしに南と北と家内を分けたんが神の残念であるわい。此の残念を何うしてはらそうか。宿屋も空風呂もすつきりやめてしまえ。どうしてもきかんければ入込でさあいづ立合／＼」
と仰せになりました。
　これより先き宿屋と風呂屋とは中山家の営業でありましたが遂に明治十五年四月一日を以て我飯降家に引つぎとなりました。ここに不思議な事には始め私共のおやしきへ引移らして頂きます時に家族は五人でありましたのに此時教祖様は
「五人の家内かと思えば六人の家内でふせ込むで」
と仰せになりました。此時は父も母も私も不思議におもふて居りましたが後に至つて果してこのお言葉の通りになりました。と申しますのは私共が家族諸共お屋敷へ引移らして頂きます時には何日迄も大工する積りはありませんから弟子共にはそれ／＼暇を出して別れてしまい又教祖様は
「道具は何もいらん。皆人にやれ。道具はやしきに何もかも拵えて神の方に待つているから今迄の道具は皆人にやれ」
と仰せになりますから大抵のものは弟子に分配してやりましたのでございますが音松といふ弟子だけは是非世話せねばならぬやうな事情になりましたので一所に連れて帰りましたら教祖様は左の様
「五人かとおもえば六人の家内でふせ込むで」
と仰せられましたのであります。実は此のお言葉を不思議におもふてもしや子供でも授かるのではあるまいかと申して居りましたが遂に事情やむなく右の音松をひきつゞき世話する事となつたのであります。これやがて後に至つて一つの節となりました。それは追々申述べますがここに明治十五年急九月十六日さきに認可せられた仏式教会なるものをにわか

に政府より解散を命ぜられ出張せる警官の申すには
「天理王命といふ神はいよ／＼ない神である。故に今後はどこまでも圧制して倒して終えとの政府の命令であるから十分圧制する」
と云つて遂に当日即九月十六日教祖様を奈良監獄に拘引して十日の拘留に処したのであります。そして其後は毎夜／＼警官が止宿人取調べに出張して居ります。然るに御教祖様が御帰りになる前々夜の事ですが折も折とて弟子の音松が客人と同じ室で寝て居りました処が警官が之を認めて止宿人記入漏れであると云いますから
「これは内の弟子でございます」
と説明いたしましたがどうしても聞き入れて呉れません。遂に翌日即九月廿四日に警察から我父に差紙がつきましたので父は急いで出張いたしましたが夕方になつても戻りません。ために家内は一方ならぬ心配して直ちに丹波市分署に尋ねて行きましたら既に監獄へ送つたとの事でした。越えて廿五日この日は教祖様が目出度お帰りになる日でありますので私もお迎えに行きましたが計らずも奈良監獄の前で向ふから腰縄付にて警官に送られて来るのが紛れもなき我父でありました。此時の驚きは今申上げやう言葉もありません。此時梅谷さんは
「芳枝さん。御父さんに会わして貰えるやう警官に頼んでやる」
と申されました。しかし余りの悲しさ懐しさのために私は物も云えませんでした。此時父は只一言
「音松をすぐよそへ預けてしまえ」
と申されました。考えて見れば前夜の止宿人取調べの際に記入漏れと云われた罪のためである事が覚りました。廿四日に父が差紙に基き警察へ出張致しまして家族は夜の目も眠らず心配して居りましたが其夜は帯解で拘引せられたのだそうでございます。翌廿五日奈良へ送られて監獄へ入つたのは教祖様の御帰りの日と同じ日で教祖様は午前九時に出られて父は少し早く九時迄に這入つたのでございます。つまり教祖様と入れ違いになつたのであります。父も矢張十日の拘留でございました。これよりさき益々警察の臨検甚だしくなつて昼は空風呂に薬を入れるや否やの取調べ烈しく夜は止宿人の取調に絶えず出張して居ります。此の廿五日お屋敷では教祖様のお帰りを今か／＼と早くから待ち焦れて居られましたが既に教祖様の御迎えもすんで一同安心いたしました。此日参拝者の一人が空風呂に這入りました処が非常に薬の香いがいたしましたから驚いて早速その湯を捨てゝしまいました。其後やゝ一時間程もたつてから私服二名制服二名の警官が出張して直ちに湯場を検査しました処が案に相違したやうな顔付をしていました。思えば先に密かに薬を入れておいて後再び検査して空風呂の営業に何故薬風呂を炊くかと難題を吹かける積りでありましたのでしょう。処が神様のおかげで早くも悟つて風呂を中止したので警官は今更あきれて
「今日は婆さんが帰る日であるからさぞ忙しいだらう」
と揶揄つて立ち帰りました。先ず此日の大災難も免れて結構ですが此後は如何なる手段を以つて否かる圧制を加えるかも知れませんから今日の此の節を幸いこれ限り思い切つて空風呂も廃業いたしたのであります。けれども本教を誤解している人達はある事ない事種々警察に讒訴致しますから其の後も地方の反対攻撃は素より時の政府にもしばしば教祖様や我父を監禁拘留して大いに苦しめたのであります。此の時分の反対は思い返せば「ようまああんな中通りぬけた事やなあ」と思います。時には夢に見て泣いた事さえありました位です。
　既に十五年の十月頃からは益々反対が烈しくなつて秀司先生の令閨松枝さんの亡くなられた時などは又々警官が出張して家族の取調べをいたし中山家の家族と飯降家の家族との外は一人も滞在を許さなかつたのであります。此日は前管長様の兄上なる梶本松次郎さんも来て居られましたが警官に「汝は何者であるぞと尋ねられて松次郎さんは「私は櫟本の親類の者で松枝の葬式に来ています」と答えましたら警官は「葬式すめば用はあるまい。直ぐ帰れ」と云います。松次郎さんは又「御承知の通り飯降さんは監獄に拘留せられ癒えは女子供ばかりですから留守をしております」と答えられましたためやつとも事で無事で滞在する事が出来ました。次にお久さんに「汝は何者？」と尋ねられる。同じく「松枝の葬式に来ました。私は松次郎の妹でございます」と答えられましたら警官はまた「葬式すめば用はあるまいから早く帰れ」と云われてお久さんはやむを得ず其の場で立ち帰られました。お政さんは教祖の娘たる事を説明して滞在せられ重吉さんは当家の百姓男と答えて滞在せられました。何しろ当時は中山家と飯降家との外は一人も出入させませず滞在などは勿論出来なんだのであります。
　これより益々参拝厳禁せられて古い先生方や熱心な人達は絶えず逃げかくれして御屋敷に詰められたのであります。一番心配なのは毎日毎夜参拝して詰めている人を隠すのが何よりの心掛けでありました。それがために中川勘兵衛さんと清水さんとは丁度その家が御屋敷裏門を出た処の裏と表になつて居りますから警官が取調べに来た時は直ちに右の熱心

な人達を此両家にかくもふて誰も参拝のないやうに粧ふたのであります。こういふ風でありますから何か一言話すにも小声でさゝやくやうに成るべく内はひつそりとしてあたかも人なきが如くにしたのであります。此当時に於ける有様は実に何とも申されぬ程でありました。越えて十六年四月廿六日の御命日に父は丹波市分署に出張して
「本日は御命日でありますからひょつとすると参拝者があるかも知れません故出張して下さいますか」
と願い出した。すると直ちに制服巡査一名出張して表門で参拝者が門内へ立入らぬやう見張をしておりました。其折柄三四名の和服巡査が滝本紡績より酒に酔ふての帰り掛けに立寄つて上段の間に自分等が一銭金をおきながら之を拾つて「此の賽銭ある限りは必定今日は参拝者を引入れたに違いない」と云つて怒鳴り散らして遂に御供に封をつけ其の上当時教祖様の御住宅新築中の壁土の中へ捨てゝ三宝などを火鉢の中で焼き捨てあまつさえ其火鉢を戸外に投げ捨てたのであります。母と政子さんとは余りの事に警官に向い「此火鉢は困窮人飯降の後にも前にもたつた一つの大切な火鉢であります。これを割られては跡にかけ替えがありません。どうして下さいます。余りの無法ではありませんか。この事を警察へ訴えるから名前を聞かして下され」と云いましたら流石乱暴極まる警官も無言のまゝ立ち去つたのであります。然し其始めは御供に封を付けて「警察から取りに車で此御供を障る事ならんぞ」といかめしく云ふて居りましたが酒の上とは云いながら余りの乱暴し過ぎた事に気が付いたか其後いつまでたつても其御供は取りに来ませんでした。又何事もなかつたのであります。こういふやうな次第で実に命じ十五年から廿一年に至る六ヶ年間といふものは御供や御守や又参拝者をかくして警官にうそを云ふのが仕事でした。そして警官は毎日毎晩時を選ばず何時でもやつて参りますから実に心のやすまる間は一時もないやうな有様でございました。夜深になどやつて来ますと寝て居らいでも寝て居る風に見せて暫く戸を開けずその間に御供を隠したり参拝者でとま
寝て居る風に見せて暫く戸を開けずその間に御供を隠したり参拝者で泊つている人をのがしたりしましたのでございます。尚又明治廿一年一月廿六日教祖様一年祭の時なども祭官が付けて今や式にとりかゝるといふ段になつて警官のために妨げられとう／＼一年祭も勤まらずじまいになつたやうな次第であります。かくの如く警官の圧制が烈しいのに尚其上又暮し向きにも非常に困窮しまして大分よくなつた明治十五年からこちらへでも尚神様に御供えいたします御酒などは日々少々の賽銭をためておいて毎朝おみき徳利を一対もち僅か五銭のお金をふところにして清水利與門さんの家へ買いに参る様な次第でございました。

問　御本席公の大工仕事は何時頃おやめになりましたか？

ハイ、父の仕事の仕おさめですか？　それは教祖様の御居間を建てたのが最後でした。此の建物は前にも申しました通り教祖様の休息所とも云えば遊び場所とも云ふでと仰せられたものでこれは父と弟子の音松とが建てたのでございます。これやがて父の大工仕事の仕おさめでありました。壁は梅谷四郎兵衛さんが左官の事ですから引き受けて自分の弟子をひきつれてひのきしんなされたのであります。

これは十五年の冬より始まり十六年の冬に落成して教祖はこゝに移られたのであります。此建物は今は新築の御教祖殿の北に移してあります。

これより先き中山家では祖先伝来の田地八反計りを一時は困難のため抵当とも致してありましたが当今では無事に取り戻して之を他人に小作に充てゝありましたが幸い明治十六年より父が此の地所を引受けて暇さえあれば勿体ないと云つて働きました。然しこれは教祖様の本意ではありませんからしばしばお止め遊ばされますが何分事情のある事でございますから心ならずも暑さ寒さの厭いなく野に立つて働いたので御座います。或時などは身を切らるゝやうな寒い日にその上一時間もたゝぬ中に三四回も便所に通ふ御障りを頂きながらそれでも尚休息せずに畑で仕事をして居りました。そして近所の井口さんといふ家の便所へ一鍬しては走り又一鍬しては走りますから井口さんは見兼ねて申されるには「飯降さん時もあらうに今日の様な達者な者でも耐え切れぬやうなこんな寒い日に具合のわるいのに仕事を無理にせんでも又明日といふ日があるのやからまあ今日はゆつくり休んで薬風呂でも入りなされ」と言葉優しく云ふて呉れましたが父は「いや／＼人を満足さし人を喜ばすためなら寒さ暑さの隔てありません」と云つて働きました。

今申し上げると少し愚痴の様ですが道の始め理のわからん間は先ずこんなものであります。実はおやしきに詰めて居る人の中にも「飯降の家内は多人数でとりわけ女子供の食いつぶしが多い」とか「毎日遊んでいる」とか口やかましく云い噺す人もあります。それがため「父は人をふそくにさしては教祖様に申訳がない、又天に不孝である」と云つて身上障り頂いても休まずに野に立つて寒さも厭わず働いたのであります。然しいろ／＼ほこり事をいい散らした人達は教祖様御存命中に道に離れた人もあり又亡くなつた人もあります。こういふ風で父は成るべく人に不足さゝぬやう又満足与えるやうと如何なる日も野に

立つて働いて居ります。しかしながら一方教祖様に於かせられては父の働く事は本意でありませんために教祖の御身が時々迫る事がございます。云いかえれば教祖様は神様でありますから父の仕事しているのは身を労するよりも心の苦労が多い事をよく御察しでございます。それゆえ御教祖様の御身が時々迫るのであります。迫つて参りますと直ちに「伊蔵さんを呼んで呉れ」と仰せになつて扇の伺を仰せ付けられます。そして教祖様は又「さあ仕事をやめ何もする事いらん。今日限り仕事をやめて呉れそんな仕事をして居つては神の用事の邪魔になる。早くやめて呉れ」と仰せになつて御身はたちまちにして元の通り御全快となります。しかしお屋敷の人達の人情止むなく其後も昼は百姓をする。あまつさえ夜はお家形を拵えると云ふ風でありました。

ここに扇の伺と云ふ事に就て一言申添えてあきます。此扇の伺はお道のごく最初の時でありましたが当時は三十三名ゆるされたのであります。皆一名一人限りと仰せられましたにも拘らず人間はあざないものでありますから遂々人から頼まれるにつれて人の事までも伺ふ様になります。それゆえに神様の御守護がございません。既に人間の伺となりますからたとえば東に指すべきを西に指し南に行くべきを北に行くと云ふ風で丸で間違つてしまいますために折角ゆるされた扇の伺もここに教祖様はお取り上げとなりましたのでございます。

問　御本席とおなり遊ばした理由をお聞かせ下さい

父が本席と改めて頂きました事ですか？　何分天にも地にも便りにすべきは教祖様ただ独りであります。其慕わしき懐かしき教祖様には計らずも明治二十年一月廿六日正午に御昇天坐しましてここに悲しき別れを致しました。当日の模様を申して見ますとその朝父は内倉に這入り扇の伺をいたしましたがその時のおさしずには「本づとめせえ／＼してもかゝるせいでもかゝる」と仰せ下さいました故つとめすれば警察行かとおもいおなじかゝるのなら勤めをしてかゝらうと申しまして甘露台の処へあらむしろをしきまわしそれより本勤に取りかゝりましたが警察行どころではなく丁度つとめのしまい方に教祖様がお迎え取りになりましたやうな有様でございます。時はあたかも正午十二時でございました。其後父は同年旧二月十七日午後からお障りを受けて此月の三十日迄寝付きました。其間の苦しみやうは非常に甚だしいものでございました。殊に熱が烈しいので玉の如き汗が拭ふ間もない程流れ出て大変苦しがります。其有様は実に見て居られぬ位でした。神様が入り込んで「早く真柱を呼べ。すぐ真柱をこゝへ連れて来い」との御指図であります。即真柱と申しますれば前管長様の事です。さりながらどういふ訳か管長様はお越しになりません。何分又父のお障りは熱計りではありません。父が申しますには「あばらの骨が一本づゝブチ／＼と折れて行く其又次の骨が折れて行く迄に煮え湯がわいて暫くじつとするとおもふと又次の骨がブチ／＼と折れてゆく。こうしてすつかりと折れてしまつた。それからは又コチ／＼と音がして一本づゝはまつて行つた。又つゞいて片一方のあばらの骨が同じく一本づゝ折れて云つて又元の通りに一本づゝはまつて行つた」と申されました。そうこうする中にもまた神様が入込になつて御指図があります。その御指図は「これまではほこりの仕事場であつたで。席と改め名を付けて綾錦の仕事場所にするで。今は屋形の真の骨を入れかえたで」と仰せになりました。続いて又次の如く「これから先は黒着をきせて五人居ても六人居てもどれが席やら分らぬやうにして働くで働かすで」といふ御指図がありました。既に廿三日の夜の如きは非常なる障りでありましてお指図に「どうしてもいかんこうしてもいかんと云えば赤着二つ並べてしまふ」と仰せられました。此の廿三日の夜は母と私と只々心配でなりませんから石西さんの湯を貰ふと云つて密かに二人は家を出て石西さんの湯場の隅で泣く／＼大決心をいたしました。父はあの通りに身が迫つてとても三日の日も続くまい。真柱はお越し下されずもしも其中に父が亡くなつたら残る家族はどうすればよからう。今更櫟本村へは帰る事は出来ずいつそ親子四人手に手を携えて河内国方面へ落ち延び乞食するとも大和の国には居らぬと云つて母子は涙と共に語りつゝ悲哀の情に迫つた事がありました。斯く申上ますと如何にも弱き精神の様でありますが何分御屋敷の事情もありますし又永の年月教祖様を頼りとして只事は一つの理を命の綱とも頼んで来た其教祖様は今日此の世のお方ではありません。続く不幸の昨日今日又かゝる悲境に陥りましたのでございますから実に私共の心の苦しみは一通りではなかつたのでございます。しかし此の時の有様をくわしく云えばあたかも人を恨むやうに当りますからくわしき事は削きますが先ず当時は泣くに涙さえないと云ふやうな有様でございました。それからも時々神様が入り込んで「早く真柱を呼べ」と仰せられますが御越がございません。遂に辻さんと桝井伊三郎さんのお二人は思い迫つて真柱を呼びに行かれます。余り幾度も度重ねての催促に真柱もやう／＼三十日に至つて御越しになりました。

其の時のお指図

「さあ／＼席と改めて神の社ともらい受けたで。さあ承知出来たか出来ぬか返答せ」

真柱の答え

「をじのからだを天にさしあげ飯降の家族をわしの家族として引き受けますから安心して下され」
再びさしづ
「さあ人は変つても理は変らん。理は一つやで。これからは別火別鍋！」
と仰せになりまして父も直ちに身上元の通りに全快いたしたのでございます。今より四十年の昔を思い返せば父もいろ／＼の道をつれて回られたのであります。既に明治十五年二月八日にお屋敷へ引越さして頂いてから今も申上げた二十年に本席と直らして頂く迄は一日の日も長い着物を来た事などはありません。勿論三度の食事に高い膳に据えられた事もありません。まる六年間はたゝみの上ですわつてたゞの一度もおはしをもたれました事は御座いません。いつも　くどのかた（竈の上）で立ちながら食事をせられたのでございます。其のおかげで残るわれらは今日では第一神様のおかげ教祖様のおかげ且は父のおかげによつて誠に結構さして頂いて居るやうな次第でございます。それゆえいつもながら時と折には教祖様や父上の事を思い出して喜んで居ります。

回想の御本席（二）

大和国宇陀郡三本松村　福井藤蔵

藤蔵氏は御本席の大工友達である。私共（永尾正信氏と自分）の尋ねた頃は氏は病床に臥し危篤の噂さえあつたが再三の懇請に依り病躯を起して面談して呉れた。左の談話は即ち其の吐く息引く息の苦しい中より特に私共のために語つた談話である。

伊蔵さんは私よりも一つ若かつた。大工を習いに行つたのは十五か六の頃で車屋の多重郎と云ふ大工に習つた。其の頃は大工仲間で交際もしていたが櫟本へ行つて天理さんのお婆さんの世話をする様になつてからは私も彼の人を見たい、彼の人も私を見たい位の心はあつても互いに打ち寄つて話すといふことは能うせん。其の中に彼の人はズン／＼出世する。私は詰らぬことになつたから行きさえすれば友達だからもてなしても呉れるであらうが私が不自由して暮らしているから遂い其の後は逢わない。
子供の時分も伊蔵さんの内と私の内とは離れているから遊んだことはない。寺小屋へは三年位行つたと思ふがハテナ師匠様は誰であつたらう。多分幸田様の息子様の啓次郎様と云ふ御医者様だと思ふが……
大工は二十位迄親方について直ぐ櫟本へ行つた。剽近（大和方言ひやうけん）なことを云つたけれども正直な男であつた。出世する様な人間は何処か違ふ。
其の頃は彼の人も若い多重郎（本席の親方）とは従兄弟同志であつた。此の多重郎つて人は長瀬の安兵衛つて人一此の人は此処の正浄寺を建てた一に習つたが腕は私の親方の方がズーッと良かつた。
マア折角お出で下すつたが私も老耄れになつて一寸に話せない。
兎に角彼の人は仕合せな人だ。私なぞは仕合せが悪くつて大工も止めて詰らぬことをしていますが……
兎に角偉い人が出来たものだ。まあ何んでも伊蔵さんのさしつたことは拝み奉つて聞きなされ。其の上のことは御座りませぬ。
何処へ行つたことは何処へ行かさつても親の事を尋ねて大切にしなされ。私も共に涙をこぼします。……
折角お出で下すつたから其れじゃもう一つお話しますが此の宮さんから上へ新池と云ふ池が出来ました。其池に何じゃ土堰を伏せに行つたことがある。私と大工は銀三郎と伊蔵と其れから惣治さんと。其れに人足も役人も行つた。皆昼寝をしました。其の間チョット蕨取りに私と銀三郎と伊蔵と三人で山のテッペンに行きました。
しこうすると不思議な事があつて伊蔵さんが山鳥の卵を五つ計り取つて其の卵を手拭に包むと山鳥が飛びくさつた。チョット迎えに行くとバタ／＼と行く。又た抑えに行くとバタ　と行く。而して遂々伊蔵さんを山の谷へ連れて行きおつた。
而して伊蔵さんが帰つて来んと云つて騒いだ。其うする中に何処を何う歩いたか知らんが帰つて来た。家の人達が迎えに来て水をふくませて連れて行つたが彼れだけの汗を見たことがない。
其れは何う云ふ訳かと云ふに其の山鳥を追つて行き／＼する中に遂々道を失つてしまつた。其れで彼地へ行き此地へ行きしている中に年老の老人が来て
「お前行く所が分らなければ教えてやる。これを行くとお前の友達の働いている処に出るから」
と云つて道を教えて呉れた。全く私の働いていた方角であつた。

其れからヤイ／＼云つて連れて返つたが其れが元となつて四五日休んだ。其の中に仕事はなしになつた。
其れは十七八の頃であつた。其う云ふ剽近な人であつたが出世しなさつた。気立てはごくサッパリした人であつたぜ。（了）

回想の御本席（三）

兵庫県加東郡滝野村之内高岡村二百八番地　　丸山　松蔵（七十一才）

本人は若き時から高松一流の蝶浮節（ちょんがりぶし）を以て世に立ち、明治七年此当時はチョンガリと云ふ字が鑑札が下らないものだそうだが高松氏は自ら郡役所に乗込み係員に面会して堂々と一時間に余てチョンガリの由来を物語つた結果、蝶浮節と云ふ新たの字を係員と二人で作つて願出で、兵庫県第一号の鑑札を得たと云ふ豪の者で、兵庫県下では高松一流と云えば永年其の名を轟かした者で、常に御道の心があるお蔭で、芸が教訓的でなか／＼面白く、殊に先天的の滑稽家でものゝ一時間も同席していやうものなら臍の掛替を用意して置かねばならん様な面白い人物で、又なか／＼お道には熱心で長らく青野原分教会の世話係を勤めて居る、今は隠居の身分で其の日を楽しく暮らしている。

私は明治二十二年から御道の信仰をさして戴きお蔭で其日を楽しく喜ばしく結構に送らして頂いて居りますが、別にどうした有り難い因縁か、私は子供上りから道楽者で蝶浮節を渡世に致して居ります上から、明治二十五年正月十六日大阪北分教会の開講式の際、広岡会長（青野原分教会の前会長）の御手引で其時御臨場の御本席公の御前で桜川五郎蔵の角力場一席を演じ御慰に預りましたのを手始めと致しまして、それから一方ならぬ御寵愛を蒙りました者で、其後御慰に預りました事は何度あつたか確かに記憶に残つては居りませんが何んでも二十六年十二月の一日から五日間御屋敷の御宅や高井先生の御宅等で御本席様の御注文で昨日面白かつたから今一度桜川をやれとの御命で桜川を初めとして八代騒動大久保彦左衛門、忠臣義士、越後伝吉等の御慰みに預りました。又其翌年十月の御大祭の夜琴平霊験記を演じさして頂きましたし、何日か年月を忘れましたが、何んでも御屋敷で招魂祭の執行なつた時であります。其夜は御宅で水戸黄門記の御慰に預り、それから御席様の御在世中には私の御屋敷へ帰らして頂く度に色々の御慰に預つて何時も満足したよ／＼との有難い御言葉を頂いたものでありますが、私が今尚其当時の嬉しかつた事のどうしても忘れる事の出来ぬのは丁度招魂祭の時でした。私は御屋敷へ帰らして頂詰所へ落付て、それからすぐ会長の御供をして甘露台へお礼に参らうと御本部の門を入りますると其所に競馬の馬小屋があつて、其前を通りかゝると、御席様には四五名の御供と馬見物に御出で遊ばして御座つて私の姿を見て下されたと見えまして、恐れ多い事ではありませんか、「高松さんではないか、ようお帰りになつた。明日是非遊びにお出よ」と御言葉をお掛け下されたので、私はふつと振り返つて見ますと何時ものニコ／＼したお顔で私を見て下さつて居られたので私も一時嬉しさの余りお返し致す言葉も知りませずただ嬉し涙を以てお答した事もありました。又其の後何年だつたか覚えませんが大祭に帰らして頂き例によつて一般と共に御前へお礼に出ました時に私は一般信徒の席の中程から少し前の方で御拝致して居りますと、御席様は御礼の済むとすぐ其御高席から「おゝ高松さん、お帰りになつたか遊びに御出よ」と実に身に余る有難い御言葉を賜りましたので、御同席の御本部員様初め一同の方々もあつけにお取られなすつたこともありました。
兎角容易ならぬ身に余る御寵愛を蒙つたもので、何時も御慰に預る度に多大な結構な下賜物を頂き別て中には御自分其場で「寸志、飯降」と一封に御書き下されて御贈恵下された事もありますが、私は是れを記念として子々孫々に残して我家重代の宝に致し度いと思ふて居ります。尚私は朝夕大神様に礼拝した後で御席様の御神霊を礼拝致しますが其時には何時も何んとなく御姿が目の先に拝せられるやうな気が致しますが、御命日には心だけの御祭をして御後をお忍び申して居ります。又私は有難い事には故管長公にも御慰に預つた者で最近ではあの明治四十五年五月十八日北大教会の移転奉報告祭の夜水戸黄門記を一席演じて御機嫌を伺いました。で、私は何んと結構な事か、世の中には同商人も数あらうが、かゝる徳のお高い理の結構なお方のお気に入り何度もお慰みの光栄を得ましたのは私一人であらう。で、私は日本一の蝶浮節屋とは私の事であらうと常に独り誇りと致して居ります。

（大正四年八月二十日）

飯降亜聖論

大平　隆平

二代教祖と呼ばれ生き神と呼ばれて教祖歿後二十年間天理教祖中山ミキ子の後を承けて天啓人となつた故飯降伊蔵の歿したのは明治四十年旧四月二十九日正午、之れを太陽暦に直すと六月の九日である。今年はちょうど十年目に相当するので天理教本部にては四月廿七日をもつて盛大なる儀式を執行する筈である。此の際に於て飯降御本席の人格、思想、並に生活を研究するのは無意味な事業ではあるまいと思ふ。

飯降氏は天保四年十二月二十八日旧大和国山辺郡向淵村現今の大和国宇陀郡三本松村字新向淵に生れた。学問としては九歳より十一二歳頃迄約三年間土地の医者幸田啓次郎に就て学んだだけである。

性来大工を好み子守の傍同大工の仕事場に行つて其の仕事を見、或る時其の大工の見積り誤謬を指摘して本職の大工をして舌を巻かしめたこともあると云ふ。身分より云えば土地でも庄屋の次に位する位の家柄であるから何も職人にならないでも生活の出来ないことはないが本人の希望と大工の勧めに依り遂に一個の大工職人として修業するに至つた。其れが十三四の頃（もしくは十五六）である。

其れから十九か二十の歳に向淵よりは約五里程ある櫟本へ出で大工をしている中に第一の妻を娶り其の間に一子を挙げたが然るに不幸にも母子共に死んでしまつたので更らに其の血縁に当る第二の妻を娶つた。此の女は素行が治まらぬ上全然家政的手腕に欠けていたので離縁して三番目に娶つたのが氏の最後の妻飯降里子である。

かくの如く氏は婦人に対しては寧ろ不幸の因縁をもつているのであるが元治元年妻の里子は妊娠三ヶ月にて流産し其の産後の肥立の悪かつたのを助けられたが動機となり夫婦共熱心なる天理教の信者となつた。

其の年の秋御礼として勤め場所の建築の許を得て普請に取り掛つた。これは元より飯降氏一人の力になつたものではないが其の建築の方は他人の力を借りず殆んど氏一人の日の寄進に依つて成つたものである。

然るに其の年の十月二十六日上棟式の祝が済んでから信者の十数人大豆越村の山中忠七氏の宅へ招待せられて行く途中大和神社の前で太鼓を鳴してお勤めをした。其のために十数人の信者は三日間大和神社に拘留を喰え後庄屋を呼んで向後を戒めて引き渡された。

此の事あつて以来信者は次第に減じ参拝者の足も自然に遠退く様になつた。従つて普請の上にも影響して十二月の年末勘定に材木屋や瓦屋に対して支払ふ金の融通に困つた。飯降氏は一身に責任を負うて材木屋と瓦屋とに支払延期の請願に回つたが幸いに材木屋も瓦屋も「神様の御用であるから」と云ふので快く応じて呉れた。其れがために流石剛情の教祖の長男秀司氏も

「此の恩は生涯忘れぬ。神は捨ても私が放つて置かん」

と云つて涙を流して感謝したといふことである。

爾来十有八年昼は顧客先に働き夜は櫟本より庄屋敷迄通つて其の日得た賃銭をもつて教祖の生活を助けた。

明治十五年十二月教祖の懇命に依りお地場に伏せ込み中山家と一つの家内一つの世帯と云ふことになつた。けれども教祖の長男秀司氏の妻松枝子は却つて之れを厄介視し教祖の言葉に反いて世帯を二分した。其れがために昼はお地場の用をして夜は夜業をして多少なりとも小遣をつくらなければならなかつた。（当時の飯降氏には夫婦の外に三人の子供あり）飯降氏にとつて最も苦痛の多かつた時代は櫟本に於て貧苦の生涯を続けながら信仰を継続していた時代ではなく寧ろお地場に伏せ込んでから後の期間であつたらうと思われる。

飯降氏に天啓のある様になつたのは明治八年頃即ち小寒子嬢歿後であるが扇をもつて神意を伺ふことは入信後間もなく許された。此の扇の伺いは他にも許された人が沢山あるが他の人の許されたる扇の伺いはただ自分のことをのみ伺ふことを許されたるものにして他人のことを伺ふことを許されたるものはただ飯降氏一人である。其の後扇の伺いを乱用するものがあつて許されざる他人の事迄伺ふ様になり神より取り上げられてしまつたが飯降氏一人のみは最後迄扇の伺いを許された。これは氏の人格の始めより衆に卓絶せることを照明するものである。

お地場に伏せ込んでよりは教祖を助けて専ら天啓を取り次いだが終いには教祖より大抵のことは

「伊蔵さんに聞いてくれ」

と云われる様になつた。

明治十五年九月弟子の音松の寄留届を怠りしために教祖と前後して十日間奈良監獄に繋がれた。当時官憲の圧迫甚しく昼となく夜となく立ち回つてお地場の様子を伺いもし一人でも参拝者を引入れたることを発見せば直ちに拘留もしくば科料に処するを常とした。其

れに当時中山家にては秀司氏の妻松枝子が歿し家族と云つては教祖と当時五六歳の孫玉恵子と養子新治郎との三人にて所謂年老子供のみなれば其の間にあつて内外に向つて満足を与えるには他人の想像し得ざる苦痛があつたのである。（空風呂兼宿屋の営業を請けて信徒の参拝の便を計つたのも此の頃である）
　其の中に明治二十年の節となり教祖は天理教を未成品の侭にして昇天してしまつた。飯降氏の失望や大なるものがあつたであらう。
　然るに同年二月の末（旧）大熱に犯され一時危篤の状態に瀕したが其の中にも
「これ迄は埃の仕事場所であつた。これからは綾錦の仕事場所やで。サア本席と承知が出来たか何うだか」
といふ天啓があつて中山新治郎氏より如何にも本席と承知致しましたといふことになりやがて教祖の後を継いで天啓を取次ぐことになつた。爾来二十年間第二の教祖と称せられ活き神と称せられて天理教信徒四百万の信仰の中心となつて来た。
　飯降氏の一生はこれを三時代六期に大別することができる。
　第一は向淵時代である。
これを
　　一期　家庭時代
　　二期　大工修業時代
とす。
　第二は櫟本時代である。
これを
　　一期　天理教入信以前
　　二期　天理教入信以後
とす。
　第三は庄屋敷（伏せ込み）時代である。
これを
　　一期　御本席見習時代
　　二期　御本席時代
とす。
第一の向淵時代に就ては余り多く伝わつて居らぬ。ただ気立の良い剽近な青年であつたといふことのみ古老の伝説に残つている。事実其れに違いなからう。けれども大抵の偉人の幼時は非常に乱暴者にあらざれば非常の内気者が多い。其の間にあつて氏が諧謔や機知に富んだ剽近者であつたことが面白い。其れからもう一つ氏が非常な正直者であつたといふことである。此の二つの性情は精練はせられたが然し晩年迄氏の把持して失わなかつた所のものである。
　第二の櫟本時代。
　向淵時代の末期と櫟本時代の初期とは氏にとつて正さに青春の血の燃え上る時代である。此の時代の飯降氏は必ずしも稼ぐ一方溜める一方の所謂石部金吉流の青年ではなかつた。氏の告白に依れば当時の氏は若い職人達のしそうなことは何んでもやつた。博奕も打てば女も買つた。氏は其れを世の偽善者の如く万人崇拝の中心的地位に立つてもいささかも其れを隠そうとはしない。此の天真にして蔽わざる所に却つて飯降氏の真価があるのである。
　けれども其う云ふ遊戯的生活は長くは続かなかつた。氏は一日或る付近の賭博場に行き博徒の親分より
「此処はお前達の来る所ではない」
と云つて却つて説諭を受けて返された所を見れば此う云ふ方面に於ては弟弟子であつた平野楢蔵氏の足元にも及ばなかつた。ホンの青年の徒らに過ぎなかつたのである。
　晩年の成し上られたる飯降氏即ち御本席となられてからの飯降氏のみを見て氏は先天的の活き神なりと信じている人達には御本席にも其んなことがあつたかと驚くであらうがこれは日本の職人の気風の如何なるものであり其の道徳の程度が如何なるものであるかを知るものには何等不思議はないのである。
　伝説に依れば青年時代の氏はチョト男前が良かつたと云えば殊に婦人に関する情話は以外の辺にあつたかも知らない。現に第一の婦人との結婚の如きは明かに自由結婚の形跡を認めることが出来るのである。
　飯降氏が本当に堅気になつたといふのは第三の妻（里子）を娶つてから以後即ち二十八九歳乃至三十以後である。其れ迄の氏は何処かに醒めた所をもちつゝも世の若い職人の踏む道を一度は踏んで来たのである。
　勿論厳格なる両性道徳より論ずれば飯降氏の青年時代は規矩に当つていない。けれども其れを生れてから今迄寺小屋へ二年や三年通つても今日の高等教育を受けた青年男女の様

に人生の意義とは何ぞやの両性道徳の価値如何？等と云ふことをまだ一度も考える機会を与えられなかつた此の大工伊蔵に世の所謂典型的聖人の持てる凡てを要求することは無理である。吾々は寧ろ気立が良いと云ふ外他に学問も知識もない人間を育てゝ亜聖と迄向上せしめ又た無学文盲の中より道を開いて御本席に迄向上した神其の者天理教祖其の者天理教其の者飯降伊蔵其の者を称讃しなければならない。

　櫟本時代の二期は即ち妻里子の産後を助けられて天理教の信仰に入り家族諸共お地場に伏せ込む迄十八年の長日月間内は貧苦に耐え外は社会の非難攻撃を忍んで神と教祖に忠勤を尽した所謂十八年の通い勤めの時代である。

　此の時代の飯降氏は教祖をもつて教祖の典型教師の雛型とすれば飯降氏は正に信徒の典型信徒の雛型であつた。

　此の時代の飯降氏は神に対する感謝と喜悦の一念に満たされつゝあつた時代であるから随分悲劇喜劇の逸話も少くない。其の中で何人も知つてるのは或る年の暮肥代として中山家に三斗の糯米をもつて来た百姓がある。秀司氏は飯降氏の固辞するをも聞かず其の半分を分ちて飯降氏に持たせて帰した所途中にて平素飯降氏の親切を知つている乞食に逢い乞わるゝ侭に分ち与えて家に帰つた時は僅かに三升を余すのみであつたといふことである。

　飯降氏は先天的に人に好まれる多くの美点をもつていたが其の中で最も氏の美点として数ふべきものは正直と親切と丁寧とである。これは何人に対しても万遍なく施した所のものである。

　例えば仕事先へ行つても人の休んでいる内に其の家の壊れ物を修繕してやるとか古釘を直して使ふとか普通の職人の厭がることを自ら進んでした。其れがために氏の信用は非常なもので教祖よりしばしばお地場に来る様にと勧められながら何時も顧客先の引止めにあつて一日／＼とお地場に伏せ込むのを延引したのである。

　此処に注目しなければならぬことは天理教信仰以前の飯降氏の人格と天理教信仰以後の飯降氏の人格との間に大なる進歩があるといふことである。即ち彼の人格は一層堅実性を増し彼の思想は一層真率性を加えた。氏が多くの弟子達の間より選まれて天啓の取次を許されたるが如きもつて其の人格の卓越せることを知ることが出来る。

　庄屋敷時代即ち伏せ込み時代の第一期即ち御本席見習時代とも云ふべき時期は飯降氏にとつては寧ろ大なる犠牲の時代である。中山家の一族中氏の一家の伏せ込みを喜ぶものは教祖位のものである。其の他の人達は寧ろ厄介者が入つて来た様に思つたのである。其の間にあつて飯降氏はただ神と教祖を信じて内外の非難攻撃の間に立つて斯道の発展を期したのである。教祖昇天後の天啓に飯降氏を杖とも柱とも頼んだと云つてある所を見れば神と教祖の信任の如何に厚きものがあつたかを知ることができる。

　私が此の時代を御本席見習時代と云つたのは当つていないかも知らないが兎に角一面より見れば教祖の助手に違いなかつたが他の一面より見れば明かに御本席見習時代と云つて差支なからうと思ふ。

　庄屋敷（伏せ込み）時代の第二期即ち御本席時代の飯降氏は
「これ迄は埃の仕事場所であつたがこれからは綾錦の仕事場所やで」
と云われてある如く其の精神は一層神に近いて来たのである。

　当時の天啓に
「三人五人充分同じ仝席と云ふ。其の中に綾錦の其の上に絹着せた様なものである」
と云ふ御言葉がある。もつて飯降氏の人格が如何に周囲に卓絶していたかを知ることができる。

　之れを譬えて云えば名工に研き上げられたる金剛石の様なものである。燦として四周を射たのである。

　此の時代の飯降氏は聖人である。否な神人である。慈悲、寛大、柔和、謙遜、誠実、勤勉、此等の徳が氏の身辺に光つて居た。

　御本席と云えば教祖昇天後之れに越す上位はない。其の上位にありながらいささかも自ら高振り人を見下すと云ふ事がない。何んな者に対しても腰を屈めて丁寧に会釈をし敢て人に依つて上下の区別を立てると云ふ事はなかつた。

　其れから旧友（大工仲間）になぞ逢つても大概な人ならば其の態度や言語に相手を軽蔑する様なことが出易いものであるが飯降氏には全然其れがなかつた。誰が来てもちょうど仕事場で煙草を呑みながら話していると同じ様な態度で応対していた。

　氏は性淡白にして物事に拘泥すると云ふ事はなかつた。又た金銭を溜めると云ふ事はなかつた。有れば有り次第御道の幼に供するかもしくば公共事業慈善事業に向つて使つたのである。

　氏の歿後遺族が其の遺産を取り調べた時一切を合せて僅々三百余円さえなかつたと云ふことである。もつて氏が如何に金銭に淡白であつたかを知ることが出来る。

　凡て単純な人程子供を愛し、又た子供に愛せられるものであるが氏も又た深く子供を愛

して教祖の墓地を参拝しての往さ来るさに村の子供でもいれば必らず其れに十銭二十銭の小遣銭を与えられた。
　物を買ふにも商人の云よりも高く買ふとも値切つたことはない。人から物を貰つてもただ返すと云うことはない。必らず二倍三倍の価をつけて返えした。
　此等をもつても氏の性行の如何なるものであつたかを知ることが出来るが分けて感心なことには終生神と教祖の大恩を記憶して忘れぬことである。
　御本席の時代には教祖の時代と違つて求むれば何んな立派な衣食住も得られるのであるが教祖在世中の御艱難御苦労を思つて絹物を身に着けたことがなかつた。夜具も更紗位が最上で座布団も新しい座布団を用いられたことがない。食事は一食一菜で其れ以上に膳立しても食わなかつた梅干と香物と塩何れか一つあれば其れで充分としたのである。
　教祖昇天後は天啓に依つて表の事務即ち天啓は氏飯降が司り裏の事務即ち対社会的事務は管長が司つたのであるが飯降氏の苦労と云つて外に何もないがただ天啓が天啓の侭に用いられず都合に依つて勝手の取捨を行われる場合がある。其う云ふ場合には此の大切な道を預つていながら神と教祖に対して申訳が立たないと、これが氏の唯一の苦労であつたのである。此処に大道を背負つて立つ氏の真面目が表われている。
　氏は何地かと云えば創造的天才ではない。又た論理的性格でもない。ただ神と教祖の言葉を生一本に守つて研き上げられたものが氏の人格である。
　かつて五畿内に名を売つた氏の弟弟子に当る侠客平野楢蔵が氏を評して
「御本席様は八つ埃の説き分けだつて知らない。或は十柱の神様の名前だつて六ヶ敷からう」
と云つたことがある。平野の考では其れをもつて飯降氏の詰らない人間であること寧ろ自分の方が数等教理に掛けては上であることを誇つた心算であらうが此処に却つて飯降氏の偉大なる真面目があるのである。
　凡て味噌臭いのは真の味噌にあらず、坊主の坊主臭いのは真の坊主ではない。真の宗教家は決して宗教臭味を帯びているものではない。
　如何にも平野楢蔵の批評の如く飯降氏は八つの埃の説き分けも貸物借物の理も十柱の神の御守護も知らなかつたかも知らない。けれども氏の真価は単に其れを知つていると云ふだけでなく其れ自身になつている所にある。かつて内務省より天理教調査に来ると云ふ噂のあつた時飯降氏は
「もし内務省から来て天理教の教理を尋ねたら私は朝起き、正直、働らきの三つより何も知らないと云ふ。更らに私の地位を聞いたら私は神の代表者であると云ふことを云ふ心算である」
と宣言したと云ふことである。
　事実飯降氏は謙遜の中にも我は神の代表者なりと云ふ不断の自覚を失わなかつた。又氏の生活は氏の宣言の如く生ける朝起き、生ける正直、生ける働き其の者になつていたのである。譬い何んな事情があつても身上に障りのない限り朝起き働らきを廃せられたことはない。勿論氏の人格として詐を云ふ様なことは元よりない。
　けれども問題は此処にある。
　凡て八つ埃の理や貸物の理や十柱の神の御守護をただ説き分けるだけならば三歳の童子も能くすることができる。けれども人間其れ自身が生ける教理であり生ける神格であることは凡人の能くし能わざる所のものである。吾人は平野氏の一言に依つて同じ教祖の弟子であつても其の人格的価値の相違の如何に大なるものであつたかを知ることができる。
　けれども飯降氏も「神が入れば神である」けれども不断は人間である。元より全然過失なしと云ふことはできない。けれども晩年の飯降氏と其の入信以前の飯降氏とを比較する時は信仰ちょうものはかくも人間を聖化し浄化し得るものであるかを驚嘆せずには居られない。
　元より飯降氏は善人であつた。けれども生れながらの聖人ではなかつた。其れが修養と努力と教育と訓練とに依つて遂に聖人の域に達することが出来たのである。吾人は釈迦の如き基督の如きミキ子の如き天性の聖者よりも寧ろ飯降氏の如き学んで達した聖人の方により多くの希望と光明とを与えられるのである。
　之れを要するに飯降氏は釈迦や基督の如き創造的人格ではなかつた。氏はただ創造者の教ゆる侭に其の精神を朴守した質実なる保守的人格である。これは我が教祖に於て既に其うである。彼女は自己と云ふ者を出さずに神の命ずるが侭に神の導く侭に順行した。飯降氏も亦神と教祖の言には何事も背かなかつた。これは他の有力なる信者が頻繁に教界の門を出入するに際して氏一人最後迄踏み止まつた所以である。
　氏の人格は教祖と同じく人であつて神、神であつて人であつた。即ち神格と人格とが絶えず交代していた。此の一面に於て神の代表者であると共に他の一面に於て人の代表者である所に氏の神人の仲介者たる使命があるのである。

氏の性行に関しては目下氏の伝記の起草中であるから其の方に譲ることにして吾人は此の簡単な評論中にも吾人は学んで能く聖人の域に達すること並に聖者の生活云い換えれば真の真人の生活とは如何なるものであるかを知ることができる。

最後に一言付加して置きたいことは教祖や御本席を批評するに従来の規矩即ち山の仙人を標準として批評し去らんことである。今日はもはや其う云ふ不生産的の聖人を要求している時代ではない。もつと／＼生産的の聖人（里の仙人）を要求している時代である。教祖や御本席（飯降氏）は即ち其の新時代の要求している理想の人物である。

（紀元九億十万七十七年三月十六日）

新宗教一周年記念号

一周年を迎ふるの辞

大平　隆平

回顧すれば昨年の四月天理教の独立と独立布教のため雑誌新宗教を発刊してより此処に一年になつた。当時余は天理教信者となつたと云ふ理由の元に当然享くべき資産の分配をも拒絶せられ一時生活の道を断たるゝに至つた。けれども余の天理教信仰の一念は却つて其れがためにつもり此処に本誌の発刊を思い立つた。勿論当時の余は有てる物は凡て使い果し、妻の出産費の如きは妻の実家に仰がざるべからざる窮境にあつたのである。従つて余の嚢中には雑誌を発刊するが如き余裕は思いも寄らぬことであつた。

これより先き私には一書を公にする計画あり其の脱成の上は母より出版費として百円を送る約束があつた。余は余の企てを告げて母に其の金の分与を求めたる所其れは却つて老先き短き祖母の同情を買い祖母の名をもつて二回に百金を与えられた。（後で聞けばこれは私の前途を鼓舞する内々の相談であつたそうである。）これぞ即ち新宗教発刊の唯一の資本であつたのである。

新宗教十二号の内一二三四の四号は東京にて編集せられ五号以下十二号迄はお地場に於て編集せられたがこれぞ余の信ずる正教邪教の奮闘史に外ならなかつた。（経済の方は要るより余計も与えられなければ要るより少くも与えられなかつた。ちょうど要るだけキチンと与えられたのである）奮闘は二号に幕を開いて三号に始まつたのであるが其の場景の進むに従つて本部の迫害は益々加わり去年七月余が天理教研究をもつて登本した時本部は余に住居をさえ与えざらんとしたのである。

けれども

信心色増せば大難色を増す

とは僧日蓮のみの経験ではあるまい。余の信仰の進むに従つて本部は購読禁止交通遮断の如き殆んど宗教家にあるまじき陋劣の極を窮むるに至つたが元来余の本誌発刊の目的は厭く迄も正教研究正教布教にあるが故に外部の圧迫の如き元より予期の事実であつて本誌の問題ではないのである。

本誌の主義正教の研究と正教の布教此二つの主義は本誌の存続する限り否な余の生存する限り継続せらるべし。これ二世の立て換えの一面の事業を課せられたる余の使命であると信ずるからである。

余と本誌との関係はあたかも形と蔭との如く全然離すべからざる密接の関係を有するのであるが余が何故他の雑誌発行者の如く共力を待たずして全然独力をもつて編集し且つ発行するかと云えば元来同一なることの出来ない他人を拉し来るとしても其れがために余の活動を狭窄こそせらるれ決して拡張はせられないのである。

其れも異つた人の異つた説を羅列して売らんとする営利的雑誌ならば兎に角自分の研究しただけのことを発表して自分の力だけの単独布教をやつて行こうとするものには他人の信仰や他人の主義は全然無関係なものである。余はただ自分の研究を発表すれば良いのである。余はただ自分の信ずる宗教を宣伝すれば良いのである。他人が何んな信仰をもち他人が何んな研究を発表しやうが其れは他人の世界であつて余の世界ではない。余は厭く迄自己の与えられたる世界に於て自己の力一杯の活動をすれば良いのである。此う云ふ意味に於て余は新宗教をもつて余一人の教会ともし仕事場所ともしているのである。

余の此の事業に関しては或る人は成功を祈り或る人は失敗を祈つている。前者は即ち霊源の益々豊かならんことを希望し、後者は即ち材料の枯渇せんことを希望している。其の何れに帰着するかは余の知つたことではない。余はただ現在に於て余のなすべき又たなさ

んと欲する仕事をなして行けば良いのである。
　けれども余は此う云ふ信仰をもつて私の仕事に従事している。
　此の世界に甘露台の実現せざる内は余の仕事は無くなることはないであらうと。大工や左官の仕事すら今日限り無くなつたと云ふことはない。余の仕事も亦其うである。人心がことごとく改造せられざる中は余の仕事の無くなると云ふことはない。否な全世界の人心が改造せられた暁と雖も余の生命にして消燼せざる限りは余の仕事も亦尽くることなかるべし。
　繰り返して云つて置くが余即ち新宗教、新宗教即ち余たることは一名一人の信仰の本義に従つたものであつていささかも排他的意味を含んでいない。ただ余は余の本来の主義なる独立研究の発表と独立信仰の発展と独立布教の徹底を望むがためである。
　けれども余は神ではない。又た救世主でもない。予言者でもない。ただ一個の研究者である。元より其の思想信仰に誤なきを期せない。其の点に関しては読者に於て充分の注意を与えられんことを希望する。但し事実を事実として認めながら功利主義の立場より本誌の記事に向つて抗議を呈出して来るが如き偽善者は決して一歩も仮籍しないのである。
　本誌は今後と雖も一名一誌主義である。而して厭く迄も独立研究と独立布教とを徹底する。これ新宗教の一周年を迎ふるに当つて将来の方針について一言言い及んだ次第である。もしそれ其の内容については予め説明の限りではないのである。　（紀元九億十万七十七年三月十七日）

向上と忍苦の生活

大平　隆平

　みみずの前進するや其は先ず身を縮め得るだけ縮めて後伸ばし得る限り伸ばすのである。これは人間発達の上に於ても亦其うである。
　凡て大いに延びんとすれば大いに縮まざるべからず。大いに働かんとすれば大いに休まざるべからず。又た大いに楽まんとせば大いに苦しまざるべからず。大いに喜ばんとせば大いに悲しまざるべからず。これ実をもつて実を買ふ代価である。
　然るに近代人の弊風として真実の代価を支払わずして真実の代価を払いしものと同一の結果を得んとするのである。其の結果は先、欺瞞となり、虚飾虚栄となり、虚言虚構となり、窃盗となり、強盗となり、無銭飲食となり、無銭遊興となり、掻つ払いとなり、破廉恥となる。
　之れを学界に見るに自分自身は一度も真の懐疑のドン底に陥りしことなくして他の偉大なる懐疑家が苦心の結果解決した他人の思想をあたかも自己の苦心の結果発見した大思想であるかの如く粧い、自己の一度も苦心したことのない科学上の発明を自己の発明であるが如く語つている。近代の自称思想家自称科学家なるものゝ多くは其うである。
　けれども自然は公平である。彼は決して一銭の銅貨さえ支払わないものに百円の物品を与えることはない。必らず一銭の代価には一銭の物品を交付するのである。
　凡て此の世界の法則として其れが有形であれ無形であれ代価を支払わずして自己の要求するものを求むることはできない。私が向上と忍苦の生活を説くのも亦此処にあるのである。
　けれども世には忍苦の生活について二つの異つた意見がある。其の一は浅薄なる享楽家浅薄なる楽天家の考え方にして彼等の考え方に依れば人間は心配や苦労をしても詰らない。何んでも其の日／＼を楽しんで通るに限ると。此う云ふ風の考え方をする者の当然陥つて行く所は浅薄なる物質的享楽である。
　又た他の一つは人間は苦労をしなければならないと云ふ所謂苦痛のための苦痛家、苦労のための苦労家である。此う云ふ人達は何んでも自己の精神や肉体を苦しめさえすれば良いと考えている。昔のバラモンやストイック派仏徒の一派は即ち其れである。
　けれども此の二つ共真に苦労もしくば苦痛の意義及び価値を真に自覚したものではない。何故なれば忍苦の生活と云ふものは其れ自身其等の価値あるものにあらずして真に大なる自己完成をなさんがための必然の道程であるからである。
　私は真剣生活に飛び込んで行く勇気のない臆病にして懶惰なる近代人の苦痛の回避的風潮に賛成することもできなければ又た無暗に苦痛のための苦痛苦労のための苦労をさも聖徒の浄業の様に思つている苦しみの讃美家にも同することができない。ただ自己をして真に向上せしめ真に発達せしめる必然の道程として忍苦の生活に大なる意義と大なる価値とを発見するのである。分けて精神的事業に従事するものは一段に忍苦の生活が必要である。
　私は史上多くの天才が節制と努力の美徳を欠けるがために最後の決勝点に達することの出来なかつた多くの事実を知つている。否な其の実例は遠き過去に求める迄もなく現在の

社会に頻繁として横るのである。世には随分天才をもつている人がある。けれども天才と云ふものは其れに修養と努力が加わつて益々其の価値を発揮して行くのであつて天才其れ自身に終局の価値はないのである。
　私は元より天才を光栄とする。けれども其は真面目なる勉強家の光栄に一歩を堕している。
　例えば此処に勉強せずして出来る学生と勉強しても出来ない学生と二人の学生がありと仮定せよ。世人は其の成績をのみ見て勉強せずして出来る学生を賞すれども私は決して其うは云わない。何故なれば出来不出来は過去の努力の結果である。人は何よりも現在に於て努力しなければならない。ただ現在に真の努力をなすものゝみ真に真面目なる責任を果して行くのである。此う云ふ意味に於て私は勉強しないで出来る学生よりも勉強しても出来ない学生を讃美するのである。これを讃美するのは其の能力に対してにあらず其の勉強と努力とに対してゞある。
　凡て最後の成功者は天才にあらずして努力にあり享楽にあらずして忍苦にあるのである。例えば家康である。彼が天下を取つたのは大なる天才のためにあらずして寧ろ百戦百敗に耐えてしかもなお屈しない所の忍耐と努力とにあつたのである。今日宗教界に哲学界に芸術界に政治界に実業界に名を成し業を遂げている所謂成功者なるものは皆其うである。
　凡て大なる信仰の裏には大なる懐疑を伴い、大なる光明の裏には大なる暗黒を伴い、大なる快楽の裏には大なる苦痛を伴い、大なる喜悦の裏には大なる悲哀を伴い、大なる自由の裏には大なる不自由を伴い、大なる満足の裏には大なる不平を伴い、大なる成功の裏には大なる失敗を伴い、大なる発展の裏には大なる努力を伴い、大なる向上の裏には大なる忍苦を伴ふものである。之を例えて云えば人生は走馬灯である。昼が来たかと思えば夜が来り晴天が続くと思えば雨が降り平和が続くと思えば戦争が起る。悲喜哀楽の糸が或は縦に或は横に或は太く或は細く織り上げられたのが人生である。
　従つて吾人は先ず今日の雨風を見て恐怖や不平や短気や懶惰を起してはならない。長い年月の間には又た晴天に逢ふことが出来る。此の世界は秋計りではない。冬計りではない。又た夜計りでもない。必らずや春が来、夏が来、昼が来るのである。何故なれば循環は宇宙の真理であるからである。
　更らにもう一つの真理は凡て蒔かぬ種は生えぬと云ふ事と蒔えたる種は皆な生えると云ふ事である。
　蓋し忍苦の中の努力と修養と善行とは一種の種蒔きである。其れには必ずや其の努力相応修養相応善行相応な実が成るのである。従つて吾人は先ず大なる向上の果実を得んがために先ず大なる忍苦の種を蒔かなければならない。然らざれば人生の秋が来るとも決して大なる収穫を得ることはできないであらう。私が沈黙と忍苦の中に修養と努力を続けて来たのも全くこれがためである。
　吾等は益々成長せざるべからず否な無限に生長せざるべからず。徒らに姑息の安心と一時の快楽とを求むることは真に自我をして永久無限に発達せしむる所以ではない。ただ大なる苦痛に耐えてこそ始めて自己の向上発達の新芽が萌え出づるのである。此の意味に於て私は忍苦の生活の中に大なる向上発達の意義及び価値を発見するのである。（紀元九億十万七十七年三月十七日）

第二天理教界革命の声（三）

大平　隆平

第一章　自覚せよ

　今日天理教の人々分けて天理教々師の自覚を促したいことが沢山あるが其の第一の要求は宗教家として自覚せよと云ふことである。
　蓋し今日の政治家なるものはこれは一国の政治家である。けれども宗教家は世界政治家である。従つて此の世界に於て宗教家の徳は上越す大なる徳人はないのである。
　然るに今日の天理教徒は上は本部員を始め下は大教会分教会支教会の会長役員に至る迄殆んど自己の地位がしかく大なるものであるとは知らないのである。従つて彼等は政治家の前に出ればあたかも人格なき婦人が高貴の人の前に出た如く唯々諾々として其の靴の紐を結ぶをもつて光栄としている。往々大臣や大将が来る時は彼等はあたかも一国の君主を迎ふるが如き大騒ぎを演ずるのである。其の見識の絶無なること阿房らしくて見て居られない。
　之れを本願寺に見よ。如何なる大臣や大将が来たからと云つて天理教の様に教師や信徒の睹列兵を造る様なことはしない。静かに迎えて静かに送り出すのである。其れを何んぞ

や僅かに大臣大将！　之れを宗教家の目より見れば四民平等なるべき筈なるに之れを迎ふるに山海の珍味をもつてし往々一信徒の訪問すればこれには門前払を喰わすのである。其の態度の宗教家らしからざることいたかも成金が人に依つて待遇に大なる区別を立てるが如きものである。
　けれども教祖と云ふ人は其んな人によつて待遇を異にすると云ふ其んな方ではなかつた。皆なこれ一視同仁の愛をもつて待せられた方である。其の広大無辺の大精神が今日の人達には解らないのである。
　そもそも宗教家と政治家の態度の相違は一は愛をもつて立ち他は権力をもつて立つ点にある。然るに今日の天理教は信徒に対すること猛虎の如く社会もしくば教会の上級者に対すること俟猫の如し。これが果して愛をもつて生命とする宗教家の態度であらうか？　否な／＼これは俗中の最も大なる俗物のなす所である。苟も慈善を標榜する宗教家の取るべき態度ではないのである。
　更らにもう一つ天理教々師の自覚しなければならぬことは宗教は元来慈善を目的として経済を目的とせるものにあらざることである。けれどもこれも亦真の宗教的生命をもたざる今日の天理教々師に解せらるべき理由はない。従つて上は本部より下は一般教会に至る迄表に慈善を標榜しながら蔭へ回つて金々と金を取ることにのみ腐心している。
　此の権力を喜ぶことゝは宗教家の禁物である。けれども俗物中の俗物をもつて組織せる今日の天理教当局者に其んなことの解つたものは殆んどないと云つて良い。皆な滔々として富貴権勢の前に跪いて余念もない。これでは宗教家にあらずして全然俗人である。
　けれども私は本部を始め一般教会の当事者に望む。如何に諸君のお里でも一旦此の道に入つた以上はもう少し宗教家としての自覚をもたれんことを。
　宗教家は前にもしばしば繰り返した如く一国一代を治める政治家の如き小なる万代の世界を治める大政治家である。其の生命は愛である。愛のためには威武も屈すべからず富貴も奪ふべからざる大信念をもたざるべからざるものである。
　然るに今日の天理教徒中世界の王侯貴族の上に立つて真に宗教家としての面目を恥しめざるもの幾人かある？　吾人は殆んど絶無と答ふるより外ないのである。これは一人天理教徒計りでない。仏教家然り基督教徒又然り。ただ彼等は天理教徒の如き全くの無見識の徒のみにあらざる迄である。かくの如くにして世界の王侯貴族を支配すべき宗教家は却つて世界の王侯貴族に支配せられつゝあるのである。豈に宗教界の痛嘆事にあらずや。願くば我が愛する天理教徒よ。徒らに天理教は世界最後の大宗教なりちょう自家広告をやめて自ら先ず世界宗教たる所以の実を挙げよ。然らば天理教の価値は期せずして世界に認識せらるゝであらう。

第二章　元を忘るゝな

　凡て根なくして何物も成り立つものでないことは諸君のつとに聞く所の言葉である。けれども天理教信者中実地に根の恩幹の恩を知つているものはない。
　彼等は皆な始めて此の教を聞かせたるもの始めて此の教に依つて助けさせて貰つて末々先々の所謂親なるものゝ大恩を説く。けれども無い人間無い世界を作り日々の守護を与えている神と教祖の大恩を説かない説いても其は真の付録である。其のために信徒迄も会長の有難さを知つても神と教祖の有難さを知らない。と云ふのは会長始め教師から皆な己が助けてやつたから己にお礼をせよと云ふ風に仕込んであるからである。否な本部から始めて其うである。彼等は皆な神と教祖の大恩に依つて此の世界此の人類此の道の立つていることを忘れている。
　あゝ小恩守つて大恩守らぬ悪気の世界！　悪気の世界！　もし此の侭に忘恩の罪を重ねて行つたならば所謂此の道の信者にしてただ一人も此の世界は神が造り此の人類は神が生み此の道は神が始めたことを記憶するものがなくなるであらう。否な現に其うなりつゝあるのである。其の証拠は泥海古記である。教祖が生前彼れだけ骨折つて説いた泥海古記を今は大切な別席の講話中ただ一口も説くものがない。かくの如くにして彼等は此の世界此の人類は自然に自生したものだと信じている科学者よりも更らに大なる忘恩の罪を日々重ねつゝあるのである。
　殊に残念なのは中山家を始め本部員大小の教会長役員に至る迄教祖の御苦労に依つて此の道に衣食しつゝある大恩を忘れてひたすら我が身の思案我が身の欲に没頭しつゝある浅間敷さである。かくの如くにして人の心は泥海の昔に帰つて居る。
　記せよ神が此の世界を再び元の泥海とすると云つたのは必らずしも形の上の泥海ではないことを。心に道を失ふた時其の時こそ此の世界が事実泥海世界の第一期に入つたものなることを知れ。
　今日の天理教は即ち昔の泥海時代に帰りつゝある。彼等は口に道を唱えながら心に道を

失つている。かくの如くして天理教は形式の上に存して事実に於て自滅しつゝあるのである。神の残念！　教祖の残念！
　高い所に上るでない。高い所に上るでないとは教祖が夜もす日ねもす教え来り悟し来つた所のものである。然るに今日には管長婦人を始め本部員一同先々の教会長役員に至る迄低い心優しい心を忘れて我は顔に大きくなつている。可哀相ともいぢらしとも云ふに云われん。
　これ魂あるものは聞けよ。御身等が如何に管長であるの本部員であるの大教会の会長であるのと云つた所で道あつての管長であり道あつての本部員であり道あつての会長である。道がなかつたら管長もない。本部員もない。会長もない。役員もない。然らば幾万と云ふ諸君を養つて行く道を開いたのは誰だと思ふ？　其は云ふ迄もなく神と教祖とより外にあるまい。其の教の親の大恩を忘れて皆自分が教祖や神様の様に思つている。従つてする事なす事一つとして非礼非儀ならざるはない。
　一例を挙げて云えば一昨年故人となつた故管長中山新治郎の墓碑である。
　初代天理教管長中山新治郎命之墓とは誰がつけた？
　思ふても見よ天理教あつて初代管長があつたか初代管長があつて天理教があつたか？　これを修辞学より云つたら何も差支えはないであらう。けれどもこれを道順序の上より云つたら何れが末であつて何れが元であるか？　其は三歳の童児でもなお能く判別する所であらう。
　順序の顛倒はこれ一つではない。彼の管長の墓を御本席の墓よりも宏荘にした如きも其の一である。これは道発達のためとは家ば其れ迄なれど徳より云えば全然族人であつた管長を其の墓を飾ればとて何の光がある。
　凡て一般教界の精神に本末始終の理が顛倒せられてあるからする事なす事に不条理のみ生じて来る。教界の族人等よ心せよ。根は既に断たれてあるぞよ！　もし今にして繋がずんば夕顔の如く開いて朝顔の如く凋んで行くであらう。此の忘恩者が！　喝

第三章　現状を打破せよ

　凡て進歩せざるものは退歩するのが自然の法則である。之れを水に見れば流水は常に新鮮にして潴水は多く腐敗し易いものである。人の身の上も亦其うである。向上進歩せざるものは必らず腐敗堕落するのである。
　今日の天理教を見るに形のやゝ整ふて来たに反し精神は正さにこれ萎靡沈滞の極に達している。もし今日にして全然新らしき新芽を吹き出さないならば天理教は其れ自身自滅の外はないのである。否な現に事実の上に於て自滅しているのである。
　見よ今日の天理教なるものは其の教理に於て其の儀式に於て一つとして旧宗教旧道徳旧習慣の踏襲でないものはないではないか？　たとえば祭儀式や祝詞の如きは云ふ迄もなく祭神迄も神道の其れである。更らに教会制度に至つては社会では已に廃滅になつた専制制度、貴族制度、封建制度、階級制度、世襲制度の如きを踏襲している。彼の絶対服従主義の如きは弱肉強食の野蛮時代の遺風にして天理教の教理とは全然反対のものである。
　其の道徳なるものを見るに少しも天理教の新道徳は鼓吹されず凡て今日の社会には廃滅になつた旧道徳を標準としている。一例を挙げて云えば天理教は自由恋愛を許さず自由結婚を許さないと。そもそも人間の心の内に恋愛を植え付けるものは誰であるか其れは云ふ迄もなく自然即ち神である。然るに其の自然の心理作用に反抗して不自然な結婚即ち愛なき結婚を強ゆるのが果して天然天理天裁の道であらうか？
　凡て神の結べるものは人之れを離すべからず。又た神の結ばざるものを人之を結ぶべからず。分けて自由は神の賜ふ所のものである。自由恋愛を許すの許さんの自由結婚を許すの許さんのと云ふ権利は教師に授けられていない。
　これは真に一二の例に過ぎないが最も残念なのは親子兄弟夫婦主従師弟の間に馬鹿しい階級を付けて喜んでいた封建時代の蛮風を其の侭に踏襲してこれぞ新宗教なり世界最後の宗教なりと力味返つている阿房らしさである。
　見よ。丹波市の停車場を。彼処は旧幕時代諸大名が江戸城に参勤交代した時代の品川駅である。彼処から昔の大小名に相当する大小の教会長が家老格の役員家来格の信徒をつれて下車し江戸屋敷の詰所に相当する詰所の役員信徒教校生中学生に迎えられて詰所入をする有様は宛然これ封建時代の参勤交代である。
　中にも理の分つた人達は下車の時間が知れては却つて詰所の人々の時間を空費すると云ふので一人スポ／＼と乗車し下車する。これが本当の天理教徒と云ふものである。其れを何んぞや仰々しい送り迎えをつけて華族か大名式に上下するとは愚も亦此処に至つて極まつている。其の他今日の教界行政上の方針が教理本位救済本位にあらずして物質本位経済本位なるが故に其れは宗教としての価値を益々失墜しつゝある。此の他詳細にわたつて論

ずれば数限りもないことであるがもし天理教本部が今日にして自覚せずば天理教は社会に於て益々信用を失墜する計りでなく其れ自身の自滅を免かれないであらう。否な真の天理教其の者は今日の所全く自滅している。かくの如くにして世界一列救済の神と教祖の大理想を何時の世にか実現すべき？　もし其処に想到したならば一日も早く現状を打破せよ。これ目下の急務である。

第四章　此の道は肩で風を切つて歩く道ではない

私が本部の門前に近いた時一人の若い女中と或る本部員の息子とが会合した。其の若い女中は其の本部員の息子に向つて丁寧にお辞儀をしたが本部員の息子は却つて頭を後に衝き上げた。女中は擦れ違つてからやゝ暫時顧つて其の後姿を見送つていたが必らずや心中無量の感慨があつたらうと思われる。

私は此の男が或る宣教所の所長位の老人に矢張り同様の返礼をしたのを見たが凡て此の男計りでない。今日の分教会以上の会長や役員になると一寸気取つていて信徒位に頭を下げない。其れが大教会の会長位になると振り向きもしない。此の傲慢な生物が此の道の上級者である。凡て何れの社会に於ても成り上り者程威張りたがる者はないが殊に天理教の人間は其の元を洗えば大工や左官や桶屋や鍛冶屋から成り上つたものであるから少し信徒から祭り上げられる様な位置に座ると直ぐ成り上り根性を出して人を眼下に見下したがる。殊に大教会の会長位になると信徒を見ること全然奴隷の様である。これが果して世界一列兄弟の道であらうか？

教祖は如何なる人の前を通るにも手を下げて通つたと云ふ位謙遜な方であるのに其の子供は何うして此うも違つたものであらう。恐らく彼等は自ら威張ることによつて自分がさも偉く思われるであらうと思ふかも知らないが事実は却つて其れに反対するのである。

凡て実つた稲穂程低く頭を地上に垂れ空な稲穂程頭を高く衆穂の上に扛げているものである。其れと同じく人間も徳の大なるもの程謙遜にして徳の小なるもの程傲慢なものである。真に心ある者は彼等の態度の余りに傲慢なるを見て始めよりこれに交らうとはしないのである。

けれども此の傲慢な生物は不思議な芸を知つている。其の芸は何う云ふ芸であるかと云えば自分の信徒に対しては殿様の様な横柄な態度をしているがサア一旦自分の上級教会の会長や役員や世間の少し地位の高い人の前に出ると畳の上に米つきを始める。こう云ふ生物は大教会や分教会や支教会や宣教所に沢山ある計りでなく本部にも沢山いる。これが彼の人格の高い教祖の子供だそうである。

然し高い心を出すな／＼と不断に教えた教祖は此う云ふ一面に於て高慢であり他の一面に於て卑屈である此の様な子供を生もふとは思わなかつたであらう。これは多分子供の不心得から出た心の錆であらうと思われる。しかも高い所にいる者程心の錆が大きい。

けれども此の道は互い立て合いの道であつて人を眼下に見下しつゝ肩で風を切つて歩く様な道ではない。互いに分担せる仕事の苦労を謝しつゝ一家団欒の楽を頒つ道である。

其れを何んぞや少し高い所に上ると直ぐ族人に有り勝ちの高慢心を出して部下を見ること全然奴隷か奴婢の如くである。

けれども私は彼等に問ふ。

神は何時汝の弟妹を奴隷視し奴婢視することを許したか？

と。元来兄たり姉たるものは幼稚なる弟妹を世話してやらなければならぬものである。其れを自己の負ふことを欲しない重き荷物を自分よりは幼稚なる弟妹に負わせて自分は軽身で縦横に濶歩している。これが果して兄弟姉妹の道であらうか？　記せよ此の道は兄は弟の荷を負い姉は妹の荷を負ふて此等の負担を軽減してやるべき道であることを。然るに今日は足許の覚束ない弟をして兄の荷を負わしめ、足許の覚束ない妹をして姉の荷を負わしめている。これではとても遠い道を旅することはできない。其れでは互い立て合い助け合いの道とは云い得ないのである。

第五章　先ず鬚を剃れ

殊に此の互い立て合い道謙遜柔和の道の破壊者は彼の鬚武者達である。彼等には若い年老の区別なく必らず多少の高慢心をもつている。其の証拠に彼等鬚武者の側に行つて見よ。彼等は必らずや諸君を侮蔑しない迄も諸君にへりくだらないだけの高慢をもつている。

けれども前章に述べたる如く鬚を立てゝステッキを手に持ち肩で風を切つて歩くのは此の道の精神ではない。分けて鬚は神の嫌ふ所のものである計りでなく教祖と御本席も亦最も嫌つたのである。これは何も鬚其の者を嫌つたのではなく鬚の間にかゝる高慢の塵を嫌

つたのである。
　けれどもこれに対しては此う云ふ論者がある。何も鬚を立てゝいやうがステッキを持つていやうが肩で風を切つて歩こうが心中いささかも疚しい所がなかつたならば何も差支えないではないかと。
　けれども私の鬚を剃れと云つたのは鬚其の者よりも其の裏に潜む貴族的精神を剃り捨てゝ平民的精神に入れ換えよと云ふことである。互い助け合いも日の寄進も先ず剃鬚後の精神にならなければ駄目である。云い換えれば真に低い優しい平民的精神に帰らなければ駄目である。これ私をして先ず鬚を剃れと忠告せしむる所以である。

第六章　お授けを乱りに授受する勿れ

　今日の天理教徒のお授けに対する観念はちょうど御神符を戴くか何かの様な考で戴いている。これは教師から初めて其う云ふ風に勧めるのである。
　彼等教師は
「貴方も別席を運んでお授けを戴いて置きなさい。此のお授けを戴いた方は末の世になると其の身体から毫光がさします」
と云ふ様なことを云ふ。
　信徒はお授けさえ戴ければ地獄の門はただ通れる心算で苦るしい中から丹精して別席を運ぶ。其の苦しんで戴いたもの程効能の理が大きいと云ふので或る信徒の如きは野宿したり袖乞いして運ぶものがある。而して遠近の差に依つて或は一回に或は二回に或は三回に或は九回に別席を運んで最後にお授けを戴く。而して最後のお授けを戴く時には、順序の理だと云ふので親教会を堂々巡り巡つて会長の判を貰い其れを本部の自分の教会の詰所に出すと詰所から本部の事務所へ出していよいよ満席お授けとなる。其れからが又たたいそうである。
　授訓者はお授けを戴くと御礼として神様、奈良糸様、管長様、管長摂行山沢様、御本席様、本部専制方、本部台所と規定通りの御礼をする。其れが大抵三円以上四円以内である。其れから詰所にも事務員台所と御礼をする。もし会長と前会長とある様な場合には前会長に向つて御礼をする。其れが済むと大教会、分教会、支教会、宣教所と堂々巡りに御礼をして歩く。其れが順路にあれば良いけれども台湾の信徒が親教会は奥州にあつて台湾から来て奥州迄域其れから本部へ来て又た奥州に行つてお礼をすまし其れから台湾に帰ると云ふ様な人もある。又た親教会も一つや二つならまだ良いが十も十一もあるのは今日でも珍敷くない。其れ等の親教会に一々お礼をし順路でないものは何んな遠い所へでも回つてお礼をしてさて自分の直属教会へ帰つてお礼をする。其れでお授けと云ふものをめでたく戴いた事になる。此の順序は厭が応でもお授けを戴くものゝ経なければならぬ順序である。其れでなければ理が薄いと云ふのである。
　しかも此う云ふ面倒な順序を経て多くの時間と多くの労力と多くの金銭を費して戴いて帰つて何うするかと云ふに大抵の人間は一生に一遍も使ふか其れでなければ一度も使わずに死んでしまうのである。
　私の知つている教会ではお授けを戴いた人間が九十人以上いるけれどもお助けをしているのは会長を入れてたつた三人である。此んな風で折角多大な物質と多大な時間と多大な労力を費して得たお授けは何等の効をもなさないでしまふのである。
　元来お授けなるものは貰つても貰わないでも良いものである。貰つたからとて人を助ける熱心がなければ助からぬし貰わなかつたとて人を助ける真心さえあれば助かるのである。其れをすつたもんだの騒ぎをして貰つたからとて使わなければ何にもなるものでない。其んな無駄な時間と無駄な金銭と無駄な労力とがあつたならば其れだけの金（往復の旅費及び謝礼）があつたらもつと有益な神様の仕事なり慈善事業なりに投じたが良い。天理教徒が何故貧乏するかと云えば教会では尽せ果せと云ふ。其の外にイヤお授けのお礼だイヤ大祭費だイヤお鏡料だのと何か彼かの名目をつけて信徒の腹をせびるからである。
　此んなことは教会の人達の考えたことであつて凡て要らん事である。此んな不経済な金銭と時間と労力の空費をやつているから天理教信者でよくやつて行く人間がない。これを国家経済の上から云えば大なる浪費と云わなければならない。
　もし其れだけの金銭と時間と労力とを空費する余裕があつたら共同して公共事業なり慈善事業なり起したが良い。而した方が何れだけ神の名を挙げ国家社会の喜となるか知らない。
　かつても云つたことであるが凡そ宗教の中天理教程金を信徒より絞り上げて其の用途の明かでない宗教はない。其れも其の筈である。上つた金は皆な本部否な中山家の私有財産として銀行に預けられてある。其の額は数百万の巨額に上つている。しかも信徒よりは取るのみにて一文として公共事業慈善事業に投ずると云ふことをしない。皆な中山家の私有

財産となるのである。
　私は本来ならば此う云ふ事を信徒に向つて云いたくはない。けれども折角諸君の丹精して献じた金は皆此う云ふ風に死に金として葬られつゝあるが諸君の折角な丹精は無益なりと思ふから云ふのである。
　凡そ信仰と云ふものは御供を戴いたから病気が直りお息紙を戴いたが故に傷が直りお授けをもつているから人が助かると云ふものではない。御供一粒戴かぬでもお息の紙一片戴かぬでもお授け戴かぬでも信仰と人を助ける真心さえあれば其れで足るのである。堂々巡りをしなければ理が薄いと云ふ様なことは迷信と云ふものである。神様は何も其んな無理な丹精等お喜びになるものではない。其れは皆な教会の金を儲ける人達の云い草に過ぎないのだ。其の証拠にお授け貰わないでも真心一つで助けて御覧、きつと助かるから。神は何もお授けを貰つた人間だから助ける貰わぬ人間だから助けないと云ふものではない。其の人／＼の真心に乗つて働くのである。これが信仰の要である。
　されはお授けを乱授し又乱受することなかれ。其はただ理を汚す計りでなく神と人とを汚すのである。
　殊に今日の如く詰所があつても詰所の役に立たず（本来を云えば詰所と云ふものは其のための詰所である。参拝者は自分の家を出で詰所へ来れば詰所で万事預つてやらなければならぬものである）教会を堂々巡りして歩かねばならぬ様な悪政の時代にお授けを戴くことは無用である。神は足一度も本部の土を踏まないものでも心の誠を見て助けもし助けさせもする。お授けは要らん。何んな所にいる者も心の誠に神が授ける。これを良く心得て置く様に。

第七章　新進本部員に警告す

　此の三十年祭には新進本部員なるものが五人出来た。皆な理の軽るい人達である。此う云ふ人達を本部員にするなら枝々先々には箒ではく程本部員がある。けれども元来が不公平な今日の本部員達のする事だから是非の論は置く。
　さて一言新進本部員なるものに忠告して置きたいことは諸君は本部員になつたことを鬼の首でも取つた様に思ふているが本部員なるものは諸君の考える様に其う重いものではない。彼は本部が出来たについて勝手に人間の拵えたもので云わば本部の事務員に過ぎないのである。従つて何も諸君の考えている様な偉いものではない。
　其れで諸君に忠告するが諸君の中には大分本部員になつたことを得意にしているものがあるが其れは違つている。元来諸君自身がチットモ偉い人間ではないのである。ただ親に功労があつたとか何んとか云ふ理由をもつて本部員にして貰つたのである。天理教堕落したりと雖も徳から云つても功から云つても諸君位の人間は箒で箔位あるのである。其の中にあつて己は本部員であると云ふ様な高慢心を起したらもう最後である。其の次の日より積むものは埃計り来るべき世には牛馬の仲間入りをしなければならん様になる。
　諸君の中に本部の悪風を改革する様な人間はなくともせめてこれ迄の本部員の通つて来た情実因襲、追従軽薄、欲と高慢な悪風にだけは染んで貰いたくないものである。
　何故なれば此等の悪風の天理教を亡ぼす所の悪因である計りでなく実に諸君を亡ぼす悪因であるからである。
　けれども諸君の容子と云い態度と云い見るに一人として前記の悪風に反抗し得るものがない様である。かくの如くにして諸君はやがて皆前車の復轍を踏む様になる。否な現に踏みつゝあるのである。
　けれども此の道は諸君並に諸君の先輩諸君の考えていられる様な単純な道ではない。中々容易ならん道である。其の容易ならん道を継いで行かんければならぬ諸君の責任は重大なりと云わなければならない。
　けれども諸君の中には真面目に本部の弊風と道の将来と云ふ様な事に就て真面目に考えている人がないかも知らない。其れで私はこれ以上のことは何も云わないが願わくば道のため且つは諸君自身のために先輩とはもう少し異つた方面に出でんことを希望して止まざるものである。

第八章　神殿に本部員自身当番せよ

　私が神殿に参拝する毎に今日の様に自分達は奥深い所に引つ込んで准員や青年に任かして置かないで沢山ある本部員の中から二三人神殿の入口に机でも並べて当番し神様のお守りをしながら遠い所から参拝に来た信徒にただ一口でも良いから教理を聞かせて国の土産にさしてやつて呉れゝば良いがなと思わぬことはない。
　これを順序より云つても祖霊殿には青年が当番し教祖殿には本部員の夫人が当番すると

すれば神殿は当然本部員自身が当番しなければならぬものである。
　其れを何んだ今日の本部員は本部員といえばこれより偉いものはない様に思つて朝夕の勤めの外は神殿に等足踏みもしない。けれども昔は其うではなかつた。本部員自身神殿に参候して神様のお相手ともなり信徒の相手ともなつたものである。其の方が本当である。
　今日の様に本部員と云えばこれ程偉い者はない様な高い心を起して大切な神様の守を青年や准員に任せて顧みない。これでは良い奉公人だと云ふことはできない。たとい人に云われないでも勧められないでも頼まれないでも願われないでも自分の心から神様のお相手もし傍ら信徒に教理の一片も仕込み出来得べくば参拝者のお手振りの間違つているのを直してやる位であつてこそ真の本部員である。其れを何んだか神様より自分の方が偉い様に思つて神殿に参候するのを恥じている。これでは真の道の理は立たない。又た真の道の理は広がらない。
　せめて自分は本部へ置いて戴いて実地の布教が出来ないから参拝者になりと一言お道の理を取り次がせて戴きたいものであるなあと云ふ真実からの布教心が動いていたならば誰に云われないでも一人手に出て来るものである。
　然るに今日の本部員のヅルケ様と来たら頼んで回らなければ当番でもするものがないと云ふ有様である。本部員からして此んな厭々奉公ではとても　　此の道は拡がり様はない。慨嘆の至りである。
　第一これでは神様に申訳が立たん。第二に苦労艱難の中に尽し運んで来る信徒に申訳が立たん。此の二重三重の不義理を思わば本部員たるもの多少反省する所あつて然るべきである。
　殊に神殿の如きは一人や二人の青年や准員に任して置くべき所ではない。是非共本部員自身当番しなければならぬ所である。其れが理の当然である。然るに今日の本部員の考は神殿の当番の如きは青年のなすべきものだ本部員の如き貴き理の所有者の出づべき所ではない様に思つている。不心得も亦極つている。
　神の眼より見れば本部員の如き何も知らない無知の子供に過ぎない。神殿に参候することが名誉でこそあれ恥辱にはいささかもならないのである。乞う理のため道のため本部員自身神殿に当番せよ。道の発展は其れよりぞ期して得らるゝであらう。

第九章　世界紀元を用いよ

　今日日本では二つの紀元が用いられている。西暦即ち耶蘇紀元と皇紀元即ち神武紀元の二つ即ちこれである。中にもやゝハイカラがつた学者や若い文学者達は日本には耶蘇紀元よりも遥かに古い紀元があるのにワザと耶蘇紀元を用いて新しがつて喜んでいる。けれども其の何れも無駄なことである。
　人類の用ふべき紀元はただ一つしかない。其れは天保九年をもつて九億九万九千九百九十九年としている人類紀元世界紀元即ちこれである。此の天保九年を過去に遡る九億九万九千九百九十九年と云う年は人類が始めて神に創造せられた年であるが故にこれより正確な紀元はないのである。
　然るに今日の天理教信徒はかくの如き正確の紀元を有しながら今日迄一人も用いるものゝないのが残念である。此の残念は私をして始めて今年の年賀状天理教界革命の声並に御筆先第一版に此の紀元を用いしめた。一但し其の計算は誤つていた一これが全世界に於て本紀即ち真の紀元を用い始めた始まりであつた。私が此の紀元を始めて用いるや諸君の中にはこれをもつて痛快なりと叫ぶ者があつた。けれども他の多くの者はこれに就て何等深い意味を認めないやうである。
　けれども私が此の紀元を用い始めたのは何も新しがつて用いた訳ではない。広い世界に於て真に人類の標準紀元とすべきものは西紀でもなく皇紀でもなく実に此の本紀より外にないからである。且つ此の紀元を用いる時には人類史上の正確なる時代が鮮かに浮んで来るからである。此の二つの理由の下に私は始めて此の紀元を用いる端を開いたのであるが苟も元なる親の開いた元々の教を信ずるもの（天理教徒）は私に限らず何人も此の紀元を用ゆるべきものである。然らば此の道の広まるに従つて此の紀元は全人類の唯一の標準紀元となるであらう。敢て心ある人々の注意を喚起する次第である。

第十章　生屋敷と復名せよ

　神名の剥奪と共に残念に思ふのは由緒ある生屋敷（庄屋敷は生屋敷の転訛）の名を失つたことである。これは市町村合併の結果廃名となりしものなるべしと雖もさりとは本部にただ一人これに対して抗議を申込むものゝなかつたとは残念至極である。
　そもそも生屋敷の名の起りは今を去る九億十万七十七年の昔人類は伊邪那岐伊邪那美命

を父親母親とし此の屋敷を中心として生れ出したのである。其れで命ずるに生屋敷をもつてしたのである。其れが後世転訛して庄屋敷となつたのである。本部へ来て見るに元々の理は殆んど洗い去られて殆んど影を止めなくなつた。けれどもこれ一つは元の名に復えさずばなるまい。敢て本部の反省を促す次第である。

第十一章　瀰縫策を止めよ

基督曰く
「新しき布をもつて旧き衣を補ふ者はあらじ。蓋しつくらう所のもの反つて之れを壊り其の綻び最も甚しからん。又た新しき酒を古き革嚢に盛る者はあらじ。若ししかせば嚢張り裂け酒もれ出でゝ其の嚢も亦壊らん。新嚢に新酒を盛れば両ながら存つべし」
今日の天理教を見るに一つとして新しき布をもつて旧き衣をつくろい、古き革嚢に新酒を盛るの挙に出でざるものはない。
即ち此処に新しき布と云ふのは天理教自身である。古き衣とは神道である。又た新しき酒とは天理教である。古き革嚢とは神道である。
けれども瀰縫はこれのみではない。凡ての行政の上に於て亦た其うである。
例えば今回の問題になつている松枝子が鼈になつたことや秀司氏の死んだ時教祖がこれでも強情張れるかやと云つて三度額をコロ　ところがしたことや等について本部では頻りにもみ消し運動にかかつている。
買収！　賄賂！　威喝！　此う云ふことを本部では不道徳だとも何んとも思つていない。新聞や雑誌で中山家や本部や天理教の悪口をたゝれると直ぐ買収に掛る。又た相手が政府とか何んとか云ふと賄賂を送る。而して部下で不服を云ふものがあれば威喝を加えて沈黙させる。而して敗れた所に応急の修理を加えて今日迄何んか保つて来た。
けれども今日は教界の大掃除だ！　もう瀰縫はいかん。今迄隠し合いに隠して来た腐つた物や臭い物はスッキリ掃き出さねば止まない。見よ三ヶ月後の本部を。其れは驚くべき変動が来る。其の時に至つて本部持ち前の醜態を曝露することを止めねばならぬ。
凡て破れた衣服は一時の瀰縫に依つて一時の用に立てることが出来る。けれども其れは永遠の用に立つることはできない。今日の本部を始め一般天理教界の内部は瀰縫されるだけ瀰縫して来た。けれどももう瀰縫は利かなくなつた。其の証拠は増野の変死である。管長の腐死である。松村の入監である。其れでも鈍感な本部員は自分の臀の焼けて来る迄知らないでいる。而して天理教は何時迄も現状維持の方針をもつて進みさえすれば万金であると思つている。
けれども其のあさはかな楽しみも今は破るゝ時が来た。今日の時代は瀰縫や糊塗に依つて一時を免れることの出来ない時期に切迫して来た。掃除だ！　大掃除だ！　しかも空前の大掃除である。
此の際に於て取るべき方針はただ一つしかない。其れは新しき布をもつて新しき衣を仕立て新しき袋に新しき酒を盛ることである。之れを解し易く云えば天理教は今日迄冠つて居た一切の仮面を捨てゝ純粋の教祖の天理教に帰つて働くことである。これより外に何等の良き方法はないのである。敢て本部を始め一般天理教界の反省熟慮を望む。

第十二章　煩雑なる儀式を廃せよ

何れの宗教でも多少の儀式のない宗教と云ふものはないが凡そ天理教程長つたらしい儀式をする宗教はあるまい。其の儀式を始めて御神楽勤めを終る迄何うしても三時間を費すのである。其の間辛抱強い信徒は始めより終迄列座するかも知らないが大体の信徒は御神楽の前で帰つてしまう。
けれども天理教の儀式の中で一番大事なのは御神楽歌である。其れが始まらない中に帰つて行くと云ふのは何も知らない信徒の罪ではなくて祭司の罪である。私は何時も天理教徒の所謂お式なるものに列したことはない。多くお神楽の始まる頃を考えて参拝するのであるが正直の所私には彼んな長つたらしい無意味の儀式を長く見るに忍びないからである。
其れに天理教其の者の理想から云ふと彼んな長つたらしい儀式をすべき性質のものではない。彼は時代の未だ暢気な上代の神道の儀式である。今日の多忙の時代には已に時勢後れの儀式である。
其れを模倣して天理教もこれで立派な宗教の形式を備えるに至つたと思つているのは木猴にして冠すとちょうど同じことである。
天理教は其んな儀式張つた宗教ではない。ごく簡単にごく質素に何等他の不純分子を入るべき性質のものではない。之れを具体的に云えば祭主が御礼を云つて神饌物を挙げてこ

れから御神楽勤めをさして戴きますと云ふことを簡単に口頭で申上げ直ちにお勤めに掛れば良いのである。其れを祝詞だとか何んとか云つて今日には廃語になつてしまつて何等生命のない古典的文字を綴り合せて勿体振つて読み上げ馬鹿々々しい儀式の後舞になり舞からお神楽になる。私は何時も私の退屈するよりも神様がさぞ御退屈なさるゝことであらうと心配している。

凡そ儀式と云ふものは簡単にし得るだけ簡単にすべきものである。其処に神人の密着がある。其れを今日の天理教の如く神道の儀式を継ぎはぎして却つて純粋の天理教のお勤めを第二にしているのは甚だ要を得ない。

私の要求しているのは簡単なる開式の辞と御神楽勤めの閉の辞と其れで沢山である。恐らく神も亦其うであらうと思われる。

凡て儀式と云ふものは其れが複雑なれば複雑なる程信仰の要義を失ふものである。殊に今後は社会が一層多忙の時代に入るのである。其の時代にあつて無意義の儀式を行ふことは天理教を亡ぼすの原因である。従つて私は一般天理教界に望む一切の儀式を廃してただ御神楽勤めにのみ力を入れよ。

と。今日の如く無用の儀式に長い時間を費す時は肝心の御神楽には放心と疲労とあるのみである。しかも神の最も喜ぶものは儀式にあらず神饌にあらずただお神楽勤めあるのみである。

其れには今日の衣冠束帯は無用である。男は黒衣女は赤衣と云ふ教祖以来の規定に従つて男は黒衣を着女は赤衣を着て式を勤むるべきものである。徒らに旧式の田舎の嫁入の様に一式の中に二度も衣を着更えるが如きは最も時代後れの仕方と云わなければならない。

且つ外の錦は一つも要らない。荘厳なる儀式華美なる礼服、華麗なる装飾其れに依つて神が喜ぶと思つては誤りである。此の神の喜ぶ所のものはただ一つ心の錦、錦の心より生れた真の勤めが望みである。飾は一つも要らん。印半天でも前掛け掛けでも構わん。心の誠を神が望むのである。これ私が煩雑なる儀式を廃せよと叫ぶ所以である。

三家に与ふる書

大平　隆平

御三家様

月日の経つのは早いものです。今年は御本席おかくれ後もう十年になります。其の間皆様はこれも世が世であつたならばなあと思ふた日も幾日あつたか知りません。けれども誰も怨みなさるなよ。世間と云ふものは皆こうしたものです。利のある所には不断に用のない人間迄集まるけれども一旦金と力とが去つたなら槿花一朝の夢で誰も顧みるものもないのが此の世の人情です。中には彼の人はなあと思ふ人もあるけれど其れも人間です。更らに大きな勢力の出来た場合には其処に集つて今迄は日に幾度となく足を運んだ者もフッキリ足を運ばなくなります。分けて厭わしく思ふのは昨日迄味方だと思つた人間が今日は敵となつて我を苦しむるために回らしつゝある色々の策略を座視しなければならない場合があります。

御三家様

貴方方の今日迄の境遇は一人の富豪が臨終の間際に其の番頭を召び吾が亡き後は娘は頼るべきものもないから何うかこれを江戸の親類迄連れて行つて呉れと云つて頼む様なものです。番頭も旦那の生前こそ律義な顔をして働いていたがサア旦那がなくなつてしまう。連れているのは若い美しい娘である。遂に悪心を起して人里離れた峠の真中で娘を手篭めにした上金をさらつて逃げる。其の時の富豪の娘の心が貴方方の今日迄の心です。

御三家様

これはホンの譬に過ぎません。けれども此の譬の中から貴方方が学ばなければならないものが二つあります。其れは前に云つた人情の軽薄ともう一つ親の威光と云ふことであります。貴方方は此の譬話の中の娘の様に親の威光で贅沢に通つて来ることが出来たのでした。其れが一旦親が亡くなり後に残つたものが自分達計りになるとさあ昨日迄は吾が家来の如く頭を下げてやつて来た者が段々来なくなり遂に尋ねるものもなくなりました。

之れに反して一方中山家は何うかと云ふに以前は多少御本席の徳に圧迫せられつゝ通つて来た気味があつたのに幸い目の上の瘤が無くなつたので急に手足を突つ張り出しやゝもすれば貴方方に出て行けがしの態度を見せました。これには中山家も悪いが貴方方も亦悪い所がないとは云えません。殊に政甚氏の不羈放縦な生活は中山家計りでなく教界全体の信用を失ふ大なる原因でありました。其れがために折角の味方も敵となつた者も少くはありますまい。

もし政甚氏にして御本席の生前は兎に角死後に感奮して真に素行を謹みてせめて父の十分の一の徳を全うせられたならば必らずや今日の如き落莫の状態には陥らなかつたので

す。
　けれども当時は政甚氏も年壮気鋭にして深い前後の思慮を欠き易き時代であつたから止むを得ぬものゝ今日は既に年四十の余を超え人間としては最も信用のなければならない時代であります。其れを何んぞや幾つになつても十八や十九の青年の様な心になつてウカ／＼として暮らしていて何うなるか。実に飯降家の失つた信用と名誉とを回復するも失墜するも氏一人の責任にあるのである。
　殊に今年は御本席歿して十年である。もし多少なりとも父を思ふの念があつたならば此の期を一期として既往の不心得を霊前に謝し、将来の覚悟を神前に契ふべきである。
　もし然らずして今後も既往の如き素行を継続するに至らば今度こそは教界の内外共に飯降家を顧みるものがなくなるであらう。其れがために二姉の肩身の狭窄せらるゝも必然の致す所止むを得ない所であらう。
　御三家様
　私は神殿を参拝する度毎に何時も御三家の方に向つて手を合せて故御本席の御苦労を感謝するのであるが三家の中にても東即ち政甚氏の玄関を眺むる毎に何時も落莫せる名家の呼び起す無量の感慨に打たれないことはありません。しかも政甚氏を始め西と南の二家は如何に飯降一族の現状を観察しつつあるであらう！
　枯れた木の花咲く春は漸く近いて来ました。今迄は高山の雪に埋められて見る人もなかつた渓間の枯木に花の咲く時が来ました。而して今日迄無理と不自然との中に贅沢な生活をやつて来た中山家の枯死すべき時は近きました。其れも皆良かれ悪かれ不自由な時代を忍んで来た徳です。其の代り今度咲いたらこれは父の御蔭ではありません。貴方方の徳です。
　けれども時節が来たとても慌てゝはいけません。静かに時の至るをお待ちなさい。然しただ待つていてはいけません。上は教祖に鑑み下は亡父の素行を思い起して内は一身の素行を謹み外は成らん者不自由なもの心の足らんものに有形無形の善根を施しもつて静かに天の時の至るをお待ちなさい。然らば必らずや飯降一族の信用は次第に回復しやがて天より二世の法統の継続者を下されるであらう。
　けれども何んと云つても今日迄の如く外部の軋轢は愚か姉弟同士の和合さえ出来ない様では法統は愚か社会の信用さえ回復することはできまいかと思います。
　御三家様
　いよいよ故御本席様の十年祭も近づきました。けれども私は御承知の如く貧乏にして御玉串料も差上ることも出来ません。従つて私は有形の玉串料を捧ぐる代りに此の無形の暴言を玉串料として霊前に供えて戴きたいと思います。もし幸いにして暴言を暴言としておとりにならず無礼を無礼としておとりにならず多少なりとも私の意のある所をお汲み下さらば無限の光栄と存じます。
（紀元九億十万七十七年三月十九日）

山中彦七氏に与ふる書

大平　隆平

　山中氏足下
　其の後御無沙汰申上ました。
　聞けば貴方は私のことを敵だ等と仰つていられるそうですが何う云ふ訳で私が敵なのか知りませんが私には元来敵なるものは無い、皆な味方可愛い其のために本部始め色々の方面に向つて此うもしたら良いではないか彼もしたら良いではないかと思い付いた侭を書き送るのですが包有力の少ない人達は其れをもつて直ちに自分を攻撃するのだと曲解しさては貴方の様な敵だ等と奇怪千万な言葉が出るのかと思います。
　けれども好意を悪意にとらうが悪意を好意にとらうが其れは銘々勝手の御自由だから兎や角申しませんが此処に貴方に対しても一片好意の忠告を送りますからつれ／＼の折ランプの下でお読み下されば幸甚と存じます。
　山中氏足下
　数多本部員も数ある中に実家には数万の富を蓄えながらしかもなおマッチ箱の様な家に住み古下駄に古袴をはいてセッセと金を貯めることに汲々として居るのは貴方をもつて随一としなければなるまい。殊に感心なのは三度が三度の飯も夫婦共自分の内で食ふといふ事は滅多になく大抵本部の食堂で青年と一手に粗食に甘んじていられるのは到底贅沢に馴れた他の本部員の真似の出来ないことだらうと思います。
　けれども其の感心は俗物中の俗物としての感心であつて宗教家としての感心ではありません。成る程粗衣粗食粗室に甘んじていられる点は一見脱落した宗教家の様にも思われま

すが其の動機は助け一条のためにあらずして蓄財のためであると知つては何人も唖然として云ふべき言葉がありません。
　貴方の信じていられる拝金宗は貴方一代の信仰でなく祖先伝来の信仰である。貴方の父忠七氏の如きは教祖から
「家屋敷田地田畑を売つて神様に上げなさい。其うしたら地場同様の理にしてやるから」
と仰せられたそうですが欲の深い貴方の父は
「生命は上げますけれども財産だけは差上げられません」
と云つて断られたそうである。其う云ふ具合で細道時代には多少の尽しはしていられ様が全部を挙げて神と人とのために捧げるといふ見上げた精神はありませんでした。其の精神を継続せられた貴方ですもの本部から取るものは取つても出すものは出さないといふ固い量見を持たれるのも御尤もです。これも皆な因縁であります。
　けれども山中さん。粗衣粗食に甘んじて金を財められるも良いけれども其れを出すべき所に出す、云い換えれば助け一条のために出すのでなければ其れは吝嗇と云ふ者で倹約と云ふ者ではありません。其れも俗人なら兎に角苟も天理教の本部員と云ふ肩書をもつている貴方が神様のために多少なりとも献金するこそ至当であれ神様より取る計りでは恩が重なる計りだと思います。
　山中さん
　貴方は何う考えておいでなさるか知らないけれども昨年貴方が大事な孫を亡くしたのは深い理由があるのです。貴方は彼れより前に本部員から御大典記念に本部員一同揃いの装束を新調しやうと相談をかけられた時何んと御答えになりましたか？
　己は二人学校へ出して学費が大抵でないから今度は御免蒙る
と。其れから間もなく貴方の大切な孫はお引取りになりました。其の時東京から死骸を運んで来た汽車賃と装束の代価を比べて御覧なさい。蓋し思い当る節があるだらうと思います。
　けれども山中さん。大切な孫を亡くして金の要らんのと有つて要るのとは何地らが良御座んすか？貴方には或は前者の方が良いかも知りませんが私は其うは思わないのです。山中さん貴方も多分御承知のことゝ思いますが
　灰吹きと金持ちは溜る程汚くなる
と。これは事実を穿つた言葉です。殊に宗教家は人を助けるためでもなければ金は要らないものです。
　其れを表には慈善を標榜しながら蔭に回つて蓄財を唯一の楽とすると云ふは醜も亦極れりと云わなければならない。
　更らに私の貴方のために取らないのは追従軽薄の念の強いことです。これは利己主義者の多数に付き易い病気であるが貴方のは其れがひどいのです。これは誰も知つている事ですが島ヶ原事件勃発迄は自分の内の様にして行つて飲食して居た永尾へ島ヶ原事件からと云ふものはフッツリ足を断つて道で逢つても其れは　　白々しい御挨拶であるとのこと今回は又た鼬事件で度々飯降家と本部員との間へ御足労とのこと其うして置いたら結好なことあるだらうと思います。
　兎に角お溜めなさい！　お捜らいなさい！　其の中には又た神様いろ／＼のことを見せて下さります。

さようなら

（紀元九億十万七十七年三月十九日）

　道の友三月号の警告に就いて本部に問ふ

　道之友三月号は警告として色紙に左の文を掲載した。

警　　告

　昨年以来大平良平なる者猥りに本教に関する書籍を発行し、独断なる言説をなしつゝあるが、右は本部に於て認めざるは勿論、一般教会に於ても、斯かる言論に惑溺し、深大なる教祖立教の神意を没却し、信念の動揺、信仰の蹉跌なき様、堅く戒慎せられん事を警告す。
　　大正五年三月

　私は苟も一派独立の宗教本部として余りに其の行動の浮薄なるを憐れむものであるが此う公然と私の世界を侵害して来る様なら私も公然と自己の信仰の立脚地を鮮明ならしめて置く。

本部では一体自分達のかすんだ眼破れた耳濁つた心で考えた天理教でなければ天理教でない様に考えているが信仰と云ふ者は其う云ふものではない。一名一人の心の理に依つて同じ天理教でも解釈が違つて来る。従つて余の此の眼で見此の耳で聞き此の心で考えた天理教なるものが本部の人達の考えている天理教と異つた所で何等差支はないではないか？

本部では宗教研究家一其れを学者と云おうが何んと云おうが世間の勝手である一の事業の権威を全然認めるだけの力がない様であるが学者が自己の研究に就て発表したからとて一向差支はないではないか？

そもそも言論の自由と信仰の自由とは明かに憲法の規定に於て許されたる国民の権利である計りでなく人類が神より与えられたる先天的の自由である。

余は本部に問ふが一体余が本部の人間が勝手に拵らえ上げた似而非天理教を信じなければならぬと云ふ規定が何処にありますか？

余に明かに此の眼にて見此の耳にて聞き此の心にて考え余の天賦の自由意志に依つて余の信仰を定むるの自由は天から与えられてある。余は其の天賦の自由意志に従つて余の信仰を求めているのだ！　其れが果して天理教であらうがなからうが其れが本部と何の関係がある？

天上天下を見渡しても我は我なり他の何者でもない。従つて余は余の信仰が天理教に一致しないからと云つて何も警告迄発して余の言論の自由余の信仰の自由を限定せられる理由を認めない。もし余の言論にして国家の秩序を紊乱し、余の信仰にして社会の風俗を破壊するならば国家で之れを禁止して来るであらう。然るに国家は許し社会はこれを認めているのにひとり天理教本部が余に一片の注告をも与えずして警告を信徒に発するとは人の信仰を侮辱したものである。

繰り返して云ふが我は我なり他の何者にもあらず。余が如何なる思想を抱き如何なる信仰を有するとも本部がいささかも其れに対して彼れ之れ云ふ権利はないのである。もし私の信仰が本部の所謂天理教徒としてゞなく人類として誤つていたならばこれに対して一片の注告を与える位の親切はありそうなものである。然るにさはせずして天から物々しい警告を発するとは業々しいにも程がある。こんなことで世界最後の宗教の本部だなんて云えるか？　チト将来を謹んだが良からう。

却説余の信仰の立脚地は以上述べたる所に依つて大体明かになつた筈である。これからは依と天理教との関係について一言弁明して置く。

余の信仰が果して真の天理教であるか何うかは第二の問題として余も一旦教祖の人格に憧憬し此の道の価値を発見してからは教祖の一言一行をも忽にせず道の一理一法をも粗末にせずして研究して来た心算であるが其れは人間力の果敢なさに教祖御親の精神の百万分の一をも汲むことができなかつたかも知れない。

けれども本部に於て余の信じている天理教が独断であると云ふ以上本部の天理教が独断でない、云い換えれば教祖の宗教と寸毫も異る所なき正真正銘のものであると云ふ証拠が何処にあるか？　此の点を明かにしない中は私の信仰を猥りに独断なりとは断ずることは出来ない筈である。

然らば本部で云ふ独断でない天理教と云えば何んであるか？　今日の所は先ず天理教々典を置いて外にあるまいと思ふ。所が此の本部で所謂独断でない所の天理教々典なるものは天理教の独立認可を得るための方便として上は神と政府を欺き下は教界全体の信仰を欺いて作つた真赤な偽物なることは今日誰知らぬものもない明かな事実である。もし其うでないと云ふ反証があつたら挙げて見たが良い。

第一神名からして教祖は彼んな教典に挙げてある様な大日武尊等と云ふ神を説かれたか？　第二に彼の教典の中に十柱の神の御守護と人間始め世界始めの起源及び歴史が説かれてあるか？

第三に彼の教典の中には天理教々理の中最も重要なる貸物借物の理が説かれてあるか？

互い助け合いの理日の寄進の理が説かれてあるか？　朝起き正直働きの理が説かれてあるか？

之れを仔細に検するに天理教々理一現に布教者の口にしている一中重要なる教理は一つも説かれてないではないか？　これが果して真の天理教か？

此の他本部並に一般教会に於て現今用いつゝある所の制度及び儀式は如何？　其の大部分は天理教本来の精神を没却せるものではないか？

しかも神と教祖の直伝の宗教を研究し且つ之れを発表しつゝあるこの大平を独断だと云ふ。然らば余が今日迄雑誌新宗教並に天理教の新創世説の解説並に批判、天理教々理より観たる人生の意義及び価値、天理教界革命の声、世界最後の宗教、天理教の教義及び理想、評註御筆先其の他に表われたる何れの部分が独断であるか？　云い換えれば右の雑誌もしくは図書の何れの部分が教祖の天理教と相反しているか？　証拠を挙げて一々指摘しない以上は此の大平の信ずる天理教が独断なりとは一概に断言は出来まい。否な彼の詐八

百の天理教々典をもつてこれぞ真の天理教なりと内外の人を欺きつゝある本部こそ最も独断の甚しいものではないか？
　若し教祖御親の口より流れ出た一言一行をとつてもつて自分の信仰としている此の大平の天理教が独断的の天理教なりとせば天下何れの処にか真の天理教なるものがある？　偽善者よ！　汝先ずの眼より梁木を取れ然らば兄弟の眼にある塵をとる様明かに見ることを得べし。
　貴部よ！　偽の天理教の宣伝者たる貴部が真の天理教の宣伝者たる余を独断なりと云ふ以上はこれを認めないのは当然である。余も亦貴部の天理教を明かに教祖の天理教とは認めないのである。けれども此の大平の信ずる天理教が正しいか貴部の所謂天理教が正しいかやがて二個の正邪黒白を判ずる時が来る。
　もし貴部にして今日迄忠告した幾多の忠言に目醒めず我と我が手に教祖の道を潰す様ならば余にも亦一段の覚悟がある。其の結果は何処如何なる方面に如何なる形をとつて表われるか予め予言の限りではない。
　嗚呼愚かなる者よ！　教祖立教の神意を没却し信徒の信念を動揺せしめ信徒の信仰を蹉跌せしむるものは我にあらずして貴部にあることを悟らざるか？
　憐れむべき本部よ！　教祖御親の道を総べながら教祖御親の道を知らず徒らに痴言を発して天下の笑を買ふ。其の識見の低級なる。其の度量の狭量なる。其の信仰の幼稚なる。世界最後の新宗教たる本部の面目は何処にある？
　失礼ながら此の大平は欠けたる理を継ぎ亡びたる理を生かしこそすれ未だかつて教祖立教の神意を没却し他人の信仰の蹉跌を来す如き言論を杜漏せるの覚なし。もしあらば一々如何なる点が誤謬なるか又た独断なるか明かに指摘せよ。是非曲直は其れからである。
　徒らに本部の権威を乱用して正法を抹殺せんとする罪甚だ軽からず。余は先ず貴部が余の言論を独断なりと断じた其の独断なる理由を一々具体的に説明するを待つて余の信仰を披瀝し果して余の信仰が独断であるか其れとも本部の天理教が独断なるか是非を天下の公論に問ふべし。乞う余の著書の凡てにわたつて何れの点が独断であるか一々指摘せよ。我能くこれを乞う権利あり。本部又たこれを説明するの義務があるのである。其の上余の信ずる天理教が誤謬ならば更らに一段深く正教研究の途に志すべくもし又た本部の天理教にして誤謬ならば正教侮辱の罪を天下公衆の前に謝せしむべし。敢て本部の責任ある回答を望む。
　　紀元九億十万七十七年三月十九日

大平　良平

　　天理教本部　御中

地場印象記（一）

大平　隆平

一

　私が天理教を研究し始めたのは一昨々年（紀元九億十万七十四年）の五月であるがいよいよこれならば自分の信ずる宗教だと確信のついたのは一昨年（紀元九億十万七十五年）の七月である。
　私の考では教会の信徒にならず本部直属の信徒になることにあつたが本部迄行くと云ふことは当時の事情として許さなかつたから便宜上染井にある東京教務支庁の信徒とならうと思つた。
　私が染井に支庁を訪れたのはちょうど支庁の青年会の当日であつたが明日大和の本部から管長夫人がお出でになると云ふので私も信徒と一手に部屋の掃除から廊下の拭き掃除、雨戸の硝子拭き迄した。
　其れが済んでから私は事務所へ行つて神様を祭らして貰ふには何うしたら良いかと尋ねた。其の時事務所に居たのは山名大教会東部支教会の鈴木五郎氏が居られたが
　支庁では信徒を扱いません
と云ふ事であつた。
　其んなら神様を祀るには何うすれば宜う御座んすか
と尋ねると氏は
　貴方はこれ迄外の教会からお助けしられたとか匂い掛けをしられたことがありませんか？
　ありません
　其んなら私が行つて祀らして貰おう
と云ふことになつた。
　私が本部の直属の信徒にもなられず支庁の直属の信徒にもなられないのに多少失望はし

たが大体本部や支庁では信徒を扱わぬと云ふのだから仕方がない。其れなら何処の教会から祀つて貰つても神様に別はあるまいと思つて
　其れじゃ祀つて頂きましょう
と云ふことになつた。
　其れで氏が翌日私の雑司ヶ谷の寓居を訪れて呉れることに約束し信徒加入用紙を貰つた。
　其の日青年会の席で話された談話は何んな談話であつたか記憶していないが私は談話の内容よりも談話を聴く時の信徒の態度に感心した。彼等はこれからお話が始まると云ふ時にはこれからお話を聞かして戴きますと云ふことを表わすために二つ拍手する。其れからお話が終ると結好なお話を聞かして戴きまして有難う御座いますと云ふので又た拍手する。これは話す人の方でも同じことで先ず神前に礼拝しこれからお話を取り次がして戴きますと云ふ時と只今はお話を取次がして戴きまして有難う御座いますと云つて拍手する。其れから神前に御礼を申す。これは神代の神々の作業であつた。天理教は即ち儀式を現代に復活したのである。
　殊に私をして最も感心せしめたのはこれから会が始まると云ふ時に会主人が神前に於てこれから会を始めさして戴きますと云ふことを述べ其れから会主人の音頭につれて「チョイト話し」の勤めが始まつた時である。
　私は其れ迄に理論的に出来るだけ天理教を研究した心算であつても此う云ふ天理教独特の儀式とか作業とかは始めてゞあるから少からず興味と感嘆とを以つて見ていました。而して節面白く歌いながら陽気に手を動かし頭を動かして行く所を見ていると宗教といふものはこれでなければならぬ。殊に将来の宗教はこれでなければならないと思つた。
　私が何故天理教の歌とお手振りに感心したかと云ふに凡て人間の精神が喜悦をもつて満され其の感情が高潮の極に達した時は自然に其の言語なり態度なりが律をなして活動し出すものである。而して其れが喜悦の極に達すれば所謂手の舞い足の踏む所を知らなくなる。此の悦をもつて一此の悦は世俗的の悦ではない。所謂法悦である一欣喜雀躍しつゝ通るのが即ち宗教生活である。人生の真義と人生の真価のあるのは此処であると思つたからである。
　私は法悦の輩を見た。一其れは真に法悦をもつて満されていたか何うか疑問であるが否な彼等はただ型の如く繰り返したに過ぎないかも知らないが一而して法悦の生活云い換えれば宗教生活とは如何になつかしきものであるかと云ふ暗示を与えられた。
　其の日の私の収穫は其れだけに過ぎない。けれども其の僅かの収穫も私にとつては数え切れぬ法悦の種となつたのである。私は郊外電車で雑司ヶ谷の家に帰つた。其れは既に日没後であつた。妻は私の帰りの遅いのを怒つて色々小言を云つたが其れは私の耳に入らなかつた。
　私は
　神様を祀る／＼
と。妻はこれには不承知ながら私の意見を知つていた。
　翌日鈴木氏は約束の如く訪ねて来た。私は信徒加入届に調印して氏に渡した。妻は病気であつたか何かで氏と逢わなかつたが其の加入届の中に妻の名前を書入れたと云ふので氏の去つた後で大問題が起つた。其の結果私は鈴木氏迄妻の除名手紙を書くべく余儀なくせられた。
　鈴木氏は三十日に神様を祭らして貰ふからと云つて帰つた。其の三日間と云ふもの私は妻から迷つているの何んのと続け様に非難せられた。
　其う云ふ中にも私は神饌物を買いにワザ／＼銀座迄出掛けて菊屋から烏賊だの干魚だのと云ふ様なものを買い近所の果物店よりは神様に上げるのだからと云つて一番美しい林檎を買つた。いよいよ神祭りの当日には鈴木氏は外に青年一人を連れて来た。神様の道具は鈴木氏に一切頼んであるから其の上に右の神饌物を盛り庭の榊魂を祀つて貰つた。
　其の頃は七月の末で暑い盛りであるから氏の額からはポタ／＼と玉の様な汗が流れ落ちた。其の時は私も「チョイト話し」をウロ覚えていたから一緒にお勤めをした。妻は私が神様を祀ることには反対しつゝも其日は温和しく私の後から式を拝み、式の始まる前も式の終えた後も甲斐々々しく働いて此の不可思議なお客様達をもてなして呉れたのは嬉しかつた。

　無形教会より（三）

Ｒ　Ｏ　生

　無形教会の教義は朝起きなり、正直なり、働きなり、これより以上無形教会の教義はあらざるなり。

我は我が無形教会の会員諸君に告ぐ
諸君は木にて造りし宮と金にて造りし御鏡とを購ふて神此の中に在ますと思ふ勿れ
諸君の住む宇宙はこれ神の教会なり神の宮殿なり。其は諸君が一円二円の金を支払ふてしかもなお火に焼け水に流され風に倒さるゝが如き脆き宮にあらず創世より以来火にも焼けず水にも流されず風にも倒されざる不朽不滅の神の宮なり。
凡て人の造りしものは朽ち神の造りしものは朽ちず。諸君は朽ちざる神の宮を購ふべし。又た三十銭三十五銭を支払いて教会より購いし鏡を神の魂と思ふ勿れ。諸君の祀るべき神魂は天に在り。天月日は即ち諸君の祀るべき神の魂なり。
我は我が無形教会の会員諸君に告ぐ
諸君は欲深き信者の如く是せよ彼せよと神に祈る勿れ。其は欲に汚れたる俗人のなす所なり。諸君はただ諸君の求むる所のものに向つて無言の努力を続けよ。これ最上の祈祷なるなり。
凡て神は人の如く言葉に聞かず魂に聞く。魂もし汚れたらば百万言の祈祷も無益なり。魂もし清からば生れてより以来未だ一度も神仏に向つて手を合せしことなく未だ一度も神社仏閣に参詣せざるものをも救ふべし。
されば我は我が無形教会の会員諸君に告ぐ
祈る勿れと。しかも絶対に祈る勿れと。
我に其の実なくして朽ちに祈祷を捧ぐるはこれ神を欺くなり。
諸君はただ朝起き、正直、働きを守るべし。然らば本部に参るに及ばず教会に参るに及ばず又た神に向つて合掌するの用なし。たといするとも其は無益の業のみ。
されば我は我が無形教会の会員諸君に告ぐ
朝夕教会に参拝するの余裕あれば其の間に一足の草鞋を編み一枚の封筒を張れと
これ神を欺いて我が欲の因縁を重ぬる時間を善業に向つて費せるなり。
此の道理より押して我は更らに諸君に向つて一事の告ぐることあり。曰く
お授けを乱受する勿れ
と。
たとい九度の席を運び最後にお授けを頂きたればとて今日の授訓者の如く機械的に別席を運び機械的にお授けを頂き何等の自ら助かり又た人を助ける貴重の真理を咀嚼するの欲望なければ熱心もなくはた能力なきものには犬に聖物を与え豚に真珠を与え赤児に経文を授くるが如く此の貴重の真理も亦紙片に過ぎざればなり。
然るに今日の本部は此の貴重の真理を商品の如く売り信者又た商品の如く買ふ。其の間にあつて、仲買の役を勤むるものは今日の教会なり。彼等は信徒を見る毎に
「別席を運べお授けを戴け」
と云ふ。敢て信徒の助け一条の精神と教理の理解力の有無とを問わない。ために信徒はただ教師の勧むる侭に多大の労力と多大の金銭と多大の時間とを費してお授けを頂くとも其れが何のために必要であり且つ又た如何なる価値を有するかを知らず徒らにお礼や護符の如く固く筐底に蔵して其の中に含む真理を研究せんとはせざるなり。ために百人の受訓者ありとも真に人を助くるものは其の一割なり。これ果して誰の罪ぞや。
凡て人を助くるにはお授けの有無に依らずただ真実の有無に依る。たといお授け一紙に書いたお授け一を有すればとて人を助くる誠なきものに人を助けたる例なくたといお授けを有せざるとも人を助くる誠さえあれば助からずと云ふことなし。
されば我は我が無形教会の会員諸君に告ぐ
お授けを得るために多大の労力と金銭と時間とを浪費することなかれ
と。
殊に今日の如く貴重なる時間と金銭と労力とを浪費して教会の巡礼をなすが如きは全く無用の業なり。もしかくの如き有害無益の制度に縛られて無用の金銭と無用の時間と無用の労力とを費す暇あらば之れを神と人とのために捧ぐべし。
我は人を助くるために御供を用いず、御息の紙を用いず又た手品を用いざるなり。何故なれば利益は御供にあらずお息の紙にあらず手品にあらずして助くる人と助かる人の真実の力に依ればなり。

痴人の足跡

序

凡そ人間を貴く的に分類すると四種になる。
其の第一種の人間は始めより罪をもたざる人間である。
其の第二種の人間は罪もあれば徳もあるがいささかもこれを私しない人である。
其の第三種の人間は我が善を挙げて我が悪を隠す俗人根性である。
其の第四種の人間は罪を犯して罪を知らざる人間である。
釈迦の如き基督の如きミキ子の如き聖人は第一種に属する人である。
第二種の人間は天真爛漫にして我を詐ることの出来ない正直者である。詩人宗教家は多く此の部に属す。
第三種は俗物である。
第四種は痴人である。
此の中で私は第何種の人に属すべきか？
第一種の人即ち始めより罪を有たざる人たらんことはこれ迄何れ程願つたことか知れないけれども私の如き凡夫にとつては其れは全く不可能の願いであつた。
継ぎに私の願は全然善悪の葛藤を知らざる痴人になることであつたが其れになるには私は余りに賢かつた。
然らば第三種の人となつて此の世を悧巧に送ることの出来る人間かと云えば其れにしては私は余りに正直に生れて来た。
此う数えて来ると私は何うしても第二種の人に属する様である。
第二種の人！　其れは私の理想の人間ではないけれども落ち行く所は此処よりない。従つて私は現在の所第二種の人に満足しつゝ先々は第一種の人に向つて努力するのである。
私も此の四月の八日には満三十歳になる。三十歳と云えば先ず人生の半である。其の間私の通つて来た処の跡を顧みると自分はかくも厭わしい人間であつたかと思ふことが沢山ある。けれども其の厭わしいと思い、浅間敷いと思い、穢わしいと思い、情ないと思ふことは多く心中に起つて心中に消滅したものであつて私と朝夕居を同うして居る親兄弟妻子朋友さえ気付かぬ所のものである。
私は子供の時から人と違つていた。違つていたと云ふことは自分は自分特独の世界をもつていたと云ふことである。わたたしには天性何うしても人の面白いと思ふものに興味をもち得なかつた。却つて人の面白くないと思ふことに向つて大なる興味をもつていた。其れがために小学校では神童と称せられ、変人と称せられ、書家と称せられ、黙り虫と称せられ、中学では聖人、君子と仇名せられた。此等年少批評家（同輩）の批評は皆当らないとしても其の中で変人と黙り虫との二つは私の少青年時代の特色を遺憾なく評し尽している。
実際変人なる私はごく幼少な時から人と遊ばなかつた。何時も自分一人で好きな事をして遊んでいた。其の後成人するに従つて私の趣味の対象が変つても私の幼少の時から持つていた気質は何時も変りがなく私は何時も孤独の人として他人の世界よりは常に離れた別世界に住んで来た。これが私にとつて懺悔の種ともなれば功徳の種ともなつたのである。
此う云ふ変人の常として早くから発達するものは反省力自制力である。私も亦此の反省力と自制力とが並外れて鋭敏であつたがために他人が美徳として満足しつゝあることに向つて却つて醜悪なる罪悪感を生じ、ために人知れぬ精神の苦悶を重ねて来たことは何れ程あるかわからぬ。
世間の人間は皆な私は温和しい子だ、出来る子だ、感心な子だと云つて感心していた。成る程世間から見れば其う見えたかも知らない。けれどもこれは自分自身から見ると全く人知れぬ苦悶の種を此の胸に包んで来たのである。
誠や此の胸は此の世に於ける最善の思想も宿せば最悪の思想も宿し最美の勘定も宿せば最醜の勘定も宿し或る時は神ともなり、或る時は獣ともなつたのである。
凡て人間の価値は其の形より定むることは出来ない。世間の人間は監獄に投ぜられたる不幸の人々を見て自分達の交るべからざる人間の様に思つているけれども彼等不幸の人が刻々悪念計りを積む訳ではない。又彼等を鳥か獣の如く軽蔑しつゝある人間が必ずしも刻々善念計りを積む訳ではない。天の最高法律より照せば完全無欠の善人もなければ完全無欠の悪人もないのである。皆なこれ善悪二種の観念に支配せられ或る時は神の子となり或る時は獣の子となつて一生を無意味に過すのである。
私の如きも元より未だかつて警察の厄介になつたこともなければ監獄の厄介になつたこともない。けれども法律に依つて罰せられる人が必らず悪人出もなく罰せられざる人が必らず善人出もない。従つて其れは私が善人であつたと云ふ何等の保証にはならない。ただ自分自身を内観した時俯仰天地に恥じざる精神的生活をもつて来もつている人間のみ聖人と云ふことが出来る。
けれども私は信ずる。世界の大聖と雖も其の精神中に一度も善悪二種の感情の葛藤を経

ずして聖者の域に達せるものはないといふことを。釈迦や基督の伝記を見るに其れは美しき譬喩をもつて潤飾せられてあるがために神経の遅鈍なる人々の注意を引かないけれども彼等の伝記より美しき衣を剥ぎ去つて其の現実感を研究する時は菩提樹下の魔軍の襲撃魔女の誘惑の如きは実際かくの如き客観的の事実が投じの釈迦の身辺に起つたものではなく彼が主観中に起つた肉欲物質欲に対する奮闘を表したものに過ぎない。基督の伝記を見るに彼は釈迦の如く性欲の誘惑は受けなかつたがしかもなお体を有する以上食欲物質欲好奇心虚栄心の誘惑を受けない訳には行かなかつた。彼が悪魔に試みられたと云ふ三大誘惑は決して悪魔が彼を誘惑したものにあらずして彼自身の欠点が彼を誘惑したのである。

世間の人達は努力なき善云い換えればより低き欲望とより高き欲望との葛藤を経ざるの善をもつて聖人の心理状態としている様であるが私は其うは思わない。孔子の如きも我七十にして心の欲する所則を越えずと云つている所を見れば其れ迄の彼はより小なる善とより大なる善との矛盾葛藤（これは向上心のある人には免がれることの出来ぬ宿縁である）のために始終苦しんだに違いない。

凡て善にせよ悪にせよ其の価値の存する所は真に自覚したる自由意志より生れたと云ふことである。此の意味に於て私が今日迄続けて来た努力は決して無意味なものではなかつたと思ふ。

私は痴人である。けれども私は常に現状に満足することのできない痴人である。常に満身の力を振り起してよりよき自己を生まんと努力しつゝある痴人である。

私が此処に書かんとする痴人の足跡は即ち私が今日迄覚束ない視力覚束ない聴力覚束ない足力を頼りにして彼地に迷い此地に迷いして人生の沙漠を通つて来た私の足跡であるが私は此の痴人の旅行記を以つて他の同行者の参考にしょう等と思つて書くのではない。私はただこれを書かなければならぬ自然の力に強いられて動物が飲食物を摂取して其の不要分子を排泄するが如く今日迄摂取した精神的食物より其の滋養分を摂取した後の心の糟である。私は此の清水の蒸発した後に残つた汚物の如き我が心の埃を心中に蓄えることが出来ないで自己意外に排泄するのである。従つて世人がこれをもつて肥料としやうが肥料としまいが其れは私の関係したことでない。ただ汝の排泄物は余りに悪臭を有し汝の排泄物は余りに有害なりと苦情を申込む者あらんか私は公徳上他の世界に去つて排泄せんのみ。

紀元九億十万七十七年三月二十二日

大和の地場にて

大平　隆平

識

編集室より

Ｒ　Ｏ　生

三月の八日三月号の編集締切りで忙しくて仕方のない時に図々しい面をした五十五六の人間が尻つて来た。大抵の人間なら何処　　の誰々であると名乗つてから入るのだが此の男に限つて何処の誰とも云わずに上り込んだ。其れが故管長在世中は甘い事を云つて管長をだまして私腹を肥やした丹波市の木田と云ふ道具屋だ。

私には此んな男の話を聞かない中から二月号の管長夫人に与ふるの書について誤魔化して来たことがチャントわかつていた。彼は私が知らないと思つて管長や管長夫人の徳を色々述べ立てゝイヤ管長は神様見た様のお方であつたの管長夫人が養徳院とかに何んとか贈つたのと云ふことを喋つた挙句これは取り決して呉れと云ふのではないが管長は朝寝坊等なさる方でなく又た奥様も決して朝寝坊等なさる方でない。彼は取次が悪いのであると吐かした。

私も始めの中は黙つて聞いていたが余りに出放題を喋るから

死んだ管長はだますことはできても此の大平はだますことはできない。貴方の言葉は参考に迄聞いて置くが貴方の言葉其の侭を採用することはできない

と云ふと馬の様な顔がサット変つた。私は根つきり葉つきり云つて聞かしてやらうかと思つたけれども始めて来た人間だから許して置いた。

其の後でも何の彼の云つて喋つても此方は一向取り合わないので最初の元気に似ず大いに気抜けの態であつた。

話が杜切れたから

本部では部下を泣かせて金を絞り上げる。其の金を又た誑して着服している者もある。今は腐柿が木になつている様にブラ下つているが時節が来れば皆んな落ちる。其れを私は楽しみにしている

と云つたら両手で頭を抑えて暫時考えていたが

「又参ります」

と云つてソコ／＼に帰つて行つた。
　もう来ないかと思つていたら四五日経つと又たやつて来た。
　御免なさい
私は黙つていた。彼は勝手に戸を排して入つて来て障子を開けた。
　御免なさい
　其の日の夕方迄に何うしても帯封を書いて東京に送らなければならないから彼が入つて来たに係らず構わず仕事をしていた。
　彼は私が入れとも云わないので暫時其処に立つていた。
　何か御用ですか？
　イエ別段用事もありませんが
　用事がなかつたら又た来て下さい。今日は用事がありますから
　彼はなお暫時其処へ立つて居たが何うしても上れと云ふことを云わないから
　其んなら明日参ります。御免なさい
と云つて帰つて行つた。私は黙つていた。
　之れより先き彼は色々の人に私の人格を聞き合せ私が筆は達者だけれどもロクに物一つ云えない温和しい人間であると云ふことを聞いて
　其んならば占めたものだ。筆は幾ら達者でも此方の云ふことを一々書く訳にも行くまいから此の木田が行つて降参させて呉れる
と云つて大勇みに勇んで来たのだが大将二回の訪問でスッカリ味噌をつけて帰つた。
　彼も馬鹿でなかつたら大抵無言の力と云ふものは何れだけ大きいものであるかを悟つたであらうとは思ふがなお一応此う云ふ不心得のない様に将来を戒めて置くが凡そ言葉と云ふものは用事のない時は使うべきものではない。お前達はただ喋りさえすれば偉い様に思つているが下らない世間話に上手な人間程真面目な話になつては一口も利けないものである。諺にも云ふてあるであらう。雀の千言よりも鶴の一声と不断は何も云わないで良い。云ふべき時に一言云えば其れで良い。
　其れから温和しいと云つても無能であつて温和しいのと能力をもつていて温和しいものとは違ふ。凡て能ある鷹程爪を隠すものである。人間も本物に近けば近く程温和しいものである。と云ふのは自分の身を慎むからである。私は其う云ふ人間ではない。口も利けない手も出せない人間であるが其れでも怒り出したらお前達の様な人間が百人二百人寄つたからとて抑えることはできない。其れで将来のために云つて置くが人は表面の無口や表面の温和では其の人の力を計ることが出来ないから馬鹿にしてはかゝらんものです。これを折角二度迄来た日料に上げます。もしもつと痛い目やかゆい目に逢いたければ何時でもお出で。お望み次第の目に逢わしてやる。
　其れから本部の奥様に言伝してお呉れ。
　此んな訳の分らない人間を寄来すと貴女の恥じになる計りでなく本部の恥になるから決して寄来しなさんな。もし用事があつたら自分なり本部員なりを寄来しなさいと大平が云つていたと言伝してお呉れ。（以上木田へ）
　世間では此んな馬鹿が多いから困る。口先きでも達者なら是を非にでも曲げることが出来ると思つている。けれども才を頼むものは才に倒れ智を頼むものは智に倒れ口を頼むものは口にて倒るゝことを知らないでいる。馬鹿な人間もあるものだ。
　本部では自分に都合の悪い人間は権力で抑えるか金で買収するか其れでなければ此んな空操り人形の様な人間を使つて相手を誤魔化すかであるが此の大平は其の手にのらない。
　私は金が欲しくつて此の道に入つたのではない。名誉が欲しくつて此の道に入つたのではない。又た親切が欲しくつて此の道に入つたのではない。金が欲しければ沢山もないが二万や三万の金は私の内にだつてある。名誉が欲しければ神様は心次第で何んな偉い人間にもしてやると仰ゃる。親切が欲しくば宿場女郎のお尻でも追かけたが良い。私が妻子に別れて此うして貧苦を楽しみつゝ道の研究をやつているのはもつと／＼大きな目的と使命がある。其れを果さない中は誰が何んな妨害をやらうが退却はしない。
　近頃片腹痛い事の多い中に三月号の道の友に掲げた警告も其の一つである。本部は何時迄も白つぱくれて教祖の道に反対するなら私にも最後の覚悟がある。其の覚悟は今明言の限りではないが其の時になつて上を下への狼狽をしないが良い。これだけ一言固くお断りして置く。

.

天理教と現在主義

大平　良平

人間の理と云ふは明日の日と云ふがない　　天啓の声

お言葉に

「今日の事は今日忘れよ。其の場の事は其の場に忘れよ」

と。此の意味は現在に於て埃を積まざるのみならず積んだ埃も次の瞬間に迄持ち越さないことを云つたのである。

古来高僧智識と呼ばれ大悟徹底と称せられた人々は皆此の現在主義者今日主義者であつた。彼等は嬰児が先の瞬間の事を今の瞬間に忘れてゐる如く昨日の失敗を思ひ起して今日の精神を曇らす様の事はしなかつた。又た明日の苦労を思ひ悩んで今日の精神を塞ぐ様なことはしなかつた。彼等は現在の事実を恰かも白紙に文字を書くが如く鏡に物を映ずるが如くに精神に映じた。其れに対して執着もなければ煩悩もなかつた。何故なれば彼等は今日の主観の力をもつて昨日の性格や昨日の生活や昨日の出来事や昨日の事実を変更することも出来なければ又た変更する必要もないことを悟つてゐたからである。又た今日の主観の力をもつて明日の事実を予想することも出来なければ予想しても其れが現在と何等の関係もないことを悟つてゐたからである。天理教信仰の奥義も亦此処にある。

けれども未だ信仰の奥義に達せざる世の凡べての人は現在を現在として有意義に利用することを知らず徒らに過去の墓場、未来の牢獄として空費しつゝある。基督はかくの如き生活の影に追はれて現在の第一義的生活を忘れてゐる人々を戒めて

「是故に我汝等に告げん。生命の為めに何を食ひ、何を飲みまた身体の為めに何を衣んと思ひ煩ふこと勿れ。生命は糧より優り身体は衣より優れる者ならずや。汝等空の鳥を見よ稼ぐことなく苅ることを為さず倉に蓄ふることなし。然るに汝等の天の父は之を養ひ給へり。汝等之よりも大に勝るものならずや。汝等のうち誰れか思ひ煩ひて其の生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣のことを思ひ煩ふや。野の百合花は如何にして育つかを思へ労めず紡がざるなり。我汝等に告げんソロモンの栄華の極の時だにも其の装此の花の一に如かざりき。神は今日野に在りて明日爐に投入らるゝ草をもかく装はせへえば況して汝等をや。嗚呼信仰薄き者よ。然らば何を食ひ、何を飲み、何を衣んとて思ひ煩ふ勿れ。これ皆異邦人の求むるものなり。汝等の天の父は凡て此等のものゝ無くてならぬことを知り給へり。汝等先づ神の国と其の義とを求めよ。然らば此等のものは皆汝等に加へらるべし。

これ故に明日の事を思ひ煩ふ勿れ。明日は明日の事を思ひ煩へ。一日の苦労は一日にて足れり」

と云つてゐる。これをお道より云へば

「此の道はよふ聞いて置かねばならん。サア／＼一日の日歌で暮らす願ひ。今日から心が勇むといふ日もある。何も案じる事はない。案じると善い事や思やせん。今日の事を案じるは来年の事も案じにやならん」

となるのである。

実に人の現在の生活は果敢なき虚栄の影を追ふにあらざれば浅薄なる物質的欲望の為めに追はれつゝある。昨日の後悔明日の苦労は此の名利の生む妄念の影に過ぎない。けれども考へて見れば此の二度と帰らざる貴重の現在を浅薄なる快楽の為めに費すことの愚なると共に無益の後悔や果敢なき空想の為めに浪費することの一層愚なることを思はしめるのである。曾て船場大教会が焼失した時神は

「サア／＼過ぎ去つたことは夢にも悔むでないで。此の先き大きな心になつて運んでくれ」

と云ふお言葉を以つて思ひ迷へる可愛い子供を督励されたといふことを聞いてゐる。

実に貴重なる現在は過去の為めに独占せらるべきものでもなければ未来の為めに分割せらるべきものでもない。唯現在の最善の生活の為めにのみ費さるべき者である。これを天理教々理より云へば一時一物一心は天理教の理想である。けれども天理教の現在主義もしくば今日主義と世の所謂現在主義もしくば今日主義との相異は彼の世の所謂現在主義もしくば今日主義が何等の高尚なる目的もなく唯本能的衝動的に非連続的非自覚的生活を主張するに対し天理教の現在主義もしくば今日主義は過去現在未来を貫通する向上進歩の一過程として現在を最も有意義に有価値に利用する所に二者の相異がある。之れを詳しく云へば天理教の現在主義もしくば今日主義は現在の生活に最善の意義及び価値を発見し且つ創造する点にある。

お言葉に

「誠一つが天の理直ぐに受け取り直ぐに返すが天の理」

と。一時一物一心の中の一心の内容は即ち真実なる自己である。真実なる自己の一元的生活これが天理教の現在主義である。

私の此の解釈は私一己のドクマではない。公平にして誤らざる天理教々理より見ても凡ての解釈に迷はされざる人生の意義及び価値より見ても現在を最も自己に取つて価値ある瞬間たらしむることは人類の一大事である。
私は天性苦労性である。けれども此の信仰に入つてから幾ら悔んでも改造することも出来なければ改造したとて何もならない昨日の性格や昨日の運命を改造せんとする無益の努力を捨てた。又た幾ら考へても自分の力でもつて何うすることも出来ない未来に対する無益の憂慮も捨てた。現在は唯現在の事を考へて行けば良いのである。これが私に与えられたる天理教の恩恵であると云つてよい。
要するに昨日の事は昨日に解決せられ明日の事は明日解決せらるべきである。現在は唯現在の問題を最善の方法に依つて解決すれば良いのである。此の現在主義こそ生現在の私にとつて最も有意義の生活である。

（大正四年九月二十七日）

教界の廓清（三）

大平　良平

信仰の為めの信仰

凡そ信仰に伴ふ弊害の中最も大なる弊害は信仰の為めの信仰といふことである。今日の天理教界を見るに殊に此の弊害の大なるものを見るのである。
彼等−天理教徒−の或る者は今尚ほ信仰をもつて老人の玩具であると云ふ遊離的信仰観を捨てない。又た信仰をもつて現世の栄達未来の冥利を得る目的とせる利己的信仰観を捨てない。更らに甚しきは唯信仰の為めに信仰すると云ふ迷信に囚れて信仰によつて自己の人格を向上せしめ現在の運命を開拓せんと云ふ明かな自覚がない。唯朝夕教会に礼拝に行けば良い。教会に賽銭を上げれば良い。教会に日々寄進をすれば良い。其れ以上の事は余り思はない。
けれども信仰をもつて老人の暇潰しと考へて来た時代は既に過ぎた。言ひ換へれば信仰の為めの信仰を弄んだ時代は既に過ぎた。今日は老若男女を問はず信仰をもつて精神の糧とすべき所謂生命の為めの信仰の時代に到達した。
今日の教会は最早や老人の為めにのみ建てられてはゐない。寧ろ未来に富んだ青年の為めに建てられたのである。其処は生の灯明の燼尽を待つてゐる待夜堂ではなくこれから活動の元気を養ふ生命力の培養所である。これ丈け信仰の意義及び価値に対する観念が変つて来た。これは信仰ばかりではない。芸術でも哲学でも科学でも政治でも芸術の為めの芸術、哲学の為めの哲学、科学の為めの科学、政治の為めの政治といふ遊離的思想より脱して来た。これは人間が人生其者を真面目に考へて来かけた何よりの証拠である。
然るに宗教の中にても人生派の眼目に属する天理教界に於て未だ新しき信仰の本義を自覚せず徒らに信仰の為めの信仰てふ観念に囚れて従来の型に嵌つた無意義の信仰を繰り返しつゝあることは最も嘆ずべき事である。而かも信仰の価値を最も痛感しなければならぬ青年に於いて。
礼拝や祈祷は吾人の求むる第一義的信仰ではない。自治独立の人格を養ひ、確固不抜の信仰に基いて社会的に活動する。これが真の礼拝であり、真の祈祷である。吾人は道徳の為めの道徳、宗教の為めの宗教と云ふ無意味の生活より脱しなければならない。而して明かに生きた現実の生命を把持し、且つ其の生活に徹底しなければならない。形式儀礼は木像や金仏と同じく生命の宮とはならない。唯生きた信仰の連続的活動にのみ生命がある。
吾人は最早や教会に賽銭を上げたり教会の御用をしたりすることだけをもつて人間の本分が尽きてゐると思つてはならない。吾人が真の信仰を試験する所は社会にある。吾人は最早や今日迄吾人の先輩のとつて来た天理教の為めの天理教といふ観念を顛覆しなければならない。而して信仰は生命のための信仰であり、宗教は人生のための宗教であるという新念を樹立しなければならない。之れを云ひ換へれば吾人は最つと内面的に自己の人格を広く深く高く強くして行かなければならぬと共に社会的に有益なる事業として行かなければならぬ。
人心の救済のみが吾人天理教徒の唯一の事業ではない。社会に向つて公利公益を広めて行く事も亦吾人天理教徒の暫時も忘るべからざる事業である。然るに今日の天理教は全然此の方面を全く閑却してゐる。而して内帑の豊富をのみ計つてゐる。これ吾人が極力現在の天理教の方針を否定する所以である。心ある人々の反省熟慮を望む。

隔て心をとれ

　此の道は世界一列兄弟の道である。他人と云ふは更らにない道である。然るに今日の天理教界を見るに其の水臭きことは世界並の人と聊かも変らない。否な或る点に於ては其れ以上である。これ此の方面に於て聊か私見を述べて人類相互の最う一段の親密を希望せんとする所以である。
　身上助けに依つて此の道の信仰に入つた者は云ふ。
　此の道は珍らしい道だ！
と。其れは成る程珍らしい道に違ゐない。けれども身上助けて貰ふだけなら何も天理教に限つたことはない。仏教でも基督教でも現在は知らず既往に於ては随分天理教に劣らぬ珍らしい助けがあつた。天理教が珍らしい道だと云ふのは世界一列が真に一つの家族となる。これが珍らしいのである。
　世界中旅行しても金は一文も要らず何処へ行つても現在肉親の兄弟の内に行つたと同じ様に隔て心なく衣食住を共にし快楽を伴にすることができる。其れが珍らしいのである。其うなつたら監獄もなく、警察もなく、裁判所もなく、軍隊もない。其れが珍らしいのである。今日の如く心得違ゐをしてお詫びをすれば助かる。其れだけでは別に大して珍らしい道でない。隔てない理想の世界を此の地上に実現するのが珍らしいのである。人類が長い間に作つて来た精神的障壁を取り払つて水の如く睦じくなるのが珍らしいのである。今日の如く会長と信徒とは全然封建時代の主従の如く教会と教会、個人と個人との間が世界並も同様に水臭い様では珍らしい道だなぞとは云ひたくも云ひ得ない。
　私は今日の教会制度に対して強ゐて反対するものではないが、又た決して喜こんで賛成するものではない。わけて現在の如く教会と教会と対峙して一歩も譲らざる群雄割拠の態度は私の全然与し得ざる所である。何故なれば此道は全天理教徒が一つの講（交）に結ぶのが本来の目的であつて互ひに分立して融和せざることが本来の目的ではないからである。殊に各教会の信徒が自分の所属教会の会長を絶対者の如く尊崇し、敢て他の教会の会長もしくば信徒に近きもしなければ近けやうともしないのは最も厭ふべき弊風の一つである。
　由来理は一つである。神は一つである。人は皆一つ神の子供である。従つて其の間に何等の隔意のないのが当然である。且つ真理並に真理の実現者たる大人格者は神と同じく天下の共有財産である。其れに接するには教会もしくば詰所の区別のあるべき理由はない筈である。然るに今日の天理教は此の大きな絶対観に依らずして狭少なる差別観によつて喜んで自己の世界を狭窄してゐる。此の点に於て私は教界のコスモポリタンである（元より自分の信徒籍は山名にある。けれども其れは恰度自分の本籍が新潟県にあると同一のものである。私の本籍が新潟県にあるをもつて日本国民の一員として又た人類の一員として権利義務に何等の差別なきが如く、私の信徒籍が山名にあつても天理教の一員としての権利義務には何等の差別はないのである）。
　私の考へに依れば自分は東都支教会の信徒としてよりも山名大教会の信徒として働いた方が大きく山名大教会の信徒として働くよりも天理教徒として働いた方が大きく天理教徒として働くよりも人類として働くをもつて最も大なる労働と信ずる。其れで私は自分が因縁に依つて結合せる自己の家族や日本国民に対すると同一の至情をもつて上級教会に対するは勿論であるが私の最大にして且つ最後の問題は人類的労働者たることである。此の私の考は教会の為めの教会主義者や天理教の為めの天理教主義者の喜ばない所であるかも知らない。けれども私は其う云ふ人達の狭い観方によつて此の一身を処置したくはない。自分の一生を成るべく有意義に且つ最も有価値に生活したい。これが天理教に依つて教へられた信仰の結論である。以上述べたることは現在の教界に大なる隔意のある所よりして一言私の天理教観私の人生観に言及したのであるが教界にはこれと同一の意見を有してゐる人も決して少くはあるまいと思ふ。私は其う云ふ方々により進んで此の道此の社会を最う一段の高さに引き上げられんことを切望して止まざるものである。

　御授訓所を建築せよ

　「順序一つが天の理」と云へど現在の天理教には必ずしも此の順序は重んぜられてゐない。本来の処置より云へば現管長邸を新築する以前に於て御授け所を新築しなければならなかつた。何故なればこれ世界助け万人助けの元の理を亘す霊所であるからである。
　然るに今日の天理教本部は第一に此の神聖なる聖場を建築することを怠つて今日直接無用の他の建築を急いでゐる。これ世界の柱国の宝たるべき元の理を軽しむるものにあらずして何んぞや？　かくの如き不心得より授訓者は減じ天理教は成らん様になる。敢て本部当局者の猛省を促す所以である。

　厠の雑巾を床の間に使ふな

お言葉に曰く、
「床の間を拭くには絹の布巾でふけ。床の間の布巾も便所の雑巾も一所にしては何うもならん」
と。けれども此のお言葉は実際に於て今日の天理教には行はれてゐない。便所に使ふ雑巾を床の間にも使へば床の間に使ふ布巾を便所にも使つてゐる。と云ふのは其の徳なき者に其の位を授け、其の徳あるものに其の位を授けないことを云ふのである。
お言葉に
「上を働き、中を働き、下を働く」
と。又曰く
「荒い事するものあれば細かいことするものもある。又中程するものもある」
と。然るに今日の天理教では上を働くべき者に下を働かせ下を働くべきものに上を働かせ、荒い事をする者に細かい事をさせ、細かい事をする者に荒い事をさせやうとしてゐる。其処に無理があり、不自然が生ずる。
之れを実際の効果より観察するに本部員に拭き掃除をさせたり土持ちをさせた処が何にもならない。力はあつても徳のないものに本部員を勤めよと云つた所で勤まるものではない。本部員には本部員相応の掃き掃除拭き掃除土持ち日の寄進がある。其れは眼に見えない精神的労働である。
凡て物には其れ／＼の特徴がある。座敷の襖をもつて来て台所の障子に嵌め換へた所で似合ふものではない。座敷は座敷台所は台所で襖なり障子なり立てゝ居て始めて似合ふのである。神の殿の道具である人間も亦其うである。其の中には精神的労働に適する者もあれば肉体の労働に適する者もある。其の何れも無くて叶はぬものであるけれども其の使用する所は各々異つてゐる。これ適材を適所に用ゆることの最も大切なる所以である。
畢竟吾人は自己に適当した方面に於て神に日の寄進をすれば良いのである。甲が土持ちをするから乙も土持ちをしなければならぬ。丙が便所の掃除をするから乙も便所の掃除をしなければ天理教徒でない様に考へるのは大なる誤解である。唯自己の最も長所と信ずる方面に向つて全力を注いで活動する。これより大なる日の寄進はない。此の意味に於て床の間の布巾も便所の雑巾も混用してゐる現在の天理教界の悪傾向を一掃しなければならない。

別席の講話を改良せよ

天理教が未だ創成の草叢の中を歩いてゐた時代のお話は多く泥海時代のお話であつた。然るに其の後年月の経過するにつれて漸次元の話は捨てられて今日は僅かに日の寄進とか互ひ助け合ひとか云ふ眼前の効能のある教理ばかりを聞かせてゐる。これは時代がせゝこましくなつて来た為めであるかは知らないが兎に角元なる屋敷元なる地場に帰つて来て屋敷の因縁も聞かず人間の成因も知らず、教祖の人格も聞かず其れで骨折つて拵へた旅費を費して帰つて行く信徒に気の毒でならない。これでは帰つて来た者も真に心の底から助かることができない計りでない。浅薄な現場計りの理を取り次いでゐる本部員自身も助からない。
抑々今日の本部員は此の宗教は何う云ふ宗教であると思つてゐるのであらう。此の宗教は根の根より説き起して真底より心の入れかへ世のたてかへを行はんとする宗教である。其れを元の話を省いて枝葉計りの話を取り次いでゐるのは根を切つて枝先計りの花を持たせて帰す様なものである。サア誰が始めて此の根を切つた？　真柱が切つたか？　本部員が切つたか？　よも神が許して切らせはすまい。これ私の第一に聞かんとする所である。
之れを要するに国々先々の枝葉に段々生色を失つて来たのは本部からして此ういふ仕業をしてゐるからである。考へても見よ。根を断ち切つて枝葉が生長するか？　凡て根なくして何事も成立つものはない。其の大切な根を忘れ元の理を断ち切つて末の理が活く事が出来るか何うか？　苟も此の理に想到せずして天理教の盛大を希望するも其は活花に立派な果実を熟せしめんとする妄想のみ。もし真に天理教を盛大ならしめんとせば根の理をつなげ。これを置いて天理教の盛大は断じて期し得べからざる者である。
今日の如く理の台である貸物借物の理をロクに説かず説いても狭義な解釈を下して居る様のことでは何うもならん。広義の貸物借物の理を説かなければならん。広義の貸物借物の理と云へば人間始め世界始めの原始的事実は勿論のこと其れを引き起した宇宙の第一原因即ち神に迄遡らなければならぬ。然らざれば貸物借物の理を真に説いたとは云へない。貸物借物の理が実地に説けない様では本部員などと大きな顔をすることはできない。
第二は教祖の人格と歴史とである。これは人間始め世界始めの事実と共に最も大切なる事柄であるにも係らず、何うしたものか今日の本部員では余り説く者はない。こんな事で

は神と教祖の大慈悲も天理教の真価も決して理解することはできない。これ私が最つと教祖の人格と歴史との細説を希望する所以である。
　第三は天理教発達の歴史である。凡そ人間として我が家の歴史を知らないものはない。然るに今日の天理教は国々先々から帰つて来た家族に向つて我が家　　天理教　　の歴史を説いたことがない。説いても其れは本部員自身の断片的の経歴であつて系統的組織的のものではない。こんなことでは段々理が薄くなつて行く計りである。これ神をして殆んど口癖の様に
「元を忘れるな／＼」
と注意せしめた所以である。
　以上述べたる三大事実は是非本部員によつて説かれなければならず又た説いて貰はなければならないものである。もし別席の講話に臨まれる本部員諸氏にして此処に留意して下されたらば神と信徒の満足は如何ばかりであらう。敢て遠くの国々先々から可愛い子供を連れて帰られる神の為め又た一つは遠くの国々先々から遥々帰つて来る兄弟姉妹の為めにかくは別席の担任者諸氏に一言の希望を述ぶる次第である。

　結果主義を排す

　今日の天理教界に瀰漫せる弊風の中目的と原因とを第二にして方便と結果とを重んずるは確かに弊風の一つである。
　けれども物は良き原因なくして良き結果を生ずるものではない。又た誤れる目的より正しき方便は生れるものではない。之れを教界の事実に就いて観察するに助け一條の精神なくして教会の繁栄を希望するは其の最大の弊風でいる。而かも事実は滔々として此の誤れる結果主義に依つて風靡せられつゝある。けれども善良なる結果には必らず善良なる原因が存するのである。徒らに誤れる目的の下に正しき結果を結ばうとするは其れは恰かも東京に行かんとして西京に旅するの類である。
　吾人は先づ正しき目的を確立することが第一である。第二に正しき方便を選択することが大切である。其れに依つて結ぶ所の結果は第三の問題である。之れを道より云へば助け一條の精神は正しき目的である。助け一條の事業は正しき方便である。其れに依つて得る所の結果即ち人心の救済は第三である。教会の盛大の如きは第四の問題である。これは何人も云ふべくして行ひ得ないのである。敢て実地の改善を望む。

　偶像崇拝を止めよ

　今日の天理教界には上級者と云へば神の如く敬ひ下級者と云へば奴隷の如く卑める弊風がある。これは智識の発達しない野蕃時代には免かるべからざる現象であるとは云へ又た決して喜こぶべき現象ではないのである。其れは因縁によつて上級者たり下級者たる間には自らなる人格的価値の相異があるかも知らない。けれども人間と人間との間には太刀山と赤ン坊の如く隔つてゐるものではない。其の太刀山と雖も亦世界に於ける絶対強者と断言することはできない。然るに今日の天理教では一人の太刀山を以つて天下の絶対強者とする計りでなく其の次々に位する者も亦絶対強者として崇拝する弊風がある。
　けれども実際に於て人間に絶対強者と云ふ者もなければ完人と云ふ者もない。其の偉いとか偉くないとか云ふことは比較的の言葉である。成る程教祖は神に次ぐの偉人であつた。又御本席は教祖に次ぐの偉人であつた。けれども其の他の者に至つては吾人と五十歩百歩の間にあるのである。中には年限に依つて上級者たり下級者たる者も少くはない。然るに其の人／＼の真の人格的価値を鑑別せずして唯形式上の上級者なるが故に之れを神と同一に崇拝せしめんとするが如きは蒙も亦甚しと云わなければならない。要は唯其の人の人格的価値にある。
　神が御本席を批評した言葉に
「錦襴に絹着せたやうなもの」
とあり其の他の人々を評して
「木綿糸が一筋混じつても本錦襴とは云へん。偽の錦襴」
と云ふお言葉があるが純金の仏と云ふものは少ないものである。世人は奈良の大仏の大に迷つてはならない。寧ろ善光寺の阿弥陀如来こそ物質的価値に於て優つてゐることを記憶しなければならない。
　然るに皮相の文明の流行と共に世人は漸次テンプラを喜ぶ様になつた。敢て其の実質の銅たると鉛たるとを問はないのである。此の弊害は確かに天理教にも侵入してゐる。これに上級者に対する盲目なる絶対服従主義が混合して天理教の偶像崇拝の弊風を形造くつた。

けれども記せよ吾人の崇拝すべき唯一の雛型は神の出した雛型　　教祖　　よりないことを。其の他のものは偶像にあらざれば偽の錦襴のみ。敢て吾人の絶対価値を附与するに足らないものである。これ私が偶像によつて自ら欺き又た自ら欺かれざらんことを忠告する所以である。

独立した人格を養成せよ

イプセン曰く
「世界に於ける最大の強者は独立した人間其の者である」
と。
凡そ人間として最も憐れむべき者の随一は独立した人格を有せざる人々である。彼等は朝には甲の意見に従ひ夕には乙の意見に従ふ。其の間の確固不抜の定見がない。言ひ換へれば独立した人格がない。現在の天理教界を見るに殊に此の感を深くするのである。即ち或る者が天理教は絶対服従主義の宗教だと云へば其う思ひ、又た或る者が天理教は推譲主義の宗教であると云へば其う思ふ。敢て其の主義の妥当なるや否やを吟味する余裕がない。これ彼等に一定の見識を具備せざる何よりの証拠である。
近頃私が私の信仰を天下に告白するや或る大教会の役員は
「大平君の信仰は熱烈ではあるが西洋かぶれをしてゐるから彼の発行して居る新宗教は読まないが良い」
とか
「大平君は道の破壊者だから彼の発行して居る雑誌は青年に読ますなな」
とか云つて部下を説いて廻つてゐることを聞いた。
抑々真理に東西の区別はない。其れを知らずしてない一人であるが人が西洋カブレをして居ると云へば其う思ひ、人が道の破壊者だと云へば又其う思ふ（此の人々は私の雑誌を理解する読書力のない人である）其の定見なき事真に憐むに耐へて居る。
凡そ確固不抜の独立した人格は確固不抜の独立した定見に添ふて立つものである。然るに此の定見なき人間が如何にして独立せる人格を有し得る者ぞ！
けれども天理教に対して確固たる定見を欠く人、否な人生に対して一定の定見を欠く人は此の大教会の役員ばかりではない。今日の天理教徒の殆んど大部分は此くの如き無定見者、非人格者ならざるはない。
彼等は上長の命令と云へば其れが是が非でも行ふ。敢て其の善悪正邪を区別する余裕がない。これが天理教の真の信仰だと云ふ。けれども多くの人の中には上長者の意志の明かな誤謬である事を知つてゐる。而かも其の忌諱に触れんことを恐れて表に服従の形式を装ふて居る。凡そ天下に何が愚だと云つてかくの如き愚劣の信仰はないのである。又た何が偽善だと云つてかくの如き大なる偽善はないのである。而かも滔々としてかくの如き迷謬の極に堕して居るのは天理教徒も亦迷へりと云はざるを得ない。
由来此の道は人格なき生きた人形を造る道ではない。却つて自己以外の何者にも迷はせられざる独立した大人格を造るの道である。然るに其の大人格を養成する道にありながら誤れる自我の消滅者の妄説に迷つて或は眼前に横る自分自身の利害に支配せられて何よりも貴き人格を無視して省みない。もしかくの如き無定見をもつて天理教の真の信仰なりと云ふ者あらんか私は寧ろ天理教徒たることを欲しないのである。
私の信仰は自己を支配する者は厭く迄自己なりとの信念である。神は明かに各人に独立独歩せしむる為めに両脚を与へてゐる。豈に精神にのみ独立独歩すべき脚を与へざらんや。否吾人の自由意志は即ち此の為めに与へられたるものである。
お言葉に曰く
「何時の何時迄も親の厄介になる者は何んならん。子供三歳迄は手放しは出来ん。神一條の道も何時／＼迄も尋ねて居ては何んならん」
と。人は三歳にして生理的に独立し、三十歳にして物質的並に精神的に独立し得る様に造られてある。然るに何時迄経つても生れながらの不具者の如く他人の意志によつて自己を律せんとするは何んたる愚ぞ！　私はかくの如き後天的の不具者を造る天理教をもつて婦人の姦通を恐れて其の足部を狭窄する支那人と同じく天然自然の大罪人たることを宣告するのである。
見よ今日の本部に一人たりとも独立した人格の所有者があるか？　あれば彼等は其れをもつて異端邪教徒なりとして之れを教外に排斥しつゝある。愚も亦此処に至つて極まれりと云ふべし。
抑々此の道は乞食奴隷の道ではない。又た阿諛諂巧者の道でもない。真に独立した人格と独立した思想とをもつて三歳の小児が立つて歩むが如く歩むことを教ゆる道である。然るにそを曲解して何時迄も他人の意志に依らざれば活動し得ざる精神的の不具者をつくら

んとするは抑々何んぞや？　もしかくの如きが真の天理教々理なりとせば天理教は婦人の纏足を行ふ支那人と同一の陋習を全人類の精神上に行はんとするものである。
　けれども自分自身の学んだ人生学の結論に依れば人間は其れ自身が目的であつて他の何者の方便でもないと云ふことである。これを云ひ更へれば独立した人格を養成すること其れが生の第一義であるといふことである。
　お言葉に曰く
「人に手伝ふて貰はんならん様では何もならん。人を手伝ふといふ力をもつてくれ」
と。我が身のことは我が身で処理して累を他人に及ぼさゞるのみならず、進んで積極的に他人を助くる。これが天理教である。自分一身の処理を他人に任かせて其の機械となることは神の教ゆる所ではない。
　然るに今日の天理教徒は人を訪問する時自分で脱いだ下駄は自分で直すとか如何なる物質上の困難に逢ふも他人の助力を仰がないと云ふことには多少の神経が働いてゐるけれども未だ自分一身の行動は自分一己の意志をもつて律すると云ふ所謂独立した人格の養成に向つて其の主力を注ぐことを忘れてゐる。為めに教会もしくば本部の命令と云へば理が非でも盲従してゐる。これ私をして一般天理教徒に向つて
　独立した人格を養成せよ。
と叫ばざるを得ざらしむる所以である。

　甘露台の建設を急げ

　以上述べたることは今日の天理教界に横はる弊風の一般に過ぎないが幸ひに天理教界に於て此の失礼の呈言を納れて現在の弊風を一掃しもつて一日も早く此の世界に理想の世界を実現せらるゝならば神の幸福は如何ばかりぞや？　又た人類の幸福は如何ばかりぞや？
　終りに私自身の幸福は如何ばかりぞや？
　私はこれを思ひ彼を思ふ毎に晏然として一日を空費することはできない。夜眠る時は盗人の覗はざる安全の家を思ひ、朝起きる時は同胞相睦ぶ平和の世界を思ふ。飯を食ふ時も歩む時も語る時も入浴する時も曾て理想の世界を思はざる時といふては一瞬間もない。これ吾が使命か？　使命にあらずして私の衷心の要求である。
　実に人間として此の世界に生れ唯一瞬間の真の平和を味ふことなくして神の膝元に帰つて行くことの如何ばかり苦しきことの極みぞや？　此の我が苦衷を解せざる人は私の今日迄の事業を徒らに破壊を行つて快とする自負心の所産なりと信じてゐる。誤解も亦甚しと云ふべし。
　他人は知らず少くとも自分一人丈けは自己を改造し自己の住む家庭、国家、教界を清めることは遊戯的の事業でもなければ自負心の所産でもない。明かに自己の貴重の生命を託する安全にして快感に満ちたる世界たらしめんとする真面目なる要求に出て居る。もし其れでなかつたら何も眼前の幸福を犠牲にして迄も天理教界の革命を叫ぶ必要はないのである。
　然るに多くの人達は自分自身にとつても亦真面目なる事業を恰かも対岸の火事の様に思つてゐる。けれども此の世界に於ける凡てのことはこれ人事にあらずして我が事である。見よ唯一個の墺太利の皇太子の惨禍より世界を震動せる大戦争は起つたではないか。而して一見殆んど何の関係もなさ相な日本迄が戦乱に参与しあまつさへ経済界の不振に苦しめられてゐる。もし世界が一個の有機体でなかつたならば此の不幸は見なかつたであらう。これによつてこれを見ても天理教界の乱脈は自分にとつて決して他事ではない。全然足薄氷を踏み朽木を渡るの感があるのである。
　愛する兄弟姉妹よ！　眼を開いて卿等の生活しつゝある現在の世界と其の箒たる天理教界とを見よ！　而して其れが卿等にとつて永遠の平和と満足とを与へつゝあるか否かを考へよ。卿等は必らずや其の然らざることを発見するであらう。其の時こそ卿等は今迄私の事業を嘲笑し、罵詈し、冷評し、憤激してゐた口を閉ぢて真面目に自己の周囲の大掃除に取り掛るであらう。私は其の時を待つてゐる。
　愛する兄弟姉妹よ！　吾等同胞が一日の猶予は一日丈け長く此の人類共通の牢獄生活を永引かすることを思へ。これは現実の社会生活の譬喩であるがもし吾人々類が自己心中に建築しつゝある監獄、警察、裁判所、軍隊を破壊したならば此の世界には明日をも待たずして此等の不快の建築物は消滅するであらう。私は実に其の世界を待つてゐる。卿等も其の世界の実現を待たない謂れはない。然るに先鋒者たるべき天理教徒よりして進んで自己の世界を清掃せんとせざるは抑々何んぞや？
　時は迫つてゐる。甘露台は一日も早く建設せられざるべからず。神の為めに、人類の為めに、又自分自身の為めに敢て天理教上下の覚醒と努力とを望む。　　（大正四年九月二十八日）

聖壇に立ちて（三）

大平　良平

十三。

天理教創立の発端は天保九年十月二十三日である。当時の大和国山辺郡庄屋敷村の富豪中山家には一大奇蹟が顕はれた。平常健康の主婦ミキ子は腰が痛むと云つて炬燵に入り夫善兵衛も亦眼が痛むと云つて休んでゐた。然るに恰度麦蒔きに出て居た長男の秀司が足が痛いと云つて帰つて来た。かくの如くにして中山家には一家忽ち三人の病人が生じたのである。中山家では人を丹波市の医者に走せて診察させたが少しの効験もなかつた。其れで当時地方の有名なる修験者中野市兵衛を頼んで祈祷に取りかゝつた。然るに何時も市兵衛の加持台に立つ勾田村のおソヨと云ふ女が不在であつた為め臨時ミキ子を立てゝ加持台とした。

然るに市兵衛が降神の祈祷に取り掛るとミキ子の態度は俄然として一変し、持つて居た幣束の震が止まるよと思ふと一柱の神が降られた。市兵衛降つた神を尋ると

「我は天の将軍である。入り込みの身の因縁屋敷の因縁に依つて瞬刻限をもつて世界一列助けに天降つた。皆が心得」

三軍を叱咤する様な凛然とした威厳に満ちた声が四辺の寂寞を破つた。市兵衛

「天の将軍とは何方様で御座いますか？」

「天の将軍は日月じや。根の神実の神である。入り込みの身の因縁屋敷の因縁に依つて瞬刻限をもつて天降つた。……

よつてミキの身体は神の社に貰ひ受ける。此の家此の屋敷親子諸共神が貰ひ受ける。異存はあるまいな？」

善兵衛も余り突然の出来事なので返答に窮して居ると神は短刀直入に善兵衛に向つて突き込んで来た。

「今云ふたこと違背はあるまい。今云ふたこと不承知あるまい。主人返答は何んとある？」

其れで善兵衛も一家の事情を述べて神の退散を乞ふと

「神の命に背くとあらば家は断絶」

と云ふ最後の宣告に接した。其の後入り代り立ち代つて神の退散を願つても

「我は退散する様な神でない」

と云つて容易に認容がない。其う此うして神と人との間に押問答が続くこと前後二昼夜其の間ミキは水一滴飯一粒口にしない。其の様子を見ると眼をみはり、息をはづませて如何にも苦し相であつた。其れで止むを得ず二十六日の朝に善兵衛より承諾の旨を申上げると神は

「きつと詐はあるまいな？」

と念を押して善兵衛より

「詐りは御座りません」

との返答を聴いて

「満足／＼」

との二語を残して退散した。其れと同時にミキ子は夢より醒めた如く元の意識に帰つた。これが新神道の開通記念日である。

十四、

天理教が過去の既成宗教と異る最大の特色は十億万年以前に於て無い人間無い世界を創造した根本的事実を基礎として甘露台の建設を終局の理想とせる神の所謂根の教、実の教、だめの教、止めの教たる点にある。

此ういふ点に於て天理教は吾人々類に三つの新しき智識を呈供してゐる。其の三つの新しき智識とは、

一、過去に対する新しき智識である

二、現在に対する新しき智識である

三、未来に対する新しき智識である

第一の過去に対する新しき智識とは天保九年十月二十六日を過去に遡ること九億九万九千九百九十九年の昔所謂月日を以つて具象化せられてある根の神、元の神、実の神なる国床立尊重足尊の男女二柱の神が月読尊国狭土尊大戸辺尊雲読尊惶根尊大食天尊の六柱の神を助手とし、伊邪那岐、伊邪那美の二尊を肉の父親母親として現今の大和三島（旧庄屋敷

村）天理教本部甘露台霊地に於て九億九万九千九百九十九人の人間を作つたと云ふ原始的事実と人類発達史とである。
　第二の現在に対する新しき智識とは貸物借物の理、因縁の理、日の寄進の理、互ひ助け合ひの理、足納の理、発散の理、一手一つの理、順序の理の如き天理教の主要の教理に含まれたる新人生観である。
　第三の未来に対する新しき智識とは貪婪、吝嗇、邪愛、憎悪、怨恨、憤怒、強欲、高慢の根絶せられたる不和なく、争闘なく、疾病なく、不幸なき地場　　大和三島　　を中心とせる世界一家の平和の一大家庭の実現に対する予言である。
　此の三者中第一は天理教の基礎である。第二は天理教の骨子である。第三は天理教の屋根である。此の三大要素が相寄つて天理教と云ふ世界最後の宗教を形造つてゐるのである。

十五、

　古来人類発達の過程に於て時代の精神的糧となり心の道となつて来た宗教は大小無数の数に達してゐる。けれども其の中の一つとして天理教の如く過去に遡ること遠く、現在を掘ること深く更らに未来を尋ねること遥かなる宗教はない。これは我田引水の過褒にあらずして真に公平なる客観的批評である。

十六、

　天理教が新たに与へた人生の根本的定義は貸物借物の理である。貸物借物の理とは人間の肉体及び肉体の生活に必要なる物質も世界も万物も父母兄弟妻子眷族も神が生産的労働をなさしめんが為めに人間に貸し与へたるものにして之れを神より云へば貸物、人間より云へば借物、精神一つが我が物と云ふのである。
　蓋し過去並に現在の人間が貪婪、吝嗇、邪愛、憎悪、怨恨、憤怒、強欲、高慢の邪悪邪念に依つて此の楽しかるべき世界を怨府地獄と化して来たのは人間の肉体も物質も世界も万物も神の貸物たることを知らないからである。もし将来此の神の与へた人生の根本的定義が全人類の精神中に深く広く高く強く徹底普及して行つたならば我利我欲の念を出すものはなくなるであらう。其の時こそ真に甘露台の実現せられた時である。

十七、

　之れを釈迦に見るに断苦の世界に入るには現世の執着と物質的欲望乃至肉身の愛情を滅するにありと説けども未だ此の肉体も肉体の生活に必要なる物質も世界も乃至父母兄弟妻子眷族も神の貸物であるとは説かなかつた。之れを基督に見るに
「汝等天空の鳥を見よ稼ぐことなく穡ることをせず倉に蓄ふることなし。然るに汝等の天の父は之を養ひ給へり。汝等之よりも大に勝るゝ者ならずや。汝等のうち誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延得んや。又た何故に衣のことを思ひ煩ふや。野の百合花は如何にして長つかを思へ労めず紡がざるなり。我汝等に告げんソロモンの栄華の極の時だにも其装この花の一に及ざりき。神は今日野に在りて明日爐に投入らるゝ草をもかくは装はせ給へば況して汝等をや。嗚呼信仰薄き者よ。然れば何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひ煩ふ勿れ。此みな異邦人の求る者なり汝等の天の父は凡て此等のものゝ無くてならぬことを知り給へり。汝等先づ神の国と其の義とを求めよ然らば此等のものは皆汝等に加へらるべし、此の故に明日の事を思ひ煩ふ勿れ。明日は明日の事を思ひ煩へ一日の苦労は一日にて足れり」と迄進んでゐるが未だ「貸物借物の理」といふ如き組織的、系統的、具体的の独立した形体を附与するまでに至らなかつた。此処に天理教の新しき権威がある。

天理教教育顧問広池博士に与ふる書

Ｒ　Ｏ　生

広池博士足下
　貴方は良く天理教は絶対服従主義の宗教だと云はれますが而して其れが殆んど博士の天理教を説明する常套語に成つてゐるが私の考に依れば天理教は日の寄進主義の宗教であると云ひたいものです。これは私の新造語でも何んでもない教祖伝来の天理教術語ですがつまり貴方の主張せられる絶対服従主義は天理教の日の寄進主義の消極的方面に過ぎないのです。従つて貴方の絶対服従主義には天理教の日の寄進主義の積極的方面言ひ換へれば積極的の日の寄進主義が逸せられてあるのであります。これは貴方が日の寄進主義と絶対服

従主義を分けて別々にお考へになる為めであると思ひます。何故なればもし日の寄進主義に消極的の日の寄進主義と積極的日の寄進主義との存することを明かに自覚されてゐたならば殊更ら絶対服従主義と云ふが如き消極的主義に依つて天理教全体の主義を蔽はふとはなさらない筈であります。けれども私が此処に申上たいことは其の様な立ち入つた教理上の議論ではありません。貴方の現在主張せられつゝある絶対服従主義の内容に就いて一言私の卑見を述べさせて戴きたいのです。

貴方は今年六月の道の友誌上で天理教信仰の内容一班と題して絶対服従の事に説き及んでゐられるが其の中に貴方は此う云ふ事を云つてゐられる。

「つまり、天理教は平和光栄の黄金世界を建設する目的にして、此目的を達する為め心埃を攘ひ、常業に服事して所謂「里の仙人」の心にて努力して行くと云ふ信仰であつて、若し正義を害し、平和を紊り信仰に反対し吾人の前途を妨ぐるものあるにしても、決して之と闘ひ争ふ事をばせぬのである。そこで外部の人の妨害に対しては勿論の事であるが、内容に於ける上下同僚の人の妨害に対しても、決して之と争ふ事はせぬ筈である。たとへば一同のものは東行とに称し自分の見る所は西行を可とする場合には真実慈悲の心救済の心にて教理の上より一応再応之を説明して一同に警告する事は勿論のことであれど、併し一同が自分の云ふ事を聴き入れずして東行を欲するに於ては、これ自分の不徳の致す所因縁の存する所として神様に懺悔し、却て自分がかやうにして困難するに依つて自分の因縁が切れ、此苦労によつて自己の境遇を擺脱する事を得べしとして之を喜び、一同の尾に従ふて東行するのである。然る時自分の至誠が行き届けば、一同の者が眼を醒す事あるべく若し眼を醒さねば一同のものと与に運命を共にすべしとして依然として人々の尾に従ひ、東行をつゞくるのである」

と。多くの無定見の所謂天理教徒は此ういふ誤れるドグマに従つて目的なき旅行を続けてゐます。

けれども此の道は貴方の御考へになる様な多数決によつて自己の行動を決定する様な道ではありません。唯神一條に従つて自己の行動を決定するのです。これが天理教の本当の信仰であります。

此の道は人に仕へる道ではありません。神に仕へる道であります。人に従ふ道ではありません。神に従ふ道であります。神に対する絶対服従。理に対する絶対服従。これより外に絶対服従はありません。あれば其れは盲従となり面従となるのです。本当の絶対服従と云ふ事は唯神と理に絶対服従することにあるのです。人に絶対服従することではありません。もし此の私の考を疑ふならば教祖の一生を最う一度御研究なされば訳ります。もし教祖が家族親族の意見に絶対服従して神即ち理に対する絶対服従を欠いたならば此の道は立ちは致しません。神即ち理に対する絶対服従を徹頭徹尾お貫きになつたから此の道が立つたのであります。此処をよく思案して戴きたい。

それから貴方は

「しかし一同が自分の云う事を聴き入れずして東行を欲するに於ては、これ自分の不徳の致す所因縁の存する所として神様に懺悔し、却て自分がかようにして困難するに依つて自分の因縁が切れ、此苦労によつて自己の境遇を擺脱する事を得べしとして之を喜び、一同の尾に従うて東行するのである」

と云はれてゐるが之れに依つて見ると失礼ながら貴方には因縁を切る道に在りながら因縁を切る方法が解つてゐないのです。

此の道は自分の周囲の人々の悪因縁を断除して行く道であつて周囲の人々と共に悪因縁を積んで行く道ではありません。其れを貴方のお考への様に因縁だ／＼と云つて何時迄も因縁に支配せられて積極的に其れを切断することをしなかつたならば何時迄たつても因縁の切れる事はありません。又た其の次々に積み重ねて行く因縁に依つて苦労した所が何の役にも立たないのです。元より因縁の切れ相な事もありません。

広池博士

貴方は天理教といふものを大変誤解せられてゐます。此の道は一名一人の信心であつて他人とは何等の関係はないのであります。神の御供をするといふ考があれば其れで良いのであります。人が随いて来やうが来まいが其んな事は各自の因縁で自分の作つた因縁ではありません。自分は唯一日も早く自分の因縁を切る事を努めねばなりません。此処をよく考へて頂きたい。

次に貴方は天理教は推譲主義だと云ふ様な事をよく云はれるがこれも絶対服従主義と同じく天理教の互立主義相互扶助主義の消極的方面を語つてゐるに過ぎないのです。天理教の本当の精神は譲ると云ふが如き消極的倫理的のものではなく助ける（与へる）と云ふ積極的宗教的のものであります。其の中には積極的自由意志が活躍して居ります。此の正面の理を忘れない様に願ひます。

此う云ふ倫理上の術語は往々天理教の広汎の内容を限定しやすいものであるから以後此

う云ふ外来の文字を用ゐずに教祖伝来の用語に依つて天理教々理を説明して戴きたい。
　其れから博士は教祖を讃美して教祖一生の事業は「人を愛するとか世に貢献すると云ふやうな抱負の上から先方の為めに尽すと云ふやうなことでなく」「自分の因縁の自覚から人を愛し世に尽させて頂き以て我過去の悪因縁を断除させていたゞくといふ丈の事」であつたから偉いと云ふ様に解せられてゐるがこれは教祖を誤解し天理教其者を誤解するの最も大なるものと思ふ。
　抑も「人を助けて我が身助かる」といふ教理の我が身助かるといふことは結果であつて原因ではない。原因は何処迄も人を助けると云ふ精神にならなければならぬ。然るに博士の考の如く教祖一生の事業は唯自分の一身が助かりたい為めになされたもので人を愛するとか世に貢献するとか云ふ抱負の上から先方の為めに尽したのでないから偉いと云つては教祖五十年の事業は教祖の利己心を満足させる方便に過ぎなかつたことになる。其れでは助け一條の道と云つた本来の意義は全然破壊せられて助かり一條の道となつて了ふ。これ等も博士が天理教の精神を未だ全然理解してゐられない結果であらうと思はれる。
　其の他お地場の理等に対しても甚だ軽るい理解さへないのは博士の為めに否な天理教の為めに惜しむのである。
　其れから博士の近業十九世紀に於ける最も偉大なる婦人の事業。これについては世人は何う云ふ風に考へ博士自身は何う云ふ風にお考へになつてゐるか知らぬが私自身の観察に依れば天理教近来の愚著であると考へるのである。何故なれば従来の天理教書類は貸物借物の理とか八ツ埃の理とか云ふものを断片的に素直に書いて居るから深刻の解釈がない代りに立ち入つた誤解も少ない。然るに此の著になると博士の浅薄なる半可通の智識が加はつてゐるから真の天理教とは全然趣きの違つたものとなつてゐる。これは博士にとつて大いに反省して貰はねばならぬ点である。
　然らば如何なる点が真の天理教と異つてゐるか？　これを一々指摘したならば数限りもない事であるから複雑を避けて云はないが天理教の如何なる宗教であるかと云ふことについて最少し正確なる理解が欲しかつた。殊に甚しいのは天理教は静的の宗教だとか破壊なしの建設教だとか云ふことを得々として述べられてゐる所を見ると全く情なくなつて了ふ。更らに情無く思ふことは近代思潮の基調である個人主義や自我実現主義等に対する一通りの智識さへなくして漫然として天理教を批評し去る其の不熱心なる態度である。私は東洋法制史に依つて高められたる博士の声名がこの著に依つて下落せられざらんことを博士の為めに惜しむものである。
　其れから博士の為めに最う一言云つて置きたいことは奥谷文智氏の近業天理教観の序文に表はれたる高慢と無智と軽薄なる態度を捨てられんことである。
　失礼ながら博士は今日迄天理教の為めに何れだけ偉大なる貢献をなされたかは知らないけれども
「天理教祖を以て無学の一婦人と為し、未信の人之を軽蔑し、信者亦然りとして怪まざりし時に当り予明治四十二年始めて天理教の真信仰の門に入り、教祖の慈悲、寛大、自己、反省の偉徳と其の教理とに驚嘆し、教祖を以て、其徳は以て百世の師と為して余りあるべく、其智は世界の大思想家として尊崇するに足るものと為し、一日本部に参拝し、同中学校講堂に於て之を公表せしかば、爾来内外皆始めて其偉大なる教祖の真価値を確認し、教祖を以て単に無学の一婦人など云ふものなきに至れるが如し」
と云ふが如きは余りに此の道の先輩諸氏を無視したる暴言にはあらざるか？　次に博士は「尋で、予は天理教の教理が教祖の発せられたるドグマにあらずしてレベレーションの響なることを唱道し、而して其所謂レベレーションに向つて、之に科学的研究を加へ、古来東西の学者の神秘的視せるレベレーションに対して、更に学問的価値を附与し、広く之を識者に問ひしに、頗る賛成を表せらるゝもの多く、世界に於て始めて、レベレーションなるものゝ如何なるものなるかの問題に就き、学者をして真面目に考慮を費せしむるの端緒を啓きたるを覚ゆ」と云はれてゐるが私は寡聞にして博士が未だ天啓の科学的研究を発表せられたるを聞かない。もし欧文にても物せられたるものあらばお教へを乞ふ。
　これは問題は別であるが博士の為めに云つて置きたい。成る程博士が多忙の身であることは私も略知つてゐる。けれども他人の著書を世に紹介するに内容を通読せずして序文を書くといふことは無責任極つてゐるではありませんか？
　以上申上たることは謙遜、慈悲、柔和、従順、親切を説かれる貴方の言葉とは余りに矛盾してゐるではありますまいか？　此の言行不一致の所に貴方の天理教観はあるのかも知れませんが私共無智の信者より見れば余りに奇怪に感じますから一言記して以つて博士の高教を仰ぐ次第であります。

（大正四年十月六日）

天理教婦人会傍聴記

Ｒ　Ｏ　生

何時か一度本部の婦人会の講話を聴きたいものだとは兼てより私の抱いてゐた希望であつた。其れが恰度九月の例会に叶へられたのである。

二十三日私は一人の兄弟と共に我が姉妹の修道場に入つた。其の時は年若き妹の講話中であつた。其れがすむと入り代り立ち代り五六名の姉妹が表れて講話をしたが私は其れに向つて一々の批評をしやうとは思はない。さればと云つて彼女等の講話に我を忘れて聴き惚れる事が出来たかと云ふに中々其うではない。其れで婦人会員一般に対して私の希望を聊か述べて置きたいと思ふ。

総じて当日の婦人会員の講話はこれが一つの真の自分の実地経験より流れ出た生きた教理だと思ふものを聴くことは出来なかつた。何の姉妹も何の姉妹も型に嵌つた様な教理の外形を繰り返してゐる計りで内容と云ふものが少つともない。これは彼等に道の上の実地の苦労といふものをしたことのない何よりの証拠である。而かも五十六十の年をした者迄二十や二十四五の若いものと同じ様に千篇一律の教理を繰り返して責任を濁してゐるとは実際情ない話である。

生きた教理と云ふものは他人の説いた教理や他人の所から書いて貰つた原稿の中にあるものではない。自分自身の実地の経験にあるのである。其れをチツトモ考へてゐない。といふのは教理の実行によつて自己の人格を向上しやうと云ふ真面目なる希望も努力もないからである。苟も真の天理教信仰に従つて自己の人格的向上発展を計りつゝあるものの言葉は一日の台所生活を語つても尚ほ且つ其の中に多大の教訓が存するものである。婦人の精神修養は此処になくてはならぬ。徒らに貸物借物の理や八ツの埃を述べた所で其れが自分の血と肉と涙になつてゐないから幾ら人が変つても与へる所の感は千篇一律である。

其れで私は本部の婦人会員に云つて置く此処は御整ひの黒紋附や繻珍の丸帯や赤いリボンや香の高い香水や高価の白粉や他人の作つた原稿を見たり聞かしたりする所ではないといふことを。精神の研ぎ合ひ磨き合ひの為めに神の開いたものである。

虚偽、虚飾、虚栄、虚名にあこがれつゝある本部の婦人よ。女優や芸者の様に着飾つた仮面を脱して心静かに天理教立教の由来と婦人会成立の天啓とを熟考せよ。御身等は決して其の中より義理や体裁の為めに婦人会に出席せよといふ神のお言葉を発見しないであらう。

「奇麗な屋敷神の屋敷に居てみつくりていては鏡屋敷とは云はん。濁り屋敷とや土とや云はん」

私は十有余年の昔に婦人会の為めに下された言葉が恰度今日の婦人会を指されたるものゝ如く感じつゝ家に帰つた。

（大正四年十月六日）

地場より（三）

Ｒ　Ｏ　生

私はこれ迄の唯一の残念は生前に於て教祖御親に拝顔しなかつたことである。けれども今日　　有象界より無象界に迄進んだ　　は其うでない。今日の唯一の残念は教祖の本体　　精神、思想　　を捕捉し得ざることである。

今日の社会を見るに言葉に対するシンセリテーを感じて居る人は少い。行為に対するシンセリテーを感じて居る人は更らに少い。霊魂に対するシンセリテーを感じて居る人は更らに／＼少ない。

今日の天理教徒は自分等の世界は今日の天理教界に限つて居る様に思つて居る。井中の蛙よ大海を知れ。

私は自分一身の私欲の為めに此の世に一日も長く居やうとは思はない。私が一日も長く生きんことを望むは全く神と人との為めである。

人は私の仕事を見て物好か道楽の為めだと思つて居る。けれども自分に取つては其んな暢気なことを考へてゐる余裕はない。

如何にして自己の霊魂を救うべきか？

之れが私の寝ても醒めても忘れんとして忘れ得ざる所の問題である。私の霊魂は此の問題

の為めに苦み私の神経は此の問題の為めに苛立つて居る。其れを閑人は見て思ひ／＼の批評をして居る。
　けれども自分には其んな閑人の批評を聞いて居る余裕がない。又た閑人の閑事業を見てゐる余裕がない。私が彼等の事業に向つて眼も呉れないのは之れが為めである。
　人よ！　一大事因縁は卿等の身に迫つて居る。けれども誰も其れを知らない。而して死んで墓場に携へて行くことのできない名誉とか財産とか地位とか権力とかを求めて居る。（其れは私にとつては全くの死物である。）けれども記せよ。唯一つのなくて叶はぬ者は霊魂の救済剤であることを。之れさへ攫めば他に何も要しないのである。
　けれども霊魂の悩みを持たない人の眼から見たならば今日の私は慌て者にも見えるだらう。無鉄砲にも見えるだらう。気狂にも見えるだらう。剛情にも見えるだらう。阿房にも見えるだらう。又時としては臆病に、時としては意地悪く、時としては執念深く全然女の様にも見えるであらう。けれども自分にとつて懸け掛のない唯一無二の重宝を亡くしまいと思へば何んな態をしたつて保護しなければならぬ。其れが訳らない人間は何を云つたつて訳らない人間だ。

　私は地場に来て服従に二種の区別のあることを実見した。二種の服従とは即ち関東の服従と関西の服従である。
　関東の服従は心従である。関西の服従は面従である。
　今日の天理教は即ち此の面従家の天理教である。

　人間は人の前に善い人間にならうと思つたら最う最後である。それは私だつて人間である。人から善い人間だと云はれゝば嬉しいし、悪い人間だと云はれゝば悲しい其れでも自分には何うしても自分の持つて生れた唯一つの特権　　自由　　を失つて迄も美名を人の前に買ふ気にはなれない。其れで当分の内一一生一は世間の憎れ者になつて暮らす心算だ。恰度野犬の様に彼方で追はれ此地で打たれて厄介物視せられても。

　私の今日迄経た苦き経験に依れば人を頼むなと云ふことである。人を頼んだならば必らず其の人は苦き失敗の毒杯を呑まなければならぬ。

　自己は天下唯一人の救世主である。自己は天下唯一人の保護者である。偉人とは即ち自己に信頼して他人に信頼せざる人である。

　人間は大抵の場合自分自身の法則に従はずして他人の法則に従つて生活して居る。彼は自分自身に食欲がなくても三度が三度の習慣に従つて飯を食つて居る。彼は自分自身に渇望がなくても他人の勧めるが侭に茶を呑み菓子を食つて居る。之れは悪い事だ。
　私は天下の有情無情に告げて置く。
　私がもし一杯の水を乞ふたならば否と云つて拒まざらんことを。
　私がもし一滴の湯を拒んだならば強つてといつて勧めざらんことを。
　何故なれば私は私自身を内より支配する一つの法則を持つてゐるからである。其の法則とは即ち
　飢えざるに食ふ勿れ。渇せざるに飲むなかれ。疲れざるに憩ふ勿れ。眠からざるに眠る勿れ。衣は寒を防げば足り、居は身を置けば足る。
といふことである。之れを云ひ換へれば自己の生くべき道は自分自身の内にあつて外にないといふことである。外にあるものは車馬運搬の道路のみ。霊魂の道ではない。

　世人は真の偉人（真人）とは如何なるものか知らないで居る。此の無知は王城に仏陀と再見した父王の失望となつた。けれども私は云ふのである。
　真の偉人とは無色透明其の者である。
と。次に其の性はと問はゞ曰く
　女性
と答へる。何故なれば真善美と真善美を生命とする人其者とは女性であるからである。見よ釈尊は当時印度に於ける代表的の美男であつた。ナザレの詩人も亦其うである。
　私は基督教界の革命を絶叫したルーテルが徒らに乱を喜ぶ野蕃人だとは思はぬ。彼には蓋し止まんとして止むことのできない中心の声があつたのである。彼は唯其の声に従つて行動した迄である。況んや其の性閑雅にして平和を愛すること他人に越えたりと云ふに於てをや。

　自分は最う今日から間食は止めだ。間食は之れを例へて云へば正妻のあるのに外の女に

心を寄せる様なものだ。彼は百年の寿命に唯一度も正食の真味を知らないでしう。而して絶えず胃腸を患つて居る。これが彼等の上に降る自然の制裁（罰）である。

天理教の教師はよく「低い心」（謙遜）になれ／＼と云ふ。其れが殆んど口癖の様になつて居る。けれども彼等は人は何が故に謙遜ならざるべからざるかと云ふ自覚がない。其の筈や彼等は唯律法と律法の守るべきを知つて律法を生んだ本体の何者であるかを知らないからである。
真の謙遜は絶対者の前に立つた相対者の感ずる自己否定の感情である。真の謙遜は理想我の前に立つた現実我の感ずる自己否定の感情である。真の謙遜は神の前に立つた人の感ずる自己否定の感情である。
其れは唯胸に大望の熱火を抱いて居る者にのみ感ぜらる。何故なれば未だ完成せざる自己を既に完成したりと考へ、未だ充実せざる生命を既に充実したりと考へ、未だ徹底せざる精神を既に徹底したりと考へつゝある者には自己を向上せしむべきより以上の要求がないからである。之れを称して高慢とも云ひ増上慢とも云ふ。生長の止りである。

人よ。水の如く清かれ。火の如く熱かれ。風の如く疾かれ火水風は神と予言者の魂である。

凡そ敏感性の者は苦痛を感ずること常人に倍すると共に其の快楽を感ずることも常人に倍してゐる。天才とは即ち此の敏感性其の者に外ならないのである。

正直者にとつて最も大なる苦痛は虚偽を云ふことである。不正直者にとつて最も大なる苦痛は正直にすることである。

私も色々と考へて見たが凡そ快楽の中人を楽まする快楽より大なる快楽はない様である。人を喜ばせる喜悦より大なる喜悦はない様である。人を満足させるより大なる満足はない様である。吾人の真の快楽、真の喜悦、真の満足は何うしても一度他人の血管をめぐつて来たものでなければならぬ。

昔の宗教には「なこその関」と云ふ一種の関所があつた。其の中には一切の不浄は入れなかつた。けれども今日の宗教界には其んな関所はない様である。殊に今日の天理教界を見るに昔ならば関止めを喰はせられる様な無鑑札者（非真実者）が随分乱入して居る。其の状態を絵に書いたら恰度黒人種が欧羅巴に進入した時の様である。至る所に雑婚が行はれる。其の結果は白人ともつかず黒人ともつかぬ雑種が生ずる。今の天理教界が即ち之れである。其処には神の子とも獣の子ともつかぬ多くの半獣半神が出来て来て居る。

私は考へて居る。人間の目的は有名の人になることではないと。又考へて居る。人間の目的は富裕の人になることではないと。凡て墓場に携へ得ざる物に対しては其れが如何に吾人に取つて貴重なものであつても執着してはならない。吾等は唯自分が彼の世から持つて来た唯一つのものを大切にして行けば良いのである。
ポーロ曰く
吾等は何物をも携へて来らず又何物をも携へ行くこと能はず
と。私は彼の言葉の真理なることを知つて居る。事実吾等が母の胎内より此の世界に来る時何者を携へ来りしや？　其は唯一つの霊魂と唯一つの肉体であるであらう。けれども凡ての人の彼の世から着て来た天の羽衣は其の実自分のものではなく神が下界の生活をなさしむべく貸し与へたものである。吾人の永久の不動産は唯霊魂あるのみ。然るに愚かなる人間は此世より携へ去ることを禁ぜられたる禁制品を盗み去らんとして、自分にとつてなくて叶はぬ唯一つの宝を忘れて行く。此の意味に於てアダムイブの物語は決して吾人の生活を離れた架空の作り話ではない。

私は女性には天才がないと云ふワイニンゲルの説に組みすることは出来ない何故なれば女性には男性の企て及ばざる或るものがあること尚ほ男性には女性の企て及ばざる或る者が存するからである。

社会の誤解は苦るしい。家庭の誤解は一層苦るしい。されど自分自身の誤解は苦痛を脱して恐怖の域に入つて居る。

世間一般の人は道徳生活とか宗教生活とかいへば非常に窮屈な生活の様に考へて居る。

けれども之れを道徳生活宗教生活に馴れたものより見れば世間の放縦の生活程窮屈な生活はない。従つて宗教生活と非宗教的生活と何れが自由であり、何れが不自由であると云ふことは一概に云へない。要は各人の主観にあるのである。例へば品行の方正なる者にとつては不品行をするは身をきらるゝよりもつらく、品行の方正ならざる者にとつては品行を方正にして居ることは何よりつらいといふ様な者である。

生活を追はざるものは生活に追はる。

一切衆生の中最も度し難きものは生欲の大なるものにあらずして寧ろ生欲の小なる者である。

私は暇ある毎に教祖の墓側に於て一時間もしくば二時間を冥想に耽るを常とする。彼処は私の精神を磨く道場である。

私はこれまで多くの人に逢つたが未だ真に捨て身の呼吸を会得した人に逢はない。人間らしいとか人間らしくないとか云ふのは此の捨身の呼吸を自得してからの事だ。

凡て下らない人間程下らないことを喋りたがるものである。真に精神の奥底に大なるシンセンテーを有する者は決して多弁をする者ではない。又暴行をする者ではない。何故なれば彼は自己の思想並に行に対する大なる責任を自覚して居るからである。孔子が郷党より物言ふこと能はざるが如しと迄酷評せられたのが之れは為めである。（簡潔は智恵の表象なり）

凡て凡人は人間を外から見、偉人は人間を内から見る。

形を超越して世界を観ざれば決して宇宙人生の真相を見ることはできない。

人生は要領である。其は例へば道路の如し。一度逸すれば決して目的地に達することはできない。

信仰に二つの門があることは尚ほ恋に二つの門がある様なものである。
世間の人達は自分達が結婚後に於て始めて恋を知つた経験よりして恋は肉に始まつて霊に終ると信じて居る。肉体の苦痛（身上）より信仰に入れる者も亦其うである。彼等が常に精神的煩悶より入れる者に対して一種の侮蔑の眼を以つて見んとして居る。此の誤れる観方は最も天理教に多いのである。近日某本部員と偽称して私を批評した本部の青年の如き其の代表者の一人である。
彼は智識より入れる信仰の階段を三つに分つた。其の第一段は神は理なりと云ふことである。第二は神は力なりと云ふことである。第三は神は慈悲なりと云ふことである。大平君は即ち未だ信仰の第一段に属す。将来神は力なりと云ふことを知り更らに神は慈悲なりと云ふことを知るに至つて必らずや信仰は一変すべしと云ふのである。
けれども私の信仰の経路は此の偽本部員の想像と全然相反して居る。即ち私の信仰は釈尊の信仰と同じく大慈大悲の一念に生れて正覚正知の結願に了つて居る。即ち評者の所謂神は慈悲（愛）なりは私の信仰の第一期であつた。神は力（信）なりは私の信仰の第二期であつた。神は理（義）なりは私の信仰の第三期である。之れは私の（聖壇に立ちて）と題する未定稿の中に発表した所である。
凡て自己の狭き経験と他人の学説の上に立つて他人を批評する学者の云ふ所は之れである。

広い世界を狭むるのも我である。狭い世界を広むるのも我である。大宇宙をもつて我が住家とす。其処に真の自由の我がある。

理想の世界が来たならば世界至る所の村々家々に於て今日の肉親の兄弟姉妹を迎ふるが如く未知の兄弟を迎ふるに至るであらう。又た人は何処の果てに於ても我家の如く宿り我が食堂、我が箪笥、吾が金庫の如く自由に振舞ふに至るであらう。其れでなければ真に理想の世界が到達したとは云へない。

身体は塵埃にまみれよ。精神は塵埃にまみるゝなかれ。これが私の信仰である。

人は名利の奴隷となるべく生れて来たものではない。名利こそ人間の奴隷として生れて来たのである。

世間には随分本部へ入り込んで甘い地位に有り附かうと云ふさもしい慮見を抱いて居る人間が沢山ある。けれども私は云ふのである。此処　　清浄な神の屋敷　　は其んな泥足の入る所ではないと、真の人間として生きんと欲せば天下至る所同一（なる神の屋敷）である。豈に本部にのみ一人日が照らさんや。

私は世界は我が物なることを（親の物は子の物なり）知るが故に敢て我が家我が屋敷の狭隘なるを感じない。私は万有は我が物なることを知るが故に敢て財宝の欠乏を感じない。私は人類が我が物なることを知るが故に敢て家族の僅少を感じない。私は小なる自己に附属した田地田畑家屋敷家族を失ふとも此の大なる所有を失ふことを欲しない。

世間には形を飾ることを知らない女はない。けれども心を飾ることを知つてゐる女は少ない。

嫉妬よ。嫉妬。汝程醜き醜婦は絶えて此世にあるべしと思はれぬ。其は窈窕たる美人をして賤婦の下に立たしむるものである。

凡そ人間の生涯中歓楽と悲哀とを同時に感ずるものは無実の罪に座した時である。其人の外部は妖雲に包まれ其の人の内部は白日に照らさる。

人生をして真に楽しきものたらしめざるは神と人との罪にあらずして実に自分自身の罪である。

昔の男は女を売つて生きて居た。今の女は男を売つて生きて居る。

凡そ世に何が一番私にとつて嫌悪すべきものであるかと云へば其れは他人を喜ばせると云ふ心の微塵もない利己主義者である。彼には自分の欲望の為めには骨肉の親もないのである。全然獣物だ。而かも此の美しい獣物は紳士や淑女の仮面を冠つて人間界に跋扈してゐるのだ。

悪に敵する勿れとは基督の教へた教訓であつた。けれども私は信ずるのである。桑を摘むことに熱中せる女の眼には王者の行列も眼に入らざるものであることを。人間にとつて唯一の仕事は自己の世界の開拓に熱中することである。

世間の人は私がこんなこと（新宗教の発行）をして居るのを他人の為めに井戸を掘つて居るかの様に信じて居る人がある。けれども自分自身になくて叶はぬ生命の井戸を掘ることを忘れて他人の為めに井戸を掘ることは私の曾てせざりしことである。唯彼等が其う云ふ誤解を招くのは私が井戸を掘るために掘り上げた土を見たのである。

人は自分の食は自分自身の力に依つて得なければならぬものである。父祖の功業に依頼するものはこれ人生の負債を重ねつゝある者である。

教祖の心中には如何にして諸国より帰つて来た子供を満足させて帰すべきかと云ふことより外何物もなかつた。けれども今日の教祖の後継者の心中には如何にして諸国より帰つて来た子供が自己を満足させて行くべきかと云ふより外何者もない。教祖と其の後継者との相違は之れ位のものである。

私は大体今日の講演会の主旨に賛成しない。何故なれば彼等は全然之れを以つて天理教の広告か人気取りの様に思つて居るからである。真理（生命のパン）と云ふものは其んなに手軽に取扱はるべきものではない。

天理教は不平を没却する道だと云ふ。如何にも理想より云へば其れに違ゐない。けれども現実の世界には其れを許さない。何故なれば現実の世界には多くの欠陥があるからである。吾人は一鍬／＼其欠陥を埋めて行くことを力めなければならない。もし然らずして如何なる欠陥があるとも不平を成さゞるなかれと云ふは如何に空腹なりとも空腹を感ずるなかれと云ふと蓋し同一の矛盾である。

朝に満腹せるものも夕に空腹を感ずるは真実である。吾人は其の時其の時に襲ひ来る空腹を満足して行かなければならぬ。此の点に於て私は空腹を空腹なりと云ひ不平を不平なりと云ふは何も不合理なことだとは思はぬ。
偉相な顔をして其の実偉くも何んともない人間のすることなすことは凡て此の様なものである。

私は赤ん坊である。少くとも赤ん坊と同一の知覚と感覚とを持つて居るのである。従つて痛ければ痛いと云ひ痒ゆければ痒いと云ふ。これが人間にとつて唯一の真生活である。

世間では千代萩の鶴千代の様に「腹が空いてもひもじうない」と力みかへつて居るのを武士道だとか何んとか云つて偉ら相に思つて居る。もし武士道と云ふものが其んな虚偽な二重生活を教へるものならば世に武士道程厭ふべきものはない。而かも世間の標準道徳と云ふものが凡て皆此の口と心の二重生活を標準として立てられたものである。此の点に於て私は世俗道徳の大なる呪詛者である。
私は天真爛漫直情直行の生活を置いて如何なる生活をもしたいとは思はぬ。之れ私の世と相納れざる最大原因である。

世人は巨万の富は一厘より成り大望は密慮より成ることを忘れて居る。
凡て精神的に将た物質的に大なる成功を博する者の精神には常人の考へ及ばざる緻密性の隠れて働いて居ることを知らなければならぬ。

私は梅に桜を望まず、桜に梅を望まず、潅木に喬木たるを望まず、喬木に潅木たるを望まない。総て万物に与へられたる先天的の運命を楽むものである。

人は自分が五尺の人間であり人も亦五尺の人間である所より彼我共に同一の人間だと思つて居る。けれども人間の大小は背丈や重量できまるものではない。其の精神の大小に依つて定まるものである。

同じ銭箱の中に入つて等しく銭と云はれて居ても金は金であり銀は銀であり銅は銅でありニツケルはニツケルである。

宗教は人情の包み紙である。けれども今日の宗教は人情の断ち物である。

凡そ呪はるべき者の中にて最も大なる者は人情の破壊者である。わけて親子の愛情の破壊者である。

詩人の詩人たる、宗教家の宗教家たる真面目は人情の保護者たる点にある。然るに今日の宗教家を見るに人情の保護者ではない。却つて人情の破壊者である。

世間の人間はチツト何物にも囚はれざる自由の信仰を発表すると直ぐ彼は西洋カブレだと云ふ。真理には東西の区別はない。其んな区別を立つて居る中は未だ本当に真理が解らないからだ。

.

二個の要求

大平　良平

私の精神には常に二つの強い要求が強烈に働いてゐる。其の二つの要求とは自己の内部を絶対に清くすることゝ自己の外部を絶対に清くすることとである。

自己の外部を絶対に清くしたいといふことは私の住んでゐる家庭、私の住んでゐる国家、私の住んでゐる社会、私の住んでゐる世界を絶対に清くしたいと云ふことである。私の内部を絶対に清くしたいといふことは霊魂其の者の浄化である。

私が何故自己の周囲を清掃せずには居られないかと云へば私の天性の潔癖性は到底自分の住む周囲の世界を不潔にして置くに耐へないからである。私が何故自己の内部を浄化せずに居られないかと云へば私の生の要求は自己の唯一無二の生命を銹金の様に腐食せしむるに耐へないからである。此の二つの要求の下に私は絶えず自己の内外の掃除に向つて努力してゐる。けれども幾ら掃いても／＼積もり易きものはそぼ降る雪と人の心の塵である。これを何うして払ひ退けるか？　これは私の最も苦心をする所である。

世間の人間は懺悔は罪を清めると云つて無暗に懺悔をする。羅馬の醜業婦になると六日間の罪を日曜に懺悔して次の月曜から又罪を犯して行く。其れで自分の罪が許されたと信じてゐるから仕合せである。

私はこれ迄いろ／＼の人の色々の自叙伝だの懺悔録だのといふのを読んだ。而して其の得た所の結論は此うである。

社会的に有名な人程詐を吐く事が巧みである
といふことである。

彼等は決して本当の事を書かない。書いても自分にとつて都合の悪いことはなる丈け書かない。何故なれば彼等は何うしても自己の醜悪を包むに包まれぬからこれを社会の埃捨場に払ひ落さうとするのでなく自分は正直な人間である自分は偉大な人間であると云ふことを世間の人に信じさせやうが為めに書くのであるからである。

人はルーソーは偉大だと云ふ。けれども私の眼から見れば彼の懺悔録は砂糖湯を呑むも同じ事である。人はトルストイは深刻だと云ふ。けれども私の眼から見れば彼の我が懺悔は胡椒を入れた空缶も同じ事である。胡椒の貼紙はあつても其の実胡椒は入つてゐない。少し眼の明いた人間であつたら彼の我が懺悔が世間を憚りながら良い加減の事をさも真実らしく書いた真赤な偽物であることを観破する。

此の他誰の自叙伝！誰々の懺悔録と数へ立てれば数限りもない事であるが一つとして神の眼をもつて自己を正視し神の白刃を奮るつて鋭き自己解剖をやつて居るものはない。大抵の人間は懺悔といふことを世間並の宗教的儀式の様に考へてゐる。其の懺悔の動機には自己の醜悪に対する耐へ難き憎悪と真善美に対する熱病患者的の渇望がない。殊に懺悔といふ事を学校の宣誓式程にも思つて居ない基督教国の人間に於て其うである。

彼等は子供の時から懺悔といふ事は何人もなさねばならぬ儀式の様に教育せられて居る。其の為めに大きくなつて真に心の底より懺悔をして新生活に入らうといふ精神的転換期に於ても矢張り万人のなす事といふ子供の時の習慣が附き纏つて離れないのである。

けれども私の考へてゐる懺悔の意義及び価値は彼等の考とは違つてゐる。私は懺悔と云ふものは万人がなさねばならぬ宗教的儀式であるとは信じない。又た世間の者に自分は正直者であるといふ信仰を呼び起さす為めの技術であるとは信じない。自己の人格的発展の径路に於て自己を内面的に深く広く高く掘つて行くに従つて厭が応でも掘り出さなければならぬ自己の霊魂の塵埃を外に捨てるの謂であると考へる。これは自分といふ者を何処迄も掘つて行き最後に正真正銘の自己を掘り当てやうといふ根本的要求と根本的努力のないものは訳らないことである。

大抵の人間は自己の内面を一鍬二鍬掘つて其れで止めて了ふ。其う云ふ人間から見れば自己といふものは非常に美しいもの貴いものゝやうに見える。而して自分以外の者わけて生命の泉を何処迄も掘つて行かうとする人間の人格が如何にも醜悪の様に見える。けれども一旦自身が鍬を取つて自己の世界を開拓して行くと今迄知らなかつた自己の長所を発見すると共に今迄知らなかつた自己の欠点を発見する。而かも自己を広く深く高く掘つて行けば行く程自己の長所と自己の欠点とを深く広く発見して行くのである。而して終ひには自分の手で自分の内から掘り出した塵埃を置く所がなくなる。否置くに耐へなくなる。恰度人間の体内に排泄物の溜つた時耐へ様と思つても耐へられなくなつて遂には所嫌はず排泄する様なものである。其れと同一の排泄作用が心理的に行はれるのである。即ち自己の摂取した精神的食物が精神界を循環して居る内に既に廃物になつた思想が結合して外界に排泄せらるゝのである。之れが即ち懺悔である。従つて懺悔は義理や体裁や信仰上の儀式の為めにするものではなく全く人間心理の自然の結果である。此う云ふ理由から私は懺悔の為めの懺悔を絶対に排斥する。

自己を内観した時直ちに感ずる自己の醜悪偽！　自己を掘つて行けば行く程大きくなつて来る醜悪偽其れを包むに包み兼ね忘れるに忘れかねて外に向つて吐き出す。これが我が懺悔である。其の間の心理にはこれをもつて世の見せしめにしやうとか又たこれをもつて世の物笑草として其れで自分の罪を軽くしやうとか、又た此の懺悔の功徳に依つて身上事上を助けて貰ひたいとか云ふ考は微塵もない。唯精神的に救はれたいのだ。精神的の悩みを忘れたいのだ！　自己の塵埃を外に掃き出して了ひたいのだ！　而して大空の晴れ亘つた様な澄み切つた様な心になりたいのだ。而して奇麗な世界に棲みたいのだ。これが唯一の私の希望であり、其れが唯一の私の求むる救である。

実家にある妻に送る書

大平　良平

此の間は綿入を丹精して送つて下されて有難う御座いました。着物のこともトント忘れて行李の中にあるものとのみ思つてゐた所であつた。

此の間のお父様よりの手紙によれば寿賀子が風邪で大変苦しんだといふことであるが其の後何うなつたか。此ういふ事は御身より私に告げて呉れて良い事と思ひます。兎に角看病で急がしくもあつたであらうからと同情もし感謝もしてゐる。

其れから此の間の話だが其れは此方へ来れば内に居る様な太平楽なことは云つて居られないことはわかつてゐる。第一お襁褓を洗ふ盥からしてないのだから。台所道具もユキヒラが一つ鍋が一つ其れに私の茶碗があるだけです（私は十一月の一日から自炊を始めた。教会へゐて別段の用もせずに教会の飯を戴くのは余りに勿体ないから）。勿論御身が来た所で此れ以上に殖やしたくない。殖やすと云つても茶碗と箸丈けである。（箸も忘れて荷の中へ入つてゐた）勿論御身には此う云ふ簡略な生活にはとても耐へられないと云ふかも知らないが私は御身の因縁の為めに之れに満足せよと云ふのである。私も其うであるが殊に御身の如うに何不自由なく育つた者には此う云ふ貧苦の生活を一度通つて見なければ神の恩も親の恩も本当には訳らない。人間は一生楽をして通る計りが能ではない。一生に一度はトヾの詰まりと云ふ貧苦のドン底迄味つて見なければ人の同情と云ふものも訳らなければ我が身の光と云ふものも出ない。勿論神と親との大恩を送る心には尚更なれない。

私は此の頃つく／＼苦労と云ふものをして見たくてならない。殊にお道の上で長年の間苦労丹精をした人の前に出る時は一層其れを感ずる。人間は一生の中に一度苦労をして置かなければ人と同様に交際ができない。何うしても気恥敷くて一手に交際ができない。真に苦労をした人の一言一行には汲めども尽きない味がある。其の人格の奥には一生苦労と云ふものをした事のない人間に見ることの出来ない底光りがある。これが徳と云ふものです。一寸見ると紳士や淑女と云ふものは奇麗だが見て居る中に倦きが来ます。倦きが来ると云ふのは其の人の精神内容に何等の深味がないからです。其れで私はつく　思ふのです。私共が内より充分の手当も貰へず（実は貰ひたくない。今迄受けた大恩で身に余つてゐる）社会から相当の地位も与へられず（実は与へられたくない。自分の理想のために）否が応でもお道に働かなければ満足が出来ない様になると云ふのはよく／＼お道に因縁があるからであると。けれども御身は其うは思ふまい。御身は私が欲が無いから呉れると云ふ財産を断り意気地がないから来て呉れと云ふ地位を謝した様に思ふであらうが私は其うは思はない。私が先祖伝来の財産を継ぐことを拒み方便としての職業を求めることを断つたのは其れによつて胸の道を忽にすることを恐れたからである。

けれども私は財産を弟に譲つたといふ丈けでは満足しない。尚ほ其の上現在私の分になつてゐる幾分かの分け目をも断つて全然先祖の財産と縁を断ち切りたいと思つてゐる。而して来年からは喰つても喰はんでも構はんから神の世帯をもたせて戴く心算である。

此う云つたなら御身は嘸無責任なことを云ふ妻や子供を何うすると云ふであらう。けれども凡そ生あれば食あり食は銘々各々の魂の因縁に依つて神が下さるのである。従つて私と一手にゐて喰はれない様になつたからとて何も私の罪ではない。御身の魂の徳の故である。其の証拠にたとひ私の所を出て行つて外へ行つたとても天の与へが変らなければ矢張り同じ様の夫をもち同じ様の苦痛を嘗めなければならないからである。

先日の手紙によると御身は何うしても天理教を信ずる気にはなれないし且つ私と一手にゐては生活の望みがないから寿賀子を引き取つて独立して行く心算であると云ふことを云つて来たがこれはよく／＼考へて見なければならぬことである。

勿論人間には各々精神的過去と云ふものがあるから現在の所信ずる気になれないと云ふなら無理もない話であるが其れを一生信ずる気になれないと云ふのは人間として云へぬことである。

且つ御身の天理教観が元来深い研究になつたものでなく在来の無智と迷信とに富んだ無学の信徒の築き上げた今日の天理教の形式丈けを見て其の信仰を拒むのであるから御身の

云ふ所をもつて直ちに天理教信仰の絶対否定と見るべからざるや云ふ迄もない。けれども真の天理教と云ふものは御身を始め世間一般の人達の考へて居る様に人生にとつて有害無益の宗教ではない。否な寧ろ将来の人類は此の道に依らざれば生活することの出来ない程肝要の宗教である。

私は御身に訊くが御身が何うしても天理教を信ずることはできないと云ふことは何う云ふ点を根拠として云へるか？　御身は未だ天理教といふものを知らないが天理とは天然自然の法則（天然自然の法則とは神の意志のことである）を指して云ふのである。天にあつて日月星辰が其の軌道を誤ることなく運行するのも地にあつては万物が四時を違ゐないのも皆これ天然自然の法則が働いてゐるからである。云ひ換へれば神の意志が働いてゐるからである。此の天然自然の法則が人間界に適用せられた時其処に人道となつて生きた姿となつて表はれるのである。御身は天理教を信ずる気になれないと云ふが人間として人道を踏まないのは人間ではない位のことは訳つてゐるであらう。私は御身が人道の拒否者であることを信じたくない。而かも事実は明かに人道の拒否者である。御身は其れを自覚してゐない。けれども御身並に世間の人達の考へてゐること行つてゐることは明かに人道的思想、人道的生活ではない。私は此処に其の例を挙げることを喜ばないのであるが御身の誤れる人生観を反省せしむる為めに一例を挙ぐれば御身の主張するところの此の上私と同居してゐては生活の望がないから離縁すると云ふのは世間一般の利害観念であつて明かに人道的観念ではないのである。

此う云ふ言葉は今始めての事ではない。何か少し私と意見の衝突した場合に必らず口癖の様に連発した言葉であるが御身は他日必らずや人は利害関係に依つて集合するものではなくて真心をもつて集合するものであることを悟る時が来るであらう。殊に夫婦の間に於て最も其うである。其れは云ふ迄もなく自分は不肖の夫には違ゐないが其れにも拘らず七年も連れ添ふた今日尚ほ自身の妻よりかくの如き水臭き言葉を聞かねばならぬといふことは私の衷心恥ぢ且つ悲しむところのことである。

けれども御身が私を捨てゝ去るにしても何も酒や女の上の失敗で感情を悪るくして去るのでないから聊か心の澄む所もあるがさて此の世智辛き世に子供を抱へて行かうとする御身には何れだけの自信と何れだけの実力とがあつてのことか。これは第一に私の訊かんとするところのことである。勿論独立して行くと云ふ以上は親兄弟より一文の補助は受けない（補助を受けて行く様なら独立ではない）のであらうから何れ何か自分に適当した職業を求めて自活の道を立てゝ行く心算であらうが其うした結果果してより以上な幸福を得ることができるか何うか疑問である。此の問題は今日迄屡々二人の間に起つた問題であるから今度云つて来たのは余程の覚悟の上のことであらうが御身は他日一本の柱は一本にて立たない。と云ふこと二本の柱は一本の柱の二倍の力を有することを学ぶであらう。殊に心配なのは生れてから今日迄全然親がゝりで自分には重い物一つ持つたことのない様のお嬢様育ちが一時の思ひ違ゐから生涯取り返しのつかぬ様な一杯に陥りはしないかと云ふことを危ぶのである。

けれども之れに就ては何等かの考へもあらうから御身の自由意志に立ち入つて干渉はしないが現在の御身は昔の単純なる若き妻ではなく責任ある母であると云ふことも考へて見なければならない。子供は法律から云つても信仰から云つてももし許すべくば愛情より云つても其うなれば御身に任せることはできない。私が引き取つて養育するのであるが御身は其れに依つて生ずる子供に対する責任問題を何う考へてゐるか？　何れ其うなれば寿賀子といふものは父無し子か母無し子にならなければならない。たとひ何つ地になるにしても子供を片親児とすることは御身の当然負はなければならぬ重大な責任である。

其れも私が放蕩無頼で取るに足らないと云ふ人間であるならば兎に角明かに人間としての自覚をもち且つ其の自覚に基いて来た信仰生活を続けて行かうと云ふものに対して現在其の者と別れることが一時物質的の苦痛より免かれ得るの理由をもつて其の者を捨てゝ去ることは今日並に今日迄の道徳は是認しても御身の軽蔑しつゝある天理教道徳は明かに之れを否定するのである。

けれども私はこれについては深くは云ふまい。何故なれば人間は何人も先天的に自由意志を与えられてゐるからである。唯残つてゐるのは子供の問題であるが勿論其うなれば子供は御身の信仰に依つて育つることを拒む。彼女は私の信仰即ち天理教の信仰に依つて教育する。何故なればこれ神と子供と私自身に対する義務であるからである。

けれども御身もよく／＼考へて見たが良い。御身は子供が出来た為めに絵が画れないことを大層不平に持つている様であるが御身にとつて子供以上の絵が画けるか何うか。私は否と答へたい。凡そ婦人として一人の子供を理想的に育て上げることは千枚の名画を画くよりも確かに偉大なる功業をなしたものである。もし御身が之れに向つて否と答へるならば私は問ふのである。

御身は自分の絵の破壊せられた時自分の子供の死んだ時よりも大なる悲の涙を注ぐ程の

名画を画いたか又画きつゝあるか更らに画くことが出来るか
と。もし出来ると云ふ自信があつたならば子供を捨てゝ絵を画け。もし出来ないならばカンバスに絵を画き得ざる不幸を捨てゝ生きた子供に御身の理想画を画け。これより大なる絵画はないのである。出来るならば彼女に教祖の精神を画いたならば私は実に御身をもつて日本第一の女流画家として賞讃するであらう。
　なお以上の問題に関して云ひたいことは色々あるが事三者に関する重大問題なればよく／＼御熟考の上確答を乞ふ。
　次に申上たきことは其うして何時迄も親の厄介になつてゐることである。其れは誠に有難いことには相違ないが恩を重ねれば重ねる程先きになつて難儀をしなければならない。其れで御身さへ不自由を忍ぶ気になれば三度の飯（私は今二食である）を一度に減らしても御身と貧しい生活を続けて行かうと思ふ。勿論これも御身の今の様な考ではとても駄目である。真に神人の恩を自覚して其の報恩の為めに不自由を忍んで此の道をつき通すと云ふ覚悟がなければ駄目である。其う云ふ覚悟がつけば貧苦は無上の快楽となるのである。（私は今其の境にある）
　凡て順境に育つた人間の弱点は自ら進んで貧苦に打つからうとせず却つて貧苦を避けて姑息の安心を求めようとすることである。此う云ふ消極的の態度を取つて居るものは益々貧苦に追はれる計りである。けれども一歩進んで根限り力限り貧苦を追ふ時は却つて貧苦の方で逃げるものである。此の呼吸が訳らない中は人生の真味はとても訳らない。御身の現在の態度は未だ前者の消極的態度である。其れが最う一歩進んで積極的態度に出て来る様でなければ何を云つても駄目だ。此う云ふ一人は前進せんとし一人は後進せんとして互ひに五分／＼の力をもつて葛藤を続けて居る吾等夫婦は確かに不幸な夫婦である。此の二人の態度の相異の為めに私の現在出しつゝある力は人八倍の力である。と云ふのは私が単に二倍の力を出すのみにては吾等夫婦は元の位置に居なければならない。四倍の力を出すことに依つて漸く他の夫婦と同列になる。更に進んで他の夫婦よりも一歩先んじやうとするには何うしても人八倍の力を出さなければならない。これが現在私の負ふてゐる負担である。私は此の負担をもつて聊かも重いものとは思はない。けれども御身よ確かと記憶して置いてくれ
　此の道はつけてもつけないでも良い道ではないといふことを
　更らに記憶して置いてくれ
　此の社会は改造しも改造しないでも良い社会ではないといふことを
　更らに記憶して置いてくれ
　現実の自我は更生しても更生しないでも良い自己ではないといふことを
　凡て此等のものは早晩此の世界此の自我の上に来なければならぬ革命である。今日の非天理教徒は其れを一歩づゝ延ばして居るに過ぎない。けれども
　倫言一度出づれば汗の如し
神の聖意は云ふまでもない。此の道は人の反対位で引つ込む道ではない。反対すればする程顕れて来る道である。又た此の道は避けやうと思つて避け通すことの出来る道ではない。旧道を歩き詰めたら何うしても此の新道に出なければならぬ道である。従つて早く此の道を歩むものは其れだけ早く目的地に達する訳である。
　妻よ。私はこれを思ひ彼れを思つて如何に御身のもどかしき態度に焦慮しつゝあるか知らない。けれども御身は此の世界の革命の声此の自己の革命の声を避けつゝ一時の隠れ家を求めて逃げ迷つてゐる。臆病なる妻よ何故夫と手を携えて他の勇しき夫婦方と共に人生の戦場に立たうとはしないか？　私はこれを妻なるが故に勧むるにあらずして人なるが故に勧むるのである。
　私は御身の所謂「自分の家」なるものをもちたくない。私の家は世界である。世界至る所に立てる家屋である。其処は皆自分の家である。
　妻よ。御身の考は未だ狭い。最つと広い深い高い強い大きい心になつてくれ。夢々さもしい慮見を出して此の広い世界を狭むる様なことはしてはくれるな。吾等はこれ神の愛児であるぞよ。これを特に御身の為めに云つて置くのである。
　もし御身に将来此の道と共に運命を共にする確い決心がついたならば一度此の人類の元なる親里に帰つて来たが良い。神は必らず御身に新しき信仰と新しき智識と新しき勇気とを授けるであらう。もし不幸にして御身が孤独の迷路に入らんか私は蔭ながら御身の為めに神明の加護を祈るであらう。これが私の御身に対する唯一の言葉である。
　これは序だから云つて置くが聞けば寿賀子には牛乳を一合づゝ飲ませて居るといふことである。けれども此の畜生の乳で育てること丈けはやめてくれ。彼女はお前の子だ。私の子だ。而して人間の子だ。人間の子は人間の母乳が与へられてゐる。畜生の乳は与へられてはゐない。殊に日本人には一切四足の肉も与へられなければ四足の乳も与へられてはゐない。唯外国人のみ其れを与へられたのだ。其の証拠には外国人の渡来する迄は日本人は

一切四足の肉は食はなかつた、これ神の長子の特権と威儀とである。もし乳が不足ならば粥を与へよ。けれども恐らく乳の不足の為めにあらずして例の痩せることを恐れるが為めであらう。もし其れならば牛乳を一合与へる代りに自分の乳を一合与へよ。然らば一升の肉が増すであらう。
　兎に角畜生の乳丈けは与へてくれるな。これが私の頼みである。
　　大正四年十一月二十二日　　良　　平

　　〇　　子　　様
二伸もしお地場へ来る様ならば雪の降らぬ内に来る様にしなさい

編集室より

　　Ｒ　Ｏ　生

　月日の経つのは早いものである。最う今年も十二月になつて了つた。其の間に私の生活にも色々の変化があつたが其の第一の変化は雑誌新宗教を出したといふことである。
　これについては毀誉褒貶様々であるが兎に角私の雑誌よりも資本金の豊かな雑誌が生れては倒れ倒れては生れする間に何等の資本もない私の雑誌が九号迄続刊して来ることのできたのは神明の加護とは云へ実際夢の様である。
　其の間に之れと云つてお道に貢献したこともないが神明の加護と読者の厚き同情とに依り今日迄続刊して来ることのできたのは実に感謝の辞がないのである。
　其れで読者に一言申上げて置きたいことは年が明ければ来年は三十年祭の当年である。本誌は此の聖典を紀念する為めに「感謝と記憶」と題する教祖御親の記念号を出す心算であるが読者も亦有形無形の何等かの紀念事業を起して戴きたい。
　例へば図書館の建設等最も有益なる事業である。其れから日曜学校。これは仏教でも基督教でもやつてゐるが天理教も個人伝道と云ふ様な狭い型に嵌つた定つた仕事ばかりしてゐないで此の種の少年伝道乃至囚人伝道等を開始したら良からう。
　兎に角天理教も在来の古い型に嵌つた仕事ばかりしてゐては何時迄経つても大なる発展は出来ない。将来は大いに布教方法を拡張しなければならない。
　其れから公共事業、慈善事業を起すことである。凡そ宗教の数も数あるが天理教程公共事業、慈善事業に冷淡な宗教はない。今日迄の所一つとし見るに足る公共事業、慈善事業をしてゐない。成る程公共事業や慈善事業は世界救済の理想より云つて人心救済程根本的でないかも知らない。然し根本的でないからと云つて何も善業を局限する必要はない。善いと思つたら何んなことでもしなければならない。これを特に教祖の記念に云つて置くのである。
　此の他未だ云ひたいことも色々あるが其れは後日緩然発表することゝして最後に一言愛読者各位が今日迄本誌に加へられたる厚情を謝し且つ併せて将来の愛顧を祈る次第である。

大　平　良　平　著　（新刊）
天理教々理より観たる人生の意義及び価値　　定価金三十銭　郵税金八銭

　古来人類発達の過程に於て表はれた宗教の数は一々枚挙に遑がない。けれども其の何れも天理教程根本的の宗教はない。これを例へて云へば他の宗教を大小の動静脈とすれば天理教は心臓である。人類の想源は凡て此処から発するのである。然るに今日迄はニイチエ、オイツケン、ベルグソン、タゴールの如き末派の思想家が思想界の寵児として喧伝せられ却つて天理教　　天啓に依れば天理教は世界最後の宗教である。　　の如き本場の思想を顧みるものがないのは悲しむべきことである。
　著者は其の半生を思索と冥想とに捧げた結果遂に此の宗教を措いて他に信ずべき宗教のないことを知り専心研究の結果遂に此の一篇を成したのである。思想界乱脈の絶頂に達した今日多少なりとも此の著によつて此の本場の思想を理解する助けともならば幸甚である。敢て真理の熱愛者に一本を薦む。
　　新宗教社

　凡そ思想界の混沌たる今日より甚しきはない。旧思想は倒れて新思想は未だ普及徹底せず世は凡べて暗闇の内にある。其の間にあつて霊界の新しき太陽として生れたのが神の所謂だめの教止めの教たる天理教である。
　天理教では教祖の出現迄の世界を一世の世界と云ひ教祖出現以後の世界を二世の世界と

云つてゐる。而して其れ自身を二世の立て換への教と云つてゐる。一世の世界とはこれを今日の言葉で云へば旧世界である。二世の世界とはこれを今日の言葉で云へば新世界である。天理教は即ち此の旧世界より新世界に向つて全人類を更生せしめんが為めに人間始め世界始めの地場を中心として興つた世界最後の天啓教である。

今迄は学問なぞと云ふたとて見えてないこと更らに知るまい
これからは見えてないこと段々と万づのことを皆説いて置く
今までは此の世始めた人間の元なる地場は誰も知らんで
此の度は此の真実を世界中へ何うぞ確つかり教しへたいから
それ故に甘露台を始めたい本元なるのところなるぞや
月日には世界中らを見渡せど元始りを知りたものなし
此の元を何うぞ世界へ教へたさそこで月日があらはれて出た
確かと聞け此の世始じめを真実と云ふて話しは説いてあれども
世界には誰か知りたるものはなし何を云ふてもわかりかたない
其の筈や此の世始めてない事をだん／＼口説きばかりなるから
今までも助け一條とまゝ説けど本真実を知らぬことから
何のよふな事でも月日云ふ事やこれ真実と思て聞くなら
何のよふな事もだん／＼云て聞かすこれを真実と思て聞分け
此の世の本元なると云ふのはな此の所より外にあるまい

然るに従来の学者は天理教の如き愚夫愚婦の信ずる淫祠邪教の如く誤解し之れに対し凡ゆる嘲弄を浴びせて来た。然るに何ぞ知らん此の軽蔑せられた宗教こそ真に現代並に未来の社会を救ふ唯一無二の本場の思想ならんとは。

熟々現代の思想界を通観するに必ずしも天才に欠乏してゐる訳ではない。けれども其の一人として真に本場の思想を知つてゐるものはない。従つて其の云ふ所に何れも中心の意義を失つて居る。これ私をして公然天下に向つて「天理教　本場の思想　を知らざるものは共に人生を談ずべからず」と公言するを憚らざらしむる所以である。

此の一篇の書は即ち私が今日迄天理教研究の結果其の教理より発見した人生の意義及び価値の簡単なる叙述に過ぎない。けれども此の不完了の研究に依つて多少なりとも本場の思想の解釈に資する所があれば幸福である。

大正四年十一月二十四日午後十二時　　大和の地場にて
大　平　良　平

天理教教理より見たる　人生の意義及価値

大平良平

本論（中）

「サア／＼月日（神）あつて此の世界（地球）世界あつて夫れ／＼（万物）あり。夫れあつて身の内（人間）あり。身の内あつて律（法律）がある。律があつても心の定め（信仰）之れが第一」

此の言葉は教祖の臨終に先つて其の弟子に向つて神楽勤めを要求した時弟子達は何れも官憲の圧迫を憚つて之れに応じなかつた為め高弟飯降伊蔵氏に神が降つて此の言葉があつた。弟子達は此の言葉に依つて始めて最後の決心をしたのである。

千九百余年の昔猶太の救世主が人皆なの祈るべき祈祷の文句として教へた

「天に在ます吾等の父よ。御名を崇めさせ給へ。御国を臨らせ給へ。御心の天に成る如く地にも成らせ給へ。我等の日用の糧を今日も与ひ給へ。我等に負債ある者を我等が免るす如く我等の負債をも免し給へ。我等を試みに遇せず悪より救ひ出し給へ。国と権と栄とは限りなく汝の有なればなり」

には現実我（人）が理想我（神）に対する直接の祈祷を表象せる如く天理教に於ける此の天啓の声は理想我（神）が現実我（人）に対する間接の命令を表象してゐる。且つ後者をもつて基督教信仰の精髄を語つてゐるものとせば前者は天理教信仰の根底を形造つてゐるのである。

事実此くも簡単なる言葉の中にかくも偉大なる人生の始終を包含せる言葉は世界の頭脳をもつて目せられつゝある英国図書館に行くとも発見することはできないであらう。真や此の簡単なる言葉の中には全人類にとつて祖先以来の懸案であつた神観、世界観、万有観、人間観、法律観、信仰観が寓せられてゐるのである。此う云ふ理由の下に私は先づ此の天啓の言葉の順序に従つて天理教の神観、世界観、万有観、人間観、政治観、信仰観を略述し漸次天理教の細緻なる人生観に説き及ぼさうと思ふ。

第一章　天理教の神観

月日あつて　　天啓の声

天理教で云ふ神とは国床立尊重足尊の男女両神を始めとして月読尊（男）国狭土尊（女）大戸辺尊（男）雲読尊（女）惶根尊（男）大食天尊（女）伊邪那岐尊（男）伊邪那美尊（女）の八柱の神を指して云ふのであつて総称して南無天理王命略して天理王命とも天理大神とも云ふ。

南無とは梵語真実を意味し、宇宙の実体を指したものである。又た天理王命とは此の宇宙に天理より大なるものなく此の世界に王より大なるものなきをもつて天理王命と云ひ宇宙の理体を指したものである。此の実体と理体と抱合して全宇宙を形造るのである。従つて南無天理王命と云へば宇宙間に有りと凡ゆる凡ての神を召び出したことになるのである。

此処にやゝもすれば初学の天理教信者にとつての碍は神々の姿である。これは独初学の天理教信者のみならず生中半可通の常識に依つて養はれたる一般学徒の碍の基となる問題であるから複雑を忍んで一言私見を述べて置かうと思ふ。

天理教で国床立尊の姿を大龍と云ふは此の世は理の世界である即ち理世であると云ふ意味を具体化せるものである。又重足尊の姿を大蛇と云ふのは女は此の世の台じやと云ふ意味を具体化せるものである。其の他月読尊の鯱、国狭土尊の亀、大戸辺尊の黒蛇、雲読尊の鰻、惶根尊の鰈、大食天尊の鰒、伊邪那岐尊の人魚、伊邪那美尊の白蛇は泥海時代に棲息せる当時の最高動物であつた。其の当時の最高動物の凡ゆる特徴をとつて成し上げたものが人間である。

けれども此処に一つの問題は当時の鰌の形を具備した人間が今日の人間に進歩した点より見れば此等の神々が何時迄も元の姿であるとは思はれない。事実当時道具衆として使はれた神々の魂が今日天理教の地場に人間として表はれつゝある点より想像して一切の生物の上に進化の事実を否定する訳には行かない。畢竟大龍と云ひ、大蛇と云ひ、鯱と云ひ、亀と云ひ、黒蛇と云ひ、鰻と云ひ、鰈と云ひ、鰒と云ひ、人魚と云ひ、白蛇と云ひ皆其れ／＼の特殊の形態を具備するには必らず一種の心理的特徴をもつて居る。（例へば長い物には長い影が映じ円い物には円い影が映ずるが如きものである。其れが生格化（具体化）して大龍となり、大蛇となり、鯱となり、亀となり、黒蛇となり、鰻となり、鰈となり、鰒となり、人魚となり、白蛇となり其れが無生格化（抽象化）して消極力となり、積極力となり、緊張力となり、継続力となり、牽引力となり、運輸力となり、旋動力となり、切断力となり、父性となり、母性となつて人間並に万有を通じて一切の物質を支配するのである。）其れが種々に変化して自然並に人生を動かす不可思議力となるのである。

之れを要するに国床立尊と重足尊とは宇宙の両極性（二大自然力）を代表せるものにして其の他の神々は此の二大自然力の変化したものに外ならない。

御筆先の

「此の世の真実の神月（国床立尊）日（重足尊）なり後なるは皆な道具なるぞや」

は即ち此の大自然力と小自然力との関係を歌つたものと見るべきである。

蓋し神とは人間の如く或る限られたる力と限られたる形をもつてゐるものではない。万有を創造しもしくば破壊して行く自然力をさして云ふのである。之れを有限の人間力相対の人間性と同一視する時は遂に神の実体を捕捉することができないであらう。殊に天理教でいふ神の如き最も其うである。従つて私は此処に天理教の神観の発達史を略述して天理教でいふ神の精神内容は如何なるものであるかを研究したいと思ふ。

教祖布教の第一期に於て神を表象する言葉として用ゐたのは月日と言ふ言葉である。これは信仰の最も幼稚なる初期の時代に於て眼に見えざる偉大なる超人間力（神）の存在を信徒に信ぜしめんが為めに眼に見ゆる偉大なる物質を借りて云ひ表はしたものに外ならない。其の証拠に明治十二年八月の御筆先には

今日までは月日と云ふて説いたれどもふ今日からは名前換へるで

と断つて其れ以後の御筆先にはズツト親と云ふ名で説かれてある。これが天理教の後期である。

此の他初期の天理教では

「水と火とが一の神。水火風の外に神はない」

と云つてゐる。

之れを天理教々理より云へば水は即ち国床立尊の御守護である。火は即ち重足尊の御守護である。風は即ち惶根尊の御守護である。此う云ふ火の神水の神風の神の存在は其の神の名こそ異れ原始時代より世界を通じて行はれたる信仰である。現に天理教で云ふ十柱の神の宇宙人生の分担の御守護の如きも其の一層複雑化したものに外ならない。けれども此処に一つの疑問は火水風を生ずる原動力即ち火力水力風力が神であると云ふことは直ちに信ずることが出来るけれども火水風が即ち神であると云ふことを信ずるには多少の隔りを

感ぜずにはゐられない。これは月日が即ち神であると説く場合に於ても亦同様である。
　けれども一歩転じて人間の肉体を組織する元素が火水風であると見る時は天理教で云ふ
　火水風が実の親
と言ふ言葉は無條件で承認することができる。又た此の地球は其の昔月もしくば太陽と一身同体であつた。其れが長い間に分離して一個の独立した天体となつたと云ふ天文学上並に地文学上の学説より云へば
「此の世の真実の神月日なり何か万の守護するぞや」
は何等異論を挟むべき余地がない。更らに吾人々類の出所は之れを狭い眼より見れば肉身の父母に相違なけれども之れを広い眼より見れば天地が即ち吾人々類の父母であり且つ生れ故郷である。此の点より見て
　人間は神（天地）の懐住ひをしてゐる
と云ふ教祖の言葉並に
　此の世の天と地とが元の親其れより出来た人間である
と云ふ御筆先に表れたる思想は元より議論を要しない問題である。唯吾人の問題は物質を動かす大自然力を神と云はずして物質其の者を神と称した初期の物質的神観である。けれども此の物質的神観は信徒の信仰の進歩に伴つて漸次精神的に進んで来た。
　例へば
　神は理やで理は神やで
と云ふ言葉の如き
　真実は神神は真実
と云ふ言葉の如きは神を本質的もしくば本体的に説明した言葉である。これに依つて見れば教祖の認めてもつて神と云つたのは眼に見ゆる物質其の物にあらずして眼に見えざる無形の大真実大真理をさしたものであることが訳る。
　此の他御筆先に表はれたる
　いかほどの強敵あらば出して見よ神の方には倍の力を
　いかほどの強敵たるも発明でも月日の心之れは叶はん
に依つて見れば
　神は大智力なり
　神は大勇猛力なり
と云ふことが出来る。又た
　此の神は助け一條の親神様である
と云ふ点より見れば
　神は大慈悲心なり
と云ふことができる。更らに天理教の神とは如何なる神であるか其の史的本性を知るには天保九年十月二十四日に教祖ミキ子に神憑つて霹頭に発せられた自己紹介の言葉である。
「然るに其の日は何時も市兵衛の加持台に立つ勾田村のオソヨが外出して行先が不明であつた。其れで臨時ミキ子を加持台に直して祈祷に取り掛つたのである。暫時するとミキ子の態度は次第に荘重を加へ持つて居た幣束がパチリと音して止まるかと思ふと一人の神が降つた。市兵衛降つた神を尋ねるとミキ子は四辺を払ふばかりの威厳に満ちた態度で
「我は天の将軍である」
　……
「天の将軍とは何方様で御座います？」
と尋ね出ると
「天の将軍は月日ぢや」
市兵衛は畳みかけて聞いた。
「月日と仰せられると？」
「根の神元の神実の神である」
　之れに依つて見れば天理教の神は決して今日の非天理教徒の誤解してゐる様な狐や狸の如き淫祠邪神ではない。明かに天地開闢の始めより存在して万有を創造した又創造する更らに創造して行く所の宇宙の第一大原因、世界の原動力、万有の根元、人類の大祖である。
　之れを要するに
「生物が一個体の卵より其の生物として完成するに至るまでの発生の状態は其の生物に属する種類が其の過去より今日に至る迄次第に進化し来れる道程を繰り返すものである」
と云ふ生物発生の原則は同時に又た心理上に応用することができる。即ち天理教が今日の状態に発達する迄には或る期間の間原始時代より今日に至る迄経験して来た人類の信仰発達の道程を繰り返してゐるのである。少くとも其の歴史的経験を応用してゐるのである。
例へば

月日が神である
水火風が神である
と云ふ如き物質的神観は即ち此の歴史的経験を応用したるものに外ならない。従つて真の天理教の神観を伺ふには
神は理なり
神は誠なり
と云ふ本質観本体観に到達せねばならない。けれども神は理なり、神は誠なり、神は智なり、神は仁なり、神は勇なりと云ふだけにては天理教の神観が従来の宗教と何等の異る点はない。天理教の神観が従来の宗教より一歩進めた点は其の一元的多元観にあらず、其の分担の御守護（此等は天理教に依つて始めて詳細に説かれたものには相違なけれど）にあらずして実に
理が親である
神が親である
と云ふ神人親子の関係が一層家族的に徹底してゐる点である。これは神人父子を説く基督教よりも更らに一層親密の度を加へてゐる。天理教の神観の長所は寧ろ此の点にある様に思はれる。

第二章　天理教の世界観

月日あつて此の世界　　天啓の声

カントとラプラースの説に依れば我が太陽系統の諸天体は最初は高温の一大瓦斯球であつて太陽は其の中心の核を形造つてゐたのである。然るに其の温度の冷却するに連れて此の一大瓦斯球は漸次収縮した。
凡て球の廻転速力は球が収縮すればする程早くなり早くなるに従つて赤道部の遠心力の増大するのが自然の法則である。けれども其の速力が或る度に達すれば赤道の遠心力は却つて球の求心力に打ち勝ち赤道部は球より分離して此処に環を造り出すのである。
彼の一大瓦斯球も此の理に依つて遂に赤道部が離れて環を生じ更らに其の速力の増進するに連れて分離した環は更らに分離して幾條の環を生じた。而して其の分離した新球は旧速力を維持して西より東に向つて廻転して居たのである。けれども此の新球も漸次冷却収縮するにつれて其の或る部分が分離した。其の切れた個所は一個所のこともあれば数ケ所のこともある。一個所の時には切れた環が一塊に凝集し、数個の時には数塊に団結したのである。斯くの如くして分離した球が今日の天体である。我が地球の如きも此の方法によつて生じたのである。
次には月と太陽との発生であるが月とは遊星が同じ方法にて環を生じ、其の輪が分離して更らに団結したものであり、太陽とは環が出来てしまつた跡に残つた中心の部分の凝集したものであるといふのである。
此の他今日の天文学乃至地文学の学説を総合するに地球が太陽より分離したこと並に月の年齢は地球より古きことを否定するものはない。これ月日あつて此の世界と云ふ天啓の声と科学上の学説と期せずして一致する所以である。
今此の地球の発達の歴史を分類すれば大略次の三期に区別することができる。
第一期は気体の時代である。
第二期は液体の時代である。
第三期は固体の時代である。
今日の世界は即ち第三期に属するのである。
今之れを天理教々理より観察すれば人類発生当時の地球は既に第一期の気体の時代を過ぎて第二期の液体時代に入つてゐたのである。而かも当時の世界には既に植物動物が人間の先駆者として表はれてゐた点より見れば恐らく液体時代の後期に属してゐたのであらう。其の後人類の発達と地球の発達とは相並行して発達し人類が八寸に生長した時天地海山速かに分かれたと伝へられてゐる。ミキ子は此の世界発達の状態を形容して「紙袋の膨らむ如くや」と云つてゐるが恐らく世界発達の状態は稲の穂の実るが如く紙袋に米の充つるが如くに充実して来たものに違ゐない。けれどもこれを九億九万年水中の棲ひと云ふ天啓の声より想像して人類の陸上生活は最近一万年以前の生活に属する故其れ迄の地球は泥海の状態にあつたと思つてはならない。今日地質学の研究が未だ充分に発達してゐないから水陸の区別を生じたのは果して何万年何億年以前であるか不明であるが何んでも余程長い間人間は両棲生活を続けて来たものに違ゐない。
けれども天文学地質学より云つても生理学より云つても今日の世界今日の人間は未だ発達の過程にあつて完成の域に達してゐない。将来人心の改造が理想通り行はれた暁には此

の世界も亦地震、落雷、海嘯、噴火、暴風、洪水の如き変調なき理想の状態に変化すると云ふのである。これが天理教の世界観である。
　思ふに人間と世界の関係は蝸牛と殻との関係の如く常に不可分離的関係にあるのである。其の一方のみ発達して一方が遅れると云ふことはない。常に二個の線が相並行して進むが如く相並んで発達して来たのである。これは自然科学者の等しく承認する所である。けれども人間の精神的価値の進歩に伴ふて世界の状態も全然一新理想の状態に入ると云ふ事は天理教祖に依つて始めて説かれたことである。
　蓋し天理教の理想は彼の所謂心の入れ換へ世の立て換へにあることは云ふ迄もないが此の世の立て換へといふ言葉の意味は単に人間社会の改造を意味するものではない。同時に又た自然界の改造をも意味するのである。即ち人間の精神状態の変化に伴つて其の生活状態も一変し、其の生活状態の一変すると共に其の社会組織も一変し、其の社会組織の一変すると共に其の自然界の状態も亦理想的の順潮に一変するにあるのである。これが神の理想でありやがて天理教祖の理想である。
　之れを要するに天理教の世界観は此の客観の世界をもつて人間と没交渉なものとは見ない。寧ろ全人類の主観の表現として見るのである。
　此の世界山喰へなぞも雷鳴も地震大風月日立腹
　雷鳴も地震大風水つきもこれは月日の残念立腹
　これに依つて観れば人類の主観が変更すると同時に客観の世界は自ら変更せざるを得ないのである。従つて此の世界を地獄とするも極楽とするも谷底にするも甘露台にするも全く全人類の意志にあるのである。事実此の言葉の真理は篤信なる農家の上に実現しつゝある即ち彼等天理教の篤信家は世間の飢饉の中に独多分の収穫を楽みつゝあるをもつても知られるのである。
　天理教徒が捧ぐる朝夕の祈祷の文句に
　悪しきを払ふて助け急き込む一列澄まして甘露台
とあるは即ち人心改造の結果此の世界を宛然其の侭蓬莱の仙境無上快楽の甘露台とせんとする神の理想を歌つたものである。此処に天理教の世界観の根底がある。
　仏教では月日の照す範囲を十万億土と云ひ（天理教祖の説明に従へば）世界の始より終までを十万億年と云ひ末世の予言を語り基督又世界の終末期の近けることを予言してゐる。けれども始めあるものは必ず終なかるべからざるは自然の法則である。従つて此の世界は一旦進化の極に達すれば更らに退化して死と破壊の状態に入るであらう。けれども有は無を生ぜず無は有を生ぜざるは自然の法則である。従つて一度死と破壊の状態に入つた世界は草木の再生するが如く人間の再生するが如く蘇生して更らに新しき世界を形造るであらう。されど其の時は未だ幾億万年の後であるか其は予言の限りでない。吾人は吾人の前面に絶対に向つての進化と云ふ必然の運命と事業とを附与せられてゐる。吾人は唯必然の命ずる侭に此の世界を甘露台化することに向つて努力しなければならない。其の余の結果は唯必然の力に任ずべきのみ。これ本覚者の世界観である。
　此の世界観は元より自分一個の想像より成れる仮設的世界観である。けれどもミキ子の想脈には少くとも此う云ふ世界観が流れてゐたことは看取するに難くはない。従つて天理教の終末観は如何にも尋問せられたる場合天理教の終末観はかくの如しと断言するも過言ではあるまいと思はれる。少くとも自分一個人は天理教々理より推論してかくの如く断定するをもつて最も至当と信ずるのである。

第三章　天理教の万有観

世界あつて夫れ／＼あり　　天啓の声

　此の地球が太陽より分離した時は未だ高熱の瓦斯球であつたことは科学の証明する所である。其れが漸次温度の冷却するに連れて気体は液体となり次第に鉱物植物動物を生ずるに至つた。けれども其の最初の植物動物は地球の状態が未だ複雑なる動植物の生活に耐へざる為めにあつても最も簡単なる構造を有した動植物に過ぎなかつた。其れが地球の状態が漸次高等植物高等動物の生活に耐え得る様に進化するに連れて次第に高等植物高等動物を生ずるに至つたのである。
　凡そ万有特に動植物の価値を決定するに大体二つの観方がある。
　其の一は生物学的価値である。
　其の二は世界的価値である。
　第一の生物学的価値は単に構造上の価値に過ぎないから此処に深く立ち入つて研究する必要はない。第二の万有の世界的価値こそ吾人の当面の研究問題である。
　ミキ子は動物が漸次人間に向つて進化するのは献身犠牲の生活によつて功徳（道徳的価

値）を天に積むが為めであると説明してゐるが之れに依つて見れば万有は夫々一個独立した価値創造体である。云ひ換へれば万有は夫れ／＼一個独立した日の寄進体（献身犠牲体）である。而して其の日の寄進的価値の大小がやがて其の物の価値を決定するのである。

蓋し万有は夫々自己以上に大なる価値体に奉仕することによつて宇宙の進化に貢献するのである。其処に万有の存在の意義及び価値があるのである。

ミキ子は元より特に万有観なるものを発表したことはない。従つて此処にこれが天理教の万有観であるといふことを述べることは困難であるが唯一つ万有は人間生活を完成せしむる為めに神が貸し与へたものであるといふこと↘万有は神の貸物なるが故に必要以外に之れを濫費すべからざるのみならず大に其の恩を感謝せざるべからずといふことは彼女の万有観の核心を形造つてゐるのである。

蓋し此の世界に有りと凡ゆるものは其れが生物であると無生物であるとに論なく皆な一定の存在の意義及び価値を有しないものはない。之れを云ひ換へればたとへ一塊の土一椀の水も之れが一つ不用と云ふものはない。而かも其れが殆んど凡て人間生活を完成する為めに神の貸し与へたものであることを知る時此処に始めて神の大恩と万物の恩恵を知ることができる。天理教の万有観は即ち此の自覚の上に建てられたるものである。

第四章　天理教の人間観

夫れ／＼あつて身の内あり　　天啓の声

天理教で人間のことを身の内と云ふは美（伊邪那美尊）の内即ち伊邪那美尊の胎内より生れた者なることを意味するのである。又た人間と云ふ名称の起源は人類の父親なる人魚の人とげんが良いと云ふげんとを合して人間と云つたものである。

天保九年を過去に遡ること十億万年の昔神が人類を創造せんと計画しつゝありし当時は既に魚類爬虫類の如き半高等動物が全盛を極めてゐた点より見て世界は予想外に進歩してゐたことを知ることができる。神は即ち其の当時に於ける最高等動物の凡ゆる特徴をとつて此処に人間と云ふ新生物を創造したのである。勿論当時の人間は水中動物の凡ゆる特徴を備へた小動物であつた。其れが十億年の間に種々なる生物界を通過して最後に今日の人間に発達したものである。此の過去の実験に依つて今日の人間は如何なる動物の心理をも理解し且つ其の生活を模倣することができるのである。

此の世を始めた神の事ならば世界一列皆我が子なり
此の世界高山にても谷底も親の為めには子供ばかりや
確かと聞け高山にても谷底も見れば月日の子供ばかりや　　御筆先

天理教の第一の人間観は全世界の全人類は神（自然）の小児であると云ふことである。云ひ換へれば大自然の分身（小自然力）であるといふことである。「此の世界一列我が子なり」と云ふ神の自覚せる愛より生れたる宗教が天理教である。

世界中一列は皆兄弟や他人と云ふは更らにないぞや

天理教の第二の人間観は世界一列兄弟姉妹であると云ふことである。此の二つが天理教の人間観の大綱である。彼の天理教々理の殆んど凡ては砕いて云へば親（神）と兄弟姉妹（人）とに対する円満なる関係を説明したものに外ならない。更らに通俗的に云へば父母に孝に兄弟に友にと云ふことを教へたものに外ならないのである。

次には天理教の人性観である。

人間性に関しては古来種々なる説が唱へられた。或る者は性善説を唱へ或る者は性悪説を唱へ又或る者は折衷説を唱へた。天理教では

人の心といふものはちよとにわからんものなるぞ　　御神楽歌十下り目

とか

人の心と云ふものは疑ひ深いものなるぞ

とか

人間はあさないものである程に月日する事知りたものなし

とか云つて人間性は信じ易く疑ひ易い浅薄な相対的有限のものであると云ふことは教祖の著書（天啓に依つて書かれたもの）の随所に見えるけれども人間性を悪なりと説いたことは一度もない。即ち

人間に悪しきと云ふて更らになし一寸の埃がついたばかりや

と云ふのが天理教祖の人性観であると共に神の人性観である。

更らに人間力の有限相対的なることを歌つたものには

いかほどの強敵あらば出して見よ神の方には倍の力や
いかほどの強敵たりと発明でも神の力やこれは叶はん

の如き即ち其れである。
　之れを要するに神とは大自然力人とは小自然力である。従つて前者の力は絶対無限であり、後者の力は相対有限である。けれども相対がなければ絶対なく絶対がなければ相対がない。云ひ換へれば神あつての人、人あつての神である。此の絶対と相対との一致云ひ換へれば神と人との抱合其処に始めて人生の妙味があるのである。彼の御神楽歌九下り目及び三下り目の
「神の心に凭たれつけ」とか「神に凭れて行きまする」とか言ふ言葉は即ち此の絶対者と相対者との抱合を歌つたものである。
　天理教では基督教の如く人間全体の堕落を説かない。人間其の者は始め下等動物の形に造られ漸次神の力に依つて今日の人間に進化発展せしめたものであり且つ将来に亘つて無限に向上進化せしむるものであると説くのである。元より中には進化を停止して却つて人間以下の世界に堕落して行く者もある。（天理教では牛馬は人間の中で罪の重い者が堕落したものであると説くのである）けれども其の大多数は退化するにあらずして進化しつゝあるのである。これ人間堕落説を主張する基督教と全然其の人間観を異にするのである。
　けれども之れを公平なる立場より両者の所説を批評する時は現在の人類は或る完全なる者より不完全なる者に堕落して行くのではなく全く不完全なるものより完全なる者に向つての向上進化の過程にあるのである。これは啻に世界文明史の認むる所であるのみならず凡ゆる生物学の認むる所である。
　天啓に
「人間は今迄何の様な者にも生れて来たから何んなものゝ真似でもできんことはない」
とある如く今日の人間は生物界の凡ゆる階級を通過して遂に今日の如き生物界の最高地位を占めて居るのである。
　けれども今日の人間は未だ真に完成の域に達してゐない。其の中で比較的完成の域に近けるものが今日の所謂文明人である。けれども今日の所謂文明人と云つても未だ甚だ幼稚なるを免かれない。唯此等人類をして完成の域に達せしむるには時間と努力とが必要である。ミキ子は此の人類永遠の向上進化の努力を称して「切なし普請」と云つた。蓋し人類永遠の創造的進化を意味するのである。
　以上は天理教の人間観の大体であるが之れを要するに神の人類に対する要求は全人類をして神子（自然児）の自覚と神子の生活とを得せしめんとするにあるのである。云ひ換へれば第二の神々を創造するにあるのである。此の神の終局の大理想を啓示したのが天理教である。

第五章　天理教の法律観

　身の内あつて律がある　　天啓の声

　以上述べたる所は何れも天理教の新人生観を語るに最も有力なるものであるが就中此の天啓の声の結論に近き重要なる価値を有するものは此の一句である。
　此の一句は人間と法律との関係を述べて当時法律を盲目的に恐れてゐた無智の信徒の自覚を促したものであるがこれは当時の信徒に限らない今日でも真に人生と法律との関係を明かに自覚してゐる人間は少ないのである。其う云ふ人達は法律は国民の生命財産を保護する国民相互の後天的約束なることを知らないで唯其れをもつて暴君の如くに恐れて居る。其う云ふ無智の人達に向つて真の法律観を教へたものがこれである。
　蓋し吾人が法律を尊重する所以は其れが或る程度迄吾人の幸福の保護者たるからである。元より絶対のものではない。従つて其処に法律以上の絶対価値を有するものゝ表るゝ場合には法律を捨てゝも其れに従はなければならぬ、天啓の最後の句は即ち此の絶対者たる信仰と相対者たる法律との関係を述べたものである。

第六章　天理教の信仰観

　律があつても心の定めこれが第一　　天啓の声
　明治二十四年一月廿七日夜九時の刻限
「神の道上の道一寸云へば同じ事。上の道とは世上の道。神の道とは胸の道。世上の道は何んな事して居ても通つて行けるなれど胸の道は皆な身にかゝる。
　道に二つあつて世上の道は眼にさへ見えにや通つて行ける。世上の道には何んな穴があるやら知れん。神の道は胸三寸の道であるから通らうと思ふても通れん。これさへ充分説き聞かせば何んな事も皆な治まる」
　凡そ宗教と法律との相違は一は自然の法則にして他は人為の法則一は神の約束にして他

は人の約束たる点にある。従つて一は先天的にして他は後天的一は絶対的にして他は相対的一は外延的にして他は内包的である。其れが主観化せられて人間生活の中に織り込まれて来た時信仰となり政治となるのである。此の法律と信仰との関係並に政治と宗教との関係を的確に説明したものが如上の天啓の声である。

之れを詳しく云へば法律とは即ち人間が共同生活をなすについて相互の安全を保証する必要上定めた一種の人為的の約束である。之れに反して宗教とは神（自然）が宇宙の統治上定めた天然自然の約束である。従つて一は後天的の約束に属し他は先天的の約束に属するのである。けれども此の二つは全然固定的なものではない。常に人間の進歩に伴つて進歩発達するのである。これは法制史並に宗教史の証明する所である。

蓋し法律とは之れを云ひ換へれば眼に見ゆる外界の法則である。之れに反して宗教とは之れを云ひ換へれば眼に見えざる内界の法則である。一は帝王の権限に属し他は神の大権に属するのである。此の二者は常に内外表裏より相待つて人間を幸福の世界に導いて来たのである。

けれども法律の欠点として法網を潜つて悪事を働く犯罪者を取締る力もなければ処罰する権力もない。此の法律の遁竄者を攫へる為めに眼に見えざる神の法網が布かれてある。其れが即ち宗教である。従つて真に此の世界を統治するには不完全なる有限の法律の力に委任することはできない。何うしても宗教の力を借りなければならない。

明治廿四年二月七日夜二時の刻限

「さあ／＼刻限を以つて話し掛ける。何う云ふ事話し掛けるならもふ一日の日もよふの日あけるなり一つと云ふ。如何なるも皆んな今一時筆に書き取る処一日の日が経つ。一日の日が移る。五年／＼と五年の日に移る。四方／＼処々にも何れ／＼五年／＼何う云ふ事万事何かの事話し掛けるによつて事情は一つ。人間の心と云ふはさら／＼持たぬ様五年経つたら何う云ふ道とも訳ろまい。世界の道も訳ろまい。一年経てば一つの事情。又た一年経てば一つの事上。年にとりて六十一年お蔭／＼と待ち兼ねた。又一つには改正／＼と云ふ明治の代と云ふ国会と云ふ知らず／＼待つて楽しみはさらにあらうまい。一夜の間の事情を思案せよ。国会二十三年と云ふた。又た一つの事情。又お蔭／＼の事情よふ思案せよ。

さあ／＼明ければ五年と云ふ。万事一つの事情を定めかけ。定めるには人間の心は更々要らん。弱い心は更らに持たず気兼遠慮は要らん。さあ思案してくれ。これから先は神一條の道国会では治まらん。神一條の道で治める」

は即ち法律時代の後に必らず宗教時代の来るべき予言である。其の予言の実現せられた時こそ真に人生が根本的に改造せられた時である。

明治廿五年五月十六日午前九時

「今の処は二つある。一つの道は表の道。一つの道は心の道や。表の道一寸の道や。心の道は違はして何んならん。訳らんから皆な見免してある事を何んな事であつたやらなあ見免してあるから遅れて何んならん。胸の道あればこそ是迄通つて来た。これをよふ聞いて置かねばならん。世界道と云ふものはとんと頼りにならん。確つかりした様でフワ／＼してある。世界の道に力を入れると胸の道は薄くなる」

と。之れを要するに宗教と法律との関係は太陽と提灯の関係である。太陽の未だ昇らざる間は提灯は唯一の光明であるであらう。けれども一旦太陽の昇つた暁には誰も提灯を点じて途上を歩く者はないであらう。其の如く将来天理教の信仰が全人類の精神深く徹底して行つたならば法律は全く無用の贅物となるであらう。

蓋し宗教は第一義である。法律は第二義である。信仰は第一義である。政治は第二義である。従つて真に此の世界をして理想の世界たらしめんと欲せば法律改正や政治の改良の如き皮相の改革ではならない。何うしても真に全人類をして宗教的に自覚せしめなければならない。然らば此の世界に自ら無法律の時代が実現して来るのである。天啓の結句

「律があつても心の定め之れが第一」

は即ち此の信仰の絶対価値を肯定せるものである。

教祖ミキ子が折々子供に向つての教訓に

「人は道がなくては何処へも行かれんで。お婆様は人の心に道をつけるのやで。お前達を良い所へ導いてやるで」

と。凡て人をして安全に目的地に達せしむることを得るのは此の地上を走つて居る有形の空間的道路があるからである。けれども多くの人は其れと対して天上を走つて居る無形の時間的道路のあることを知らないでゐる。其の無形の時間的道路こそ即ち宗教である。けれども普通道路に新道と旧道とある如く精神的道路にも亦新旧の別がある。ミキ子は即ち其の無形の新しき時間的道路を人の精神界に開拓せんが為めに或は衣食住と断ち或は親戚故旧と断つて其の信路を一直線に貫通した。此処にミキ子の絶対的信仰観がある。

之れを譬へて云へば信仰は根である。法律は枝葉である。従つて信仰の根が広く深く強

く張れば張る程其の人其の家其の村其の町其の郡其の県其の国其の社会は栄えるのである。之れに反して其の信仰の根が狭く浅く弱まるに従つて其の人其の家其の村其の町其の郡其の県其の国其の社会は衰へるのである。之れは歴史上に表はれたる偉人強国の歴史に徴して明かである。此う云ふ点より結論して信仰は人間生活の源泉であるといふことが出来る。天理教の信仰観は即ち此の現実的要素の上に立てられたる人生の出発点であり且つ人生の帰着点である。

第七章　天理教の生死観

天理教では生れるといふ言葉は用ゐるが死ぬといふ言葉を用ゐない。もし死ぬといふことをいふ場合には「出直し」とか「お迎ひ取り」とか「お引き取り」とか云ふのである。就中最も多く用ゐる言葉は「出直し」と云ふ言葉である。

「出直し」とは此の世界に生存する時が充ちて再生もしくは再来する為めに一旦此の世界を去ることを云ふのである。亦た死ぬことを「お迎ひ取り」とか「お引き取り」とか云ふことは凡て此の世に生れるも死するも皆な神の意志に依つて行はれるからである。

御筆先の

此のところ止める心で来るならば其の侭何処へ月日出るやら
出るのもな何んな事やら知ろまいな月日迎いに出るで承知せ

の如き

胎内へ宿し込むのも月日なり生れ出すのも月日世話取り

の如きは即ち生死は神の権能に属することを歌つたものである。

之れを詳しく云へば人間の生れる時は大戸辺尊と大食天尊と国狭土尊との三神が揃はなければ産は出来ないのである。三神の手が揃つて大戸辺尊が胎内より子供を引き出し、大食天尊が母体との縁を切り、国狭土尊が後の皮継ぎをして母子共に健全に発育するのである。依つて子供をもふけることを産をする（又た子供を喜ぶとも子供を授けて貰ふともいふ）と云ひ産の神と産（三）神を云ふのは三柱の神の御守護に依つて生み且つ生まれるからである。又た死ぬ時此の世の縁を切るのは大食天尊である。と云ふのは生死共に人間力にて行はれるものではなく分娩力、切断力、継続力と云ふ自然力が加つて始めて生死の事実が実現せられるのである。

畢竟生理的の死とは神の貸物なる肉体を神に返済するの謂にして生理的の生とは神より身上を貸し与へられることを云ふのである。教祖の次の言葉は天理教の物質的生死観を最も明瞭に説明したものである。曰く

「身体は神の貸物だで、古くなつたらお返し申して又た新しい身体を貸して貰ふのやで」

と。更らに死後復活迄の径路を説明して

「何処へも遣りやせんで。元へ元へと返へすのやで。彼はお爺様に似てゐる。お婆様に似てゐると云ふやろ。似てるのやない正の者を返へすのだがわかりやしやうまい」

と。之れには多少の注釈を要する。と云ふのは其の人の因縁即ち生活価値の善悪に依つて必らずしも前世貴族であつたから今生も貴族に生れ前世平民であつたから今生も平民に生れ前世動物であつたから今生も動物に生れ前世人間であつたから今生も人間に生れると云ふことは出来ないからである。凡て皆な一定の年月の後自分の持つた魂の価値に相応した世界に生れ出るのである。例へば今生因縁の悪い人も其の積んだ功徳に依つて来世は幸運の家に生れ今生因縁の善い人も不徳を積めば不運の家に生れ、甚しきは畜生界に堕落する者さへあるが如きものである。

だん／＼と恩を重ねた其の上は牛馬と落ちる道があるなり　　御筆先

次には年齢の問題である。年齢も其の人の因縁に依つて一様ではない。一日を一生とするものもあれば十年百年を一生とするものもある。御筆先には

此の世の人間は皆神の子や神の云ふ事確かと聞き分け
埃さへすきやか払ろふた事ならば後は珍らし助けするぞや
真実の心次第の此の助け病まず死なずに弱りなきよふ
此の助け百十五歳の定命と定めつけたい神の一條

とある。即ち之れに依つて見れば人間は其の精神が健全化せられた暁には百十五歳の定命を享け更らに神の絶対境に迄進化したならば不老不死の仙境に入る事が出来る。

以上は主として天理教の物質的生死観を述べたものであるが更らに之れを精神的方面より観察すれば人類の霊魂は今日迄退化もしくば進化を経験して来たが未だ死を経験したことはない。彼の精神的の意味に用ゆる「生れ更り」と云ふ言葉は霊の一段の進化を意味せるものに外ならない。

今日の所物質不滅の法則は一部科学界の疑問になつては居るがされば云つて何人も今日の所有より無は生ぜず無より有は生ぜずと云ふ宇宙の原則を明かに否定し得るものはな

い限り吾人は進んで物質不滅の法則を信ずると共に更らに霊魂不滅の法則を信ぜんとするものである。其の論拠は再生の事実に基くは云ふ迄もないが更らに一つの補助観念は生は死を生ぜず死は生を生ぜずと云ふ前法則の姉妹法則である。吾人の霊魂はエネルギーの法則に従つて積極力が消極力に変ずることはあつても生命力其の者霊魂其の者が消滅することはないのである。普通云ふ所の死とは即ち此の積極力が消極力に変化して行く状態をさして云ふのである。

尚ほ此の問題は後の天理教の霊肉観に於て述べる心算であるが、一言此の問題の結論として云つて置くことは天理教では生理的乃至心理的の大小の変化は認めるが真に世人の考へて居る様な死即ち無と云ふことを認めないことである。天理教で認むる所は唯古き肉体を捨てゝ新しき肉体を衣古き思想を捨てゝ新しき思想を求むるの一事あるのみ。これが天理教の物質的乃至精神的生死観である。

第八章　天理教の霊肉観

霊肉の問題は今日でも屡々起る所の問題であるが在来の宗教哲学乃至倫理道徳の多くは概して霊を善とし肉を悪とし霊を尊とし肉を卑として来た其の結果霊を神もしくば天使に擬し肉を悪魔に擬するに至つた。彼の有名なるゲーテのフアウストの如きも全く此の霊肉を人格的に取り扱つたものに外ならない。

けれども天理教の霊肉観は全然在来の宗教哲学乃至倫理道徳と其の観方を異にしてゐる。即ち仏教でも古神道でも女子の月経は不浄のものとして月経期の女子は神社仏閣に参ることを禁じたものであるが天理教では

穢れ不浄はこれ云はん。心の穢れが身の穢れ

と云つて物質乃至肉体の不浄を論じない。天理教で矢ケ間敷云ふのは精神が澄んで居るや否やの問題である。

これについて一つの逸話がある。或る時山本利八氏が教祖の前に出た時教祖は山本氏に

「利八さん外の方を見ておいで」

と命じた。当時は警察の監視の厳しい時代であつたから其の心算で外へ出て四辺を見たが誰も居ない。

帰つて来て教祖に云ふには

「神さん（其の頃は教祖を神さんと云つてゐた）何んにも変りはありやしません。向ふの畑には南瓜がなつてゐます。此方の畑には茄子が沢山でけました」

教祖は其れを聞いて膝を打つて

「其れ／＼彼の南瓜や茄子を見たかへ。大きい実がなつてゐるが彼れは花が咲くから実があるのやで花が咲かにや実がありやせんで。其処で良ふ思案して見いや。女は不浄やと世上で云ふけれども何も不浄な事ああありやせんで。男も女も寸分違はぬ神の子や。女と云ふものは子を宿さにやならん一つの骨折りがあるで。女の月経はな花やで。花がなうて実がのらうか。能ふ悟つて見や。南瓜でも大きな花の美しいのに無徒花といふがあるやろ。彼れは花が散れば其れ限りのものやで。無徒花と云ふものは何んにでもあるけれどな。花なしに実がのるといふ事はないで。能ふ思案して見りゃ何も不浄やないで」

これを今日の人間より見れば女子の月経は最も自然なる生理的変化であるから何等不浄視するものはないが当時の社会にあつては一種の新説であつたのである。

天理教では

身体は神の建て流しの館

と云ひ

心澄み切れば神同体

と云つてゐる。此の意味は人間の肉体は神の借家である。其処に神と同一の精神が宿つて始めて神の社となるのである。

かくの如く天理教では霊を自分の物肉は神の物といふ区別は立てゝも霊を尊とし肉を卑としない。否な却つて之れを尊重するのである。其の理由は肉体は元来神の貸物なるが故に之れを汚損することは貸主なる神に対し申訳ないと云ふ観念に基くのである。此の観念より天理教では文身とか点灸とか負傷とか自殺とかを最も嫌ふのである。就中自殺といふが如き不自然の方法にて身上を神に返したものは来世には再び人間界に生れ得ないものとしてゐる。此の点に於て天理教は最も自然にして且つ最も進歩せる霊肉観を有してゐるのである。

かくの如く天理教の肉体を尊重すること他の宗教に越えたりとはいへ元よりこれに対して第一義的価値を附する訳ではない。明かに霊を主とし肉を従とし霊を第一義とし肉を第二義としてゐるのである。

之れを詳しく云へば人間の肉体は其の者の精神的価値に対して貸し与へられたるもので

ある。更らに云ひ換へれば人間の肉体は精神の反映であると云ふことができる。これを称して天理教では
　身上は心の鏡といふ
と云つて居る。蓋し一切の心理状態は凡て生理的に肉体に表れることを云ふのである。例へば健全なる肉体には健全なる精神が宿り不健全なる肉体には不健全なる精神が宿るが如き其の一例である。
　以上は天理教の霊肉観の大体を述べたものであるが最後に取り残されたる重要問題は心理的要求と生理的要求との衝突した場合である。例へば我は今飢渇に瀕してゐる。けれども其処にある食物は自分のものではない。此の場合自己の生理的要求に従へば心理的要求即ち良心と衝突する。又た心理的要求即ち良心に従へば自分は餓死しなければならぬ。ミキ子は此う云ふ場合に臨んで
「身体は神の貸物だ水を呑んでも死ぬことあるまい」
と云つて不浄の弁当で敢て飢渇を禦がうとはしなかつた。何故なれば人間の肉は霊の真実自然の要求を満足せしむる為めに神の貸し与へたものであるからである。従つて真実自然の心理的要求を充たす為めには時として生理的要求を犠牲にすることは止むを得ないのである。これが天理教の主観的霊肉観である。
　之れを要するに天理教では客観的には霊肉の平等を認め主観的には差別を認むるのである。此の平等兼差別的霊肉観に天理教の新霊肉観があるのである。

第九章　天理教の物質観

　従来の宗教はやゝもすれば肉体と共に物質を卑しむ風があつた。其の反動として今日は極端なる物質的傾向を帯びて来た。元より絶対に喜ぶべき現象でないとは云へ確かに一部の理由はあるのである。
　天理教の物質尊重の観念は肉体尊重の観念と同じく貸物借物の理より来たものである。即ち金銭でも物品でも凡て皆神の貸物なるが故に之れを粗末にするは勿体ないと云ふ点より来たものである。其の結果三千年来金銭の価値を知らなかつた日本人に確かに金銭並に其の他の物質の価値を知らしめたのである。と云ふのは今日迄の日本人はやゝもすれば金銭の事を口にするを恥づる風があつた。其の結果として一部の上流社会には金勘定を知らぬものがあつた。就中最も厭はしきものは故意に傲放淡泊を装ふ所謂東洋流の豪傑と金の為めには眼のなき強欲の守銭奴である。彼等は二人共金銭の価値を知らない。何故なれば真に金銭（天理教では金銭のことを一名継ぎと云ふ）の価値を知つてゐるものは出すべき所には数百万円をも惜まず出すべからざる所には一文も出さないからである。此う云ふ調子外れた日本人に多少なりとも金銭の価値を理解せしめたものはミキ子である。
　彼女はたとひ紙一枚銭一文と雖も粗末にはしなかつた。又た出すべき時には全財産は勿論のこと生命其の物迄も施すことを惜まなかつた。けれども普通人にとつては倹約は往々吝嗇となり出費は多く濫費となり易きものである。其の物質の濫費の結果が即ち乞食となるのである。其れでミキ子は屡々乞食を引例に信徒を戒めて云ふには
「世間では乞食／＼と云つて厭がるけれども彼れも矢つ張り神の子供だ。可愛がつてやつてくれ。彼等は前世でこれでは食へん彼れでは食へんと云つて食を粗末にした報で今生は人の門に立つて物を貰つて歩くのやで」
と。蓋し濫費は吝嗇（惜しみ）と等しく罪悪である。其れを知つてゐる者は或は多いであらう。けれども宋襄の仁が屡々濫費に陥つてゐることを知つて居る者は真に少い。ミキ子は乞食を憐れめと云つても五体の自由に叶ふ横着な乞食に物を与へよとは教へなかつた。何故なれば彼に物を与へることは却つて彼等を亡す原因であるからである。
　之れを要するに凡ての物質は神が生活の必要上貸し与へたものである。従つて必要以上に其れを濫費することも罪悪なれば必要以下に吝嗇することも罪悪である。要は唯必要を充たせば足るのである。然るに多くの人間は一人にて二人前も三人前も貪り中には一人分を二分しもしくば三分して蓄財するものがある。其の何れも生の真義に叶つたものではない。人は一人なる以上一人の生活資料より以上に又た以下に求むべきものではない。其れより余つたならば神に返し不足したら神より借りるだけである。これが天理教の物質観の結論である。

第十章　天理教の両性観

　凡そ様々の人生問題中最も吾人々類に重大な意味をもつてゐるのは両性問題である。何故なれば性の問題は直ちに生の問題であるからである。少くとも其根本問題であるからである。

　然るに従来の宗教は多く此の問題を根本的に解決することを恥づるの風があつた。為めに此の主要な人生問題は今日迄殆んど無解決の侭に残されて来たと云つて良い。少くとも其れは不徹底の解釈の下に葬られて来た。此の際に立つて此の問題に対して最後の解決を与へたものが天理教である。
　天理教の聖典御神楽の開巻第一に次の言葉が書かれてある。
「ちよと話し神の云ふこと聴いてくれ。悪しきの事は云はんでな。此の世の地いと天とを象どりて夫婦を拵らへ来るでな。これは此の世の始めだし」
と。従来の宗教別けて仏教の如きは最も大なる両性生活の呪詛者であつた。彼にあつては男女の性交と云ふが如きは救ふべからざる大罪であつた。其の結果は多くの不自然なる独身生活者を産出した。今尚ほ産出しつゝある。彼の両性生活に比較的大なる意義を認めた基督教の如きすら両性生活の大なる避忌者をつくつた。然し彼等は何も両性生活が自然であるか不自然であるかと云ふ問題を自覚した結果ではない。唯先人の誤れる人生を盲目的に信じて其れに合せんとして性欲と無益の苦闘を続けて来た迄である。これは独生欲の主脳である性欲に対して計りではない。食欲とか住居欲とか睡眠欲とか社交欲とか云ふ者に迄無益の反抗を続けて来た。其の結果は何うであらう。個人は衰弱し社会は疲弊して来た。此う云ふ虚偽と不自然とに充ちた社会の病弊を救ふ為めに表はれた近代的偉人は僧親鸞であつた。彼の識見は当時に於ては実に群を抜いてゐた。けれども彼を始め其の弟子も未だ人間生活の根本義に徹底して居なかつた為め末世の僧俗に多くの堕落者を生んだのは悲しむべきことである。此の人間生活の欠陥を救ふべく表はれたのが天理教である。
　天理教では性欲を始め凡ゆる自然の生欲より生るゝ一切の人間生活は凡て皆な肯定する。家庭生活でも社会生活でも。此の点に於て天理教は真宗と最も多くの共通点をもつてゐる。けれども天理教の生欲を肯定する態度は真宗の如く半自覚的ではない。又彼の如く消極的ではない。一層根本的であり一層自覚的であり且つ一層積極的である。此処に挙げたる
「此の世の地いと天とを象りて夫婦を拵らへ来るでなこれは此の世の始めだし」
と云ふ御神楽霹頭の文字は即ち両性生活の最も強き肯定である。
　夫婦が天地陰陽の表象（生命力の両面の表れである）と云ふ思想は古くより伝はつた東洋伝来の思想であるが此処に何故に「天と地いとを象りて」と云はずして「地いと天とを象りて」と云つたかと云へば一つは口調の為めと他の一つは女は「此の世の台ぢや」と云ふ意味より地を先にして天を後にしたものである。元より女尊男卑を意味したものではない。これは二大自然力の別名である国床立尊と重足尊との神性を研究すれば明かである。即ち国床立尊（月）の神性は水性である。又た重足尊（日）の神性は火性である。普通の考に依れば月の偉力は太陽の偉力に及ばない様に考へるであらうが之れを水と火とより論ずれば火は如何に強くとも水に打ち勝つべからざる自然の運命を有して居るが如きものである。此の点に於て男女両性の関係は一面に於て差別的である。けれども之れを他の一面より観察すれば水があつても火がなければ生活することが出来ない。水気温味即ち冷熱二個の力が調和して始めて体温を適度に保つが如く男女二個の力が調和して始めて人生を円満に保つことが出来るのである。此の点に於て男女両性の関係は平等である。御筆先の
　此の木いも雄松雌松は云はんでな如何なる木いも月日思はく
は即ち此の男女両性の平等相即ち男女同権主義を歌つたものである。
　明治三十一年十月二十六日
「此の道何う云ふ事から成つた。男女隔てない。一つの台にして始め掛けた。此の理はトント分り難ない。此の道の始めた教祖一代の所は女後席は男女の隔てあるかないか。此の順序の理日々取り次ぎ男女の隔てない」
　之れを要するに天理教で云ふ男女両性の差別は心理的乃至生理的の先天的差別（これは後天的に変更すべからざるものである）であつて人格的乃至道徳的の差別ではない。少くとも男女両性の人格乃至道徳の実質的差別ではない。これは男を人と呼んで女を人と呼ばざることなきと同様に真理である。唯男性的人格もしくば女性的人格乃至男性道徳女性道徳の差別はある。けれども其の人格的価値乃至道徳的価値は男女に依つて何等の差別はないのである。此の男女の同権は
　男も女も同じ神の子供やで
と教祖の言葉が之れを証明してゐる。
　けれども此処に注意しなければならぬことは男女は同権なるが故に男と同一の職業を男と同一の生活をなさんとする所謂近代的女性の考へてゐる男女同権と天理教で云ふ男女同権の相違である。天理教では男女の人権を両者共に同一に認むるけれども其れと共に
　女には女の道がある
と云つて其の職業や生活迄も同一視しない。例へば
　男は外を働き女は内を働く

とか又た
　細かいことは女がし荒いことは男がする
と云ふ様に男女両性の天分に従つて生活することを教ゆるのである。即ち天理教では男性生活乃至女性生活に限らず一般人間生活に於ても一つとして不自然（無理）の生活法を教へない。凡て皆真実自然の先天性に従つて生活すべきことを教へざるものはないのである。
　もし男性も女性も同一の職業を営み同一の生活を行ふべきものならば始めより男女の必要はないのである。苟くも男女両性の差別がある以上は其処に心理的乃至生理的に異つた天分がなければならぬ。これは凡ての個人に通じて同一である。即ち凡ての人間が農となり凡ての人間が商となり凡ての人間が工となるべきものならば此の広大無辺の人間生活は忽ちにして停止しなければならない。これ人間に個性の必要なる所以である。これと同一の原理が男女両性間にも行はれつゝあるのである。此の法則を称して分業律と云ふ。社会の進歩は実に此の分業の盛衰に正比例するのである。其の最も良き実例はアミーバである。彼には両性の区別がない。又た分業の区別がない。何処迄も単細胞の侭に原始的生活を継続しつゝあるのである。然るに漸次高等動物になるに従つて性の区別を生じ個性と分業を有するに至るのである。此う云ふ意味に於て男女両性は其の人格的価値に於て益々接近すると共に其の生活の形式は益々分離すべきものである。其処に性の進歩がある。性の進歩はやがて生の進歩となるのである。
　然るに従来の宗教哲学倫理道徳は此の男女両性の平等性と差別性とを明かに区別することが出来なかつた。其れが為めに人類分けて女性は長い間囚れた牢獄の中に不自由な生活を続けなければならなかつた。此の不自然の牢獄より人間性を解放し男女両性を解放したものが天理教である。
　天理教は恋愛及び結婚の自由を尊重する。けれども天理教の云ふ恋愛とは単なる性的愛ではない。其の人格的愛である。更らに云ひ換へれば信仰と信仰との共鳴である。且つ其処に性的愛を超越した人間的愛がなければならぬ。此の点に於て天理教の恋愛は今日の動物的恋愛と其の高さ広さ深さ強さを異にするものである。
　次には結婚の自由である。天理教で云ふ結婚は単なる性欲の満足ではない。異性の人格的結合である。此う云ふ徹底した結婚に向つて元より結婚を承認しない筈はない。けれども此処に一つの問題は自由と我侭との区別である。自由とは即ち自己の行為に対する責任を感ずるものを云ひ、我侭とは自己の行為に対する責任を感ぜざるものを云ふ。之れを結婚に就て云へば一時の感情や利害関係に依つて結婚もしくば離婚するものはこれは自由結婚にあらずして野合結婚である。真の自由結婚とは如何なる境遇に於ても変ることなき真情と真情との結合でなければならぬ。かくの如き結婚に向つては人は許さずとも神が許すのである。
　けれども貸物借物の理より云へば十五歳以上の男女に向つてはたとひ親と雖も強制結婚を強ゆるの権利がない。又た自由結婚を制止する権利がない。これ人間の自由意志は神より与へられたる特権であるからである。けれども此の場合には責任は移つて結婚当事者にあることは云ふ迄もない。もし結婚当事者にして其の結婚より生ずる一切の責任を負ふ力がなかつたならば其れは結婚する資格がないのである。
　凡て人間は恋愛の自由、結婚の自由のみならず信仰の自由も不信仰の自由も愛の自由も憎の自由も天より許されてある。けれども予め凡ての人間の心得なければならぬことは自分の蒔いた種は自分が苅り取らなければならぬと云ふことである。此う云ふ條件の下に天理教は恋愛並に結婚の自由を承認するのである。
　以上は天理教々理より見たる両性観の大体であるが之れを要するに男女両性は各々人生の向上発達の責任体である。従つて未婚者も既婚者も常に此の責任観念に生きざるべからず。天理教の両性道徳　　一夫一婦主義　　は此の責任観念より生れたのである。

第十一章　天理教の病理観

　天理教の特種の新人生観の一つは一切の生理的故障は心理的故障の反映であると云ふ所謂精神的病理観である。
　此の問題は既に前説の天理教々理中に略述したから此処に再び繰り返すことを省く。唯一つ云つて置きたいことは人間が進歩すればする程疾病も進歩すると云ふことである。これは彼の動物病の種類を研究すれば訳る。即ち動物病の数は人間病に比して其の種類が少い。等しく人間と云つても彼の乞食労働者の如きは疾病の種類も単純な疾病が多い。然るに其れが漸次精神内容の複雑なる所謂文明人乃至上流社会になればなる程其の疾病の性質は複雑になるのである。これは人間の心理が複雑になればなる程其の心理的故障も複雑になり其の心理的故障が複雑になればなる程其の生理的故障も複雑になるのである。其の証

拠には下等動物下等植物程疾病の種類が単純であり遂に無生物に至つて全く根絶するのである。
　凡そ生あれば疾あり疾は生に伴ふ一種の障害である。其の障害を除去するには先づ第一に心理的故障を除去しなければならぬ。其れが疾病を根絶する唯一の根本的治療法である。
　これが天理教の病理観と其の治療法であるが将来此の病理観が普及したならば人類は第一に高価なる診察料と無法の薬価とより救はるゝのみならず更らに肉体的に精神的に苦痛と罪悪とより救はれるのである。此う云ふ点からして天理教が此の点に主力を注ぐのは寧ろ当然の事である。
　之れを要するに人間は従来疾病の器としては作られなかつた。其の疾病の器として病床（教祖はこれを布団牢と云つた）に呻吟しなければならぬのは其の者の精神に於て天理人道と合せぬ不自然な精神があるからである。天理教が最後に疾病門を開いて漸次此の世界を根本的に救済せんとするのは最も卑近にして且つ要領を得たる社会の根本的改造法である。

第十二章　天理教の運命観

　凡そ影あれば形あり、形あれば影あるのは自然の事実である。此の形と影との関係が恰度性格と運命との関係である。
　此の関係に就ても前説の天理教々理中に一寸暗示して置いた筈であるが今之れを歴史上の人物に就て其の実例を求むれば彼の戦国時代の三大英雄たる信長と秀吉と家康とである。此の三者は夫々歴史上稀れに見る英雄であつたが其の中前二者は一旦は天下の覇権を握つても遂に最後の勝利が家康に帰したのは最も深く味はふべき史実である。
　今之れを三者の性格より観察すれば信長は古今稀に見る勇者であつた。けれども短慮にして人を容るゝの雅量に乏しかつた。此の短慮と狭量とは計らずも名将明智光秀の反感を買ひ遂に本能寺に戦死するに至つたのである。又た秀吉は其の智に於て古今稀に見る名将であつたけれども其の智は一時的にして遂に老将家康に天下を渡さなければならなかつた。最後に家康である。彼は智と勇とに於て遥かに秀吉信長に及ばなかつたとは云へ其の天賦の仁徳は遂に前二者に代つて日本六十余州の覇者たることができたのである。
之れは最も著明な一例に過ぎないが此の他東西古今の人物に就いて観察すれば不思議にも性格と運命との一致を発見するのである。
　由来運命は正直である。其れは曲つた棒に真直な影のさゝない如く曲つた性格に真直の運命は決して来ないのである。又た真直の性格に曲つた運命は来ないのである。もし来れば其れは過去の性格の反映に外ならないのである。従つて運命を改造せんとせば先づ性格を改造せざるべからず。これが天理教の運命観である。

第十三章　天理教の家庭観

　古来宗教といふ宗教の中で凡そ天理教程家庭生活を尊重する宗教はあるまい。これは教祖の一生が何よりの生きた証拠である。
　今彼女の一生の生活より観察すれば所謂宗教家たることは彼女の一生の目的ではなかつた。其れが往々信徒が殖えた為めに遂に立つて人類教育家となつたのである。これは彼女の思想を研究すれば明かなることである。即ち彼女は人は皆な何人も朝起き、正直、働きをしなければならぬ。家業第一に親孝心をせよとは教へたが人は皆な宗教家たらざるべからずとは教へなかつた。何故なれば彼女の理想は宗教家として生活するよりも人間として生活することにあつたからである。少くとも客観的には宗教家であつても主観的には人間であることあらしむることが彼女の理想であつたからである。彼女が身家庭を離れずして円満なる人間生活の雛型を示したのはこれが為めである。即ち釈迦及び釈迦の弟子にとつては人生の牢獄であつた家庭は彼女にとつては当然人間として持たねばならぬ小社会であつた。此の一面に於て家庭の一員とし他の一方に於て社会の一員として模範的人間生活を行つた点が彼女の新世界の救世主として大なる価値の存する所である。
　之れを要するに従来の宗教家は何れも家庭の必要とか家庭の真味とかを知らなかつた。ミキ子に依つて始めて家庭生活の真味が一般に紹介せらるゝ様になつた。
　蓋し人間は此の世界に生れたる以上生き甲斐のある生活を行はなければならぬ。其れには自分一身を生き甲斐のある人間たらしむることの必要なることは云ふ迄もないが自分の住んで居る家庭、自分の住んで居る国家、自分の住んでゐる社会を真に快楽に充ちたるものとしなければならない。彼女は其の家庭、国家、社会をして真に快楽に満ちたる家庭、快楽に充ちたる国家、快楽に充ちたる社会たらしむるには互ひに同情と親切とに生きなけ

ればならぬことを教へた。即ち其の結果は「一月三十日は三十日共陽気な笑をもつて梁木を揺ぶる」様な賑かな家庭となるのである。其れで「内々睦じく」と云ふのが天理教の家庭に対する理想である。
　以上は天理教々理より見たる理想の家庭観を述べたものであるが以下に少しく天理教々理より観たる現実の家庭観を略述せう。
　天理教では家庭を分ちて
　一、敵の因縁
　二、味方の因縁
の二つとする。
　敵の因縁とは互ひに怨を構へた因縁同士の集合である。又た味方の因縁とは互ひに意気投合した親しい間の関係である。其れで天理教々理より家庭を定義すれば
　家庭は因縁の集合なり
と云ふことができる。けれども其の内部に立ち入つて観察すれば以上挙げたる二種の家庭が存在するのである。
　かくの如く何んな子をもつのも何んな親をもつのも亦何んな夫をもつのも何んな妻をもつのも何んな兄弟をもつのも皆なこれ自己の因縁なれば善い因縁の集合は云ふ迄もなく悪い因縁の集合は互ひに同情と親切とをもつて因縁の果し合ひをしなければならぬ。神の因縁を寄せ集めたのはこれが為めである。
　之れを要するに家庭とは社会の単位をなす一個独立した小社会である。其の健全と不健全とは個人の直接の幸不幸に関するのみならず間接に社会の盛衰に関するのである。従つて家庭をもつて住むに快き小社会となすのみならず、之れを清潔化し健全化することは家庭の各員の義務であり且つ特権である。

第十四章　天理教の国家観

　天理教より云へば国家とは家庭と同様に一つの因縁に依つて結合せる一大団体である。其の中で日本民族は伊邪那美尊が人間生み下ろしの第一番に大和に生み下ろした人間であるからこれを大和魂と云ひ人類の兄姉である。又た其の他の諸外国民は其の後大和以外の諸国に生み下ろした人間が漸次水草を追ふて諸国に移住したものであるから之れを日本国民より云へば弟妹である。依つて之れを長幼の序より云へば日本は本家にして外国は分家日本は本国にして外国は植民地である。然るに今日迄は此の本末始終の区別が明かでなかつた為めに分家が蔓つて却つて本家を圧倒して来たが此の度は月日（神）元へと立ち帰り木の根確つかり皆顕はすと云ふのが神の予言である。
　其れで天理教の理想より云へば各国民が生活の便宜上地理的に国家を組織することは認めるけれども他国の侵略を目的とした勢力的国家を認めないのである。之れを詳しく云へば世界の各国民が互ひに相提携してもつて人類共通の目的のために勤勉努力するのである。更らに詳しく云へば全世界の国民が日本を中心として世界一国の理想的国家を実現するにあるのである。其うなれば勿論現在の国家と云ふものは現在の府県の大なる物と同じく独立した自治体となるのである。元より其の間に今日の如き国家的競争を許さない。凡て皆な「互ひ助け合ひ」の理に従つて一致団結して各国相互の利益を計る。これが天理教の理想の国家である。
　尚ほ本問題に関しては後の天理教と大日本主義との條に最う一度述べる心算であるから問題を此処に止めて次に天理教の社会観を述べもつて天理教の新人生観の概説を了り更らに其の詳論に亘つて研究の歩武を進めたいと思ふ。

第十五章　天理教の社会観

　仏教　　小乗仏教　　では此の世を穢土と観じて更らに此の社会を全く遠離した別天地に生を求むることを理想としたが天理教では
「此処が此の世の極楽や」
と云つて此の世界此の社会此の家庭此の肉体以外に幸福を求めない。と云つて天理教では何も現実の世界現実の社会現実の家庭現実の自我が完全だと云ふのでない。否な其の不完全なことを認むることは他の凡ての宗教に優るとも劣りはしない。けれども天理教では薄情の夫の様に現在の妻が醜婦だからと云つて其れを捨てゝ他に理想の妻を求むることをしない。醜婦なれば醜婦なる程これを愛して段々美婦に仕立てゝ行くのである。かくの如く一つの困難一つの障害物の表るゝ毎に他の宗教の様に其れを避けて別途を選まない。何処迄も其の困難を排斥し其の障害物を破壊して其処に新しき平坦の道を開拓するのである。此処に天理教の積極的社会観がある。此の積極的社会観よりミキ子の所謂「山の仙人より

も里の仙人」なる社会的人物が生れるのである。
　之れを要するに天理教では現実の社会が多くの欠陥に富んだ不完全な社会なることを認めて居る。けれども其の欠陥を欠陥として残さずに飽く迄其の欠陥を填充して行く所に天理教の新社会観があるのである。
　現実の社会の欠陥とは云ふ迄もなく相互扶助的共同生活の真面目なる精神の欠乏してゐることである。ミキ子は此の人生の最大欠陥を八種に分類し其れを八埃と云つた。八埃とは即ち
「ほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆく、かうまん」
の八つである。
　此の八埃を現実の社会から一掃した時自ら其処に実現して来る理想の社会を彼女は甘露台と云つた。天理教の終局の理想は実に此の甘露台社会を実現するにあるのである。
　以上は天理教の新人生観の大体であるが以下に其の詳論を述べて本問題の結としようと思ふ。

本論（下）

第一章　天理教と自由主義

　追従軽薄之れ嫌ひ　　天啓の声
　気兼遠慮は少しも要らん　　同上
　貸物借物の理に従へば人間は先天的に精神上の自由を与へられてある。即ち善を考へる自由も与へられてゐれば悪を考へる自由も与へられてゐる。又た信仰の自由も与へられてゐれば不信仰の自由も与えられている。更らに愛情の自由も与へられて居れば憎悪の自由も与へられてゐる。かくの如く精神上には無限絶対の自由を与へられてゐる。けれども肉体並に物質上の自由は其うではない。或る一つの約束の下に有限相対的に許されてゐるに過ぎない。其の自然の約束とは人のために善事をなすと云ふことである。例へば国家とか社会とか乃至他人の為めとか云ふ利他的労働である。此の種の労働の為めには其の肉体を幾ら使つても不健康に陥ると云ふ事もなければ其れが為めに他人から苦情を持ち込まれると云ふ事もない。けれども一旦誤つて其れを私利私欲の為めに用ゐんか忽ちにして生理的には病魔の襲ふ所となり引いては道徳上乃至法律上の罪人として一種の社会的制裁を受けなければならない様になる。これが即ち肉体並に物質には或る一つの制限即ち善事をなすと云ふ制限の下に自由を許されてゐる所以である。
　之れに依つて見ると天理教々理より観たる真の自由と云ふものは何うしても善をなすと云ふ自由より外ないのである。云ひ換へれば善をなす事其の事に於てのみ絶対の自由が与へられてゐるのである。例えば前例に挙げたる働きの如き其れである。国家の利益の為めに又社会の利益の為めに幾ら働らいたとても誰も来て制止するものはないのである。其の如く凡て善事（同情とか親切とか云ふ如き）をなす場合には何人も苦情を云ふ権利もなければ云つたからとて其れを顧みる必要もないのである。これが天理教々理より見たる肉体の自由である。
　次には物質上の自由である。これは各個人の魂の因縁によつて其の自由の範囲は一定してゐない。例えば一万円の自由を授けられてゐる人もあれば十万百万の自由を授けられてゐる人もある。又た一円二円の自由も授けられてゐない人もある。これは各個人の因縁であるから現在の所何うすることも出来ない。けれども此処に一つの自由権拡張法がある。其れは或る一つの商業をやる。其の資本は十円である。即ち彼の許されたる金銭の自由は十円丈けの範囲内である。けれども其れが一旦商業に勤勉忠実なる結果として十円の資本より一円の利益を生んで十一円となる。即ち第一回には十円の自由が第二回には十一円の自由となつたのである。其れを資本として段々十五円二十円の自由を得遂には段々大きくなつて千円万円の自由を得るのである。此の十円の金を勤勉努力に依つて十一円とし十一円を十二円とし十二円を十三円とすると云ふ具合に与へられたる範囲を土台として漸次自由を拡張して行く所に物質上の真の自由がある。
　けれども之れは独物質にのみ限らない。精神上に於ても亦同一である。即ち如何なる高僧智識と雖も始めより大なる高僧智識として作られたものではないのである。漸次信仰の階段を昇り智識の階級を経て遂に大なる高僧智識となるのである。
　以上は天理教々理より観たる自由の客観的説明であるが之れを要するに真の自由は虚偽と不自然との中には存しない。唯真実自然の中にのみ存するのである。例へば借債である。其れは一時自分に不時の自由を与へた様に思はれるけれども自分に其れを返済するの実力がなかつたならば其れは自由にあらずして却つて不自由を買ふのである。この不自由は悪をなす場合も同一である。

世間の人間は不品行と云ふことを思い掛けぬ儲け物の様に思つてゐる。其れは一面に於て其うかも知らない。けれども道徳者の世界には不道徳者の入るべからざる特権の存することを忘れてはならない。例へば処女時代より一度も汚れざる貞女の有する清浄界である。其は実に堕落せる淫女が如何に高価の涙を払つても買ひ得ざる所の特権である。此の高き深き広き自由を与へられずして誰か道徳の為めに高価の犠牲を支払ふものぞ。凡て善をなす者は凡ての特権と自由を得、凡て悪をなすものは凡ての特権と自由とを失ふのである。

天理教では他人の権利並に自由意志を尊重する。其れに向つては神と雖も何うせ此うせの指図はしないと断言せられてある。従つて一切の生活は其の人自身の責任である。即ち善をなすも悪をなすも其れより生ずる結果は其の当事者が刈り取らなければならない。而して其れがたとひ悪い結果であつても人は其れに向つて何も不平を云ふ権利はないのである。

例へば信仰の自由である。人は如何なる宗教をも信ずる自由を有してゐる。たとひ其れが迷信であつても下等の宗教であつても第三者が其れを止むる権利はない。けれども宗教は恰も食物の如く下等の宗教には下等の宗教だけ其れに依つて受くる利益も少なく、高等の宗教には高等の宗教丈け其れに依つて受くる利益も大きい。けれども無信仰には其れに依つて受くる何等の利益もないのである。之れと同一の原理に因つて人間は自己保存の必要上勢ひ悪を捨てゝ善を選まずにはゐられなくなる。人間の進歩は其処にあるのである。

けれども此処に一つ注意しなければならぬことは自由と我侭との区別である。世人は往々此の二つを混同視してゐるけれども二者の間には大なる相違のあることを知らなければならぬ。即ち自由とは責任を自覚した合理的生活であり、我侭とは責任を自覚しない不合理的精神である。此の二つの誤解は単なる教養の乏しい下層社会ばかりではない。実に智識を専門の対象とせる思想家の間に往々発見するのである。其の云ふ人達は自由と云へば直ちに我侭を連想するのである。此の連想より種々の誤つた生活を生む。

天理教の自由主義とは与へられたる天賦の特権（意志の自由）に従つて何者にも煩はせられざる真実の自己を実現せんとする自我実現主義である。其れが我侭主義と異る所は彼は我意（非真実の自己）を貫徹せんとし之れは自然の意志を顕現せんとし彼は利害を中心とし之れは真実を中心とする点にある。此処に天理教の自由主義の意義がある。

之れを要するに自由は人間生活の内容を広め深め高め強める為めに神より与へられたる吾人々類の特権である。吾人は其の与へられたる自由を乱用しもしくば局限して却つて厚き天意に反く様なことがあつてはならぬ。益々与へられたる自由を利用して真実の自己を実現することに努めなければならぬ。この真実自然の自己の囚れざる実現が天理教の自由主義である。

第二章　天理教と平等主義

上にも八百八段の段がある。下にも八百八段の段がある　　天啓の声

凡そ何が階級が多いと云つても人間社会程階級の多いものはあるまい。実に上は王侯貴族より下は非人乞食に至る迄の階級の差は全人類の数に一致して居るのである。けれども人間は始めよりかくの如く作られてはなかつた。又た将来に於て此の状態を継続すべきものではない。何うしても最後に於て全人類を平等化せられなければならない。

上たるは世界中を侭にする神の残念これを知らんか
是までは万づ世界は上の侭もう之れからは文句変るで
此の世を始しめてからに何もかも説いて聞かした事はないので
上たるは世界中を我侭に思て居るのは心違ふで
高山に育つる木も谷底に育つる木も皆おなじこと

は即ち此の人類の平等化を歌つたものである。

けれども天理教の平等主義の今日一派の社会主義と異る点は人為的に現実の階級を破壊し貴族も平民も富豪も貧民も打して一丸とせうとするのではない。云ひ換へれば有てるものより奪つて有たざるものに与へもつて形式的に全人類を平等化せんとすのではない。天理教の平等主義は今日人間と人間との間に存する階級の区別は元来人間と人間との人格的相違にあることを自覚せしめ長い間の努力の後其の人格を平等化し其の結果として全人類の運命を平等化せんとするにある。即ち之れを今日一部の過激なる社会主義と比較すれば其の達する所の結果は或は同一であつても彼の如く一時的でなく彼の如く皮相的でない。更らに永久的にして更らに一層根本的である。

元より天理教の平等主義は之れを今日の社会に直ちに実現することは出来ない。何故なれば天理教の平等主義は単なる物質的形式的の平等化が理想でないからである。天理教の平等主義は人格的平等主義であつて運命の平等化の如きは人格的価値の平等化せられた結

果に外ならないからである。
　如上の理由に依り客観的社会の平等化と云ふ事は到底一時に実現すべからざる理想である。けれども主観的社会の平等化と云ふことは今日に実現することは必ずしも困難ではない。主観的社会の平等化とは人と人との間に待遇を異にせざることである。云ひ換へれば王侯貴族なるの故をもつて乞食非人なるの故をもつて待遇を異にせざるにある。更らに云ひ換へれば後天的権利の相異に依つて先天的権利を無視せざることである。凡て皆一列平等に同一の膳に同一の御馳走をもつて饗応せんことである。けれども此の主観的平等主義の理想も今日の社会に行はれてゐない。否な今日の天理教界にさへ行はれてゐない。これ吾人の大なる不満の素地である。けれども此の平等主義は必らず近き将来に於て全人類の習俗化するに至るであらう。其れと同時に客観的社会の平等化と云ふことも漸次事実となつて表はれるであらう。何故なればこれ自然人生の先天的約束であるからである。

第三章　天理教と自治独立主義

　人の恩恵は雨露だで。降ることもあれば降らぬこともある。降るときまらぬものを的にしてゐたならば餓死するで　　教祖
　何んな苦しいことがあつても人に助けを乞ふな　　同上
　天理教では自分一身の問題自分一家の問題自分一村の問題自分一郡の問題自分一県の問題自分一国の問題で他人、他家、他村、他郡、他県、他国に累を及ぼすと云ふ事を非常に嫌ふ。自分一身の問題は自分自身で解決し、自分一家の問題は家内で解決し、自分一村の問題は村内で解決し、自分一郡の問題は郡内で解決し、自分一県の問題は県内で解決し、自分一国の問題は国内で解決することをもつて理想としてゐる。例へば教会内の問題の如きは可成教会内で解決して累を親教会、同胞教会、子女教会に及ぼさゞるにある。此の理想の簡単なる実例が玄関より室内に上る時下駄を外向きに脱いで上ることであるが将来此んな一事に止まらず人生百般の事に亘つて此の精神が広く深く徹底して行つたならば今日迄閑却せられてゐた無性の為めに浪費せられた時間と労力とが如何に節約せらるゝか知らない。
　現に地方の県郡市町村の如きは此の自治体を取りつゝあるが今日の所は未だ個人の生活に迄徹底してゐない。わけて権門富豪と云ふ人達は自分の手で処理すればする事の出来る事をワザ　　他人の手を労して無益の労力と時間とを其の人から奪ひ却つて将来不自由の因縁を積み重ねつゝある。これは明かに人道上許すべからざる大罪人である。
　抑も人間は生涯親に負はれ他人に縋がつて通るべく造られてはゐない。三歳にして生理的に独歩し十五歳にして精神的に独立すべく造られてある。従つて「何時迄も人に手伝ふて貰らはんならん様ではいかん。手伝ふと云ふ力もつてくれねばならん」（天啓の声）。もし何時迄経つても四十五十の嬰児や四十五十の少年少女であつたならば一旦他人の手が去つた場合には忽ちにして生活を停止しなければならない様になる。此の不時の用意の為め不断の精神的独立の必要を説いたものが本章の冒頭に掲げた教祖の聖訓である。彼の天理教徒が五体の自由に動く限り自活し、一椀の飯一杯の水も故なくして他人の恩恵に縋ることを拒むの理由は其れに依つて精神上の負債を重ねざらんが為めである。
　かう云つたからと云つて人間は全然天地人の恩恵より離れて生活することはできない。これ一生を挙げて天地人の報恩の為めに捧ぐる所以である。この点に於て孤立主義と独立主義とは大なる区別を要するのである。
　之れを例へて云へば独立とは一本の木の根は根、幹は幹、枝は枝、葉は葉、花は花、実は実で一個の独立体と自活力とを有し相連つて一本の木をなすが如きものである。もし之れと反対に根は根、幹は幹、枝は枝、葉は葉、花は花、実は実と分離したならば其の木は立ち所に枯死しなければならぬ。これが独立と孤立との相異である。
　之れを要するに真の独立とは個体として与へられたる自己の天分に生きつゝも尚ほ其の生活の根底に於て全体としての統一を忘れざる責任生活を云ふ。蓋し国家の強弱社会の優劣は一に自活力に富んだ自治独立体の多少に因るのである。畢竟偉人とか凡人とかの区別も亦此の自活力自立力の大小強弱に帰因するのである。
　イプセン曰く
　此の世界の最大強者は独立した人間である
と。天理教の目的は即ち此の大なる自活力を養成するにある。云ひ換へれば独立した大人格を養成するにある。此の要求に依つて生れたものが天理教の自治独立主義であるのである。

第四章　天理教と神産主義

　教祖天啓後十年施すものは殆んど施して了つて三日間と云ふもの家内中が飲まず食ずに通つた。其れでは仕事も出来ないから教祖自身隣家の足達へ行つて白米五合を借りて帰つて来た所門前に子供を負つた女の乞食が寒相に立つて居た。
　御新造さん三日御飯を戴かぬのでお腹が空いて困りますが何うか何かやつて下さい。
　教祖は此の憐れな女乞食の声を聴いて自分の空腹を忘れ五合の米をサラ／＼と半分程乞食の袋の中に落して内へ入つた。
　彼女が物を施す時には
「これは私が上げるのではない。神様の預り物をお返しするのだからサア／＼遠慮なく持つて行つておくれ」
と云つて微塵惜しみの念を伴はなかつた。此処に貸物借物の理を根本的に体得した偉大なる真人の真実がある。
　共産主義の理想は各人の所有を合してもつて等差なき生活を送るにあるが天理教の神産主義は其うではない。始めより物質上の私有観念が全然ないのである。恰度一軒の家の家屋敷土地財産は戸主の所有に属して家族は其れに依つて衣食しつゝあるが如く世界の物質は神の所有に属し全人類　　神の子供　　は凡て皆な神　　親　　の財産に依つて衣食しつゝあるのであるから我が物を醸出して我も食ひ人にも食はしむるといふ観念は全然ないのである。此の点に於て天理教の神産主義の生活は其の形式に於て共産主義の理想と一致してゐるけれども其の内容は異つてゐる。即ち一方には神の物と云ふ観念が働いてゐるけれども一方には人の物と云ふ観念が支配してゐるのである。従つて一は先天的にして他は後天である。
　此の主義の普及の結果として人は貪婪と吝嗇との邪欲より解脱し有るものは無い者に与へ無い者は有る者より受けて過不及なく富豪もなければ窮民も無い。人は皆な一膳の膳に天の与へを共楽して嫉みなく妬みなき万人快楽の世界と変ずるのである。これが天理教の神産主義の理想である。
　此の世界は勿論今日の如き利己主義者をもつて結合せる社会には直ちに行ふことはできない。けれども人は貸物借物の理を身上によつて仕込まれたならば厭が応でも此の主義に同化しなければならない、何故なればこれ自然即ち神の意志であるからである。従つて何人も之れを止むることも出来なければ止むべき性質のものではない。寧ろ此の主義を普及して真の共楽共苦の理想の世界の実現することを力めなければならない。これが天理教の神産主義の理想である。

第五章　天理教と共力主義

「皆なこれ一本柱があつて一本柱は立つまい。彼地ら風吹く此地らから風吹くヒヨロ／＼細い柱も太い柱も植え込んだる伏せ込んだるもあれば十分突張り／＼……　　天啓の声
　凡そ一軒の家を建つるには礎丈けでは家と云へぬ。又た柱一本では家と云へぬ。土台石も確つかり入れ柱も充分揃へ家根を葺き壁を塗り一切の装飾を整へて始めて家と云ふ。家の中には床の間もあり座敷もあり寝室もあり台所もあり広間もあり便所もある。其れと同様に人間は夫々神の社の用材である。其の中には真柱となるものもあれば祭壇の用材となるものもある。又た階段や廊下の用材となるものもある。相寄つて世界一社の無形の神殿を形造くるのである。
　凡て一軒の家にしても男一人の世帯ならば働きも其れ丈け小さいのである。其れに妻の力が加はつて力が二人力となり親子兄弟の力が添ふて五人力十人力となるのである。其の十人の力と一人の力を比較せば何うしても一人の力は十人の力に及ばないのである。其れが千人となり万人となり一億となり十億となり二十億となるに従つて力は一層拡大すると共に其の働きも一層複雑となり其処に専門の分業が生れる。其の小さなものが家庭であり、其の大なるものが社会である。
　之れを要するに社会は一大共同生活体であつて個人は其の一員である。従つて両者の関係は全と一との関係である。而して此の両者は社会あつての個人、個人あつての社会なる点より観察すれば互いに不可分離的関係を有するのである。之れを例へて云へば一本の木である。其れは根幹枝葉が相寄つて一つの生活体をなすものにして互ひに分離しては生活すること能はざるが如きものである。吾人々類も其れと同様に日々生活の資料を社会より供給せられるをもつて安全に生活し得るものにして社会を離れて単独にては一日と雖も安全に生活し得ざるものである。従つて吾人は互ひに社会的に結合して其処に人間共通の生活を創造して行かなければならない。天理教の共力主義は即ち此の必然の要求の表れである。

第六章　天理教と人格主義

身上は心の鏡といふ　　天啓の声
此の天啓の声を今日の言葉に意訳すれば
性格は即ち運命なり
と云ふ事が出来る。
けれども天理教の根本義は運命即ち影を正さんが為めに形を正すことではない。
先づ人格を改造せよ然らば運命も改造せらるべし
といふのが天理教の人格主義の根本義である。
此の根本義を逆にとつて説明すると即ち此うなる。曰く運命の改造は少くとも吾人の第一問題ではない。吾人の第一の問題は先づ人格を改造するにありと云ふことである。
元より此の意味は運命の改造を全然度外視したのではない。更らに其れ以上の根本義の存することを云つたのである。其の根本義とは即ち人格改造の一事である。天理教の根本的目的は即ち此処にあるのである。

第七章　天理教と陰徳主義

次に天理教では
「人に施しをしたことを自慢するのは恰度蒔いた種を掘り返すやうなものや」
と云つて教へて居る。凡て種を蒔いて其れより収穫を得んと欲せば蒔いたる後に土をかけて置かなければならない。此の土とは無言の沈黙である。天理教では一切の善行は神が受け取つて置くものと信じ敢て善行を蔭で行つて之れを人の前に公表しない。よし又た神が受取らうと受取るまいと善事をなすことは人の当然の務めにして何等誇るべきことではない。教祖は物を人に施して後其の人の立ち去る後姿を見て御苦労様と手を合して拝んだと云ふことであるがこれが天理教の陰徳主義である。

第八章　天理教と瞬間主義

教祖は常に側に向つて
「其の日のことは其の日に忘れよ。其の場のことは其の場で忘れよ」
と云つて善悪共に其の時其の場で忘るべきことを教へた。
蓋し人間は向上進化の霊動体である。何時迄も昨日の問題を今日の問題としてゐる様なことではならない。又た明日の問題を今日の問題としてゐる様なことではならない。今日は今日一日の問題現在は現在一瞬間の問題に向つて全力を注ぐべきものである。之れを云ひ換へれば現在をもつて最も意義ある瞬間たらしめ今日をもつて最も意義ある一日たらしむるのが現在もしくば今日に対する義務である。此の処世上の一大方針を示したものが天理教の瞬間主義、現在主義、今日主義である。

第九章　天理教と平民主義

天理教の一大特色は平民的であるといふことである。これは過去の宗教中浄土宗以外に殆んど見るべからざる近代的特色の一つである。
凡そ人生の事何事にもあれ其れが生命に近ければ近い程平民的にならざるを得ないのである。其れと反対に其れが生命に遠ざかれば遠ざかる程其の者は貴族的形式的古典的になるのである。天理教の平民主義は即ち天理教に生ける生命のある何よりの証拠である。
教祖は常に「低い心」になれ「優しい心」になれと教へたが自分自身は信徒の前を通るにも必らず手を下げて「御免なさい」と云つて通つた。これは云ふ迄もなく彼女の平民的であつたことを示す一例に過ぎないが凡て如何なる人に対しても尊大に構へると云ふ事は彼女の知らぬことであつた。蓋し尊大と云ふ誇張した態度は古い芸術や哲学や宗教に通じた悪癖である。然るに彼女の宗教には全然誇張と云ふものがなかつた。これ天理教が精粋的実質的なる所以である。
今日でも古典主義や形式主義や貴族主義的思想の想路に発生して来た人間は古語や古典や古礼を引つ張り出して来て無暗に高尚がつて悦に入つて居るが其れは根本義を攫んだ人間にとつては何等の価値もないものである。吾人が天理教に於て真に偉大なる価値を認むるのは（今日天理教は神道の儀式を模倣したり古典を引用したりして天理教の根本義を忘れては居るが）凡て此等の属性を排して真に精粋を攫んでゐることである。（人は精粋を攫めば攫む程平民的になる）云ひ換へれば貴族主義を排斥して平民主義を発揮して居ることである。
（此の平民的思想は御神楽歌や御筆先にも表はれて平民的宗教平民的文学の鼻祖をなし

て居る）
　凡て人間が進歩すればする程其の人間は平民的となり社会が進歩すればする程其の社会は平民的になつて来るのである。前者の最も良き実例は教祖である。後者の最も良き実例は米国である。人は天理教の教理が通俗的平民的なるの故をもつて浅薄な詰らない宗教の様に思ひ米国が実際的平民的なるの故をもつて米国人は世界中最も浅薄な国民の様に思つて居るが　　殊に若い文学者中には　　私は其うは思はない。将来は知らず今日の所国民として最も進歩した生活をもつてゐるのは英にあらず仏にあらず独にあらず露にあらずして実に米国である。今日の米国は或る点に於ては天理教の理想を其発生地よりも早く実現して居る。従つて将来天理教が其の教勢の手を第一着に伸ばす所は英にあらず仏にあらず独にあらず露にあらずして実に米国であると。私は平民主義の宣伝者として特に此の事を云つて置く。
　要するに今日は時代が一変した。今日の時代は最早や貴族的専制時代ではない。明かに平民的立憲時代である。此の新時代の新思想の先駆者として表はれたものが天理教である。元より人為的のものにあらずして実に世界の大勢を支配して行く自然の大事実である。此の点に於て私は特に天理教の平民主義に大なる意義及び価値を発見するのである。

第十章　天理教と労働主義

　古来宗教の数も数ある中に真に労働の真価を認めて其の福音を宣伝した宗教は天理教をもつて嚆矢とするのである。即ち今日迄何れの宗教が朝起き、正直、働きをもつて神の子供の三大義務であると説いたか？　又た今日迄何れの宗教が実業第一親孝心をもつて人間生活の要義であると説いたか？　恐らく天理教以外に一つもないであらう。
　ミキ子は懶惰なる信徒に向つては
「働きなさい／＼。人間であつて働かない者は我が教への子ではない」
と云ひ、羨望に富んだ信徒に向つては
「人を羨む暇に己が商売に手を出せ」
と云つて教へた。蓋し彼女にとつて最大の教敵は神道にあらず仏教にあらず基督教にあらずして実に満足の五体を有しながら労働を欲しない乞食其の者にあつた。
　かくの如く彼女は生涯労働の福音を説き自ら進んで其の最も良き雛型となつたが彼女が自らも努め又た人にも勧めた労働は世人の考へてゐる利己的労働ではなかつた。彼女の実行した労働は働らく（傍楽）即ち自己の周囲の人を安楽ならしめんが為めの労働であつた。彼女が労働に関する教訓の中に
「働きなさい儲けなさい。然し財布の底に穴の開かぬ様に括つて置きなさい」
と云つたのは明かに利己的労働の何等の価値もなきことを示した風刺である。
　畢竟天理教で云ふ所の労働の意義は自分一身もしくば一家の為めの小さな価値の労働ではない。全く我利我欲を離れた日の寄進的労働である。此処に世間で云ふ労働と天理教で云ふ労働との鮮かな区別があるのである。
　等しく労働と云つても単に自分一身の欲望を充たす丈けの労働ならば何等動物と異る所はない。更らに一歩進んで周囲の人々の生活を助ける為めに我を忘れて日の寄進的に労働する所に数へども尽きぬ大なる労働の価値が生ずるのである。天理教で云ふ所の労働は即ち後者の意味の労働である。
　将来全世界を真の幸福の域に導くには何うしても此の日の寄進的労働主義に待たなければならない。此の点に於て天理教の労働主義は現在並に将来の世界にとつての大なる力である。

第十一章　天理教と実際主義

　論は一寸も要らん／＼／＼。論は世界の理で行ける。神の道には論は要らん。誠一つなら天の理実で行くが良い　　明治二十二年七月廿六日
　従来の宗教はやゝもすれば実際よりも理論に傾き易き傾向をもつてゐたが天理教は反対に理論よりも実際を重んずる宗教である。云ひ換へれば論より証拠を重んずる宗教である。
　口先に何んぼ真実説いたとて誰が聞き分けするものかある
　口先きの追従ばかりは要らんもの真の心に誠あるなら
　凡そ如何なる主義如何なる理想と雖も其れが現実となり実際となつて表れなければ何等の価値あるものではない。天理教の主義は何処迄も理想を理想として行かないで理想を現実化し思想を生活化して行かうとする所に天理教の実際主義の価値がある。
　元より影よりも形理論よりも実際の方が貴重なることは云ふ迄もない。然るに人間

殊に近代人　　の弱点としてやゝもすれば形よりも影実際よりも理論を貴重し易きものである。此の点に於て天理教の実際主義は人間　　わけて時代の病弊を救ふものである。

第十二章　天理教と一元主義

実際主義と相並んで天理教主義の一つを形造つてゐるものは一元主義である。
此の主義の要領は口と心もしくば行と心の二重生活を排斥して精神と形式との一致を目的とするのである。此の目的を最も良く実現した生活は正直である。其れで一元主義は之れを一名正直とも一筋心とも云ふことができる。
御神楽歌三下り目
六ツむりなねがひをしてくれな　ひとすぢこゝろになりてこい
七ツなんでもこれからひとすぢに　かみにもたれてゆきまする
の一筋心とは即ち此の一元主義を云つたものに外ならない。
之れを要するに正直と云ひ、一筋心と云ひ之れを狡猾なる二重生活者の眼から見たならば如何にも阿房に見えるであらう。けれども正直もしくば一筋心には彼等二重生活者の知らない価値がある。之れを譬えて云えば口と心との二重生活者は門を大きくして小さな家に住んでゐる様なものである。其の表より見る時は如何にも立派なれども裏に廻る時は其の哀れな魂胆が直ちに曝露するのである。けれども一元生活者は其の門も其の家も共に相応したる為め却つて其の主人の四方正面の精神の価値を発揮するのである。
元より之れは一元生活と二重生活との客観的価値に過ぎないが更らに之れを主観的に論ずれば一元生活の価値は全体的であり実質的であり二重生活の価値は半面的であり形式的である。之れを譬へて云へば小供と大人との遊戯である。子供は一事に向つて常に全力を集注するが故に其れより得る所の興味も全体的であるが大人は普通小供の如く全心を其れに向つて集注することが出来ないから子供の感ずる十分の一の興味も感ぜざるが如きものである。
凡て子供に限らない。世の邪智に染まない純潔な精神は常に一元的である。其れが二元的となり三元的となるに従つて其の人の精神も生活も益々濁つて来るのである。
教祖は常に
三歳児の心になれ
と云つて小児の天真爛漫な性質を喜んだが之れを云ひ換へれば一元主義の主張と見るべきものである。

第十三章　天理教と全力主義

「最うあかんかいな／＼と云ふは節と云ふ。精神定めて確つかり踏ん張つてくれ。踏ん張つて働らくは天の理であるとこれ悟し置かう」　　天啓の声
凡そ五分の力よりは十分の仕事は生れず十分の力より五分の仕事は生れざるは自然の法則である。従つて十分の仕事をなさんとせば先づ十分の力を出さなければならない。ミキ子は出し惜しみ、負け惜しみと共に骨惜しみも亦大なる埃として排斥した。
彼女の仕事に対する秘訣は何事にあれ自分の現在なしつゝある仕事に向つて全力を打ち込む事にあつた。此の全力を打ち込むことに依つて彼女は常に常人の二倍の働きをした。単に其う云ふ日常の仕事のみならず人格の修養や救済の事業やに対しても良い加減の所で中止して置くと云ふことはしなかつた。又た出来なかつた。一旦手を下すや否や何処迄も其れを徹底しなければ止まなかつたのである。理を施すにしても力を施すにしても物を施すにしても大抵の人間は申訳的にやつて居る。けれども彼女のは其うではない。あらん限りの理あらん限りの力あらん限りの物を施し尽さねば満足ができなかつた。
凡そ事をなすには金銭や材料や力を惜しんでゐる様なことではならぬ。わけて人心救済人格創造の大事業の如きに対つては理を惜しみ力を惜しんでゐる様では十分の成績を挙げることはできない。此う云ふ点に於て全力主義は処世の秘訣である。

第十四章　天理教と積極主義

凡そ現代並に将来の宗教の第一の條件は積極的活動的現代的たることにある。此の時代の要求を負ふて生れたのが天理教である。
天理教は従来の宗教が第一義的生活として認めた孤独生活隠遁生活厭世生活に対しては何等の価値をも認めない。天理教の認めて第一義生活となす所のものは国家的生活社会的生活人類的生活の如き生産的生活である。教祖は此の種の理想的人格を「里の仙人」と云つた。蓋し真の生産的人物を意味するのである。

之れを要するに凡そ人生の価値は生活を積極的に創造するにある。然るに従来の宗教は多く此の中心の意義を逸してゐた。天理教は即ち此の逸せられたる中心の意義に従つて生活価値を無限に創造せんとするのである。此の目的によつて必然に生れて来たのが天理教の積極主義である。吾人は敢て此の主義に対して管々敷批評を下すの必要を認めない。何故なれば凡そ一歩進んで生活を創造せんとせば勢ひ此の主義に拠るより外他に何等の方法のないことを知つてゐるからである。此う云ふ意味よりして吾人は天理教の積極主義に未来文明の本流を発見するのである。

第十五章　天理教と漸進主義

「皆な段々の人間。偉い者にならうとて一時にならん。人間一生の理と云ふても人間一生事は急いではいかん。末代の道や。物急いではいかせん。天然自然の道に基いて心を調べてくれる様」　　天啓の声

神は無い人間無い世界を造つたとは云へ始めより今日の世界今日の人間をつくつたのではない。自然に生成化育してもつて今日の世界今日の人間にしたのである。此う云ふ点より云つて大自然即ち神の取つて居る所の方針は漸進主義である。此の神の漸進主義を称して天然自然の道と云ふ。

之れを例へて云へば茄子である。吾人々間としての希望は今日蒔いて今日茄子をとりたい。けれども自然は其れを許さない。矢張り一定の時を経なければ本当の茄子はできないのである。其の如く吾人は何時でも想像の甘露台世界を画くことが出来る。けれども其の時が来なければ現実の甘露台世界を見ることはできないのである。

凡て事をなすには（又た成るには）其の時がある。一時に思ふて一時に成らんが天然自然の道である。此の漸進的人間改造漸進的世界改造が即ち天理教の理想を実現する唯一の方法である。天理教が他の過激なる人間革命社会革命の主義と異る所は即ち此処にある。

之れを要するに天理教の革命思想と他の宗教哲学の革命思想とは其の目的に於て多大の相違がある計りでなく其の目的を実現する方法に於ても亦多大の距離があるのである。即ち一は自然的にして他は人為的一は永続的にして他は一時的一は漸進的にして他は急進的一は根本的にして他は皮相的の相違がある。天理教が他の革命思想に比して一層自然であり一層根本的であるのは即ち此の漸進主義である。此の点に於て吾人は大なる意義及び価値を此の主義に認むるのである。

第十六章　天理教と陽気主義

よるひるどんちやんつとめする　そばもやかましうたてかろ
いつもたすけがいそぐから　はやくよふきになりてこい　　御神楽歌四下り目
いつまでしん／＼したとても　よふきづくめであるほどに
むごいこゝろをうちわすれ　やさしきこゝろになりてこい　　御神楽歌五下り目

天啓に依れば神が無い人間無い世界を始めた抑々の動機は人間（子供）の陽気遊山を見て楽しみたいと云ふことにあつた。然るに其の後人間の生長するに従つて欲を生じ遂に此の世界をほしい、をしい、かはゆい、にくい、うらみ、はらだち、ゆくにこうまんの満ちた陰気な世界と化して了つた。天理教の目的は現在の陰気な世界を変じて神の予定なる陽気な世界に化する為めに生れたのである。其れで天理教は一名これを陽気な教と云ひ天理教の信仰生活を一名陽気勤めと云ふ。蓋し陽気は天理教の生命である。

之れを自然に就て云へば春はこれ陽気の象徴である。これを人間に就て云へば青春はこれ陽気の象徴である。其れで教祖は陽気な精神状態を形容して十八の心と云つた。蓋し人間十七八歳の時代は鬼も笑ふと云ふ程精神の溌剌たる時代であるからである。

蓋し陽気と云ふは天地万有を育てゝ行く太陽の精神である。天理教が何故此の陽気な精神の発揮を讃美するかと云へば陽気は創造的気分であるからである。此の創造的気分に最も富んだ時代が十七八歳の青春時代である。其れで天理教が常に陽気になれ／＼と云ふのは何時も春の精神青春の気分になつて絶えず新生活を創造せよと云ふことを意味するのである。偉人とは即ち絶えず此の春の精神青春の気分に依つて新生活を創造しつゝある人に外ならない。

凡そ自然の理法として流動するものは生き停滞するものは死す。例へば水である。彼の海水が常に清潔なるは絶えず流動するからである。又た潴水が腐敗するのは停滞するからである。

教祖は常に信徒に向つて

心は甲斐絹の様に持て。湿つた雑巾で板の間を布いてる様なことでは何うもならんで

と教へたが此の言葉の意味は人間は常に陽気な心に生きなければならぬ（陰気な心で生き

てはならぬ）と云ふことを意味せられたのである。
　英国の諺に
　A rolling stone has no moss （転々たる石に苔生ぜず）
と云ふて居るが畢竟常に活動し常に進化しつゝある精神には疾病の生ずる余地がない。畢竟其の精神に故障を生ずるから遂に生理的故障を引き起すのである。此う云ふ心理的乃至生理的故障より脱して真の生活を楽しむ所に天理教の陽気主義の価値がある。

第十七章　天理教と真実主義

「誠（真実）一つが天の理。天の理なれば即ぐに受け取り即ぐと返やすが一つの理」
御聖訓
　天理教主義はこれを種々なる方面より観察し得べしと雖も其の中心の主義は此処に云ふ真実主義に外ならないのである。
　此の主義に関しては此処に改めて多くの言を費す必要を認めない。何故なれば人生の目的は真実なる自己を発揮するにありとは屡々述べた所のことであるからである。夫れで此の主義の結論として次の言葉を記憶すれば沢山である。
「世界から力入れて来ても真実をして真実の心あれば抜いた剣も鞘となる／＼。抜いた剣も鞘となると云ふは真実神が受け取りたから」　　天啓の声

第十八章　天理教と自他力主義

　天理教は之れを力を中心として観察すれば二個の主義に分類することが出来る。曰く自力主義と曰く他力主義とである。
　即ち天理教は一面に於て人事の最善を尽すと云へ点より云へば自力主義である。と共に又た他の一方に於て人事の最善を尽した上に天命を待つ点より云へば他力主義である。
　之れを例へて云へば天理教は其の精神に於て禅宗の自力主義と真宗の他力主義とを合した様な宗教である。始めより純自力主義でもなければ純他力主義でもない。此の自他力混合の所に天理教の面目があるのである。而して之れを儒者の言葉をかりて云へば
　人事を尽して天命を待つにあり
と云ふ事が出来る。人事を尽すとは人間力を極度に発揮せしむるのである。天命を待つとは其れ以上の範囲は神いきらの加護に委任することを云ふのである。之れを天理教より云へば
　誠一つが天の理。天の理なれば即ぐに受け取り即ぐと返やすが一つの理
これが天理教の自他力主義である。

第十九章　天理教と男女同権主義

　之れは天理教の両性観の中に述べたから此処には之れに向つて再度の説明を省くのであるが従来の宗教中男女両性観を発表した宗教も数ある中に真に男女両性の地位を正当に説明した宗教は天理教が始めてである。此の点に於て今日迄やゝもすれば誤られたる両性観の為めに其の女権を束縛せられて来た婦人にとつては大なる味方を得たものと云はなければならない。将来女権が拡張して男権と同一の程度に進んだ時顧みて其の恩人は誰なるかを顧みれば必らずや天理教　　天理教は神の最後の意志教である　　にあることを発見する時があると思はれる。（現に婦人の地位が日と共に向上しつゝあるは天理教に依つて発表したと同一の理想を神が実地に実現しつゝあるのである）

第二十章　天理教と一夫一婦主義

　男女同権主義と相並んで定められたる両性界の憲法は一夫一婦主義である。即ち
　男一人に女一人
と云ふ天然自然の法則に依つて立てたる主義が天理教の一夫一婦主義である。
　此の二大主義普及の結果は今日迄両性間の反目となつた凡ての問題は円満に解決せられるのである。例へば婦人参政権運動の如きは云ふ迄もなく家庭に於ける男女の葛藤の如きは自然に消滅するのである。且つ其の上更らに進んで両性の道徳性が向上進化するに連れて今日の如く或る夫婦は多子に苦しんでゐるのに或る夫婦は無子に苦しんでゐると云ふ不公平なく凡ての夫婦が一人の女子に一人の男子を楽しむ様になるのである。これが天理教信仰に依つて両性界に来る変化である。

第二十一章　天理教と絶対個人主義

凡そ社会の第一の単位は個人である。第二の単位は家庭である。第三の単位は市町村である。天理教は即ち此の個人もしくば家庭もしくば市町村に社会の第一、第二、第三の単位としての自覚を喚起せしむる宗教である。云ひ換へれば個人もしくば家庭もしくば市町村に共同生活の一員もしくば団体としての自覚を喚起せしむるにあるのである。夫れで此の道は一名限り一軒限り一村限りの信仰とも云ふ。

然るに個人主義とは如何なる主義なるかを知らざる一部の天理教徒は個人主義と利己主義とを混同して頻りに天理教は個人主義の宗教にあらずと弁護してゐる。けれども此の弁護は誤つてゐる。

抑も個人主義と利己主義との区別は個人主義とは社会の一員としての権利義務の自覚の下に行はるゝ人生上の主義にして利己主義とは社会の一員としての責任を欠いた盲目的の個人的欲望の満足をもつて理想とせる主義である。即ち前者は自由を求むる代りに義務と責任との明かな自覚があるが後者にあるものは我侭と無責任とがある計りである。元より両者の間に何等の共通点はないのである。従つて天理教は明かに利己主義の宗教ではないが確かに個人主義の宗教であると断言するに躊躇しない。元より天理教の個人主義と今日の個人主義との内容が同一であるか否かの問題はこれからの研究問題であるが天理教が個人主義の宗教でないと云ふこと云ひ換へれば社会の一員としての義務もしくば責任を教ゆる宗教でないと云ふことは全く根拠のない空言である。

天理教祖の個人主義は基督の個人主義と同様に全世界全人類を自己に包有した絶対個人主義の更らに一層徹底したものであつた。彼女には自己以外に世界なく世界以外に自己がなかつた。即ち全世界の悩み全世界の悦は彼女の悩み彼女の悦であり、彼女の悩み彼女の悦は全世界の悩み全世界の悦であつた。此の世界即自己、自己即世界の生活が彼女の個人主義であつた。

此の点に於て彼女の個人主義は人道主義的個人主義とか世界主義的個人主義とか絶対個人主義とか命名くべきものである。けれども彼女の個人主義の此等個人主義と異る所は等しく人道主義的個人主義、世界主義的個人主義、絶対個人主義であつても後者は単なる冷かなる智的活動（理想）であり前者は即ち熱き情意的活動（愛）であつた。

更らに之れを今日普通の個人主義と比較する時は今日の個人主義は義務よりも権利に重きを置く傾がある。けれども天理教の個人主義は其れと全然反対に権利よりも先づ義務を重んずるのである。否な寧ろ義務を認めて権利を認めないのである。此処に天理教の徹底個人主義の真面目がある。

之れを要するに天理教は個人主義の宗教でないと云ふ説は当らない。天理教は個人主義も個人主義も真に生粋な個人主義である。而かも天理教部内の人々が之れを否定し去らんとしつゝあるは個人主義と利己主義との明かな区別を知らないからである。

之れを要するに全人類が一人残らず個人主義者真の意味の個人主義者たらざる中は此の社会は未だ真に明かな自覚生活に入つたものでないことを。これは個人主義真の意味の個人主義を理解した者の当然肯く所の事実である。

第二十二章　天理教と人道主義

天にあつては天体が其の軌道を誤らず地にあつては万物が其の時節を誤らざるものは天理即ち自然の法則（自然律）があるからである。其れが人間界に表はれたものが人道もしくば人生律である。従つて天理と云ふも人道と云ふも悠久無限の大自然の法則（神意）を全体的に観ると部分的に見ると普通的に見ると特殊的に観るとの相違に依つて生ずる名称にして其の内容は全然同一である。

天理教は即ち此の大宇宙を支配する大自然律大宇宙律であるが之れを世界より云へば天理之れを人間より云へば人道となるのである。従つて天理教は一名これを人道教と云ふことが出来る。此の天理教主義の生活を称して天理主義とも人道主義とも云ふ。

人道と云ふ言葉は勿論今日に始まつた言葉ではない。其れは今日の宗教と云ふ言葉の生れない以前長い間宗教と云ふ代名詞に使はれて来た言葉である。勿論今日に於ては其の職名を宗教に譲つて其の権利を自ら握つて居るが恐らく此の人道と云ふ言葉は人類の存する限り残る言葉の一つであらう。

人道（人生律、人間律）とは云ふ迄もなく人間として生く可き道である。其れは時代に依つて必らずしも一様ではないがたとひ旧道が廃れて新道が興つても道なき処に長き旅行を続くることの困難なると同様に眼に見えざる精神の道即ち人道がなくては一日も安全に生活することはできない。

普通人道と云へば直ちに人間相互の愛を連想するが之れを広義に解釈すれば凡ゆる心理

上の法則即ち此の広義の人道に入るべきものである。何故なれば人間は生理上の法則を無視して肉体の健康を保つことはできないと共に心理上の法則を度外視して健全なる精神状態を継続することはできないからである。かくの如く一面に於ては自分以外の個体もしくば団体の健全なる発達を図ると共に他の一方に於て自分一身の健全なる発達を図るのが真の意味の人道主義である。
　天理教では皆な人の行く可き道を
　一、理（神）を立てゝ身が立つ
　二、人を助けて我が身助かる
の二筋に分けて説いてあるが其の実は二筋の道がある訳ではない。之れを約めて行けば畢竟誠（真実）一つが天の理（又た人の道と云つても可）と云ふ真実一條の道に帰するのである。
　釈迦は大乗一実の道を伝へる為めの方便として二乗と説き三乗と説いた。ミキ子が誠（真実）一條の道を
　一、理（神）を立てゝ身が立つ　　日の寄進
　二、人を助けて我が身助かる　　互ひ助け合ひ
の二條に説き、朝起き、正直、働きの三條に説いたのも誠（真実）一條の道を全人類に理解せしめんとする方便に外ならない。此の点に於て天理教の人道主義は其の実真実主義に外ならないのである。
　古来儒教では人道を具体的に説明して君には忠親には孝兄弟には友夫婦には貞朋友には信他人には礼自分自身には温良恭倹譲と説いて来たけれども忠と云ひ孝と云ひ仁と云ひ義と云ひ礼と云ひ知と云ひ信と云ふも畢竟対象に依つて其の名を異にする迄であつて其の実は誠一つの別名に外ならないのである。けれども天理教で云ふ処の人道主義は至つて単純である。曰く
　神には敬人には愛
と。之れで凡てを尽して居る。人生の事は凡て此の二つに帰せざるはない。

第二十三章　天理教と最高自然主義

　人生上の自然主義は一時本能満足主義と同一の誤解の中に葬られて了つた。天理教主義も自然主義は自然主義であつても動物や野蕃人のもつてゐる原始的自然を実現せんとするものではない。凡ゆる生物の達し得る限りの最高自然即ち神の大自然神の最高自然を実現せんとするのである。従つて天理教の自然主義は動物的自然主義や原始的自然主義とは全く反対の傾向をもつた自然主義である。
　蓋し此の世界には上は神より下は動植鉱物に至る迄無限の階級がある。其の中に比較的最も高き自然を占めて居るのが人間である。けれども等しく人間と云つても亜弗利加の黒人種と欧羅巴の白人種との間には文明の程度が異つて居る。云ひ換へれば人間的自然の階級が異つて居る。これは英国人、米国人、日本人同士の間に於ても同一である。即ち等しく日本人と云つても都会人と田舎人とは文明の程度を異にし上流社会と下流社会とは文明の程度を異にして居る。其の間にあつて最も高き自然を占めてゐるのは中山ミキ子である。
　彼女のもつて居た自然は未だ人類の達し得ざる最高自然であつた。（もし彼女のもつてゐた自然が既に過去の何人かに握られた自然であつたならば神が殊更彼女を立てゝ新しき典型人とはしなかつたであらう）其の自然は神に次ぐ最高自然であつた。否な
　確かと聞け口は月日が皆借りて心は月日皆貸してゐる
と云ふ天啓に依れば彼女のもつてゐた自然（精神）は神と同一の内容をもつた自然をもつてゐた。これ吾人が彼女を典型人とし雛型の道とし其の思想生活より最大の価値最高の自然を発見し捕捉せんとする所以である。
　然らば彼女の有した最高の自然とは何んぞや？　これは彼女の人格を研究すれば直ちに訳かる。私はこれをもつて天地が万物を生成化育すると同一の真実心（愛情と親切）と云ひたい。更らに一言の説明を求められんか。私は答へて云はうと思ふ。曰く無限絶対の包有力（絶対の愛）と。これより以上に私は彼女の有した最高自然を説明する言葉をもたない。又たもちたくない。何故なれば私はかくの如く彼女を理解することに依つて彼女の最高自然主義に絶対の意義及び価値を発見するからである。

第二十四章　天理教と大家族主義

　天理教は仏教の如く出家遠離と云ふ家庭生活の破壊を教ゆる宗教ではない。何人も特別の事情のない限り家庭をもち家族団欒の中に生の目的を遂げることを教ゆる宗教である。

けれども天理教の終局の目的は現在の小家族以外更らに大なる家族の実現即ち世界一家の一大家族を実現するにあるのである。此の大家族主義の具体化せるものが天理教の地場中心主義である。

第二十五章　天理教と地場中心主義

古来一派の宗教にして本山もしくば霊智なるものを有たない宗教は殆んどない。けれども天理教の地場は全く其れと意義を異にするのである。

天理教の地場とは所謂人間始め元の地場にして御筆先に
此の世の始まり出しは大和にて山辺郡の庄屋敷なり
其のうちに中山氏と云ふ屋敷人間始め道具見えるで
此の道具伊邪那岐（善兵衛）と伊邪那美（ミキ子）と国狭土（小寒子）と月読（秀司）となり
月日より其れを見澄し天降り何か万を仕込むもよふを
此の所何をするにも何のような事をするのも皆月日なり
何の様な事を云ふにも皆月日側なる者は真似をして見よ
此の世を始めてからに今日までは本真実を云ふたことなし
今日の日は何のような事も真実を云はねばならぬ様になるから
此の道は何ふいふ事と思ふかな甘露台の一條の事
此の台を何う云ふ事に思ふてゐるこれは日本の一の宝や
これをばな何んと思ふて皆のものこのもとなるを誰も知るまい
此の度は此の元なるを真実に何うせ世界へ皆教しへたい
此の元は伊邪那岐と伊邪那美と身の内（人間）なるの本真中や
此の処で世界中の人間は皆其の地場で始めかけたで
其の地場で世界一列何処までも掘れば日本の故郷なるぞや
人間を始めかけた証拠に甘露台を据へて置くぞや
此の台が皆揃いさへしたならば何んな事をも叶はんでなし
今までは此の世始めた人間の元なる地場は誰も知らんで
此の度は此の真実を世界中へ何うぞ確つかり教しへたいから
それ故に甘露台をはじめたい本元なるのところなるぞや
月日には世界中らを見渡せど元始りを知りたものなし
此の元を何うぞ世界へ教へたさそこで月日があらはれて出た
確かと聞け此の世始じめを真実と云ふて話しは説いてあれども
世界には誰か知りたるものはなし何を云ふてもわかりかたない
其の筈や此の世始めてない事をだん／＼口説きばかりなるから
此の世の始まりだしの真実を知らして置かん事に於ては
今までも助け一條とまゝ説けど本真実を知らぬことから
何のよふな事でも月日云ふ事やこれ真実と思て聞くなら
何のよふな事もだん／＼云て聞かすこれを真実と思て聞き分け
此の世の本元なると云ふのはな此の所より外にあるまい
此の話し何う云ふ事に思ふかな何も真実聞かしたいから
此の世を始じめ出したる真実を皆一列は承知せへねば
何の様な助けするにも人並の様なることは云ふでないから
今までに見えたる事やある事は其んな事をば云ふてないぞや
これまでにない事計り云て聞かし真実よりの助けするぞや

とある所謂助け一條の中心地である。

古来人類の根源地に関しては古くはエデン説以来近くはアトランチス説に至る迄皆なこれ一個疑問の中に葬られて来た。此の度天理教に依つて始めて人類の根源地はエデン説にあらずアトランチス説にあらずして日本而かも大和国山辺郡庄屋敷村であつたことが明かになつた。天理教は即ち此の人類の根源地を中心として世界最後の救済教を始めたのである。

かう云ふ理由に依り天理教の地場は二つの重要なる意義をもつてゐる。

其の一つは人類最初の肉の故郷であるといふことである。

其の二は人類最後の霊の故郷であるといふことである。

此の霊肉の故郷を信仰の中心地として世界一家の平和にして且つ健全なる理想の一大家庭を組織せんとするのが天理教の地場中心主義である。天理教の神人父子主義四海同胞主義は此の地場中心主義即ち全人類は十億万年の昔此の地に於て造られたといふ原始的事実に即して生れたのである。

第二十六章　天理教と神人親子主義

従来の宗教の欠点は
神は理なり
と云ふ畏敬の観念のみ働いて
神は親なり
と云ふ親密の愛情の裏に隠れてゐたことである。天理教は即ち此の埋もれたる愛情を掘り出して
神は親なり人は子なり
と云ふ神人親子の感情を表の理として立てんとするのである。
わけて吾人神の子供として一刻たりとも忘れてはならぬことは所謂子の用　　此の世は子の用をするから此の世と云ふ　　の為めに過去十億万年未来永劫に守護し守護せらるゝ大恩ある親神様としてゞある。
けれども此の奸悪なる世の中は一椀の飯一杯の水には百遍の感謝を忘れねど生みの親育ての親の大恩を感謝することを知らない。此の
小恩守つて大恩守らぬ悪気の世界悪気の世の中
を改善せんが為めに人間始め世界始めの元々の理を説いて聞かせ且つ其れを実行せしむるのが天理教である。

第二十七章　天理教と四海同胞主義

世界中一列は皆な兄弟や他人と云ふて更らにないぞや
神人親子の感情に次いで第二に呼び起さゞるべからざるものは四海同胞と云ふ観念である。
今日迄種々の哲学種々の宗教に四海同胞と云ふことは往々説いて来たけれども何う云ふ理由で四海は同胞であるか一列は兄弟であるかと云ふ元々の理を知らない。此の度天理教に依つて始めて其の原始的根本的事実が闡明せられたのである。
之れを要するに天理教で様々の教理を説くけれども其の根本的の目的は親子兄弟の関係を明かにしたい為めに外ならない。其れを六ケ敷くとるから六ケ敷なる。柔しくとればこれ程鮮明な宗教はない。要は唯孝悌の二つの道を明かにすれば良いのである。此の孝道を明かにしたのが即ち日の寄進主義と神霊中心主義とであり、この悌道を明かにしたのが相互扶助主義と大日本主義とである。

第二十八章　天理教と互立主義

凡て一本柱があつても一本丈けでは立たん。五本十本二十本と寄せ集め組み合はして始めて互ひに立つことが出来るのである。其れと同じく人間も自分一人では立たない。神と人と万物との立て合ひの理に依つて始めて立つのである。
然るに此の天然自然の理を知らざる世の利己主義者は人を倒しても我が身を立てやうとする。其の結果は所謂人を祈らば穴二つと云ふ自縄自縛の苦みに陥るのである。其れで儒教では
己れ達せんと欲せば先づ人を達せよ
己れ立たんと欲せば先づ人を立てよ
と教へて居る。天理教の互立主義も之れと全く其の方法を一にしてゐるのである。唯前者の互立主義と天理教の互立主義との相違は前者は己を立つることが目的であつて人を立つることは方便に外ならないのであるが天理教の互立主義は人を立つることが目的であつて己を立つことは結果に外ならないのである。即ち前者では利己的打算的なるに反し後者は全然利他的献身的である。此処に天理教の互立主義の特色がある。

第二十九章　天理教と相互扶助主義

天理教では互立主義と相互扶助主義とを合して「互ひ立て合ひ助け合ひ」の理と云つてゐるが互立主義と云ひ、相互扶助主義と云ひ畢竟同一主義の別名に外ならないのである。
従つて今更此の主義の価値を論ずる迄もないが尚ほ念の為めに一言せば此の家庭をして此の世界をして真に情味に富んだる平和の家庭、平和の世界たらしむるには何うしても此の主義に依らざるべからずと云ふことである。何故なれば今日の所謂他倒自立と云ふが如き生存競争が何時迄も継続して行つたならば此の世界は益々改悪せらるゝとも決して改善

せらるゝ時期はないからである。
もし近き将来に於て天理教の互立主義相互扶助主義が徹底普及して行つたならば互ひに軒を並べて同一の商業を営んで居ても今日の如き不正の方法をもつて客を自分の店にのみ吸収せんとせざるのみならず進んで隣家に客を譲るの美挙に出づるのである。これは独商人のみではない。農夫でも職人でも学者でも政治家でも他人の畔を削り、他人の顧客を奪ひ、他人の研究を害し、他人の権利を侵す様なことはなくなるのである。殊に今日の政治家に見る投票権の掠奪の如きは政治道徳の進歩に伴つて自然に消滅するのである。
恋の競争、知力の競争、名誉の競争、財産の競争、地位の競争、門閥の競争、美貌の競争、体力の競争は全然地を払つて湮滅する。客は我が身の生活を助ける為めに買はずして商人の生活を助ける為めに買ふ。従つて商人の要求する代価以上にやるとも以下に値切ることはない。商人も亦自己の営利の為めに売らずして客の便利の為めに競ふて安価にして善良なる品物を売るのである。かくの如くにして相互扶助主義は今日の自己中心の世界を全然一掃して理想の世界と化するのである。

第三十章　天理教と日の寄進主義

日の寄進の意義に関しては既に本論の中に其の一斑を尽したから此処に改めて同一説明を繰り返す必要を認めない。此処に一言云ひ添へて置きたいことは此の主義に対する批評である。
古来日の寄進の意義の実際に行はれて来たのは親の子供を育つる愛と夫婦間の真情兄弟姉妹の間の親切と朋友間の信義及び一部慈善家の同情の一部に過ぎない。其れ以外の広い世界に於ては無報酬の労働と云ふことは認めたくも認むることができなかつた。然るに天理教の日の寄進主義は吾等が日々結好に通らして戴いて居る御恩報じとして無報酬で労働するのである。神に対して御恩報じとして無報酬で労働するとは凡て神の用は子（人）の用子の用は神の用であると云ふ点より人の為めに無報酬で労働するのである。これが天理教の日の寄進主義である。
此処に一つの疑問はもし此の意義を何処迄も実行して行つたならば自分の生活は如何にして支ゆべきかの問題が来る。勿論今日の世界に此の主義を何処迄も実行して行つたなら或は餓死するかも知らない。けれども天理教普及の結果は他人の恩を無報酬で受くることはやがて自分の負債を重ねることであると云ふ自覚を有してゐるから此方より何等の要求を提出せずとも先方で自然に報酬を出す様になるのである。且つ社会一般の組織が其れに準じて変更して来るから吾人は其れに依つて餓死する憂はないのである。唯現在の所は吾人の力の及ぶ範囲に於て日の寄進をするのである。
例へば月給取りである。今日の月給取りは出来る丈け多大の月給を国家もしくば団体もしくば個人より貪らうとするのであるが日の寄進主義者は其うではない。出来得る限りの最小限度に満足するのである。此の他人の負担を出来得る限り軽減せんとする所に天理教の日の寄進主義の精神がある。
日の寄進の種類にとつては元より制限はない。苟くも人類社会を益する所のことは如何なる事をなすも可である。けれども等しく人類社会に貢献する事業を選択するならば比較的大なる価値を有する事業を選択することはより小なる価値を有する事業を選択するよりも自己並に社会を益することが大である。此う云ふ理由に依り自己の能力に適応した範囲に於て最も高尚なる職業最も偉大なる職業を選択することは自己並に社会に対する義務である。
之れを要するに現実の社会の欠陥は自分に厚くして他に薄きことである。けれどもこれを天理教より云へば自分は最小限度の要求に依つて満足し他人に最大限度の満足を与へなければならない。云ひ換へれば身を殺しても仁をなさなければならない。此の社会改造の理想を引提げて表はれたのが天理教の日の寄進主義である。此う云ふ理由に依り此の主義が一人でも一軒でも一村でも多く普及することはやがて此の世界を其れ丈け理想化したのである。

第三十一章　天理教と大日本主義

古来政治的にもしくば宗教的に世界統一を企つた者も数多くあつた。けれども其の一人として其れに成功したものはなかつた。と云ふのは彼等の企つた事業は何れも或る政治的野心もしくば宗教的野心に基く人為的のものであつたからである。天理教の大日本主義は其れと全然反対に日本は世界始めの根源地であると云ふ原始的事実に基いて立てたる神の世界統一の理想である。
天理教の大日本主義　　地場中心主義をもつて天理教の宗教的統一主義とすれば大日本

主義は其の政治的統一主義である　　については本書の序論並に天理教の国家観の中に略述したから今更めて述ぶる必要はないと思はれる。けれども念の為めに日本と外国との原始的関係並に其の将来に就て教祖の説話を約言すれば日本民族（大和民族とも云ふ）は一番最初大和に生み下ろした人間であるから兄姉である。其の他の国民は漸次大和以外の地に生み下ろした人間であるから弟妹である。最初の内は大和以外に生み下ろされた人間も日本を根拠地として生活して板が段々生長発達するに連れて日本丈けでは土地が狭隘になつた。其れで食物を箱に入れて大和以外に生れた人間を連れ出してカラ（外国）迄行つた時食物が絶えて箱が空になつたから其れで外国のことをカラと云ふ。其れで仕方がないから其等の人間の食物として四足（獣類）を与へた。日本の人間には始めより鳥（二足）と魚とを与へてある。四足を与へてない。四足は外国人の食するものである。其れだから四足を食ふ人間を穢多非人と云つて普通の人間の交りを許さなかつた。近頃唐人が日本の地に入り込むに従つて段々日本人の間にも四足を食ふ者が出来たから穢多非人を嫌はない様になつた。けれども元は其うではなかつたでと。これが教祖の説いた日本人と外国人との関係である。

　此う云ふ訳で日本は一本の木に譬へて云つたなら根である。外国は枝である。人は西洋は偉い　　と云つてゐるけれども枝先と云ふものは早く開けて根の開けることは遅いものである。けれども何んな大きな枝も根には叶はぬ。皆な根へ／＼と折れて来て根を養ふものである。其れと同じく外国は偉い／＼と云ふけれども皆な日本を養ふ肥料である。

　日本見よ小さい様に思たれど根があらはれば恐れ入るぞや
　枝先は大きく見えてあかんものかまへば折れる先を見てゐよ

　此の先きは唐と日本の睨み合ひ嫉み合ひ、其の度毎に外国は敗けて日本の強いことが訳つて来る。

　だん／＼と何事にても日本には知らん事をばないと云ふ様に
　これまでは唐やと云ふてはびかりてこれも月日が教しへ来るで
　此の度は月日元へと立ち帰り木の根確つかり皆あらわすで

　教祖は又た日本を扇の要に譬へた。蓋し将来世界を統一するものは日本であることを意味するのである。其れで

　今迄は唐や日本と云ふたれどこれから先きは日本ばかりや

これが天理教祖の所謂大日本主義である。

　之れに依つて観れば日本は其れ自身を呼んで大日本と云つて来たが真の意味の大日本は旧日本にはなかつた。文字通りの大日本は何うしても世界を統一した新日本にあるのである。

　此等は元より教祖が日本に関する予言の一部分に過ぎないが不思議にも教祖の予言は年と共に実現せられつゝあるのである。此の点より日本人が天理教を知るといふ事は最も焦眉の急である。

　之れを要するに畢竟政治的理想の上より云つても今日の如く各国が分立して各々覇を世界に争ふと云ふことは決して喜ばしき現象ではない。否最も悲しむべき現象である。将来此の予言の如く日本が世界の統治権を握るに至つたならば世界は始めて枕を高うして平和の夢を貪ることができるであらう。

　凡て神の言葉には何れ一つ必然でないと云ふものはない。何れ一つ無徒だと云ふものはない。今日の日本人は余りに天理教を軽蔑してゐる。もし此の無神経状態が今後三十年続いたなら日本は自国の宗教を外国から説明して貰ふ様になる。聊か失言を呈して日本国民の反省を促して置く。

第三十二章　天理教と神霊中心主義

　古来中心説に凡そ四つの重なる誤謬があつた。
　其の一は地球中心説である
　其の二は人間中心説である
　其の三は男子中心説である
　其の四は自己中心説である

　中に於て直接吾人の生活と直接の関係にあるのは後の三中心説即ち人間中心説男子中心説自己中心説である。第一の地球中心説の誤謬は小学の児童でも知つて居る。けれども第二、第三、第四の三中心説は往々有識の士の間に於てさへ誤解せられて居る。天理教は即ち此の三中心説の最初の否定者である。

　第一の人間中心説の誤謬は地球中心説と同様に全世界は凡て人間を中心として活動してゐると云ふことである。けれども一歩を進めて然らば此の世界は人間の意志に依つて創造せられ人間の意志に依つて活動しつゝありや否やを研究する時は此の世界を動かすものは

人間力にあらずして明かに人間以上の或る大きな力に依つて動きつゝあることを発見するであらう。其れを科学者は自然力と云ひ、宗教家は神力と云つて居る。天理教の神霊中心主義は即ち此の大宇宙を恰かも自己の肉体の如く動かしつゝある神意を中心として生活せんとするのである。

之れを例へて云へば神は太陽である。人間は地球である。万有は地球以外の天体である。地球及び其の他の諸天体も凡て皆な太陽を中心として自転しつゝあるが如く人間と万有とは神を中心として生活しつゝあるのである。又たしなければならぬものである。云ひ換へれば神の思想を中心として生活しなければならぬものである。

然るに人間は先天的に自由意志を授けられた結果自分の生活を律するに神意をもつて律せずに自己の意志に依つて律せんとするのである。其の結果は遂にやがて疾病不幸と云ふ一種の変態に陥るのである。此の神霊中心主義を最も明瞭に説明したものが貸物借物の理である。此の理に従ふと人間の肉体及び肉体の生活に必要なる物質は人間の意志に依つて支配せられつゝあるものではなく神の意志に依つて支配せられつゝあることを知るのである。例へば寿命である。自分は百歳迄生きたいと思つても神の意志に合せざる時は四十五十で寿命を失ふかも知らない。失つたからとて苦情を申込む訳に行かない。何故なれば自分の肉体も生命も動産も不動産も凡て皆な神意を顕現する為めに貸し与へられたものであるからである。其れで天啓の声に

神が貸さなかつたなら一夜の宿を貸すものもない

と。全く其うである。

かくの如く此の世界の事一つとして神意の顕現でないものはない。然らば其の神意とは何んぞや。これは歴代の救世主もしくば予言者に依つて説明せられて来た。此の度天理教祖に依つて紹介せられたものは即ち神の最後の理想である。畢竟現代並に将来の人類が此の世界に於て真に幸福なる生活を送らんとせば何うしても此の神の最後の理想を中心として生活するより外ないのである。此の神の最後の理想をもつて自己の理想とするのが天理教の神霊中心主義である。生の奥義はこれ以上にない。

結論　甘露台の建設

以上述べたる所は天理教々理より観たる人生の意義及び価値の一斑に過ぎないが将来此の天理教主義が全人類の精神深く且つ高く広く強く徹底して行つた暁に吾人の眼の前に実現されて来る世界は此う云ふ世界である。

此処地球上には一人の貪婪者もなければ一人の吝嗇者もなく、一人の邪愛者もなければ一人の憎悪者もなく、一人の怨恨者もなければ一人の憤怒者もなく、一人の強欲者もなければ一人の高慢者もなく、一人の不義者もなければ一人の姦通者もなく、一人の虚偽者もなければ一人の虚飾者もなく、一人の虚栄者もなければ一人の虚礼者もなく、一人の放火者もなければ一人の殺人者もなく、一人の讒誣者もなければ一人の中傷者もなく、一人の猜疑者もなければ一人の嫉妬者もなく、一人の懶惰者もなければ一人の偸安者もなく、一人の暴飲者もなければ一人の暴食者もなく、一人の投機者もなければ一人の賭博者もなく、一人の窃盗もなければ一人の強盗もなく、凡てが同情と親切とに充ち／＼た神子親子四海同胞の甘露台世界が文字通りに実現せられるのである。

其の時来らば全世界に警察もなければ裁判所もなく、監獄もなければ軍隊もなく、病院もなければ武器製造所もなく、妓楼もなければ賭博場もない。あるものは学校と教会と官庁と農家と商館と工場とがある計り。無用の建築物と無用の人間（警察官、裁判官、弁護士、医者、軍人、武器製造者、芸娼妓）とは全然此の世界より一掃せられるのである。

かくの如く人間界が改善せられる結果自然界も亦改善せられて地震なく噴火なく大風なく洪水なく海嘯なく昼の微風と夜の微雨厳冬もなければ酷暑もなく百姓は蓑笠要らず雨が多ければ神に返し少なければ貰ひ、何処へ行くにも小遣銭要らず提灯要らず傘要らず鎖さぬ（戸を鎖さぬ）御代にするが一條の時代が来る。此う云ふ時代の到来は非天理教徒より観れば或は一種の妄想のやうに思ふかも知らないけれども此の自然も人生も凡て皆神の守護の下にあることを知る者には何等不可能な事実ではないのである。御筆先に

此の先は神楽勤めの手をつけて皆んな揃ふて勤め待つなり
皆揃て早く勤をするならば側が勇めば神が勇むる
一列に神の心がいづむならものゝ蔬気（農作物）も皆いづむなり
蔬気のいづむところは気の毒やいづまん様に早く勇めよ
蔬気が勇み出るよと思ふなら神楽勤めや手踊をせよ

とある如く吾人は農作物の色を見て其の農夫の信仰状態を知り庭木の勢を見て其の主人の精神状態を知る。従つて人間社会の改造の結果自然界も亦改造せらるべき事は疑ふべから

ざる事実である。天理教では此の旧世界より新世界に更生することを二世の立替と云つてゐる。二世の立替とは教祖出現迄の旧世界を一世の世界と見教祖出現以後を二世の世界と見て第一世（旧世界）より第二世（新世界）に向つて更生することを意味するのである。
　之れを要するに此の世界に警察があるのは人の心に警察があるからである。此の世界に裁判所があるのは人の心に裁判所があるからである。此の世界に監獄署があるのは人の心に監獄署があるからである。此の世界に病院のあるのは人の心に病気があるからである。従つて人心より警察、裁判所、監獄、病院を一掃して了つたならば此の世界より警察、裁判所、監獄、病院の一掃せられることは当然である。其れと同じく人間の心に厳冬（冷淡）酷暑（邪愛）がなかつたならば此の世界にも亦厳冬酷暑はない様になるのである。
　教祖は人心無形の甘露台が建設せられた暁には天理教地場甘露台霊地にも有形の甘露台が建設せられ其の頂上の平鉢には天より甘露が降り其れを頂く時は如何なる疾病も救助せられるといふことを予言してゐる。天理教徒の朝夕の祈祷の文句の
「悪しきを払ふて助け急き込む一列澄して甘露台」
の一句は即ち神が此の世界を一日も早く甘露台世界化せんとする理想を歌つたものである。
　御神楽歌七下り目に
　屋敷は神の田地じやで蒔えたる種は皆な生える
と。
　凡て蒔えたる種は生えて花を開きやがて実を結ばなければならぬ。神の蒔えたる人種も其が毒気に当てられて腐敗せざる限り凡て皆な実を結ばなければならぬ筈である。
　けれども人の魂にも毒気が来る。又た荒地に蒔かれたる種と瘠土に蒔かれたる種と石上に蒔かれたる種と砂漠に蒔かれたる種と途上に蒔かれたる種と粘土の上に蒔かれたる種とは生えることはできない。生えてもやがて枯れ失すべき運命を有してゐる。
　一寸話し神の心の急き込みは用木寄せるもよふばかりを
　だん／＼と多く立木もあるけれど何れが用木なるや知れまい
　用木も一寸のことではない程に多く用木が欲しい事から
　だん／＼と多く寄せたる此の立ち木用木になるものはないぞや
　如何な木も多く寄せてはあるけれど歪み屈みはこれは叶はん
　日々に用木までは手入する何処があしきと更らに思ふな
　同じ木もだん／＼手入するもあり其の侭こかす木いもあるなり
　此の世界には神の予言の如く時来らば美しき甘露台が実現するであらう。其の時来らば獅子は綿羊と共に遊び豺狼は牝鹿と共に遊び私欲の競争は移つて徳義の競争となる。農夫は成るべく多くの農作物を人の為めにつくり、職人は成るべく善良なる器具を人の為めにつくり、商人は成るべく安き物を人の為めに売る。銀行は鎖さゞれども盗む者なく、宿屋は算せざるも走る者がない。此等の人々は皆精神的に救はれたる人々である。
　けれども人類の尽くが此の道に依つて救はれはしない。唯努力したるもののみ救はれるのである。
　教祖は曾つて「世界中蚊の鳴く様な時もある。真暗闇になる時もある。恐わいとも思はなければならぬ。恐ろしいとも思はなければならぬ。なれど内等（天理教徒）は安心なものや」と云はれ且つ其の時は門前に死人の山を築くと云ふことをも予言せられた。此の意味は徳ある者は救はれ徳なき者は救わるゝことを得ず生ける死骸となつて帰つて行くことを意味せられたのである。
　之れを要するに人類の道徳が進歩すればする程此の広大無辺の世界に一人の利己主義者の足を踏むべき余地がなくなるのである。其の時は今一刻／＼と近づきつゝある。けれども糞に簇つた青蠅は其の時を知らないでゐる。
「サア／＼一寸一ツ話さあ何う云ふ事知らす何んな事聞かすやら分らん。サア彼地でも手が鳴る此つ地でも手が鳴る。手が鳴つてから何んじやいなと云ふてはなろまい」　明治三十二年十一月二日四時頃の刻限
　時は近いた。天理教信者の拍手の音が彼地らでも此地らでも聞えるやうになつた。今暫時経つたなら世界中隅から隅迄此の拍手の音が聞える様になるであらう。
　教祖は
　七十五年したならば日本国中は荒々と置いて其れから先きは世界中隅から隅迄天理王命の名を流す
と予言せられたが日本七十五年の予言の時は既に過ぎた。来るべき時代は此の道が全世界へ宣伝せらるゝ時代である。
　之れを要するに今日は今旧世界より新世界へ生れんとする一大転化期に際してゐる。此の転化期の宗教として生れて来たのが天理教である。従つて吾人は最早や之れに向つて嘲弄したり罵詈してゐる時ではない。一日も早く此の最後の神の福音に依つて新しき光明界

に生れなければならない時である。云ひ換へれば一日も早く欠陥と罪悪とに充ちた現在の自己現在の社会を改造して光明と喜悦に充ちた理想の人格理想の社会を建設しなければならない。而かも此の目的を達するには何うしても此の道によるより外ないのである。従つて私はこれを何にも今日既に天理教の信仰に入つた人々の為めに云ふのでない。未だ天理教の何者たるを知らず神の最後の理想　　人生の帰趣　　を知らざる未信者に向つて特に一言書き加へて置くのである。　（大正四年十一月二十一日午前三時大和の地場にて）

天理教々理より観たる人生の意義及び価値　　終